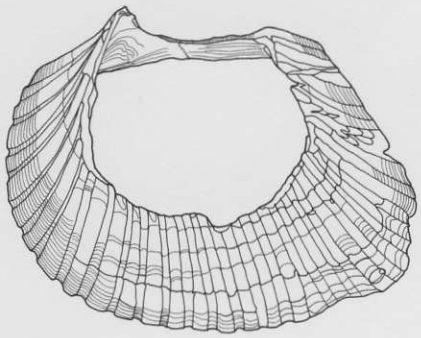
宇土市埋蔵文化財調査報告書第30集

Todoroki

轟　貝　塚

― 慶應義塾大学資料再整理報告 ―



2008

熊本県宇土市教育委員会

轟貝塚航空写真（上が北東）

轟貝塚近景
（南より）

巻頭図版 2

Aトレンチ調査状況（西より）

マガキを主体とする純貝層（Dトレンチ）

1号土壙墓（1号人骨）検出状況（Aトレンチ、北より）

巻頭図版 4

石器（石鏃、石匙、磨製石斧、削器、石錘、磨石・叩石、石皿）

装身具（貝輪、石製垂飾、玦状耳飾、簪）**及び石笛**

序　文

宇土半島北部から同基部に位置する宇土市には、国指定史跡の中世宇土城跡や、古墳時代前期の女性首長が埋葬された向野田古墳が所在しており、当墳に副葬された中国鏡や武器、装飾品は、国の重要文化財に指定されています。その他、県指定史跡の楢崎古墳や仮又古墳、網田焼窯跡、市指定史跡の椿原古墳や曽畑貝塚、宇土細川家墓地など、数多くの重要な文化財が残されています。

また、宇土市は豊穣の海・有明海に面し、その恩恵を古くから受けた宇土半島周辺地域は貝塚の宝庫として知られています。本市宮庄町に所在する轟貝塚は「轟式土器」の標識遺跡で、県下を代表する縄文時代の貝塚です。学史的にも著名な貝塚であり、大正時代から発掘調査が行われています。1917（大正６）年には日本近代考古学の父と呼ばれている濱田耕作氏（京都帝国大学総長）も調査を実施しており、当時、日本の考古学者に注目されていた貝塚であったことがうかがえます。

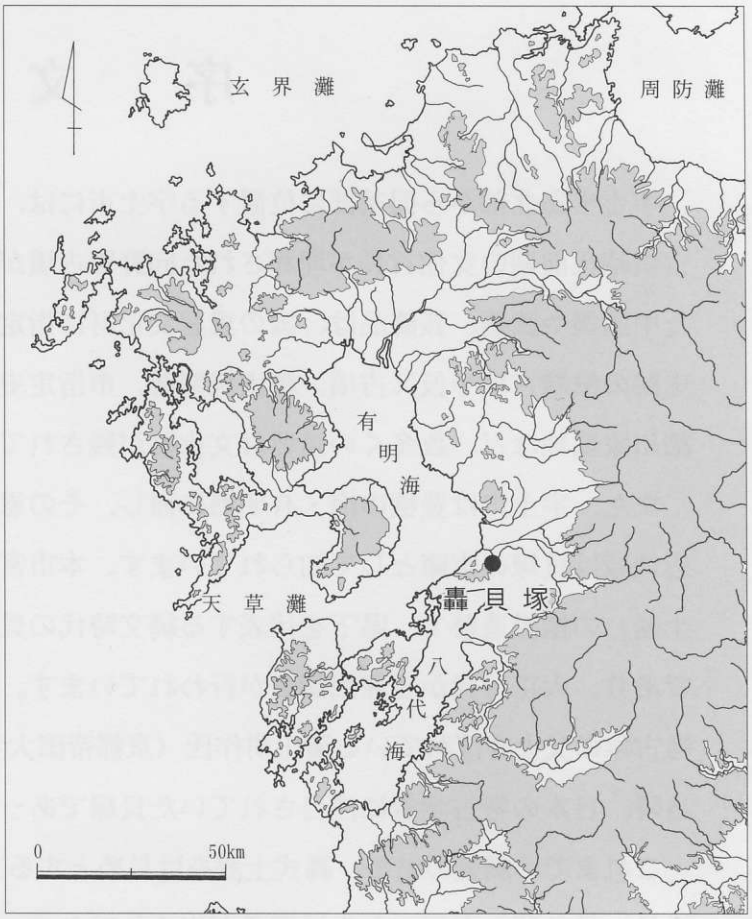
これまでの調査の結果、轟式土器をはじめとする大量の縄文土器や貝製品、石器、漁具、骨角器など様々な生活道具が出土しており、縄文人の営みを知るうえで貴重な資料となっています。

1966（昭和41）年の江坂輝彌氏を中心とした第６次調査では、貝製腕輪を装着した人骨が出土したほか、多量の縄文土器や石器、骨角器などの貴重な資料が出土しました。調査後、本資料は長年にわたり慶應義塾大学で保管されていましたが、平成13年に宇土市に移管され、整理作業を実施しました。本書はその成果をまとめた調査報告書です。

最後になりましたが、調査の実施にあたって絶大なる理解と協力を賜りました江坂輝彌氏をはじめとする慶應義塾大学関係者の皆様、また調査指導や協力を賜りました各位、ならびに文化庁・熊本県教育委員会に対し厚くお礼申し上げます。

平成20年３月

宇土市教育長　木 下 博 信



轟貝塚の位置（左：1／20,000,000、右：1／2,000,000）

例　言

1　本書は熊本県宇土市宮庄町字須崎・居屋敷・池田に所在する轟貝塚の慶應義塾大学資料再整理報告（国庫補助事業）である。

2　調査地は宇土市宮庄町125・129・130・131・132-1・175-3・176-1に所在する。

3　本調査は昭和41年（1966）３月に熊日学術調査団（団長：伊豆富人熊日社長）が実施し、江坂輝彌氏（慶應義塾大学講師）が主査として調査を担当した。

4　調査後、出土品のほとんどは慶応大学で保管されていたが、平成13年10月より宇土市教育委員会（宇土市新小路町95）に移管している。本出土品は一般に「慶応大学資料」と呼称されている。

5　発掘調査に伴う遺構実測図は岡本孝之氏・金元龍氏・隈昭志氏・坂田邦洋氏・杉村彰一氏・鈴木重治氏・渡辺誠氏・阿井真咲氏らが作成した。

6　発掘調査時の写真撮影は江坂輝彌氏・西健一郎氏が担当した。また、遺物写真は藤本貴仁が撮影した。

7　遺物実測図作成および遺構・遺物実測図の製図は、境美和・山口陽子・春川香子・藤本が行い、石器や骨角器、貝製品の一部は㈱九州文化財研究所、㈱埋蔵文化財サポートシステム熊本支店に実測を委託した。なお、本編の挿図と図版の遺物番号は対応する。

8　動物遺存体の同定については、貝類を九州大学名誉教授菊池泰二氏に依頼し、玉稿を賜った。また、魚骨及び脊椎動物遺体を㈱吉田生物研究所に委託し、独立行政法人奈良文化財研究所の松井章氏・丸山真史氏の指導を得た。

9　出土遺物一覧表の作成は村上淳子・藤本が行った。

10　出土した縄文土器については、水ノ江和同氏・清田純一氏・池田朋生氏・帆足俊文氏にご指導いただいた。

11　本編で用いた方位は磁北で、レベルは標高を示す。

12　本書の執筆は、第８章第３節を㈱吉田生物研究所より報告を受けた動物遺存体分析結果に藤本が加筆し、第８章付を菊池泰二氏にお願いした。付編については江坂輝彌氏、松本雅明氏、富樫卯三郎氏、小片丘彦氏の轟貝塚や轟式土器に関連する論文を再録した。それ以外の執筆と編集は藤本が行った。

13　本書に掲載した出土遺物・その他の関連資料は、宇土市教育委員会に収蔵・保管している。

本文目次

第１章　序章……1
第１節　調査に至る経緯と経過……1
第２節　調査の組織……2
第２章　位置と環境……5
第１節　地理的環境……5
第２節　歴史的環境……6
第３章　轟貝塚における過去の調査について……13
第１節　大正期の調査……13
第２節　昭和期の調査……20
第３節　平成期の調査……22
第４節　小結……22
第４章　第６次調査の概要……27
第１節　調査の方法……27
第２節　調査区における土層堆積について……27
第３節　調査日誌抄……30
第５章　遺構……37
第１節　縄文時代の遺構……37
第２節　中世の遺構……38
第６章　縄文時代の遺物……39
第１節　出土遺物の概要……39
第２節　土器・土製品……39
第３節　石器・石製品……87
第４節　骨角器……101
第５節　貝製品……102
第７章　弥生時代以降の遺物……123
第１節　出土遺物の概要……123
第２節　Ａ～Ｄトレンチ出土遺物……123
第８章　動物遺存体……127
第１節　出土した動物遺存体の概要……127
第２節　貝類遺体……127
第３節　脊椎動物遺体……127
付．宇土市轟貝塚から出土した貝類遺骸について……136
第９章　総括……141
第１節　轟貝塚出土の縄文土器について……141
第２節　轟貝塚の形成過程について……141
付編１……143
松本雅明・富樫卯三郎「轟式土器の編年－熊本県宇土市轟貝塚調査報告－」……145
江坂輝彌「熊本県轟貝塚出土の打製靴型石器について」……165

小片丘彦「古病理学的にみた日本人骨の研究」……169
江坂輝彌「先史時代における朝鮮半島南部と西九州地方との初期経済交流について」……193
付編２ ……199
轟貝塚及び轟式土器に関する主な調査報告・論文一覧表 ……201

挿図目次

第１図　轟貝塚の発掘調査を伝える新聞報道 ……２
第２図　轟貝塚の位置(1/600,000) ……７
第３図　轟貝塚周辺遺跡分布図(1/25,000) ……７
第４図　熊本県縄文時代貝塚分布図(1/800,000) …９
第５図　宇土半島基部地域の縄文時代貝塚(1/100,000) ……10
第６図　第１・２、５～８次調査における轟貝塚調査区配置図(1/2,500) ……13
第７図　轟貝塚中心付近の調査区配置図(1/500) …14
第８図　第２次調査当時の周辺地形図(1/1,200) …14
第９図　第２次調査人骨配置図(1/200) ……15
第10図　第２次調査出土轟Ｂ式土器１(1/5) ……17
第11図　第２次調査出土轟Ｂ式土器２(1/5) ……18
第12図　第２次調査出土轟Ｂ式土器３(1/5) ……19
第13図　第５次調査出土貝輪(1/4) ……21
第14図　第７・８次調査出土遺物(1/5) ……23
第15図　轟貝塚範囲想定図(1/2,500) ……24
第16図　調査トレンチ及びグリッド配置図(1/600) ……28
第17図　Ａ～Ｄトレンチ及びＥトレンチの基本層序 ……29
第18図　Ａトレンチ西壁土層断面図(1/40) ……31・32
第19図　Ｂ・Ｃトレンチ土層断面図(1/40) ……33
第20図　Ｃ・Ｄ・Ｅトレンチ土層断面図(1/40) ……34
第21図　出土縄文土器分類図１(1/6) ……42
第22図　出土縄文土器分類図２(1/6) ……43
第23図　表土層及び撹乱層(Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅰ層)出土縄文土器１(1/3) ……45
第24図　表土層及び撹乱層(Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅰ層)出土縄文土器２(1/3) ……46
第25図　表土層及び撹乱層(Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅰ層)出土縄文土器３(1/3) ……47
第26図　黒・褐色混土貝層及び混貝土層(Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅱ層)出土縄文土器１(1/3) ……48
第27図　黒・褐色混土貝層及び混貝土層(Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅱ層)出土縄文土器２(1/3) ……49
第28図　黒・褐色混土貝層及び混貝土層(Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅱ層)出土縄文土器３(1/3) ……50
第29図　黒・褐色混土貝層及び混貝土層(Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅱ層)出土縄文土器４(1/3) ……51
第30図　黒・褐色混土貝層及び混貝土層(Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅱ層)出土縄文土器５(1/3) ……52
第31図　黒・褐色混土貝層及び混貝土層(Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅱ層)出土縄文土器６(1/3) ……54
第32図　黒・褐色混土貝層及び混貝土層(Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅱ層)出土縄文土器７(1/3) ……55
第33図　黒・褐色混土貝層及び混貝土層(Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅱ層)出土縄文土器８(1/3) ……56
第34図　純貝層(Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅲ層)出土縄文土器１(1/3) ……57
第35図　純貝層(Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅲ層)出土縄文土器２(1/3) ……58
第36図　純貝層(Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅲ層)出土縄文土器３(1/3) ……59
第37図　純貝層(Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅲ層)出土縄文土器４(1/3) ……60
第38図　褐色土層(Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅳ層)出土縄文土器１(1/3) ……61
第39図　褐色土層(Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅳ層)出土縄文土器２(1/3) ……62
第40図　褐色土層(Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅳ層)出土縄文土器３(1/3) ……63
第41図　褐色土層(Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅳ層)出土縄文土器４(1/3) ……64
第42図　褐色土層(Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅳ層)出土縄文土器５(1/3) ……65
第43図　褐色土層(Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅳ層)出土縄文土器６(1/3) ……66
第44図　褐色土層(Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅳ層)出土縄文土器７(1/3) ……67
第45図　褐色土層(Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅳ層)出土縄文土器８(1/3) ……68
第46図　褐色土層(Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅳ層)出土縄文土器９(1/3) ……69

第47図　褐色土層（A～Dトレンチ基本層序Ⅳ層）出土縄文土器10（1/3）……70
第48図　黒褐色土層（A～Dトレンチ基本層序Ⅳ・Ⅴ層）出土縄文土器1（1/3）……71
第49図　黒褐色土層（A～Dトレンチ基本層序Ⅳ・Ⅴ層）出土縄文土器2（1/3）……72
第50図　黒色土層（A～Dトレンチ基本層序Ⅴ層）出土縄文土器1（1/3）……73
第51図　黒色土層（A～Dトレンチ基本層序Ⅴ層）出土縄文土器2（1/3）……74
第52図　黒色土層（A～Dトレンチ基本層序Ⅴ層）出土縄文土器・土製品（1/3）……75
第53図　A～Dトレンチ出土層位不明及び遺構埋土出土縄文土器（1/3）……76
第54図　黒褐色混土貝層（Eトレンチ基本層序Ⅱ層）出土縄文土器1（1/3）……77
第55図　黒褐色混土貝層（Eトレンチ基本層序Ⅱ層）出土縄文土器2（1/3、1/4）……78
第56図　純貝層（Eトレンチ基本層序Ⅲ層）出土縄文土器1（1/3）……79
第57図　純貝層（Eトレンチ基本層序Ⅲ層）出土縄文土器2（1/3）……80
第58図　暗褐色混土貝層（Eトレンチ基本層序Ⅳ層）出土縄文土器1（1/3）……81
第59図　暗褐色混土貝層（Eトレンチ基本層序Ⅳ層）出土縄文土器2（1/3）……82
第60図　暗褐色混土貝層（Eトレンチ基本層序Ⅳ層）出土縄文土器3（1/3）……83
第61図　暗褐色混土貝層（Eトレンチ基本層序Ⅳ層）出土縄文土器4（1/3）……84
第62図　暗褐色混貝土層（Eトレンチ基本層序Ⅴ層）出土縄文土器（1/3）……84
第63図　Eトレンチ土壙墓埋土及び出土層位不明縄文土器（1/3）……85
第64図　出土地点不明縄文土器1（1/3）……86
第65図　出土地点不明縄文土器2（1/3）……88
第66図　出土地点不明縄文土器3（1/3）……89
第67図　表土層及び撹乱層（A～Dトレンチ基本層序Ⅰ層）出土石器・石製品1（1/1、2/3、1/2、1/3）…91
第68図　表土層及び撹乱層（A～Dトレンチ基本層序Ⅰ層）出土石器・石製品2（1/3）……92
第69図　黒・褐色混土貝層及び混貝土層（A～Dトレンチ基本層序Ⅱ層）出土石器・石製品1（1/1、2/3）…92
第70図　黒・褐色混土貝層及び混貝土層（A～Dトレンチ基本層序Ⅱ層）出土石器・石製品2（2/3）…93
第71図　黒・褐色混土貝層及び混貝土層（A～Dトレンチ基本層序Ⅱ層）出土石器・石製品3（1/3）…94
第72図　純貝層（A～Dトレンチ基本層序Ⅲ層）出土石器（1/1、1/3）……95
第73図　褐色土層（A～Dトレンチ基本層序Ⅳ層）出土石器1（1/1）……96
第74図　褐色土層（A～Dトレンチ基本層序Ⅳ層）出土石器2（2/3、1/3）……97
第75図　褐色土層（A～Dトレンチ基本層序Ⅳ層）出土石器3（1/3）……98
第76図　黒褐色土層（A～Dトレンチ基本層序Ⅳ・Ⅴ層）出土石器（1/1）……98
第77図　黒色土層（A～Dトレンチ基本層序Ⅴ層）出土石器（1/1、1/3）……99
第78図　A～Dトレンチ出土層位不明石器（1/1、1/3）……99
第79図　Eトレンチ出土石器（1/1、1/3、1/4）……100
第80図　出土地点不明石器・石製品（2/3、1/3）……100
第81図　出土骨角器（2/3）……102
第82図　A～Dトレンチ出土貝製品1（1/2）……103
第83図　A～Dトレンチ出土貝製品2（1/2）……104
第84図　Eトレンチ出土及び出土地点不明貝製品（1/2）……105
第85図　表土層及び撹乱層（A～Dトレンチ基本層序Ⅰ層）出土弥生土器、埴輪、中世土器・陶磁器（1/3）……124
第86図　黒・褐色混土貝層及び混貝土層（A～Dトレンチ基本層序Ⅱ層）出土弥生土器、埴輪、中世土器・陶磁器（1/3）……124
第87図　黒・褐色混土貝層及び混貝土層（A～Dトレンチ基本層序Ⅱ層）出土弥生土器、埴輪、中世土器・陶磁器及び出土地点不明埴輪（1/3）…125
第88図　骨格の名称……129
第89図　ニホンジカ及びイノシシの歯に関する資料……130

表目次

第１表　第２次調査における出土人骨一覧 ……16
第２表　縄文土器・土製品観察表１ ……107
第３表　縄文土器・土製品観察表２ ……108
第４表　縄文土器・土製品観察表３ ……109
第５表　縄文土器・土製品観察表４ ……110
第６表　縄文土器・土製品観察表５ ……111
第７表　縄文土器・土製品観察表６ ……112
第８表　縄文土器・土製品観察表７ ……113
第９表　縄文土器・土製品観察表８ ……114
第10表　縄文土器・土製品観察表９ ……115
第11表　縄文土器・土製品観察表10 ……116
第12表　縄文土器・土製品観察表11 ……117
第13表　縄文土器・土製品観察表12 ……118
第14表　石器・石製品観察表１ ……119
第15表　石器・石製品観察表２ ……120
第16表　骨角器観察表 ……120
第17表　貝製品観察表 ……121
第18表　弥生土器、埴輪、中世土器・陶磁器観察表 ……126
第19表　轟貝塚出土動物遺存体一覧表１ ……131
第20表　轟貝塚出土動物遺存体一覧表２ ……132

図版目次

巻頭図版１　轟貝塚航空写真（上が北東）
轟貝塚近景（南より）
巻頭図版２　Ａトレンチ調査状況（西より）
巻頭図版３　マガキを主体とする純貝層（Ｄトレンチ）
１号土壙墓（１号人骨）検出状況（Ａトレンチ、北より）
巻頭図版４　石器（石鏃、石匙、磨製石斧、削器、石錘、磨石・叩石、石皿）
装身具（貝輪、石製垂飾、玦状耳飾、簪）及び石笛
図版１　轟貝塚遠景（東より）
轟貝塚近景（北東より）
図版２　Ａ・Ｃ・Ｄトレンチ付近調査状況（東より）
Ｃ・Ｄトレンチ調査状況（西より）
図版３　マガキを主体とする貝層（Ｄトレンチ）
配石遺構（Ｂトレンチ２グリッド、南西より）
図版４　褐色土層出土轟式土器（Ｄトレンチ20グリッド）
褐色土層出土轟式土器
図版５　１号人骨検出状況
調査状況（南東より）
検出状況（北西より）
上半身部分
食物残渣検出状況（三角矢印部分）
図版６　２号人骨検出状況（東より）
アゲマキを主体とする貝層（Ｅトレンチ）
図版７　５・８号人骨検出状況（東より）
同上埋土出土縄文土器（挿図番号446、西より）
４号人骨検出状況（南より）
図版８　表土層及び撹乱層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅰ層）出土縄文土器１
図版９　表土層及び撹乱層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅰ層）出土縄文土器２
黒・褐色混土貝層及び混貝土層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅱ層）出土縄文土器１
図版10　黒・褐色混土貝層及び混貝土層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅱ層）出土縄文土器２
図版11　黒・褐色混土貝層及び混貝土層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅱ層）出土縄文土器３
図版12　黒・褐色混土貝層及び混貝土層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅱ層）出土縄文土器４
図版13　黒・褐色混土貝層及び混貝土層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅱ層）出土縄文土器５
図版14　黒・褐色混土貝層及び混貝土層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅱ層）出土縄文土器６
図版15　黒・褐色混土貝層及び混貝土層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅱ層）出土縄文土器７
純貝層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅲ層）出土縄文土器１

図版16　純貝層（A～Dトレンチ基本層序Ⅲ層）出土縄文土器2
図版17　純貝層（A～Dトレンチ基本層序Ⅲ層）出土縄文土器3
図版18　純貝層（A～Dトレンチ基本層序Ⅲ層）出土縄文土器4
褐色土層（A～Dトレンチ基本層序Ⅳ層）出土縄文土器1
図版19　褐色土層（A～Dトレンチ基本層序Ⅳ層）出土縄文土器2
図版20　褐色土層（A～Dトレンチ基本層序Ⅳ層）出土縄文土器3
図版21　褐色土層（A～Dトレンチ基本層序Ⅳ層）出土縄文土器4
図版22　褐色土層（A～Dトレンチ基本層序Ⅳ層）出土縄文土器5
図版23　褐色土層（A～Dトレンチ基本層序Ⅳ層）出土縄文土器6
図版24　黒褐色土層（A～Dトレンチ基本層序Ⅳ・Ⅴ層）出土縄文土器
図版25　黒色土層（A～Dトレンチ基本層序Ⅴ層）出土縄文土器1
図版26　黒色土層（A～Dトレンチ基本層序Ⅴ層）出土縄文土器2
A～Dトレンチ出土層位不明及び遺構埋土出土縄文土器
図版27　黒褐色混土貝層（Eトレンチ基本層序Ⅱ層）出土縄文土器
図版28　純貝層（Eトレンチ基本層序Ⅲ層）出土縄文土器
図版29　暗褐色混土貝層（Eトレンチ基本層序Ⅳ層）出土縄文土器1
図版30　暗褐色混土貝層（Eトレンチ基本層序Ⅳ層）出土縄文土器2
暗褐色混貝土層（Eトレンチ基本層序Ⅴ層）出土縄文土器
図版31　Eトレンチ土壙墓埋土及び出土層位不明縄文土器
出土地点不明縄文土器1
図版32　出土地点不明縄文土器2
表土層及び撹乱層（A～Dトレンチ基本層序Ⅰ層）出土石器・石製品
図版33　黒・褐色混土貝層及び混貝土層（A～Dトレンチ基本層序Ⅱ層）出土石器・石製品
純貝層（A～Dトレンチ基本層序Ⅲ層）出土石器1
図版34　純貝層（A～Dトレンチ基本層序Ⅲ層）出土石器2
褐色土層（A～Dトレンチ基本層序Ⅳ層）出土石器
図版35　黒褐色土層（A～Dトレンチ基本層序Ⅳ・Ⅴ層）出土石器
黒色土層（A～Dトレンチ基本層序Ⅴ層）出土石器
A～Dトレンチ出土層位不明石器
Eトレンチ出土石器
図版36　出土地点不明石器・石製品
出土骨角器
A～Dトレンチ出土貝製品1
図版37　A～Dトレンチ出土貝製品2
Eトレンチ出土及び出土層位不明貝製品
図版38　表土層及び撹乱層（A～Dトレンチ基本層序Ⅰ層）出土弥生土器、埴輪、中世土器・陶磁器
黒・褐色混土貝層及び混貝土層（A～Dトレンチ基本層序Ⅱ層）出土弥生土器、埴輪、中世土器・陶磁器1
図版39　黒・褐色混土貝層及び混貝土層（A～Dトレンチ基本層序Ⅱ層）出土弥生土器、埴輪、中世土器・陶磁器2
出土地点不明埴輪

第１章　序　　章

第１節　調査に至る経緯と経過

轟貝塚は縄文早期末から前期の轟式土器の標識遺跡であり、古くから研究者の間で注目されてきた貝塚である。すでに1935（昭和10）年には小林久雄氏の論考で「轟式土器」の名称が用いられており（小林1935)、本貝塚より出土する、貝殻条痕を地文として隆起線文などを特徴とする縄文土器は、戦前から知られた土器型式であった。1958（昭和33）年３月14日には、保護されるべき遺跡として市史跡に指定された。

これまで行われた調査を列記すれば、1917（大正６）年の濱田耕作氏や鈴木文太郎氏、山崎春雄氏らによる京都帝大や熊本医専による調査（第１次調査)、1919（大正８）年の濱田耕作氏、清野謙次氏ら京都帝大の調査（第２次調査)、その翌年に東北帝大の長谷部言人氏による調査（第３次調査）が行われた。続いて1930（昭和５）年に鳥居龍蔵氏、小林久雄氏による調査（第４次調査)、戦後には1958（昭和33）年の小林久雄氏、松本雅明氏、富樫卯三郎氏を主体とした宇土高校や熊本大学などによる調査（第５次調査)、1966（昭和41）年の慶應義塾大学（以下、慶応大学）の江坂輝彌氏を主査とする熊日学術調査団による調査（第６次調査）が実施された。第５次調査は松本・富樫1961、第６次調査は江坂1971で概要報告されている。

近年では、宇土市教育委員会による宇土市内遺跡範囲確認調査事業（国庫補助事業）の一環として、平成16・17年度に轟貝塚の範囲確認調査（第７・８次調査）を実施した。その成果から貝層の一次堆積及び二次堆積の想定範囲を示した。

以上、第１～８次調査の調査概要については、第３章で論述することにしたい。

その他、市立鶴城中学校建設計画や用水路工事に伴い、轟貝塚の約100m東側に隣接する西岡台貝塚の発掘調査が行われた。用水路工事に伴う1983・1984（昭和58・59）年実施の発掘調査の結果、貝層は２つに大別され、下層が轟・曽畑式土器などの前期の土器を主体とし、上層は出水式や北久根山式などの後期前半の土器を主体とすることが明らかになるとともに、ドングリなどの堅果類の貯蔵穴が５基検出された。

これらの発掘調査の成果や轟式土器については、多数の関連論文や報告書などが刊行されている（付論２参照)。これらの調査によって縄文時代から中世にかけての土器・陶磁器、貝製品、石器、漁具、骨角器など多種多様な遺物が出土し、九州における縄文文化の実態解明に関して大きな成果が得られている。

ところで、轟貝塚から東へ約４kmには曽畑式土器の標識遺跡である曽畑貝塚（宇土市岩古曽町）が位置する。古くから知られていた貝塚であり、1958（昭和33）年に江坂氏を中心とする発掘調査が実施され、多くの遺物が出土した。調査後、本出土品は慶応大学で保管され、轟貝塚第６次調査の出土品とあわせて「慶応大学資料」と呼ばれてきたが、2001（平成13）年に調査図面・日誌などの複写物とともに宇土市へ移管された。

移管後まもなく、宇土市及び宇土市教育委員会による「曽畑・轟貝塚出土遺物里帰り展」が宇土市立図書館郷土資料室で開催され、数多くの来館者が訪れた。これらの資料については、ごく一部を除き未報告であったが、展示会後、接合や実測図作成などの整理作業を実施した。

さて、轟貝塚第６次調査の契機は、熊本日日新聞社が中心となって組織した熊日学術調査団が宇土、不知火地方の古跡学術調査の一環として行ったもので、当時、日本考古学協会委員で慶応大学講師だった江坂輝彌氏を主査とし、1966（昭和41）年３月20日から同29日の期間で実施した。本書はこの内容についてまとめた再整理報告書である。その他、付編において轟貝塚や轟式土器に関連する主要な論考を再録するとともに、文献一覧を作成した。

第２節　調査の組織（敬称略、役職は当時）

－発掘調査－（昭和41年３月）

「轟貝塚」発掘始まる

多彩な"顔"で貝層調査

熊日学術調査団（団長伊豆熊日社長）による宇土市宮ノ庄「轟貝塚」の発掘調査が二十日から始まった。第一日はクワ入れ式のあと年代ごとに異なる各期の貝層の状況を調べた。沖縄や鹿児島県の研究者も新しく加わり、多彩な顔ぶれで発掘が進められている。

調査には十八日来熊した主査の江坂慶応大学講師、金ソウル大学教授のほか高宮沖縄大学助教授、河口鹿児島大学講師、池水出水高校教諭、鈴木宮崎短大講師、小片新潟大学助手、地元から富樫宇土高校教諭、伊藤熊本大学助手の各調査員、また慶応大学、国学院大学、別府大学、京都学芸大学、宇土高校の学生生徒ら約五十人が参加した。

この日午前十時から現場でクワ入れ式のあとトレンチ（Aトレンチ＝長さ六十㍍、幅二㍍、B・Cトレンチ＝長さ三十㍍、幅二㍍）を三本掘り、貝塚のたい積状況を調べた。同貝塚は縄文式時代の早期、前期、中期、後期、晩期の貝層から成っており、たい積層の異なるものを層位的に発掘することがもっとも効果的とみられるので、各期ごとに貝層の状況調査を行なったもの。

この日の調査ではAトレンチからイヌの骨が出たほか土器、石器、骨格も出始めた。同貝塚から出土する土器は轟式土器と呼ばれ、西九州を中心に北は韓国の釜山付近、南は奄美大島、徳之島にいたる地区に分布しているが、韓国や沖縄、鹿児島の考古学者も調査団に参加しているので、轟式土器文化に北と南から解明のメスがあてられることになろう。調査は二十九日まで十日間つづけられる。

第１図　轟貝塚の発掘調査を伝える新聞報道
昭和41年（1966）３月21日付　熊本日日新聞

江坂輝彌氏による轟貝塚現地指導（2001年２月）

轟貝塚出土遺物保管状況（慶応大学、2000年６月）

曽畑・轟貝塚出土遺物里帰り展（2001年11月）

渡辺誠氏による調査指導（2004年３月）

調査団長　伊豆富人（熊本日日新聞社社長）
副 団 長　島田四郎（熊本日日新聞社専務）
主　　査　江坂輝彌（慶応大学文学部専任講師）
副　　査　松本雅明（熊本大学教授）、乙益重隆（熊本女子大学教授）、賀川光夫（別府大学教授）
客　　員　坂本経堯（肥後考古学会会長）
調 査 員　麻生優（國學院大学講師）、池水寛治（鹿児島県立出水高校教諭）、伊藤圭二（熊本大学助手）、小片保（新潟大学教授）、小片丘彦（新潟大学助手）、金子浩昌（早稲田大学考古学研究室）、河口貞徳（鹿児島大学講師）、隈昭志（熊本県立山鹿高校教諭）、鈴木重治（別府大学講師）、杉村彰一（山鹿高校教諭）、富樫卯三郎（熊本県立宇土高校教諭）、渡辺直経（東京大学助教授）、渡辺誠（慶応大学）

作 業 員　慶応大学・國學院大学・別府大学・京都学芸大学・宇土高校学生
特別参加　高宮広衛（沖縄大学助教授）、金元龍（ソウル大学教授）

－整理作業、報告書作成－（整理作業：平成13～15、18年度、報告書作成：19年度）
責 任 者　坂本光隆（宇土市教育長、13～15年度）、根本忠昭（同、18・19年度）、木下博信（同、19年度）
総　　括　吉永栄治（宇土市教育委員会文化振興課長、13年度）、髙木恭二（同、14・15、18・19年度）、
事 務 局　髙木恭二（文化振興課長補佐、13年度）、山本和彦（文化振興課文化財係長、14・15年度）、船田貞明（文化振興課長補佐、18年度）、松下敏親（同、19年度）、松田安代（文化財係参事、13～15年度）、一安隆正（文化財係主事、13・14年度）、下田志穂里（文化財係参事、15年度）、宮田尚子（同、18年度）、春木咲子（同、18・19年度）、村上淳子（文化財係主事、18・19年度）、村田嘉奈子（文化財係参事、19年度）
執筆・編集　藤本貴仁（宇土市教育委員会文化振興課参事）
整理作業員　境美和、林和美、春川香子、平木君代、山口陽子
協力機関及び調査指導・協力者
慶応大学、三重中京大学、新潟医学会、日本考古学会、肥後考古学会、平凡社、江坂輝彌（慶応大学名誉教授）、渡辺誠（名古屋大学名誉教授）、近森正・阿部祥人（慶応大学文学部）、菊池泰二（九州大学名誉教授）、宮本一夫（九州大学文学部）、甲元眞之（熊本大学文学部）、中村五郎（福島県文化財保護審議会）、水ノ江和同（文化庁記念物課）、岡村道雄・松井章・丸山真史（奈良文化財研究所）、島津義昭・西住欣一郎・帆足俊文・池田朋生（熊本県教育委員会）、吉田恒・濱口俊夫・根本なつめ・佐藤伸二・辻誠也（宇土市文化財保護審議会）、木下洋介（宇土市史編纂室）、淵上真行（宇土市役所）、倉元慎平（熊本大学文学部学生）

引用・参考文献

小林久雄　1935「肥後縄文土器編年の概要」『考古学評論』第１巻第２号　東京考古学会
松本雅明・富樫卯三郎　1961「轟式土器の編年－熊本県宇土市轟貝塚調査報告－」『考古学雑誌』第47巻第３号　日本考古学会
江坂輝彌　1971「熊本県宇土市轟貝塚」『日本考古学年報』第19号　日本考古学協会

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

（１）遺跡の位置

熊本県宇土市は、熊本県の中央沿岸部から西側に突出した宇土半島北側から同基部に位置し、東西24.8km、南北約7.6km、面積は約74.19km²で、東西に細長い地形をしている（第２図）。宇土半島は北側に有明海、南側に不知火海（八代海）と面し、先端部に天草諸島が連なっており、熊本平野と八代平野、有明海と不知火海を隔てる境界となっている。

宇土市の北側には熊本県三大河川の一つである緑川が東西に貫流しており、その南側には緑川の支流である浜戸川（旧緑川）が東西に流れている。流域周辺は両河川によって形成された沖積平野が広がっており、北に熊本平野、南に八代平野をのぞみ、古代から現在にいたるまで交通の要衝である。

轟貝塚は行政区域としては宇土市宮庄町字須崎・居屋敷・池田に所在する。かつて宮庄町周辺は住居が点在し、周辺に田畑が広がる典型的な農村集落であったが、宇土市街地から南西へ約２kmと比較的近距離に位置する立地条件から、現在、古くから存在する集落を核として周辺に新興住宅地が広がっており、宅地造成に伴い地区人口は年々増加傾向にある。このような人口の伸びは、市街地近郊のほぼ全ての地区においてみられる。

（２）地理的特色

宇土半島は内帯と外帯を分ける臼杵－八代構造線（中央構造線）と、大分－熊本構造線に挟まれた地域に属しており、宇土半島基部から突端にかけて白亜系、古第三系の堆積岩がほぼ北東方向に走向している。新第三紀（鮮新世）から第四紀（更新世）の大岳、三角岳を中心とした火山活動による安山岩類や凝灰角礫岩類は、この白亜系、古第三系の堆積岩を不整合に覆っている（林2003）。本半島の山地群は木原山、主峰の大岳（477.6m）を中心とする大岳火山系山地、三角岳火山系山地に分けられ、半島に占める平野部の割合は比較的少ない。

宇土半島基部に広がる平野は熊本平野南部の一部であり、旧白川や緑川、その支流の浜戸川の堆積によってできた沖積平野である。轟貝塚はこの沖積平野南西端に位置し、大岳火山系の山塊より東側に向けて舌状に派生した標高４～７m程度の丘陵先端部に立地する。貝塚周辺では東西約100m、南北約150mにわたって貝類の散布がみられる。基盤となる地質は、安山岩類や凝灰角礫岩類などの大岳火山岩類で、貝塚周辺は大岳火山系山地東麓の湧水や森林に恵まれるとともに、有明海を北に臨む良好な立地条件などから、縄文人の生活に適した自然環境であったことがうかがえる。

轟貝塚が位置する宇土半島基部周辺は、九州を代表する貝塚の密集地域であるが、これは波穏やかで豊富な魚貝類が生息する有明海に面するという立地的な要因が極めて大きいとみられている。

宇土半島北側に面する有明海は、九州西岸に位置する内湾で、南北約100km弱、東西約20km、面積は1,700km²である。潮汐による干満の差が日本一大きいことで知られており、湾奥部では６mにも達する。干潮時に露出する干潟の面積は有明海全体で約250km²もあり、日本沿岸の内湾中最大である（弘田2003）。宇土市沿岸の干潟は、海岸から約４kmの沖合まで海底が露出し、主に砂質であるが、場所によっては泥分が多い。

熊本平野から宇土半島地域にかけては約１万年前より堆積した有明粘土層と呼ばれる沖積層が形成されており、本層は有明海沿岸にも堆積している地質学的な鍵層である。

第２節　歴史的環境

（１）轟貝塚周辺の遺跡

轟貝塚（１）周辺は、縄文時代から歴史時代までの数多くの遺跡が残されている（第３図）。本貝塚周辺の主な縄文時代の貝塚・遺跡として、石ノ瀬遺跡（２）、西岡台貝塚（３）、馬場遺跡（４）、北園遺跡（５）がある。

石ノ瀬遺跡では、道路建設に伴う発掘調査で縄文時代早期の押型文土器（早水台式）が出土しており、近くに集落の存在が想定されている。轟貝塚中心部より東約100mの距離にある西岡台貝塚は、西岡台と呼称される標高約40mの独立丘陵西側裾部に位置している。1983・1984（昭和58・59）年の発掘調査で、ドングリなどの堅果類の貯蔵穴が５基検出された。馬場遺跡からは曽畑式土器が出土しており、北園遺跡は縄文時代から中世の包蔵地である。また、時期は明確ではないものの野鶴貝塚（６）や椿原貝塚（７）がある。

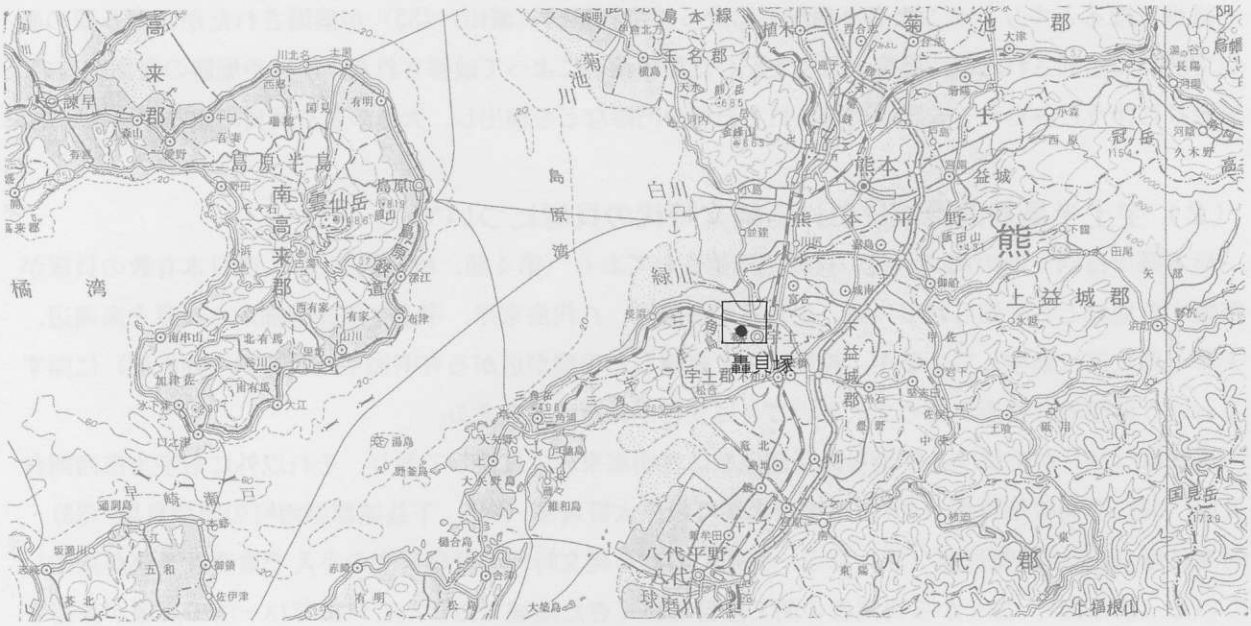
続く弥生時代の遺跡として、中期後半の黒髪式の甕形土器が出土した北平遺跡（８）、後期の集落とみられる下松山遺跡（９）がある。また、城山遺跡（10）は、前期から後期まで継続する拠点集落の可能性が高く、前期の環濠や中期の甕棺墓が発見されており、終末期の土器群が多量に出土した。

古墳時代になると、前期に巨大な首長居館が造営された西岡台遺跡（30）があり、城山遺跡には本首長居館と同時期に一般成員の集落が形成されていたとみられる。また、首長居館と対応するように、熊本県最古の前方後円墳で舶載三角縁神獣鏡が出土した城ノ越古墳（11）や迫ノ上古墳（12）、スリバチ山古墳（13）、天神山古墳（14）など前期の前方後円墳が相次いで築造された。これらの前方後円墳は、西九州を代表する前期の首長墓系譜であり、当時、宇土半島基部が肥後地域の政治的中心地であったと考えられる。しかし、中期以降、前期以来の首長墓系譜は断絶し、前方後円墳は築造されなくなる。前方後円墳以外では、前期の円墳とみられる神合古墳（15）や猫ノ城古墳（16）、西岡台箱式石棺（17）、中期の所産とみられる椿原石蓋土壙墓（18）がある。

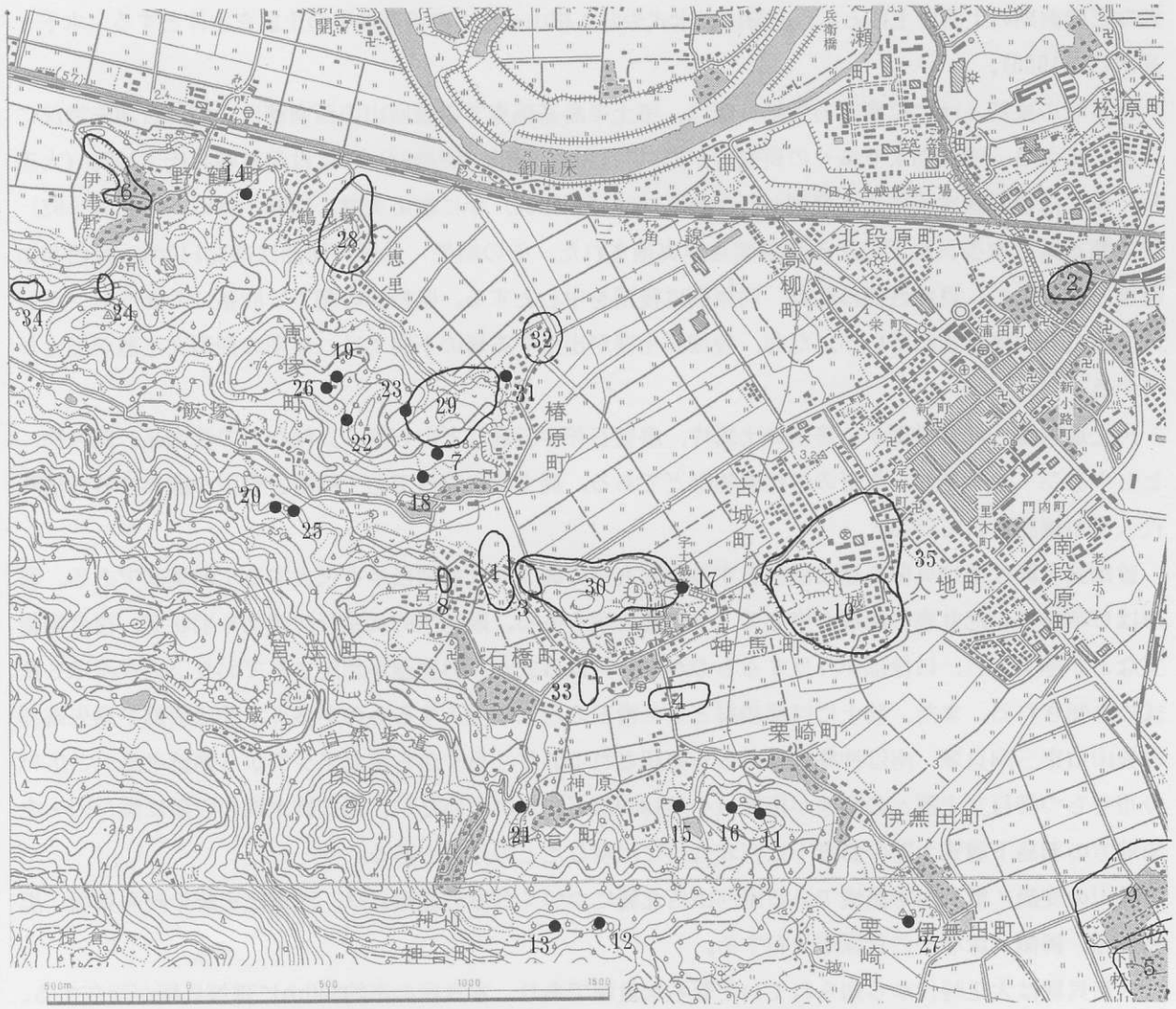
後期から終末期になると横穴式石室を主体部とする東畑古墳（19）、仮又古墳（20）、山王平古墳（21）、金嶽山古墳（22）などの円墳や、県下で唯一の終末期の方墳である椿原古墳（23）などが築造された。多量の須恵器が出土した神ノ木山古墳群（24）や仮又２号墳（25）、東畑２号墳（26）も後期に属するとみられる。その他、築造時期が不明の久保１・２号墳（27）があり、恵里遺跡（28）や椿原遺跡（29）は古墳時代の包蔵地である。

古代には西岡台遺跡や城山遺跡で須恵器や土師器が出土しており、前者では故意に破砕された土馬も出土している。中世になると宇土氏・名和氏が居城した宇土城跡（西岡台）（30）が築城された。主郭（千畳敷）やその西側に位置する曲輪（三城）の発掘調査で、掘立柱建物跡や横堀跡、門跡などが検出され、大量の土師質土器や瓦質土器、青磁・白磁・染付などの貿易陶磁器が出土した。

椿原遺跡では方形居館の溝とみられる箱堀が検出されており、本遺跡に隣接する名和家菩提寺の曹洞宗宗福寺跡（31）には、名和武顕や同行興の位牌、同行直の墓石が残されており、眼下の椿原字船津周辺には中世の港湾施設である宇土津（32）が存在したとみられている。また、陳の前遺跡（33）や伊津野遺跡（34）でも中世の土器・陶磁器が出土している。



第２図　轟貝塚の位置（1/600,000）



第３図　轟貝塚周辺遺跡分布図（1/25,000、図中番号は本文と対応）

近世になるとキリシタン大名小西行長によって宇土城跡（城山）（35）が築城されたが、関ヶ原の戦いで敗れて処刑された後、肥後一円を支配した加藤清正によって改修された。本丸や堀跡の発掘調査で、城破りに伴うとみられる故意に破壊された石垣や門跡などを検出し、大量の瓦や貿易陶磁器が出土した。

（２）宇土半島基部地域における縄文時代の貝塚について

熊本県では84ヶ所の縄文時代の貝塚が確認されており（第４図、帆足編2005）、西日本有数の貝塚が密集する地域として知られている。主に有明海東岸、八代海東岸、宇土半島先端部から天草上島周辺、天草下島北部に集中しているが、遠浅でよく発達した干潟が広がる有明海や八代海（不知火海）に面するという地理的な要素が極めて大きいことは先にふれた通りである。

轟貝塚（38）が位置する宇土半島基部地域は有明海東岸に位置しており、それ以外にも宇土市西岡台貝塚（39）や同曽畑貝塚（40）、宇城市松橋町松橋大野貝塚（44）、下益城郡城南町の黒橋貝塚（33）・阿高貝塚（34）・御領貝塚（35）など、九州における縄文時代の貝塚研究のうえで重要な遺跡が点在している（第５図）。古くから研究者の間で注目されてきた地域であり、これまで18ヶ所の貝塚が確認されている。

轟貝塚中心部から東約100mに位置する西岡台貝塚は、貝層が２つに大別され、下層が轟・曽畑式土器などの前期の土器を主体とし、上層は出水式や北久根山式などの後期前半の土器を主体とする（木下・髙木ほか1985）。

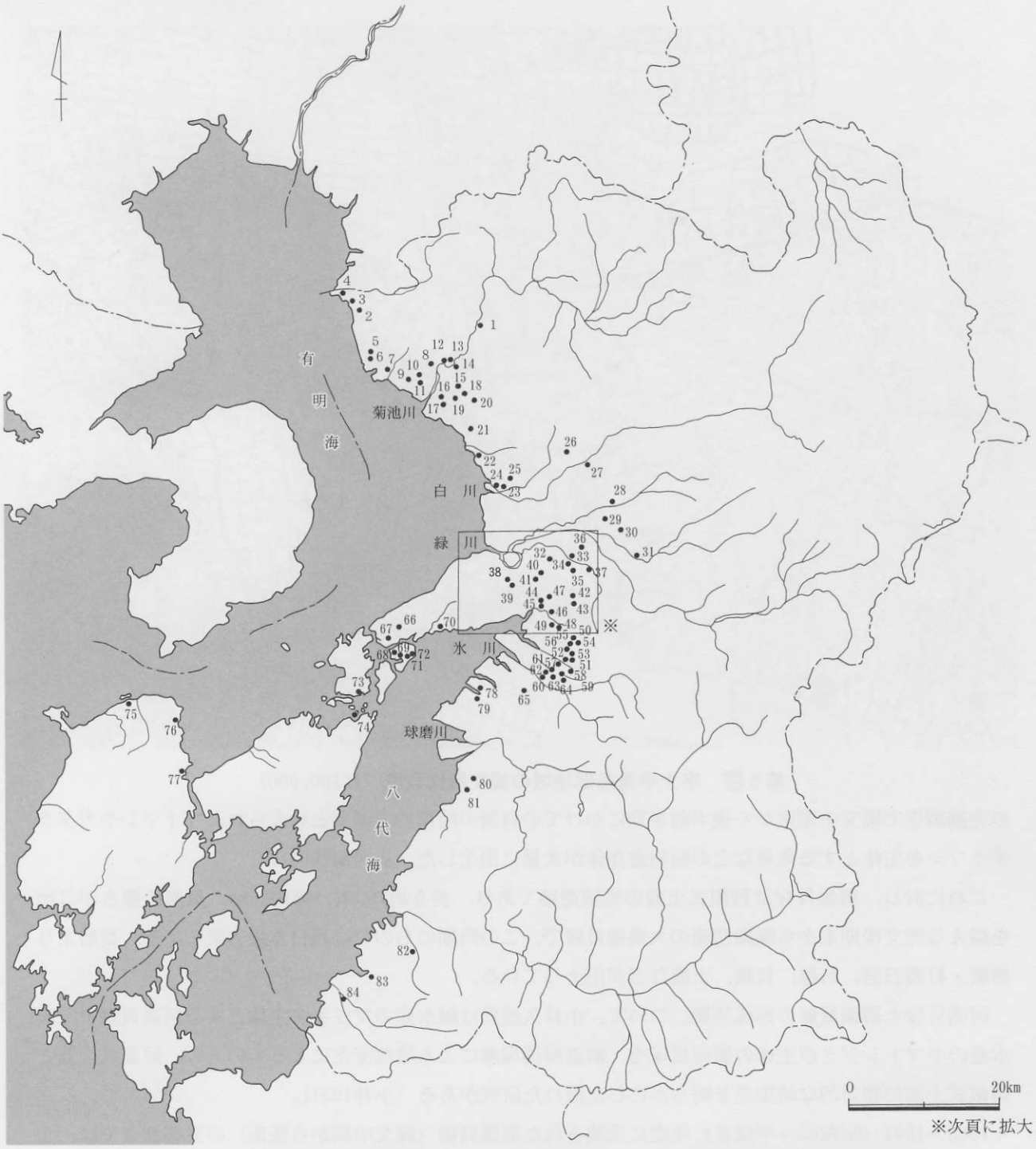
轟貝塚の東約４kmに位置する曽畑貝塚は、宇土半島基部東方の雁回山の西南麓につづく台地先端部に位置しており、明治期より多くの研究者が訪れている。1890（明治23）年には若林勝邦氏、1923（大正12）年には清野謙次氏による発掘が行われ、1959（昭和34）年に慶応大学、1986・1987（昭和61・62）年に熊本県教育委員などによる発掘調査が実施された。その結果、貝塚の範囲は南北140m、東西40m程度と推定され、貝塚西側は前期、同東側は後期を中心とする。県教委の調査で62基にのぼるドングリの貯蔵穴群が確認されている。なお、曽畑式土器が出土する層の下層では、早期の押型文土器が出土している。

出土遺物は、縄文早期から後期の土器片、磨製石斧や石匙などの石器、貝輪などの装飾品、網み物、ヒョウタン・イチイガシなどの自然遺物などである。縄文時代以外でも土師器と管玉が副葬する古墳時代人骨が確認されている。

曽畑式土器は曽畑貝塚を標識遺跡とする西北九州の縄文時代前期後半を代表する土器型式である。器形はU字形をした丸底の深鉢が中心で、その他に埦もある。幾何学的な平行沈線文や羽状文、複合鋸歯文などが施文され、口縁部が外反するものが多い。轟Ｂ式からの変遷が想定されており、大きくは３型式に分類される。また、胎土には混和材として滑石の粉末が混入するものが多く、北は朝鮮半島先端部の釜山市東三洞貝塚、南は沖縄本島からも確認されており、早くから東北アジアから朝鮮半島へと広い分布をもつ櫛目文土器との関連が指摘（小林1939など）されていたが、轟式終末期の段階に瀬戸内・中国地方の羽島下層式土器の影響下に西北九州に出現したとの見方もある。

緑川の支流・浜戸川中流域である雁回山西北麓につづく台地の北端には、国指定史跡の阿高貝塚、黒橋貝塚、御領貝塚などの貝塚が分布する。

阿高貝塚は大正時代から知られていた著名な貝塚であり、本貝塚の南約300mに御領貝塚が所在する。前者は器壁に太形凹線が施文される縄文時代中期に位置づけられる阿高式土器の標識遺跡である。近年



1 若園貝塚	2 宮内貝塚	3 境崎貝塚	4 四山貝塚	5 堀崎貝塚Ａ	6 堀崎貝塚Ｂ
7 腹赤貝塚	8 尾崎貝塚	9 浜田貝塚	10 庄司（貝島）貝塚	11 古閑原貝塚	12 繁根木貝塚
13 保田木貝塚	14 桃田貝塚	15 片諏訪貝塚	16 ビナワラ貝塚	17 キャアガラワラ貝塚	18 竹崎貝塚
19 久島貝塚	20 尾田貝塚	21 湯の浦貝塚	22 中川内平（平）貝塚	23 北内潟貝塚	24 千金甲菖蒲谷貝塚
25 川戸貝塚	26 打越貝塚	27 渡鹿貝塚	28 沼山津貝塚	29 カキワラ貝塚	30 甘木貝塚
31 辺田見貝塚	32 ソビエ石貝塚	33 黒橋貝塚	34 阿高貝塚	35 御領貝塚	36 今村貝塚
37 敷田貝塚	**38 轟貝塚**	39 西岡台貝塚	40 曽畑貝塚	41 古保里貝塚	42 北萩尾貝塚Ａ
43 北萩尾貝塚Ｂ	44 松橋大野貝塚	45 松橋貝塚	46 上久具貝塚	47 曲野貝塚	48 仲間貝塚
49 宮島貝塚	50 年の神貝塚	51 瀬戸貝塚	52 七ツ江カキワラ貝塚	53 竹ノ下貝塚	54 中小野貝塚
55 引地貝塚	56 大坪貝塚	57 四ツ江貝塚	58 土穴瀬貝塚	59 段貝塚	60 大野貝塚
61 赤迫Ａ貝塚	62 赤迫Ｂ貝塚	63 西平貝塚	64 大瀬田貝塚	65 有佐貝塚	66 州の上貝塚
67 際崎貝塚	68 小崎貝塚	69 辺田貝塚	70 西木の浦貝塚	71 道の峯貝塚	72 浜の州貝塚
73 柳貝塚	74 前島貝塚	75 沖ノ原貝塚	76 一尾貝塚	77 大矢貝塚	78 産島貝塚
79 郡築十二番町遺跡	80 五反田貝塚	81 田ノ川内貝塚	82 橋本貝塚	83 浜崎貝塚	84 南福寺貝塚

第４図　熊本県縄文時代貝塚分布図（1/800,000、帆足編2005を一部改変）

第５図　宇土半島基部地域の縄文時代貝塚（1/100,000）

の発掘調査で縄文中期末から後半前半期にかけての貝層の時期的変遷がとらえられ、マイワシやカタクチイワシを主体とする魚骨などの動物遺存体が大量に出土した（帆足編2005）。

これに対し、御領貝塚は御領式土器の標識遺跡であり、長さ約100m、幅約30m、貝層の厚さが２mを越える縄文後期末から晩期初頭の大規模貝塚で、この時期のものでは西日本最大級である。貝層より磨製・打製石器、石鏃、貝輪、土偶などが出土している。

阿高貝塚と御領貝塚の形成時期について、小林久雄氏は鹹水産のマガキを主体とする阿高貝塚と、淡水産のヤマトシジミが主体の御領貝塚を、海進海退現象による環境変化によるものとし、阿高式土器と御領式土器の相対的な時期差を明らかにした優れた研究がある（小林1931）。

1988～1991（昭和63～平成３）年度に実施された黒橋貝塚（縄文中期から後期）の発掘調査では、土壙が73基検出され、縄文時代中・後期の土器を編年するうえで重要な資料が出土するとともに、石器や骨角器、貝製品、獣骨や魚骨、ドングリが大量に出土した（髙木・村崎編1998）。

以上、宇土半島基部周辺地域だけでも縄文時代早期末から前期の轟式土器、同前期後半の曽畑式土器、中期の阿高式土器、後期末から晩期初頭の御領式土器が標識土器として型式設定されており、学史的にも遺跡の内容からみても、九州の縄文文化を語る上で欠くことができない貝塚が分布する地域といって差し支えないだろう。これらの貝塚以外でも、鳥居龍蔵氏や清野謙次氏が調査を行った松橋大野貝塚や、曽畑式土器出土層の下層から轟式土器が出土した宇城市松橋町宮島貝塚などの、学史的・学術的に貴重な貝塚が所在している。

宇土半島基部地域の北側にあたる熊本平野周辺部では、曽畑式土器が出土した上益城郡嘉島町カキワ

ラ貝塚や、阿高式土器が出土した熊本市渡鹿貝塚など10ヶ所の貝塚が確認されている。また、宇土半島基部地域南側の氷川が貫流する八代平野北部では、西平式土器の標識遺跡であり、1879（明治12）年にE.W.モースによって発掘調査が行われた八代郡氷川町大野貝塚や、中・後期の貝塚である八代市鏡町有佐貝塚など16ヶ所の貝塚が分布する。

このように熊本平野から宇土半島基部地域、八代平野北部にかけては、県内の５割強の貝塚が分布しており、熊本県のみられず九州でも特に多くの貝塚が形成された地域である。九州及び西日本の縄文時代研究を進めるうえで極めて重要な地域であることを示しているといえよう。

引用・参考文献

池田朋生　2002「轟貝塚」『新宇土市史』資料編第２巻　宇土市
今田治代　2002「西平貝塚」『竜北町遺跡地図－竜北町遺跡詳細分布調査－』竜北町文化財調査報告第２集　竜北町教育委員会
江本　直編　1988『曽畑』－熊本県宇土市花園町 曽畑貝塚・低湿地の調査－熊本県文化財調査報告第100集　熊本県教育委員会
小田文弘　2003「宇土半島と宇土市」『新宇土市史』通史編第１巻　宇土市
乙益重隆　1959「熊本県上益城郡カキワラ貝塚」『日本考古学年報』８　日本考古学協会
金田一精　2002「古保里貝塚」『新宇土市史』資料編第２巻　宇土市
木下洋介・髙木恭二ほか　1985『西岡台貝塚』宇土市埋蔵文化財調査報告書第12集　宇土市教育委員会
小林久雄　1931「阿高貝塚及び御領貝塚の土器について」『地歴研究』７－３～８　熊本地歴研究会
小林久雄　1935「肥後縄文土器編年の概要」『考古学評論』第１巻第２号　東京考古学会
小林久雄　1939「九州の縄文土器」『人類学先史学講座』11　雄山閣
坂本経堯　1983『肥後上代資料集成』　肥後上代文化研究会
杉村彰一　1962「曽畑式土器文化に関する一考察」『熊本史学』33号　熊本史学会
髙木正文・村崎孝宏編　1998『黒橋貝塚』熊本県文化財調査報告第166集　熊本県教育委員会
富田紘一　1996「渡鹿貝塚」『新熊本市史』史料編第１巻　考古資料　熊本市
林　行敏　2003「宇土半島の地質」『新宇土市史』通史編第１巻　宇土市
帆足俊文　2002「曽畑貝塚」『新宇土市史』資料編第２巻　宇土市
帆足俊文編　2005『阿高貝塚』熊本県文化財調査報告第223集　熊本県教育委員会
平山修一・髙木恭二　1977「轟貝塚（西岡台地区）の調査」『宇土城跡（西岡台）』－本文編－宇土市埋蔵文化財調査報告書第１集　宇土市教育委員会
弘田禮一郎　2003「有明海の自然」『新宇土市史』通史編第１巻　宇土市
藤本貴仁　2005『轟貝塚・馬門石石切場跡』－宇土市内遺跡範囲確認調査概報－宇土市埋蔵文化財調査報告書第27集　宇土市教育委員会
藤本貴仁　2006「轟貝塚」『轟貝塚 馬門石石切場跡』－宇土市内遺跡範囲確認調査報告書－宇土市埋蔵文化財調査報告書第28集　宇土市教育委員会
古森政次　2002「西岡台貝塚」『新宇土市史』資料編第２巻　宇土市
古森政次・金田一精　2003「縄文時代」『新宇土市史』通史編第１巻　宇土市
松本雅明・小林久雄ほか　1965『城南町史』　城南町史編纂会
山崎純男　2004「九州縄文土器の編年」『先史・古代東アジア出土の植物遺存体』(２)　平成13～15年度日本学術振興会科学研究費補助金研究成果報告書

第３章　轟貝塚における過去の調査について

轟貝塚では大正期より発掘調査が実施され、轟式土器の標識遺跡となった学史的にも重要な貝塚であることは先に述べた。以下では、これまで実施された大正期から平成期の調査概要を記すことにしたい（第６・７図）。

第１節　大正期の調査

（１）第１次調査

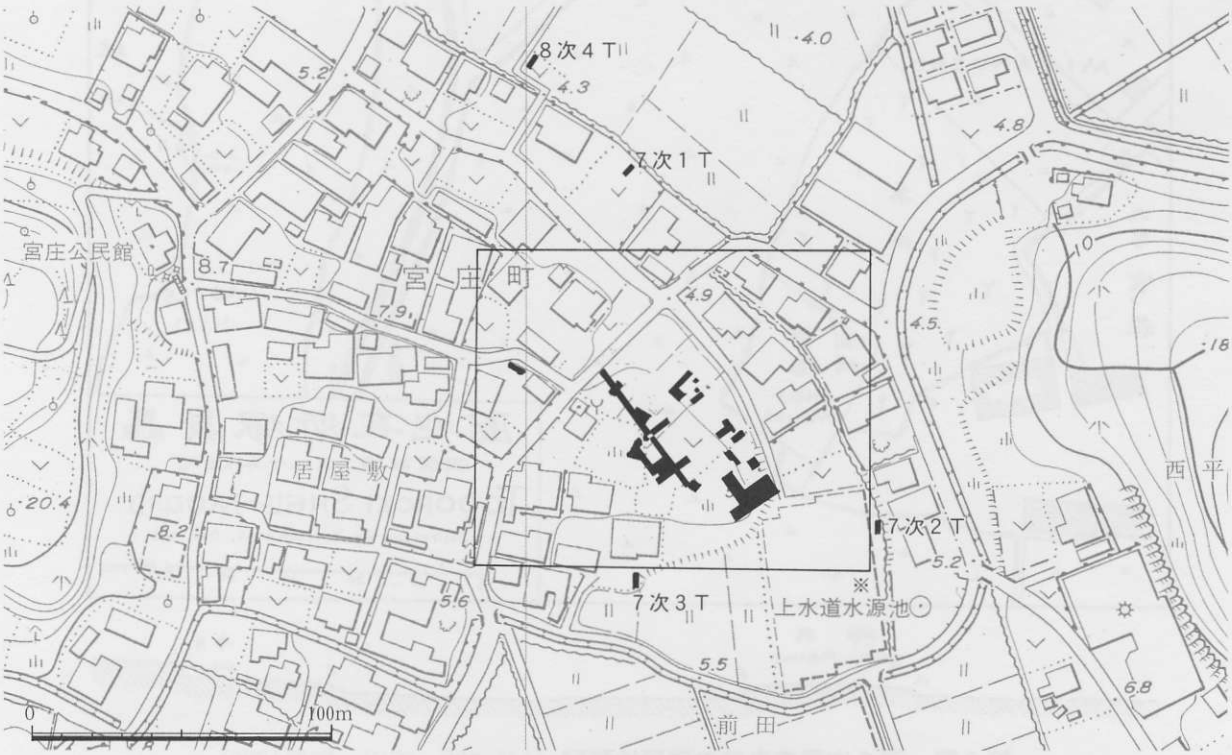
1917（大正６）年、鈴木文太郎氏をはじめとする京都帝国大学及び熊本医学専門学校により発掘調査が実施され、男女各１体の人骨が発見された。鈴木氏は両人骨や岡山県津島貝塚、大阪府国府遺跡の出土人骨と現代日本人との形質比較や、我が国の石器時代人について論及した（鈴木1917・1918）。

（２）第２次調査

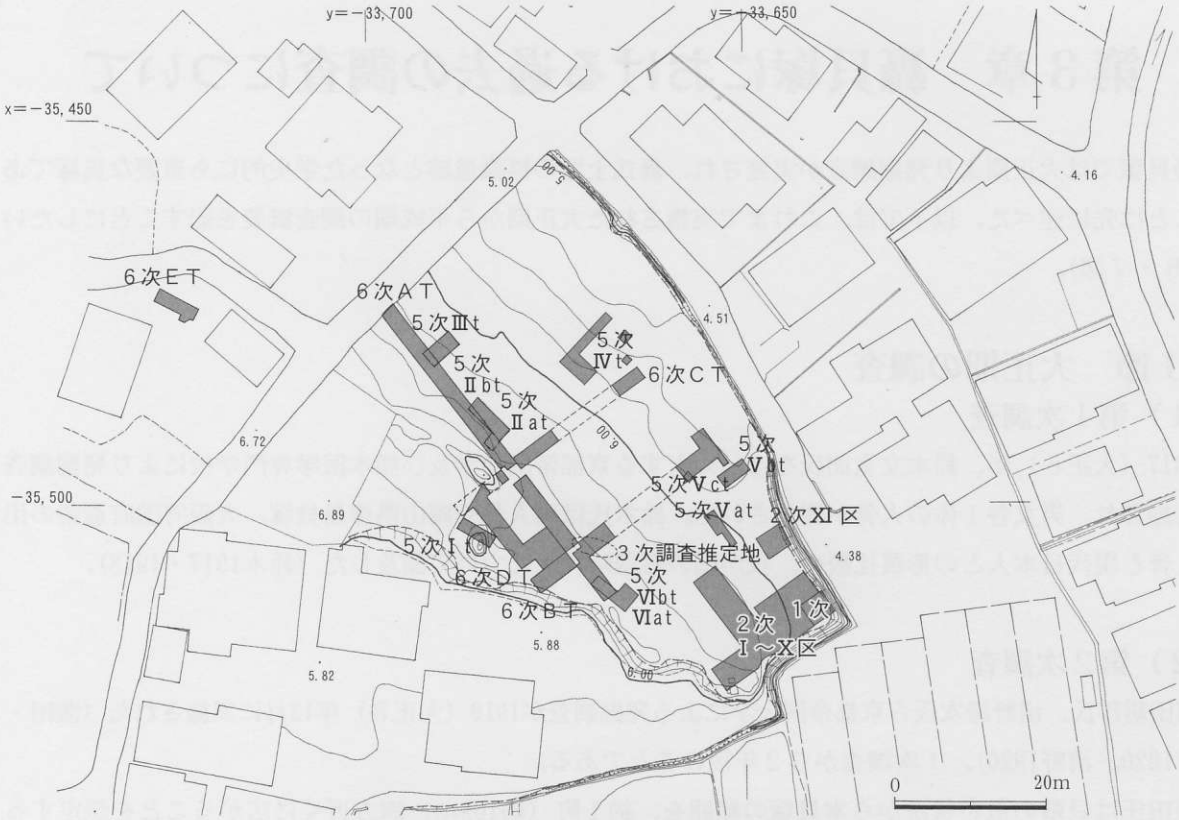
濱田耕作氏、清野謙次氏ら京都帝国大学による発掘調査が1919（大正８）年12月に実施された（濱田・榊原1920、清野1920）。１次調査から２年後のことである。

濱田氏は貝殻の散布状況から本貝塚の範囲を、約１町（約109m）四方近くに広がることを想定するとともに、轟貝塚の東方に位置する西岡台貝塚についても記録にとどめている（第８図）。調査は12月17日に開始し、同23日に終了した。調査区は鈴木氏が発掘した地点の隣接地に設定した（第９図）。

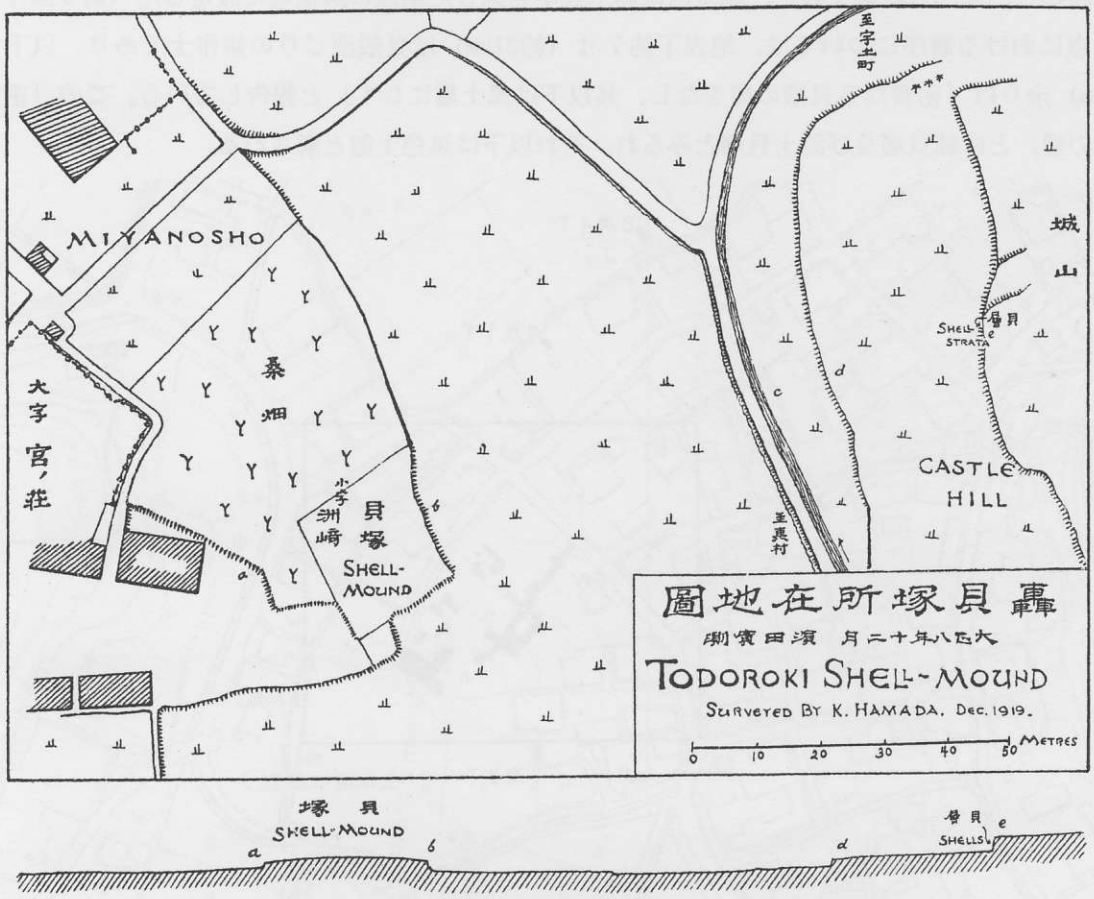
本地点における層序については、地表下約７寸（約21cm）は貝殻混じりの耕作土であり、以下２尺（約60cm）余りは「密實なる貝殻の層をなし、其以下は黒土層にして」と報告している。この「密實なる貝殻の層」とは純貝層及び混土貝層とみられ、それ以下は黒色土層と解される。



第６図　第１・２、５～８次調査における轟貝塚調査区配置図（1/2,500、※部分は次頁）



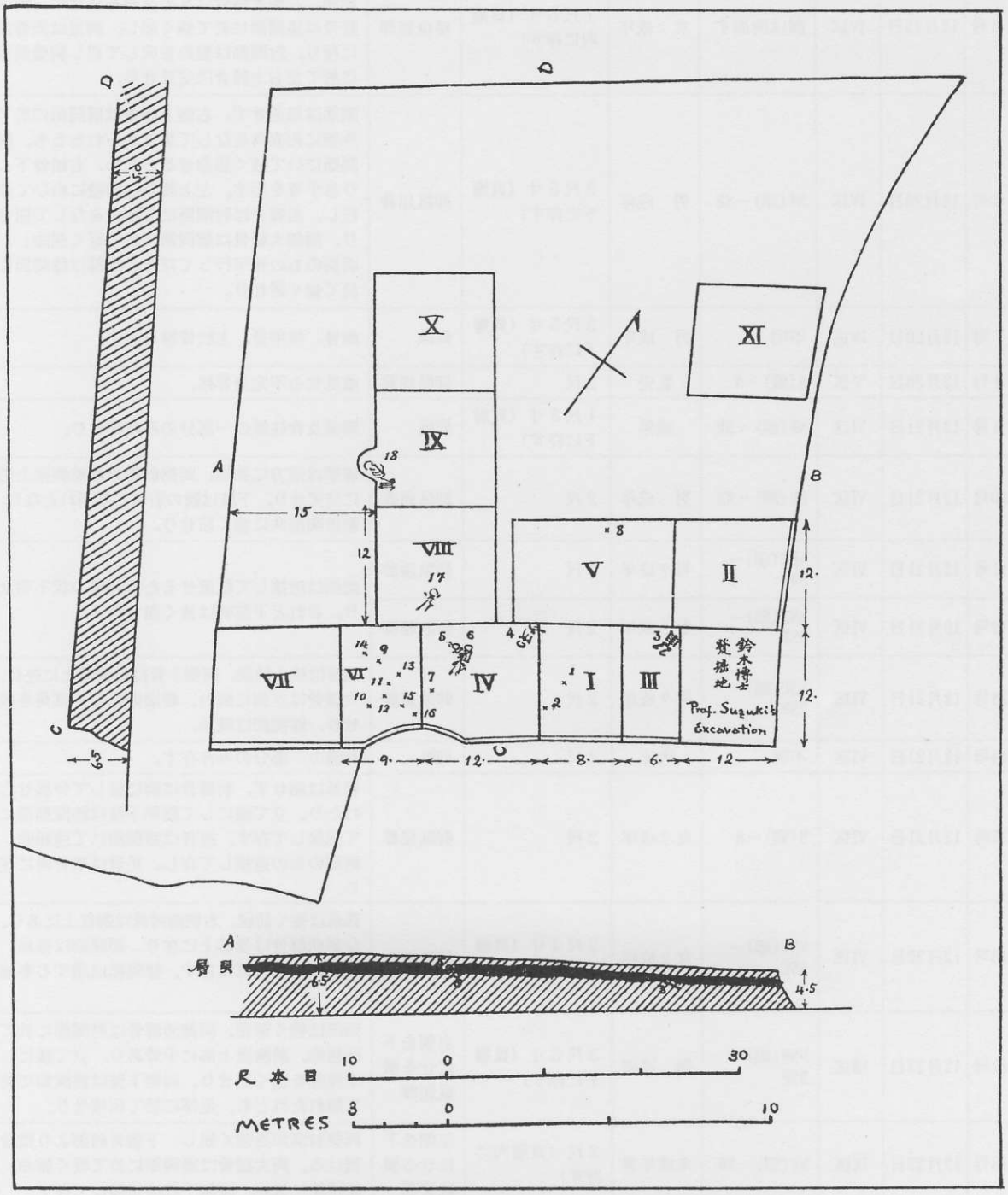
第７図　轟貝塚中心付近の調査区配置図（1/500）



第８図　第２次調査当時の周辺地形図（1/1,200、濱田・榊原1920）

調査の結果、轟式土器や石器、装身具などが出土するとともに、Ⅰ区で散乱状態の第１・２号人骨、Ⅲ区の隅角で貝輪を装着した人骨、Ⅳ区では第４～７号人骨の４体、Ⅴ区では乳児人骨、Ⅵ区では第９～16号人骨、Ⅷ区で第17号人骨、Ⅸ区で第18号人骨が出土した（第１表）。これらの人骨は多くが屈葬であり、分布状態は著しく不規則であった。

人骨はおおむね地表下２尺（約60cm）前後で検出されているが、１尺（約30cm）～３尺（約90cm）余りと幅があり一定していない。具体的には、人骨18体のうち10体は貝層最下部より貝層下有機土（黒色土層）にわたって存在する。清野氏が「発掘が進みて貝層が将に尽きんとする頃に骨格の一部が（多くの場合に於て膝関節部又は頭骸骨）が現はるゝを常とせり」（清野1920）としていることから、貝層がほ



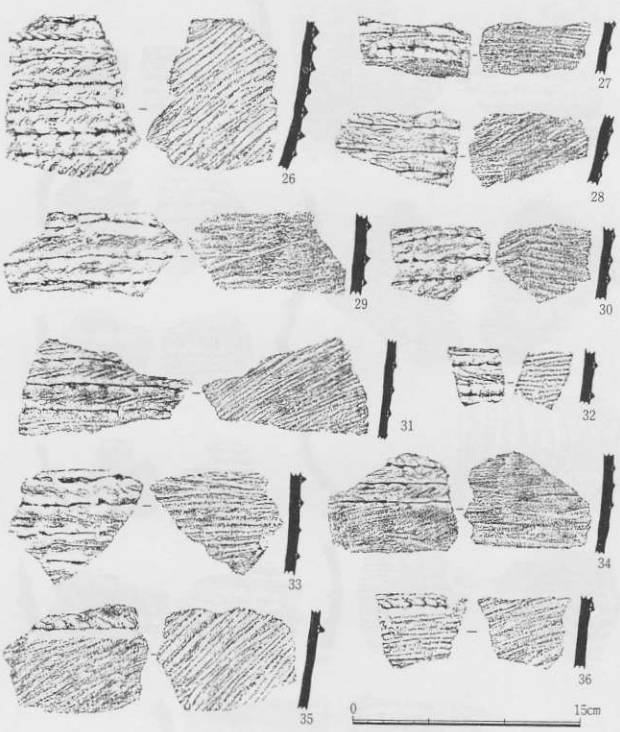
第９図　第２次調査人骨配置図（1/200、濱田・榊原1920）

第１表　第２次調査における出土人骨一覧（清野1920、旧字を新字に改変）

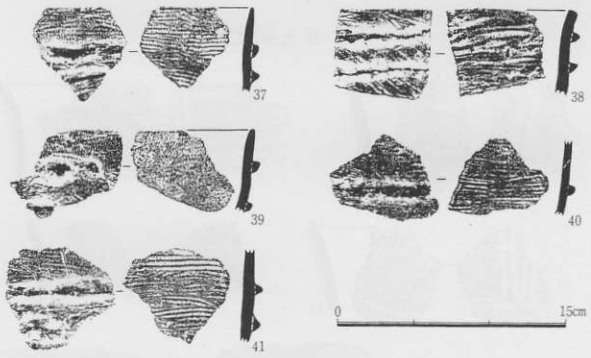
番号	発掘月日	調査区	人骨の方向	性(年齢)	地表より存在部位迄の深さ	葬位	身體各部の位置
第１号	12月17日	Ⅰ区	不明	成年	２尺７寸－３尺	不明	散乱せる不完全骨格。
第２号	12月17日	Ⅰ区	不明	乳児	２尺７寸－３尺	不明	散乱せる不完全骨格。
第３号	12月17日	Ⅲ区	NE(頭)－SW	女　成年	３尺	仰臥屈葬	頭部なし。右上半身及右大腿のみ存す。右前膊部を弱く屈し。右手は胸部に存す。
第４号	12月19日	Ⅳ区	S(頭)－N	男　成年	１尺(貝層内に存す)	仰臥屈葬	頸部は屈せず。両側前膊骨は肘関節にて直角に屈曲し前胸壁下部に存す。大腿骨は腰関節にて軽く屈曲し、両側のもの平行に位置せり。膝関節は強屈曲。
第５号	12月19日	Ⅳ区	顔は南面す	女　成年	１尺５寸（貝層内に存す）	座位屈葬	頸部は軽く前屈。右大腿骨は腰関節に於て強屈曲。左側大腿骨は凡そ直角を成せり。両側脛骨は膝関節に於て強く屈し、両足は座骨前に在り。肘関節は鋭角を成して屈し胸壁前面に於て左右上膊骨は交叉せり。
第６号	12月20日	Ⅳ区	NW(頭)－SE	男　成年	２尺５寸（貝層下に存す）	仰臥屈葬	頸部は屈曲せず。右側上膊骨は肩関節に於て外側に約直角をなして挙上せられたるも、肘関節にいて強く屈曲せるがため、右鎖骨下より右手骨を出す。左上膊骨は胸壁に沿ひて存在し、前膊骨は肘関節にて直角をなして屈せり。両側大腿骨は腰関節に於て軽く屈曲し、両側のもの相平行して存す。脛部は膝関節に於て強く屈せり。
第７号	12月20日	Ⅳ区	不明	男　成年	２尺５寸（貝層下に存す）	仰臥	頭骨、肩甲骨、上肢骨等を存す。
第８号	12月20日	Ⅴ区	S(頭)－N	乳児	２尺	仰臥屈葬	散乱せる不完全骨格。
第９号	12月21日	Ⅵ区	NW(頭)－SE	成年	１尺５寸（貝層下に存す）	仰臥	頭部及脊柱等の一部分のみ存在せり。
第10号	12月21日	Ⅵ区	SE(頭)－WN	男　成年	２尺	仰臥屈葬	頭部は前方に強屈。両側前膊骨は前胸壁上部に交叉せり。下肢は體の右側に横倒れとなり。腰膝関節共に強く屈せり。
第11号	12月21日	Ⅵ区	NEE(頭)－SWW	男？成年	２尺	仰臥屈葬	両側は近接して位置せるため詳細の状不明なり。されど下肢骨は強く屈せり
第12号	12月21日	Ⅵ区	NNE(頭)－SSW	女？成年	２尺	仰臥屈葬	
第13号	12月21日	Ⅵ区	SSE(頭)－NNW	男？成年	２尺	仰臥屈葬	頸部は強く前屈。両側手骨は前胸壁上に在り。大腿骨は左側に倒れ、腰関節に於て直角を成せり。膝関節は強屈。
第14号	12月21日	Ⅵ区	不明	乳児	２尺	仰臥	身體の一部分のみ存在す。
第15号	12月21日	Ⅵ区	S(頭)－N	女？成年	２尺	仰臥屈葬	頸部は屈せず。前膊骨は胸に接して伸展せられたり。立て膝にして両側下肢は膝関節部にて相接して存す。脛骨は膝関節にて強屈曲。両側のもの近接して存し、足骨は座骨前に在り。
第16号	12月22日	Ⅵ区	NNW(頭)－SSE	女？成年	２尺４寸（貝層下に存す）	仰臥屈葬	頸部は強く前屈。右側前膊骨は胸壁上にあり。左側前膊骨は骨盤上に在り。腰関節は強屈。両側膝部は腹部に存す。膝関節は屈する事強し。
第17号	12月23日	Ⅷ区	NNW(頭)－SSE	男　成年	３尺５寸（貝層下に存す）	右側を下にせる横臥屈葬	頸部は強く前屈。両側前膊骨は肘関節に於て強屈曲。前胸壁上部に手骨あり。立て膝にして脛部を強く屈せり。両側下肢は膝関節に於て離れたれども、足部に於て相接せり。
第18号	12月23日	Ⅸ区	NE(頭)－SW	未成年者	２尺（貝層内に存す）	左側を下にせる横臥屈葬	両側肘関節を強く屈し、下顎骨前部より指骨現はる。両大腿骨は腰関節に於て軽く屈曲。膝関節に強屈。両側下肢は相接して存す。

（注意）第９号人骨乃至15号は相接近して存し、四肢骨の何れに属せりや不明瞭成るもの多し。骨格研究時には一括して示す可し

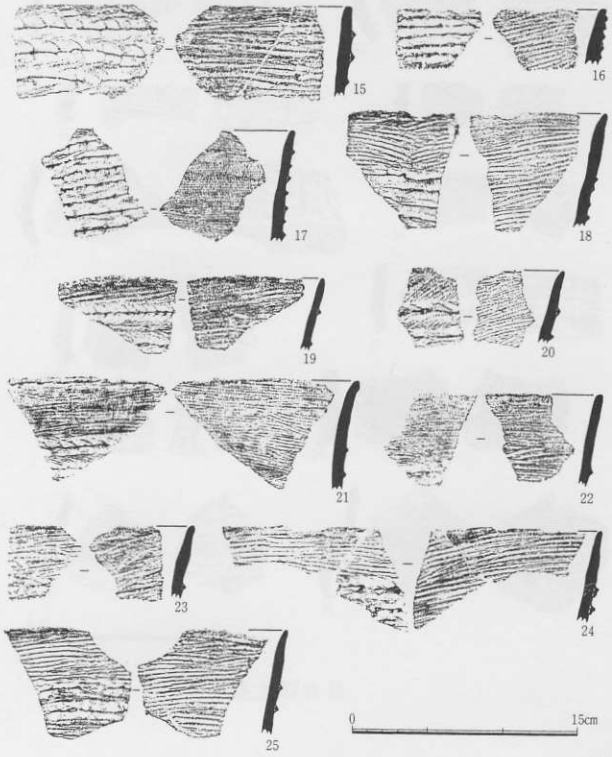
Ｉａ類土器



Ｉａ・Ｉｂ類土器の胴部

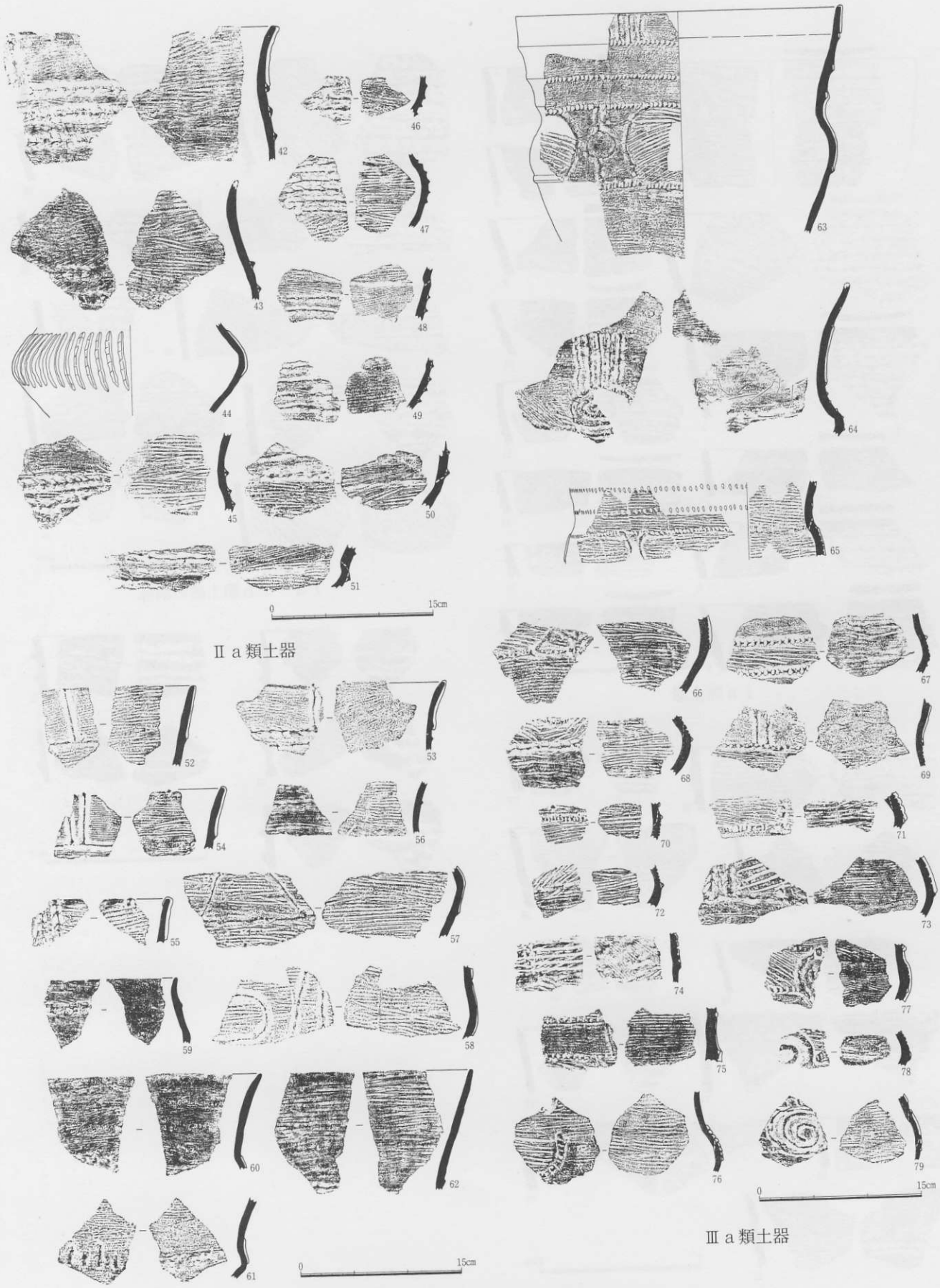


Ｉｃ類土器



Ｉｂ類土器

第10図　第２次調査出土轟Ｂ式土器１（1/5、宮本1990）



Ⅱａ類土器

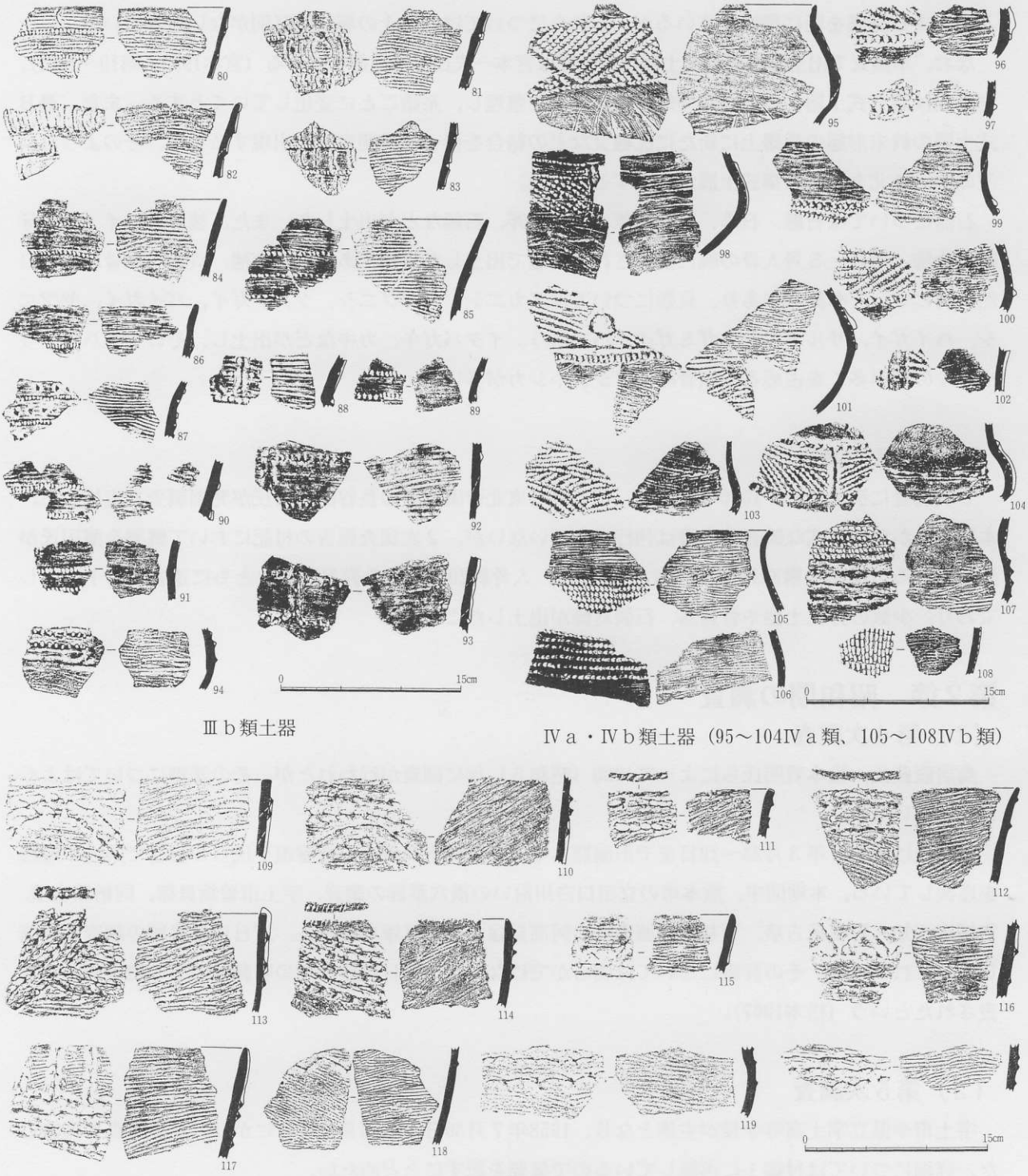
Ⅲａ類土器

Ⅱｂ・Ⅱｃ類土器（52～58Ⅱｂ類、59～61Ⅱｃ類）

第11図　第２次調査出土轟Ｂ式土器２（1/5、宮本1990）

ぼ無くなる位置（貝層最下部から黒色土層上面）で人骨が検出されたことがわかる。また、18例中３例は貝層中、同５例は貝層下の有機層（黒色土層）で発見されている。ただし、これらはあくまで人骨の発見位置であり、墓壙の検出層位ではない点は注意すべきであろう。

出土した遺物のなかで最も多くを占めるのが土器で数百点にのぼる。このうち12点は祝部土器（須恵器）に類するもの、また近代の磁器片が出土したが、これらは撹乱とみられる貝層上部から出土し、そ



Ⅲｂ類土器

Ⅳａ・Ⅳｂ類土器（95～104Ⅳａ類、105～108Ⅳｂ類）

その他の轟Ｂ式土器

第12図　第２次調査出土轟Ｂ式土器３（1/5、宮本1990）

れ以外は「貝塚式土器」（縄文土器）であり、弥生式土器は出土していないと記述している。土器の破片は各調査区とも散乱した状態で比較的完形に近いものは発見できなかったという。

濱田氏は出土した縄文土器を（イ）隆起細帯文、（ロ）變様縄席紋、（ハ）爪形及變様爪形紋、（ニ）波線直線紋、（ホ）各種直線紋、（ヘ）刷毛及箆目紋、（ト）太形凹紋の７類に分類した。これらについては、（イ）・（ロ）・（ハ）は轟Ｂ式、（ニ）は轟Ｃ式、（ホ）は轟Ａ式、（ヘ）は轟Ｄ式、（ト）は阿高式土器に相当しよう。（イ）・（ハ）より（ニ）が新しい特徴を有することを指摘しており、現在の編年観と共通する認識を既に指摘しているが、これらについては、出土の層位的区別がないとしている。

なお、本調査で出土した轟Ｂ式土器については宮本一夫氏が再検討している（宮本1990、第10～12図）。宮本氏は轟Ｂ式土器について時間的な位置関係を整理し、系譜ごとに変化していくとする。また、轟Ｂ式土器の終末形態の系譜上に新たに沈線文などの結合を伴った中間形式が出現するとし、そのような状況の中、西北九州に曽畑式土器が成立するとした。

石器については石鏃、石匙、打製石斧、磨製石斧、石錘などが出土した。また、装身具はイノシシ牙製の垂飾、第３・５号人骨の腕に装着された状態で出土した貝輪である。その他、貝類や獣骨などの自然遺物についても記載があり、貝類についてはアカニシ、テングニシ、ツメタガイ、バイガイ、ヤマニシ、ハイガイ、サルボウ、カガミガイ、ハマグリ、イタバガキ、カキなどが出土し、そのうちハマグリやカキの類が多くを占める。獣骨はイノシシやシカが多い。

（３）第３次調査

２次調査に引き続き、1920（大正９）年７月に東北帝国大学の長谷部言人氏が発掘調査を実施した。本調査にかかる正式な調査報告書は刊行されていないが、２次調査報告の付記において概要を濱田氏が記している（濱田・榊原1920）。これによると、人骨約20体余りを発見するとともに遺物が若干出土しており、少数の弥生土器や骨角器、石製耳飾が出土したという。

第２節　昭和期の調査

（１）第４次調査

鳥居龍蔵氏、松本雅明氏らによって1930（昭和５）年に調査が行われたが、その詳細についてはよくわかっていない。

鳥居氏は昭和５年３月23～29日まで旧制熊本中学（現熊本高校）の進藤坦平氏らの招きで県内の遺跡を巡検している。本期間中、熊本市の立田口白川沿いの横穴墓群の調査、宇土市曽畑貝塚、同楢崎古墳、宇城市不知火町鴨籠古墳、下益城郡城南町の阿高貝塚・御領貝塚を調査し、27日に轟貝塚の調査を実施したとされている。その詳細については明らかではないが、29日に熊本市の明麗館でその調査成果が発表されたという（松本1967）。

（２）第５次調査

宇土市や県立宇土高等学校が主体となり、1958年７月30日から同８月３日にかけて発掘調査を実施した。詳細については付編１に再録しているので概要を記すにとどめたい。

調査は小林久雄氏、松本雅明氏、富樫卯三郎氏、原口長之氏、三島格氏、隈昭志氏らが参加し、宇土高校や熊本大学の学生らが協力した。

調査トレンチを設定した地点は、その多くが撹乱を受けており、プライマリーな状態であったのはＩｔの一部のほか、Ⅱｂｔの南半の混土貝層の下部以下、Ⅴｂｔの南半分の最下層、Ⅵｂｔの黒土層以下であった。

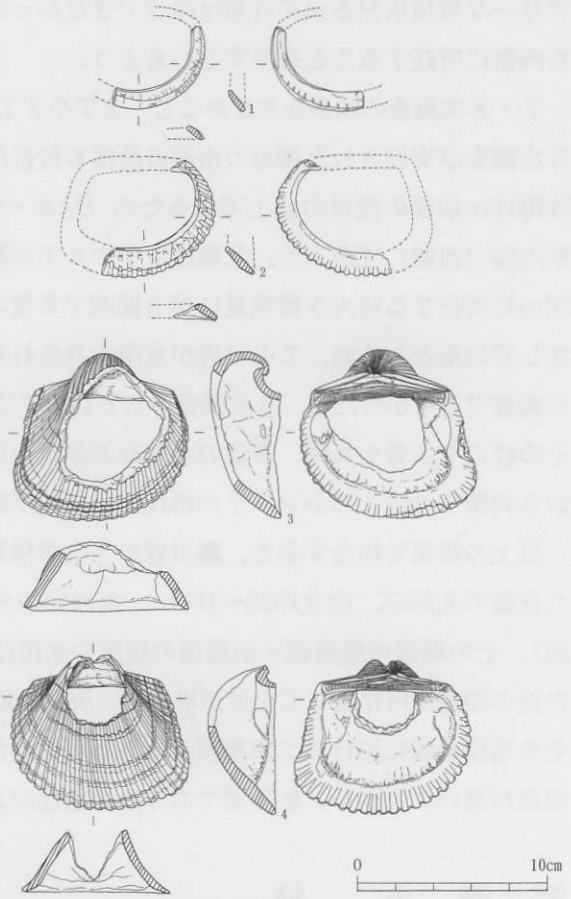
このうち、最も原初の状態をとどめるとされたＩｔの一部の層位は５つの堆積層からなる。第１層は約20cmの耕土層で、第２層は約20～25cmの厚さで堆積する純貝層である。本貝層はカキが90％を占め、そのほかアカガイ、ハイガイ、ハマグリ、アサリなどが混じる。第３層は混土貝層で厚さ約15～23cmを測る。第４層は約10cmの貝層であり、大部分はハイガイで、それにカキ、アカガイ、ハマグリなどを含んでいる。この第４層直上で厚さ約15cm、広さ約１㎡の焼土層が検出された。第５層は表土下約70cmの貝片や礫を含まない純黒土層である。

上記の層から出土した遺物については、第２層では全て阿高式土器（縄文中期）であり、第３層以下では阿高式土器は出土していない。また、第３～５層まで轟式土器が出土しているが、このうち表裏に条痕をもつものと、そうでないものとは明らかに区別でき、前者は第５層最下層にのみ存在する。また、曽畑式土器に近いものは、条痕文土器よりも上層より出土し、第５層上層以上の直線文土器は曽畑式土器の影響であると推定している。

轟式土器の型式学的な検討の結果、Ａ～Ｄ式に分類・細分し、確実な層位関係によって編年できるとした。条痕文のみをもつＡ式は、轟式土器のなかでも最下層から出土し、調査区を設定した台地の東南部から多く出土しており、西北部からはほとんど出土していない。

Ｂ式はミミズバレ状の隆起線文をもつ土器であり、Ｃ式は浅い条痕を残し、波状文を主体とするもの、Ｄ式は内面の条痕がほとんどなくなり、施文はハイガイのほかに半裁竹管やヘラに類するものを用い、Ａ～Ｃ式とは別の要素を加えているものである。極めて様式化されており、底部にふくらみができ、口縁部が外に張ることを特徴とする。

松本氏はＡ・Ｂ式、Ｃ式の一部を伴出石器などより縄文早期と位置づけ、Ｃ式の多くやＤ式は縄文前期と想定した。また、轟式のなかに明らかに曽畑式土器の影響がみられるものが出土していることを指摘し、轟式から阿高式への移行の過程、阿高式の初期の様式はとらえられないとしながらも、口縁部の刻目、ヘラによる施文は阿高式への途をひらくものと指摘した。



第13図　第５次調査出土貝輪（1/4、中川2001）

（3）第６次調査

本調査の契機は、先述したように熊日学術調査団が宇土、不知火地方の古代文化に関する学術調査の一環として、慶応大学講師（当時）だった江坂輝彌氏を主査とし、1966（昭和41）年３月20日から同29

日の期間で実施した。調査の詳細については次章以降を参照されたい。

第３節　平成期の調査

（１）第７次調査

宇土市内遺跡範囲確認調査事業の一環として、平成16・17年度の２ヵ年にわたり第７・８次発掘調査を実施した。

両調査では貝塚の範囲を絞り込むことに主眼を置いた。その理由として、過去の調査成果から貝塚中心部については、ある程度の様相はつかめていたものの、貝塚の範囲については地表面観察のみにたよらざるを得なかったことによる。

７次調査では、貝塚中心部から北、東、南へ約50～70m離れた畑地に、それぞれ幅約1.5～２m、長さ約４mのトレンチを３つの地点に設定した（１Ｔ～３Ｔ）。調査の結果、１Ｔと２Ｔで混貝土層を確認し、各トレンチから縄文土器や石器、弥生土器、古墳時代の土師器や須恵器、中世の土師質土器や瓦質土器、白磁、木器などが出土した（第７図）。

（２）第８次調査

本調査では、貝塚北側で破砕状態の貝類の散布がごくわずかに認められる地点を幅２m、長さ４mのトレンチ（４Ｔ）を設定して調査を行った。その結果、地表下約２mで混貝土層を検出し、縄文土器や弥生土器、土師器、石器が出土した（第７図）。７・８次調査においては純貝層が検出されず、プライマリーな堆積状況を示す貝層は確認できなかったが、これは貝塚の１次堆積層（貝層）が調査地点よりも内側に所在することを示すといえよう。

７・８次調査の結果をまとめると、２Ｔや３Ｔの調査結果や地形より、貝塚の中心部分の１・２・５・６次調査が実施された畑地の南側の段落ち付近が１次推積層の南端とみられる。また、本畑地の東縁部は幅10m前後の後世の盛土であるため（松本・富樫1961）、１次推積層の東端は現在の段落ちよりもやや内側（西側）であろう。北端は１Ｔや４Ｔの混貝土層が二次堆積と認定し得ること、１Ｔより南へ約20mに所在する防火水槽埋設に伴う掘削で多量の貝類が出土していることから、この付近にも貝層が存在しているとみられ、この付近が北端とみられる。最後に西端については、住居が密集していることから調査できなかったが、６次調査のＥトレンチで、縄文時代後期の北久根山式土器がまとまって出土し、その他にも人骨や貝輪、多数の石器などが出土した純貝層が存在することから、地形と貝類の散布状況から判断すれば、Ｅトレンチの西側20m前後が西端と推定される。

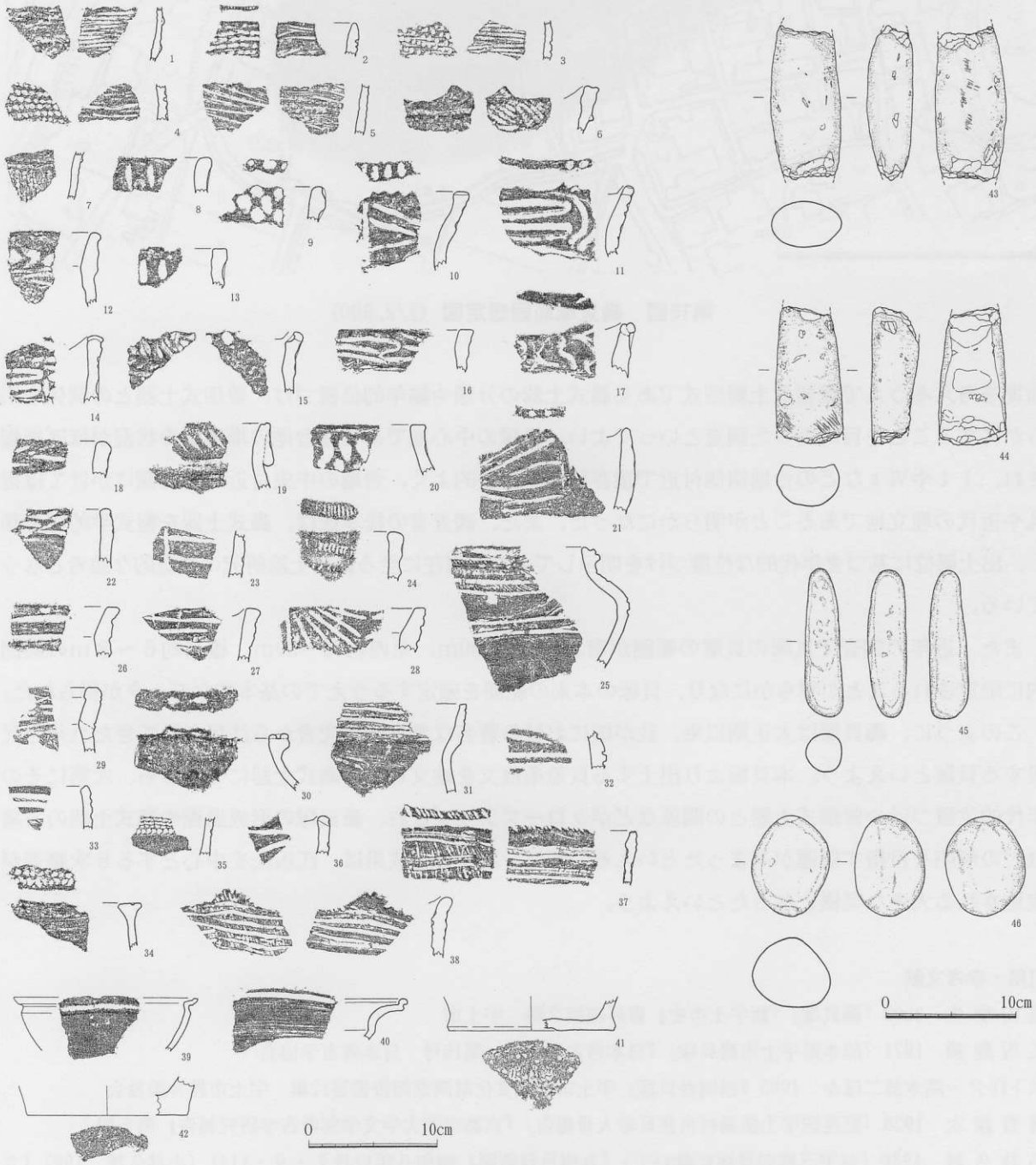
以上の結果を総合すると、轟貝塚の１次堆積層の範囲は貝塚の西側から東側に向かって舌状に派生した丘陵の先端部、南北約80～100m、東西約70～80m、標高約６～８mの範囲内に限定されよう（第15図）。その周辺の標高約４m前後の畑地や水田は、縄文時代当時、現在より標高が数m低く、縄文時代以後の沖積作用によって土砂が堆積し、現在の地形を形成したとみられる。調査で検出した混貝土層は、その堆積過程における二次堆積土である可能性が高い。なお、貝殻が散布している貝塚西側の住宅地は標高が高いことから、居住域であった可能性がある。

第４節　小　　結

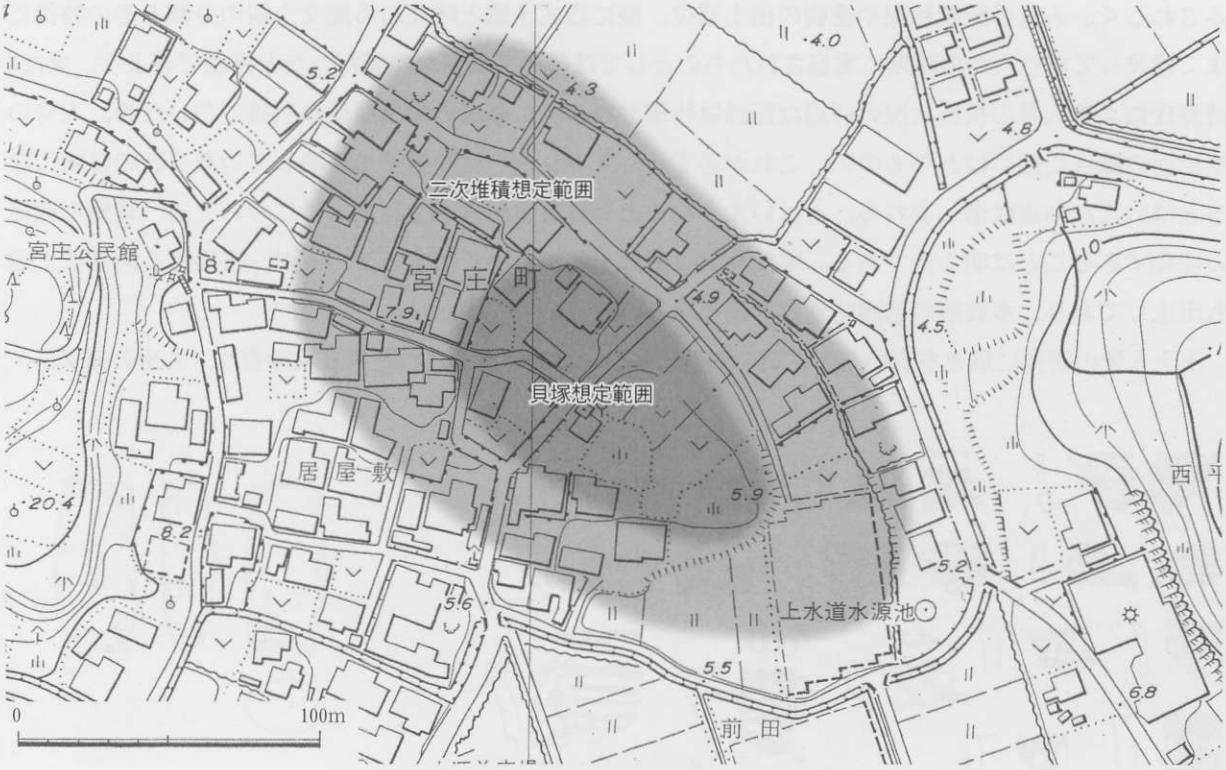
大正期の調査のうち、第２次調査に関しては日本近代考古学の父といわれる濱田氏が携わった調査に

ふさわしく、人骨の配置状況や遺物の出土層位、後に轟式土器と呼ばれる縄文土器の分類とその特徴にまで言及しており、この時期に実施されたものとしては極めて緻密な調査だったと評価できよう。また、清野氏による人骨の検出状況の詳細な記録は特筆されるが、墓壙の検出層位が明確でないため、人骨の検出面の深さに違いはあるものの、これが必ずしもストレートに時期差を反映していることの証明になるとはいえない点は惜しまれる。とはいえ少なくとも貝層中から出土した人骨については、貝層形成後の埋葬であることは明らかである。本調査では轟式土器が数多く出土しているが、後出する阿高式土器も出土しており、本貝層の形成時期が問題となろう。

出土人骨の研究に重きをおいた大正期の調査に対し、戦後に実施された第５次調査は、九州の縄文早・



第14図　第７・８次調査出土遺物（1/5、藤本2006）



第15図　轟貝塚範囲想定図（1/2,500）

前期を考えるうえで重要な土器型式である轟式土器の分類や編年的位置づけ、曽畑式土器との関係を明らかにすることを目的とした調査といってよい。貝塚の中心地である低台地の堆積層の状況がほぼ把握され、ＩｔやVIｔなどの台地南側付近で遺存状態が比較的よく、台地の中央付近から北側にかけては撹乱や近代の埋立地であることが明らかになった。また、調査者の松本氏は、轟式土器を型式学的に分類し、出土層位に基づき年代的な位置づけを明示しており、現在に至る轟式土器研究の基礎的な論考となっている。

また、近年の調査で貝塚の貝層の範囲が南北約80～100m、東西約70～80m、標高約６～８ｍの範囲内に限定されることが明らかになり、貝塚の本来の範囲を確定するうえでの基本的なデータが得られた。

このように、轟貝塚は大正期以来、我が国における著名な考古学研究者から注目されてきた九州を代表する貝塚といえよう。本貝塚より出土する貝殻条痕文を地文とする轟式土器についても、次第にその年代的位置づけや曽畑式土器との関係などがクローズアップされ、轟貝塚の形成過程や轟式土器の系譜などの解明を目指す機運が高まったといえる。特に５次調査の成果は、江坂氏を中心とする６次調査が実施される大きな契機となったといえよう。

引用・参考文献

池田朋生　2002「轟貝塚」『新宇土市史』資料編第２巻　宇土市
江坂輝彌　1971「熊本県宇土市轟貝塚」『日本考古学年報』第19号　日本考古学協会
木下洋介・髙木恭二ほか　1985『西岡台貝塚』宇土市埋蔵文化財調査報告書第12集　宇土市教育委員会
清野謙次　1920「肥後国宇土郡轟村宮荘貝塚人骨報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第５冊
小林久雄　1930「益宇三郡の貝塚に就いて」『九州日日新聞』昭和５年12月７・９・11日（小林久雄　1967『九州縄文土器の研究』に再録）

小林久雄　1935「肥後縄文土器編年の概要」『考古学評論』第１巻第２号　東京考古学会
鈴木文太郎　1917「河内国府人骨・肥後轟貝塚にて発掘せる人骨について報じ併せて石器時代の住民に及ぶ」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第２冊
鈴木文太郎　1918「肥後轟貝塚河内道明寺等にて発掘せる人骨に就いて」『人類学雑誌』第33巻第３号
中川毅人　2001「轟貝塚出土の動物遺存体および貝製品」『考古学研究室報告』第36集　熊本大学文学部考古学研究室
濱田耕作・榊原政職　1920「肥後国宇土郡轟村宮荘貝塚発掘報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第５冊
藤本貴仁　2005『轟貝塚・馬門石石切場跡』－宇土市内遺跡範囲確認調査概報－宇土市埋蔵文化財調査報告書第27集　宇土市教育委員会
藤本貴仁　2006「轟貝塚」『轟貝塚　馬門石石切場跡』－宇土市内遺跡範囲確認調査報告書－宇土市埋蔵文化財調査報告書第28集　宇土市教育委員会
古森政次・金田一精　2003「縄文時代」『新宇土市史』通史編第１巻　宇土市
松本雅明・富樫卯三郎　1961「轟式土器の編年－熊本県宇土市轟貝塚調査報告－」『考古学雑誌』第47巻第３号　日本考古学会
松本雅明　1967「肥後考古学会の成立前後」『九州縄文土器の研究』　小林久雄先生遺稿刊行会
三森定男　1935「肥後轟貝塚の土器について－覚書－」『考古学』第６巻第２・５号
宮本一夫　1990「轟Ｂ式土器の再検討－京都大学文学部博物館収蔵資料を中心に－」『肥後考古』第７号　肥後考古学会

第４章　第６次調査の概要

第１節　調査の方法

京都大学や宇土高校・熊本大学などが調査を行った轟貝塚の中心地にあたる丘陵端部の緩傾斜地（標高約５～７ｍ）で発掘調査を実施した。調査地点は宇土市宮庄町字須崎129、130、131、132-1、176-1である。

北西－南東方向にＡトレンチ、北東－南西方向にＢトレンチとＣトレンチを配し、Ａトレンチ南側に接してＤトレンチ、さらに北西側の道路を隔てて北西－南東方向にＥトレンチを設定した（第16図）。各トレンチの幅は約２ｍで、２ｍ四方のグリッド（以下、適宜Grと表記する）を設定し、グリッドごとに調査担当者及び作業員を配置した。当該トレンチは上述した過去の調査トレンチをできる限り避けるように設定したが、一部に重複した地点もある。次に各トレンチの配置状況及び調査面積について記すことにしたい。

最も面積が広いＡトレンチは第１～30のグリッドを配する。このうち調査を行ったのは１～24Grであり、Ａトレンチ14GrでＢトレンチ６Gr、Ａトレンチ21GrでＣトレンチ４Grと重複している。本トレンチの調査面積は重複部分を含んで約89㎡である。Ｂトレンチでは１～15Grを設定したが、実際に調査を行ったのは１～９・14・15Grである。また、Ｃトレンチも１～15Grであるが、Ｂトレンチと同様に未掘部分があり、１～６・13～15Grで調査を実施した。調査面積はＡトレンチとの重複部分を除いてＢトレンチで約27㎡、Ｃトレンチでは40㎡である。Ｄトレンチでは１～24Grを設定。実際に調査したのは１・５・９・13・17～20・22～24Grで、その他のグリッドは未調査である。調査面積は約44㎡。また、Ｅトレンチは１～３Grと他のトレンチとくらべて小規模で、３Grの一部を拡張した。調査面積は約13㎡である。Ａ～Ｅトレンチをあわせた調査面積は約213㎡である。

調査では、まず調査地周辺を50cmコンターで測量を行い、調査トレンチを設定、表土除去を実施した。その後、グリッド単位で層序の把握に努めながら基盤層に到達するまで堆積土を掘り進めた。ただし、一部に調査期間の関係から基盤層まで到達しなかった地点もある。

第２節　調査区における土層堆積について

（１）土層堆積の概要

Ａ～Ｄトレンチを設定した緩傾斜地における基本層序は第17図の左図である。調査の結果、プライマリーな層序と判断できるＤトレンチ及びＡトレンチ南半部付近の土層堆積をもとにしている。

Ａトレンチ北半部やＢトレンチ及びＣトレンチ北側については、大部分で中世以降の改変を受けており、良好な堆積状況ではなかった。また、Ａ～Ｄトレンチと道路を挟んで対峙するＥトレンチについては、調査の結果、土層の堆積状況及び主体となる出土遺物の時期が異なるため、前者とは区別した。以下では、Ａ～ＤトレンチとＥトレンチに分け、調査の結果から得られた基本的な層位についてまとめてみたい。

（２）Ａ～Ｄトレンチの基本層位

本地点においては設定した調査トレンチの範囲が広いため、層序が比較的細かく分けられる地点もあ

第16図　調査トレンチ及びグリッド配置図（１／600、トレンチ内の網掛けは調査実施グリッド）

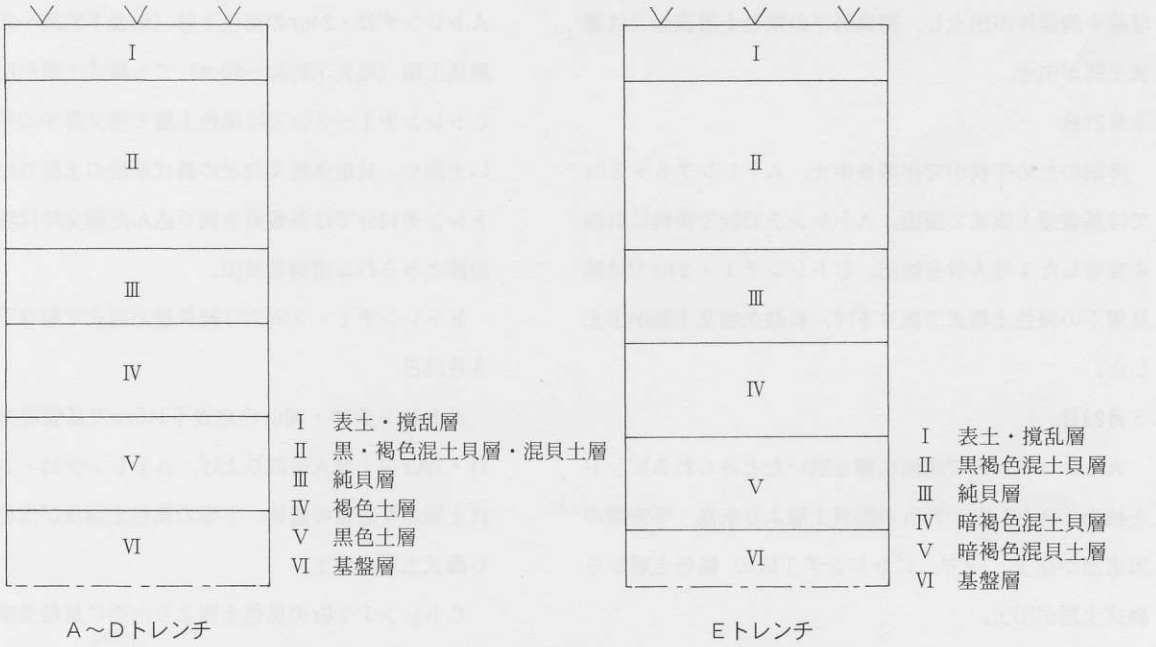
るが、基本的には同じような土層の形成状況を把握できた（第18～20図）。また、Ａトレンチ北半部では後世の改変が著しく、プライマリーな堆積状況を確認することはできなかったが、土壙墓が検出されたＡトレンチ南側やＤトレンチの一部では良好な堆積状況を把握できる。これらの土層堆積状況を総合すると、基本的な層序はおおむねⅠ～Ⅵ層に大別される（第17図の左図）。

Ⅰ層は厚さ10～20cm程度の表土層（耕作土）及び撹乱層である。Ⅱ層は黒色や褐色の混土貝層及び混貝土層で、中世に大幅な改変を受けており、弥生～中世の遺物を包含する。厚さはおおむね20～50cmで、一部には100cm以上の地点もある。Ⅲ層は厚さ約20～40cmのカキやハマグリなどの純貝層で、阿高式土器を主体とする縄文時代中期の土器が出土しており、当該期に形成された貝層とみられる。江坂氏による調査概報（江坂1971）では、「マガキの多い中期の阿高式土器の時期の純貝層があり、その下の一部に轟式後半の時期のハイガイの多い薄い貝層が認められ」と記述しているが、その範囲や出土遺物の詳細は不明である。Ⅳ層は褐色土層で、約20～30cmの厚さで堆積しており、縄文時代前期の轟式土器が数多く出土している。Ⅴ層は厚さ20～30cm程度の黒色土層で、Ⅳ層と同様に押型文土器や塞ノ神式土器、轟式土器など早期～前期の土器のみが出土している。Ⅵ層は基盤層のローム層である。

（３）Ｅトレンチの基本層位

本トレンチにおける基本的な層序はⅠ～Ⅵ層に分けることができる（第17図の右図、第20図）。

Ⅰ層は表土層（耕作土）及び撹乱層で、厚さは約10～15cmである。Ⅱ層はハマグリやハイガイなどを包含する混土貝層で、土色は黒褐色を呈し、厚さは約20～65cmである。上下２層に細分でき、上層のⅡａ層は貝が少ないのに対し、下層のⅡｂ層は貝が多く含まれており、Ⅱｂ層で縄文後期前半とみられる埋葬人骨が３体検出されている。Ⅲ層は縄文後期に形成されたとみられるマテガイやアゲマキなどを含む純貝層で、約5～30cmの厚さで堆積しており、部分的に混貝土層を挟む。Ⅳ層は厚さ約5～30cmを測る暗褐色の混土貝層で、炭化物を多く含んでおり、鐘崎式土器や北久根山式土器、市来式土器など縄文後



第17図　Ａ～Ｄトレンチ及びＥトレンチの基本層序

期中頃を中心とする遺物が出土している。Ⅴ層はやや赤みを帯びた暗褐色の混貝土層で、厚さは約20～50cmを測り、Ⅳ層と同様に縄文後期の遺物を包含する。Ⅵ層は基盤層とみられる黄ばみを帯びた赤褐色粘土層であり、上面は凹凸が著しく、本地点周辺において長期間にわたり人為的改変が加えられていたことが推測される。

第３節　調査日誌抄

1966年３月18日

貝塚周辺の平板測量を実施。Ａトレンチを設定。

３月19日

Ａ～Ｃトレンチの表土除去作業開始。

３月20日

Ａトレンチでは、ほぼ全域にわたり表土下から撹乱層や混土貝層を検出し、中世の土師質土器や中国製青磁が出土。Ｂトレンチ５Grでは撹乱層を検出し、近世遺物が混入。Ｃトレンチ１～３Grでも表土下で混土貝層を検出し、土師器や須恵器が出土。

３月21日

Ａトレンチ１～３Grの混土貝層で、底部糸切り離しの土師質土器や陶器、Ａトレンチ16Grでは地表下約70cmの深さで中国製の青磁が出土。Ｂトレンチ５Grでも表土下約50cmで近世の遺物が出土。

これに対し、Ｃトレンチ１Grでは阿高式土器を包含する純貝層（マガキが多い）を検出。直上の混土貝層では埴輪や陶器片が出土し、純貝層下の褐色土層表面では轟式土器が出土。

３月22日

降雨のため午前中で作業を中止。Ａトレンチ５～８Grでは基盤層上面まで検出。Ａトレンチ22Grで両腕に貝輪を装着した１号人骨を検出。Ｃトレンチ１・２Grでは純貝層下の褐色土層まで掘り下げ、貝殻条痕文土器が出土した。

３月23日

Ａトレンチ６Grで床面に礫を敷いたとみられるピットを検出。Ａトレンチ20Grの混貝土層より奈良・平安期の須恵器が出土。一方、Ｃトレンチ１Grの 褐色土層から轟式土器が出土。

３月24日

Ａトレンチ８Grで基盤層を掘り込んだ直径50cm程のピットを完掘した。また、Ａトレンチ10・11Gr混土貝層からは底部糸切り離しの中世の土師質土器が多量に出土。一方、層序と出土遺物からＡトレンチ19・20Gr南半分は一部をのぞきプライマリーな層と推定される。Ａトレンチ20Grの褐色土層は撹乱されておらず、Ｃトレンチ３Grの褐色土層と連なることが明らかとなる。Ａトレンチ23・24Grでは褐色土層を轟式層と明記。

Ｃトレンチ１Grの褐色土層掘り下げ。表裏とも貝殻条痕を施す土器が増加する。Ｃトレンチ２Gr褐色土層より轟式土器や石鏃、石匙、その下層の黒色土層からは縄文土器の底部が出土。褐色土層は遺物の出土状況から撹乱がみられず、轟式土器を包含する層であることが明確となる。Ｃトレンチ３Grの褐色土層から石鏃、削器が出土。これに対し、Ｃトレンチ13～15Grでは地表下約80cmの基盤層まで陶磁器が出土しており、地表から比較的深い位置にも撹乱がおよんでいることが判明。

３月25日

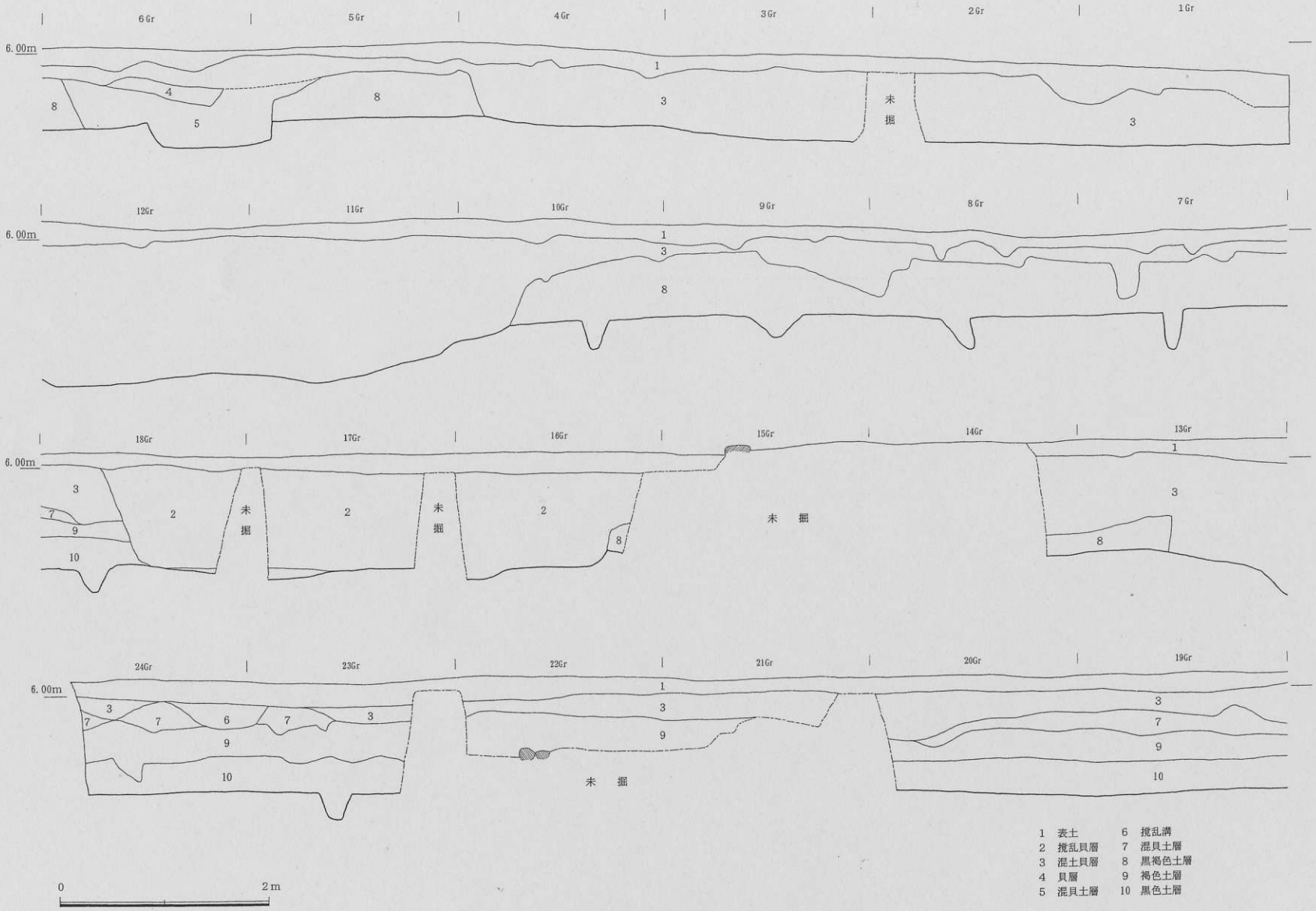
Ａトレンチ21・22Gr褐色土層で轟式土器が出土。また、Ａトレンチ23・24Grの褐色土層（地表下約30～60cm）と黒色土層（地表下約60～80cm）でも轟式土器が出土。Ｃトレンチ１～３Grでは黒色土層で無文薄手の条痕の無い土器や、貝殻条痕文などの轟式系統の土器も出土。Ｃトレンチ14Grでは基盤層を掘り込んだ縄文時代晩期の住居跡とみられる遺構を検出。

Ｅトレンチ１・２Grでは純貝層上面まで掘り下げ。

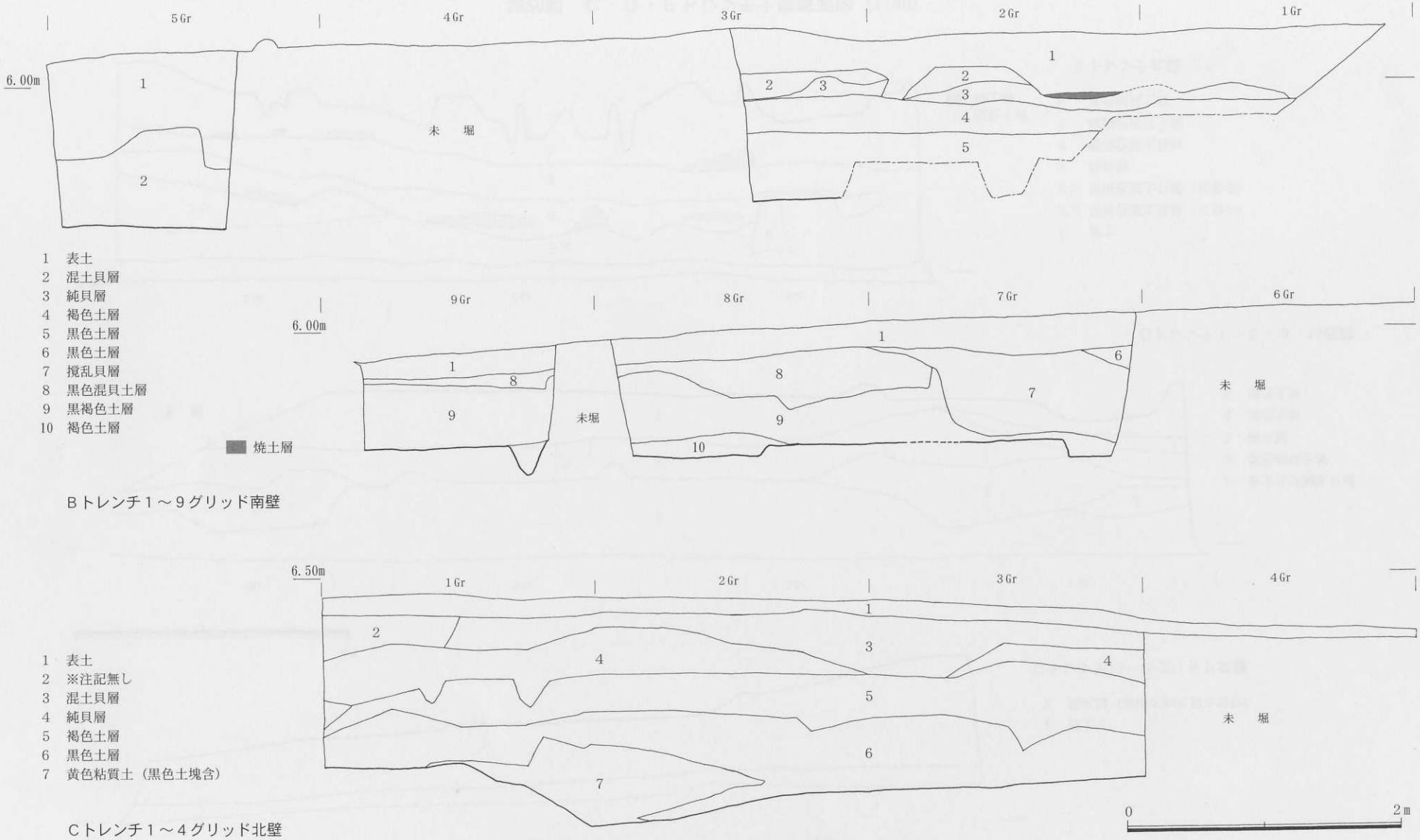
３月26日

Ａトレンチ19・20Grの地表下115cmで基盤層検出。同21・22Grの１号人骨取り上げ。Ａトレンチ23・24Grの混貝土層より近世の遺物、下層の褐色土層及び黒色土層より轟式土器が出土。

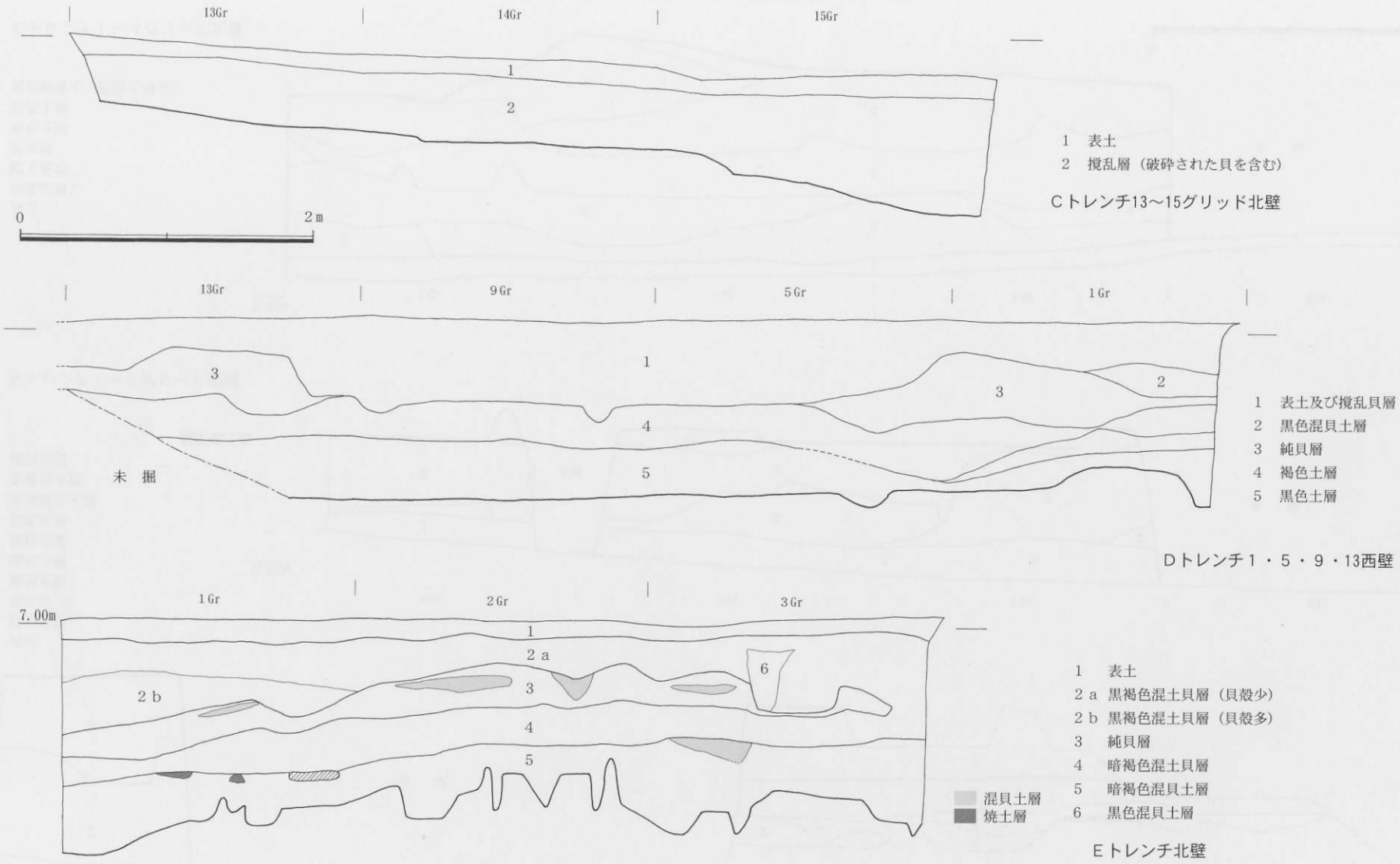
Ｃトレンチ２Grの黒色土層より内面に貝殻条痕がない土器が出土。同15a・15bGrでは、混貝土層と基盤層の中間に縄文晩期のプライマリーな層を確認したが、住居跡



第18図　Ａトレンチ西壁土層断面図（1／40）



第19図　B・Cトレンチ土層断面図（1／40）



第20図　C・D・Eトレンチ土層断面図（1/40）

壁面は未検出。

Ｄトレンチ５Grで釘やブリキ状片が出土しており、地表下50cmまでは撹乱か。Ｄトレンチ18Grの純貝層（マガキ主体）で阿高式土器が出土。

Ｅトレンチ１Grの純貝層は市来式土器や北久根山式土器が主体をなす。Ｅトレンチ３Grの黒褐色混土貝層中（地表下約35cm）で中世の底部糸切り離しの土師質土器を伴う４号人骨を検出。

３月27日

Ａトレンチ21Grの混土貝層と褐色土層の境より２号土壙墓（２号人骨）、Ｂトレンチ７Grの褐色土層より７号土壙墓（７号人骨）検出。Ｄトレンチ19Grの褐色土層上面で炉跡？検出し、同22Grの褐色土層より轟式土器が出土。

Ｅトレンチ２Grの暗褐色混土貝層、暗褐色混貝土層より縄文後期の土器が出土。Ｅトレンチ３Grでは４～６号土壙墓（４号～６号人骨）検出。

３月28日

Ｄトレンチ９Grの褐色土層で貝殻条痕文土器、直下の黒色土層でも同様の土器が出土。また、同13Grの褐色土層や黒色土層で轟Ｂ・Ｃ式土器、同18Grの褐色土層より押型文土器や轟式土器、同22Grの褐色土層下部や黒色土層で轟式土器が出土。

Ｅトレンチ１・２Grは基盤層まで完掘。Ｅトレンチ３Grでは縄文後期の５号人骨、縄文後期の８号人骨を検出。

３月29日

Ｄトレンチ１Grで縄文時代の炉跡？検出（径約70cm、地表下約50cm）。また、純貝層内よりイノシシ骨、褐色土層より轟式土器が出土。

第５章　遺　　構

第１節　縄文時代の遺構

（１）土壙墓

Ａトレンチ２体、Ｂトレンチ２体、Ｅトレンチ３体の計７体の縄文時代の埋葬人骨が検出された。土壙墓のプランや埋葬状態など詳細がはっきりしないものもあるが、日誌の記述や人骨の略測図から判断して、土壙墓出土の人骨とみられる。

１号土壙墓（１号人骨）　Ａトレンチ21・22Gr褐色土層中で検出。主軸を南東－北西方向にとる楕円形の土壙墓である（付編１－３小片論文及び図版５参照）。頭部を東に向けた仰臥屈葬で、遺存状態は良好である。両腕に貝輪を装着しており、左腕がアカガイ製、右腕がベンケイガイ製である。また、直腸・結腸・大腸付近より黄褐色を呈する食物残渣（糞石）が検出された。観察の結果、30匹近いマイワシ・カタクチイワシ・ハゼなどの骨が含まれていた。

２号土壙墓（２号人骨）　Ａトレンチ21Gr混土貝層と褐色土層の間で検出された。土壙墓の形状は楕円形で、頭部をほぼ西に向けた仰臥屈葬の熟年女性人骨が埋葬されていた（図版６上段）。頸骨周辺でイモガイやアマオブネなどの巻貝製の玉が出土しており、おそらく首飾りであろう。

３号土壙墓（３号人骨）　Ｂトレンチ３Grで仰臥屈葬とみられる性別不明の老年人骨が検出された。頭位を北に向ける。土壙墓の形状は不明である。

５号土壙墓（５号人骨）　Ｅトレンチ３Grで検出された。中世の土壙墓（４号土壙墓、後述）の下部に位置し、年齢は10代前半とみられるが性別は不明である。埋葬方位は北西－南東方向で、頭部は北西側である。

６号土壙墓（６号人骨）　５号土壙墓と同じく４号土壙墓の下部で検出されたらしいが、詳細については不明である。

７号土壙墓（７号人骨）　Ｂトレンチ７Gr黒褐色土層で検出された楕円形を呈する土壙墓である。主軸は北－南方向で、頭部は北側にある。埋葬体位は横臥屈葬で、頭部を西側に向けている。

８号土壙墓（８号人骨）　Ｅトレンチ３Grの５号人骨直下において、頭部を北西に向けて左側を下にした横臥屈葬の老年女性とみられる人骨を検出した。埋土より出土した土器より縄文時代後期のものとみられる。

（２）住居跡

Ｃトレンチ15Grの撹乱層下部において、竪穴住居跡とみられる遺構を検出した。方形プランと推定されているが、撹乱によりごく一部を確認したにすぎない。床面から御領式土器の深鉢や浅鉢が出土したと日誌に記載されていることから、縄文時代後期末頃のものであろう。

（３）配石遺構

Ｂトレンチ２Gr褐色土層中で検出された配石遺構である（図版３下段）。南北約1.3m，東西約1.1mの範囲に拳大から直径30cm前後の塊石が20点出土した。石材の種類や加工の有無については不明である。

第２節　中世の遺構

（１）土壙墓

Ｅトレンチ３Gr黒褐色混土貝層で検出された４号土壙墓である（図版７下段）。主軸を北西－南東方向にとり、頭部は北西側である。検出規模は長径1.2m、短径0.95m。埋葬体位は伏臥屈葬で、頭部を西に向けており、熟年女性とみられる。胸部と左肘近くに土師質土器の皿が４個副葬されている。

（２）横堀跡

Ａトレンチ10～13Grで検出された中世の横堀跡である。検出規模は土層断面図より判断すれば、幅約4.8m、底幅約3.9m、深さ約1.2mで、中世居館の周囲に配置されたものであろう。日誌や実測図など詳細な記録がないため、時期について言及することは難しいが、埋土より出土した中国製青磁などから中世後半の造作と推定される。

第６章　縄文時代の遺物

第１節　出土遺物の概要

本調査における出土遺物は木製コンテナ（10×40×60㎝）180箱、総数は小破片まで含めると約27,000点あまりにのぼる。縄文時代を中心とするが、弥生時代から中世までの遺物も比較的多く出土しており、その多くは土器である。縄文時代においては、早期から後期末までの幅広い時期の土器が出土しており、なかでも轟式や阿高式、鐘崎式、北久根山式など縄文時代前期から後期までの土器が大半を占める。これらについては、器面調整や施文技法、文様などにより本章第２節のとおりに分類した。

また、石器や骨角器、貝製品も豊富に出土している。石器は石鏃、石匙、削器、磨石・敲石、磨製石斧、石錘などで、骨角器は簪やヤス、貝製品はフネガイ科のアカガイやサルボウなど二枚貝の貝類遺体を利用した貝輪である。

以下では、これら出土遺物について出土層位ごとに記述するが、道路を隔てて対峙するＡ～Ｄトレンチとｅトレンチは、前述のとおり堆積土の様相や貝層の形成時期などが異なることから区別して報告する。なお、出土地点が不明な土器のなかには、残存状況が比較的良好なものも含まれているため、これについてもあわせて記述したい。

第２節　土器・土製品

（１）出土土器の分類

出土した縄文土器は大きくⅠ～Ⅶ類に分類され、このうちの多くで細分を行った（第21・22図）。以下では分類した土器群について概観し、さらに細かな特徴については出土層位ごとに掲載した個々の土器について具体的に論述することにしたい。

Ⅰ類　押型文系土器群

原体の円周に鋸歯状の三角波状文を彫刻し、山形押型文を回転施文したⅠａ類と、この山形押型文だけでなく、交差する格子目状の刻みを施した原体を回転施文した格子目押型文の２種の原体を用いたⅠｂ類に細分した。

Ⅱ類　貝殻文系土器群

貝殻条痕は施さず、口縁部外面に貝殻腹縁による連続する刺突文や押引文を施文して帯状の文様を構成するもので、その下位に沈線文などの文様を施すものもある。口縁部がまっすぐに上方にのびるⅡａ類と、口縁部がラッパ状に開くⅡｂ類に分けられる。塞ノ神式土器に相当する。

Ⅲ類　轟式系土器群

深鉢形を呈し、地文にハイガイなどのフネガイ科の貝殻腹縁を用いた貝殻条痕を施すものや、その系譜上に位置づけられる土器群。これらは施文技法や文様などからⅢａ～Ⅲｇ類に分けられ、さらに細分できる。

Ⅲａ類：内外の器壁に強い条痕を施す。貝殻腹縁で斜めや横方向などの不定方向の条痕を施すⅢａ１類と、綾杉状や曲線状の文様、一定方向の規則的な条痕を施すⅢａ２類に分けられる。また、胎土にやや大きめの砂粒混じり、他のⅢ類の土器にくらべてやや器壁が厚い。轟Ａ式土器に相当する。

Ⅲｂ類：器外面に隆起帯文が施されるもの。隆起帯文の太さや施文技法より細分が可能である。本調査で出土したⅢｂ類は器形を考慮した分類は困難であるため、以下では隆起帯文に着目して分類した。

Ⅲｂ１類：横位や縦位、斜位の微隆起帯文を器外面に多数貼り付けるもの。

Ⅲｂ２類：口縁端部に近い部分に、やや高く突出する隆起帯文を一ないし二条並行にめぐらせるもの。貝殻腹縁による横・縦位、曲線状の強い貝殻条痕を伴うものが多い。

Ⅲｂ３類：口縁部を中心に隆起帯文を数条貼り付けるもの。

Ⅲｂ４類：口縁部を中心に微隆起帯文を数条貼り付けるもの。

Ⅲｂ５類：隆起帯文上に刻み目や刺突文を施すもの。

Ⅲｂ６類：粘土貼り付け手法を用いず、器表面の摘み上げで微隆起帯文を施文するもの。

いわゆる轟Ｂ式土器に相当するが、Ⅲｂ１類はアカホヤ火山灰層以下より出土する微隆起帯文土器の可能性がある。

Ⅲｃ類：地文の浅い貝殻条痕が残り、波状文を主体とする文様を施す。その他に直線文が施されるものもある。二本単位のヘラ状工具で施文するものが多い。震幅が比較的大きなⅢｃ１類と、震幅が小さいⅢｃ２類に分けられる。轟Ｃ式土器に相当する。

Ⅲｄ類：平口縁と山形口縁のものがあり、外面や口縁部内面に短直線文や二本単位の波状沈線、列点文などの文様をもつもので、文様状の条痕を施すものが多い。地文の浅い条痕が残るものと条痕の痕跡がないものがある。次のとおり細分が可能である。

Ⅲｄ１類：列点文を施さず、外面や口縁部内面に短直線や波状沈線を施す。これらの沈線は二本単位のものが多い。

Ⅲｄ２類：Ⅲｄ１類のような細めのヘラ状施文具を用いず、幅広の施文具でやや浅めの沈線ないし条痕状の沈線を施すもの。

Ⅲｄ３類：沈線は施されず、列点文だけの文様構成のもの。

本類は轟Ｄ式土器に該当する。

Ⅲｅ類：隆起帯文と沈線を組み合わせたⅢｅ１類や、隆起帯文がなく直線と弧状の細い沈線を組み合わせたⅢｅ２類がある。器形は丸底で砲弾形を呈し、器壁は総じて薄い。野口式土器に相当する。

Ⅲｆ類：外面全面に列点文や縦列横線文、菱形文などが組み合わされ、幾何学的な文様が施される。胎土中に滑石を含むものがある。曽畑式土器に相当する。

Ⅲｇ類：外面や口縁部内面にフネガイ科貝類の貝殻腹縁を利用して、押引文を帯状に施文するものや、これに細い粘土紐を貼り付けるものである。粘土紐を貼り付けるものをⅢｇ１類、貼り付けないものをⅢｇ２類とする。尾田式土器に相当する。

Ⅳ類　阿高式系土器群

外面に凹線文を主体とする文様を施す土器群。沈線文を施すものもあるが、これは凹線文から沈線文へと変化した土器群で、系譜的に連なるものである。また、Ⅲｆ類と同様に胎土中に多量の滑石を混入するものもある。Ⅳａ～Ⅳｄ類に分類できる。

Ⅳａ類：凹線文間に押引文を加えた文様を主体とし、胎土に滑石を混入する。並木式土器に相当する。

Ⅳｂ類：平底の深鉢形の器形を呈し、口縁部を中心に凹線文や凹点文を施す。文様の種類には縦・横・

斜位の直線文や入組文、渦巻文などがあり、口唇部に凹点文を施すことで、口縁部が波状を呈するものが多い。胎土中に滑石を混入するものもある。阿高式土器に相当し、文様帯の幅から以下のように細分できる。

Ⅳｂ１類：文様帯が口縁部から胴部上位にまで施され、凹点や横位の凹線文で文様帯と無文部が明確に区別される。縦・横位、斜位の直線文や入組文などが施される。口縁部は肥厚しない。

Ⅳｂ２類：文様帯が口縁部に限られ、胴部にくらべて口縁部が肥厚するもの。

Ⅳｃ類：口縁部に細めの凹線文や太めのヘラで施文する土器群で、逆Ｓ字形状文や縦・斜位の直線文などを施す。南福寺式土器に相当する。口縁部が肥厚しないⅣｃ１類と、肥厚するⅣｃ２類に細分できる。

Ⅳｄ類：深鉢形で口縁部文様帯にヘラ状の施文具を用い、直線的な短沈線文を主に施文する土器群である。出水式土器に相当する。

Ⅴ類　市来式系土器群

口縁部が突帯状に肥厚する貝殻条痕文系の土器群。本口縁部外面に短沈線や爪形文、貝殻文を施す。深鉢がほとんどで、口縁部は外反する。

Ⅴａ類：山形口縁のもの。口縁部に粘土帯を貼り付けるⅤａ１類と、粘土帯を貼り付けずに肥厚するⅤａ２類に分類できる。

Ⅴｂ類：平口縁のもの。口縁部に粘土帯を貼り付けるⅤｂ１類と、粘土帯を貼り付けずに肥厚するⅤｂ２類に分けられる。

Ⅵ類　磨消縄文系土器群

器面に縄文を施した後、一部を磨り消して文様を表現する磨消縄文の土器群である。Ⅵａ～Ⅵｄ類に分類した。

Ⅵａ類：口縁部が強く外反し、胴部から頸部を中心に左右対称に斜線や平行する沈線文を施文するとともに、沈線による渦巻文で胴部を飾る。文様帯は口縁部、頸部、胴部に区分される。器種には鉢や浅鉢がある。鐘崎式土器に相当する。

Ⅵｂ類：口縁部が外反し、胴部が丸く膨らみをもちながら平底の底部にいたる器形をなす。深鉢を主体とする。口縁部はやや肥厚し、その部分にW字状の貼付文や短直線文、疑似縄文などを施文する。北久根山式土器に相当する。

Ⅵｃ類：３本の沈線によって区画された細い帯部に縄文が残る。福田Ｋ２式土器に相当する。

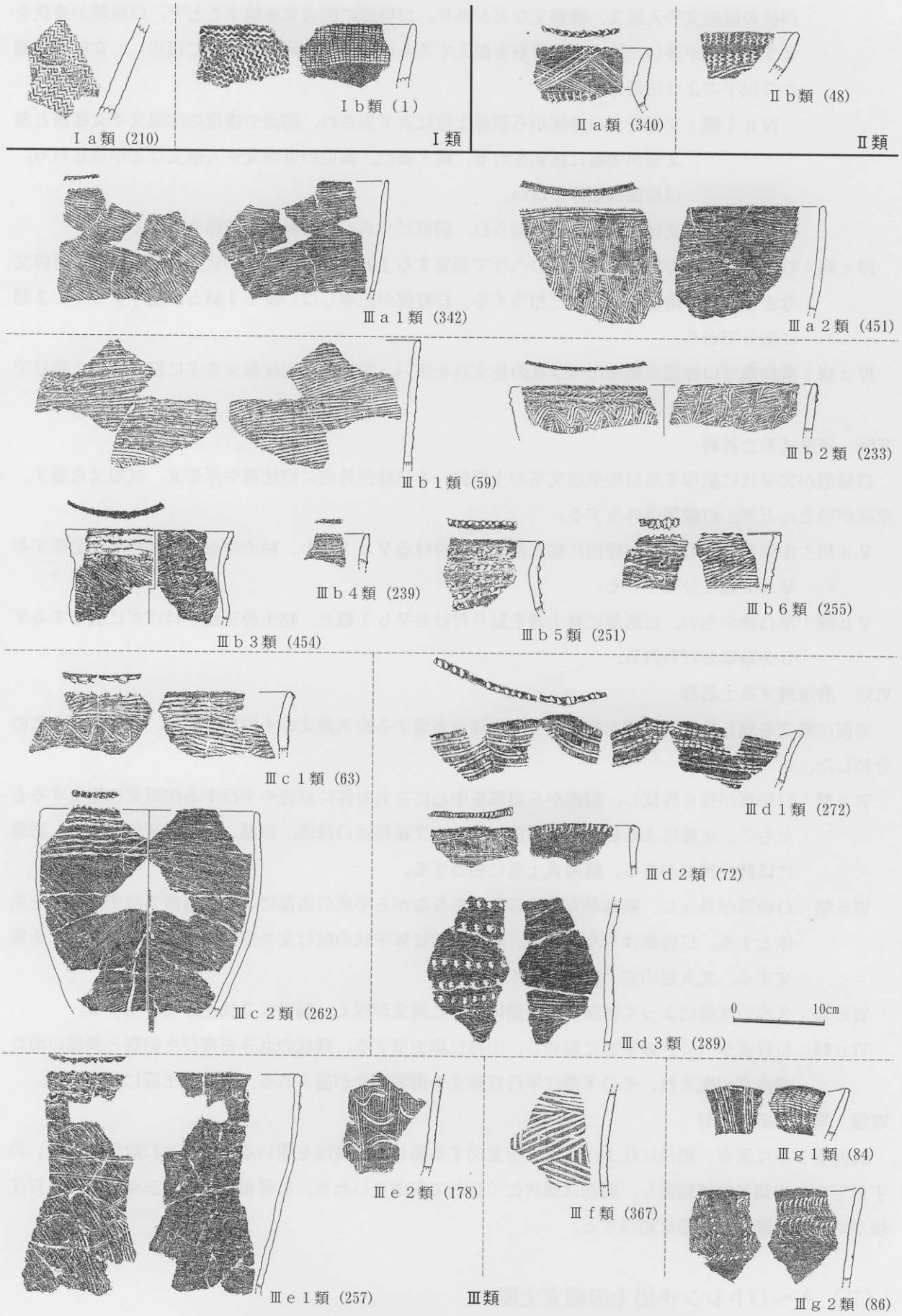
Ⅵｄ類：口縁部が「く」の字形に屈曲し、山形口縁を呈する。球状の丸みを帯びた胴部と頸部の境に列点文が配され、その下部に平行直線文や磨消縄文が施される。西平式土器に相当する。

Ⅶ類　黒色磨研土器群

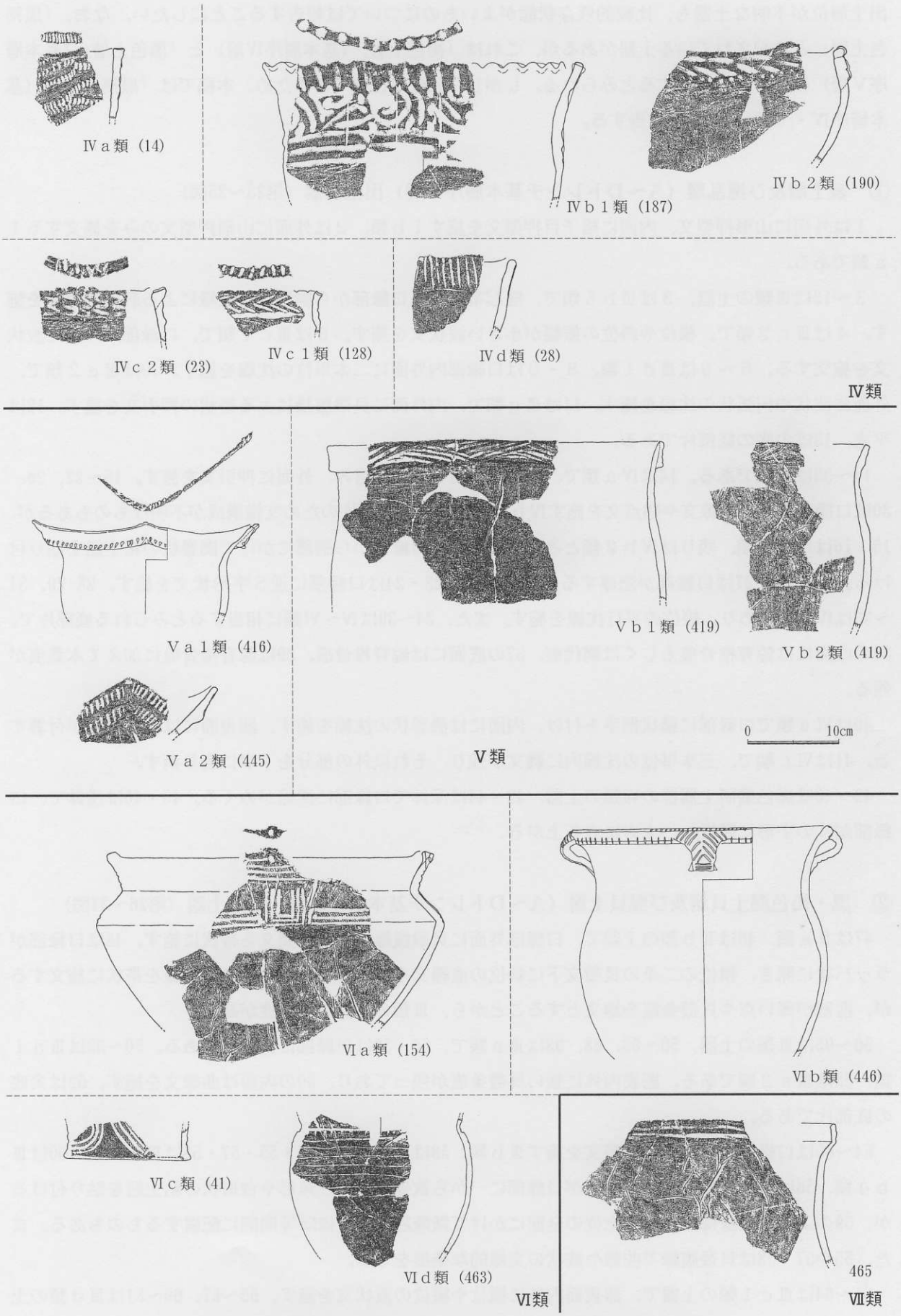
器面を丁寧に磨き、黒色に仕上げることを意図する黒色磨研技法を用いる土器群。口縁部が「く」の字形でやや内傾気味に屈曲し、頸部は弧状にくびれて胴部にいたる。口縁部に二から三条程度の平行沈線がめぐる。御領式土器に相当する。

（２）Ａ～Ｄトレンチ出土の縄文土器

基本層序Ⅰ～Ⅴ層に分け、出土した縄文土器の形態的特徴や施文手法などについて詳述する。また、



第21図　出土縄文土器分類図１（1/6、数字は遺物番号を示す）



第22図　出土縄文土器分類図２（1/6、数字は遺物番号を示す）

出土層位が不明な土器も、比較的残存状態がよいものについては報告することにしたい。なお、「黒褐色土層」と注記されている土器があるが、これは「褐色土層」（基本層序Ⅳ層）と「黒色土層」（基本層序Ⅴ層）のいずれかに属するとみられる。しかし、区分が困難であるため、本稿では「黒褐色土層（基本層序Ⅳ・Ⅴ層）」として報告する。

①　表土層及び撹乱層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅰ層）出土土器（第23～25図）

１は外面に山形押型文、内面に格子目押型文を施すⅠｂ類、２は外面に山形押型文のみを施文するⅠａ類である。

３～13はⅢ類の土器。３はⅢｂ５類で、隆起帯文上や口縁部から胴部に貝殻縁による刺突列点文を施す。４はⅢｃ２類で、横位や斜位の振幅が小さい波状文を施す。５はⅢｃ１類で、口縁部内外面に波状文を施文する。６～９はⅢｄ１類。８・９は口縁部内外面に二本単位の沈線を施す。10はⅢｅ２類で、外面に波状や円弧状の沈線を施す。11はⅢｇ類で、内外面に貝殻腹縁による帯状の押引文を施す。12は平底、13は尖底の底部片である。

14～33はⅣ類である。14はⅣａ類で、胎土に滑石を多量に含み、外面に押引文を施す。15～22、26、30は口縁部外面に凹線文や凹点文を施すⅣｂ類で、口縁部の破片のため文様構成が不明なものもあるが、15・16はⅣｂ１類、残りはⅣｂ２類とみられる。15は口縁部から胴部にかけて渦巻状の粘土紐を貼り付ける。23～25、27は口縁部が肥厚するⅣｃ２類で、23・24は口縁部に逆Ｓ字形状文を施す。28･29、31～33はⅣｄ類であり、縦位の平行沈線を施す。また、34～39はⅣ～Ⅵ類に相当するとみられる底部片で、34の底面には鯨脊椎骨痕もしくは網代痕、37の底面には鯨脊椎骨痕、39は鯨脊椎骨痕に加えて木葉痕が残る。

40はⅥａ類で口縁部に橋状把手を付け、内面には渦巻状の沈線を施す。器表面には赤色顔料が付着する。41はⅥｃ類で、三本単位の沈線内に縄文が残り、それ以外の部分を丁寧に磨り消す。

42～46は黒色磨研土器群のⅦ類の土器。42～44は深鉢で口縁部に沈線がめぐる。45・46は浅鉢で、口縁部がくの字形に屈折し、上方に立ち上がる。

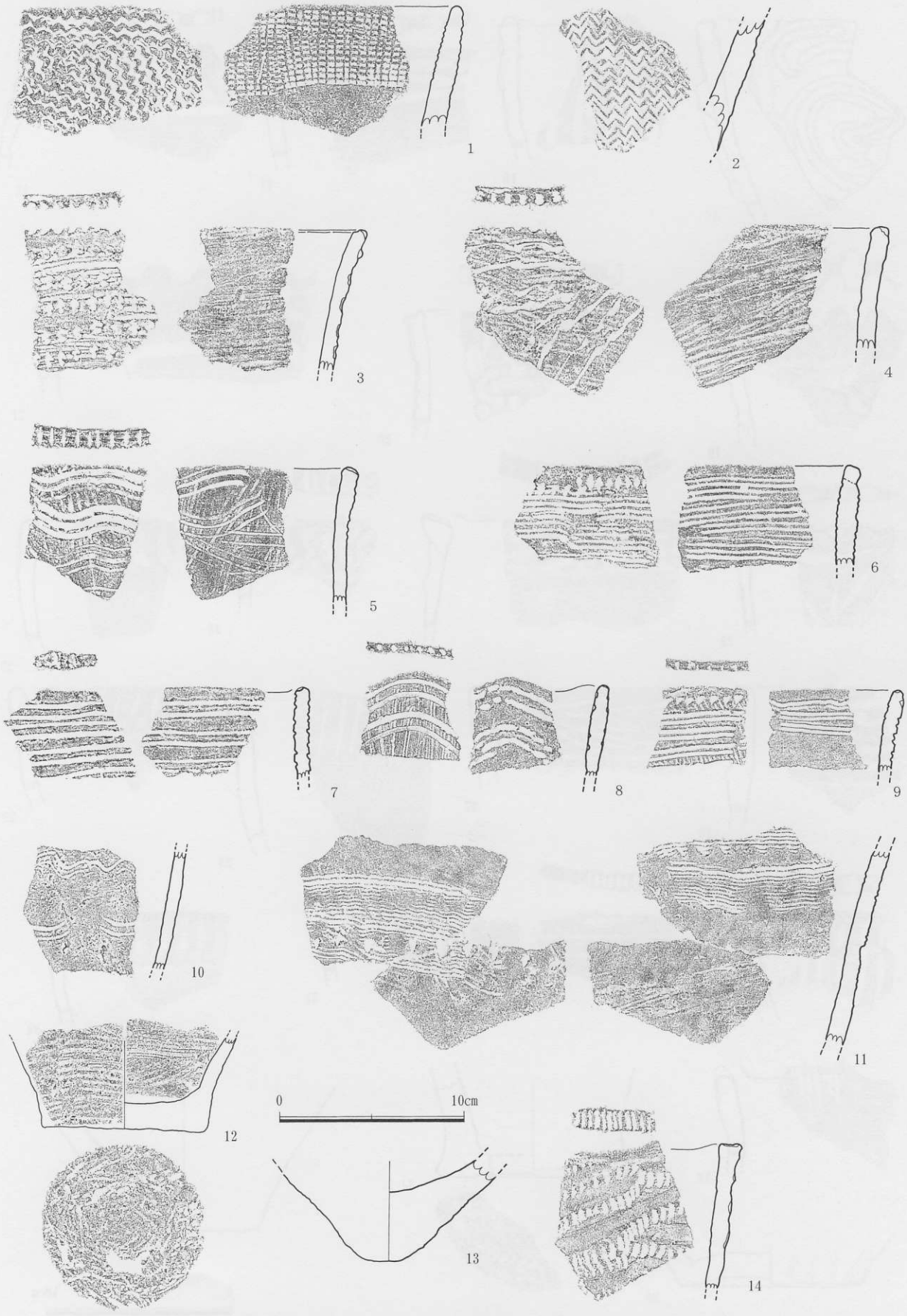
②　黒・褐色混土貝層及び混貝土層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅱ層）出土土器（第26～33図）

47はⅡａ類、48はⅡｂ類の土器で、口縁部外面に貝殻腹縁による刺突文を帯状に施す。48は口縁部がラッパ状に開き、横位の二条の貝殻文下に斜位の直線文を施す。49も外面に貝殻腹縁を帯状に施文するが、器壁が薄い点や貝殻条痕を地文とすることから、Ⅲ類の土器の可能性が高い。

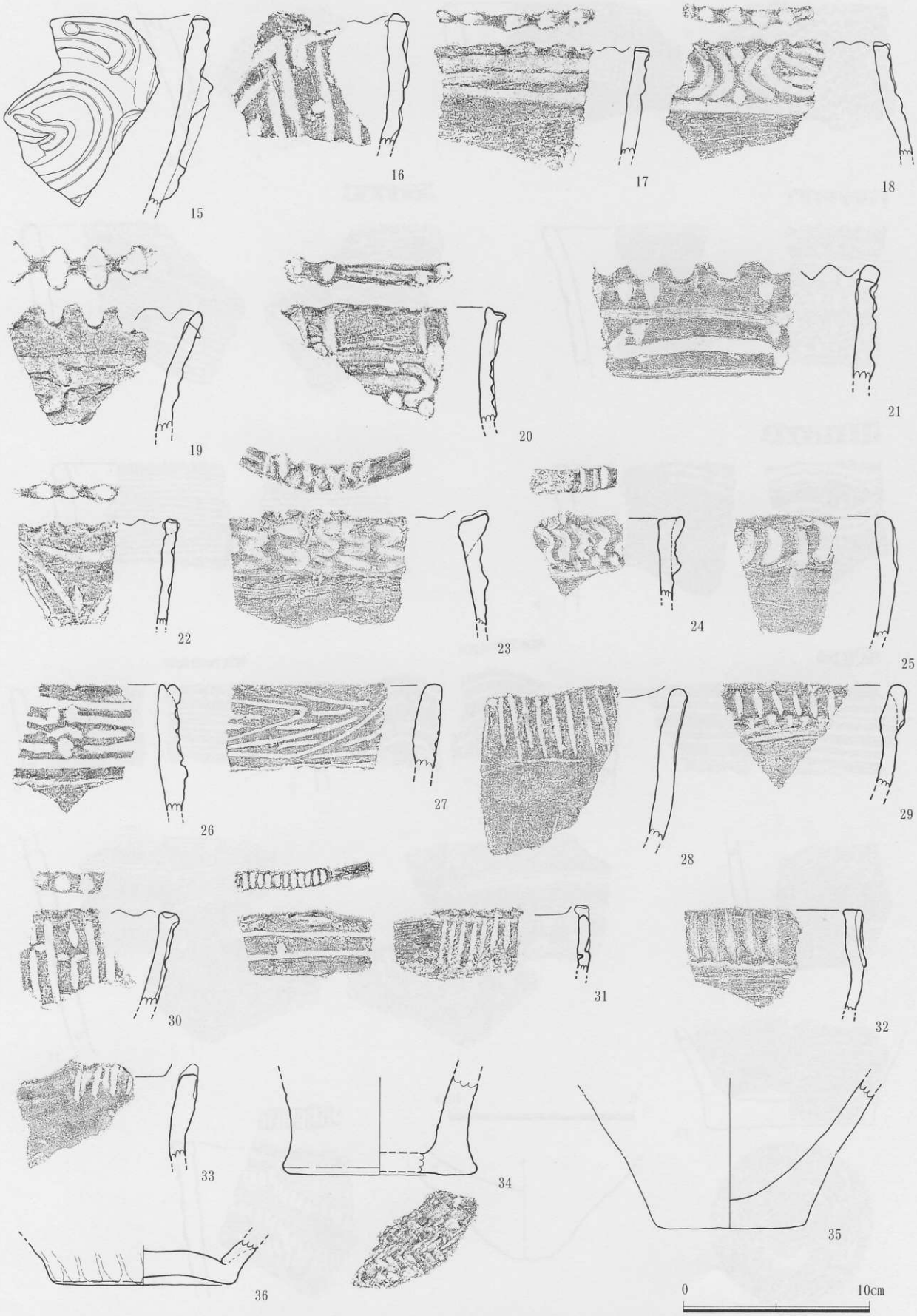
50～95はⅢ類の土器。50～53、68、93はⅢａ類で、50・53は口縁部に刻み目がある。50～53はⅢａ１類、68はⅢａ２類である。器表内外に強い貝殻条痕が残っており、50の内面は曲線文を施す。52は尖底の底部片である。

54～60は口縁部や胴部に隆起帯文を施すⅢｂ類。59はⅢｂ１類、54・55・57・58はⅢｂ２類、60はⅢｂ４類、56はⅢｂ６類である。多くが口縁部に一から数条の断面三角形や台形状の粘土紐を貼り付けるが、59のように口縁部から胴部上位の全面にかけて微隆起帯文をほぼ等間隔に配置するものもある。また、55や57・58は貝殻腹縁で曲線や波状の文様的な条痕をもつ。

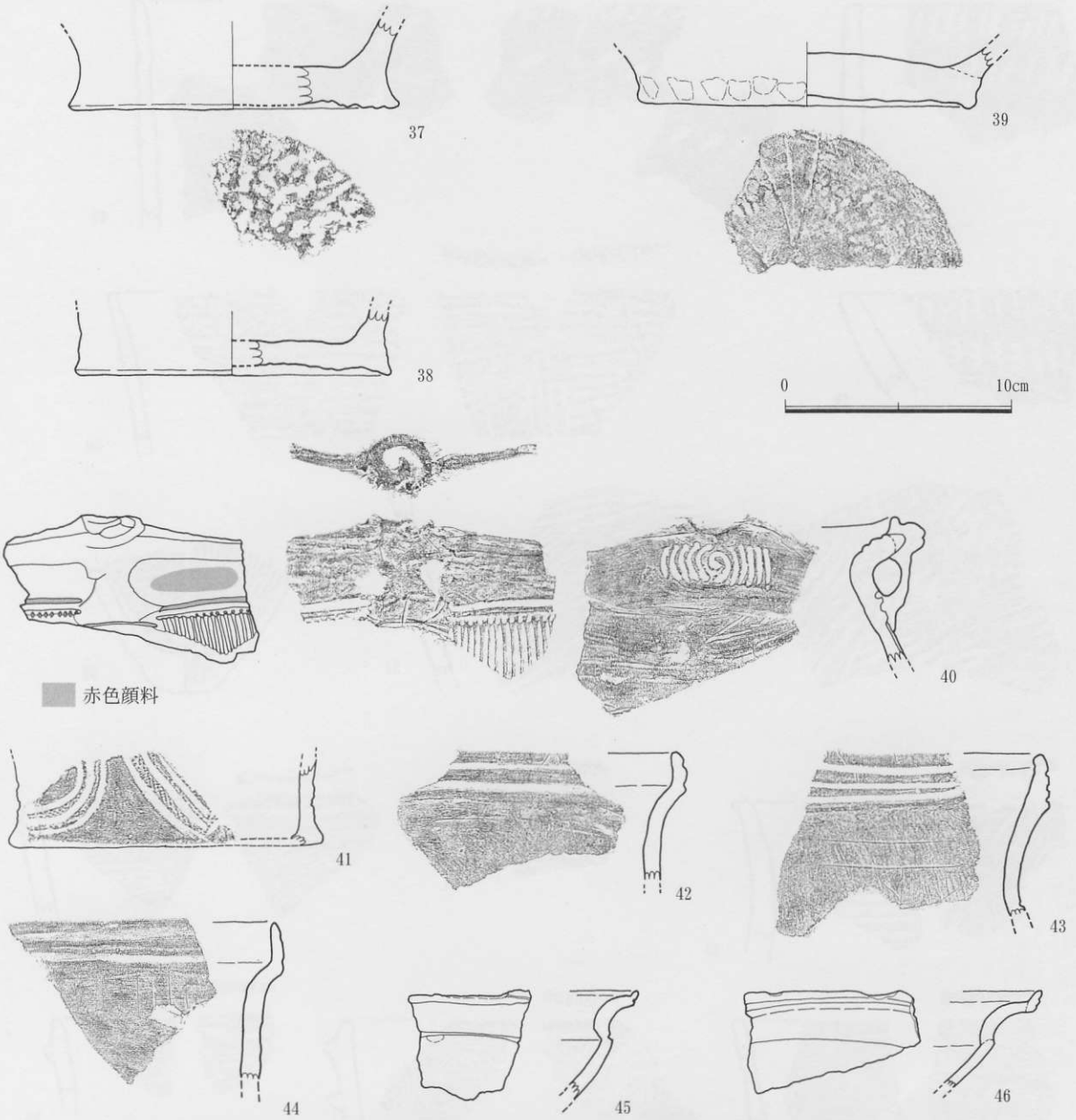
61～64はⅢｃ１類の土器で、器表面内外に横位や縦位の波状文を施す。65～67、69～81はⅢｄ類の土器で、71・74・75は山形口縁を呈する。また、67・70・78を除き口縁部に刻み目を有する。65・66・69・



第23図　表土層及び撹乱層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ｉ層）出土縄文土器１（１／３）



第24図　表土層及び撹乱層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅰ層）出土縄文土器２（１／３）

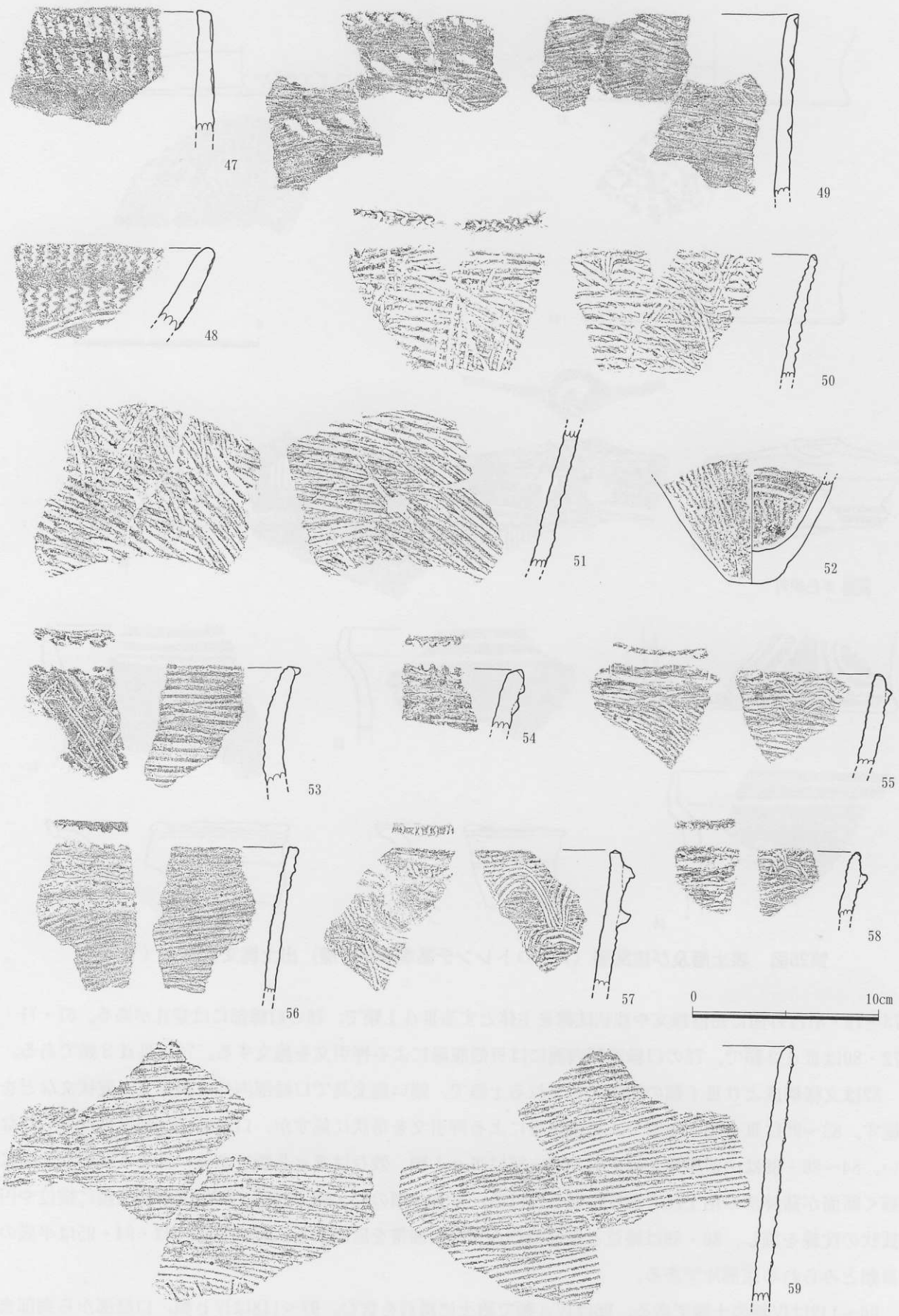


第25図　表土層及び撹乱層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅰ層）出土縄文土器３（１／３）

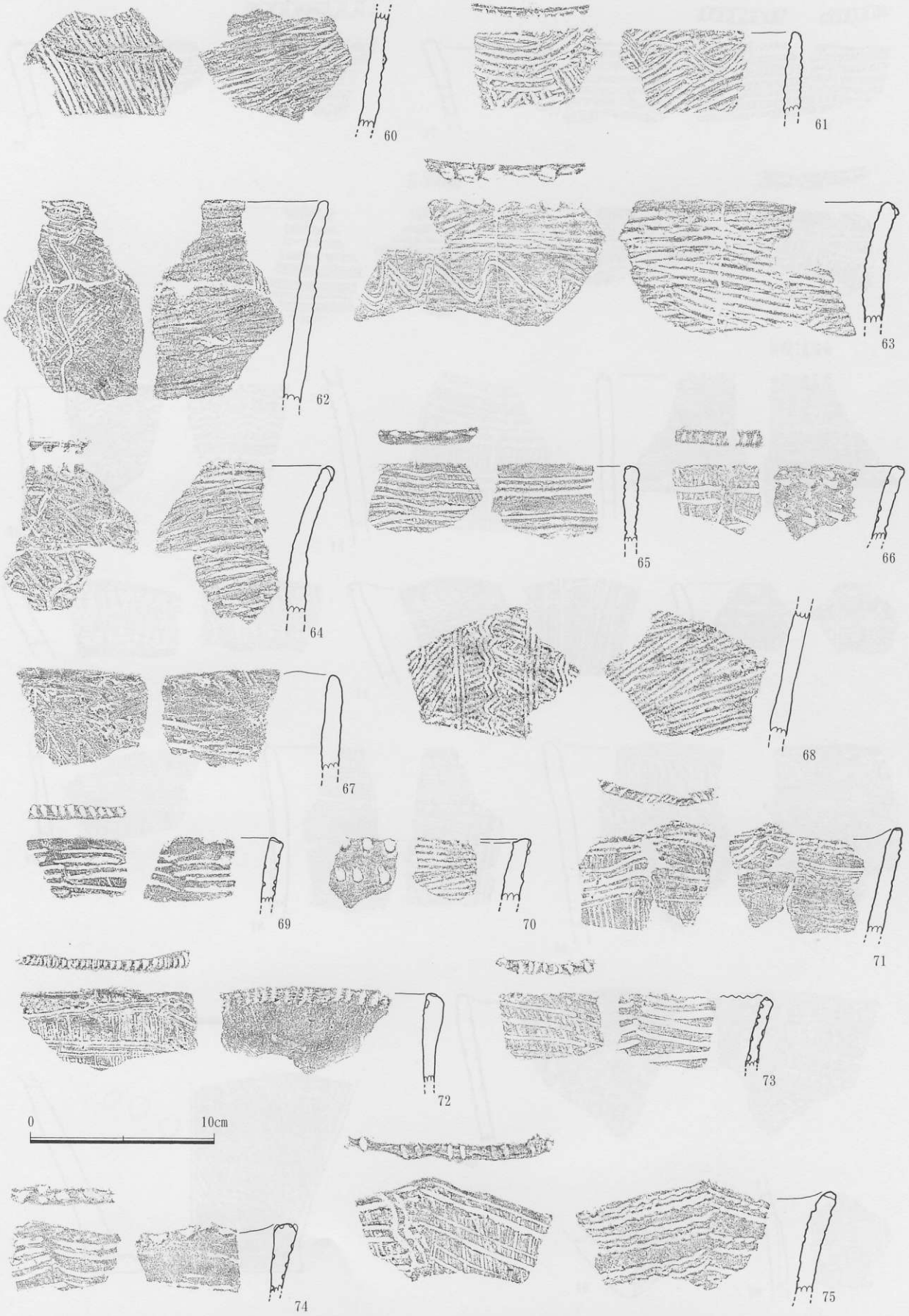
73～79・81は外面に短直線文や波状沈線を主体とするⅢｄ１類で、76の口縁部には穿孔がある。67・71・72・80はⅢｄ２類で、72の口縁端部内面には貝殻腹縁による押引文を施文する。70はⅢｄ３類である。

82は文様構成よりⅢｆ類の範疇に含まれる土器で、細い施文具で口縁部内外に刺突文、波状文などを施す。83～90はⅢｇ類の土器で、貝殻腹縁による押引文を帯状に施すが、口縁部には刻み目はみられない。84～86・89は山形口縁を呈する。84・87はⅢｇ１類、残りはⅢｇ２類である。Ⅲｇ１類の84・87は細く断面が蒲鉾形の粘土紐を縦位に貼り付ける。Ⅲｇ２類の83・88・90は、押引文の施文後に縦位や円弧状の沈線を施し、86・89は縦位と横位の列点文で文様帯を区画する。91は尖底、92・94・95は平底のⅢ類とみられる底部片である。

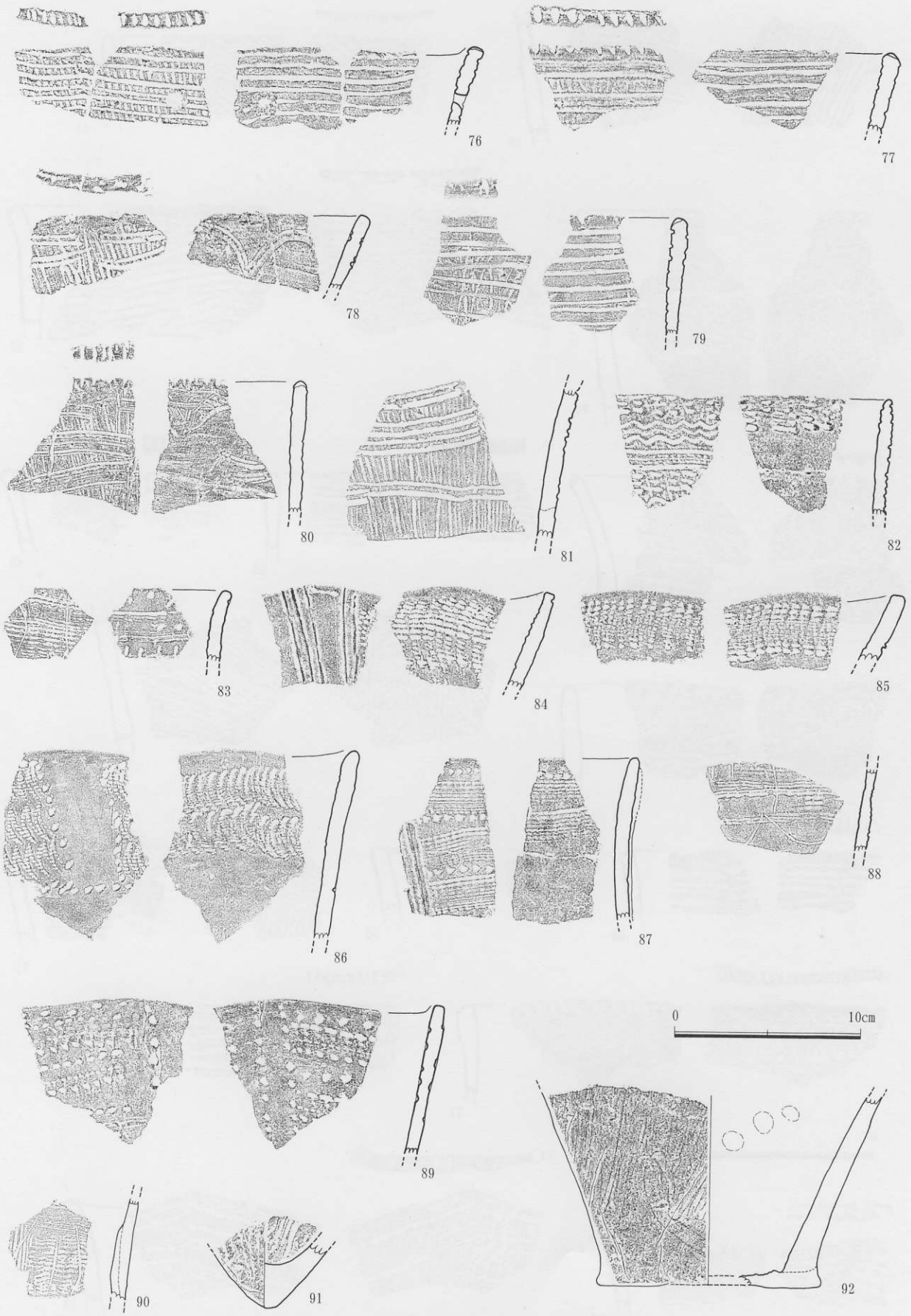
96～142はⅣ類の土器である。96はⅣａ類で胎土に滑石を含む。97～118はⅣｂ類。口縁部から胴部まで残存している資料は少ないが、縦方向に文様が展開するとみられる99や、幅広の文様帯の106・107・



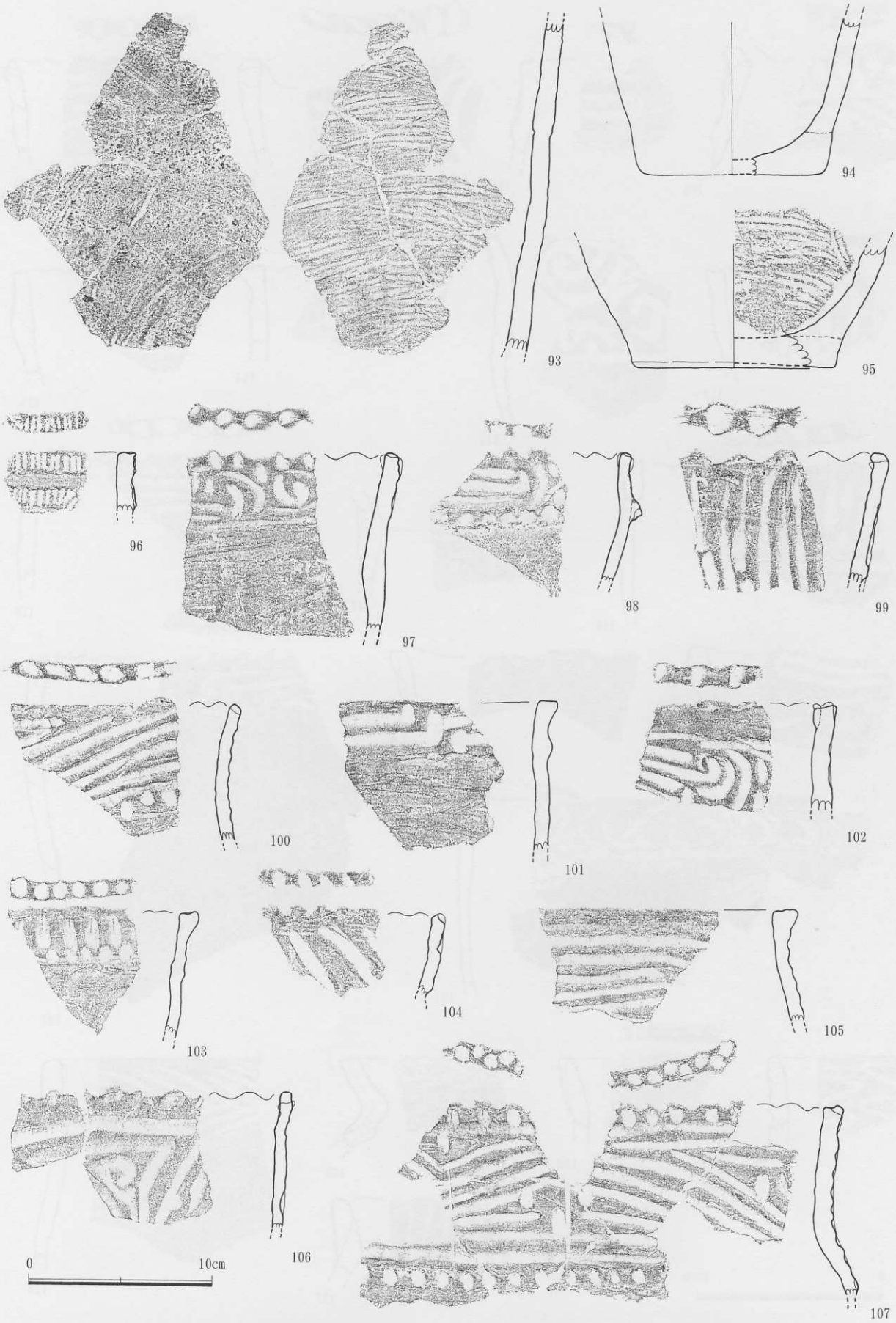
第26図　黒・褐色混土貝層及び混貝土層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅱ層）出土縄文土器１（１／３）



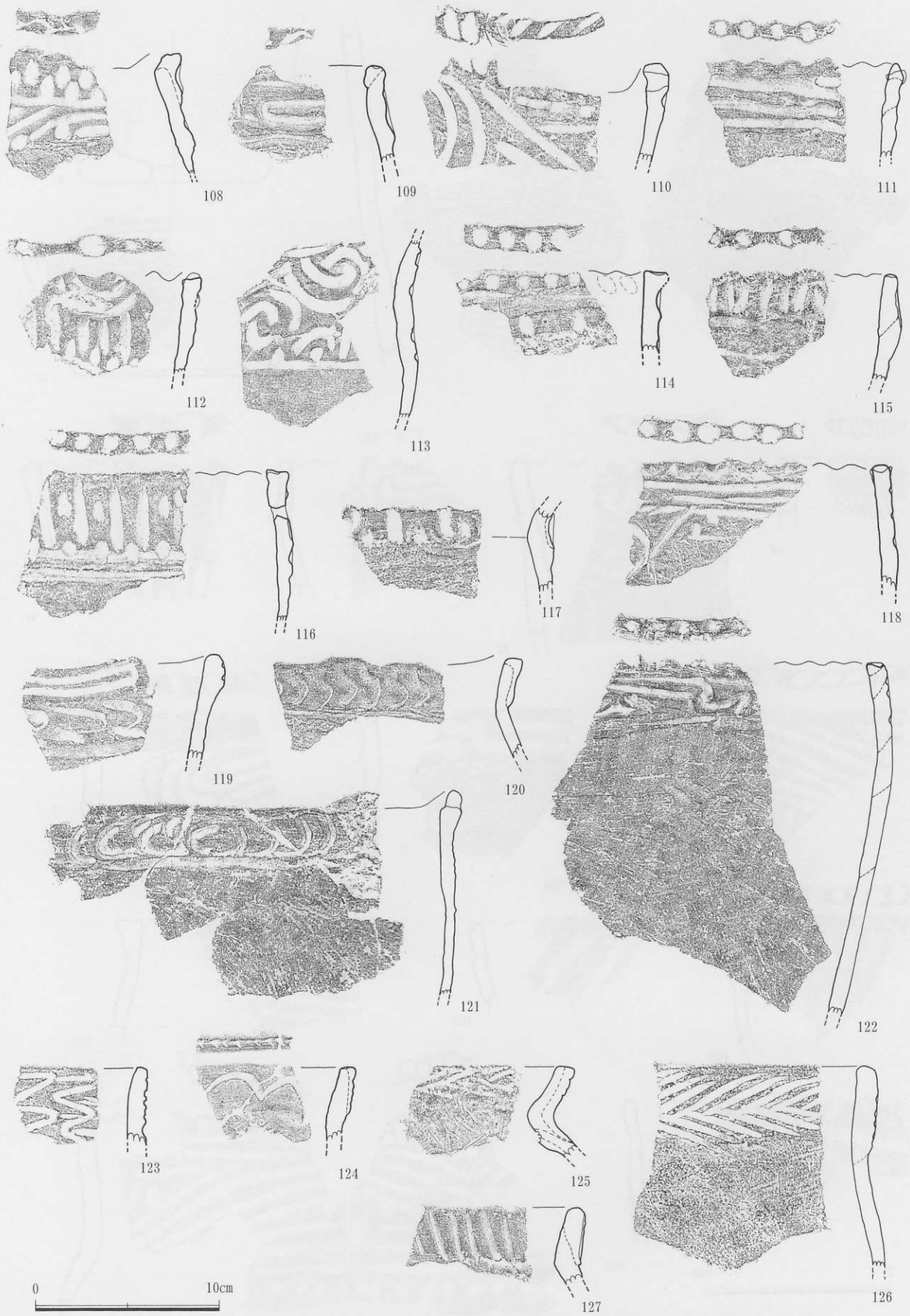
第27図　黒・褐色混土貝層及び混貝土層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅱ層）出土縄文土器２（１／３）



第28図　黒・褐色混土貝層及び混貝土層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅱ層）出土縄文土器３（１／３）



第29図　黒・褐色混土貝層及び混貝土層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅱ層）出土縄文土器４（１／３）



第30図　黒・褐色混土貝層及び混貝土層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅱ層）出土縄文土器５（１／３）

113を除き、総じて口縁部文様帯が狭く、文様が比較的簡略なものが多い。渦巻文を施す97・102のほか、凹点文によって区画された文様帯に縦位や横位、斜位に凹線文を施文する98・100・103・107・112・114・116・117などがある。Ⅳｂ１類は99・100・104～107・110・112・113、Ⅳｂ２類は97・98・101～103・108・109・111・114～118。

119～131はⅣｃ類。細めの凹線やヘラを用いて逆Ｓ字状文やそれに類する文様を口縁部に施す120・122・123、羽状文の125・126・128などがあり、122・125・128・129はⅣｃ１類、残りはⅣｃ２類である。132・133はⅣｄ類で、ヘラ描きの直線的な沈線でやや肥厚した口縁部に文様を描く。134～142はⅣ類に属するとみられる土器の底部片である。このうち、134・137・139の底面に鯨脊椎骨痕、136には縄状圧痕、140・141には木葉痕が残存する。

143～149はⅤ類の土器で、143・148を除き口縁部に粘土帯貼り付け手法が用いられる。148・149は山形口縁で、149は半裁竹管状の文様やヘラ状工具で曲線が施される。148がⅤａ２類、149がⅤａ１類。143～147は平口縁で、斜位や横位の沈線を施す。143はⅤｂ２類でそれ以外はⅤｂ１類である。

150～164はⅥ類の土器である。150～156・158は鉢もしくは浅鉢のⅥａ類で、口縁部は外側に大きく肥厚し、胴部には数条の平行する沈線文をめぐらせ、その間に縄文が残る。151は口縁部に橋状把手が付き、上部には渦巻文を施す。また、154・155は口縁部に穿孔がある。157・159～161はⅥｂ類で、159の口縁部にはW字状の粘土紐が貼り付けられ、160には赤色顔料が付着している。

③　純貝層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅲ層）出土土器（第34～37図）

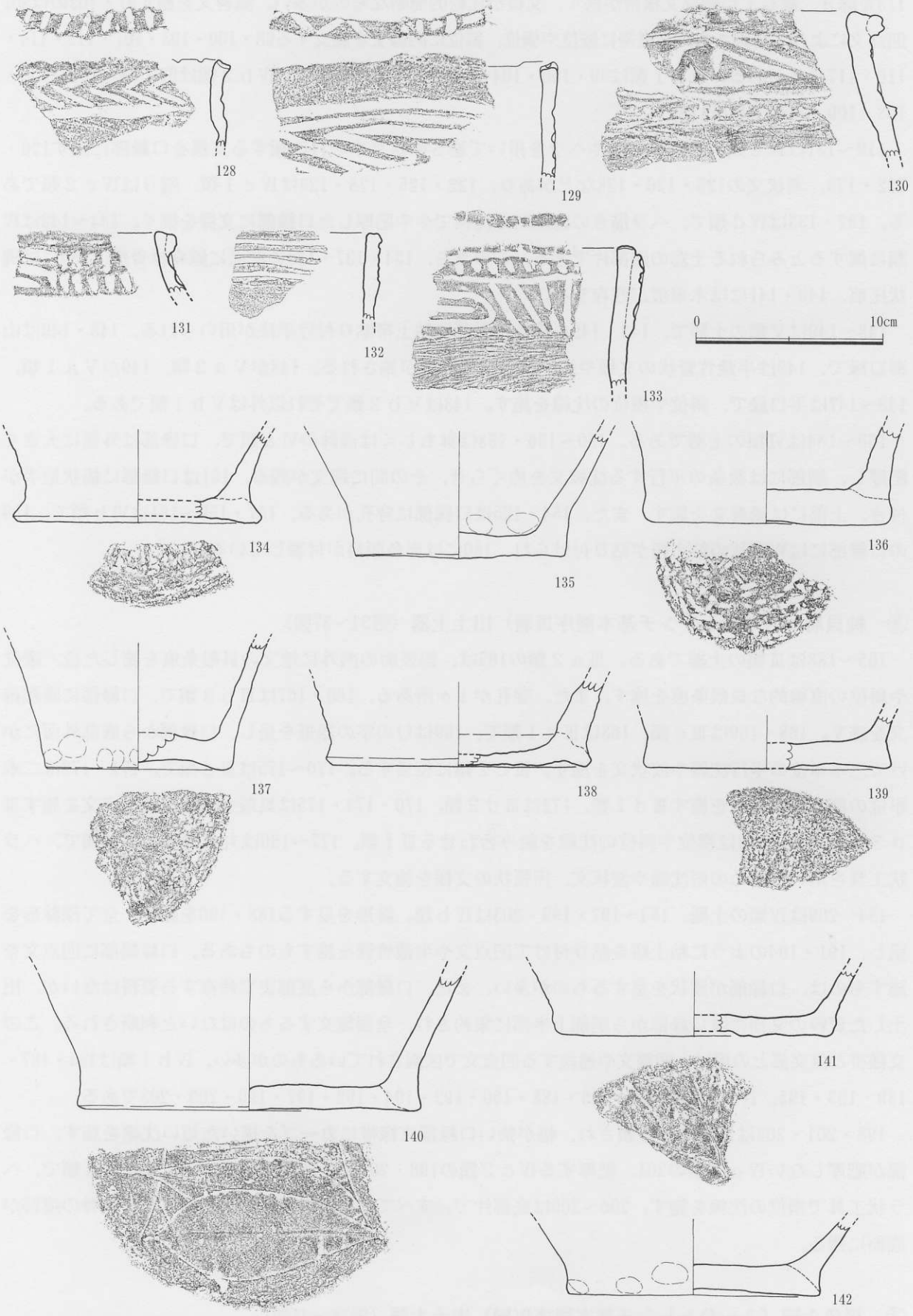
165～183はⅢ類の土器である。Ⅲａ２類の165は、器表面の内外に地文の貝殻条痕を施した後、縦位や斜位の直線的な貝殻条痕を施す。また、穿孔が１ヶ所ある。166・167はⅢｂ３類で、口縁部に隆起帯文を施す。168・169はⅢｃ類。168はⅢｃ１類で、169はUの字の器形を呈し、口縁部から底部外面にかけて三本単位の平行沈線や波状文を施す。Ⅲｃ２類に相当する。170～175はⅢｄ類で、171・172は二本単位の施文具で沈線を施すⅢｄ１類、172はⅢｄ２類、170・174・175は貝殻条痕の後に列点文を施すⅢｄ３類である。176は横位や斜位の沈線を組み合わせるⅢｆ類。177～180は丸底深鉢のⅢｅ類で、ヘラ状工具を用いて細めの短沈線や波状文、円弧状の文様を施文する。

184～209はⅣ類の土器。184～197・199・203はⅣｂ類。鉢形を呈する188・190を除き、全て深鉢形を呈し、191・194のように粘土紐を貼り付けて凹点文や半裁竹管を施すものもある。口縁端部に凹点文を施すものは、口縁部が波状を呈するものが多い。また、口縁部から底部まで残存する資料はないが、出土した資料の文様帯は口縁部から胴部上半部に集約され、全面施文するものはないと判断される。この文様帯と無文部との境は、凹線文や連続する凹点文で区画されているものが多い。Ⅳｂ１類は184・187・189・193・195、Ⅳｂ２類は185・186・188・190・192・194・196・197・199・200・203である。

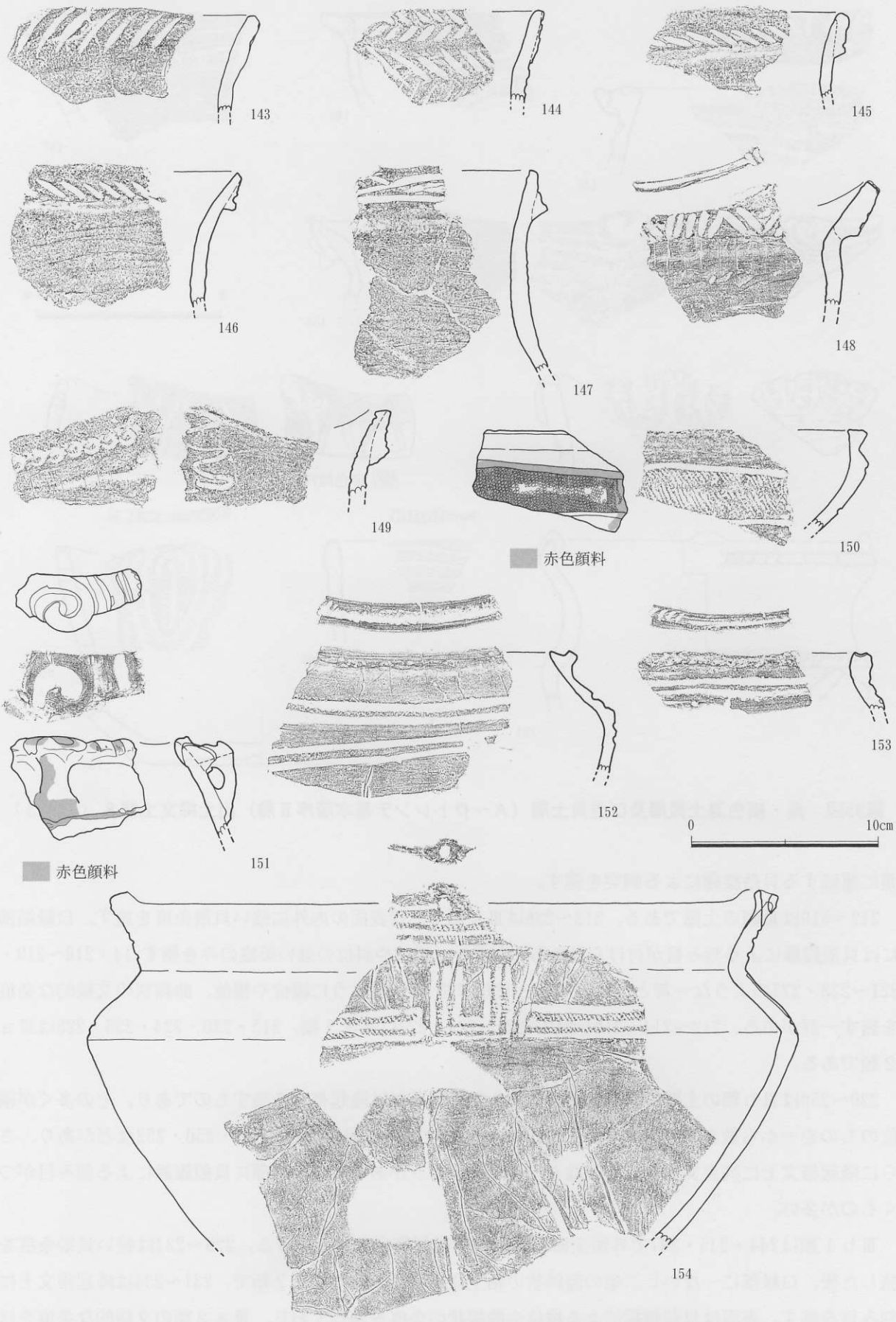
198・201・202はⅣｃ類に分類され、幅が狭い口縁部文様帯にカーブを描いた短い沈線を施す。口縁部が肥厚しないⅣｃ１類の201、肥厚するⅣｃ２類の198・202に分けられる。204・205はⅣｄ類で、ヘラ状工具で横位の沈線を施す。206～209は底部片で、すべて平底である。206・209は鯨脊椎骨の痕跡が底面に残る。

④　褐色土層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅳ層）出土土器（第38～47図）

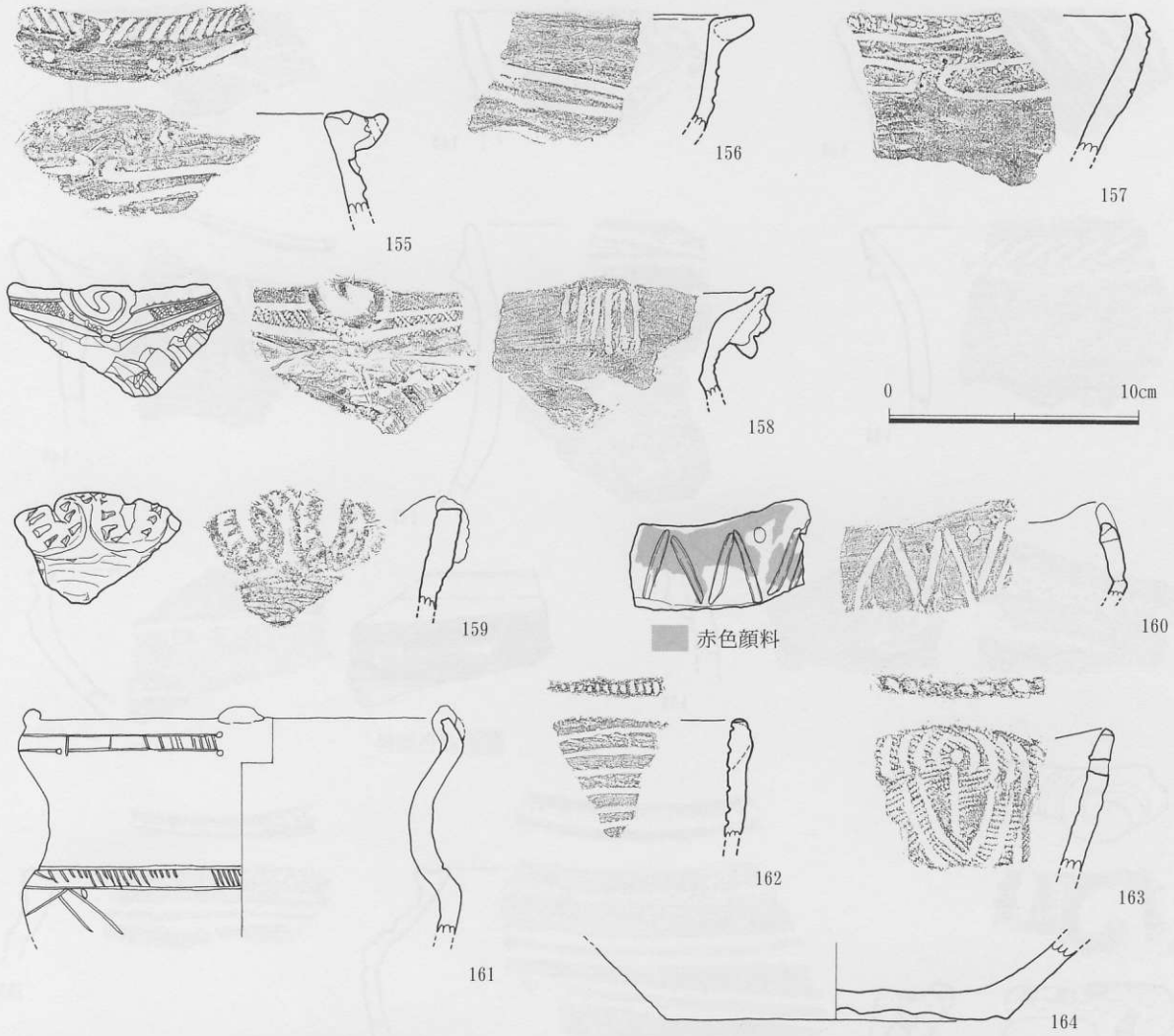
210はⅠａ類の土器で外面に山形押型文を施す。211はⅡｂ類の土器で、口縁部がラッパ状に開き、外



第31図　黒・褐色混土貝層及び混貝土層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅱ層）出土縄文土器６（１／３）



第32図　黒・褐色混土貝層及び混貝土層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅱ層）出土縄文土器７（１／３）



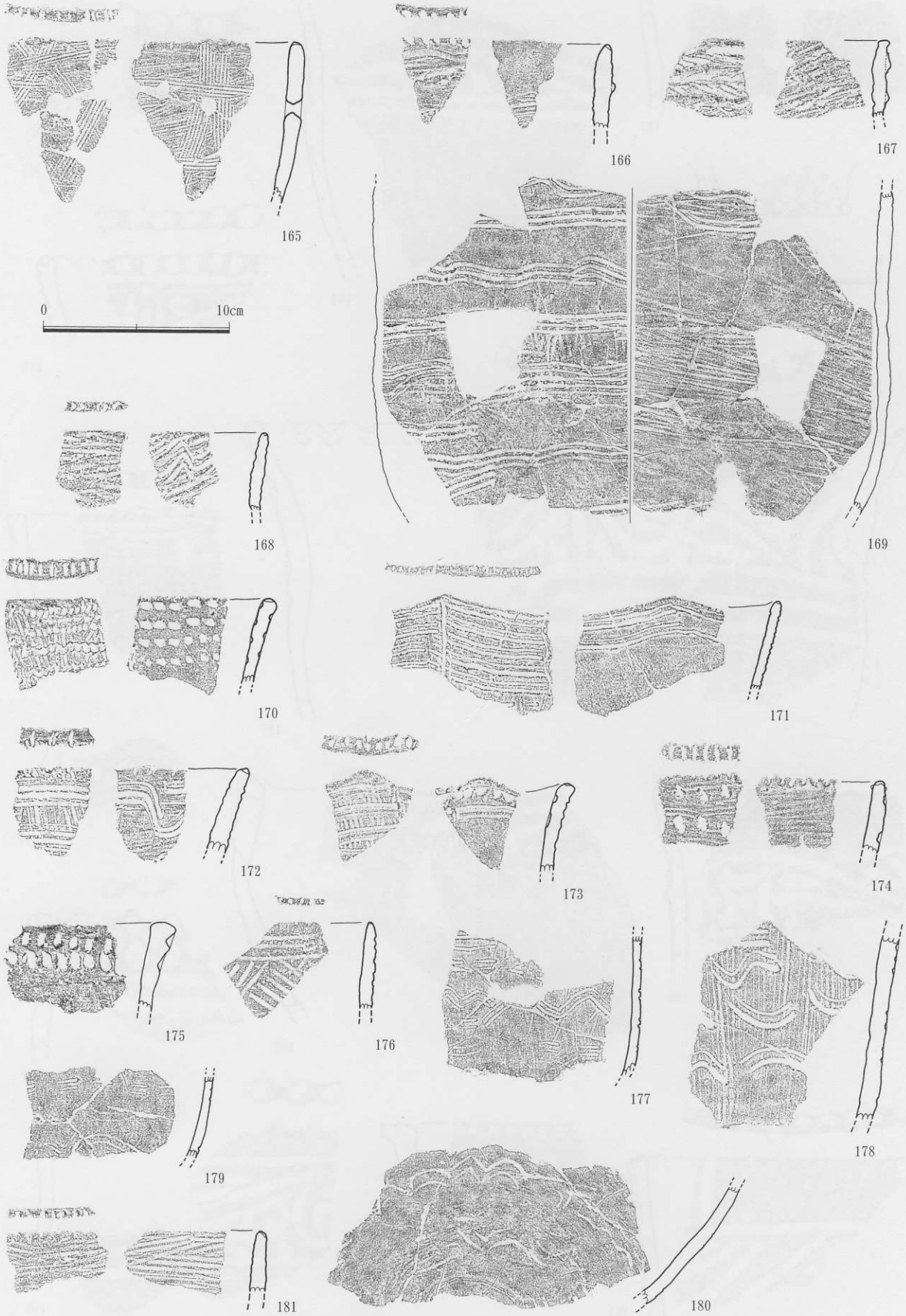
第33図　黒・褐色混土貝層及び混貝土層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅱ層）出土縄文土器８（１／３）

面に連続する貝殻腹縁による刺突を施す。

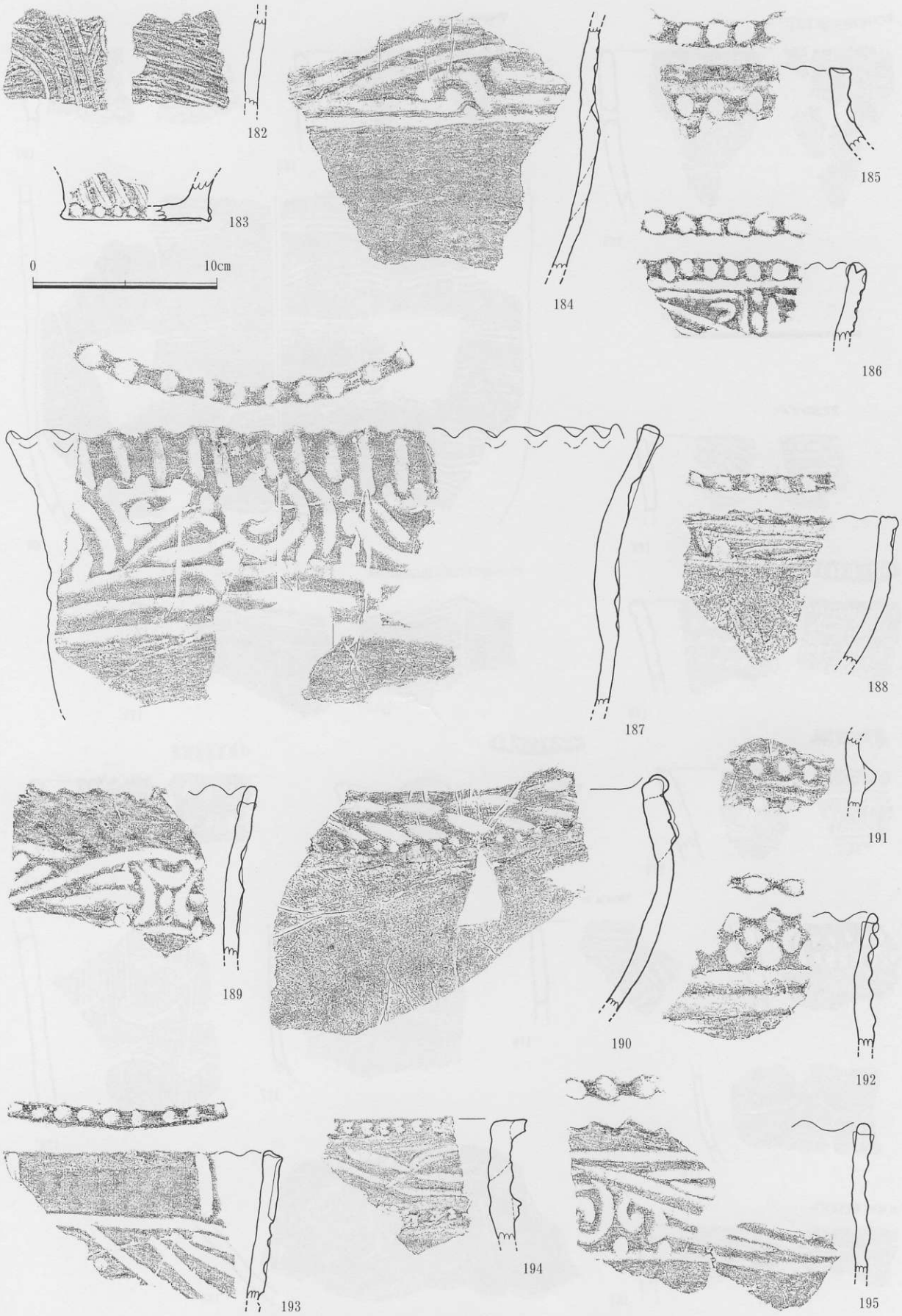
212～319はⅢ類の土器である。212～228はⅢａ類で、器表面の内外に強い貝殻条痕を施す。口縁端部には貝殻腹縁による刻み目が付けられたものが多い。横位や斜位の強い条痕のみを施す214・216～219・221～223・227のような一群と、215・220・224・225・228のように縦位や横位、曲線状の文様的な条痕を施す一群がある。212～214・216～219・221～223・227はⅢａ１類、215・220・224・225・228はⅢａ２類である。

229～256はⅢｂ類の土器である。器壁に粘土紐を貼り付け隆起帯文を施すものであり、その多くが横位のものを一から数条めぐらすが、斜位や縦位に貼り付ける244・245・247・250・252などがあり、さらに隆起帯文上に列点文を施すものなどバリエーションがある。口縁端部に貝殻腹縁による刻み目がつくものが多い。

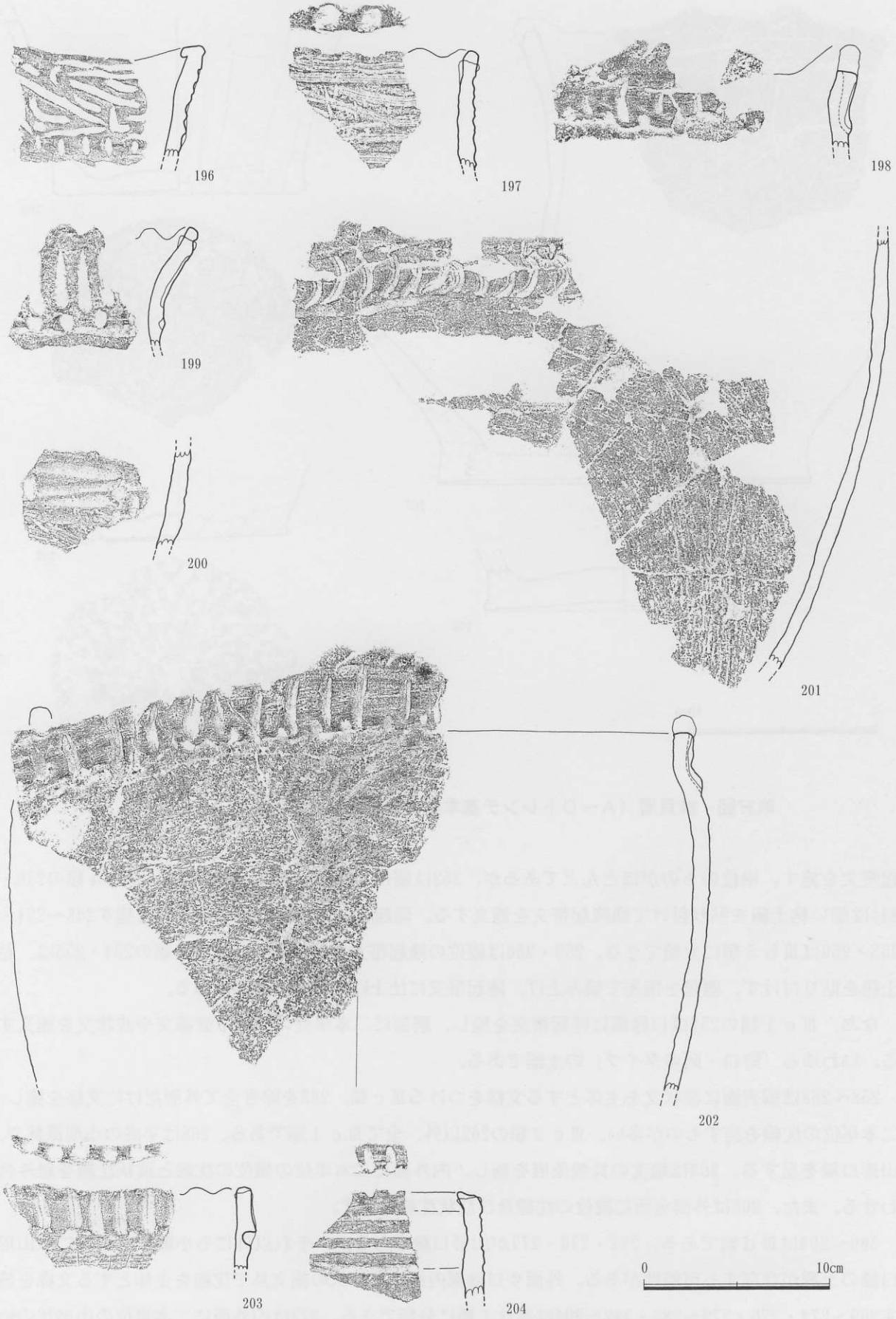
Ⅲｂ１類は244・245・247で外面全面に斜位の微隆起帯文を貼り付ける。229～234は強い貝殻条痕を施した後、口縁部に一ないし二条の蒲鉾状の粘土紐をめぐらせるⅢｂ２類で、231～234は隆起帯文上に刻み目を施す。表面は貝殻腹縁による縦位や曲線状の条痕を施しており、Ⅲａ２類の文様的な条痕をほどこすものと類似する。Ⅲｂ３類の235～238・240・242・243・246・252は口縁部から胴部にかけて隆



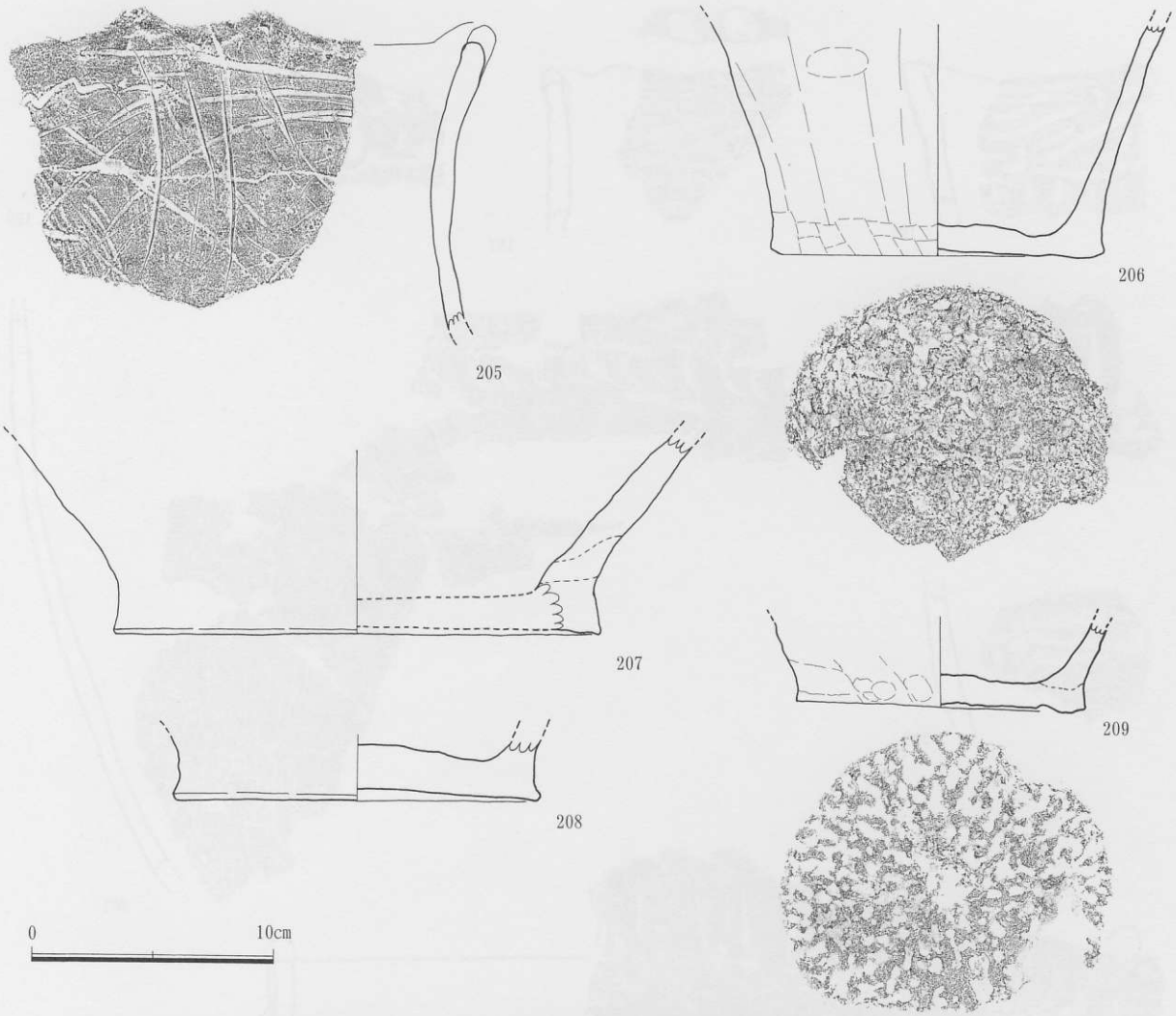
第34図　純貝層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅲ層）出土縄文土器１（１／３）



第35図　純貝層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅲ層）出土縄文土器２（１／３）



第36図　純貝層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅲ層）出土縄文土器３（１／３）



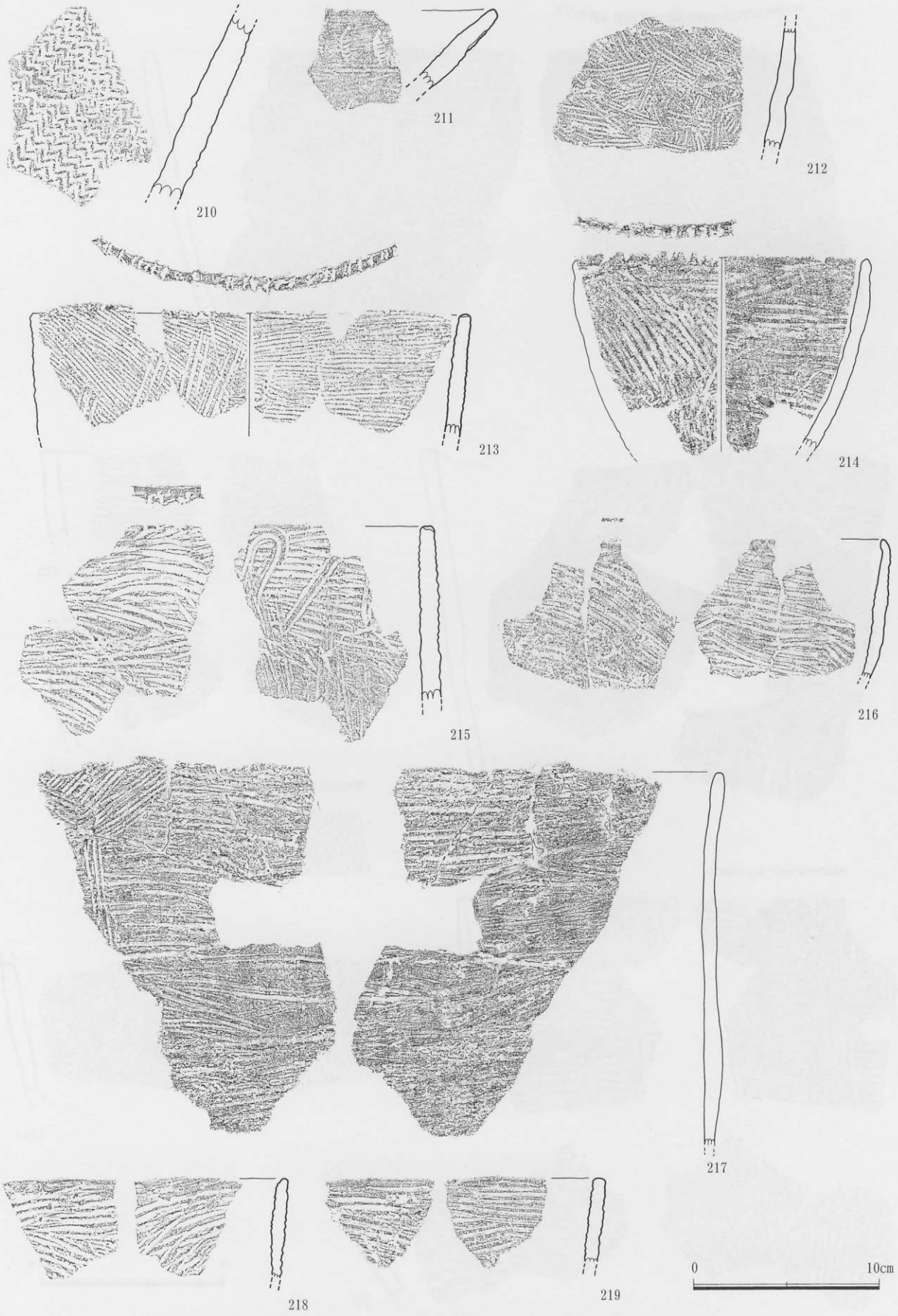
第37図　純貝層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅲ層）出土縄文土器４（１／３）

起帯文を施す。横位のものがほとんどであるが、252は縦位、246は曲線状を呈する。Ⅲｂ４類の239・241は細い粘土紐を貼り付けて微隆起帯文を施文する。隆起帯文上に刻み目や刺突文を施す248～251・253・256はⅢｂ５類に分類できる。250・256は縦位の隆起帯文を施文する。Ⅲｂ６類の254・255は、粘土紐を貼り付けず、器壁を指先で摘み上げ、隆起帯文に仕上げる手法のものである。

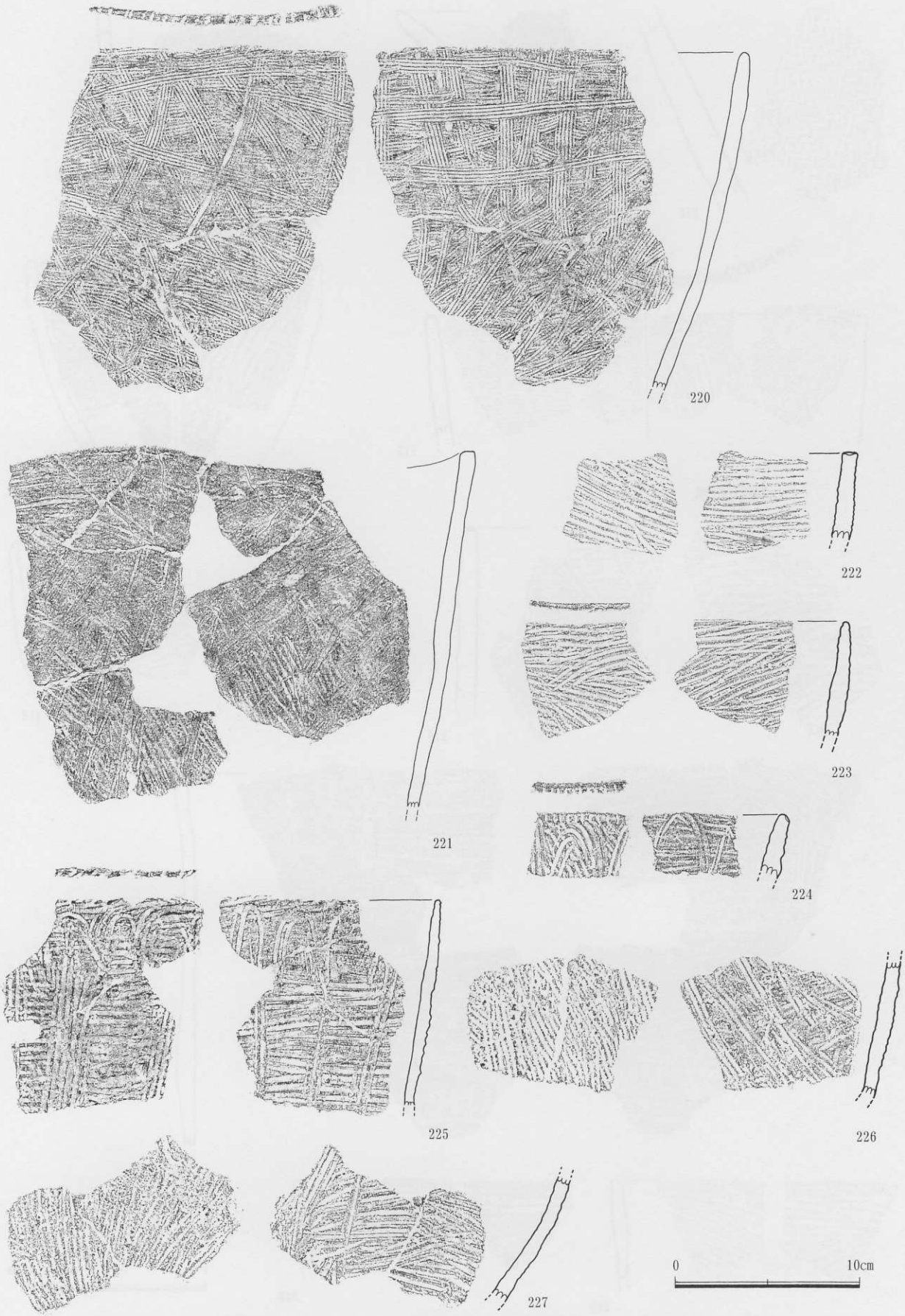
なお、Ⅲｅ１類の257は口縁部に隆起帯文を施し、胴部に二本単位の沈線で直線文や波状文を施文する。いわゆる「野口・阿多タイプ」の土器である。

258～268は器表面に波状文を主体とする文様をつけるⅢｃ類。263を除き全て外面だけに文様を施し、二本単位の沈線を施すものが多い。Ⅲｃ２類の262以外、全てⅢｃ１類である。258は平底の小型深鉢で、山形口縁を呈する。263は地文の貝殻条痕を施し、内外面に二本単位の横位の沈線と波状沈線を組み合わせる。また、265は外面全面に縦位の沈線及び波状沈線を施す。

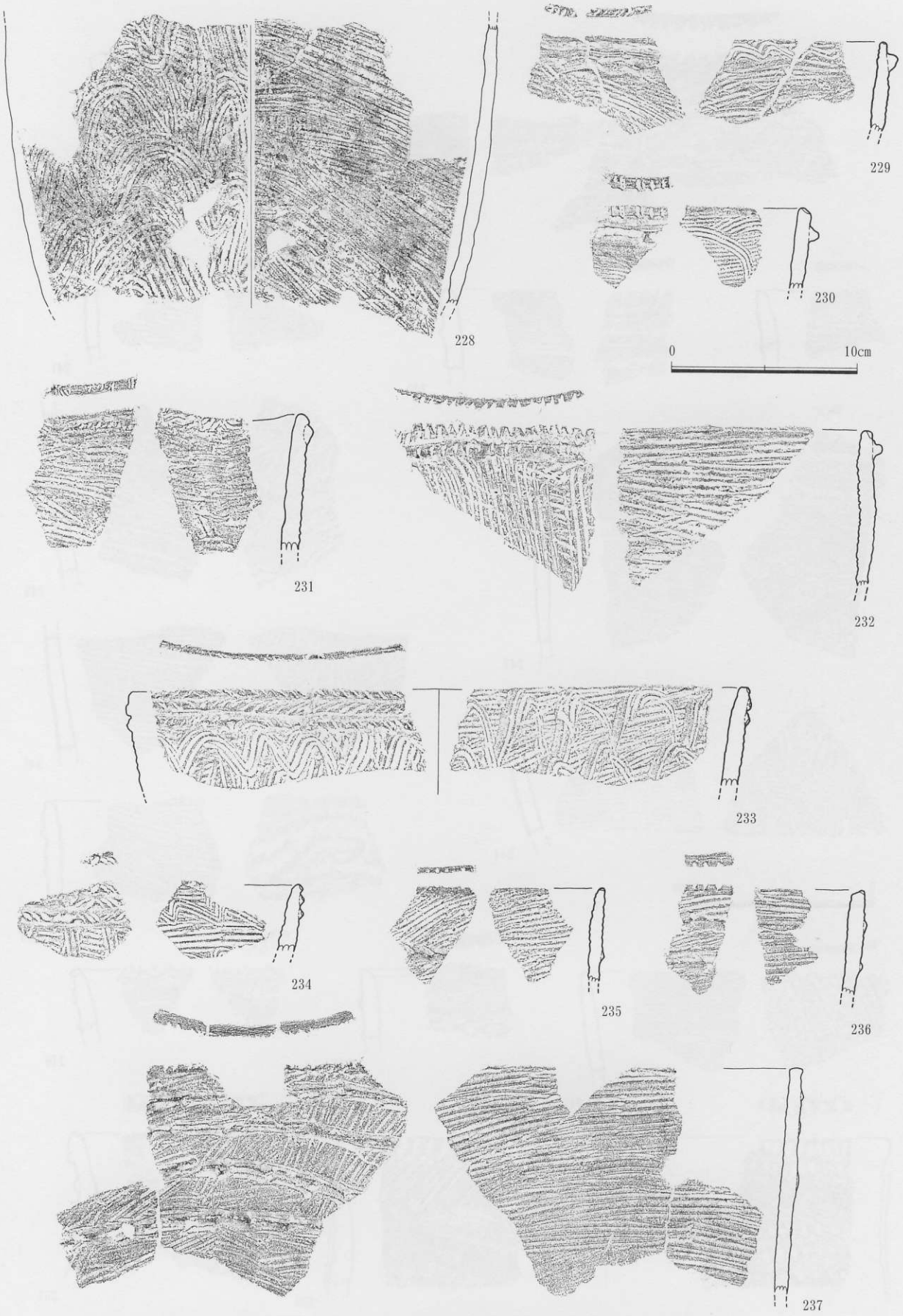
269～294はⅢｄ類である。272・276・277が山形口縁であるが、それ以外にも小破片のなかには山形口縁の土器が存在する可能性がある。外面や口縁部内面にヘラ状の施文具で沈線を主体とする文様を施す269～274・276・279～283・292～294はⅢｄ１類に分類できる。272は内外面に二本単位の山形状の短沈線及び押引状の沈線を施す。270・273・281はこのような沈線に加えて外面に二、三本単位の沈線を



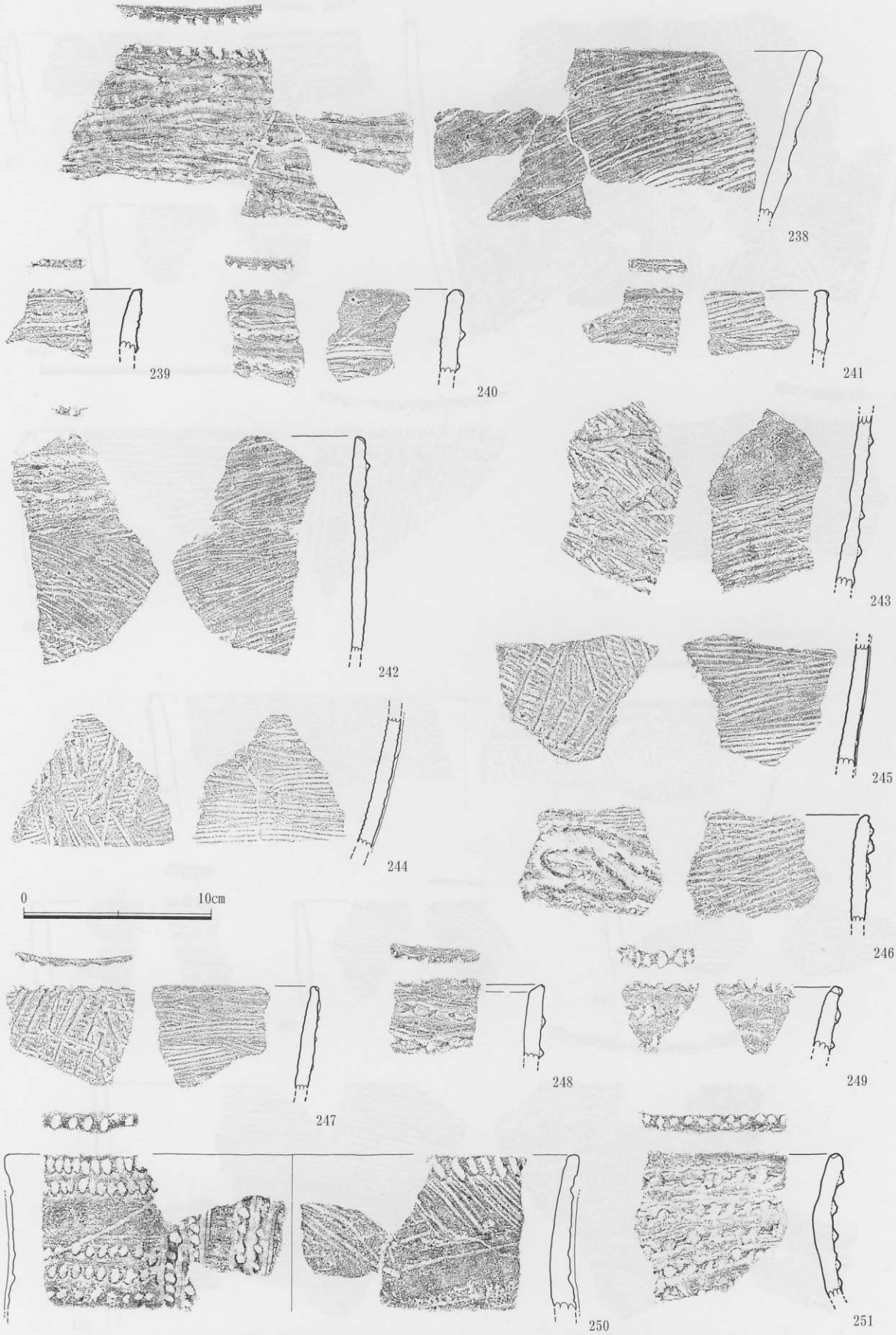
第38図　褐色土層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅳ層）出土縄文土器１（１／３）



第39図　褐色土層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅳ層）出土縄文土器２（１／３）



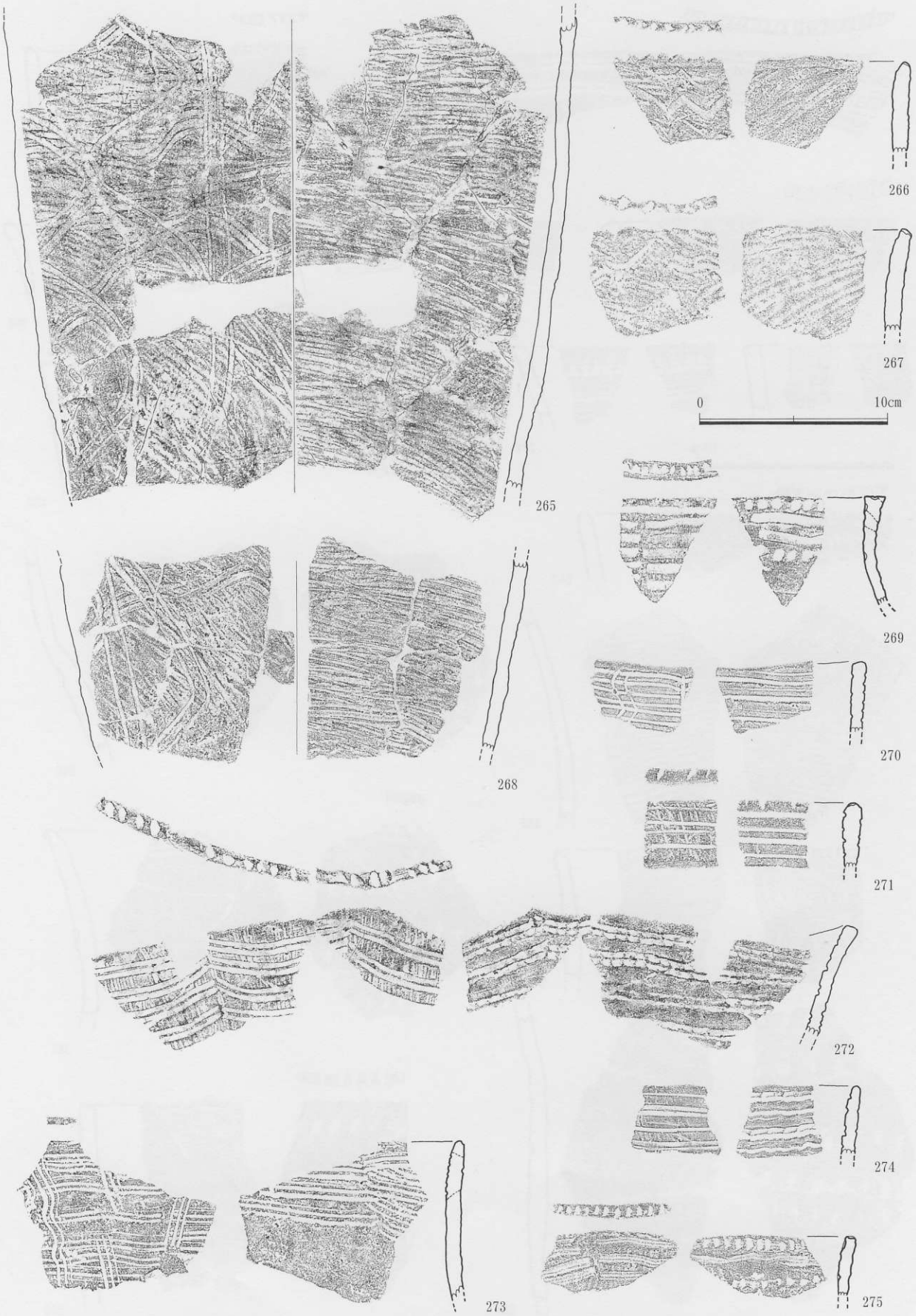
第40図　褐色土層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅳ層）出土縄文土器３（１／３）



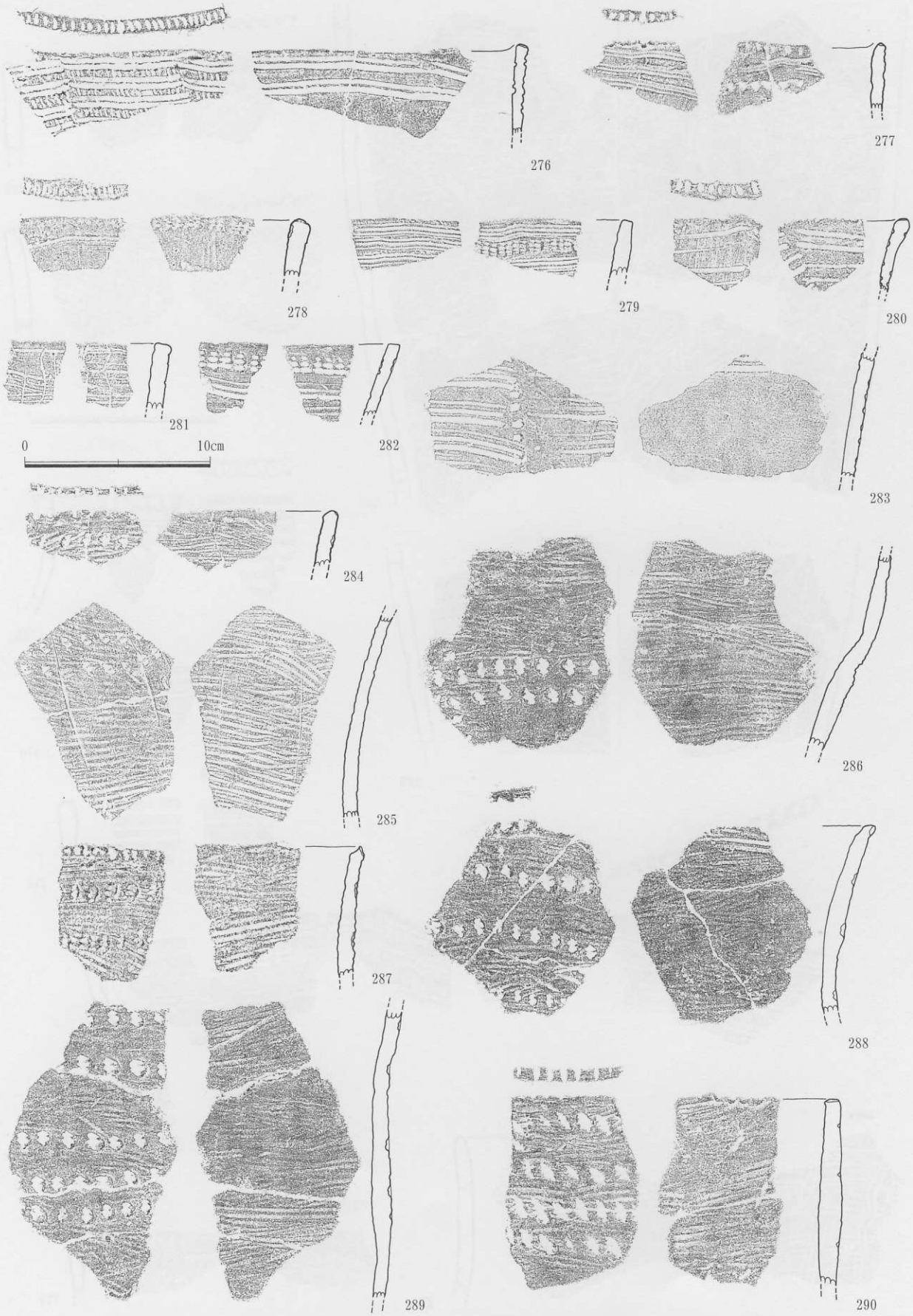
第41図　褐色土層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅳ層）出土縄文土器４（１／３）

第42図　褐色土層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅳ層）出土縄文土器５（１／３）

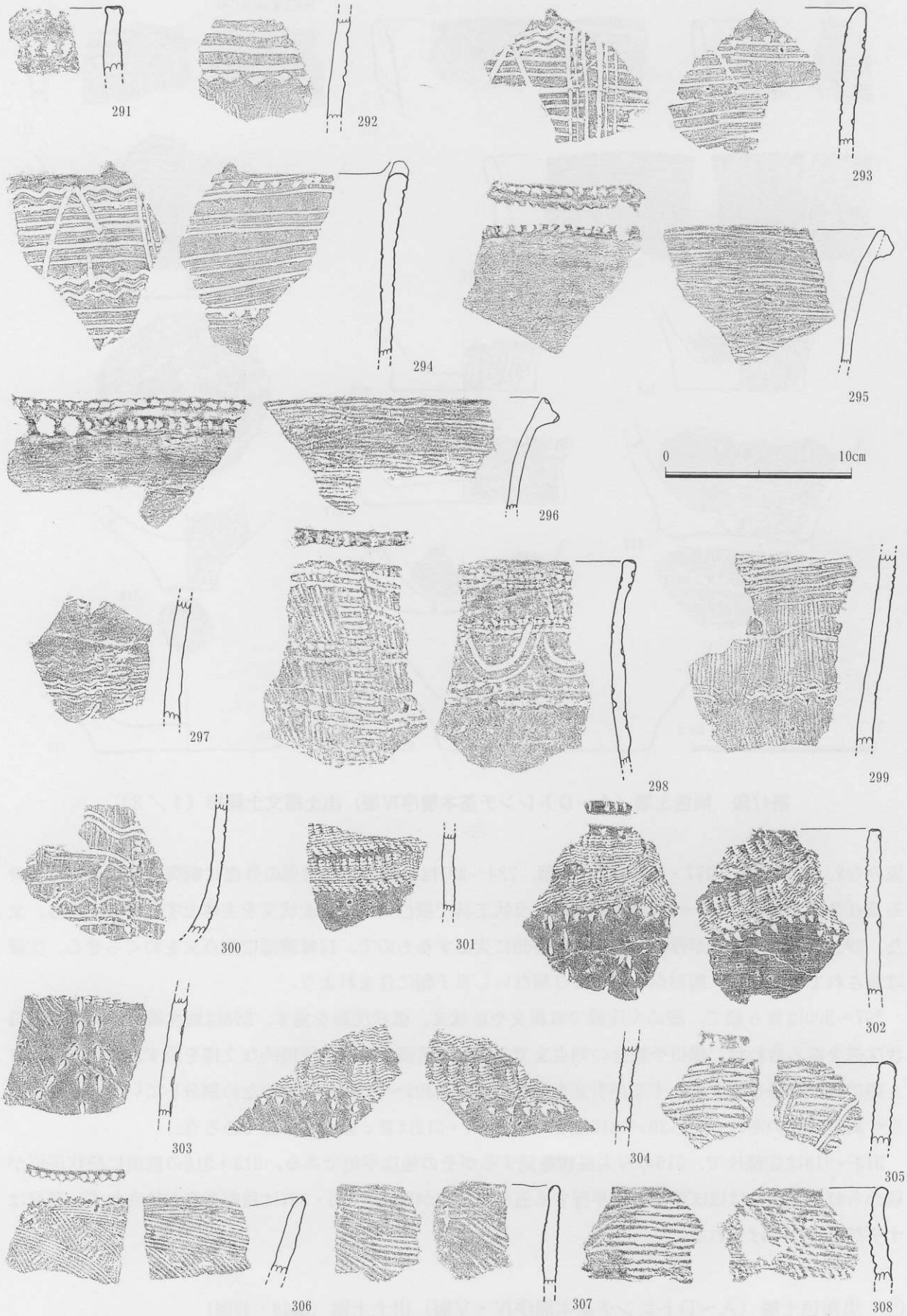
第43図　褐色土層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅳ層）出土縄文土器６（１／３）



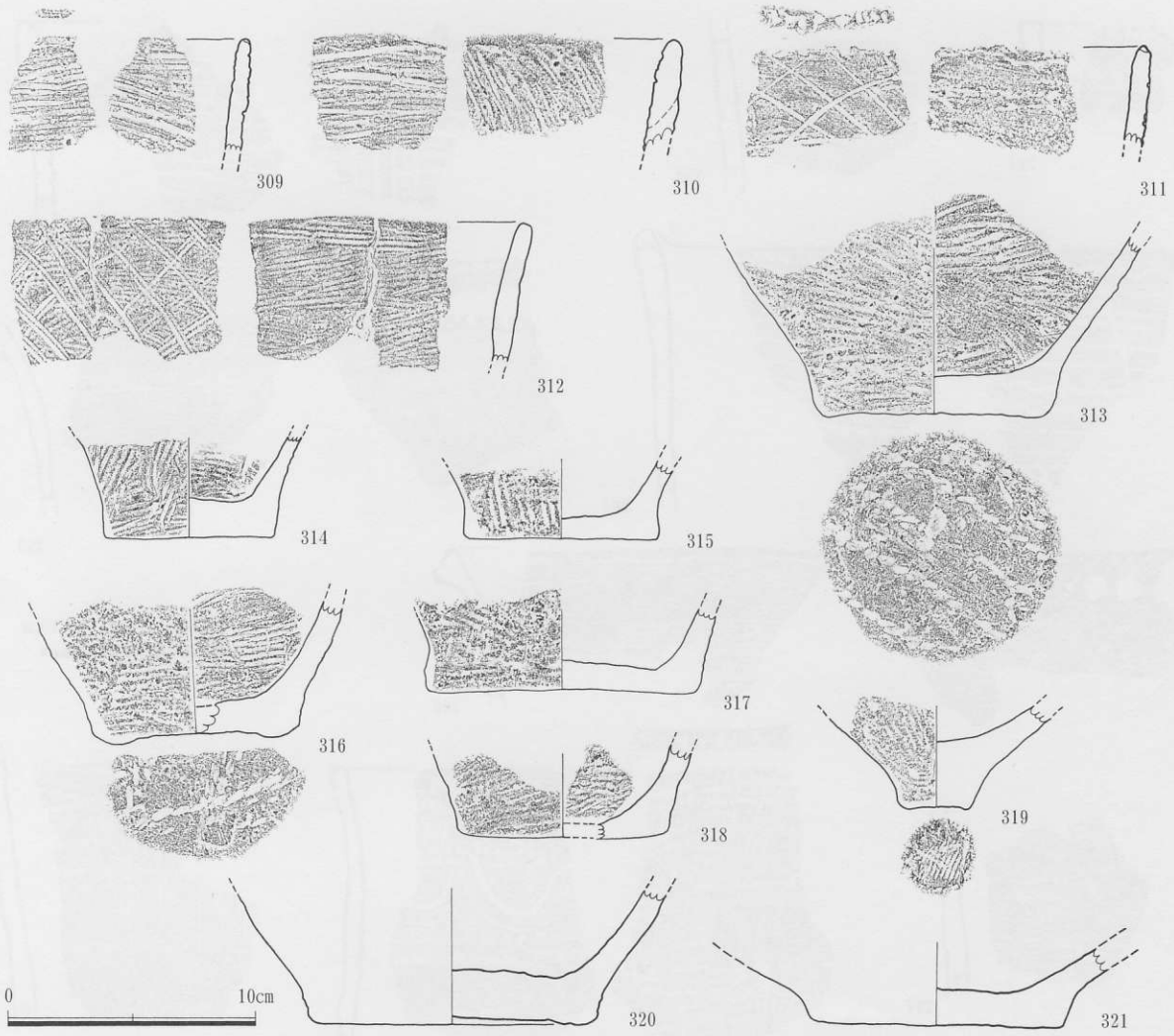
第44図　褐色土層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅳ層）出土縄文土器７（１／３）



第45図　褐色土層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅳ層）出土縄文土器８（１／３）



第46図　褐色土層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅳ層）出土縄文土器９（１／３）



第47図　褐色土層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅳ層）出土縄文土器10（１／３）

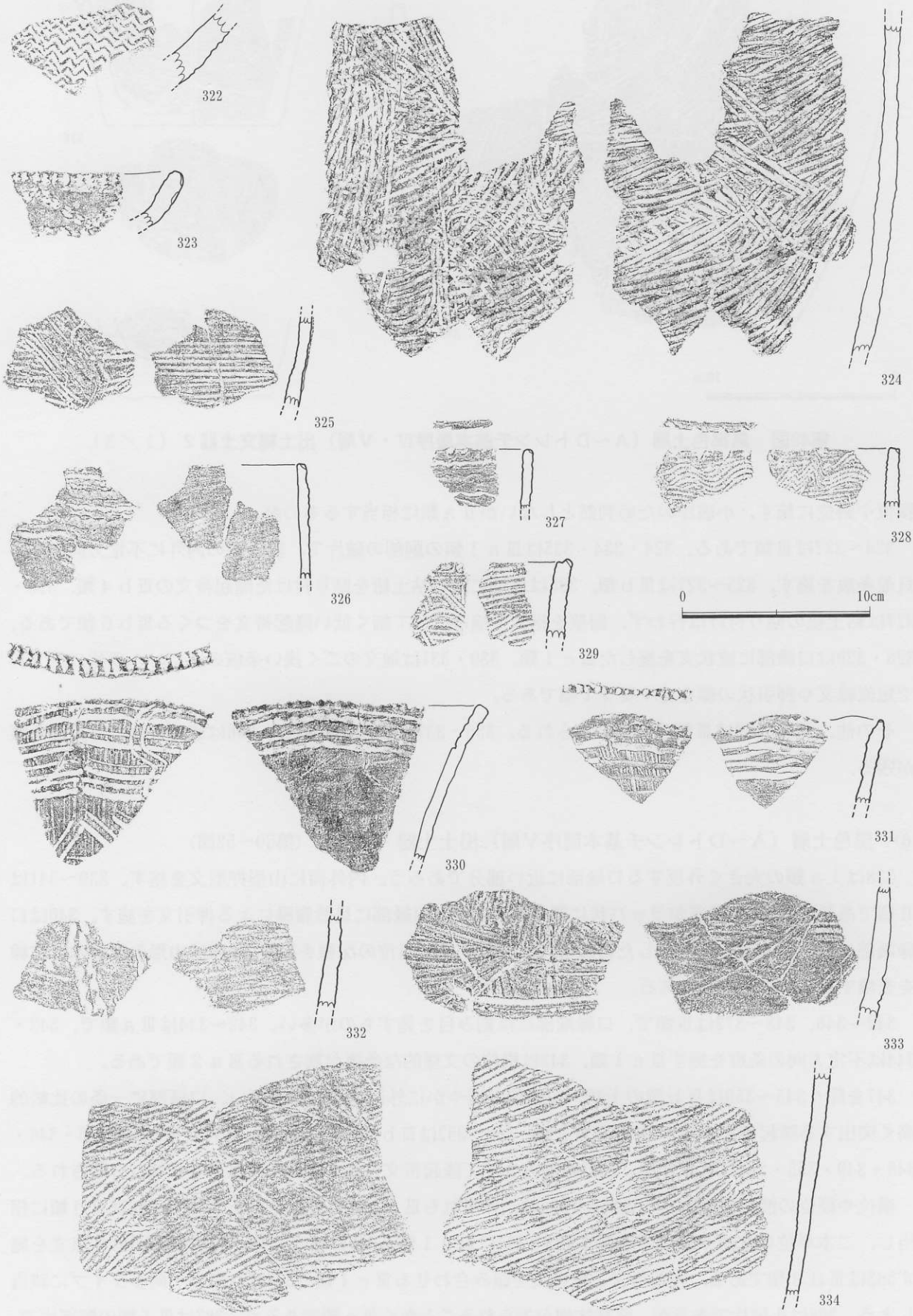
組み合わせる。275・277・278はⅢｄ２類、284～291は口縁部から胴部の外面に刺突文を数条めぐらせるⅢｄ３類である。292～294は内外面にヘラ状工具で横位の沈線と波状文を主体とするものである。また、295・296は口縁部が外反して端部が外側に突出するもので、口縁端部に列点文をめぐらせる。沈線は施されていないが、器形からみてⅢｄ類ないしⅢｆ類に含まれよう。

297～300はⅢｅ類で、細めの沈線で直線文や波状文、弧状沈線を施す。298は短沈線及び刺突文、弧状沈線を組み合わせ、横位や縦位の列点文で文様帯を区画するなど規則的な文様を施す。301～304はⅢｇ類で貝殻腹縁を施文具とする押引文を帯状に施す。305～312は小破片のため細分していないが、おそらく調整技法のあり方から305～310はⅢａ類、311・312はⅢｃ類かⅢｄ類であろう。

313～319は底部片で、319のみ尖底状を呈するがその他は平坦である。313・316の底面に紐状圧痕が認められ、前者にはほぼ等間隔に平行する五条の圧痕が残る。320・321は貝殻条痕が施されず、器壁はナデ調整で仕上げられる。

⑤　黒褐色土層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅳ・Ⅴ層）出土土器（第48・49図）

322は底部に近いＩａ類の破片で、外面に山形押型文を施す。323は口縁部に貝殻腹縁の刺突列点文を



第48図　黒褐色土層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅳ・Ⅴ層）出土縄文土器１（１／３）

第49図　黒褐色土層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅳ・Ⅴ層）出土縄文土器２（１／３）

横位や斜位に施す。小破片のため判然としないがⅡａ類に相当するものか。

324～337はⅢ類である。324・334・335はⅢａ１類の胴部の破片で、器表面の内外に不定方向の強い貝殻条痕を施す。325～327はⅢｂ類。325は斜位に細い粘土紐を貼り付けた隆起帯文のⅢｂ４類、326・327は粘土紐の貼り付けは行わず、器壁を指先で摘み上げて細く低い隆起帯文をつくるⅢｂ６類である。328・329は口縁部に波状文を施したⅢｃ１類。330・331は地文のごく浅い条痕の上に、ヘラ状の施文具で短直線文や押引状の線を施すⅢｄ１類である。

その他、332・333はⅢ類の土器とみられる。336・337は底部片である。336は底部外面にも貝殻条痕が残る。

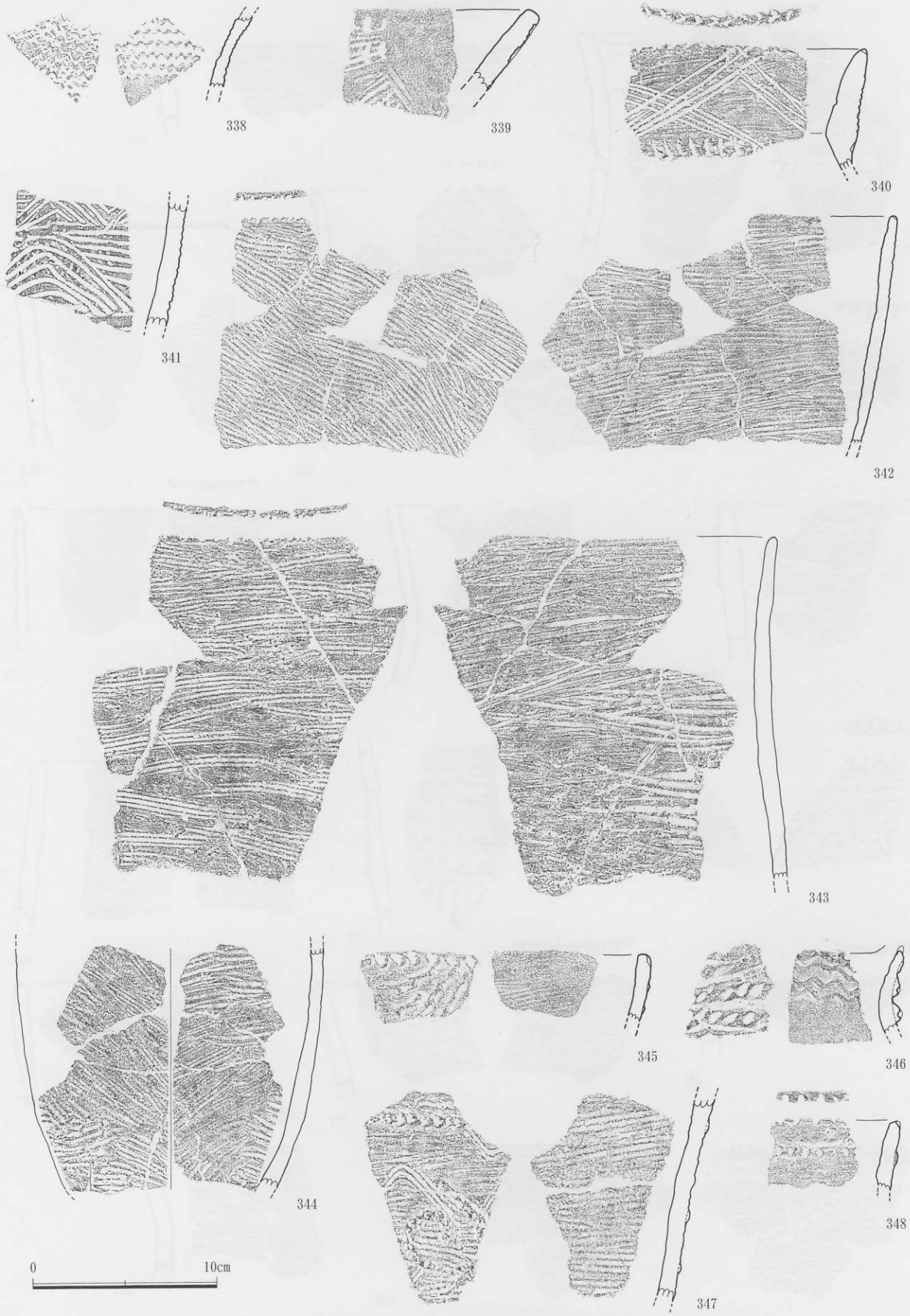
⑥　黒色土層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅴ層）出土土器・土製品（第50～52図）

338はⅠａ類の大きく外反する口縁部に近い部分であろう。内外面に山形押型文を施す。339～341はⅡ類であり、339は口縁部がラッパ状に開くⅡｂ類で、口縁部に貝殻腹縁による押引文を施す。340は口縁端部に刻み目を有し、肥厚した口縁部にヘラ状工具で斜位の沈線を描く。341は山形の区画内に沈線を充填するⅡ類の胴部片である。

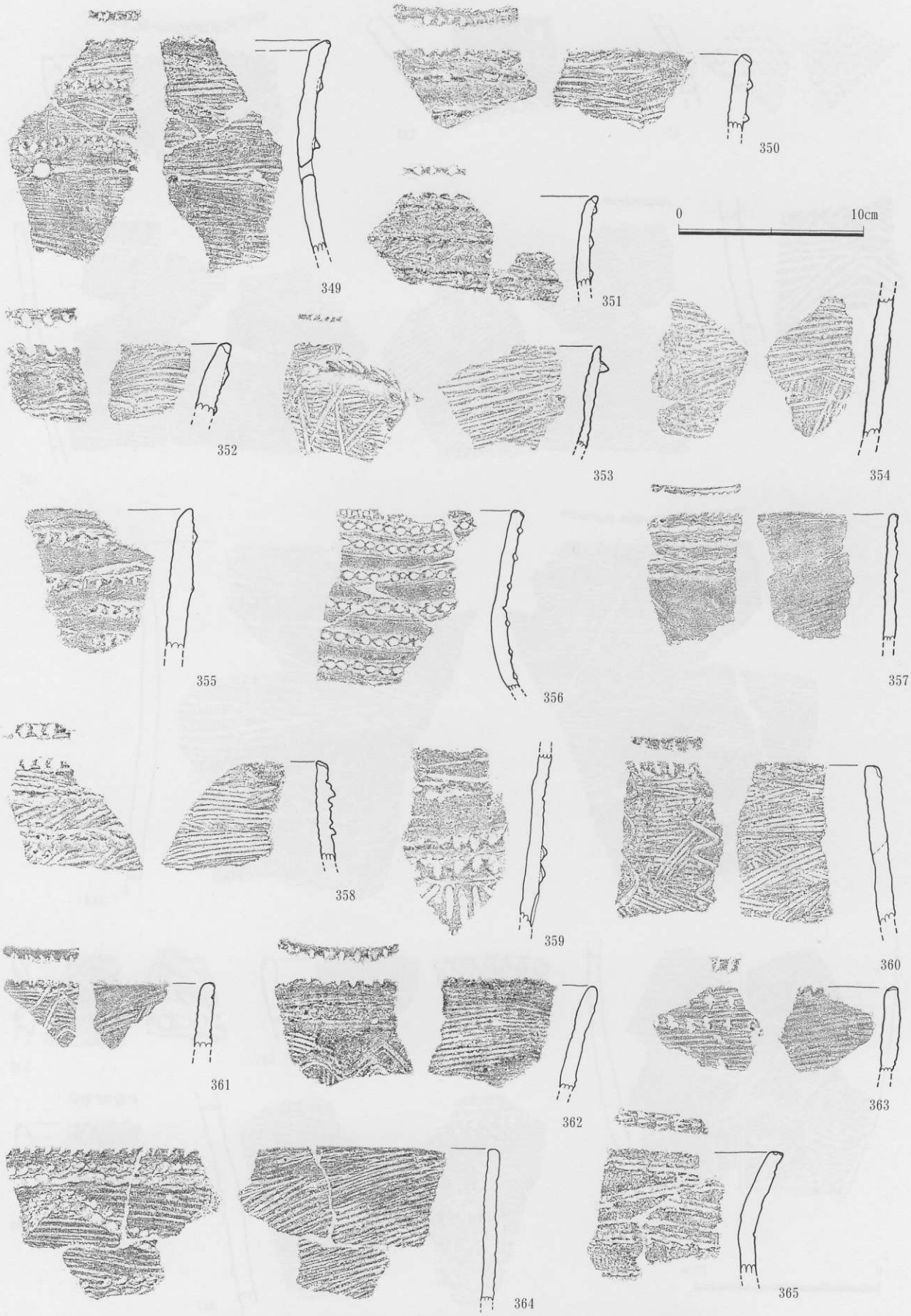
342～346、348～372はⅢ類で、口縁端部には刻み目を施すものが多い。342～344はⅢａ類で、342・344は不定方向の条痕を施すⅢａ１類、343は横位の文様的な条痕が施されるⅢａ２類である。

347を除く345～359はⅢｂ類の土器。口縁部が緩やかに外に開くものが多い。口縁部に一条の比較的高く突出する隆起帯文を施す353はⅢｂ２類、350～352はⅢｂ３類、隆起帯上に列点文を施す345・346・348・349・355・356はⅢｂ５類、器壁を摘み上げて隆起帯文を表す357・358はⅢｂ６類に分類される。

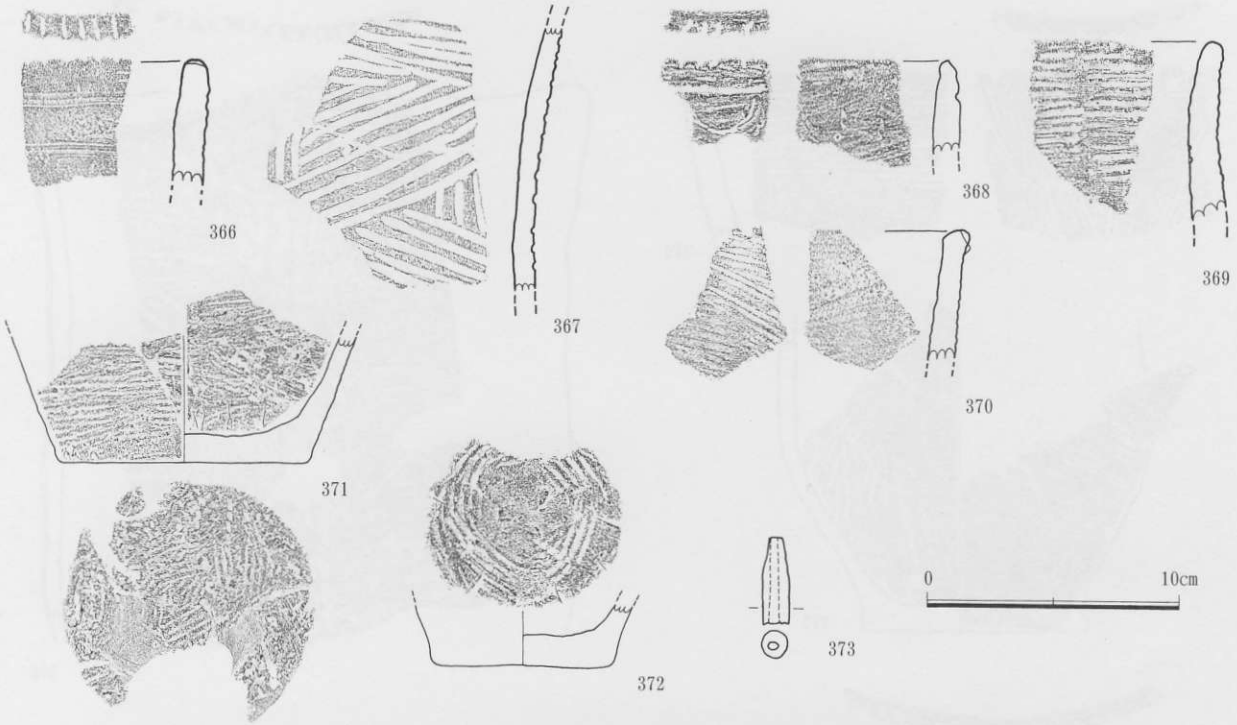
横位や縦位の波状文を施文する360～362は、いずれもⅢｃ１類に分類される。363～366はⅢｄ類に相当し、二本単位の沈線や押引文を施す364・365はⅢｄ１類、366はⅢｄ２類、口縁部外面に列点文を施す363はⅢｄ３類である。隆起帯文と波状文を組み合わせるⅢｅ１類の347は、野口・阿多タイプに該当しよう。368は小破片であるが、弧状沈線がみられることからⅢｅ類であろう。367はⅢｆ類の胴部片で、外面に平行斜線文や縦横位の沈線を施す。



第50図　黒色土層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅴ層）出土縄文土器１（１／３）



第51図　黒色土層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅴ層）出土縄文土器２（１／３）



第52図　黒色土層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ｖ層）出土縄文土器・土製品（１／３）

371・372はⅢ類の底部片で、内外面に貝殻条痕が残る。373は細長の土錘で、端部は細くすぼまる。

⑦　出土層位不明及び遺構埋土出土の土器（第53図）

Ａ～Ｄトレンチで出土した縄文土器のうち、出土層位が不明であるが残存状態が比較的良好な土器について報告する。なお、380はＡトレンチ８グリッドのピット埋土から出土したものだが、本ピットの検出層位が不明であるため、本項で取り上げた。

374～379・381はⅢ類の土器で、口縁部には刻み目を施す。374は綾杉状の条痕を施すⅢａ２類で、平底の375は内外面に不定方向の条痕を施すⅢａ１類。376は丸底とみられる深鉢で、口縁は山形を呈し、縦位の隆起帯文を有するⅢｂ３類。377・378・381はⅢｄ類で、377・381は口縁部に沈線を施すⅢｄ１類、378は幅広のヘラ状施文具で条痕状の沈線をめぐらせるⅢｄ２類である。379はⅢ類の底部片である。

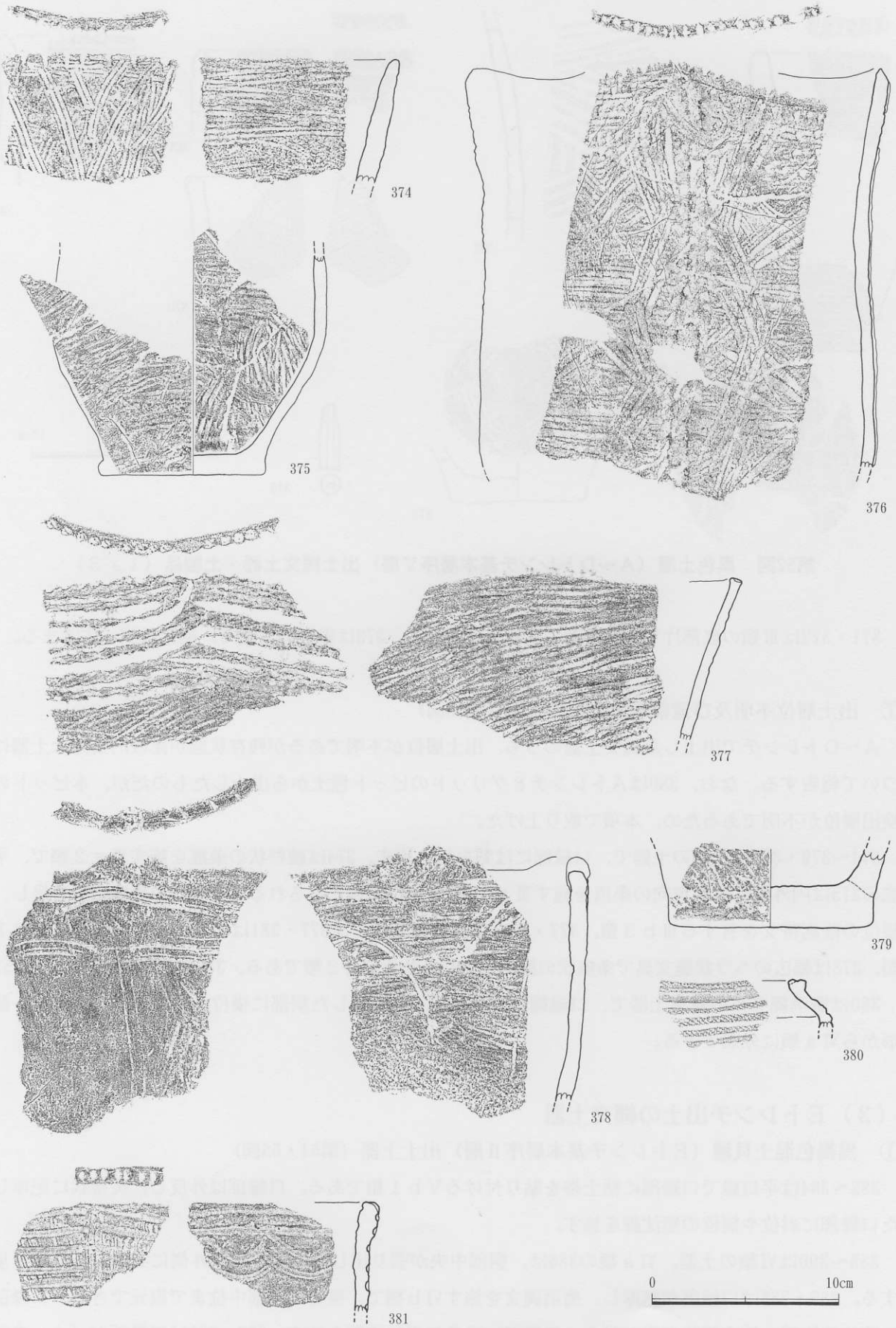
380は磨消縄文系の鉢形土器で、口縁端部が肥厚し、張り出した胴部に横位の沈線をめぐらせる。器形からⅥａ類に分類できる。

（３）Ｅトレンチ出土の縄文土器

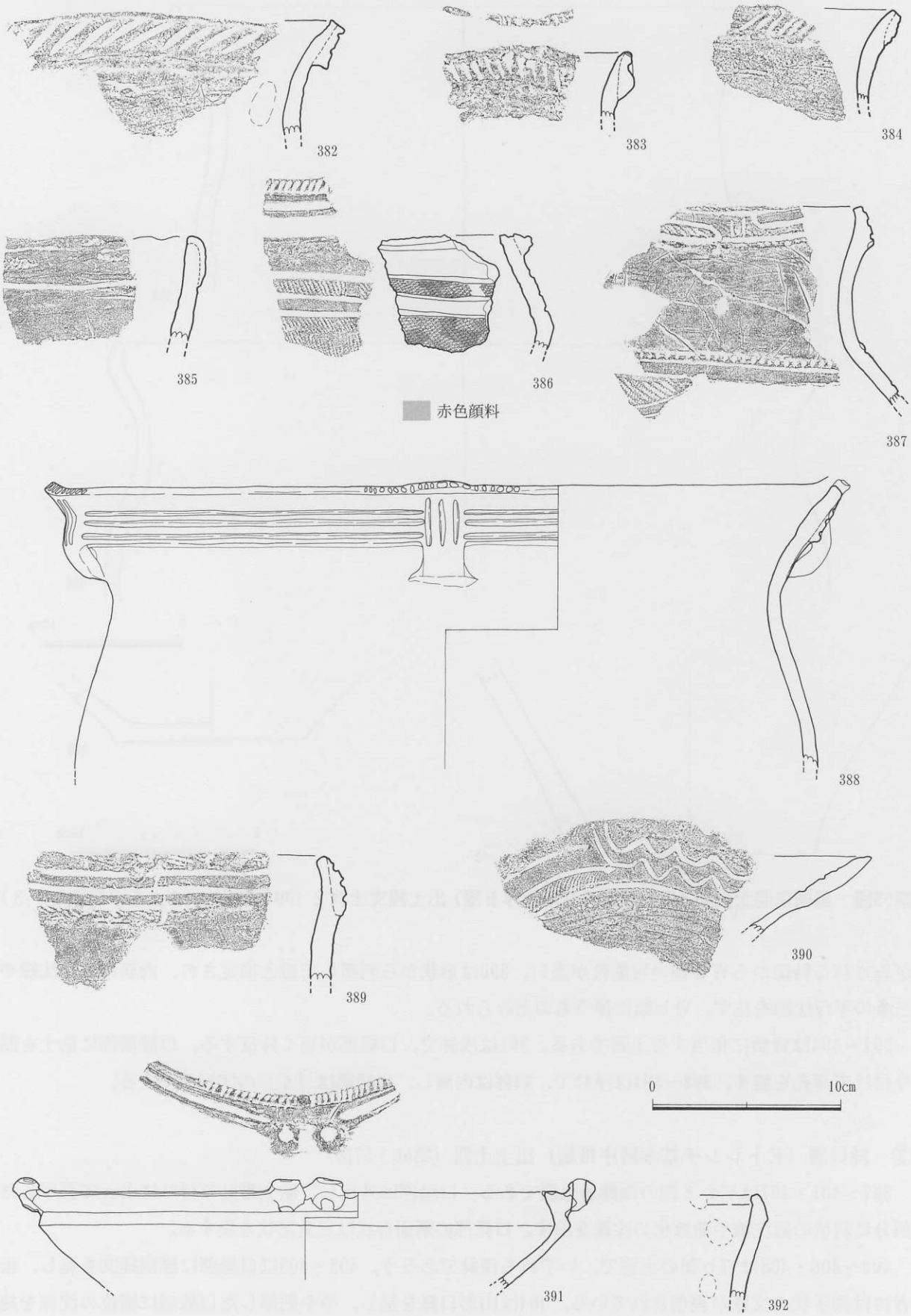
①　黒褐色混土貝層（Ｅトレンチ基本層序Ⅱ層）出土土器（第54・55図）

382～384は平口縁で口縁部に粘土帯を貼り付けるＶｂ１類である。口縁部は外反し、突帯状に肥厚した口縁部に斜位や縦位の短沈線を施す。

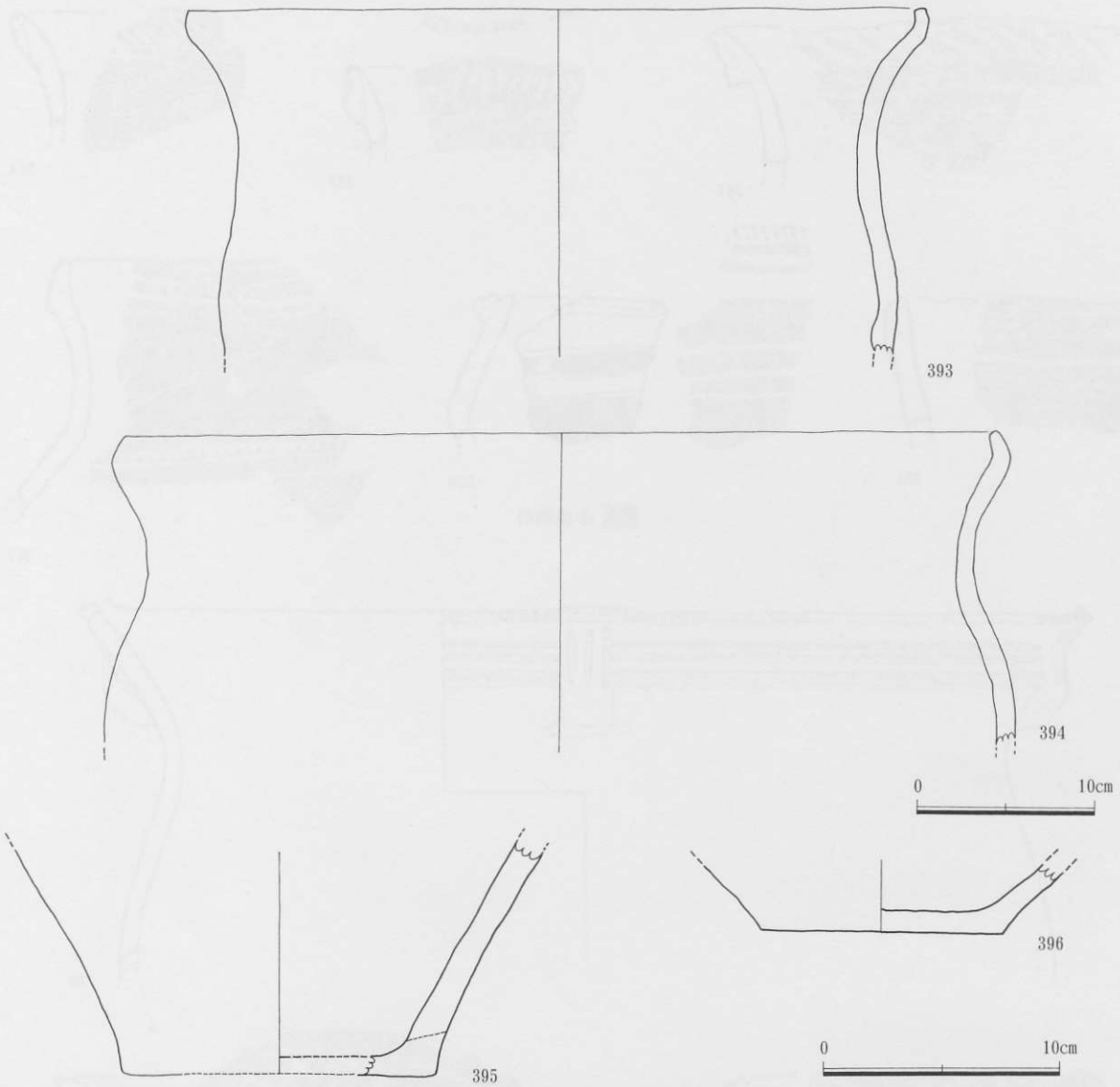
385～390はⅥ類の土器。Ⅵａ類の386は、胴部中央が張り出し、口縁端部が外側に突出する鉢形を呈する。385・388は口縁部が肥厚し、磨消縄文を施すⅥｂ類で、後者は胴部中位まで復元できる。口縁部に縦位の沈線を施す橋状把手が付き、口縁部に三条の平行沈線を施す。387・389は口縁部が「く」の字状にやや内湾し、横位の沈線がめぐる。387は頸部と胴部の境に列点文が施され、胴部上位に磨消縄文



第53図　Ａ～Ｄトレンチ出土層位不明及び遺構埋土出土縄文土器（１／３）



第54図　黒褐色混土貝層（Ｅトレンチ基本層序Ⅱ層）出土縄文土器１（１／３）



第55図　黒褐色混土貝層（Ｅトレンチ基本層序Ⅱ層）出土縄文土器２（394のみ１／４、その他は１／３）

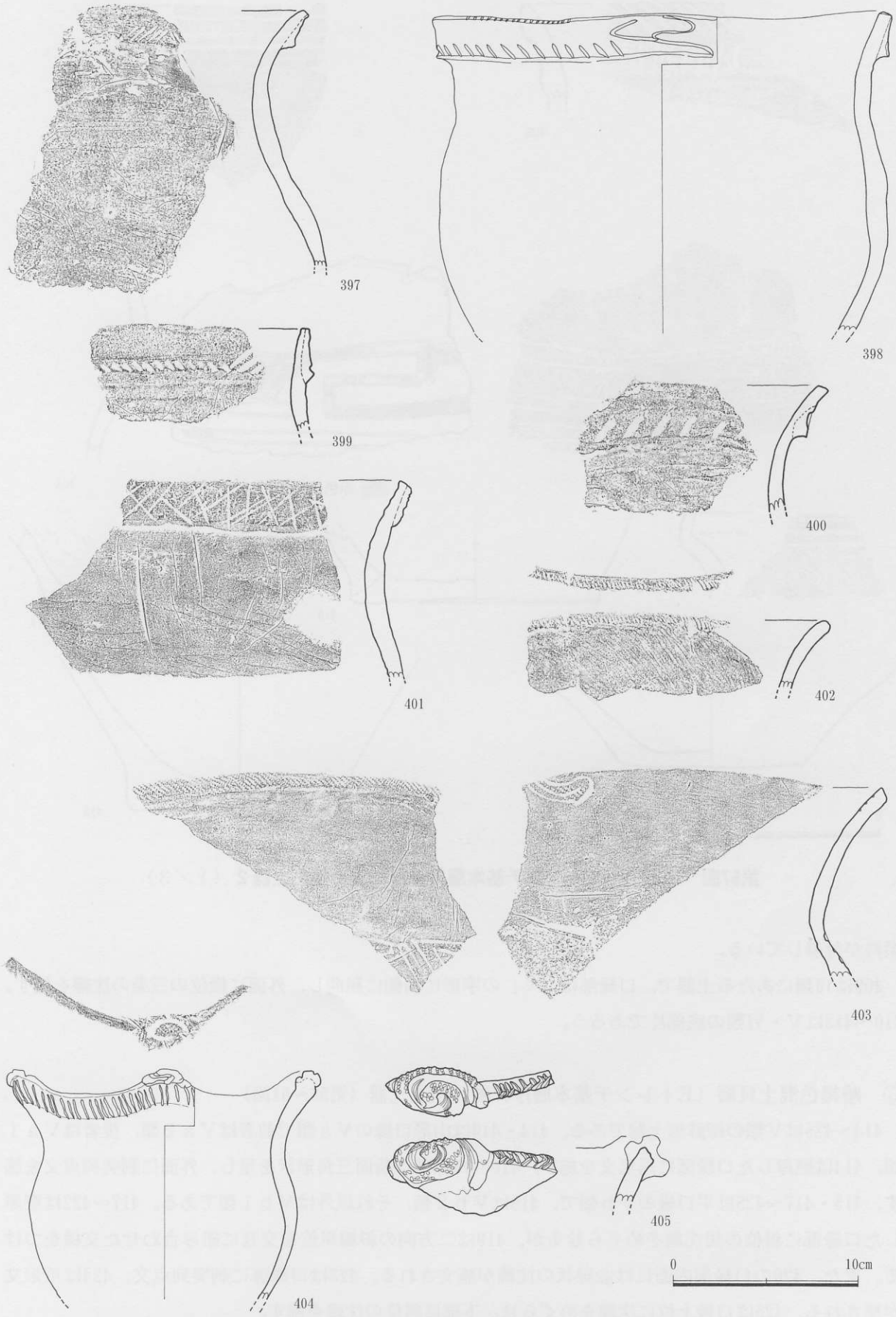
が施される特徴からⅥｄ類の可能性が高い。390は形状から判断して皿と推定され、内面に波状沈線や三条の平行沈線を施す。Ⅵｂ類に伴うものとみられる。

391～394はⅦ類に相当する土器である。391は浅鉢で、口縁部が短く外反する。口縁端部に粘土を貼り付けて穿孔を施す。392～394は深鉢で、頸部は内湾し、口縁部は「く」の字形を呈する。

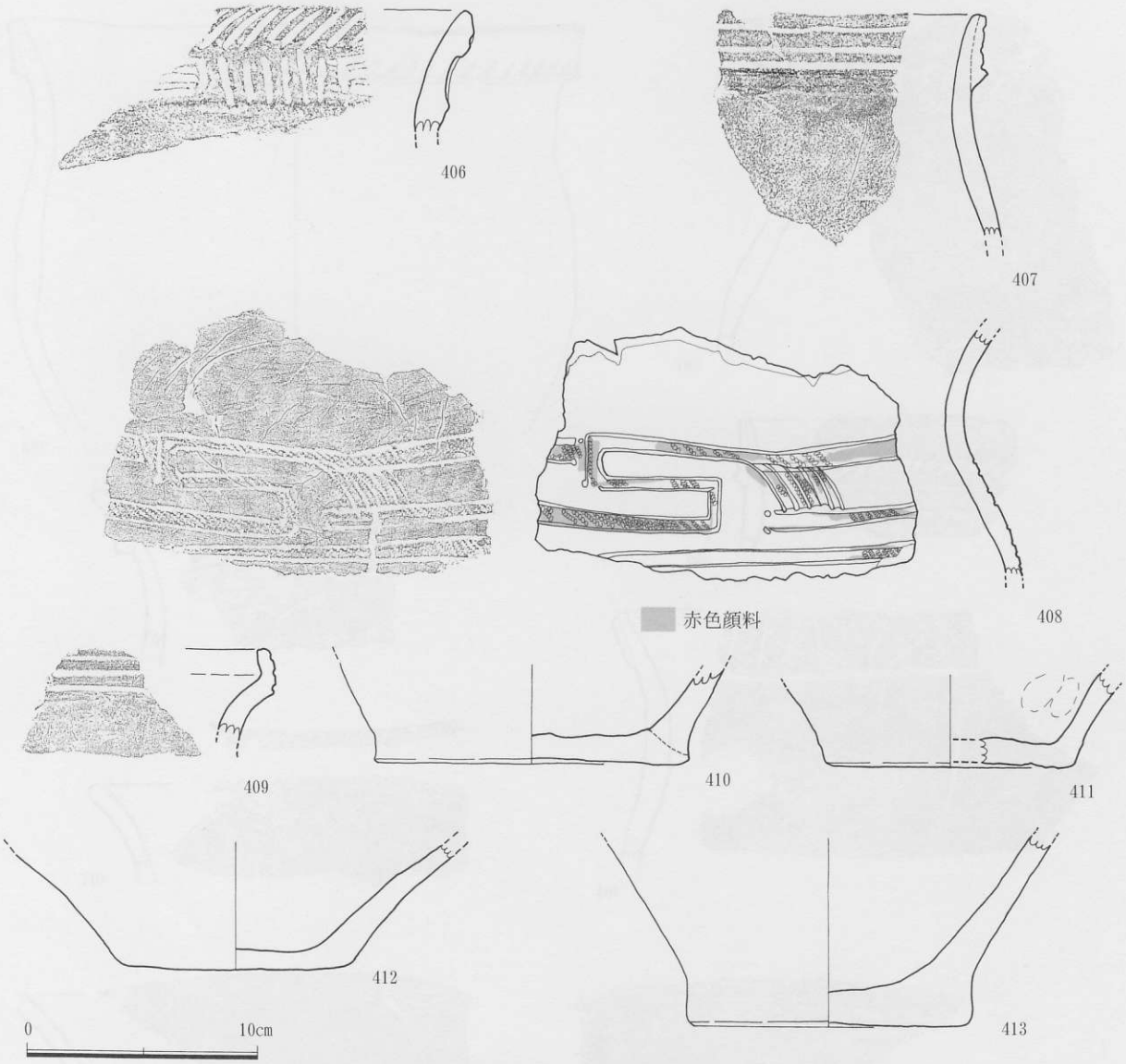
②　純貝層（Ｅトレンチ基本層序Ⅲ層）出土土器（第56・57図）

397～401・407はＶｂ１類の深鉢形土器である。口縁部は外反し、粘土帯貼り付けによって肥厚した部分に斜位の短沈線や曲線状の沈線を施す。口縁部の断面形状は三角形状を呈する。

402～406・408はⅥｂ類の土器で、いずれも深鉢であろう。402・403は口縁部に磨消縄文を施し、後者には鉤手状の文様が表現されている。404は山形口縁を呈し、やや肥厚した口縁部に縦位の沈線を施す。405は口縁部に渦巻状に粘土紐を貼り付ける。406は外反するやや肥厚した口縁部に斜位の短沈線を施す。408は頸部がしまり、張り出した胴部に二本単位の沈線及び磨消縄文を施す。また、外面に赤色



第56図　純貝層（Ｅトレンチ基本層序Ⅲ層）出土縄文土器１（１／３）



第57図　純貝層（Ｅトレンチ基本層序Ⅲ層）出土縄文土器２（１／３）

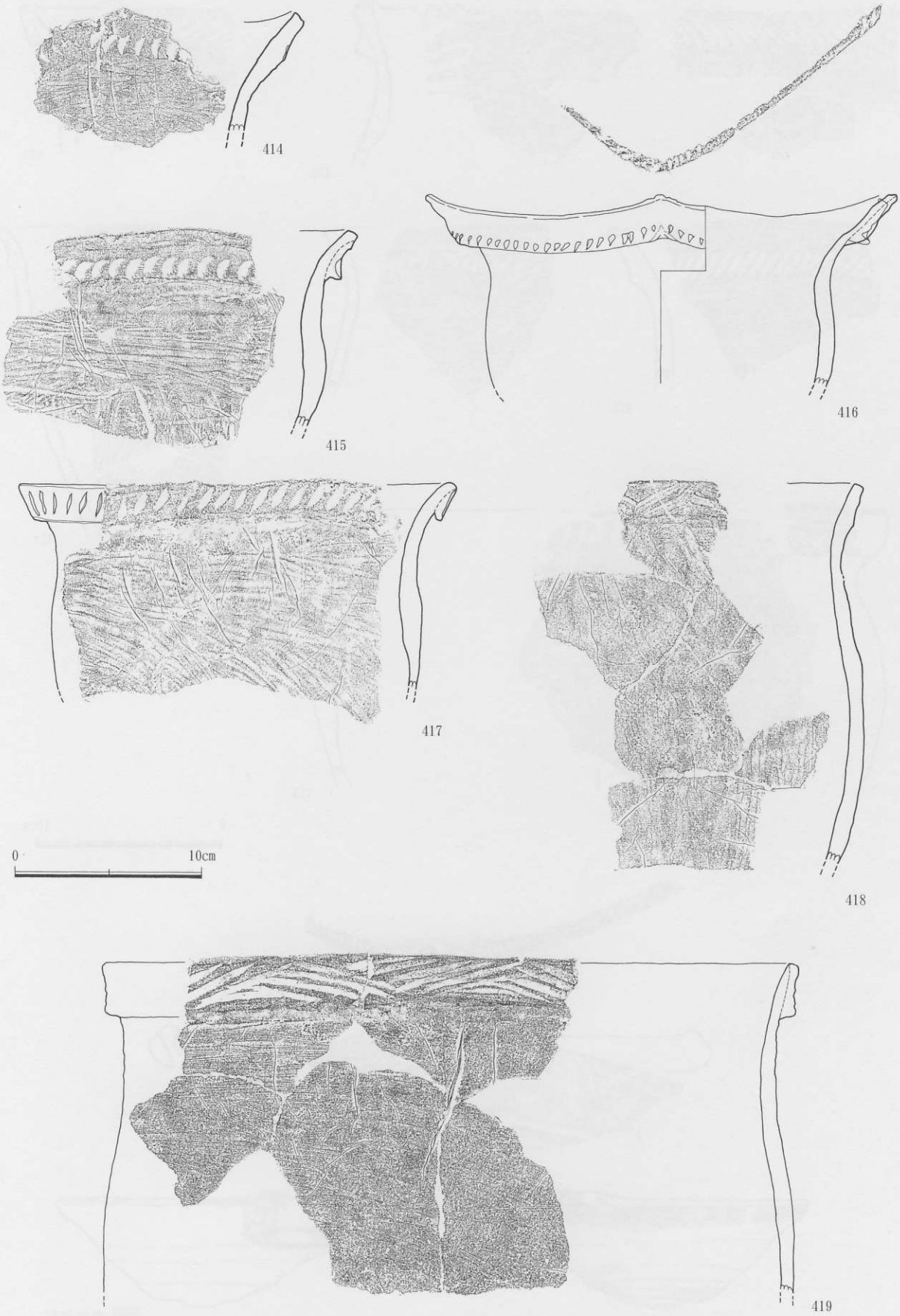
顔料が付着している。

409はⅦ類にあたる土器で、口縁部は「く」の字形に内側に屈曲し、外面に横位の三条の沈線を施す。410～413はⅤ・Ⅵ類の底部片であろう。

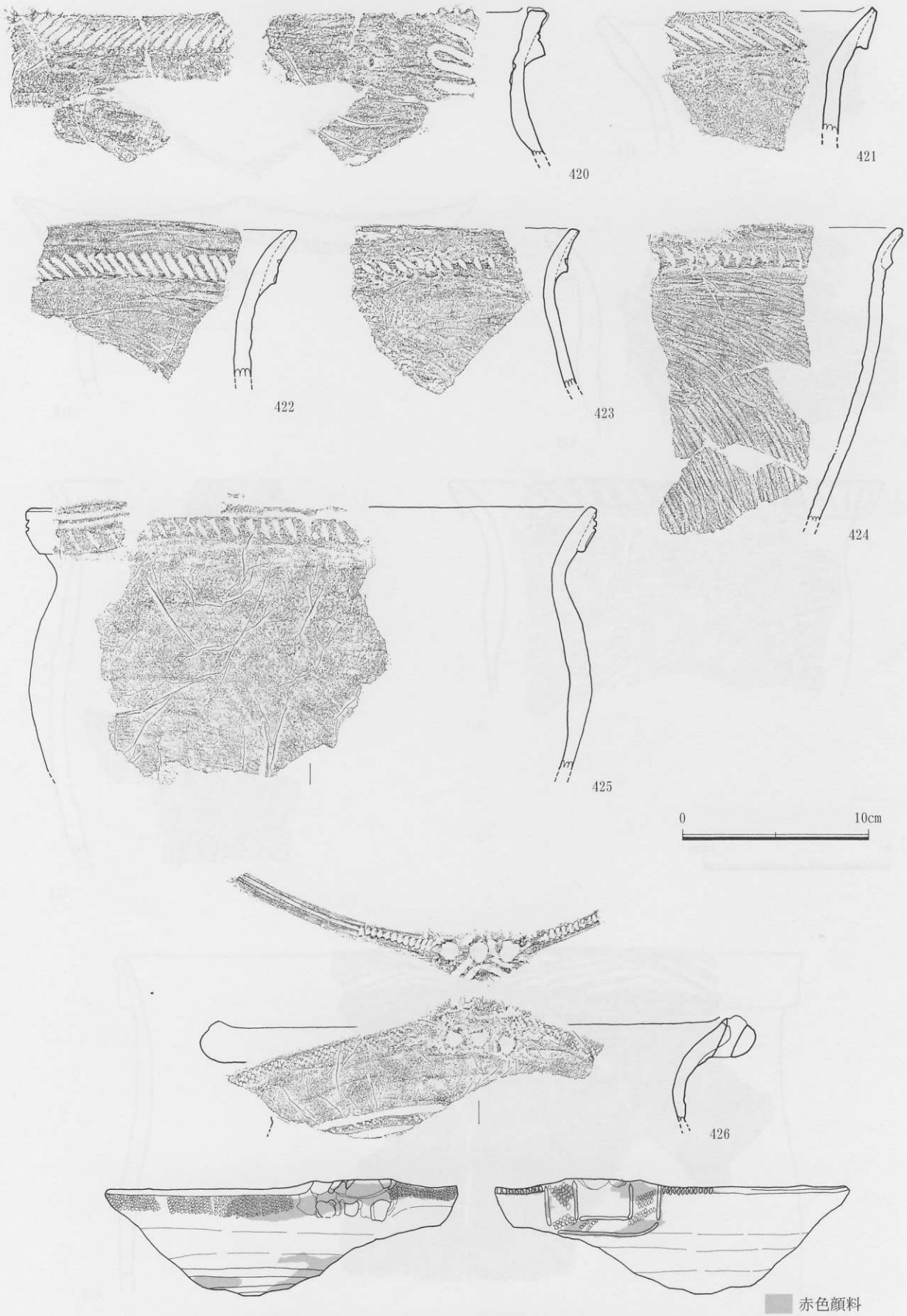
③　暗褐色混土貝層（Ｅトレンチ基本層序Ⅳ層）出土土器（第58～61図）

414～425はⅤ類の深鉢形土器である。414・416は山形口縁のⅤａ類で前者はⅤａ２類、後者はⅤａ１類。414は肥厚した口縁部に爪形文を施す。416の口縁部は断面三角形状を呈し、外面に刺突列点文を施す。415・417～425は平口縁のⅤｂ類で、418はⅤｂ２類、それ以外はⅤｂ１類である。417～422は肥厚した口縁部に斜位の短沈線をめぐらせるが、419は二方向の斜線単位を交互に組み合わせた文様をつける。また、420の口縁部内面には曲線状の沈線が施文される。423は口縁部に刺突列点文、424は爪形文が施される。425は口縁上位に沈線をめぐらせ、下部に斜位の沈線を施す。

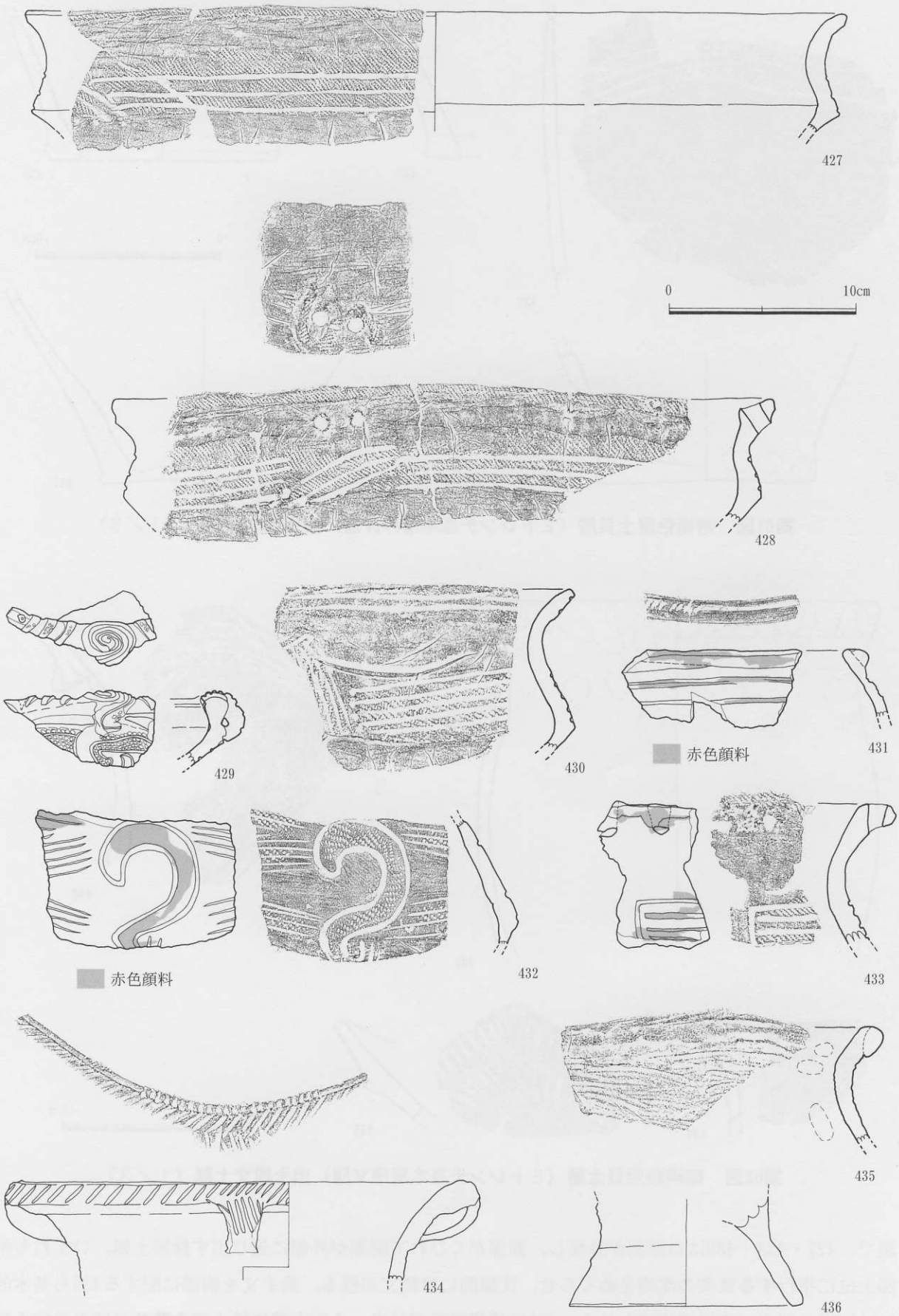
426～437はⅥ類の土器で、426～428、431～433は器表面に赤色顔料が付着している。427～432はⅥａ



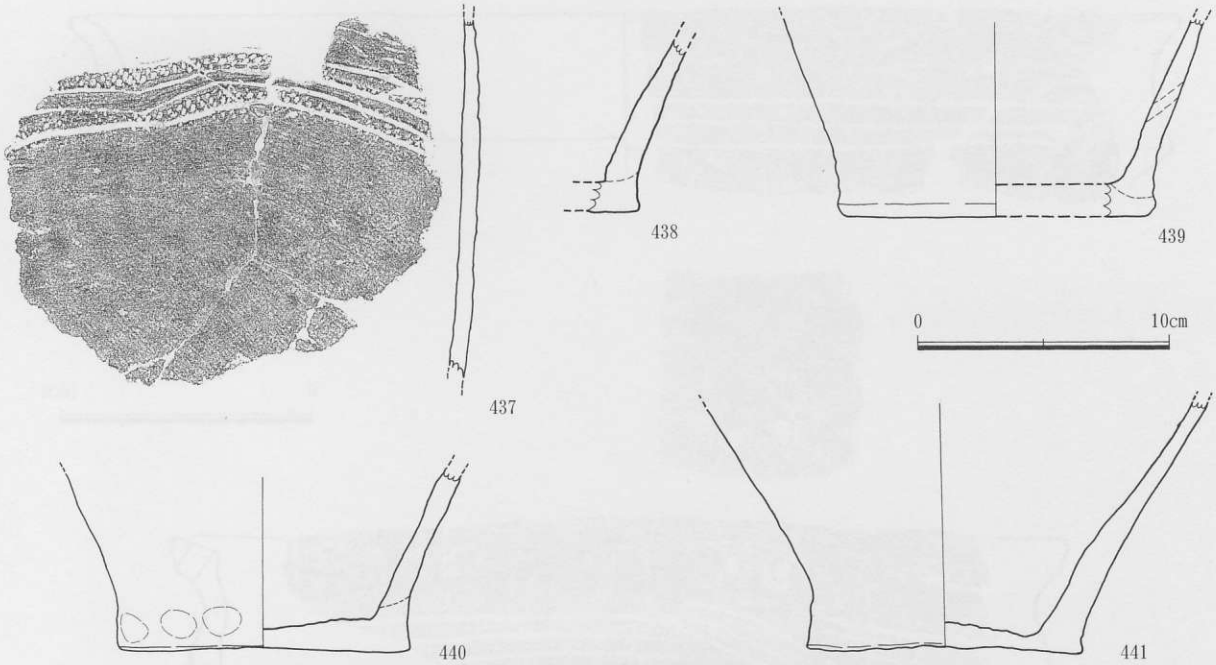
第58図　暗褐色混土貝層（Ｅトレンチ基本層序Ⅳ層）出土縄文土器１（１／３）



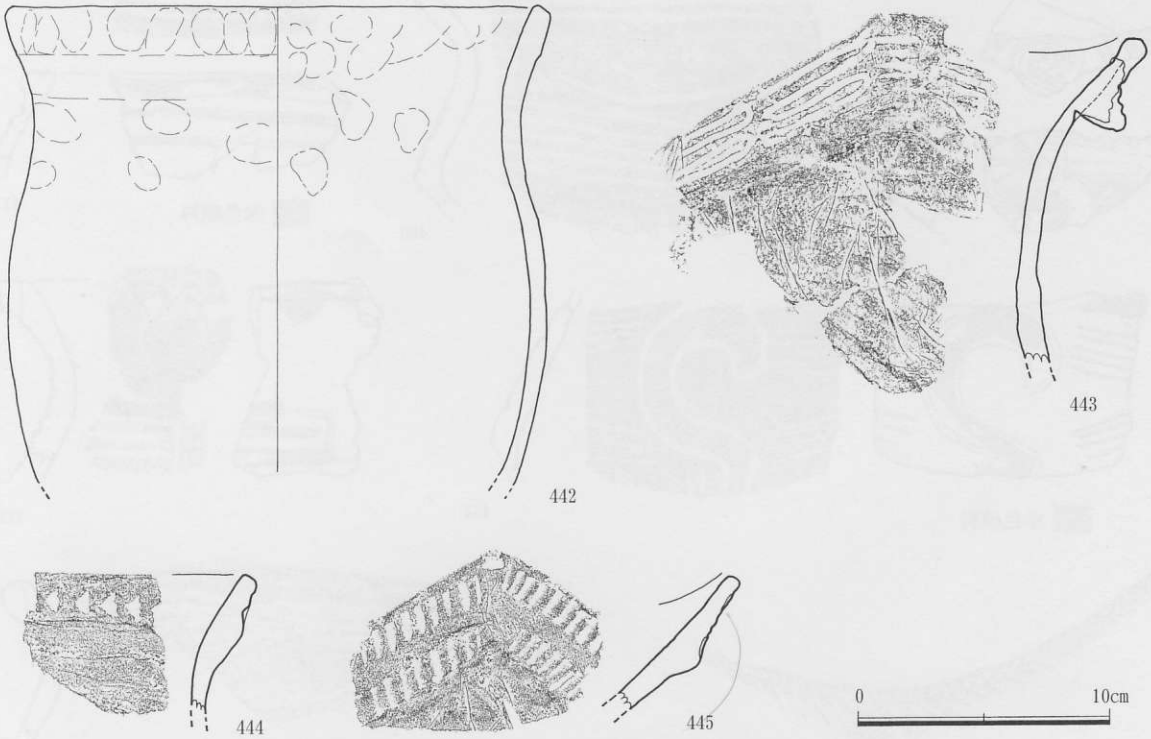
第59図　暗褐色混土貝層（Ｅトレンチ基本層序Ⅳ層）出土縄文土器２（１／３）



第60図　暗褐色混土貝層（Ｅトレンチ基本層序Ⅳ層）出土縄文土器３（１／３）

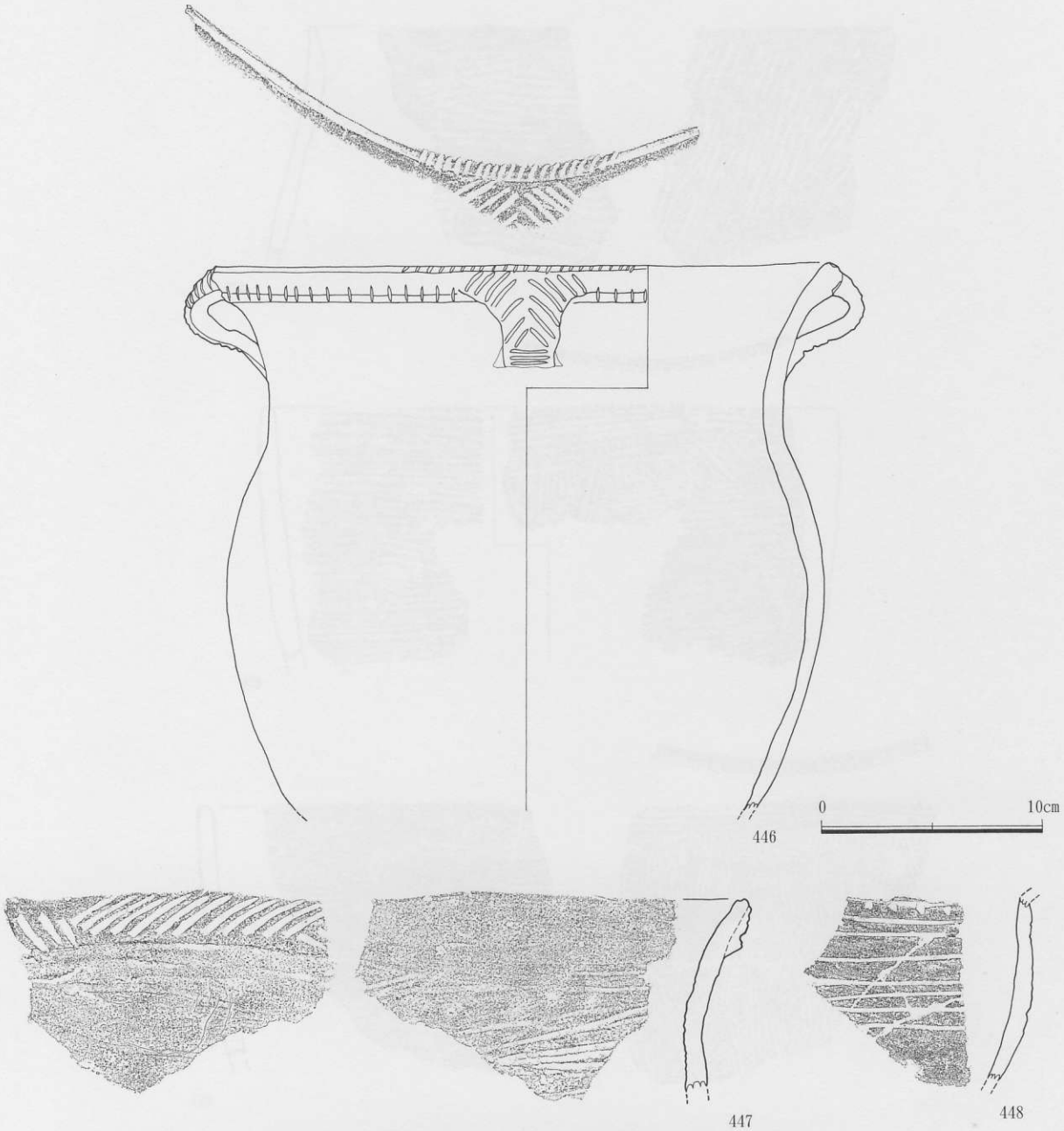


第61図　暗褐色混土貝層（Ｅトレンチ基本層序Ⅳ層）出土縄文土器４（１／３）



第62図　暗褐色混貝土層（Ｅトレンチ基本層序Ｖ層）出土縄文土器（１／３）

類で、427・428・430は口縁部が外反し、頸部がくびれて胴部が外側に張り出す鉢形土器。いずれも胴部上位に平行する数条の沈線をめぐらせ、沈線間には縄文が残る。鉤手文を胴部に配する432も基本的には同様の器形・文様構成であろう。429は橋状把手が付き、その上部に粘土紐を貼り付け渦巻文を施す。



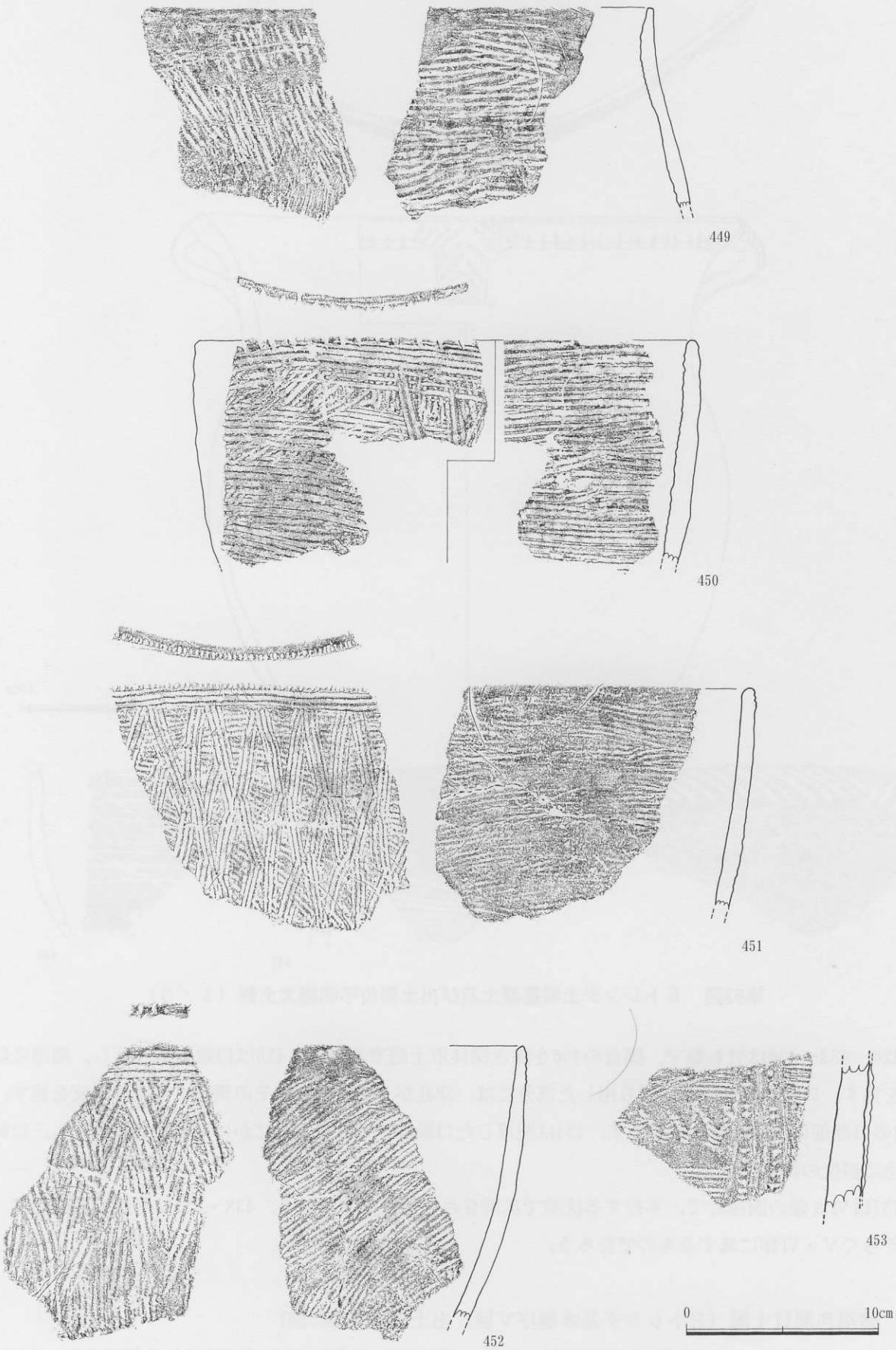
第63図　Ｅトレンチ土壙墓埋土及び出土層位不明縄文土器（１／３）

426、433～436はⅥｂ類で、脚台の436を除き深鉢形土器であろう。426は口縁部が外反し、端部に縄文を施す。口縁端部が外側に張り出した部分には、穿孔が３ヶ所あり、その周辺に刺突列点文を施す。433の口縁部には穿孔を２ヶ所施す。434は肥厚した口縁部から口縁下部にかけて橋状把手を配し、口縁上位に斜位の沈線を施す。

437はⅥｄ類の胴部片で、平行する沈線で区画された間に縄文が残る。438～441は平底の底部片で、おそらくⅤ・Ⅵ類に属するものであろう。

④　暗褐色混貝土層（Ｅトレンチ基本層序Ⅴ層）出土土器（第62図）

442～445は全てⅤ類の土器で、443はⅤａ１類、445はⅤａ２類、442・444はⅤｂ２類である。442は肥厚する口縁部に文様はつけられておらず、指オサエの痕跡が残る。443の口縁部の肥厚部分は「く」



第64図　出土地点不明縄文土器１（１／３）

の字状を呈し、その外面に曲線状の沈線を施文する。444は肥厚した口縁部に刺突文、445は断面三角形状に肥厚した口縁部にヘラ状の施文具で上下二段にわたり押引文を施す。

⑤　その他の出土土器（第63図）

446・447は８号土壙墓埋土より出土した深鉢形土器で、446はⅥｂ類、447はＶｂ１類である。446は口唇部に沈線をめぐらせ、肥厚した口縁部下部に刻み目を付け、口縁部から頸部に橋状把手を配する。447は口縁部に粘土帯を貼り付け、ヘラ状工具で斜位の短沈線を施す。また、448はⅥｄ類の胴部で、出土層位は不明である。

（４）出土地点及び層位不明の縄文土器（第64～66図）

449～457はⅢ類の深鉢形土器。不定方向の条痕を施すⅢａ１類は449、Ⅲａ２類は450～452である。449を除き、口縁端部に刻み目を施す。451・452は地文の貝殻条痕をナデ調整後、口縁部に横方向の条痕、それより下位は綾杉文状の条痕を施す。

453・454はⅢｂ類、455・456はⅢｃ１類に該当する。453はⅢｂ５類の胴部片で、刻み目がある縦位の隆起帯文、454はⅢｂ３類で、緩やかに締まった頸部上位から口縁部にかけて、三条の隆起帯文をめぐらせる。455は地文の貝殻条痕上にヘラ状工具で波状文、456は二本単位の沈線で波状文を施文する。457は平底を呈するⅢ類の胴部から底部の破片で、器表面内外に貝殻条痕を施す。

458～460はⅣ類の土器で、461もその可能性がある。458はⅣｂ２類で、口縁部に横位の凹線文で文様帯を区画し、内部に渦巻状の文様を施文する。やや口縁部が肥厚する459はⅣｃ１類、口縁部が肥厚しない460はⅣｃ２類。459は口唇部に凹点をめぐらせ、口縁部の狭い文様帯に羽状の文様を施す。460は口縁部を横位の凹線文で区画し、連続する弧状の文様を施す。

462は鉢形土器のⅥａ類で、頸部下位から胴部にかけて、平行する数条の横位や斜位の沈線及び鉤手状文を施文する。463・464はⅥｄ類で頸部から胴部に平行する沈線がめぐる。465は口縁部が「く」の字形に屈曲し、外面に二条の幅広の沈線がめぐるⅦ類の深鉢形土器である。

第３節　石器・石製品

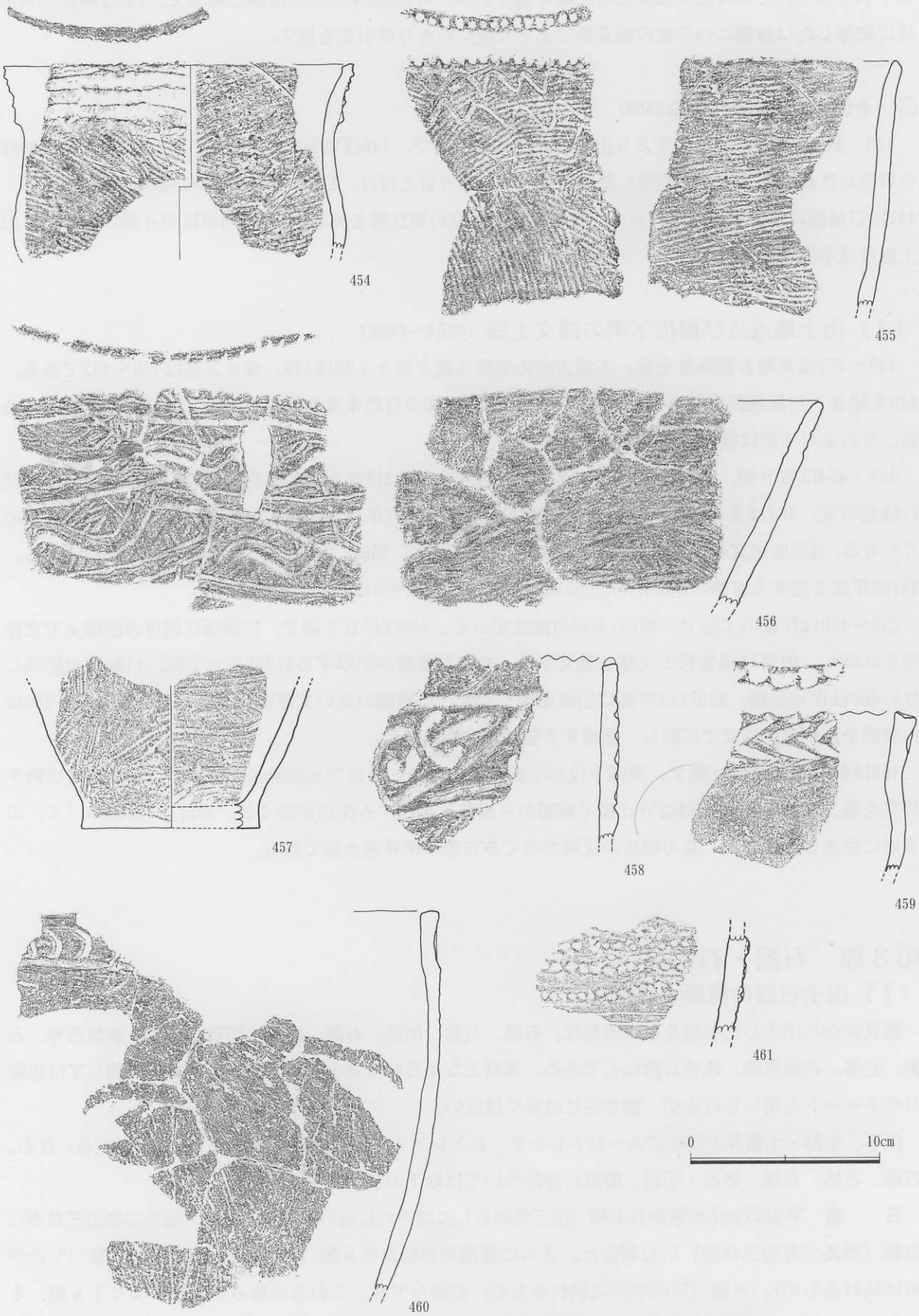
（１）出土石器の概要と分類

轟貝塚から出土した石器及び石製品は、石鏃、石匙、削器、石錘、磨石・叩石、石皿、磨製石斧、石鋸、石笛、石製垂飾、玦状耳飾などである。素材となる石材は安山岩が最も多く、石鏃に関しては黒曜石やチャートも用いられるが、割合的には多くはない。

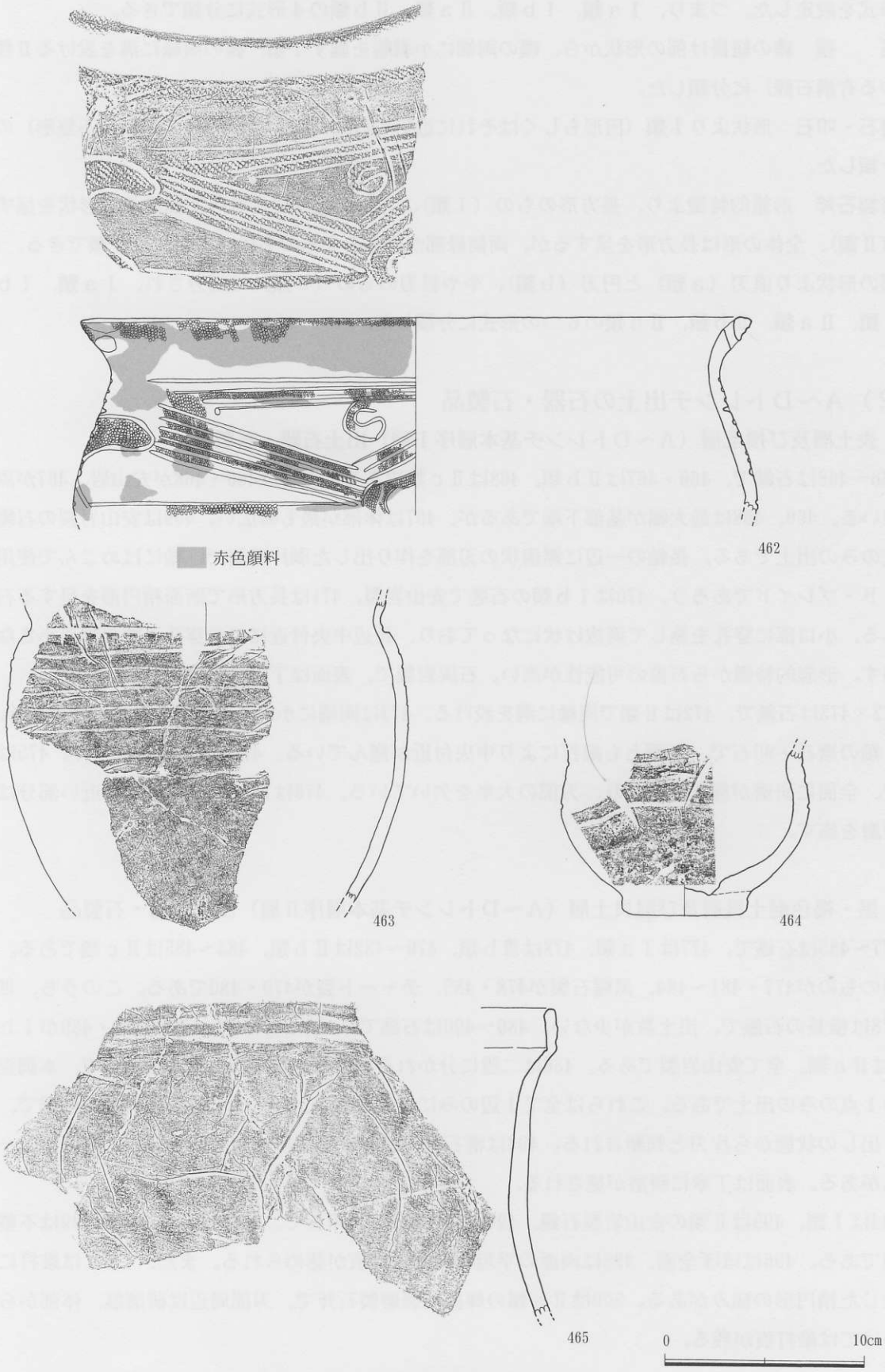
以下、土器・土製品と同様にＡ～Ｄトレンチ、Ｅトレンチに分けて、出土層位ごとに解説する。なお、石鏃、石匙、石錘、磨石・叩石、磨製石斧については以下のように分類した。

石　　鏃　平面の全体形態からⅠ類（正三角形もしくはそれに近いもの）とⅡ類（縦長二等辺三角形）、Ⅲ類（横長二等辺三角形）に分類した。さらに基部の形状からａ類（浅く抉れるもの）、ｂ類（Ｖの字形に抉れるもの）、ｃ類（Ｕの字形に抉れるもの）に細分でき、これらの組み合わせによりⅠａ類、Ⅰｂ類、Ⅰｃ類、Ⅱａ類、Ⅱｂ類、Ⅱｃ類の６つの形式に分類した。

石　　匙　平面の全体形態よりⅠ類（横長）、Ⅱ類（縦長）に分類でき、つまみ部の大小から、ａ類



第65図　出土地点不明縄文土器２（１／３）



第66図　出土地点不明縄文土器３（１／３）

（比較的大きく作り出すもの）、ｂ類（小さく作り出すもの）に細分できる。これらの組み合わせによって形式を設定した。つまり、Ⅰａ類、Ⅰｂ類、Ⅱａ類、Ⅱｂ類の４形式に分類できる。

石　　錘　礫の紐掛け部の形状から、礫の両端に小剥離を施すⅠ類、礫の周縁に溝を設けるⅡ類（いわゆる有溝石錘）に分類した。

磨石・叩石　形状よりⅠ類（円形もしくはそれに近いもの）、Ⅱ類（楕円形）、Ⅲ類（不整形）の３つに分類した。

磨製石斧　形態的特徴より、長方形のもの（Ⅰ類）、刃部が頭部にくらべて幅広く台形状を呈するもの（Ⅱ類）、全体の形は長方形を呈するが、両側縁部が膨らみをもつもの（Ⅲ類）に分類できる。また、刃部の形状より直刃（ａ類）と円刃（ｂ類）、やや斜刃のもの（ｃ類）に細分され、Ⅰａ類、Ⅰｂ類、Ⅰｃ類、Ⅱａ類、Ⅱｂ類、Ⅱｃ類の６つの形式に分類した。

（２）Ａ～Ｄトレンチ出土の石器・石製品

①　表土層及び撹乱層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅰ層）出土石器・石製品

466～468は石鏃で、466・467はⅡｂ類、468はⅡｃ類である。石材は466・468が安山岩、467が黒曜石を用いる。466、468は最大幅が基部下端であるが、467は体部が最も幅広い。469は安山岩製の石鋸で、１点のみの出土である。長軸の一辺に鋸歯状の刃部を作り出した剥片石器で、軸にはめこんで使用したサイド・ブレイドであろう。470はⅠｂ類の石匙で安山岩製。471は長方形で断面楕円形を呈する石製品である。小口部に穿孔を施して筒抜け状になっており、長辺中央付近にこの穿孔とつながる小さな穿孔を施す。形態的特徴から石笛の可能性が高い。石灰岩製で、表面は丁寧に研磨されている。

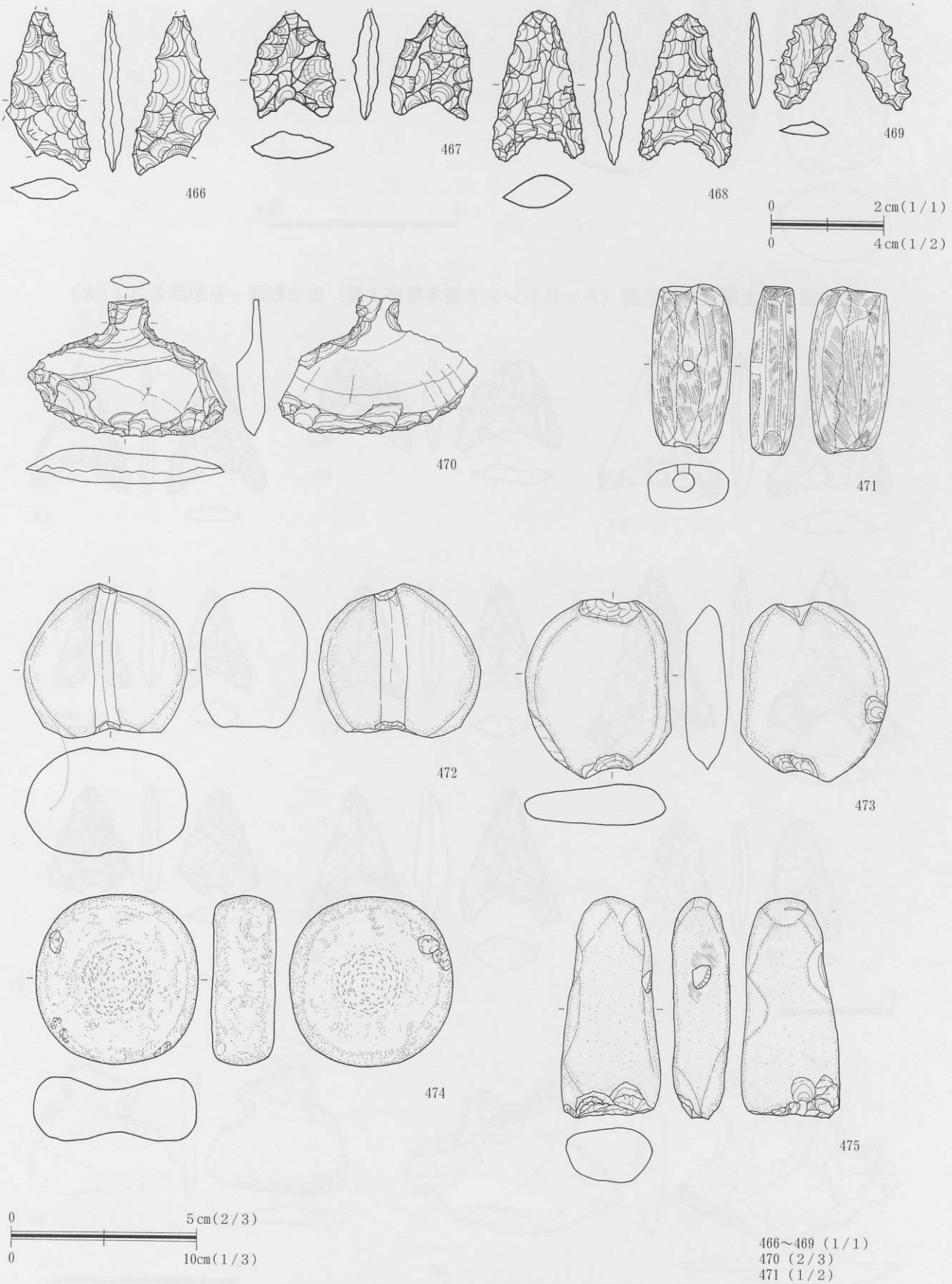
472・473は石錘で、472はⅡ類で周縁に溝を設ける。473は両端に小剥離を施すⅠ類の石錘である。474はⅠ類の磨石・叩石で、両面とも敲打により中央付近が窪んでいる。475・476は磨製石斧。475はⅡａ類で、全面に研磨が施されており、刃部の大半を欠いている。476はⅢｃ類で、刃部に近い部分は丁寧に研磨を施す。

②　黒・褐色混土貝層及び混貝土層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅱ層）出土石器・石製品

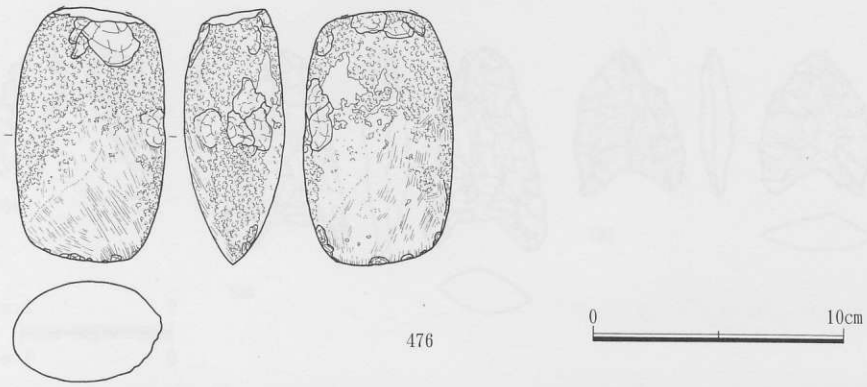
477～485は石鏃で、477はⅠａ類、478はⅢｂ類、479～482はⅡｂ類、483～485はⅡｃ類である。安山岩製のものが477・481～484、黒曜石製が478・485、チャート製が479・480である。このうち、Ⅲｂ類の478は横長の石鏃で、出土数が少ない。486～490は石匙で、486・487がⅠａ類、488・489がⅠｂ類、490はⅡａ類。全て安山岩製である。486は二股に分かれる大きなつまみ部を有するもので、本調査ではこの１点のみの出土である。これらは全て１辺のみに刃部をもつ。491・492は安山岩製の削器で、刃部作り出しの状態から片刃と判断される。493は滑石製垂飾で、平面形は楕円形を呈し、端部の１ヶ所に穿孔がある。表面は丁寧に研磨が施される。

494はⅠ類、495はⅡ類の安山岩製石錘。496～499は磨石・叩石で、496～498はⅠ類、499は不整形のⅢ類である。496はほぼ全面、498は両面の平坦な部分に磨痕が認められる。また、499には敲打によって生じた楕円形の窪みがある。500はⅡａ類の輝緑岩製磨製石斧で、刃部周辺は研磨痕、体部から頭部にかけては敲打痕が残る。

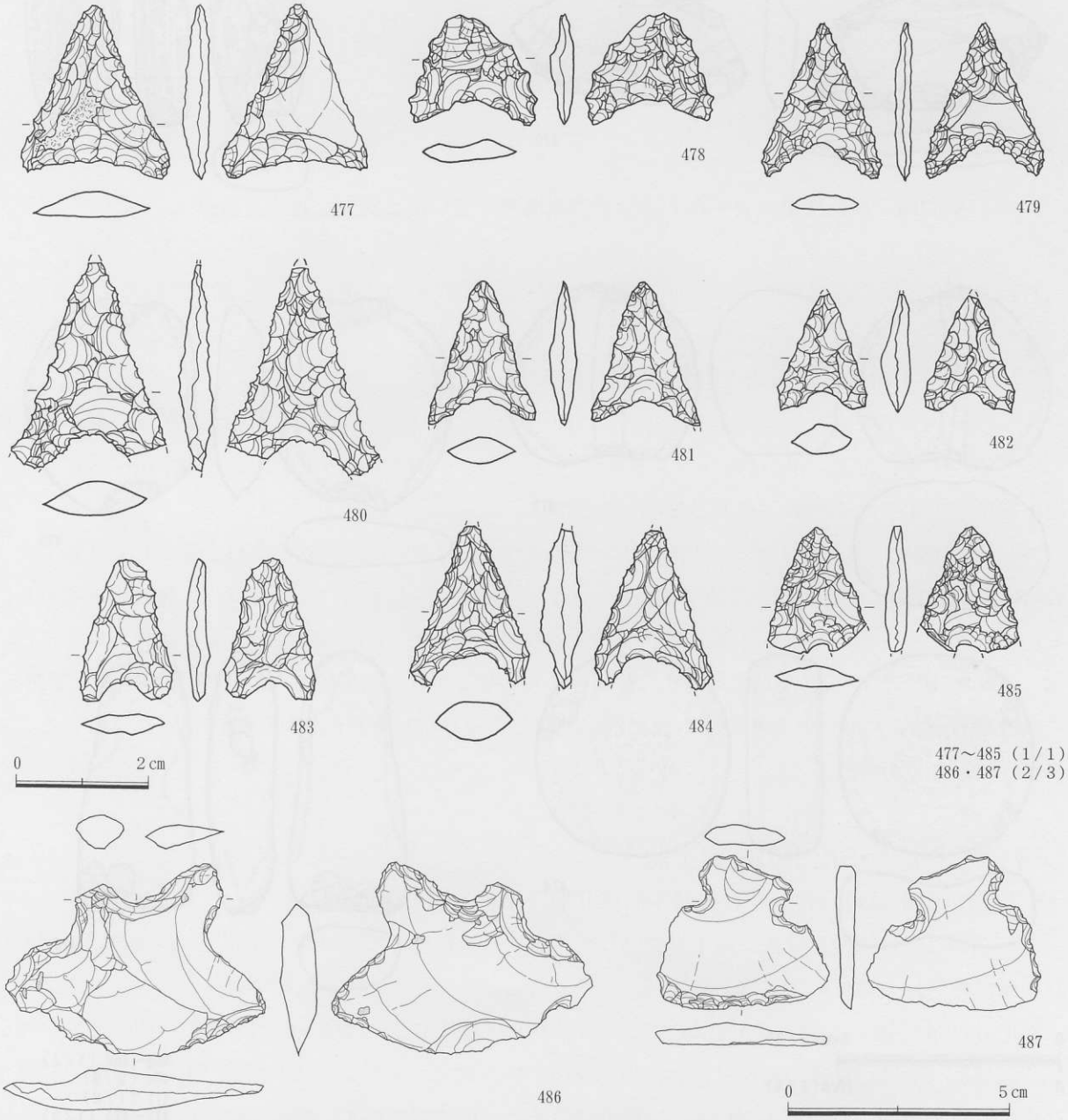
③　純貝層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅲ層）出土石器・石製品



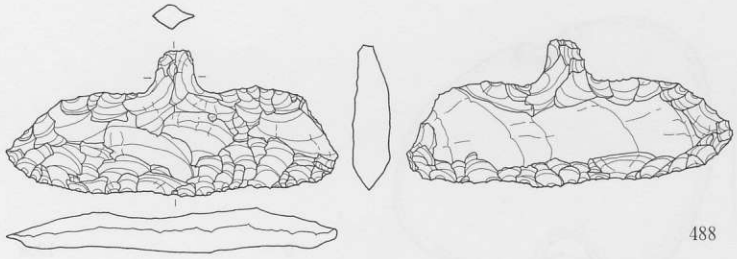
第67図　表土層及び撹乱層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅰ層）出土石器・石製品１（1/1、2/3、1/2、1/3）

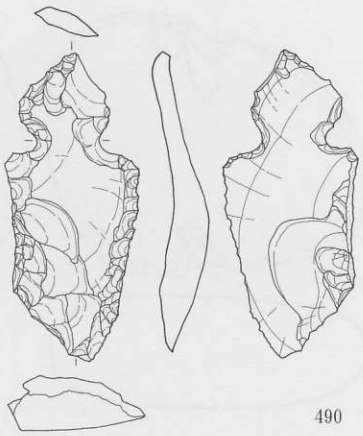


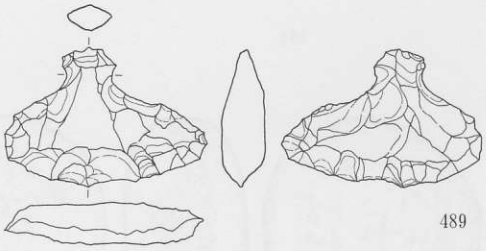
第68図　表土層及び撹乱層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅰ層）出土石器・石製品２（１/３）

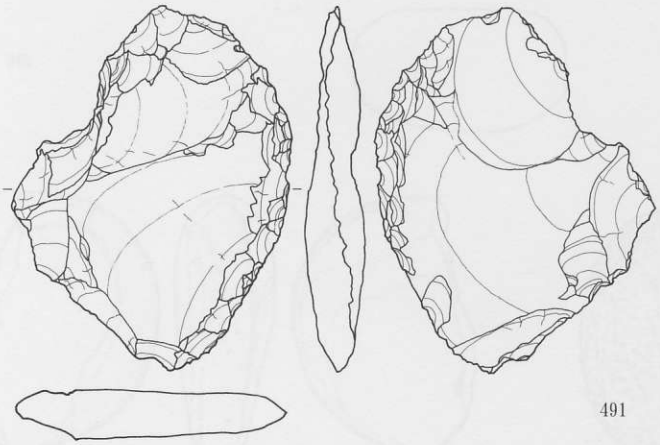


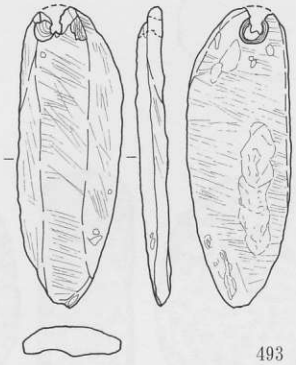
第69図　黒・褐色混土貝層及び混貝土層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅱ層）出土石器・石製品１（１/１、２/３）

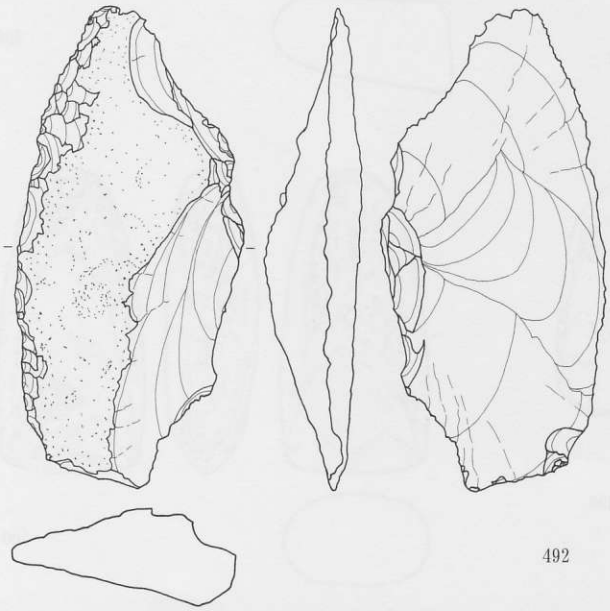




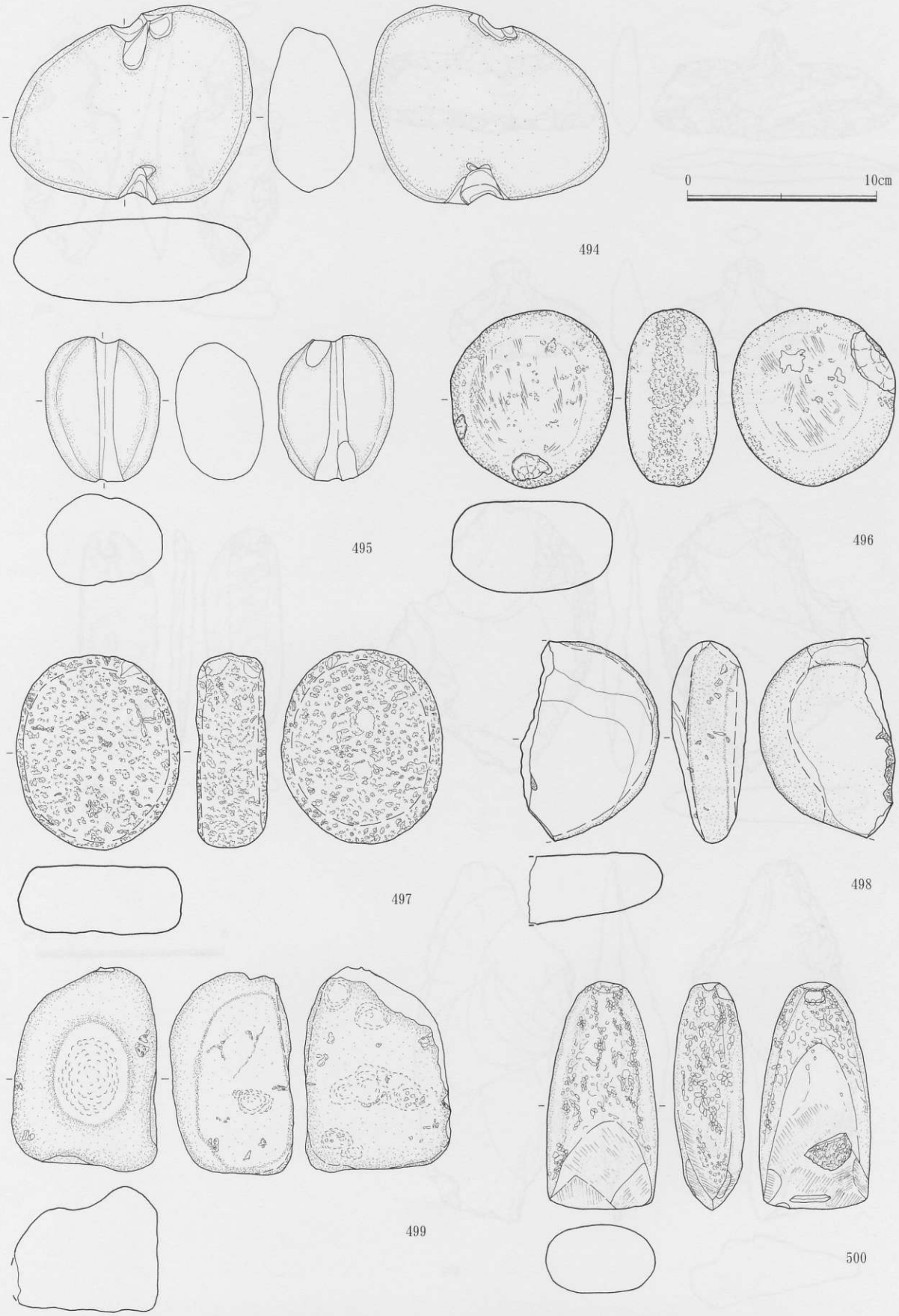




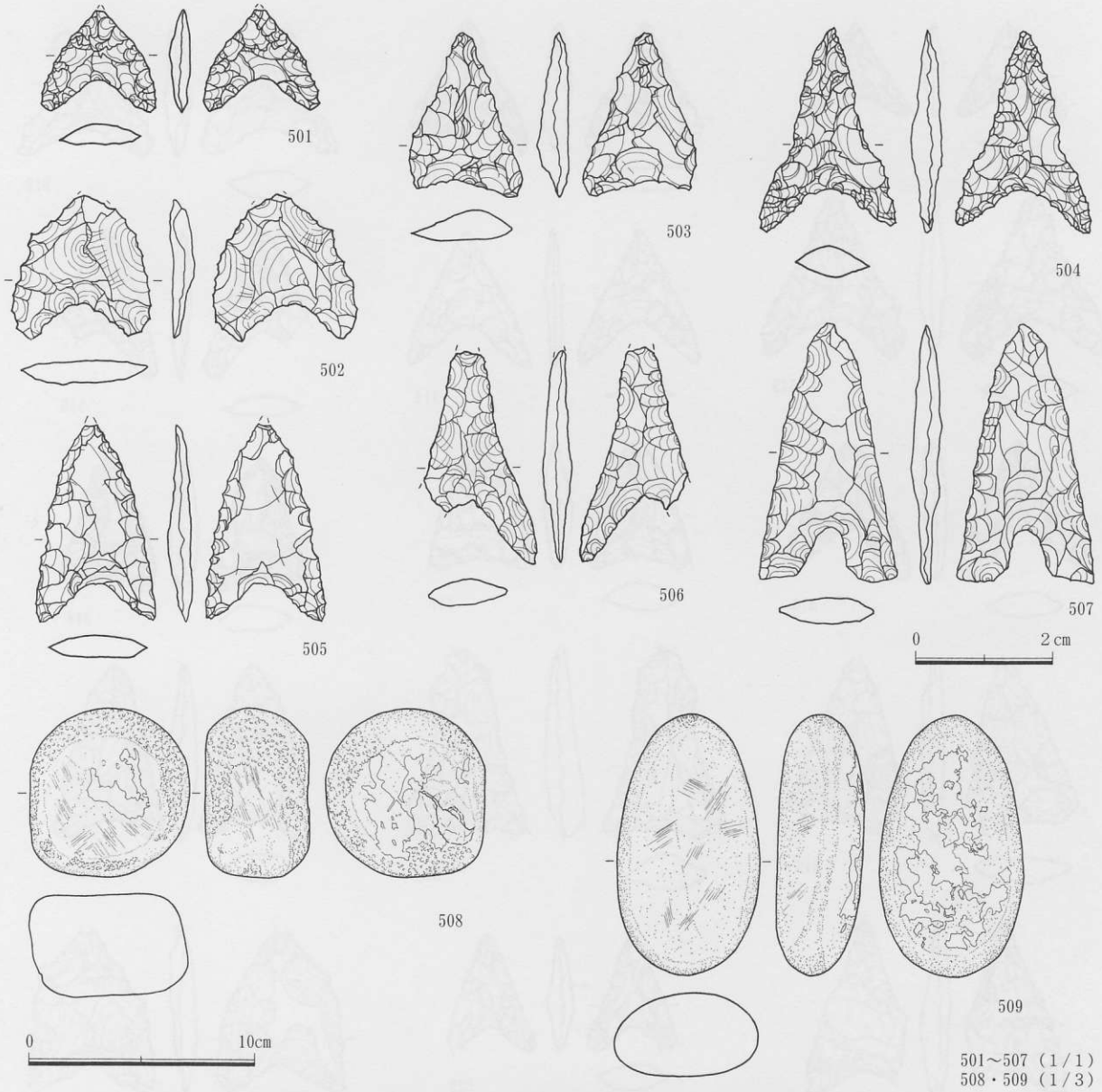




第70図　黒・褐色混土貝層及び混貝土層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅱ層）出土石器・石製品２（２/３）



第71図　黒・褐色混土貝層及び混貝土層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅱ層）出土石器・石製品３（1/3）

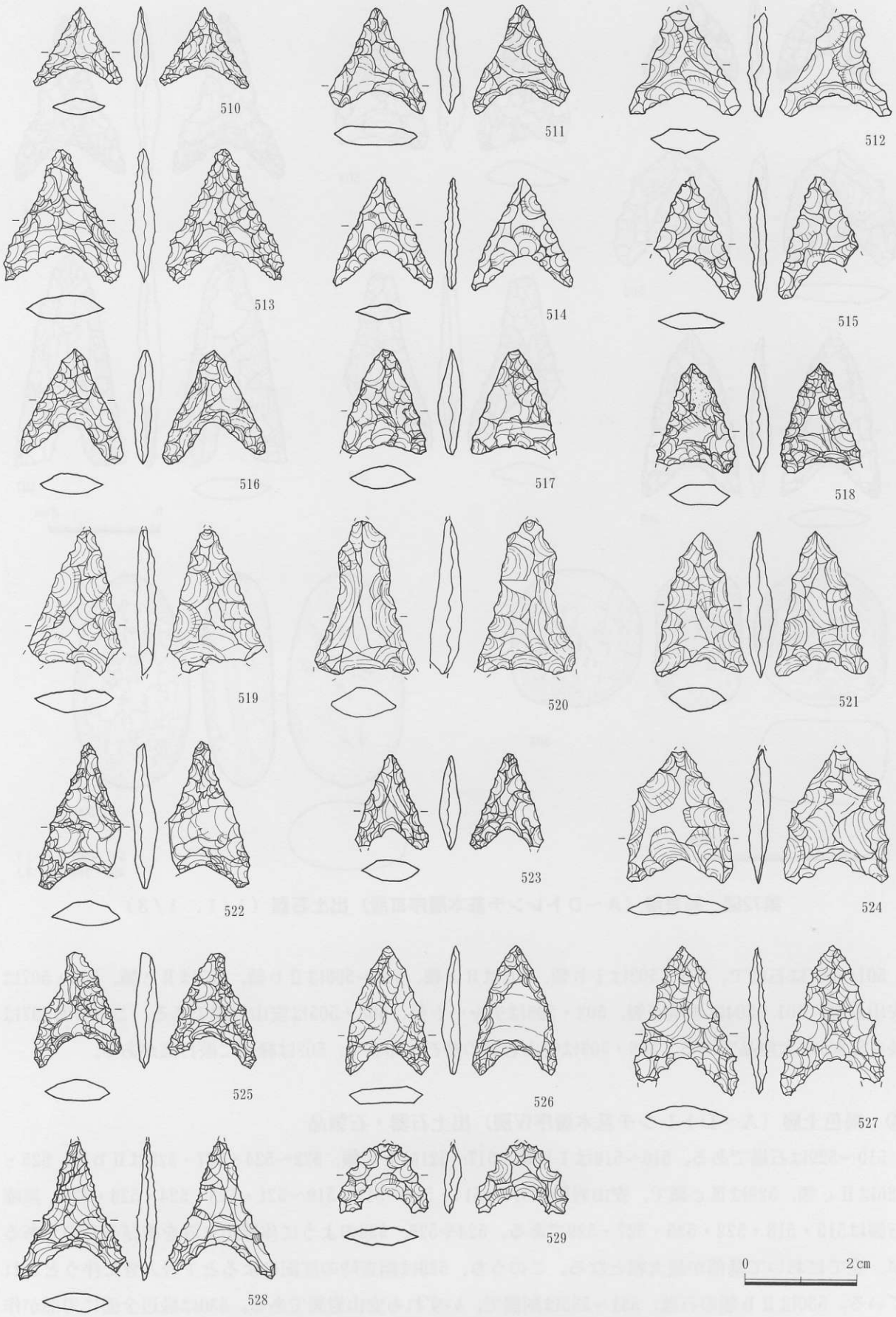


第72図　純貝層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅲ層）出土石器（1/1、1/3）

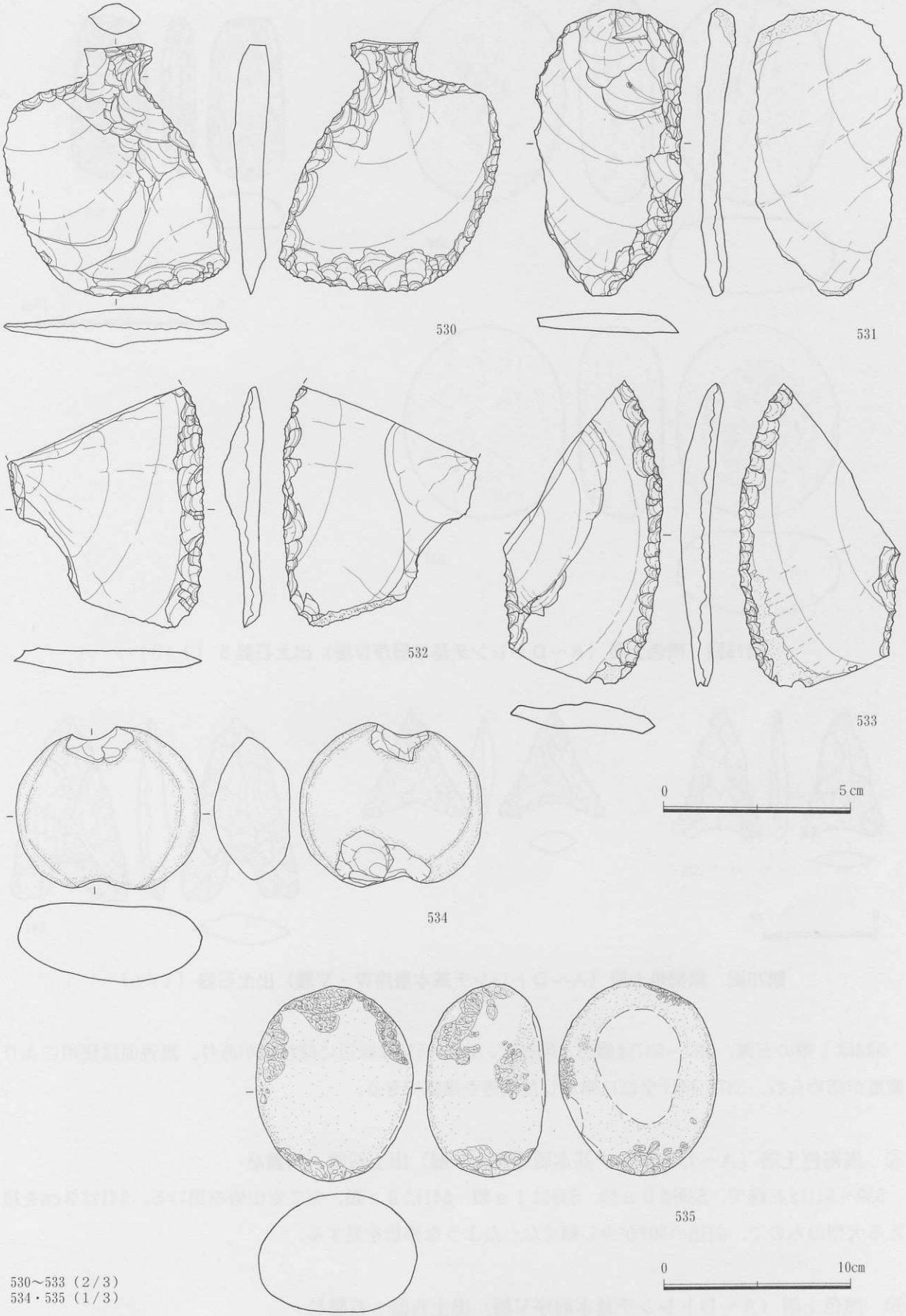
501～507は石鏃で、501・502はⅠｂ類、503はⅡａ類、504～506はⅡｂ類、507はⅡｃ類。505・507は安山岩製、501・504は黒曜石製、502・506はチャート製、503・505は安山岩製である。このうち507は長さ3.8cmの大型品である。508・509は安山岩製の磨石・叩石で、508は縁辺に敲打痕がある。

④　褐色土層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅳ層）出土石器・石製品

510～529は石鏃である。510～516はⅠｂ類、517～521はⅡａ類、522～524・527・528はⅡｂ類、525・526はⅡｃ類、529はⅢｃ類で、安山岩製は510～514・516・517・519～521・523・524・526・528、黒曜石製は515・518・522・525・527・529である。524や526、529のように体部が丸みを帯びるものもあるが、全てにおいて基部が最大幅となる。このうち、529は調査時の注記によると１号人骨に伴うとされている。530はⅡｂ類の石匙、531～533は削器で、いずれも安山岩製である。530は縁辺全面に刃部が作り出されている。また、削器は刃部の作り出しの状態から531は片刃、532・533は両刃である。

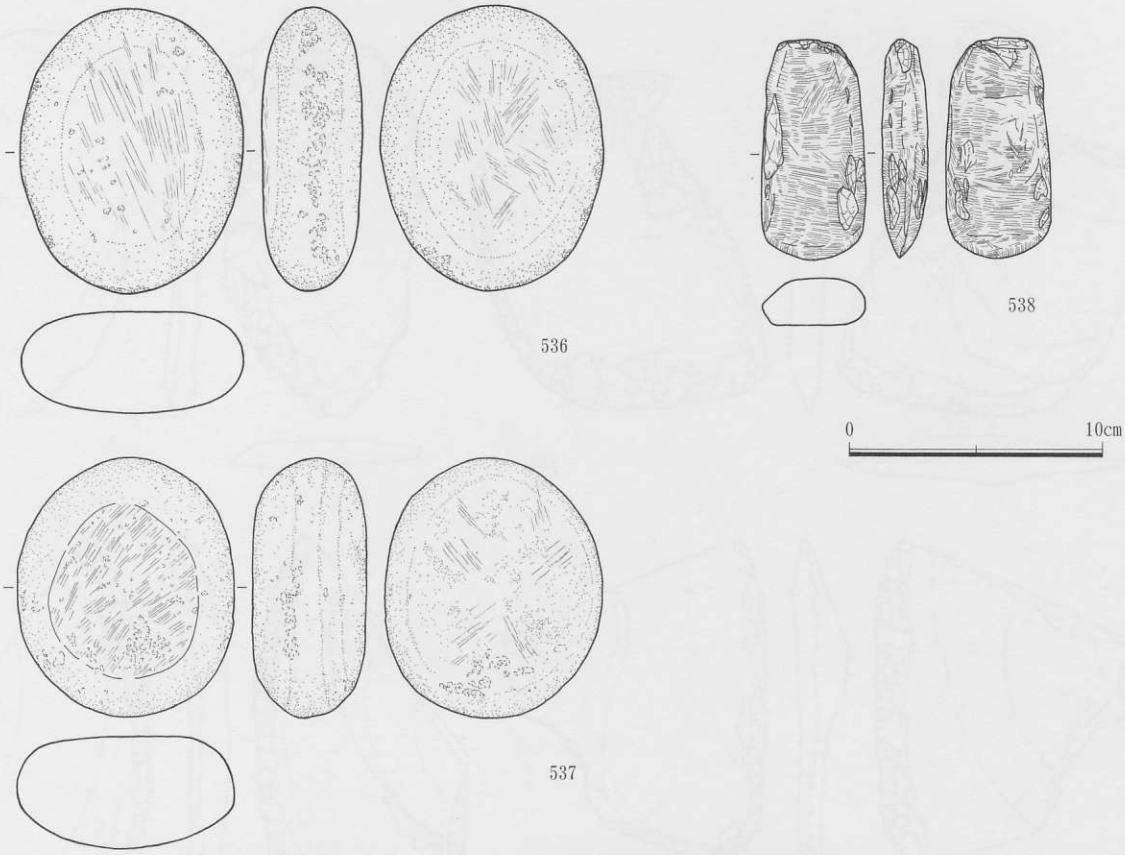


第73図　褐色土層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅳ層）出土石器１（１/１）

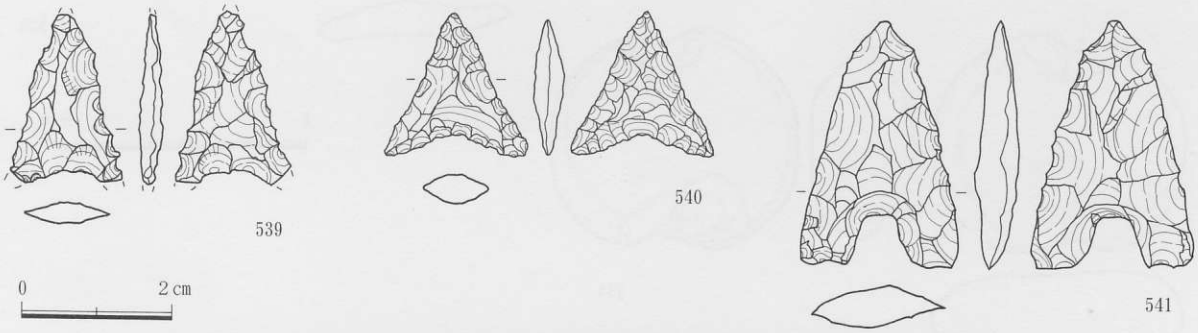


530～533（2/3）
534・535（1/3）

第74図　褐色土層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅳ層）出土石器２（2/3、1/3）



第75図　褐色土層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅳ層）出土石器３（１/３）



第76図　黒褐色土層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅳ・Ⅴ層）出土石器（１/１）

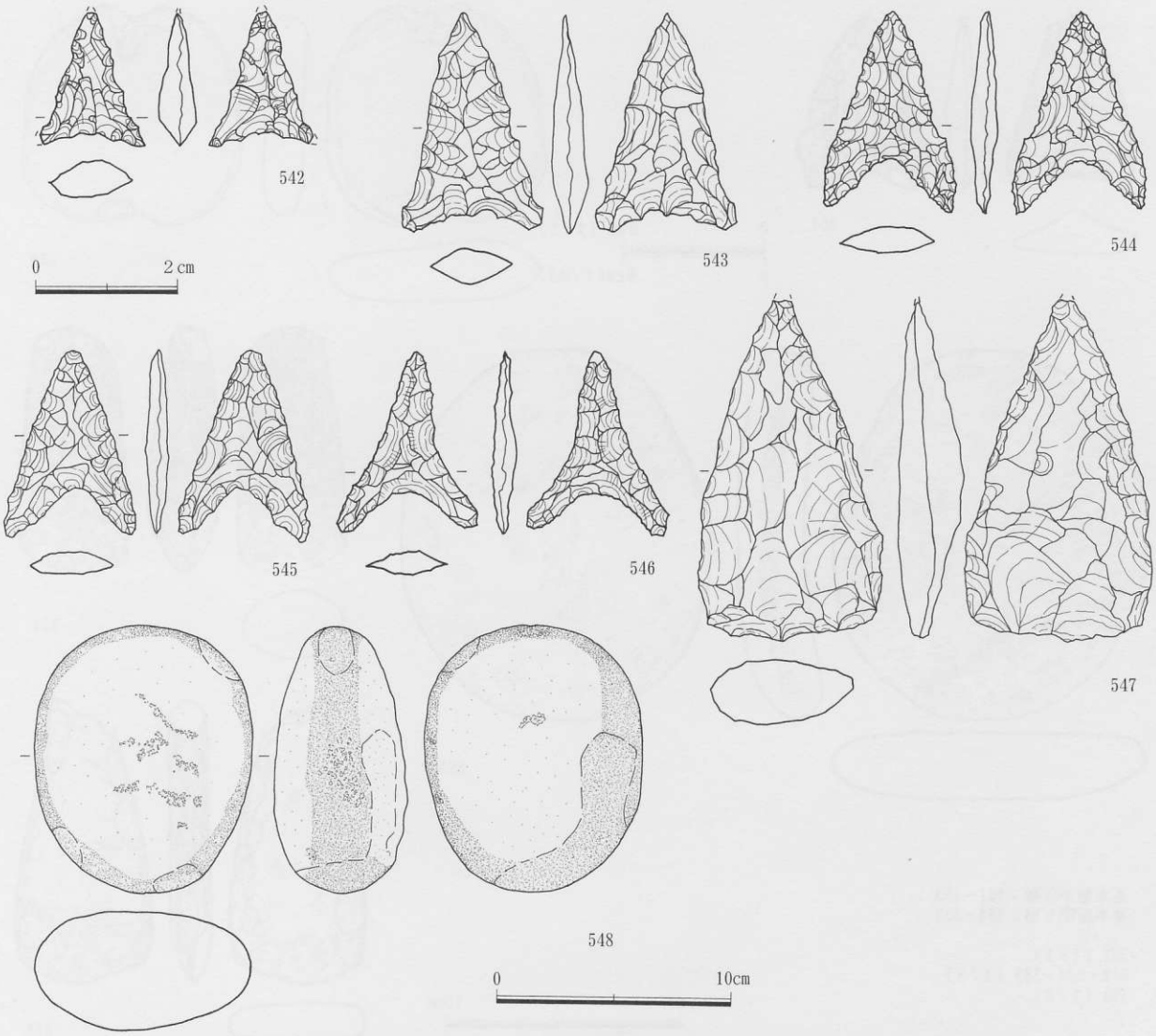
534はⅠ類の石錘、535～537は磨石・叩石で、535・536は縁辺に敲打痕があり、裏表面は使用により磨痕が認められ、537もほぼ全面に摩滅した痕跡を確認できる。

⑤　黒褐色土層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅳ・Ⅴ層）出土石器・石製品

539～541は石鏃で、539はⅡａ類、540はⅠａ類、541はⅡｃ類。全て安山岩を用いる。541は３cmを超える大型のもので、前述の507が少し短くなったような形状を呈する。

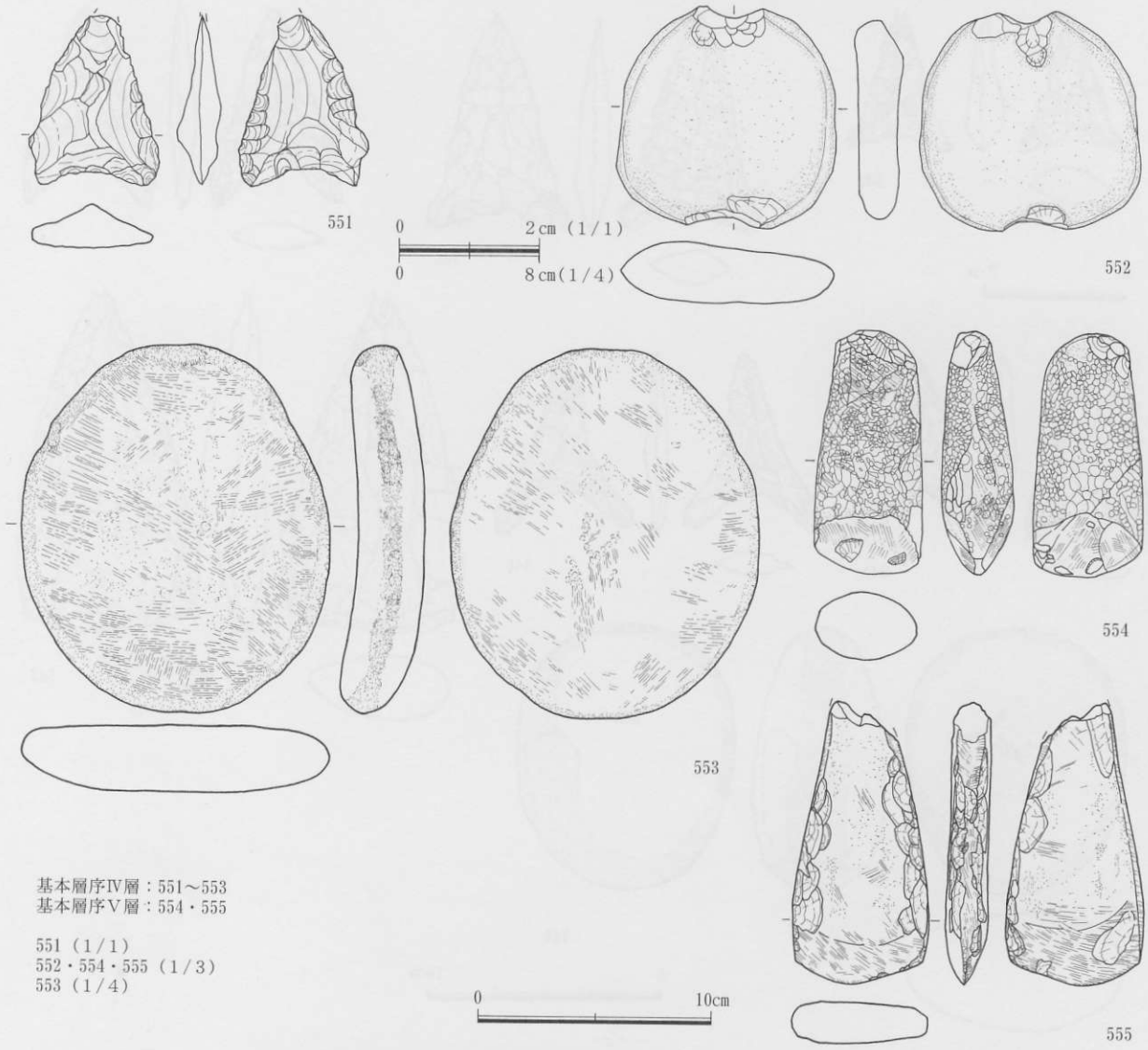
⑥　黒色土層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅴ層）出土石器・石製品

542～546は石鏃で、542・543はⅡａ類、544・545はⅡｂ類、546はⅡｃ類である。542は黒曜石、543



第77図　黒色土層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅴ層）出土石器（1/1、1/3）

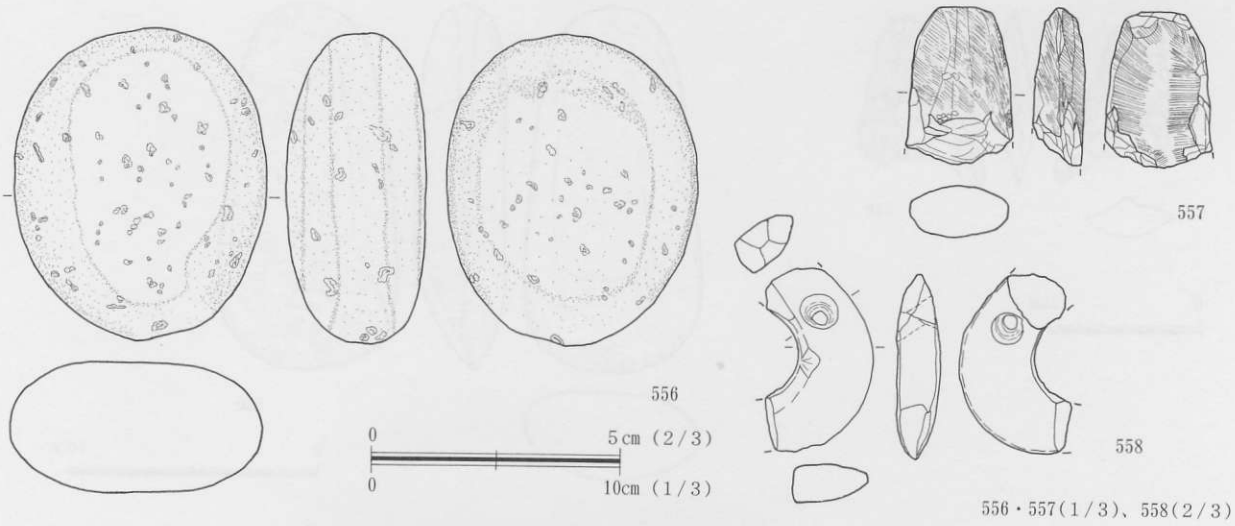
第78図　Ａ～Ｄトレンチ出土層位不明石器（1/1、1/3）



基本層序Ⅳ層：551～553
基本層序Ⅴ層：554・555

551（1/1）
552・554・555（1/3）
553（1/4）

第79図　Ｅトレンチ出土石器（1/1、1/3、1/4）



556・557(1/3)、558(2/3)

第80図　出土地点不明石器・石製品（2/3、1/3）

はチャート、544は凝灰岩、545はサヌカイト、546は安山岩で作られている。547は石鏃状を呈するが、復元長約５cmと石鏃とするには疑問が残り、厚さも通有の石鏃の２倍程度であることから、尖頭器と判断した。548はⅡ類の磨石・叩石で、縁辺を中心に敲打痕が残る。

⑦　Ａ～Ｄトレンチ出土層位不明石器

549はⅡａ類の石鏃で安山岩製。550は砂岩（ホルンフェルス）とみられる磨製石斧で、Ⅱｂ類に分類される。全面わたって丁寧な研磨が施される。

（３）Ｅトレンチ出土の石器

551～553は混土貝層Ⅱ（基本層序Ⅳ層）から出土した石器である。551は安山岩製のⅡａ類の石鏃で、基部は浅く抉れる。552は礫の両端に小剥離を施すⅠ類の石錘。553は楕円形を呈する安山岩製の石皿で、長辺側の両端がやや反り上がっており、使用面は摩滅している。

554・555は混貝土層（基本層序Ⅴ層）から出土した小型の磨製石斧である。554はⅠｂ類の石斧で、頭部から体部にかけては敲打痕が残り、使用により刃部が摩滅している。555は変成岩のホルンフェルスで製作したⅡｂ類の石斧で、頭部を欠損する。全体に丁寧な研磨が施される。

（４）出土地点不明石器・石製品

556は安山岩製の磨石・叩石で、Ⅱ類に分類される。557は体部の一部と刃部を欠損する磨製石斧である。刃部に向かって幅広くなっていることからⅡ類に分類される。表面は丁寧な研磨が施される。558は滑石製の玦状耳飾で、２/３程度を欠損している。裏表両側から施された穿孔が１ヶ所ある。

第４節　骨 角 器

（１）獣骨製品

559～563は骨製刺突具で、全て動物の四肢骨を使用しているとみられる。559・560・563は基部側が幅広で先端に向かって尖っており、561・562は幅が狭いまま先端部にいたる。559はＡトレンチ混土貝層（基本層序Ⅱ層）より出土したもので、全体を研磨整形して先端を尖らせており、破面も研磨されている。560は先端から基部まで良好に残存する資料で、全体に研磨が施され、基部にかかりを設けている。Ｄトレンチ純貝層（基本層序Ⅲ層）より出土。561はＡトレンチ７グリッドから出土しているが層位不明の資料で、全体に研磨が施されるが基部を欠損している。562はＥトレンチ混土貝層Ⅱ（基本層序Ⅳ層）出土で、先端部と基部を欠く。全体に研磨が施される。563は出土地点不明の資料で、基部から先端を欠損するが、それ以外は研磨されている。567は骨製刺突具か簪で、Ｅトレンチ混土貝層Ⅱ（基本層序Ⅳ層）より出土。これも先端部と基部を欠き、欠損部分以外は研磨が施されている。

568はＡトレンチ混土貝層（基本層序Ⅱ層）より出土した骨製簪もしくはヘラとみられ、基部を欠損しているが、先端部が残存する。全体に研磨が施される。骨製刺突具の形状に似るが先端部がやや丸く仕上げられている。569は完形の骨製簪で、末端部に沈線で区画された内部に格子目や斜位の沈線で装飾する。全体的に研磨が施されており光沢を帯びる。Ａトレンチ混土貝層（基本層序Ⅱ層）より出土。570もＡトレンチ混土貝層（基本層序Ⅱ層）から出土した骨製垂飾で、ほとんど整形を施さず、骨の形を

そのまま利用している。

（2）魚骨製品

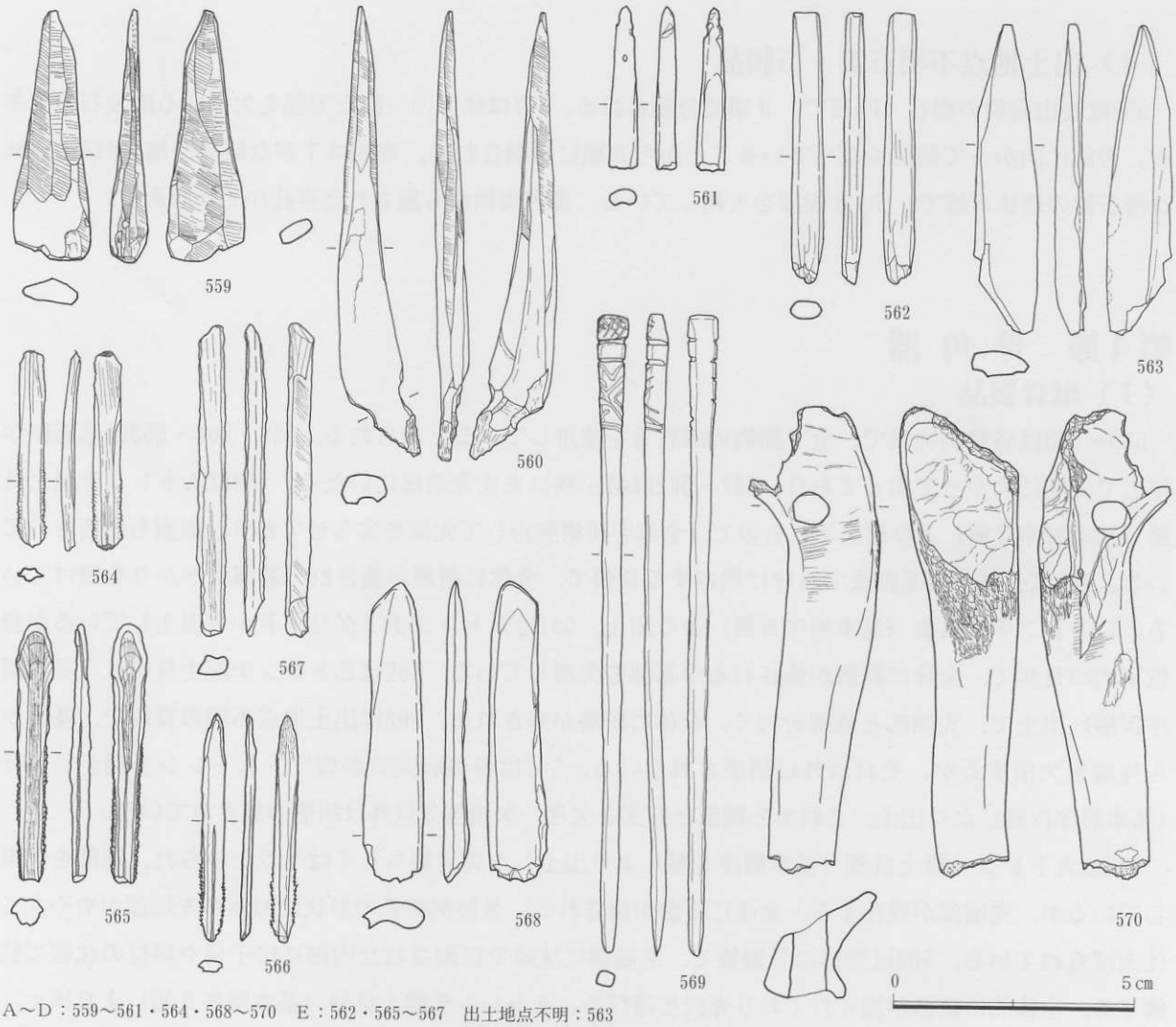
564～566は魚骨製刺突具である。いずれもエイ類尾棘を利用したもので、基部は未加工で鋸歯状の細かな突起が付いている。564はCトレンチ褐色土層（基本層序Ⅳ層）から出土したもので、先端部を欠く。565・566はEトレンチ混土貝層Ⅱ（基本層序Ⅳ層）から出土したもので、いずれも先端部が残存する。566は研磨により先端部を尖らせるが、565は先端が丸みを帯びていることから簪の可能性もある。

第5節　貝製品

（1）貝製品の概要

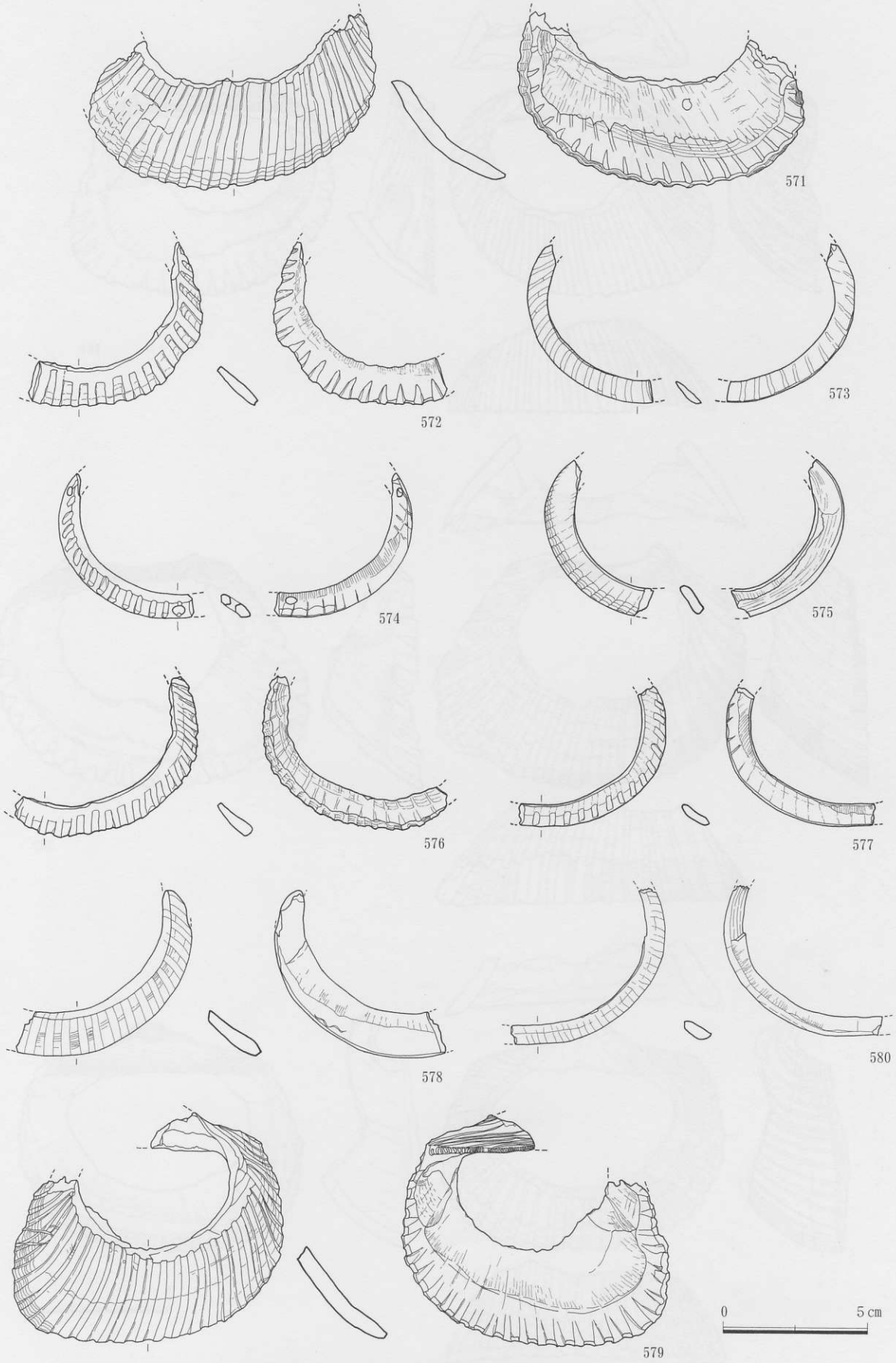
本稿で掲載した貝製品は全て貝輪である。材質はフネガイ科サルボウ、同アカガイ、タマキガイ科ベンケイガイ、アクキガイ科アカニシの4種であり、腹足類（巻貝）のアカニシ以外は全て斧足類（二枚貝）である。割合的にはフネガイ科の2つの貝種が多数を占める。

斧足類の貝輪は形状や加工方法より2種に大別できる。ひとつは、貝輪の素材となる貝殻の中央部に

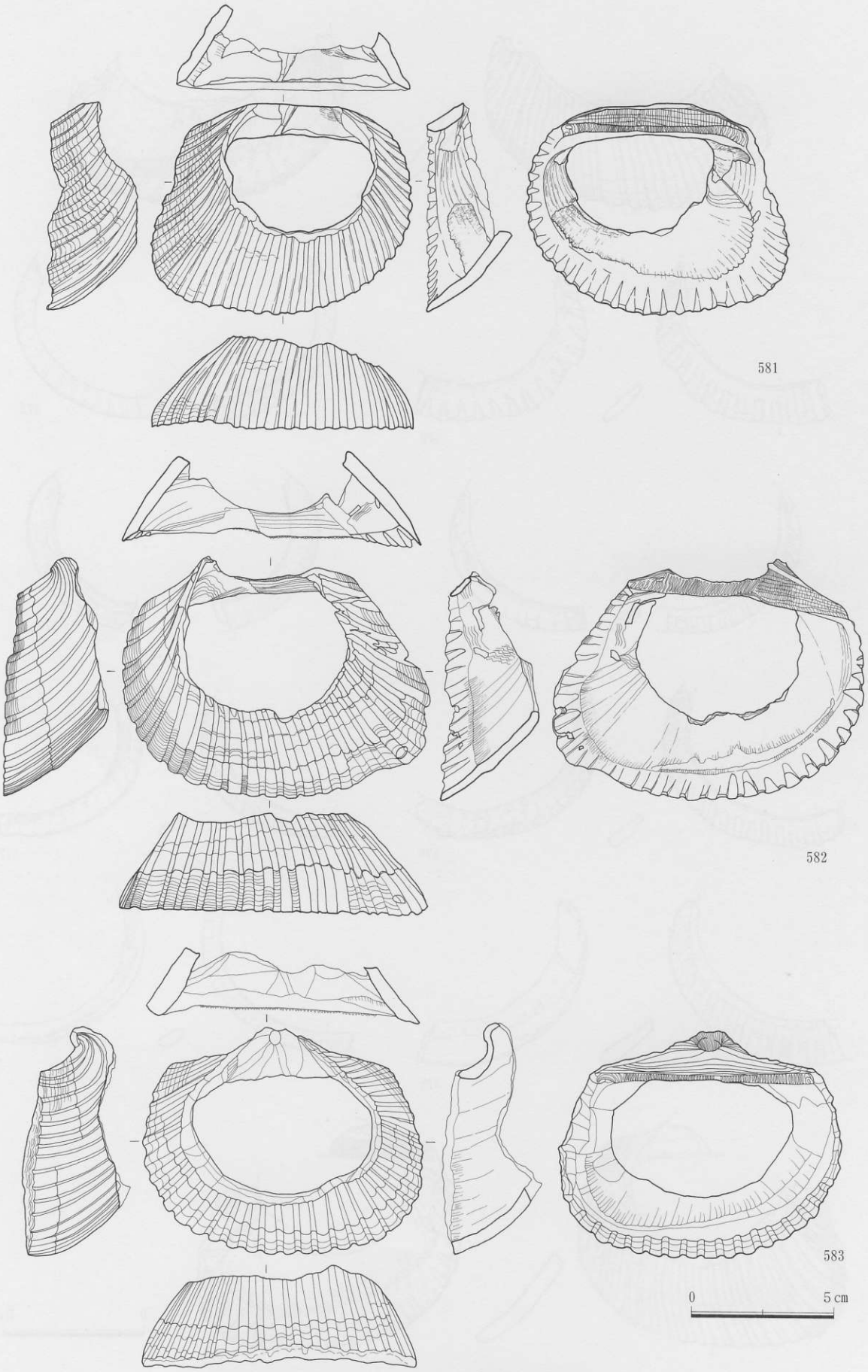


A～D：559～561・564・568～570　E：562・565～567　出土地点不明：563

第81図　出土骨角器（2/3）

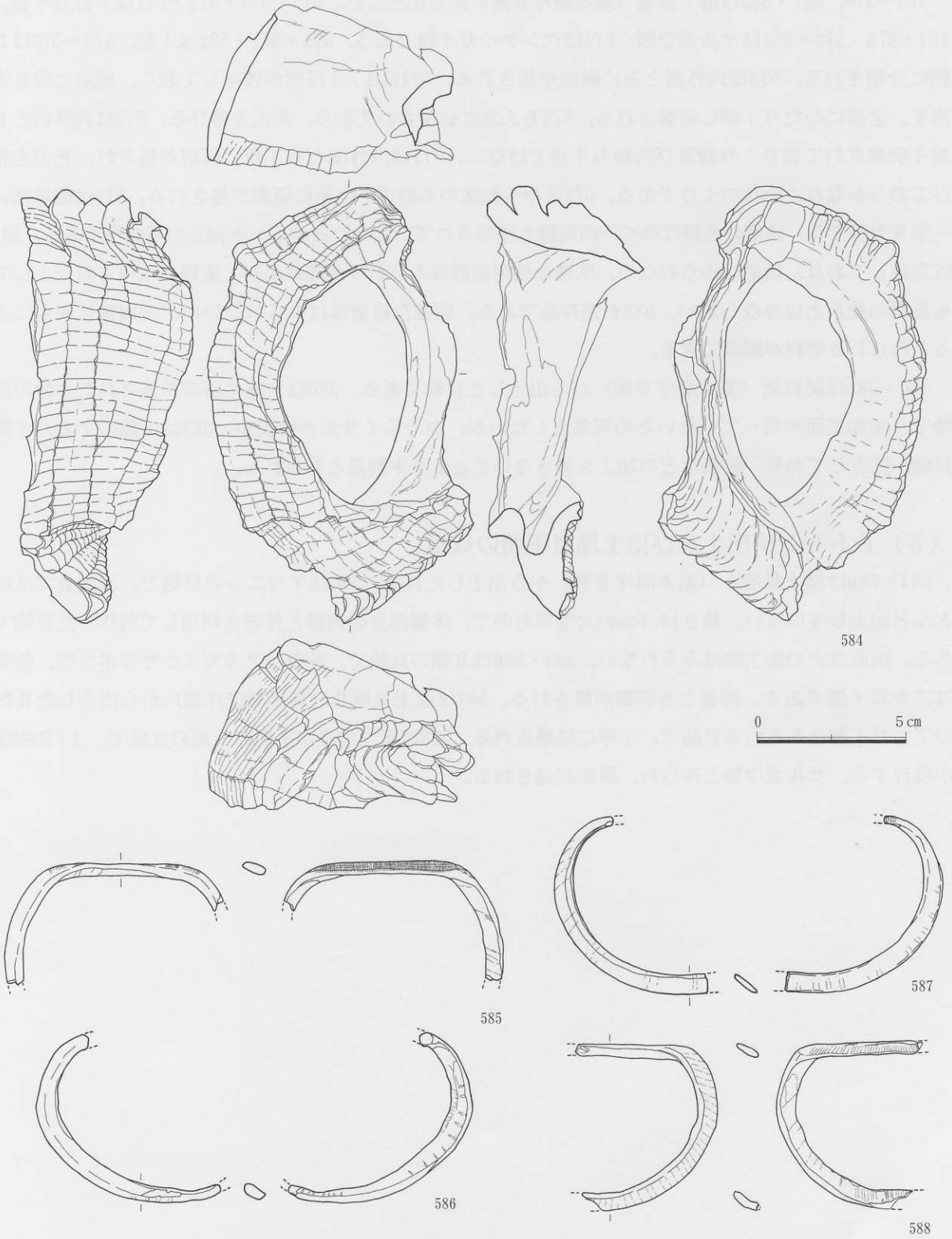


第82図　Ａ～Ｄトレンチ出土貝製品１（1/2）



第83図　A～Dトレンチ出土貝製品2（1/2）

孔をあけるが、表面を研磨などの加工を行わないもので、これをⅠ類とする。この形式は総じて貝の幅が広い。もうひとつは、貝殻の中央部に孔をあけた後、研磨を施すもので、貝の幅が狭く釧状を呈する。これをⅡ類とする。571～583はＡ～Ｄトレンチ、584～587まではＥトレンチから出土した貝輪で、588は出土地点が不明のものである。



第84図　Ｅトレンチ出土及び出土地点不明貝製品（1/2）

（2）A～Dトレンチ出土の貝輪

571・572は撹乱層（基本層序Ⅰ層）から出土したもので、いずれもサルボウ製。571はⅠ類で研磨が施されておらず、内周縁も明確な整形痕がみられないことから未製品とみられる。572はⅡ類で外面は粗い研磨が施される。内周縁もわずかながら研磨もしくは磨耗している。

573～579、581・582は混土貝層（基本層序Ⅱ層）より出土した。573・577・578・582はアカガイ製、574・576・579・581はサルボウ製、575はベンケイガイ製である。579・581・582はⅠ類、573～578はⅡ類に分類される。573は内外面ともに研磨が施される。574は1/3程度が残存しており、両端に穿孔を施す。全面にわたり丁寧に研磨される。575も入念に研磨されており、光沢を帯びる。576は内外面とも粗く研磨されており、外縁及び内縁も平滑ではない。577は内外面とも丁寧に研磨が施され、光沢を帯びておりかなり入念なつくりである。578はやや幅広のもので、全面に研磨が施される。579は蝶番部の一部を欠損する。研磨の痕跡はなく、内周縁も整形されていないことから、未製品の可能性がある。581は完存しており、研磨はみられない。明確な使用痕跡はみられず未完成品か。実際に使用されたとしても長期の使用とはみなし難い。582も完存品である。明確な研磨痕はみられないが、内周縁に使用によるとみられる磨耗が観察できる。

580・583は純貝層（基本層序Ⅲ層）から出土した貝輪である。580は全体に研磨が施されたⅡ類の貝輪で、未加工面が残っていないため判然としないが、おそらくサルボウ製か。583はⅠ類のアカガイ製貝輪。完存しており、研磨などの加工を施さないことから未製品とみられる。

（3）Eトレンチ出土及び出土地点不明の貝輪

584～586は混土貝層Ⅰ（基本層序Ⅱ層）から出土した貝輪。584はアカニシの貝輪で、本調査ではほとんど出土していない。長さ14.7cmの大型のもので、体層部分の内唇と外唇を利用して製作した貝輪である。研磨などの加工痕はみられない。585・586はⅡ類の貝輪で、前者はアカガイかサルボウ製、後者はアカガイ製である。両者とも研磨が施される。587は混土貝層Ⅱ（基本層序Ⅳ層）から出土したⅡ類のアカガイ製とみられる貝輪で、丁寧に研磨される。588は出土地点が不明のⅡ類の貝輪で、1/2程度が残存する。サルボウ製とみられ、研磨が施される。

第2表　縄文土器・土製品観察表1

挿図番号	実測番号	調査地点	層位	基本層序	器種	残存部位	器面調整（内面／外面）	胎土	焼成	色調（内面／外面）	口径(cm)	残存高(cm)	分類	備考
1	90	A19	撹乱層	Ⅰ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	角閃石、石英、1～3mm程度の砂粒	良好	にぶい黄褐／にぶい黄橙	－	6.4	Ⅰb	
2	368	A6	撹乱層	Ⅰ	深鉢	胴部	ナデ／ナデ	角閃石、長石、1mm程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／にぶい黄橙	－	7.9	Ⅰa	
3	365	A17	撹乱層下部	Ⅰ	深鉢	口縁～胴部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕	1mm程度の砂粒	良好	灰黄褐／にぶい褐	－	7.5	Ⅲb5	
4	353	A19	撹乱層	Ⅰ	深鉢	口縁～胴部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、1mm程度の砂粒	良好	褐灰／にぶい赤褐	－	6.5	Ⅲc2	
5	168	B2	撹乱層	Ⅰ	深鉢	口縁部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、1mm程度の砂粒	良好	にぶい褐／灰褐	－	7.4	Ⅲc1	
6	164	B3	撹乱層	Ⅰ	深鉢	口縁部	貝殻条痕／貝殻条痕→ナデ	角閃石、1mm程度の砂粒	良好	にぶい黄褐／褐灰	－	5.4	Ⅲd1	
7	187	C5	撹乱層	Ⅰ	鉢	口縁部	ナデ／ナデ	1mm程度の砂粒	良好	にぶい褐／褐灰	－	5.0	Ⅲd1	
8	290	D1	表土層	Ⅰ	鉢	口縁部	ナデ／貝殻条痕？	角閃石、1mm程度の砂粒	良好	にぶい褐／にぶい褐	－	4.8	Ⅲd1	
9	263	B7	撹乱貝層	Ⅰ	深鉢	口縁部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、1mm程度の砂粒	良好	黒褐／黒褐	－	4.4	Ⅲd1	
10	378	A12	撹乱層	Ⅰ	鉢	胴部	ナデ／ナデ	角閃石、1mm程度の砂粒	良好	にぶい黄褐／にぶい褐	－	6.4	Ⅲe2	
11	568	A12	撹乱層	Ⅰ	深鉢	胴部	ナデ／ナデ	角閃石、石英、1～2mm程度の砂粒	良好	灰黄褐／褐灰	－	7.6	Ⅲg	
12	68	A1	表土層	Ⅰ	深鉢	底部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、1mm程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／橙	－	5.5	Ⅲ	底径8.9cm
13	217	C14	撹乱層	Ⅰ	鉢	底部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	1～3mm程度の砂粒	やや不良	灰黄褐／明赤褐	－	5.5	Ⅲ	
14	216	B7	撹乱貝層	Ⅰ	深鉢	口縁～胴部	ナデ／ナデ	滑石多量に含む	良好	にぶい橙／褐灰	－	7.7	Ⅳa	
15	446	A2	撹乱層	Ⅰ	鉢	口縁部～胴部	ナデ／ナデ	滑石、1～3mm程度の砂粒	良好	灰黄褐／灰褐	－	10.7	Ⅳb1	
16	314	C2	撹乱層	Ⅰ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	1～2mm程度の砂粒	良好	にぶい赤褐／明赤褐	－	7.0	Ⅳb1	
17	108	A2	撹乱層	Ⅰ	深鉢	口縁部	ナデ／ケズリ→ナデ	1mm程度の砂粒	良好	にぶい赤褐／灰褐	－	5.8	Ⅳb2	
18	204	C3	撹乱層	Ⅰ	深鉢	口縁～胴部	ナデ／ケズリ→ナデ	雲母、1mm程度の砂粒	良好	にぶい褐／にぶい赤褐	－	6.0	Ⅳb2	
19	324	A19	撹乱層	Ⅰ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	1mm以下の砂粒	良好	灰褐／黒褐	－	6.6	Ⅳb2	
20	149	C5	撹乱層	Ⅰ	鉢	口縁部	ナデ／ナデ	1mm程度の砂粒	良好	にぶい褐／褐灰	－	6.0	Ⅳb2	
21	145	D18	撹乱貝層	Ⅰ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	角閃石、1～2mm程度の砂粒	良好	灰黄褐／黒褐	－	6.2	Ⅳb2	
22	191	D20	撹乱層	Ⅰ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	1～3mm程度の砂粒	良好	にぶい赤褐／にぶい橙	－	5.8	Ⅳb2	
23	258	A2	撹乱層	Ⅰ	深鉢	口縁～胴部	ケズリ→ナデ／ケズリ→ナデ	角閃石、1～3mm程度の砂粒	良好	にぶい褐／灰褐	－	6.2	Ⅳc2	
24	443	A2	撹乱層	Ⅰ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	1～2mm程度の砂粒	良好	明赤褐／にぶい赤褐	－	4.4	Ⅳc2	
25	436	A2	撹乱層	Ⅰ	深鉢	口縁部～胴部	貝殻条痕→ナデ／ナデ	角閃石、1mm程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／橙	－	6.5	Ⅳc2	
26	305	A2	撹乱層	Ⅰ	深鉢	口縁～胴部	ナデ／ナデ	1mm程度の砂粒	良好	褐／にぶい赤褐	－	6.8	Ⅳb2	
27	285	A12	撹乱層	Ⅰ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	角閃石、1mm程度の砂粒	良好	にぶい橙／にぶい橙	－	4.5	Ⅳc2	
28	115	A2	撹乱層	Ⅰ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	角閃石、石英、長石、1～2mm程度の砂粒	良好	にぶい褐／灰黄褐	－	8.2	Ⅳd	
29	299	A2	撹乱層	Ⅰ	鉢	口縁部	ナデ／ケズリ→ナデ	角閃石、1mm程度の砂粒	良好	褐灰／灰褐	－	5.5	Ⅳd	
30	325	B3	撹乱層	Ⅰ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	雲母、1mm以下の砂粒	良好	黒褐／にぶい赤褐	－	4.9	Ⅳb2	
31	427	A2	撹乱層	Ⅰ	鉢	口縁部	ナデ→ミガキ／ナデ→ミガキ	角閃石、1mm程度の砂粒	良好	灰黄褐／灰褐	－	3.5	Ⅳd	
32	437	A2	撹乱層	Ⅰ	深鉢	口縁部～胴部	ナデ／ケズリ→ナデ	雲母、角閃石、1mm程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／にぶい黄橙	－	5.4	Ⅳd	
33	449	A19	撹乱層	Ⅰ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	1mm程度の砂粒	良好	にぶい橙／褐灰	－	5.2	Ⅳd	
34	221	A2	撹乱層	Ⅰ	深鉢	底部	ナデ／ナデ	雲母、角閃石、1mm程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／灰黄褐	－	5.3	Ⅳ	復元底径10.4cm、底面に鯨脊椎骨痕
35	122	C15	撹乱層	Ⅰ	深鉢	底部	ナデ／ナデ→ミガキ	角閃石、長石、石英、1～3mm程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／にぶい橙	－	8.0	Ⅳ	底径8.0cm
36	345	D13	表土層	Ⅰ	鉢	底部	ナデ／ナデ	角閃石、1mm程度の砂粒	良好	にぶい赤褐／にぶい黄橙	－	2.4	Ⅳ	底径9.8cm
37	336	A2	撹乱層	Ⅰ	深鉢	底部	ナデ／ケズリ、ナデ	角閃石、石英、1～3mm程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／にぶい橙	－	4.0	Ⅳ	復元底径14.7cm、底面に鯨脊椎骨痕
38	347	C5	撹乱層	Ⅰ	深鉢	底部	ナデ／ナデ	滑石、1mm程度の砂粒	良好	灰黄褐／にぶい褐	－	2.8	Ⅳ	底径14.3cm
39	337	B7	撹乱貝層	Ⅰ	深鉢	底部	ナデ／ケズリ、ナデ	角閃石、1～3mm程度の砂粒	良好	にぶい褐／にぶい赤褐	－	2.9	Ⅳ	底径14.0cm、底面に木葉と鯨脊椎骨痕

第３表　縄文土器・土製品観察表２

挿図番号	実測番号	調査地点	層　位	基本層序	器種	残存部位	器面調整（内面／外面）	胎　土	焼成	色調（内面／外面）	口径(cm)	残存高(cm)	分類	備　考
40	334	A2	撹乱層	Ⅰ	鉢	口縁～胴部	ミガキ／ナデ→ミガキ	１mm程度の砂粒	良好	黒／黒褐	－	6.5	Ⅵa	赤色顔料付着
41	98	C5	撹乱層	Ⅰ	鉢？	底部	ナデ→ミガキ／ナデ→ミガキ	１～４mm程度の砂粒	良好	褐灰／灰褐	－	3.8	Ⅵc	復元底径13.9cm
42	445	C15	撹乱層	Ⅰ	深鉢	口縁部～胴部	ナデ／ナデ	角閃石、石英、長石、１mm程度の砂粒	良好	褐灰／にぶい黄褐	－	5.2	Ⅶ	
43	556	C15	撹乱層	Ⅰ	深鉢	口縁部～胴部	ナデ／ナデ	角閃石、石英、１～２mm程度の砂粒	良好	にぶい褐／にぶい褐	－	7.2	Ⅶ	
44	257	C14	撹乱層	Ⅰ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	角閃石、石英、長石、１～２mm程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／にぶい黄橙	－	6.9	Ⅶ	
45	479	C4	撹乱層	Ⅰ	浅鉢	口縁部～胴部	ナデ→ミガキ／ナデ→ミガキ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	灰黄褐／灰黄褐	－	4.8	Ⅶ	
46	478	C15	撹乱層	Ⅰ	浅鉢	口縁部～胴部	ナデ→ミガキ／ナデ→ミガキ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	浅黄橙／にぶい黄橙	－	4.3	Ⅶ	
47	350	A9	混貝土層	Ⅱ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	角閃石、１～２mm程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／にぶい黄橙	－	6.4	Ⅱa	
48	487	A9	混貝土層	Ⅱ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	角閃石、１～３mm程度の砂粒	良好	灰黄褐／にぶい黄橙	－	4.5	Ⅱb	
49	138	A14	混土貝層	Ⅱ	深鉢	口縁～胴部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	灰黄／にぶい黄橙	－	9.8	Ⅲ？	
50	364	A24	混貝土層	Ⅱ	深鉢	口縁部	貝殻条痕／貝殻条痕	１mm程度の砂粒	良好	にぶい褐／褐灰	－	6.0	Ⅲa1	
51	387	D1･A20	混土貝層	Ⅱ	深鉢	胴部	貝殻条痕／貝殻条痕	１mm程度の砂粒	良好	暗灰黄／にぶい橙	－	7.7	Ⅲa1	
52	123	A13	混土貝層	Ⅱ	深鉢	底部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕	１mm程度の砂粒	良好	にぶい黄褐／灰黄褐	－	5.6	Ⅲa1	底径2.4cm
53	276	A14	混土貝層	Ⅱ	深鉢	口縁部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	にぶい黄褐／にぶい黄褐	－	6.4	Ⅲa1	
54	497	D22	混土貝層	Ⅱ	鉢	口縁部	貝殻条痕→ナデ／ナデ	１mm程度の砂粒	良好	にぶい黄褐／にぶい黄橙	－	3.2	Ⅲb2	
55	244	A20	混土貝層	Ⅱ	鉢	口縁部	貝殻条痕／貝殻条痕	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	にぶい橙／にぶい褐	－	4.9	Ⅲb2	
56	229	A10	混貝土層	Ⅱ	深鉢	口縁～胴部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１mm以下の砂粒	良好	にぶい褐／にぶい橙	－	7.8	Ⅲb6	
57	434	B7	混土貝層	Ⅱ	深鉢	口縁部～胴部	ナデ→貝殻条痕／ナデ	角閃石、１～２mm程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／褐灰	－	7.3	Ⅲb2	
58	243	A24	混貝土層	Ⅱ	鉢	口縁部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	にぶい橙／にぶい黄褐	－	3.5	Ⅲb2	
59	367	A19	混貝土層	Ⅱ	深鉢	口縁～胴部	貝殻条痕／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	灰黄褐／黒褐	－	13.8	Ⅲb1	
60	390	A20	混土貝層	Ⅱ	深鉢	胴部	貝殻条痕／貝殻条痕	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／灰黄褐	－	6.3	Ⅲb4	
61	238	A20	混土貝層	Ⅱ	深鉢？	口縁部	貝殻条痕／貝殻条痕	角閃石、１～３mm程度の砂粒	良好	黄灰／にぶい橙	－	4.4	Ⅲc1	
62	114	A9	混貝土層	Ⅱ	深鉢	口縁～胴部	貝殻条痕／ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	にぶい赤褐／にぶい橙	－	10.9	Ⅲc1	
63	483	A12	第1混土貝層	Ⅱ	深鉢	口縁部～胴部	貝殻条痕／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１～３mm程度の砂粒	良好	灰黄褐／褐灰	－	6.6	Ⅲc1	
64	554	A10	混貝土層	Ⅱ	深鉢	口縁部～胴部	貝殻条痕／貝殻条痕	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	にぶい褐／にぶい橙	－	8.0	Ⅲc1	
65	262	B5	混土貝層	Ⅱ	鉢	口縁部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	灰褐／灰褐	－	4.0	Ⅲd1	
66	477	D1	混土貝層	Ⅱ	深鉢	口縁部	ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	にぶい赤褐／褐灰	－	3.9	Ⅲd1	
67	275	A11	混土貝層	Ⅱ	鉢	口縁部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１～３mm程度の砂粒	良好	灰黄褐／褐灰	－	5.2	Ⅲd2	
68	50	A3	混土貝層	Ⅱ	深鉢？	胴部	貝殻条痕／貝殻条痕	角閃石、１～２mm程度の砂粒	良好	にぶい橙／にぶい赤褐	－	7.3	Ⅲa2	
69	481	B5	混土貝層	Ⅱ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	灰黄褐／にぶい橙	－	3.5	Ⅲd1	
70	489	D1	混土貝層	Ⅱ	深鉢	口縁部	貝殻条痕／ナデ	１～２mm程度の砂粒	良好	にぶい褐／灰褐	－	3.3	Ⅲd3	
71	490	B5	混土貝層	Ⅱ	深鉢	口縁部～胴部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	１mm程度の砂粒	良好	にぶい褐／褐灰	－	5.8	Ⅲd2	
72	165	A24	混貝土層	Ⅱ	深鉢	口縁部	ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	にぶい黄褐／灰黄褐	－	4.8	Ⅲd2	
73	474	A24	混貝土層	Ⅱ	深鉢	口縁部	ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	にぶい褐／褐灰	－	3.9	Ⅲd1	
74	475	A9	混貝土層	Ⅱ	深鉢	口縁部	貝殻条痕→ナデ／ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	にぶい褐／褐灰	－	3.7	Ⅲd1	
75	184	A11	混土貝層	Ⅱ	深鉢	口縁部	ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	にぶい褐／褐灰	－	5.5	Ⅲd1	
76	185	A20	混土貝層	Ⅱ	深鉢	口縁部	ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	褐灰／灰褐	－	4.2	Ⅲd1	
77	169	A20	混土貝層	Ⅱ	深鉢	口縁部	ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１～２mm程度の砂粒	良好	灰黄褐／褐灰	－	4.2	Ⅲd1	
78	172	A20	混土貝層	Ⅱ	深鉢	口縁部	ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	にぶい褐／褐灰	－	4.0	Ⅲd1	

第４表　縄文土器・土製品観察表３

挿図番号	実測番号	調査地点	層　位	基本層序	器種	残存部位	器面調整（内面／外面）	胎　土	焼成	色調（内面／外面）	口径(cm)	残存高(cm)	分類	備　考
79	266	A11	混土貝層	Ⅱ	深鉢	口縁部	ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	にぶい褐／灰褐	－	6.2	Ⅲd1	
80	231	B7･8	混貝土層	Ⅱ	深鉢	口縁部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	にぶい褐／灰褐	－	7.0	Ⅲd2	
81	567	B7	混土貝層	Ⅱ	深鉢	胴部	ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／褐灰	－	8.0	Ⅲd1	
82	174	A11	混土貝層	Ⅱ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	１mm程度の砂粒	良好	灰褐／褐灰	－	6.0	Ⅲf	
83	292	B5	混土貝層	Ⅱ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ→貝殻条痕	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	にぶい褐／にぶい褐	－	3.8	Ⅲg2	
84	188	A11	混土貝層	Ⅱ	鉢	口縁部	ナデ／ナデ	角閃石、石英、１mm程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／暗灰黄	－	5.5	Ⅲg1	
85	179	A13	混土貝層	Ⅱ	鉢	口縁部	ナデ／ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	灰黄褐／にぶい橙	－	2.8	Ⅲg2	
86	228	B7	混土貝層	Ⅱ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／にぶい褐	－	10.0	Ⅲg2	
87	186	A10･11	混土貝層	Ⅱ	深鉢	口縁～胴部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	１mm程度の砂粒	良好	にぶい褐／褐灰	－	8.9	Ⅲg1	
88	564	B5	混土貝層	Ⅱ	深鉢	胴部	ナデ／ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	にぶい赤褐／にぶい赤褐	－	4.4	Ⅲg2	
89	180	A13	混土貝層	Ⅱ	深鉢	口縁～胴部	ナデ／ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／灰黄褐	－	8.1	Ⅲg2	
90	600	B5	混土貝層	Ⅱ	深鉢	胴部	貝殻条痕→ナデ／ナデ、貝殻条痕	角閃石、1～３mm程度の砂粒	良好	灰黄褐／にぶい褐	－	5.5	Ⅲg2	
91	327	B3	混土貝層	Ⅱ	鉢	底部	貝殻条痕／貝殻条痕	１mm程度の砂粒	良好	にぶい橙／にぶい橙	－	3.5	Ⅲ	底径0.7cm
92	131	A3	混土貝層	Ⅱ	深鉢	胴～底部	ケズリ、ナデ／ケズリ→ナデ	角閃石、雲母、１～５mmの砂粒	良好	にぶい黄橙／灰黄褐	－	10.3	Ⅲ	復元底径12.0cm
93	381	A13	混貝土層	Ⅱ	深鉢	胴部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１～３mm程度の砂粒	良好	にぶい褐／にぶい赤褐	－	17.8	Ⅲa1	
94	130	A19	混土貝層	Ⅱ	深鉢	底部	貝殻条痕→ナデ／ナデ	角閃石、１～３mm程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／にぶい褐	－	8.4	Ⅲ	復元底径10.0cm
95	341	A11	混土貝層	Ⅱ	深鉢	底部	貝殻条痕／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	にぶい黄／にぶい黄橙	－	6.7	Ⅲ	復元底径11.0cm
96	431	A13	混土貝層	Ⅱ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	滑石、１mm程度の砂粒	良好	にぶい橙／にぶい赤橙	－	3.2	Ⅳa1	
97	146	A1	混土貝層	Ⅱ	深鉢	口縁～胴部	ナデ／ケズリ→ナデ	雲母、１～２mmの砂粒	良好	にぶい赤褐／灰褐	－	9.6	Ⅳb2	
98	214	A11	混土貝層	Ⅱ	深鉢	口縁～胴部	指オサエ、ナデ／ケズリ→ナデ	１mm程度の砂粒	良好	にぶい赤褐／にぶい赤褐･黒褐	－	6.9	Ⅳb2	
99	304	D19	混土貝層	Ⅱ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	１mm以下の砂粒	良好	にぶい赤褐／にぶい赤褐	－	7.1	Ⅳb1	
100	300	B2	混土貝層	Ⅱ	深鉢	口縁～胴部	ナデ／ケズリ→ナデ	１mm程度の砂粒	良好	にぶい赤褐／にぶい赤褐	－	7.1	Ⅳb1	
101	200	B6	混貝土層	Ⅱ	深鉢	口縁～胴部	ナデ／ケズリ→ナデ	１mm程度の砂粒	良好	にぶい赤褐／にぶい褐	－	8.0	Ⅳb2	
102	302	A3	混土貝層	Ⅱ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	暗赤褐／にぶい黄褐	－	5.8	Ⅳb2	
103	203	B7	混貝土層	Ⅱ	深鉢	口縁～胴部	ナデ／ケズリ→ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	にぶい赤褐／にぶい赤褐	－	6.9	Ⅳb2	
104	205	A3	混土貝層	Ⅱ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	１mm程度の砂粒	良好	灰褐／灰褐	－	4.6	Ⅳb1	
105	201	A13	混土貝層	Ⅱ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	１mm程度の砂粒	良好	暗灰黄／黒褐	－	6.0	Ⅳb1	
106	208	A24	混貝土層	Ⅱ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	雲母、角閃石、１～３mm程度の砂粒	良好	にぶい褐／にぶい褐	－	7.3	Ⅳb1	
107	142	B7･8	混土貝層	Ⅱ	深鉢	口縁～胴部	ナデ／ケズリ→ナデ	角閃石、１～３mm程度の砂粒	良好	にぶい赤褐／にぶい赤褐	－	10.3	Ⅳb1	
108	215	A11	混土貝層	Ⅱ	深鉢	口縁部	ナデ／ケズリ→ナデ	１～３mm程度の砂粒	良好	にぶい赤褐／にぶい赤褐	－	6.5	Ⅳb2	
109	560	D17	混土貝層	Ⅱ	深鉢	口縁部～胴部	ナデ／ケズリ→ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	にぶい橙／灰褐	－	5.2	Ⅳb2	
110	309	A20･D20	混貝土層	Ⅱ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	滑石、１mm程度の砂粒	良好	にぶい赤褐／にぶい赤褐	－	5.2	Ⅳb1	
111	303	B6	混貝土層	Ⅱ	深鉢	口縁～胴部	ナデ／ケズリ→ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	にぶい黄褐／黒褐	－	5.0	Ⅳb2	
112	256	C3	混土貝層	Ⅱ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	にぶい赤褐／灰褐	－	5.5	Ⅳb1	
113	234	D22	混土貝層	Ⅱ	深鉢	胴部	ナデ／ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	にぶい赤褐／にぶい赤褐	－	9.6	Ⅳb1	
114	193	D22	混土貝層	Ⅱ	深鉢	口縁部	ナデ、指オサエ／ナデ	１mm程度の砂粒	良好	灰黄褐／にぶい黄橙	－	4.4	Ⅳb2	
115	117	A11	混土貝層	Ⅱ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	にぶい橙／褐灰	－	5.7	Ⅳb2	
116	150	A18	混土貝層	Ⅱ	深鉢	口縁部	ケズリ→ナデ／ナデ	雲母、角閃石、１～３mm程度の砂粒	良好	にぶい褐／灰褐	－	8.2	Ⅳb2	
117	73	D17	混土貝層	Ⅱ	鉢	胴部	ナデ／ケズリ→ナデ	角閃石、石英、１～３mm程度の砂粒	良好	にぶい橙／灰黄褐	－	4.5	Ⅳb2	

第５表　縄文土器・土製品観察表４

※（　）は復元値

挿図番号	実測番号	調査地点	層　位	基本層序	器種	残存部位	器面調整（内面／外面）	胎　土	焼成	色調（内面／外面）	※口径(cm)	残存高(cm)	分類	備　考
118	148	A3	混土貝層	Ⅱ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	１～２mm程度の砂粒	良好	にぶい黄褐／灰黄褐	－	6.8	Ⅳb2	
119	310	B6	混貝土層	Ⅱ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	にぶい橙／灰褐	－	5.6	Ⅳc2	
120	76	D17	第1混土貝層	Ⅱ	鉢	口縁部	ナデ／ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／黄灰	－	5.3	Ⅳc2	
121	74	D17	第1混土貝層	Ⅱ	深鉢	口縁～胴部	ナデ／ケズリ→ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	黒褐／褐灰	－	10.9	Ⅳc2	
122	95	A24	混貝土層	Ⅱ	深鉢	口縁～胴部	ナデ／ケズリ→ナデ	１～３mm程度の砂粒	良好	灰黄褐／灰黄褐	－	18.9	Ⅳc1	
123	399	A4	混貝土層	Ⅱ	鉢	口縁部	ナデ／ナデ	１～２mm程度の砂粒	良好	にぶい黄褐／にぶい赤褐	－	4.3	Ⅳc2	
124	287	A3	混土貝層	Ⅱ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	１～３mm程度の砂粒	良好	にぶい橙／にぶい橙	－	4.0	Ⅳc2	
125	349	A4	混土貝層	Ⅱ	鉢	口縁部	ナデ／ナデ	雲母、１mm程度の砂粒	良好	にぶい黄褐／灰黄褐	－	5.0	Ⅳc1	
126	105	A3	混土貝層	Ⅱ	深鉢	口縁～胴部	ケズリ→ナデ／ナデ	角閃石、１～３mm程度の砂粒	良好	灰黄／黄灰	－	10.9	Ⅳc2	
127	286	A17	混土貝層	Ⅱ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	にぶい橙／にぶい橙	－	4.2	Ⅳc2	
128	301	B6	混貝土層	Ⅱ	深鉢	口縁～胴部	ナデ／ケズリ→ナデ	１mm程度の砂粒	良好	にぶい赤褐／赤褐	－	4.6	Ⅳc1	
129	107	A12	混土貝層	Ⅱ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	滑石、１～２mm程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／にぶい褐	－	6.3	Ⅳc1	
130	206	D22	混土貝層	Ⅱ	深鉢	口縁～胴部	ナデ／ナデ	１mm程度の砂粒	良好	明赤褐／灰赤	－	7.7	Ⅳc2	
131	194	A1	混土貝層	Ⅱ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	灰黄褐／灰褐	－	3.3	Ⅳc2	
132	284	A3	混土貝層	Ⅱ	鉢	口縁部	ナデ／ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	にぶい褐／灰褐	－	4.7	Ⅳd	
133	147	B2	混土貝層	Ⅱ	深鉢	口縁～胴部	ナデ／ケズリ→ナデ	角閃石、１～３mm程度の砂粒	良好	にぶい褐／橙	－	7.7	Ⅳd	
134	339	C2	混土貝層	Ⅱ	深鉢	底部	ナデ／ナデ	滑石、１mm程度の砂粒	良好	暗灰色／灰褐	－	4.8	Ⅳ	復元底径13.3cm、底面に鯨脊椎骨痕
135	120	A1	混土貝層	Ⅱ	深鉢	底部	指頭圧痕、ナデ／ナデ	角閃石、長石？、１mm程度の砂粒	良好	にぶい赤褐／灰褐	－	6.6	Ⅳ	底径11.2cm
136	133	B6	混土貝層	Ⅱ	深鉢	底部	ナデ／ケズリ→ナデ	１～５mm程度の砂粒	良好	にぶい褐／灰褐	－	5.4	Ⅳ	底径13.7cm
137	124	D17	混土貝層	Ⅱ	深鉢	底部	ナデ／ハケメ→ナデ	１～２mm程度の砂粒	良好	にぶい褐／灰褐	－	6.8	Ⅳ	底径9.6cm、底部に縄状圧痕
138	335	D9	褐色土層直上面	Ⅱ	深鉢	底部	ナデ／ナデ	角閃石、滑石、１～３mm程度の砂粒	良好	にぶい褐／にぶい赤褐	－	4.6	Ⅳ	復元底径14.2cm
139	220	D22	混土貝層	Ⅱ	深鉢	底部	ナデ／ナデ	角閃石、１～３mm程度の砂粒	良好	にぶい黄褐／にぶい黄橙	－	2.9	Ⅳ	復元底径13.2cm、底面に鯨脊椎骨痕
140	129	B5	混土貝層	Ⅱ	深鉢	底部	ナデ／ケズリ→ナデ	雲母、角閃石、１～２mm程度の砂粒	良好	にぶい赤褐／にぶい橙	－	7.3	Ⅳ	復元底径18.4cm、底面に木葉痕
141	219	A1	混土貝層	Ⅱ	鉢	底部	ナデ／ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	にぶい赤褐／にぶい赤褐	－	3.5	Ⅳ	復元底径14.8cm、底面に木葉痕
142	135	D18	混土貝層	Ⅱ	深鉢	底部	ナデ／ナデ	角閃石、１～３mm程度の砂粒	良好	赤褐／にぶい赤褐	－	4.1	Ⅳ	復元底径13.6cm
143	106	A4	混土貝層	Ⅱ	鉢	口縁部	ナデ／ナデ	雲母、１～２mm程度の砂粒	良好	にぶい赤褐／灰褐	－	5.1	Ⅴb2	
144	493	A3	混土貝層	Ⅱ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／灰黄褐	－	5.0	Ⅴb1	
145	557	A4	混土貝層	Ⅱ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	雲母、角閃石、１～３mm程度の砂粒	良好	灰黄褐／灰褐	－	4.6	Ⅴb1	
146	249	A4	混土貝層	Ⅱ	深鉢	口縁～胴部	ナデ／ナデ	雲母、１～５mm程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／灰黄褐	－	7.3	Ⅴb1	
147	246	A3	混土貝層	Ⅱ	深鉢	口縁～胴部	ナデ／ナデ	雲母、角閃石、１mm程度の砂粒	良好	暗灰黄／にぶい黄橙	－	10.8	Ⅴb1	
148	252	A3	混土貝層	Ⅱ	深鉢	口縁～胴部	ナデ→ミガキ／ナデ→ミガキ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	灰黄褐／にぶい黄橙	－	6.4	Ⅴa2	
149	254	A4	混土貝層	Ⅱ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	角閃石、１～３mm程度の砂粒	良好	灰黄褐／灰黄褐	－	4.8	Ⅴa1	
150	170	A1	混土貝層	Ⅱ	浅鉢	口縁～胴部	ナデ→ミガキ／縄文→ナデ→ミガキ	１mm程度の砂粒	良好	黄灰／暗黄灰	－	5.3	Ⅵa	赤色顔料付着
151	553	A3	混土貝層	Ⅱ	鉢	口縁部	ミガキ／ナデ→ミガキ	１mm程度の砂粒	良好	黒褐／灰褐	－	5.6	Ⅵa	赤色顔料付着
152	144	A3	混土貝層	Ⅱ	浅鉢	口縁～胴部	ナデ→ミガキ／ナデ→ミガキ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	褐灰／褐灰	－	6.6	Ⅵa	
153	250	B15	混土貝層	Ⅱ	鉢	口縁部	ミガキ／ナデ→ミガキ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	黒褐／黒褐	－	3.1	Ⅵa	
154	153	A3・4	混貝土層・混土貝層	Ⅱ	深鉢	口縁～底部	ナデ→ミガキ／縄文→ナデ→ミガキ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	褐灰／灰黄褐	(35.7)	18.9	Ⅵa	復元胴部径38.2cm、赤色顔料付着
155	329	A3	混土貝層	Ⅱ	浅鉢？	口縁部	ミガキ／ミガキ	１mm程度の砂粒	良好	黒褐／灰褐	－	4.1	Ⅵa	
156	442	A4	混土貝層	Ⅱ	鉢	口縁部～胴部	貝殻条痕→ナデ／ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	灰黄褐／にぶい黄褐	－	5.7	Ⅵa	

第6表　縄文土器・土製品観察表5

※（　）は復元値

挿図番号	実測番号	調査地点	層　位	基本層序	器種	残存部位	器面調整（内面／外面）	胎　土	焼成	色調（内面／外面）	※口径(cm)	残存高(cm)	分類	備　考
157	176	B	混土貝層	Ⅱ	鉢	口縁部	ナデ→ミガキ／ナデ→ミガキ	角閃石、1mm程度の砂粒	良好	褐灰／褐灰	－	5.6	Ⅵb	
158	432	A1	混土貝層	Ⅱ	鉢	口縁部～胴部	ナデ→ミガキ／ナデ	角閃石、1mm程度の砂粒	良好	黒／褐灰	－	4.3	Ⅵa	
159	495	A1	混土貝層	Ⅱ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	雲母、1mm程度の砂粒	良好	橙／橙	－	4.5	Ⅵb	
160	593	A4	混土貝層	Ⅱ	浅鉢	口縁部	ナデ／ナデ→ミガキ	1mm程度の砂粒	良好	灰黄褐／灰褐	－	4.2	Ⅵb	外面に赤色顔料付着
161	111	A3	混土貝層	Ⅱ	鉢	口縁～胴部	ナデ／ナデ	角閃石、1～5mm程度の砂粒	良好	灰黄褐／灰黄褐	16.8	8.4	Ⅵb	
162	272	A3	混土貝層	Ⅱ	鉢	口縁部	縄文→ナデ／ナデ	1mm程度の砂粒	良好	黒褐／灰黄褐	－	4.7	Ⅵ	
163	330	A3	混土貝層	Ⅱ	鉢？	胴部	ナデ／縄文	角閃石、1～3mm程度の砂粒	良好	浅黄橙／灰黄褐	－	5.8	Ⅵ	
164	343	D17	第1混土貝層	Ⅱ	鉢	底部	ナデ→ミガキ／ナデ→ミガキ	角閃石、1mm程度の砂粒	良好	にぶい褐／にぶい赤褐	－	3.1	Ⅵ	底径13.7cm
165	448	D24	純貝層	Ⅲ	深鉢	口縁部～胴部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、1～2mm程度の砂粒	やや不良	にぶい赤褐／赤灰	－	8.7	Ⅲa2	
166	268	D20	純貝層	Ⅲ	鉢	口縁部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、1mm程度の砂粒	良好	灰黄褐／灰黄褐	－	4.5	Ⅲb3	
167	426	D18･19	純貝層	Ⅲ	鉢	口縁部	貝殻条痕／ナデ	1mm程度の砂粒	良好	褐灰／灰黄褐	－	4.1	Ⅲb3	
168	242	D24	純貝層	Ⅲ	鉢	口縁部	貝殻条痕／貝殻条痕	1～3mm程度の砂粒	良好	灰黄褐／灰黄褐	－	4.2	Ⅲc1	
169	57	D24	純貝層	Ⅲ	深鉢	胴部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、1mm程度の砂粒	良好	灰褐／褐灰	－	17.2	Ⅲc2	
170	173	B3	純貝層	Ⅲ	深鉢	口縁部	ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、1mm程度の砂粒	良好	橙／にぶい橙	－	4.6	Ⅲd3	
171	190	B3	純貝層	Ⅲ	深鉢	口縁部	ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、1mm程度の砂粒	良好	にぶい褐／褐灰	－	4.8	Ⅲd1	
172	392	D24	純貝層	Ⅲ	深鉢	口縁部	貝殻条痕／貝殻条痕	1mm程度の砂粒	良好	褐灰／褐灰	－	4.5	Ⅲd1	
173	476	A17	貝層上部	Ⅲ	深鉢	口縁部	ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、1mm程度の砂粒	良好	灰褐／褐灰	－	4.8	Ⅲd2	
174	295	D13	貝層最下部	Ⅲ	深鉢	口縁部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	1～2mm程度の砂粒	良好	にぶい褐／にぶい橙	－	3.8	Ⅲd3	
175	118	D9	純貝層	Ⅲ	深鉢？	口縁部	ナデ／ナデ	角閃石、長石、1～2mm程度の砂粒	良好	にぶい褐／褐灰	－	4.8	Ⅲd3	
176	293	D20	純貝層	Ⅲ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	滑石、1mm程度の砂粒	良好	灰褐／にぶい褐	－	4.6	Ⅲf	
177	382	B3	純貝層	Ⅲ	深鉢	胴部	ナデ／ナデ	角閃石、1mm程度の砂粒	良好	にぶい褐／褐灰	－	7.4	Ⅲe	挿図番号179・300と同一個体
178	566	A21	貝層下部	Ⅲ	深鉢	胴部	ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、1mm程の砂粒	良好	にぶい橙／褐灰	－	9.8	Ⅲe	
179	383	D20	純貝層	Ⅲ	深鉢	胴部	ナデ／ナデ	角閃石、1mm程度の砂粒	良好	にぶい黄褐／褐灰	－	4.5	Ⅲe	
180	236	B3	純貝層	Ⅲ	深鉢	胴～底部	貝殻条痕→ナデ／ナデ	雲母、1mm程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／褐灰･にぶい赤褐	－	6.4	Ⅲe	
181	267	D20	純貝層	Ⅲ	鉢	口縁部	貝殻条痕／貝殻条痕→ナデ	角閃石、1～2mm程度の砂粒	良好	にぶい黄褐／灰黄褐	－	3.2	Ⅲ	
182	28	D20	純貝層	Ⅲ	深鉢	胴部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	1～2mm程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／にぶい褐	－	4.9	Ⅲ	
183	338	D23	純貝層	Ⅲ	深鉢	底部	ナデ／ナデ	角閃石、1mm程度の砂粒	良好	褐灰／灰黄褐	－	2.2	Ⅲ	復元底径8.1cm
184	233	D23	純貝層	Ⅲ	深鉢	口縁～胴部	ナデ／ナデ	角閃石、1～2mm程度の砂粒	良好	にぶい赤褐／にぶい赤褐	－	13.1	Ⅳb1	
185	192	D23	純貝層	Ⅲ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	角閃石、1～2mm程度の砂粒	良好	にぶい赤褐／灰褐	－	4.4	Ⅳb2	
186	306	D18	純貝層	Ⅲ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	1mm以下の砂粒	良好	灰赤／黒褐	－	4.3	Ⅳb2	
187	140	D23	純貝層	Ⅲ	深鉢	口縁～胴部	ナデ／ケズリ→ナデ	雲母、角閃石、1mm程度の砂粒	良好	にぶい赤褐／にぶい赤褐	(35.2)	15.1	Ⅳb1	
188	112	D17	純貝層	Ⅲ	鉢	口縁～胴部	ナデ／ケズリ→ナデ	角閃石、1mm程度の砂粒	良好	にぶい橙／褐灰	－	8.0	Ⅳb2	
189	307	D18	純貝層	Ⅲ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	角閃石、1mm程度の砂粒	良好	にぶい褐／にぶい赤褐	－	9.3	Ⅳb1	
190	141	D18	純貝層	Ⅲ	鉢	口縁～胴部	ナデ／ナデ	角閃石、石英、1～2mm程度の砂粒	良好	にぶい赤褐／にぶい褐	－	12.4	Ⅳb2	
191	207	D23	貝層	Ⅲ	深鉢	口縁～胴部	ナデ／ナデ	角閃石、1～2mm程度の砂粒	良好	灰褐／灰褐	－	3.8	Ⅳb	
192	312	D13	貝層直下層	Ⅳ？	深鉢	口縁～胴部	ナデ／ケズリ→ナデ	1～3mm程度の砂粒	良好	明赤褐／暗褐	－	7.2	Ⅳb2	
193	323	D23	褐色貝層	Ⅲ	深鉢	口縁部	ケズリ→ナデ／ナデ	滑石、1mm程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／にぶい褐	－	7.9	Ⅳb1	
194	202	D23	純貝層	Ⅲ	深鉢	口縁～胴部	ナデ／ナデ	1mm程度の砂粒	良好	灰黄褐／灰褐	－	6.6	Ⅳb2	
195	311	D23	純貝層	Ⅲ	深鉢	口縁～胴部	ナデ／ケズリ→ナデ	雲母、1mm程度の砂粒	良好	褐／黒褐	－	7.9	Ⅳb1	

第７表　縄文土器・土製品観察表６

※（　）は復元値

挿図番号	実測番号	調査地点	層　位	基本層序	器種	残存部位	器面調整（内面／外面）	胎　土	焼成	色調（内面／外面）	※口径(cm)	残存高(cm)	分類	備　考
196	326	D18	純貝層	Ⅲ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	明赤褐／赤褐	－	5.8	Ⅳb2	
197	308	D22	純貝層	Ⅲ	深鉢	口縁部	ケズリ→ナデ／ナデ	１mm程度の砂粒	良好	褐／にぶい赤褐	－	6.4	Ⅳb2	
198	75	D18･19	純貝層	Ⅲ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	角閃石、１～３mm程度の砂粒	良好	灰黄褐／灰褐	－	5.5	Ⅳc2	
199	313	C2	純貝層	Ⅲ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	にぶい黄褐／赤褐	－	6.4	Ⅳb2	
200	482	D17	純貝層	Ⅲ	深鉢	口縁部～胴部	ナデ／ナデ、ケズリ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	にぶい褐／褐灰	－	9.3	Ⅳb2	
201	86	D17	純貝層	Ⅲ	深鉢	胴部	ナデ／ケズリ→ナデ	角閃石、１～３mm程度の砂粒	良好	にぶい褐／褐灰	－	23.4	Ⅳc1	
202	77	D18	純貝層	Ⅲ	深鉢	口縁～胴部	ナデ／ケズリ→ナデ	角閃石、１～３mm程度の砂粒	良好	にぶい橙／褐灰	(35.6)	20.0	Ⅳc2	
203	435	D18	純貝層	Ⅲ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	にぶい橙／にぶい褐	－	4.4	Ⅳb2	
204	400	D13	貝層直下層	Ⅲ？	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	明赤褐／赤褐	－	5.7	Ⅳd	
205	94	D20	純貝層	Ⅲ	深鉢？	口縁～胴部	ナデ／ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	灰黄褐／褐灰	14.0	12.5	Ⅳd	
206	121	D18	純貝層	Ⅲ	深鉢	底部	ナデ／ケズリ→ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	にぶい赤褐／褐灰	－	10.1	Ⅳ	底径13.5cm、底面に鯨脊椎骨痕
207	342	C1	純貝層	Ⅲ	深鉢	胴～底部	ナデ／ケズリ→ナデ	１～２mm程度の砂粒	良好	にぶい褐／にぶい赤褐	－	8.1	Ⅳ	復元底径20.0cm
208	346	D23	褐色貝層	Ⅲ	深鉢	底部	ナデ／ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	にぶい赤褐／にぶい褐	－	2.6	Ⅳ	底径14.9cm
209	143	D18	純貝層	Ⅲ	深鉢	底部	ナデ、指頭圧痕／ケズリ→ナデ	雲母、角閃石、１mm程度の砂粒	良好	にぶい赤褐／にぶい褐	－	3.5	Ⅳ	底径13.5cm、底面に鯨脊椎骨痕
210	385	A5	褐色土層	Ⅳ	深鉢	胴部	ナデ／押型文	角閃石、１～５mm程度の砂粒	やや不良	にぶい黄橙／灰黄褐	－	10.5	Ⅰa	
211	612	D20	褐色土層下部	Ⅳ	深鉢	口縁部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／にぶい橙	－	5.5	Ⅱb	
212	569	D20	褐色土層下部	Ⅳ	深鉢	胴部	貝殻条痕／貝殻条痕	角閃石、１～３mm程度の砂粒	やや不良	にぶい褐／褐	－	6.8	Ⅲa1	
213	359	A24	褐色土層	Ⅳ	深鉢	口縁部	貝殻条痕／貝殻条痕	角閃石、１～２mm程度の砂粒	良好	赤褐／赤褐	－	6.5	Ⅲa1	
214	9	A22	褐色土層下部	Ⅳ	鉢	口縁～胴部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	１mm程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／灰黄褐	(16.0)	10.4	Ⅲa1	
215	356	A22	褐色土層	Ⅳ	深鉢	口縁～胴部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕	１～３mm程度の砂粒	良好	にぶい褐／にぶい褐	－	9.4	Ⅲa2	
216	494	A24	褐色土層	Ⅳ	深鉢	口縁部～胴部	貝殻条痕／貝殻条痕	角閃石、１～３mm程度の砂粒	良好	灰褐／灰褐	－	7.5	Ⅲa1	
217	4	D22	黒色土層直上	Ⅳ	深鉢	口縁～胴部	貝殻条痕／貝殻条痕	角閃石、石英、長石、１～４mm程度の砂粒	良好	にぶい黄褐／にぶい黄橙	－	20.2	Ⅲa1	
218	239	D19	褐色土層上部	Ⅳ	深鉢？	口縁部	貝殻条痕／貝殻条痕	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／にぶい黄橙	－	5.3	Ⅲa1	
219	280	A22	褐色土層	Ⅳ	鉢	口縁部	貝殻条痕／貝殻条痕	角閃石、１～３mm程度の砂粒	良好	灰黄褐／褐灰	－	4.6	Ⅲa1	
220	6	D20	褐色土層上部	Ⅳ	深鉢	口縁～胴部	貝殻条痕／貝殻条痕	１～２mm程度の砂粒	良好	黄灰／にぶい黄橙	－	18.0	Ⅲa2	
221	20	D20	褐色土層上部	Ⅳ	深鉢	口縁～胴部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１～２mm程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／灰黄褐	－	19.9	Ⅲa1	
222	620	D20	褐色土層下部	Ⅳ	深鉢	口縁部	貝殻条痕／貝殻条痕	角閃石、１～２mm程度の砂粒	良好	にぶい褐／にぶい褐	－	4.7	Ⅲa1	
223	240	D19	褐色土層下部	Ⅳ	深鉢	口縁部	貝殻条痕／貝殻条痕	角閃石、長石、１～３mm程度の砂粒	良好	にぶい黄褐／灰黄褐	－	6.2	Ⅲa1	
224	393	D19	褐色土層下部	Ⅳ	深鉢	口縁部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕	角閃石、長石、１～３mm程度の砂粒	良好	黄灰／橙	－	3.4	Ⅲa2	
225	10	A23	褐色土層	Ⅳ	深鉢	口縁～胴部	貝殻条痕／貝殻条痕	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	黄灰／灰褐	－	11.0	Ⅲa2	
226	388	A23･24	褐色土層最下部	Ⅳ	深鉢	胴部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕	１～２mm程度の砂粒	良好	黄灰／黄灰	－	7.5	Ⅲa	
227	386	C2	褐色土層	Ⅳ	深鉢	胴部	貝殻条痕／貝殻条痕	角閃石、１～２mm程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／にぶい黄橙	－	7.4	Ⅲa1	
228	38	D18･19	褐色土層上部	Ⅳ	深鉢	胴部	貝殻条痕／貝殻条痕	角閃石、１～３mm程度の砂粒	良好	にぶい橙／にぶい褐	－	15.2	Ⅲa2	
229	245	A19･D23	褐色土層	Ⅳ	鉢	口縁部	貝殻条痕／貝殻条痕	角閃石、１～２mm程度の砂粒	良好	にぶい橙／にぶい褐	－	4.8	Ⅲb2	
230	369	C3	褐色土層	Ⅳ	鉢	口縁部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	１mm以下の砂粒	良好	褐灰／にぶい褐	－	4.0	Ⅲb2	
231	396	B9	褐色土層	Ⅳ	深鉢	口縁部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕	１mm程度の砂粒	良好	褐灰／灰黄褐	－	7.3	Ⅲb2	
232	230	D20･24	褐色土層上部	Ⅳ	深鉢	口縁～胴部	貝殻条痕／貝殻条痕	１～３mm程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／にぶい橙	－	8.4	Ⅲb2	
233	360	D9	褐色土層下部	Ⅳ	深鉢	口縁部	貝殻条痕／貝殻条痕	角閃石、１～３mm程度の砂粒	良好	赤褐／にぶい赤褐	－	5.3	Ⅲb2	
234	398	D9	褐色土層下部	Ⅳ	深鉢	口縁部	貝殻条痕／貝殻条痕	角閃石、１～２mm程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／にぶい褐	－	3.7	Ⅲb2	

第８表　縄文土器・土製品観察表７

※（　）は復元値

挿図番号	実測番号	調査地点	層　位	基本層序	器種	残存部位	器面調整（内面／外面）	胎　土	焼成	色調（内面／外面）	※口径(cm)	残存高(cm)	分類	備　考
235	271	A23	褐色土層	Ⅳ	鉢	口縁部	貝殻条痕／貝殻条痕	長石、１～２㎜の砂粒	良好	にぶい赤褐／灰褐	－	5.1	Ⅲb3	
236	283	D24	褐色土層上部	Ⅳ	深鉢	口縁部	貝殻条痕／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１㎜程度の砂粒	良好	にぶい褐／にぶい褐	－	5.7	Ⅲb3	
237	54	D22･23	褐色土層	Ⅳ	深鉢	口縁～胴部	貝殻条痕／貝殻条痕→ナデ	１㎜程度の砂粒	良好	灰褐／にぶい橙	－	12.1	Ⅲb3	
238	2	D13･24	褐色土層上部	Ⅳ	深鉢	口縁部	貝殻条痕／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１㎜程度の砂粒	良好	灰黄褐／にぶい褐	－	8.8	Ⅲb3	
239	623	A24	褐色土層	Ⅳ	深鉢	口縁部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	１㎜程度の砂粒	良好	にぶい橙／にぶい橙	－	3.4	Ⅲb4	
240	281	D24	褐色土層下部	Ⅳ	鉢	口縁部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１～５㎜程度の砂粒	良好	にぶい褐／にぶい褐	－	4.5	Ⅲb3	
241	282	A23･24	褐色土層最下部	Ⅳ	鉢	口縁部	貝殻条痕／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１㎜程度の砂粒	良好	にぶい橙／にぶい褐	－	3.5	Ⅲb4	
242	247	D23	褐色土層下部	Ⅳ	深鉢	口縁～胴部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１㎜程度の砂粒	良好	にぶい黄褐／にぶい褐	－	11.5	Ⅲb3	
243	391	D19	褐色土層下部	Ⅳ	深鉢	胴部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕	角閃石、１～２㎜程度の砂粒	良好	にぶい褐／褐灰	－	9.1	Ⅲb3	
244	603	D20	褐色土層下部	Ⅳ	深鉢	胴部	貝殻条痕／貝殻条痕	角閃石、１㎜程度の砂粒	良好	にぶい橙／灰黄褐	－	7.1	Ⅲb1	
245	486	A23･24	褐色土層最下部	Ⅳ	深鉢	胴部	貝殻条痕／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１～３㎜程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／にぶい褐	－	6.5	Ⅲb1	
246	561	D19	褐色土層	Ⅳ	深鉢	口縁部～胴部	貝殻条痕／貝殻条痕	角閃石、１㎜程度の砂粒	良好	にぶい褐／灰褐	－	5.7	Ⅲb3	
247	237	B3	褐色土層	Ⅳ	深鉢？	口縁部	貝殻条痕／貝殻条痕	角閃石、１㎜程度の砂粒	良好	にぶい褐／にぶい橙	－	5.4	Ⅲb1	
248	439	D17	褐色土層	Ⅳ	深鉢	口縁部～胴部	ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１～５㎜程度の砂粒	良好	にぶい黄褐／にぶい橙	－	5.9	Ⅲb5	
249	616	D22	褐色土層下部	Ⅳ	深鉢	口縁部	貝殻条痕→ナデ／ナデ	１㎜程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／にぶい黄橙	－	3.6	Ⅲb5	
250	17	D23	褐色土層	Ⅳ	深鉢	口縁部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１～２㎜程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／にぶい橙	－	8.5	Ⅲb5	
251	177	D24	褐色土層下部	Ⅳ	深鉢	口縁～胴部	ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１㎜程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／にぶい黄褐	－	7.7	Ⅲb5	
252	16	D19	褐色土層下部	Ⅳ	深鉢	胴部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１～３㎜程度の砂粒	良好	にぶい褐／灰黄褐	－	18.8	Ⅲb3	
253	601	D9	褐色土層下部	Ⅳ	深鉢	胴部	ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、石英、１～３㎜程度の砂粒	良好	にぶい褐／にぶい橙	－	4.9	Ⅲb5	
254	227	D24	褐色土層下部	Ⅳ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	雲母、角閃石、１～２㎜程度の砂粒	やや不良	にぶい橙／にぶい黄褐	－	5.2	Ⅲb6	
255	366	B2	褐色土層	Ⅳ	深鉢	口縁部	貝殻条痕／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１㎜程度の砂粒	良好	にぶい褐／にぶい褐	－	6.0	Ⅲb6	
256	85	D18	褐色土層上部	Ⅳ	深鉢	胴部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１～２㎜程度の砂粒	良好	灰黄褐／にぶい黄橙	－	7.1	Ⅲb5	
257	53	C2	褐色土層	Ⅳ	深鉢	口縁～胴部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１～４㎜程度の砂粒	良好	にぶい黄褐／にぶい褐	－	23.5	Ⅲe1	野口・阿多タイプ
258	51	D20	褐色土層上部	Ⅳ	深鉢	口縁～底部	貝殻条痕／貝殻条痕→ナデ	１㎜程度の砂粒	良好	褐灰／褐灰	(11.3)	13.0	Ⅲc1	復元底径5.8cm
259	358	D19	褐色土層下部	Ⅳ	深鉢	口縁部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕	角閃石、１㎜程度の砂粒	良好	にぶい褐／褐灰	－	5.7	Ⅲc1	
260	113	D19	褐色土層最下部	Ⅳ	深鉢	口縁～胴部	貝殻条痕／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１㎜程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／灰黄褐	－	7.4	Ⅲc1	
261	573	D19･23	褐色土層下部	Ⅳ	深鉢	胴部	貝殻条痕／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１～２㎜程度の砂粒	良好	灰黄褐／にぶい黄橙	－	9.4	Ⅲc1	
262	59	D20	褐色土層上部	Ⅳ	深鉢	口縁～胴部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１～５㎜程度の砂粒	良好	灰黄褐／にぶい橙	(24.1)	21.9	Ⅲc2	
263	13	D24･C3	褐色土層上部	Ⅳ	深鉢	口縁～胴部	ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１㎜程度の砂粒	良好	にぶい褐／黄灰	－	13.5	Ⅲc1	
264	3	D19･23	褐色土層最下部	Ⅳ	深鉢	口縁～胴部	貝殻条痕／貝殻条痕	角閃石、１㎜程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／にぶい褐	－	19.1	Ⅲc1	
265	41	D20	褐色土層上部	Ⅳ	深鉢	胴～底部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	雲母、１～３㎜程度の砂粒	良好	にぶい橙／にぶい橙	－	25.2	Ⅲc1	
266	270	D19	褐色土層最下部	Ⅳ	鉢	口縁部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	１～３㎜程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／にぶい黄橙	－	4.9	Ⅲc1	
267	614	D13	褐色土層	Ⅳ	深鉢	口縁部～胴部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１～２㎜程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／にぶい黄橙	－	5.4	Ⅲc1	
268	27	D20･22他	褐色土層下部	Ⅳ	深鉢	胴部	貝殻条痕／貝殻条痕→ナデ	雲母、角閃石、１～３㎜程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／にぶい橙	－	11.3	Ⅲc1	
269	163	A24	褐色土層	Ⅳ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	角閃石、１㎜程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／黒褐	－	5.9	Ⅲd1	
270	261	D17	褐色土層	Ⅳ	鉢	口縁部	ナデ、貝殻条痕／ナデ、貝殻条痕	角閃石、１㎜程度の砂粒	良好	にぶい橙／にぶい橙	－	3.8	Ⅲd1	
271	269	D23	褐色土層	Ⅳ	鉢	口縁部	ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１㎜程度の砂粒	良好	にぶい褐／にぶい褐	－	3.4	Ⅲd1	
272	12	A24	褐色土層	Ⅳ	深鉢	口縁部	ナデ／貝殻条痕→ナデ	１㎜程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／褐灰	－	5.9	Ⅲd1	
273	166	D17	褐色土層	Ⅳ	深鉢	口縁～胴部	ナデ／貝殻条痕跡→ナデ	角閃石、１㎜程度の砂粒	良好	にぶい褐／褐灰	－	8.6	Ⅲd1	

第９表　縄文土器・土製品観察表８

挿図番号	実測番号	調査地点	層　位	基本層序	器種	残存部位	器面調整（内面／外面）	胎　土	焼成	色調（内面／外面）	口径(cm)	残存高(cm)	分類	備　考
274	277	A22	褐色土層	Ⅳ	鉢	口縁部	ナデ／ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	にぶい褐／褐灰	－	3.7	Ⅲd1	
275	289	A23	褐色土層	Ⅳ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	にぶい橙／にぶい橙	－	3.1	Ⅲd2	
276	167	A24	褐色土層	Ⅳ	深鉢	口縁部	ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／灰黄褐	－	4.9	Ⅲd1	
277	428	A23	褐色土層	Ⅳ	鉢	口縁部	ナデ／ナデ→文様条痕	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	にぶい橙／にぶい黄褐	－	3.6	Ⅲd2	
278	617	A23	褐色土層	Ⅳ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	角閃石、１～２mm程度の砂粒	良好	にぶい褐／にぶい褐	－	3.1	Ⅲd2	
279	373	D24	褐色土層上部	Ⅳ	鉢	口縁部	貝殻条痕／貝殻条痕	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	にぶい褐／褐灰色	－	2.9	Ⅲd1	
280	480	D20	褐色土層下部	Ⅳ	深鉢	口縁部	ナデ／貝殻条痕	１mm程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／褐灰	－	4.0	Ⅲd1	
281	372	D22	褐色土層上部	Ⅳ	深鉢	口縁部	貝殻条痕→ナデ／ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	にぶい黄褐／褐灰	－	3.5	Ⅲd1	
282	438	D18	褐色土層上部	Ⅳ	鉢	口縁部	ナデ／ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	にぶい褐／にぶい黄橙	－	2.8	Ⅲd1	
283	605	C1	貝層直下層	Ⅳ	深鉢	胴部	ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	にぶい褐／灰褐	－	6.7	Ⅲd1	
284	294	D22	黒色土層直上	Ⅴ	鉢	口縁部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕	１mm程度の砂粒	良好	灰褐／にぶい褐	－	3.0	Ⅲd3	
285	570	D20	褐色土層下部	Ⅳ	深鉢	胴部	貝殻条痕／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１～５mm程度の砂粒	良好	にぶい赤褐／にぶい赤褐	－	11.1	Ⅲd3	
286	84	D17	褐色土層	Ⅳ	深鉢？	胴部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	雲母、角閃石、１～５mm程度の砂粒	良好	にぶい黄褐／にぶい橙	－	11.0	Ⅲd3	
287	119	A22	褐色土層下部	Ⅳ	深鉢	口縁部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１～２mm程度の砂粒	良好	にぶい褐／にぶい赤褐	－	6.9	Ⅲd3	
288	81	D13	褐色土層	Ⅳ	深鉢	口縁～胴部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１～２mm程度の砂粒	良好	にぶい黄褐／にぶい褐	－	10.3	Ⅲd3	
289	82	D13	褐色土層	Ⅳ	深鉢	口縁～胴部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１～３mm程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／にぶい橙	－	15.5	Ⅲd3	
290	71	D13	褐色土層	Ⅳ	深鉢	口縁～胴部	貝殻条痕／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１～３mm程度の砂粒	良好	灰黄／灰黄褐	－	10.0	Ⅲd3	
291	613	A24	褐色土層	Ⅳ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	１～３mm程度の砂粒	良好	にぶい褐／にぶい赤褐	－	3.7	Ⅲd3	
292	602	D19	褐色土層下部	Ⅳ	深鉢	胴部	ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	褐灰／黄灰	－	5.7	Ⅲd1	
293	189	D9	褐色土層直上面	Ⅲ・Ⅳ	深鉢	口縁部	ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１～３mm程度の砂粒	良好	灰黄褐／にぶい橙	－	7.5	Ⅲd1	
294	433	C3	褐色土層	Ⅳ	深鉢	口縁部～胴部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	灰黄褐／にぶい黄橙	－	10.8	Ⅲd1	
295	441	A22	褐色土層	Ⅳ	深鉢	口縁部～胴部	貝殻条痕／貝殻条痕→ナデ	滑石、１mm以下の砂粒	良好	灰黄褐／灰黄褐	－	7.3	Ⅲ	ⅢdもしくはⅢf類
296	109	A22	褐色土層	Ⅳ	深鉢？	口縁部	貝殻条痕／ナデ	滑石、１mm程度の砂粒	良好	灰黄／褐灰	－	5.3	Ⅲ	ⅢdもしくはⅢf類
297	376	D19	褐色土層下部	Ⅳ	深鉢	口縁～胴部	ナデ／ナデ	１mm程度の砂粒	良好	にぶい褐／にぶい褐	－	6.5	Ⅲe	
298	183	A23	褐色土層	Ⅳ	深鉢	口縁～胴部	ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１～２mm程度の砂粒	良好	にぶい褐／灰黄褐	－	11.3	Ⅲe	
299	397	D9	褐色土層下部	Ⅳ	深鉢	胴部	ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１～２mm程度の砂粒	良好	にぶい橙／褐灰	－	10.2	Ⅲe	
300	384	D18	混貝褐色土層	Ⅳ	深鉢	胴部	ナデ／ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	灰黄褐／褐灰	－	7.0	Ⅲe	
301	87	A24	褐色土層	Ⅳ	鉢？	口縁部	ナデ／ナデ	角閃石、１～２mm程度の砂粒	良好	にぶい橙／褐灰	－	4.2	Ⅲg	
302	80	A24	褐色土層	Ⅳ	深鉢？	口縁部	ナデ／ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	にぶい褐／灰黄褐	－	8.9	Ⅲg	
303	89	A24	褐色土層	Ⅳ	鉢？	胴部？	ナデ／ナデ	角閃石、１～３mm程度の砂粒	良好	にぶい橙／褐灰	－	6.6	Ⅲg	
304	88	A24	褐色土層	Ⅳ	鉢？	口縁部	ナデ／ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	にぶい褐／褐灰	－	4.8	Ⅲg	
305	488	D17	褐色土層	Ⅳ	深鉢	口縁部	貝殻条痕／貝殻条痕	１mm程度の砂粒	良好	にぶい褐／にぶい褐	－	4.5	Ⅲa	
306	351	A21	褐色土層	Ⅳ	深鉢	口縁部	貝殻条痕／貝殻条痕→ナデ	１mm程度の砂粒	良好	灰黄褐／灰黄橙	－	4.2	Ⅲa	
307	264	D23	褐色土層	Ⅳ	深鉢	口縁部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１～３mm程度の砂粒	良好	灰黄褐／灰黄褐	－	5.3	Ⅲa	
308	352	D20	褐色土層下部	Ⅳ	深鉢	口縁部	貝殻条痕／貝殻条痕→ナデ	角閃石、石英、１～３mm程度の砂粒	良好	にぶい黄褐／褐灰	－	4.9	Ⅲa	
309	279	D18・19	褐色土層上部	Ⅳ	鉢	口縁部	貝殻条痕／貝殻条痕	角閃石、１～３mm程度の砂粒	良好	にぶい橙／橙	－	4.5	Ⅲa	
310	241	A21	褐色土層	Ⅳ	鉢	口縁部	貝殻条痕／貝殻条痕	１～３mm程度の砂粒	良好	褐灰／褐灰	－	4.4	Ⅲa	人骨付近で出土
311	484	D1	褐色土層	Ⅳ	深鉢	口縁部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１～２mm程度の砂粒	良好	黒褐／にぶい黄橙	－	4.0	Ⅲ	ⅢcもしくはⅢd類
312	116	D18・23	褐色土最下部	Ⅳ	深鉢	口縁部	貝殻条痕／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１～３mm程度の砂粒	良好	にぶい橙／灰黄褐	－	5.6	Ⅲ	ⅢcもしくはⅢd類

第10表　縄文土器・土製品観察表９

挿図番号	実測番号	調査地点	層　位	基本層序	器種	残存部位	器面調整（内面／外面）	胎　土	焼成	色調（内面／外面）	口径(cm)	残存高(cm)	分類	備　考
313	64	D19	褐色土層	Ⅳ	深鉢	胴～底部	貝殻条痕／貝殻条痕→ナデ	１～３mm程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／にぶい褐	－	7.1	Ⅲ	底径9.3cm、底面に簾状？圧痕
314	61	B9	褐色土層	Ⅳ	深鉢	底部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕	１mm程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／にぶい橙	－	4.5	Ⅲ	底径6.9cm
315	65	C1・2	褐色土層	Ⅳ	深鉢	底部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１～３mm程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／橙	－	3.2	Ⅲ	底径7.8cm
316	66	B2	褐色土層	Ⅳ	深鉢	底部	貝殻条痕／貝殻条痕→ナデ	雲母、角閃石、１～３mm程度の砂粒	良好	にぶい赤褐／にぶい赤褐	－	5.7	Ⅲ	底径8.1cm、簾状？圧痕
317	63	D19	褐色土層上部	Ⅳ	深鉢	底部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１～２mm程度の砂粒	良好	にぶい橙／橙	－	3.9	Ⅲ	底径9.9cm
318	70	A24	褐色土層	Ⅳ	深鉢	底部	貝殻条痕／貝殻条痕	角閃石、１～５mm程度の砂粒	良好	橙／にぶい黄橙	－	3.7	Ⅲ	底径8.6cm
319	371	C2	褐色土層	Ⅳ	鉢	底部	ナデ／貝殻条痕	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	褐灰／にぶい黄褐	－	4.2	Ⅲ	底径2.5cm
320	563	D20	褐色土層上部	Ⅳ	深鉢	底部～胴部	ナデ／ナデ	角閃石、石英、１～２mm程度の砂粒	良好	褐灰／にぶい褐	－	5.4	Ⅳ？	底径11.6cm
321	562	D20	褐色土層上部	Ⅳ	深鉢	底部	ナデ／ナデ	角閃石、石英、１～３mm程度の砂粒	良好	灰褐／にぶい橙	－	3.2	Ⅳ？	底径10.0cm
322	370	A5	黒褐色土層	Ⅳ・Ⅴ	深鉢	胴部	ナデ／押型文	角閃石、１～３mm程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／にぶい黄橙	－	4.0	Ⅰa	
323	615	D9	黒褐色土層	Ⅳ・Ⅴ	浅鉢	口縁部	ナデ／ナデ	角閃石、１～３mm程度の砂粒	良好	褐灰／にぶい褐	－	3.3	Ⅱa	
324	39	A20、D20・24	黒褐色土層	Ⅳ・Ⅴ	深鉢	胴部	貝殻条痕／貝殻条痕	角閃石、１～４mm程度の砂粒	良好	褐灰／にぶい赤褐	－	17.7	Ⅲa1	
325	624	D19	褐色・黒色土層	Ⅳ・Ⅴ	深鉢	胴部	貝殻条痕／貝殻条痕	角閃石、１～３mm程度の砂粒	良好	にぶい橙／にぶい橙	－	5.0	Ⅲb4	
326	363	D18	黒褐色土層	Ⅳ・Ⅴ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	やや不良	黒褐／灰褐	－	6.1	Ⅲb6	
327	278	D18	黒褐色土層	Ⅳ・Ⅴ	鉢	口縁部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１～３mm程度の砂粒	良好	灰黄褐／にぶい褐	－	3.2	Ⅲb6	
328	611	A20	黒褐色土層	Ⅳ・Ⅴ	深鉢	口縁部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	１mm程度の砂粒	良好	にぶい赤褐／灰褐	－	3.2	Ⅲc1	
329	622	A20	黒褐色土層	Ⅳ・Ⅴ	深鉢	口縁部	貝殻条痕／貝殻条痕	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	黒褐／黒褐	－	4.3	Ⅲc1	
330	14	A20	黒褐色土層	Ⅳ・Ⅴ	深鉢	口縁部	ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	灰黄褐／にぶい褐	－	8.8	Ⅲd1	
331	291	A5	黒褐色土層	Ⅳ・Ⅴ	深鉢	口縁部	ナデ／貝殻条痕	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	灰黄褐／褐灰	－	4.5	Ⅲd1	
332	574	D19	褐色・黒色土層	Ⅳ・Ⅴ	鉢	胴部	ナデ／ナデ	雲母、１～５mm程度の砂粒	良好	にぶい橙／にぶい黄橙	－	4.9	Ⅲ	
333	22	D18	黒褐色土層	Ⅳ・Ⅴ	深鉢？	胴部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕	雲母、１～３mm程度の砂粒	良好	灰黄褐／にぶい黄橙	－	7.0	Ⅲ	
334	571	A20	黒褐色土層	Ⅳ・Ⅴ	深鉢	胴部	貝殻条痕／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１～３mm程度の砂粒	良好	にぶい赤褐／にぶい赤褐	－	11.8	Ⅲa1	
335	5	D19	褐色・黒色土層	Ⅳ・Ⅴ	深鉢	胴部	ナデ／貝殻条痕	角閃石、１～５mm程度の砂粒	良好	にぶい赤褐色／にぶい褐	－	17.7	Ⅲa1	
336	67	D23	褐色・黒色土層	Ⅳ・Ⅴ	深鉢	底部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、２mm程度の砂粒	良好	橙／橙	－	7.2	Ⅲ	底径9.2cm
337	125	D20	黒褐色土層	Ⅳ・Ⅴ	深鉢	底部	貝殻条痕→ナデ／ナデ	１～５mm程度の砂粒	良好	にぶい黄褐／にぶい黄橙	－	8.4	Ⅲ	底径8.5cm
338	592	B3	黒色土層	Ⅴ	深鉢	胴部	押型文→ナデ／押型文	角閃石、１～３mm程度の砂粒	良好	浅黄橙／灰褐	－	3.9	Ⅰa	
339	559	D23	黒色土層	Ⅴ	深鉢	口縁部	貝殻条痕→ナデ／ナデ	角閃石、１～３mm程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／にぶい黄橙	－	4.4	Ⅱb	
340	395	D5	黒色土層	Ⅴ	深鉢	口縁部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１～２mm程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／にぶい黄橙	－	6.5	Ⅱa	
341	379	D23	黒色土層	Ⅴ	深鉢	胴部	ナデ／ナデ	角閃石、石英、１mm程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／褐灰	－	6.7	Ⅱ	
342	232	D19	黒色土層	Ⅴ	深鉢	口縁～胴部	貝殻条痕／貝殻条痕	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	にぶい褐／灰黄褐	－	12.2	Ⅲa1	
343	55	D22	黒色土層直上	Ⅴ	深鉢	口縁～胴部	貝殻条痕／貝殻条痕	角閃石、長石、１～３mm程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／灰黄褐	－	18.3	Ⅲa2	
344	58	D18・23地	黒色土層	Ⅴ	深鉢	胴～底部	貝殻条痕／貝殻条痕	１mm程度の砂粒	良好	褐灰／橙	－	12.9	Ⅲa1	
345	273	D18	黒色土層上部	Ⅴ	鉢	口縁部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１～２mm程度の砂粒	良好	灰黄褐／にぶい赤褐	－	3.7	Ⅲb5	
346	447	C2	黒色土層	Ⅴ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	角閃石、長石、１～３mm程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／にぶい黄橙	－	4.7	Ⅲb5	
347	380	A23・24	黒色土層上部	Ⅴ	深鉢	口縁～胴部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１～２mm程度度の砂粒	やや不良	にぶい黄褐／灰褐	－	11.1	Ⅲe1	野口・阿多タイプ
348	440	D19	黒色土層	Ⅴ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	良好	にぶい黄褐／灰黄褐	－	3.9	Ⅲb5	
349	357	D23	黒色土層	Ⅴ	深鉢	口縁～胴部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１～３mm程度の砂粒	やや不良	黒褐／黒褐	－	11.3	Ⅲb5	
350	361	A23・24	黒色土層	Ⅴ	深鉢	口縁部	貝殻条痕／貝殻条混→ナデ	１～２mm程度の砂粒	良好	灰黄褐／灰黄褐	－	4.1	Ⅲb3	
351	178	A23・24	黒色土層下部	Ⅴ	深鉢	口縁部	ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、１mm程度の砂粒	やや不良	灰褐／にぶい褐	－	5.0	Ⅲb3	

第11表　縄文土器・土製品観察表10

※（　）は復元値

挿図番号	実測番号	調査地点	層　位	基本層序	器種	残存部位	器面調整（内面／外面）	胎　土	焼成	色調（内面／外面）	※口径(cm)	残存高(cm)	分類	備　考
352	619	D24	黒色土層	V	深鉢	口縁部	貝殻条痕／貝殻条痕→ナデ	1～2㎜程度の砂粒	良好	にぶい褐／にぶい橙	－	3.8	Ⅲb3	
353	555	C2	黒色土層	V	深鉢	口縁部～胴部	貝殻条痕／貝殻条痕	角閃石、1～3㎜程度の砂粒	良好	灰黄褐／にぶい橙	－	5.6	Ⅲb2	
354	625	A23･24	黒色土層上部	V	深鉢	胴部	貝殻条痕／貝殻条痕→ナデ	角閃石、1～2㎜程度の砂粒	良好	灰褐／橙	－	7.6	Ⅲb	
355	274	D22	黒色土層下部	V	深鉢	口縁～胴部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、1～5㎜程度の砂粒	良好	にぶい橙／にぶい褐	－	7.5	Ⅲb5	
356	91	C1	4層上	V	深鉢	口縁～胴部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、1～3㎜程度の砂粒	良好	にぶい褐／にぶい褐	－	9.7	Ⅲb5	
357	265	D23	黒色土層	V	深鉢	口縁～胴部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、1㎜程度の砂粒	良好	灰褐／灰褐	－	6.8	Ⅲb6	
358	362	D1	黒色土層	V	深鉢	口縁部	貝殻条痕／貝殻条痕	角閃石、1～2㎜程度の砂粒	良好	にぶい黄褐／にぶい黄橙	－	5.2	Ⅲb6	
359	606	D5	黒色土層	V	深鉢	胴部	ナデ／ナデ	角閃石、1㎜程度の砂粒	良好	褐灰／にぶい黄橙	－	9.3	Ⅲb	
360	226	A23･24	黒色土層上部	V	深鉢	口縁～胴部	貝殻条痕／貝殻条痕	雲母、角閃石、1～3㎜程度の砂粒	良好	灰黄褐／黒褐	－	8.6	Ⅲc1	
361	288	D19	黒色土層	V	深鉢	口縁部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕	角閃石、1㎜程度の砂粒	良好	褐灰／褐灰	－	3.5	Ⅲc1	
362	15	D18	黒色土層	V	深鉢	口縁部	貝殻条痕／貝殻条痕→ナデ	角閃石、雲母、1㎜程度の砂粒	良好	にぶい橙／にぶい橙	－	5.7	Ⅲc1	
363	296	D19	黒色土層	V	深鉢	口縁部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、1～2㎜程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／にぶい黄橙	－	4.6	Ⅲd3	
364	60	D19･23	黒色土層	V	深鉢	口縁部	貝殻条痕／貝殻条痕→ナデ	角閃石、1㎜以下の砂粒	良好	明赤褐／橙	－	8.2	Ⅲd1	
365	354	C2	黒色土層	V	深鉢	口縁部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	雲母、1～3㎜程度の砂粒	良好	灰褐／灰黄褐	－	6.7	Ⅲd1	
366	618	D1	黒色土層	V	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ、貝殻条痕	角閃石、1～3㎜程度の砂粒	良好	橙／橙	－	5.0	Ⅲd2	
367	575	B3	黒色土層	V	深鉢	胴部	ナデ／ナデ	角閃石、1～3㎜程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／にぶい橙	－	10.5	Ⅲf	
368	25	D18	黒色土層上部	V	深鉢？	口縁部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	雲母、1～2㎜程度の砂粒	良好	褐灰／にぶい黄橙	－	3.6	Ⅲe	
369	558	C3	黒色土層	V	深鉢	口縁部～胴部	ナデ／貝殻条痕	角閃石、1～3㎜程度の砂粒	良好	橙／にぶい橙	－	7.1	Ⅲa？	
370	621	D20	黒色土層	V	深鉢	口縁部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕	角閃石、長石、1～3㎜程度の砂粒	良好	にぶい赤褐／にぶい赤褐	－	5.1	Ⅲ	
371	69	D23	黒色土層	V	深鉢	底部	貝殻条痕／貝殻条痕	1～3㎜程度の砂粒	良好	赤褐／赤褐	－	5.0	Ⅲ	底径10.2cm
372	62	A23･24	黒色土層上部	V	深鉢	底部	貝殻条痕／ナデ	角閃石、1～3㎜程度の砂粒	良好	明赤褐／橙	－	2.7	Ⅲ	底径8.4cm
373	223	C2	黒色土層	V	土錘	2/3程度	－／ナデ	1㎜以下の砂粒	良好	黒褐／黒褐	－	－	－	残存長3.4cm、最大直径1.0cm
374	47	A	不明	－	深鉢	口縁部	貝殻条痕／貝殻条痕	角閃石、石英、長石、1～5㎜程度の砂粒	良好	橙／褐灰	－	6.6	Ⅲa2	
375	37	B3	不明	－	深鉢	胴～底部	貝殻条痕／貝殻条痕→ナデ	角閃石、1～2㎜程度の砂粒	良好	橙／橙	－	11.6	Ⅲa1	底部径9.0cm
376	49	D1･B3	不明	－	深鉢	口縁～胴部	貝殻条痕／貝殻条痕→ナデ	1～2㎜程度の砂粒	良好	にぶい黄褐／にぶい褐	(21.6)	21.1	Ⅲb3	
377	1	B	不明	－	深鉢	口縁部	貝殻条痕／貝殻条痕	角閃石、1～2㎜程度の砂粒	良好	にぶい褐／にぶい赤褐	(21.0)	8.5	Ⅲd1	
378	96	D18	不明	－	深鉢	口縁～胴部	貝殻条痕→ナデ／ナデ	角閃石、1～2㎜程度の砂粒	良好	灰黄褐／灰黄褐	－	12.9	Ⅲd2	
379	132	A8拡	不明	－	深鉢	底部	貝殻条痕／貝殻条痕→ナデ	角閃石、1～3㎜程度の砂粒	良好	灰黄褐／灰黄褐	－	4.2	Ⅲ	復元底径10.8cm
380	429	A	不明	－	浅鉢	口縁部	ケズリ→ナデ／ナデ	角閃石、石英、1㎜程度の砂粒	良好	にぶい橙／橙	－	2.6	Ⅵa	
381	175	A8	ピット埋土	－	深鉢	口縁部	ナデ／貝殻条痕→ナデ	1㎜程度の砂粒	良好	にぶい橙／灰褐	－	5.8	Ⅲd1	
382	155	E3	混土貝層Ⅰ	Ⅱ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	雲母、1～3㎜程度の砂粒	良好	灰黄褐／灰褐	－	6.2	Ⅴb1	
383	197	E1	混土貝層Ⅰ	Ⅱ	鉢	口縁部	ナデ／ナデ	角閃石、1㎜程度の砂粒	良好	灰黄褐／灰黄褐	－	3.6	Ⅴb1	
384	198	E1	混土貝層Ⅰ	Ⅱ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	雲母、角閃石、1㎜程度の砂粒	良好	灰黄褐／褐灰	－	4.8	Ⅴb1	
385	297	E1	混土貝層Ⅰ	Ⅱ	深鉢	口縁部	ナデ→ミガキ／縄文→ナデ、ミガキ	角閃石、1㎜程度の砂粒	良好	にぶい褐／褐灰	－	5.5	Ⅵb	
386	260	E3	混土貝層Ⅰ	Ⅱ	鉢	口縁～胴部	ナデ／縄文→ナデ	角閃石、1㎜程度の砂粒	良好	灰黄褐／灰黄褐	－	6.1	Ⅵa	赤色顔料付着
387	331	E2	混土貝層Ⅰ	Ⅱ	深鉢	口縁～胴部	ナデ／ナデ、ミガキ	角閃石、長石、1㎜程度の砂粒	良好	灰褐／灰褐	－	10.5	Ⅵd	
388	594	E1	混土貝層Ⅰ	Ⅱ	深鉢	口縁部～胴部	ケズリ→ナデ／ケズリ→ナデ	角閃石、1～3㎜程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／にぶい黄橙	42.8	15.2	Ⅵb	
389	255	E2	混土貝層Ⅰ	Ⅱ	深鉢	口縁部	ナデ／縄文→ナデ	角閃石、1㎜程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／褐灰	－	6.5	Ⅵd	
390	99	E3	混土貝層Ⅰ	Ⅱ	鉢	口縁部	ナデ→ミガキ／ナデ	雲母、角閃石、1～3㎜程度の砂粒	良好	灰褐／灰黄褐	－	4.1	Ⅵb	

第12表　縄文土器・土製品観察表11

※（　）は復元値

挿図番号	実測番号	調査地点	層　位	基本層序	器種	残存部位	器面調整（内面／外面）	胎　土	焼成	色調（内面／外面）	※口径(cm)	残存高(cm)	分類	備　考
391	328	E1	混土貝層Ⅰ	Ⅱ	浅鉢	口縁～胴部	ナデ→ミガキ／ナデ、ミガキ	1mm以下の砂粒	良好	褐灰／褐灰	－	5.8	Ⅶ	
392	181	E2	混土貝層Ⅰ	Ⅱ	鉢	口縁～胴部	ナデ→ミガキ／ナデ→ミガキ	角閃石、1mm程度の砂粒	良好	灰褐／灰黄褐	－	5.6	Ⅶ	
393	93	E2	混土貝層Ⅰ	Ⅱ	深鉢	口縁～胴部	ケズリ→ナデ・ミガキ／ナデ→ミガキ	角閃石、石英、1～2mm程度の砂粒	良好	灰黄褐／褐灰	－	14.0	Ⅶ	
394	100	E2	混土貝層Ⅰ	Ⅱ	深鉢	口縁～胴部	ケズリ→ナデ、ミガキ／ミガキ	角閃石、石英、1～3mmの砂粒	良好	灰黄褐／にぶい橙	(48.7)	17.7	Ⅶ	
395	128	E3	混土貝層Ⅰ	Ⅱ	深鉢	底～胴部	ナデ／ナデ→ミガキ	角閃石、1～2mm程度の砂粒	良好	灰褐／橙	－	10.0		復元底径13.4cm
396	348	E2	混土貝層Ⅰ	Ⅱ	鉢	底部	ナデ→ミガキ／ナデ→ミガキ	雲母、1mm程度の砂粒	良好	にぶい橙／黒褐	－	3.0		底径10.1cm
397	158	E1	純貝層	Ⅲ	深鉢	口縁～胴部	ケズリ→ナデ、ミガキ／ナデ→ミガキ	雲母、1～3mm程度の砂粒	良好	灰黄褐／灰黄褐	－	14.1	Vb1	
398	104	E1	純貝層	Ⅲ	深鉢	口縁～胴部	ハケメ→ナデ／ハケメ→ナデ	雲母、角閃石、1～3mm程度の砂粒	良好	にぶい褐／灰黄褐	(24.8)	16.9	Vb1	
399	196	E3	純貝層	Ⅲ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	角閃石、雲母、1～3mm程度の砂粒	良好	灰黄褐／灰黄褐	－	5.6	Vb1	
400	318	E1	純貝層	Ⅲ	深鉢	口縁部	ナデ→ミガキ／ナデ	1～3mm程度の砂粒	良好	黒／黒褐	－	7.2	Vb1	
401	211	E2	純貝層	Ⅲ	深鉢	口縁～胴部	ナデ／ナデ、指頭圧痕	雲母、1～4mm程度の砂粒	良好	にぶい黄褐／灰黄褐	－	9.8	Vb1	
402	171	E2	純貝層	Ⅲ	深鉢	口縁部	ナデ→ミガキ／縄文→ナデ→ミガキ	角閃石、1～2mm程度の砂粒	良好	にぶい黄褐／褐灰	－	3.6	VIb	
403	213	E1	純貝層	Ⅲ	鉢	口縁～胴部	ナデ→ミガキ／縄文→ナデ→ミガキ	角閃石、1～2mm程度の砂粒	良好	褐灰／にぶい黄褐	－	10.2	VIb	
404	319	E1	純貝層	Ⅲ	鉢	口縁～胴部	ナデ／ナデ→ミガキ	角閃石、1～5mm程度の砂粒	良好	暗赤褐／にぶい黄橙	－	12.3	VIb	
405	498	E1	純貝層	Ⅲ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	角閃石、1mm程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／橙	－	3.5	VIb	
406	315	E1	純貝層	Ⅲ	深鉢	口縁部	ナデ→ミガキ／ナデ	雲母、角閃石、1mm程度の砂粒	良好	黒褐／黒褐	－	5.5	VIb	
407	156	E2	純貝層	Ⅲ	深鉢	口縁～胴部	ナデ／ナデ	雲母、角閃石、1～4mm程度の砂粒	良好	灰黄褐／褐灰	－	9.6	Vb1	
408	374	E2	純貝層	Ⅲ	鉢	口縁～胴部	ナデ、ミガキ／ナデ、ミガキ	角閃石、1～5mm程度の砂粒	良好	黒／黒	－	10.6	VIb	赤色顔料付着
409	182	E2	純貝層	Ⅲ	浅鉢	口縁部	ナデ、ミガキ／ケズリ→ナデ、ミガキ	角閃石、1mm程度の砂粒	良好	灰黄褐／褐灰	－	4.0	Ⅶ	
410	134	E2	純貝層	Ⅲ	深鉢	底部	ナデ／ナデ	角閃石、1～3mm程度の砂粒	良好	灰黄褐／灰黄褐	－	4.1		底径13.9cm
411	224	E1	純貝層	Ⅲ	鉢	底部	指オサエ、ナデ／ナデ	雲母、角閃石、1～3mm程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／にぶい黄橙	－	4.1		復元底径10.7cm
412	218	E1	純貝層	Ⅲ	鉢	底部	ナデ→ミガキ／ミガキ	角閃石、雲母、1～2mm程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／黒	－	5.4		底径9.3cm
413	127	E1	純貝層	Ⅲ	深鉢	底部	ナデ／ナデ→ミガキ	角閃石、1～4mm程度の砂粒	良好	灰黄褐／にぶい橙	－	8.1		復元底径11.6cm
414	253	E2	混土貝層Ⅱ	Ⅳ	深鉢	口縁部	ナデ→ミガキ／ナデ→ミガキ	雲母、1～2mm程度の砂粒	良好	にぶい赤褐／にぶい赤褐	－	7.1	Va2	
415	320	E3	混土貝層Ⅱ	Ⅳ	深鉢	口縁～胴部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、1mm程度の砂粒	良好	にぶい黄褐／にぶい黄橙	－	10.3	Vb1	
416	161	E1	混土貝層Ⅱ	Ⅳ	深鉢	口縁～胴部	ケズリ→ナデ／ケズリ→ナデ	角閃石、1～5mm程度の砂粒	良好	にぶい橙／にぶい黄橙	(25.1)	10.2	Va1	
417	321	E2	混土貝層Ⅱ	Ⅳ	深鉢	口縁～胴部	ケズリ→ナデ／ケズリ→ナデ	角閃石、1～3mm程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／にぶい橙	(23.2)	11.0	Vb1	
418	333	E3	混土貝層Ⅱ	Ⅳ	深鉢	口縁～胴部	ケズリ→ナデ／ナデ	雲母、1～3mm程度の砂粒	良好	にぶい赤褐／灰褐	－	20.1	Vb2	
419	92	E3	混土貝層Ⅱ	Ⅳ	深鉢	口縁～胴部	ナデ／ナデ	雲母、角閃石、1～2mm程度の砂粒	良好	灰黄褐／にぶい黄橙	－	17.4	Vb1	
420	157	E3	混土貝層Ⅱ	Ⅳ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	雲母、1～4mm程度の砂粒	良好	灰黄褐／灰褐	－	8.1	Vb1	
421	199	E2	混土貝層Ⅱ	Ⅳ	深鉢	口縁～胴部	貝殻条痕→ナデ／ナデ	雲母、角閃石、1mm程度の砂粒	良好	灰黄褐／褐灰	－	7.0	Vb1	
422	316	E3	混土貝層Ⅱ	Ⅳ	深鉢	口縁～胴部	ナデ／ナデ→ミガキ	角閃石、1mm以下の砂粒	良好	褐灰／黒褐	－	7.8	Vb1	
423	317	E2	混土貝層Ⅱ	Ⅳ	深鉢	口縁～胴部	ナデ→ミガキ／ナデ	角閃石、1～3mm程度の砂粒	良好	褐灰／褐灰	－	8.6	Vb1	
424	212	E2	混土貝層Ⅱ	Ⅳ	深鉢	口縁～胴部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	1mm程度の砂粒	良好	灰褐／にぶい褐	－	15.8	Vb1	
425	322	E2	混土貝層Ⅱ	Ⅳ	深鉢	口縁～胴部	ナデ／ナデ	角閃石、1～3mm程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／灰黄橙	(30.5)	14.2	Vb1	
426	152	E1	混土貝層Ⅱ	Ⅳ	深鉢	口縁部	ナデ→ミガキ／ナデ→ミガキ	1mm程度の砂粒	良好	黒／褐灰	(29.9)	5.7	VIb	内外面に赤色顔料付着
427	136	E1・2	混土貝層Ⅱ	Ⅳ	鉢	口縁～胴部	ミガキ／ナデ→ミガキ	1mm程度の砂粒	良好	黒褐／暗灰黄	(43.9)	6.5	VIa	外面に赤色顔料付着
428	139	E2・3	混土貝層Ⅱ	Ⅳ	鉢	口縁～胴部	ミガキ／ナデ→ミガキ	1mm程度の砂粒	良好	褐灰／灰黄褐	(35.6)	6.6	VIa	外面に赤色顔料付着
429	499	E2	混土貝層Ⅱ	Ⅳ	浅鉢	口縁部	ミガキ／ミガキ	1mm程度の砂粒	良好	黒／褐灰	－	4.0	VIa	

第13表　縄文土器・土製品観察表12

※（　）は復元値

挿図番号	実測番号	調査地点	層位	基本層序	器種	残存部位	器面調整（内面／外面）	胎土	焼成	色調（内面／外面）	※口径(cm)	残存高(cm)	分類	備考
430	151	E2	混土貝層Ⅱ	Ⅳ	鉢	口縁～胴部	ナデ→ミガキ／ナデ→ミガキ	角閃石、1㎜程度の砂粒	良好	灰黄褐／褐灰	－	8.6	Ⅵa	
431	259	E2	混土貝層Ⅱ	Ⅳ	深鉢	口縁部	ミガキ／ミガキ	角閃石、1㎜程度の砂粒	良好	褐灰／黒褐	－	3.7	Ⅵa	外面に赤色顔料付着
432	235	E2	混土貝層Ⅱ	Ⅳ	鉢	胴部	ナデ／縄文→ナデ、ミガキ	1～3㎜程度の砂粒	良好	黒褐／褐灰	－	6.7	Ⅵa	赤色顔料付着
433	332	E1	混土貝層Ⅱ	Ⅳ	深鉢	口縁～胴部	ナデ、ミガキ／ナデ、ミガキ	1㎜程度の砂粒	良好	黒／黒褐	－	12.6	Ⅵb	赤色顔料付着
434	101	E1	混土貝層Ⅱ	Ⅳ	深鉢	口縁部	貝殻条痕→ナデ／ナデ	角閃石、1㎜程度の砂粒	良好	灰黄褐／褐灰	(25.6)	5.4	Ⅵb	
435	154	E2	混土貝層Ⅱ	Ⅳ	深鉢	口縁部	ハケメ→ナデ／ナデ	角閃石、1～3㎜程度の砂粒	良好	褐灰／灰黄褐	－	6.2	Ⅵb	
436	102	E1	混土貝層Ⅱ	Ⅳ	脚台付鉢	脚台部	ナデ／ナデ	1～3㎜程度の砂粒	良好	灰黄褐／灰黄褐	－	5.8	Ⅵb	底径12.5cm
437	97	E1	混土貝層Ⅱ	Ⅳ	深鉢	口縁～胴部	ナデ／ナデ	雲母、1～2㎜程度の砂粒を施す	良好	灰黄褐／にぶい黄橙	－	14.3	Ⅵd	
438	248	E2	混土貝層Ⅱ	Ⅳ	深鉢	底部	ナデ／ナデ	雲母、角閃石、1～3㎜程度の砂粒	良好	褐灰／にぶい橙	－	6.9		
439	225	E1・2	混土貝層Ⅱ	Ⅳ	深鉢	底部	ナデ／ナデ	雲母、角閃石、1㎜程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／にぶい黄褐	－	7.8		復元底径12.6cm
440	126	E1	混土貝層Ⅱ	Ⅳ	深鉢	底部	ナデ／指オサエ、ナデ	雲母、1～3㎜程度の砂粒	良好	にぶい赤褐／にぶい橙	－	7.3		底径11.8cm
441	160	E1	混土貝層Ⅱ	Ⅳ	深鉢	胴～底部	ケズリ→ナデ/指オサエ・ナデ→ミガキ	1～4㎜程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／にぶい橙	－	9.9		底径11.0cm
442	159	E3	混貝土層	Ⅴ	深鉢	口縁～胴部	ケズリ→ナデ／ナデ→ミガキ	雲母、1～2㎜程度の砂粒	良好	にぶい褐／にぶい赤褐	(21.6)	18.9	Ⅴb2	
443	162	E3	混貝土層	Ⅴ	深鉢	口縁～胴部	ケズリ→ナデ、指オサエ/ナデ、指オサエ	1～2㎜程度の砂粒	良好	灰黄褐／褐灰	－	13.4	Ⅴa1	
444	195	E3	混貝土層	Ⅴ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	雲母、1㎜程度の砂粒	良好	灰黄褐／にぶい褐	－	5.6	Ⅴb2	
445	251	E3	混貝土層	Ⅴ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	雲母、1～3㎜程度の砂粒	良好	にぶい赤褐／にぶい褐	－	6.0	Ⅴa2	
446	103	E3	土壙墓埋土	－	深鉢	口縁～胴部	ケズリ→ナデ、ミガキ／ナデ→ミガキ	角閃石、1～3㎜程度の砂粒	良好	灰褐／にぶい褐	(27.3)	24.5	Ⅵb	
447	210	E3	土壙墓埋土	－	深鉢	口縁～胴部	貝殻条痕→ナデ／ナデ	角閃石、雲母、1～3㎜程度の砂粒	良好	灰黄褐／灰黄褐	－	8.8	Ⅴb1	
448	21	E	不明	－	深鉢	胴部	ナデ／ナデ→ミガキ	角閃石、1㎜程度の砂粒	良好	にぶい褐／にぶい赤褐	－	8.4	Ⅵd	
449	7	不明	不明	－	深鉢	口縁～胴部	貝殻条痕／貝殻条痕→ナデ	角閃石、1～3㎜程度の砂粒	良好	灰黄褐／にぶい橙	－	10.5	Ⅲa1	
450	8	不明	不明	－	深鉢	口縁～胴部	貝殻条痕／貝殻条痕	角閃石、1～2㎜程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／灰黄褐	(26.0)	11.2	Ⅲa2	
451	48	不明	不明	－	深鉢	口縁～胴部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕	角閃石、1～4㎜程度の砂粒	良好	灰黄褐／にぶい褐	(18.6)	11.4	Ⅲa2	
452	52	不明	不明	－	深鉢	口縁～胴部	貝殻条痕／貝殻条痕	角閃石、1～3㎜程度の砂粒	良好	灰黄褐／灰褐	－	14.1	Ⅲa2	
453	389	不明	不明	－	深鉢	胴部	ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、1～3㎜程度の砂粒	やや不良	灰黄褐／褐灰	－	7.9	Ⅲb5	
454	11	不明	不明	－	深鉢	口縁～胴部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	角閃石、1～2㎜程度の砂粒	良好	灰褐／灰黄褐	(18.5)	9.7	Ⅲb3	
455	46	不明	不明	－	深鉢	口縁～胴部	貝殻条痕／貝殻条痕→ナデ	角閃石、1～2㎜程度の砂粒	良好	にぶい橙／灰赤	－	13.1	Ⅲc1	
456	56	不明	不明	－	深鉢	口縁～胴部	貝殻条痕→ナデ／貝殻条痕→ナデ	1～3㎜程度の砂粒	良好	にぶい橙／灰褐	－	11.0	Ⅲc1	
457	491	不明	不明	－	深鉢	胴部～底部	貝殻条痕／貝殻条痕→ナデ	1～3㎜程度の砂粒	良好	灰黄褐／にぶい黄橙	－	7.5	Ⅲ	復元底径9.4cm
458	79	不明	不明	－	深鉢	口縁～胴部	ナデ／ケズリ→ナデ	角閃石、石英、1～3㎜程度の砂粒	良好	灰黄褐／褐灰	－	9.9	Ⅳb2	
459	110	不明	不明	－	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	雲母、1～3㎜程度の砂粒	良好	灰黄褐／にぶい赤褐	－	8.4	Ⅳc1	
460	78	不明	不明	－	深鉢	口縁～胴部	ナデ／ケズリ→ナデ	角閃石、1㎜程度の砂粒	良好	にぶい褐／灰黄褐	－	20.0	Ⅳc2	
461	572	不明	不明	－	鉢	胴部	ナデ／ナデ	角閃石、長石、石英、1～5㎜程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／にぶい赤褐	－	5.2	Ⅳ？	
462	137	不明	不明	－	鉢	口縁～胴部	ナデ→ミガキ／ナデ→ミガキ	1～3㎜程度の砂粒	良好	黒／黒褐	－	9.3	Ⅵa	外面に赤色顔料付着
463	18	不明	不明	－	深鉢	胴部	ナデ／ナデ→ミガキ	角閃石、1㎜程度の砂粒	良好	灰黄褐／にぶい赤褐	－	15.0	Ⅵd	
464	19	不明	不明	－	鉢	胴～底部	ナデ／ナデ→ミガキ	角閃石、石英、1～5㎜程度の砂粒	良好	灰褐／褐灰	－	8.2	Ⅵd	
465	355	不明	不明	－	深鉢	口縁～胴部	ナデ／ナデ→ミガキ	角閃石、石英、1～2㎜程度の砂粒	良好	にぶい黄橙／にぶい橙	－	15.5	Ⅶ	

第14表　石器・石製品観察表 1

挿図番号	実測番号	調査地点	層位	基本層序	器種	分類	石材	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
466	456	A17	撹乱層	Ⅰ	石鏃	Ⅱb	安山岩	2.8	1.5	0.4	1.2	
467	450	A2	撹乱層	Ⅰ	石鏃	Ⅱb	黒曜石	1.8	1.5	0.5	1.1	
468	508	A16	撹乱層	Ⅰ	石鏃	Ⅱc	安山岩	2.7	1.7	0.6	2.1	
469	521	D19	撹乱層	Ⅰ	石鋸	－	安山岩	1.7	1.1	0.2	0.3	
470	537	A19	撹乱層	Ⅰ	石匙	Ⅰb	安山岩	3.7	5.3	1.0	13.1	
471	423	B7	撹乱貝層	Ⅰ	石笛	－	石灰岩	6.0	2.9	1.6	44	
472	403	B1	撹乱層	Ⅰ	石錘	Ⅱ	安山岩	8.3	8.7	5.7	590	
473	404	C15	撹乱層	Ⅰ	石錘	Ⅰ	安山岩？	9.6	7.8	2.2	254	
474	550	C14	撹乱層	Ⅰ	磨石・敲石	Ⅰ	安山岩	9.1	8.8	3.5	427	
475	421	C15b	撹乱層	Ⅰ	磨製石斧	Ⅱa	玄武岩	11.8	5.3	3.9	280	
476	544	A2	撹乱層	Ⅰ	磨製石斧	Ⅲc	安山岩	10.1	6.0	4.0	355	
477	522	D9	第2貝層	Ⅱ？	石鏃	Ⅰa	安山岩	2.6	2.3	0.4	1.6	
478	503	A23	混貝土層	Ⅱ	石鏃	Ⅲb	黒曜石	1.7	1.9	0.4	0.8	
479	526	D5	混土貝層	Ⅱ	石鏃	Ⅱb	チャート	2.3	1.8	0.3	0.8	
480	509	A20	混貝土層	Ⅱ	石鏃	Ⅱb	チャート	3.1	2.3	0.5	2.0	
481	506	B7	混土貝層	Ⅱ	石鏃	Ⅱb	安山岩	2.1	1.6	0.4	0.8	
482	523	A21	混土貝層	Ⅱ	石鏃	Ⅱb	安山岩	1.8	1.4	0.4	0.9	
483	515	B15	混土貝層	Ⅱ	石鏃	Ⅱc	安山岩	2.2	1.4	0.4	0.7	
484	510	A20	混貝土層	Ⅱ	石鏃	Ⅱc	安山岩	2.4	1.8	0.6	1.7	
485	505	B9	混貝土層	Ⅱ	石鏃	Ⅱc	黒曜石	1.9	1.5	0.3	0.8	
486	540	D17	混土貝層	Ⅱ	石匙	Ⅰa	安山岩	4.8	5.9	1.0	17.7	
487	539	A11	混土貝層	Ⅱ	石匙	Ⅰa	安山岩	3.5	4.9	0.5	6.8	
488	536	A13	混土貝層	Ⅱ	石匙	Ⅰb	安山岩	2.9	6.5	0.9	13.7	
489	408	D1	混土貝層	Ⅱ	石匙	Ⅰb	安山岩	2.7	4.0	0.8	8.0	
490	541	A20	混土貝層	Ⅱ	石匙	Ⅱa	安山岩	6.1	2.7	1.1	11.2	
491	532	A20	混貝土層	Ⅱ	削器	－	安山岩	7.3	5.6	1.2	41.6	
492	531	A18	混土貝層	Ⅱ	削器	－	安山岩	9.6	4.6	2.0	58.4	
493	467	A11	混土貝層	Ⅱ	石製垂飾	－	滑石	6.0	2.1	0.6	11.1	
494	401	A3	混土貝層	Ⅱ	石錘	Ⅰ	安山岩	7.7	6.1	4.6	270	
495	406	A2	混土貝層	Ⅱ	石錘	Ⅱ	安山岩	10.5	12.7	4.7	542	
496	548	A1	混土貝層	Ⅱ	磨石・敲石	Ⅰ	安山岩	9.4	8.6	4.9	600	
497	463	A2	混土貝層	Ⅱ	磨石・敲石	Ⅰ	安山岩	10.3	8.6	3.7	410	
498	462	A13	第5貝層	Ⅱ	磨石・敲石	Ⅰ	安山岩	10.6	7.0	3.9	389	
499	466	D17	混土貝層	Ⅱ	磨石・敲石	Ⅲ	安山岩	10.9	6.6	6.7	842	
500	419	A3	混土貝層	Ⅱ	磨製石斧	Ⅱa	輝緑岩	12.0	5.9	3.7	410	
501	527	D24	純貝層	Ⅲ	石鏃	Ⅰb	黒曜石	1.5	1.7	0.3	0.5	
502	452	B9	貝層	Ⅲ	石鏃	Ⅰb	チャート	2.1	2.0	0.3	1.4	
503	530	D17	純貝層	Ⅲ	石鏃	Ⅱa	安山岩	2.4	1.7	0.5	1.2	
504	524	D20	純貝層	Ⅲ	石鏃	Ⅱb	黒曜石	3.0	2.0	0.5	1.2	
505	517	A20	純貝層	Ⅲ	石鏃	Ⅱb	安山岩	2.9	1.8	0.3	1.3	
506	417	D23	純貝層	Ⅲ	石鏃	Ⅱb	チャート	3.1	1.7	0.4	1.2	
507	411	C1	貝層(最下層)	Ⅲ	石鏃	Ⅱc	安山岩	3.8	2.0	0.4	2.5	
508	551	D13	純貝層	Ⅲ	磨石・敲石	Ⅰ	安山岩	7.4	7.1	4.1	434	
509	547	D9	純貝層	Ⅲ	磨石・敲石	Ⅱ	安山岩	11.4	6.3	3.8	390	
510	529	A22	褐色土層	Ⅳ	石鏃	Ⅰb	安山岩	1.4	1.6	0.3	0.3	
511	520	A23	褐色土層	Ⅳ	石鏃	Ⅰb	安山岩	1.9	1.8	0.4	0.8	
512	455	D9	褐色土層	Ⅳ	石鏃	Ⅰb	安山岩	1.8	2.0	0.4	0.9	
513	511	C3	褐色土層	Ⅳ	石鏃	Ⅰb	安山岩	2.4	2.1	0.4	1.2	
514	458	D19	褐色土層	Ⅳ	石鏃	Ⅰb	安山岩	2.0	1.8	0.3	0.5	
515	460	D19	褐色土層	Ⅳ	石鏃	Ⅰb	黒曜石	2.2	1.5	0.3	0.7	
516	528	D22	褐色土層	Ⅳ	石鏃	Ⅰb	安山岩	2.0	1.8	0.4	0.7	
517	504	C2	褐色土層	Ⅳ	石鏃	Ⅱa	安山岩	1.9	1.5	0.4	0.8	
518	507	C3	褐色土層	Ⅳ	石鏃	Ⅱa	黒曜石	2.0	1.4	0.4	0.9	
519	454	D13	褐色土層	Ⅳ	石鏃	Ⅱa	安山岩	2.6	1.7	0.4	1.3	
520	415	C2	褐色土層	Ⅳ	石鏃	Ⅱa	安山岩	2.7	1.8	0.5	1.7	
521	413	D17	褐色土層	Ⅳ	石鏃	Ⅱa	安山岩	2.6	1.6	0.4	1.3	
522	516	C3	褐色土層	Ⅳ	石鏃	Ⅱb	黒曜石	2.6	1.5	0.5	1.1	
523	514	A24	褐色土層	Ⅳ	石鏃	Ⅱb	安山岩	1.7	1.3	0.3	0.5	
524	451	C3	褐色土層	Ⅳ	石鏃	Ⅱb	安山岩	2.3	1.9	0.3	1.6	
525	501	C2	褐色土層	Ⅳ	石鏃	Ⅱc	黒曜石	2.1	1.6	0.4	0.8	
526	500	A22	褐色土層	Ⅳ	石鏃	Ⅱc	安山岩	2.3	1.5	0.3	0.9	

第15表　石器・石製品観察表２

挿図番号	実測番号	調査地点	層位	基本層序	器種	分類	石材	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
527	512	C3	褐色土層	Ⅳ	石鏃	Ⅱb	黒曜石	2.7	1.9	0.4	1.1	
528	525	B3	褐色土層下部	Ⅳ	石鏃	Ⅱb	安山岩	2.5	1.9	0.4	0.8	
529	459	A21・22	褐色土層	Ⅳ	石鏃	Ⅲc	黒曜石	1.3	1.6	0.3	0.4	１号人骨に伴う
530	538	A24	褐色土層	Ⅳ	石匙	Ⅱb	安山岩	6.7	6.0	1.0	33.3	
531	534	C3	褐色土層	Ⅳ	削器	－	安山岩	7.7	3.9	0.9	23.3	
532	535	D20	褐色土層上部	Ⅳ	削器	－	安山岩	5.3	6.4	1.1	27.9	
533	533	C1	褐色土層	Ⅳ	削器	－	安山岩	8.2	4.3	6.1	29.8	
534	405	D19	褐色土層	Ⅳ	石錘	Ⅰ	安山岩	8.7	9.9	4.0	393	
535	465	A24	褐色土層	Ⅳ	磨石・敲石	Ⅱ	安山岩	10.5	8.5	6.4	820	
536	549	D17	褐色土層	Ⅳ	磨石・敲石	Ⅱ	安山岩	11.2	8.9	4.1	630	
537	552	C3	褐色土層	Ⅳ	磨石・敲石	Ⅱ	安山岩	10.3	8.7	4.6	632	
538	546	D1	褐色土層	Ⅳ	磨製石斧	Ⅰb	砂岩泥岩	8.7	4.1	1.8	106	ホルンフェルス
539	457	A20	黒褐色土層	Ⅳ・Ⅴ	石鏃	Ⅱa	安山岩	2.2	1.5	0.3	0.7	
540	418	D20	黒褐色土層	Ⅳ・Ⅴ	石鏃	Ⅰa	安山岩	1.8	1.9	0.4	0.8	
541	513	A19	黒褐色土層	Ⅳ・Ⅴ	石鏃	Ⅱc	安山岩	3.3	2.1	0.6	2.7	
542	518	A24	黒色土層	Ⅴ	石鏃	Ⅱa	黒曜石	1.9	1.5	0.5	0.8	
543	410	D20	黒色土層	Ⅴ	石鏃	Ⅱa	チャート	3.1	2.0	0.5	1.9	
544	519	A24	黒色土層	Ⅴ	石鏃	Ⅱb	凝灰岩	2.8	1.9	0.4	1.1	
545	412	D20	黒色土層	Ⅴ	石鏃	Ⅱb	サヌカイト	2.6	1.9	0.3	1.0	
546	453	D20	黒色土層	Ⅴ	石鏃	Ⅱc	安山岩	2.6	2.0	0.4	0.8	
547	409	D19	黒色土層上部	Ⅴ	尖頭器	－	安山岩	4.8	2.6	0.9	9.9	
548	461	C3	黒色土層	Ⅴ	磨石・敲石	Ⅱ	安山岩	11.3	9.2	5.2	775	
549	416	D19	不明	－	石鏃	Ⅱa	安山岩	2.2	1.7	0.5	1.1	
550	543	A8	不明	－	磨製石斧	Ⅱb	砂岩か	14.6	7.1	3.6	570	ホルンフェルス
551	414	E3	混土貝層Ⅱ	Ⅳ	石鏃	Ⅱa	安山岩	2.4	1.9	0.6	1.9	
552	402	E1	混土貝層Ⅱ	Ⅳ	石錘	Ⅰ	安山岩？	9.4	9.3	2.5	302	
553	542	E1	混土貝層Ⅱ	Ⅳ	石皿	－	安山岩	20.9	17.6	4.8	2100	
554	422	E1	混貝土層	Ⅴ	磨製石斧	Ⅰb	安山岩	10.2	4.6	2.9	225	
555	545	E3	混貝土層	Ⅴ	磨製石斧	Ⅱb	変成岩	11.8	5.8	1.8	191	ホルンフェルス
556	464	不明	不明	－	磨石・敲石	Ⅱ	安山岩	12.4	10.0	5.2	1026	
557	420	不明	不明	－	磨製石斧	Ⅱ	安山岩	6.2	4.2	2.0	74	
558	469	不明	不明	－	玦状耳飾	－	滑石	3.7	1.5	0.9	7.6	

第16表　骨角器観察表

挿図番号	実測番号	調査地点	層位	基本層序	種別	材質	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
559	645	A14	混土貝層	Ⅱ	骨製刺突具	動物の四肢骨	4.2	1.6	0.8	3.6	
560	644	D1	純貝層	Ⅲ	骨製刺突具	動物の四肢骨	9.3	1.7	0.7	4.6	
561	646	A7	不明	－	骨製刺突具	動物の四肢骨	3.4	0.6	0.5	0.8	
562	424	E1	混土貝層Ⅱ	Ⅳ	骨製刺突具	動物の四肢骨	5.6	0.7	0.4	1.9	
563	643	不明	不明	－	骨製刺突具	動物の四肢骨	6.4	1.3	0.7	4.0	ヤス？
564	425	C3	褐色土層	Ⅳ	魚骨製刺突具	エイ類尾棘	4.1	0.5	0.3	0.6	
565	471	E3	混土貝層Ⅱ	Ⅳ	魚骨製刺突具	エイ類尾棘	5.4	0.8	0.4	1.4	
566	473	E3	混土貝層Ⅱ	Ⅳ	魚骨製刺突具	エイ類尾棘	4.7	0.5	0.2	0.5	
567	470	E3	混土貝層Ⅱ	Ⅳ	骨製刺突具か簪	動物の四肢骨	6.5	0.6	0.4	2.0	
568	472	A3	混土貝層Ⅰ	Ⅱ	骨製簪？	動物の四肢骨	6.3	0.3	0.5	3.7	
569	642	A11	第5貝層	Ⅱ	骨製簪？	動物の四肢骨	13.3	0.6	0.5	3.0	
570	647	A11	第5貝層	Ⅱ	骨製垂飾	動物の四肢骨	9.8	2.7	2.4	18.8	

第17表　貝製品観察表

挿図番号	実測番号	調査地点	層位	基本層序	種別	分類	材質	計測値				備考
								長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
571	632	A21	撹乱層	Ⅰ	貝輪	Ⅰ	フネガイ科サルボウ	6.0	10.0	4.0	67.4	未製品
572	640	A24	撹乱層	Ⅰ	貝輪	Ⅱ	フネガイ科サルボウ	5.6	6.1	1.6	10.2	内外面粗く研磨
573	626	B	混土貝層	Ⅱ	貝輪	Ⅱ	フネガイ科アカガイ	5.5	4.3	0.8	4.8	内外面研磨
574	628	B5	混土貝層	Ⅱ	貝輪	Ⅱ	フネガイ科サルボウ	5.0	4.8	0.8	7.2	内外面研磨、2ヶ所穿孔
575	639	A13	混土貝層	Ⅱ	貝輪	Ⅱ	タマキガイ科ベンケイガイ	4.5	3.8	0.8	5.0	内外面研磨
576	634	B7	混土貝層	Ⅱ	貝輪	Ⅱ	フネガイ科サルボウ	5.5	6.3	1.2	11.4	内外面粗く研磨
577	636	D19	混土貝層	Ⅱ	貝輪	Ⅱ	フネガイ科アカガイ	4.8	5.0	1.0	8.0	内外面研磨
578	630	A3	混土貝層	Ⅱ	貝輪	Ⅱ	フネガイ科アカガイ	5.8	6.0	1.8	16.2	内外面研磨
579	627	B5	混土貝層	Ⅱ	貝輪	Ⅰ	フネガイ科サルボウ	8.0	9.5	4.4	65.2	未製品か
580	641	D1	純貝層	Ⅲ	貝輪	Ⅱ	フネガイ科サルボウ?	5.3	5.5	1.0	8.2	内外面研磨
581	629	B7	混土貝層	Ⅱ	貝輪	Ⅰ	フネガイ科サルボウ	7.4	9.3	3.2	68.8	
582	485	A21	混土貝層	Ⅱ	貝輪	Ⅰ	フネガイ科アカガイ	10.9	3.4	8.5	72.2	内周縁磨耗
583	430	D20	純貝層	Ⅲ	貝輪	Ⅰ	フネガイ科アカガイ	9.9	8.0	3.8	108	未製品か
584	631	E1	混土貝層Ⅰ	Ⅱ	貝輪	－	アクキガイ科アカニシ	14.7	9.0	5.8	209.4	
585	633	E3	混土貝層Ⅰ	Ⅱ	貝輪	Ⅱ	フネガイ科アカガイかサルボウ	4.1	7.4	0.8	6.2	内外面研磨
586	637	E3	混土貝層Ⅰ	Ⅱ	貝輪	Ⅱ	フネガイ科アカガイ	5.7	6.2	0.8	6.4	内外面研磨
587	635	E2	混土貝層Ⅱ	Ⅳ	貝輪	Ⅱ	フネガイ科アカガイ?	6.0	5.1	0.7	4.8	内外面研磨
588	638	不明	不明	－	貝輪	Ⅱ	フネガイ科サルボウ	5.6	4.8	0.9	7.2	内外面研磨

第７章　弥生時代以降の遺物

第１節　出土遺物の概要

轟貝塚は縄文時代から中世までの複合遺跡であり、これまでの調査で弥生時代以降の土器・陶磁器も比較的多く出土している。主なものとして、弥生時代では中・後期の甕、壺、高坏などの弥生土器、舶載鏡とみられる平縁の鏡式不明鏡が表面採集されている。続く古墳時代の遺物として、埴輪や須恵器が出土しており、貝塚周辺に古墳が存在していたことがわかる。古代の須恵器、中世の土師質土器や瓦質土器、青磁なども出土しており、Ａトレンチでは中世居館に伴うとみられる横堀跡が検出されている。このように、縄文時代以降、本貝塚周辺では人々の営みが連綿と続いていたことがうかがわれる。

承久３年（1211）時点では蓮華王院領宇土庄が存在したことが明らかになっており、轟貝塚が所在する宮庄町周辺がその中心とされている。轟貝塚から出土する中世の遺物は、これに関連するものも含まれるのであろう。以下ではＡ～Ｄトレンチから出土した弥生時代以降の出土遺物について報告する。

第２節　Ａ～Ｄトレンチ出土遺物

（１）表土層及び撹乱層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅰ層）出土遺物

589・590は弥生中期の甕の口縁部片で、589の端部は断面Ｔの字形を呈し、590は外側に突帯状に突出する。591は円筒埴輪片。一次調整タテハケのみで、上面を欠損する突帯が残る。

592～597は中世の土器・陶磁器である。592・593は土師質土器で、前者は皿、後者は坏である。回転台を用いて製作しており、内外面とも回転ナデ調整を施す。底部に糸切り離しの痕跡が残る。594～596は瓦質土器で、594は捏鉢、595は羽釜、596は擂鉢である。594の内面は細かい不定方向の擂目状のハケメを施す。596はナデ調整後、擂目を施す。597は16世紀代の龍泉窯系の青磁碗で細蓮弁文を施す。

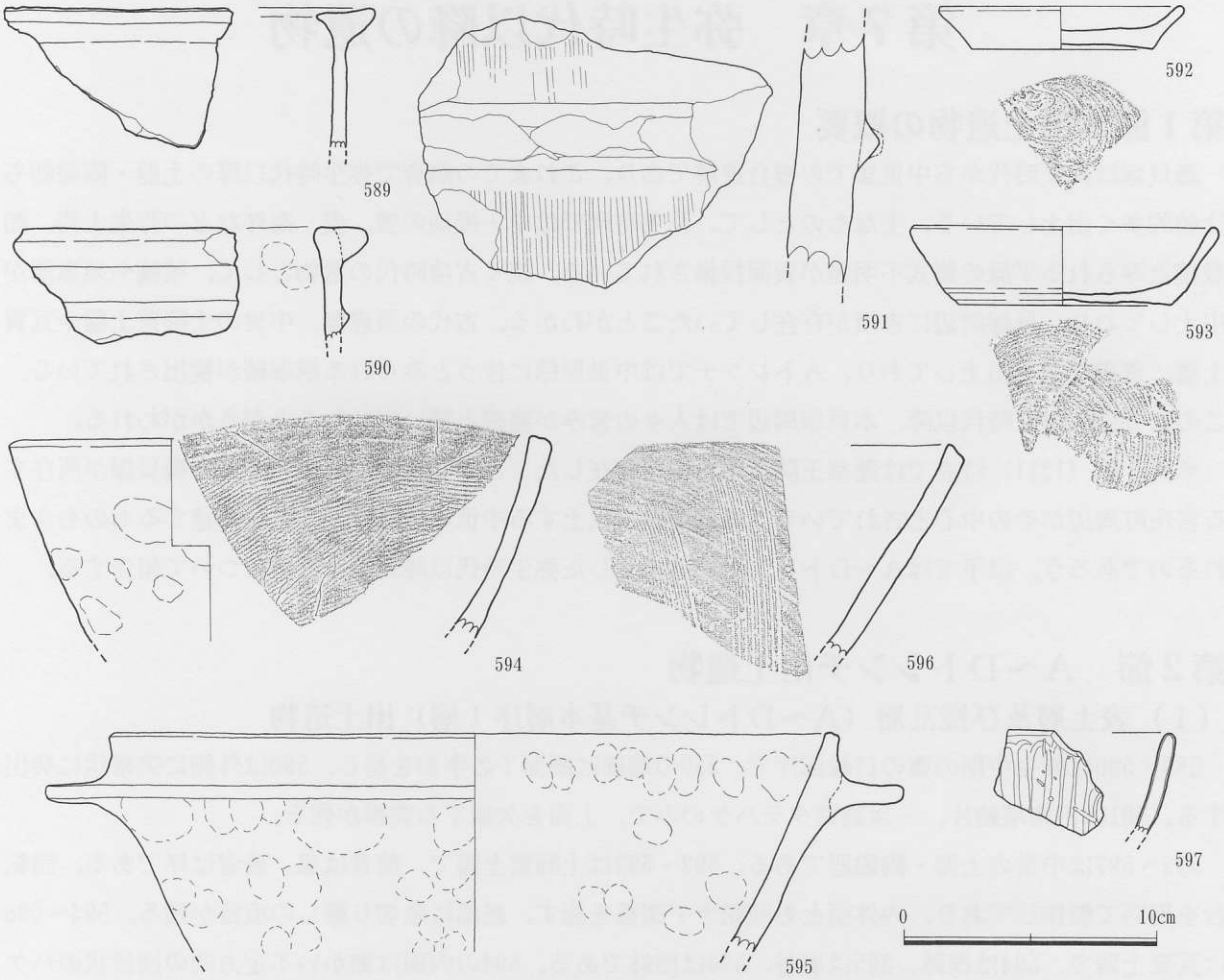
（２）黒・褐色混土貝層及び混貝土層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅱ層）出土遺物

598は弥生中期の甕の脚台片で、底面は上げ底状をなす。599は円筒埴輪で口縁部と底部を欠く。内外面とも一次調整タテハケのみであるが、外面の方がハケメの密度が細かい。突帯は高く突出し、断面が台形状を呈する。黒斑がないことから窖窯焼成と判断される。

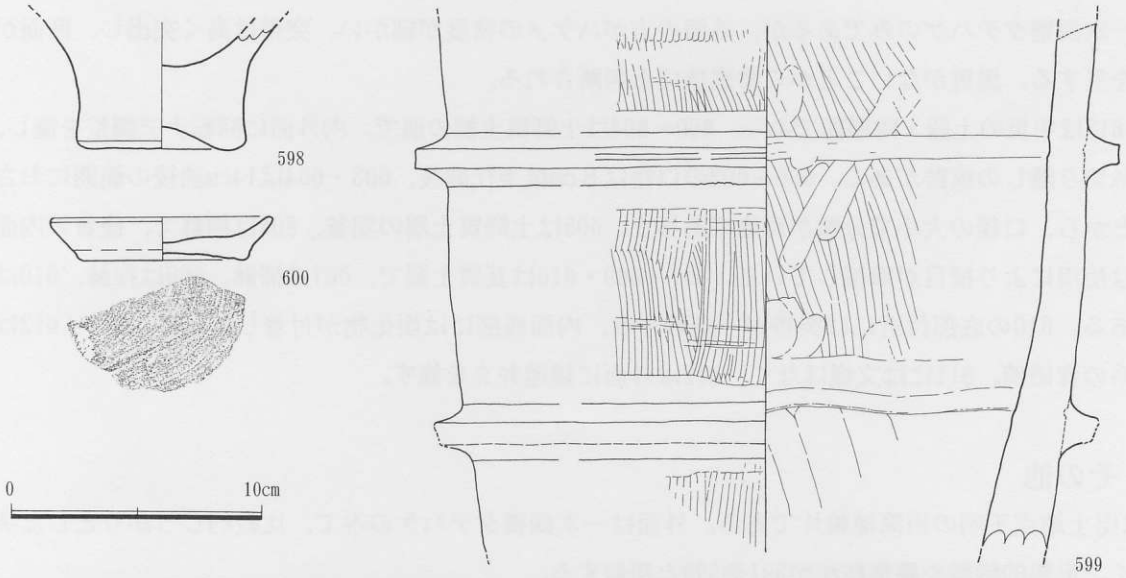
600～612は中世の土器・陶磁器である。600～604は土師質土器の皿で、内外面に回転ナデ調整を施し、底部は糸切り離しの痕跡がある。600～602の口径は８cm後半代前後、603・604は14cm前後の範囲におさまることから、口径の大小で分類が可能であろう。605は土師質土器の羽釜、608は擂鉢で、後者の内面底部には使用により擂目が摩滅している。607・609・610は瓦質土器で、607は擂鉢、609は捏鉢、610は火鉢である。610の底部付近には突帯が一条めぐり、内面底部には炭化物が付着している。611・612は龍泉窯系の青磁碗。611には文様はなく、612は外面に鎬蓮弁文を施す。

（３）その他

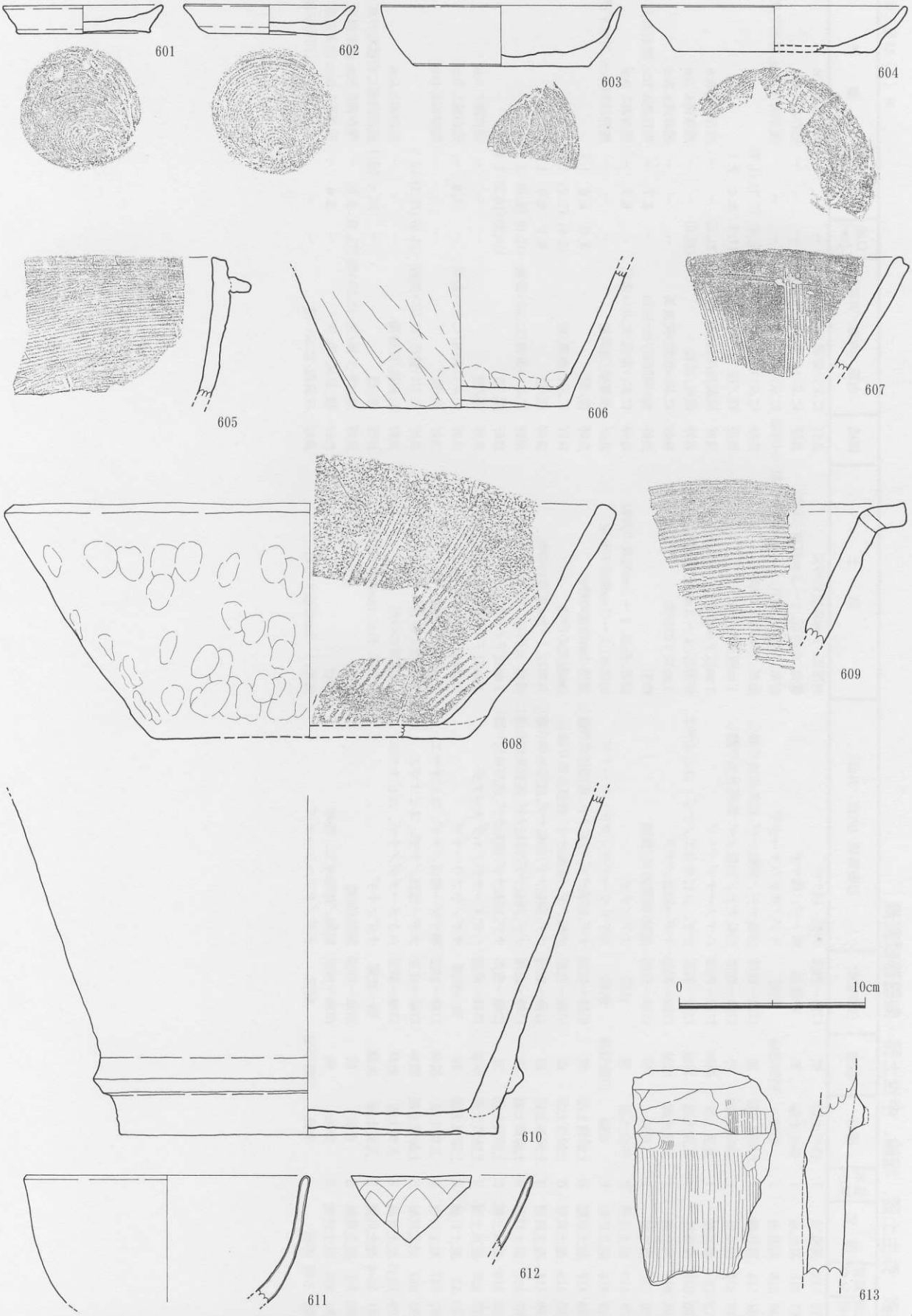
613は出土地点不明の円筒埴輪片である。外面は一次調整タテハケのみで、比較的しっかりとした突帯がつく。形態的特徴や調整技法が591や599と類似する。



第85図　表土層及び撹乱層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅰ層）出土弥生土器、埴輪、中世土器・陶磁器（１／３）



第86図　黒・褐色混土貝層及び混貝土層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅱ層）出土弥生土器、埴輪、中世土器・陶磁器（１／３）



第87図　黒・褐色混土貝層及び混貝土層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅱ層）出土弥生土器、埴輪、中世土器・陶磁器及び出土地点不明埴輪（１／３）

第18表　弥生土器、埴輪、中世土器・陶磁器観察表

※（　）は復元値

挿図番号	実測番号	調査地点	層位	基本層序	種類	器種	残存部位	器面調整（内面／外面）	胎土	焼成	色調（内面／外面）	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	備考
589	576	C13	撹乱層	Ⅰ	弥生土器	甕	口縁～胴部	ナデ／横ナデ	角閃石、1mm程度の砂粒	良好	にぶい黄橙/灰黄褐	－	－	－	残存高5.5cm
590	607	B15	撹乱層	Ⅰ	弥生土器	甕	口縁部	横ナデ／横ナデ	雲母、角閃石、1～3mm程度の砂粒	良好	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－	－	－	残存高4.6cm
591	609	D18	撹乱層	Ⅰ	埴輪	円筒埴輪	胴部	ナデ／タテハケ→ナデ	雲母、角閃石、長石、1～3mm程度の砂粒	やや不良	にぶい橙/にぶい橙	－	－	－	残存高10.8cm、川西Ⅴ期
592	584	A16	撹乱層	Ⅰ	土師質土器	皿	口縁～底部	回転ナデ／回転ナデ、底部糸切り離し	雲母、1mm以下の砂粒	良好	にぶい褐/にぶい褐	(9.6)	(7.2)	(1.7)	
593	586	A16	撹乱層	Ⅰ	土師質土器	坏	口縁～底部	回転ナデ／回転ナデ、底部糸切り離し	1mm程度の砂粒	良好	橙／橙	11.8	8.4	3.1	
594	578	C5	撹乱層	Ⅰ	瓦質土器	捏鉢	口縁～胴部	ハケメ→ナデ／ナデ	1mm以下の砂粒	良好	灰黄褐/灰黄褐	(21.5)	－	－	残存高8.0cm
595	596	D18	撹乱層	Ⅰ	瓦質土器	羽釜	口縁～胴部	ナデ、ユビオサエ／ナデ、ユビオサエ	角閃石、1～2mm程度の砂粒	良好	黄灰/灰黄	(29.0)	－	－	残存高8.2cm
596	598	D18	撹乱層	Ⅰ	瓦質土器	擂鉢	口縁～胴部	ナデ→擂目／ナデ	1mm以下の砂粒	良好	にぶい黄橙/灰黄褐	－	－	－	残存高8.3cm
597	580	C3	撹乱層	Ⅰ	青磁	碗	口縁～体部	施釉/細蓮弁文、施釉	緻密	良好	釉:明緑灰/胎:灰白	－	3.7	－	残存高3.7cm、龍泉窯系
598	579	A19	混土貝層	Ⅱ	弥生土器	甕	底部	ナデ／ナデ	雲母、長石、1～2mm程度の砂粒	良好	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－	6.7	－	残存高5.0cm
599	610	A18	混土貝層	Ⅱ	埴輪	円筒埴輪	胴部	タテハケ→ナデ／タテハケ→ナデ	角閃石、1～3mm程度の砂粒	良好	浅黄橙/浅黄橙	－	－	－	残存高20.8cm、川西Ⅴ期
600	589	A17	混土貝層	Ⅱ	土師質土器	皿	口縁～底部	ナデ、回転ナデ/回転ナデ、底部糸切り離し	雲母、1mm程度の砂粒	良好	橙/橙	8.6	6.6	1.7	
601	585	A18	混土貝層	Ⅱ	土師質土器	皿	口縁～底部	回転ナデ／回転ナデ、底部糸切り離し	1mm程度の砂粒	良好	にぶい赤褐/橙	(8.6)	(7.2)	1.5	
602	590	A18	混土貝層	Ⅱ	土師質土器	皿	口縁～底部	ナデ、回転ナデ/回転ナデ、底部糸切り離し	角閃石、1～2mm程度の砂粒	良好	橙/橙	9.0	6.8	1.6	
603	587	A11	混土貝層	Ⅱ	土師質土器	皿	口縁～底部	ナデ、回転ナデ/回転ナデ、底部糸切り離し	雲母、角閃石、1mm以下の砂粒	良好	にぶい黄橙/にぶい黄橙	(13.0)	(9.6)	3.3	
604	588	A10	混貝土層	Ⅱ	土師質土器	皿	口縁～底部	ナデ、回転ナデ/回転ナデ、底部糸切り離し	1mm以下の砂粒	良好	橙/橙	(14.2)	(10.5)	2.5	
605	577	A20	混貝土層	Ⅱ	土師質土器	羽釜	口縁～胴部	ハケメ→ナデ／ハケメ→ナデ	1mm以下の砂粒	良好	橙/橙	－	－	－	残存高7.4cm
606	583	A3	混土貝層	Ⅱ	土師質土器	鉢	胴～底部	ナデ／ケズリ→ナデ	1mm程度の砂粒	良好	にぶい黄褐/にぶい黄褐	－	11.6	－	残存高7.3cm
607	597	A17	混土貝層	Ⅱ	瓦質土器	擂鉢	口縁～胴部	横ナデ→擂目／ナデ、ユビオサエ	1mm程度の砂粒	良好	灰/灰	－	－	－	残存高6.1cm
608	595	D17	混土貝層	Ⅱ	土師質土器	擂鉢	口縁～底部	ナデ→擂目／ナデ、ユビオサエ	1mm程度の砂粒	良好	にぶい黄橙/にぶい黄橙	(31.0)	(17.1)	12.5	
609	599	A18・19	混土貝層	Ⅱ	瓦質土器	捏鉢	口縁～胴部	ハケメ→ナデ／ナデ、ユビオサエ	1mm程度の砂粒	良好	灰黄褐/灰黄褐	－	－	－	残存高7.5cm
610	591	A3・4	混土貝層	Ⅱ	瓦質土器	火鉢	胴～底部	ナデ／ナデ	角閃石、長石、1mm程度の砂粒	良好	黒/黒	－	20.4	18.1	底部内面に有機物付着
611	582	A3	混土貝層	Ⅱ	青磁	碗	口縁～体部	施釉/施釉	緻密	良好	釉:ｵﾘｰﾌﾞ黄/胎:にぶい橙	(15.3)	6.8	－	残存高6.8cm、龍泉窯系
612	581	B15	混土貝層	Ⅱ	青磁	碗	口縁～体部	施釉／鎬蓮弁文、施釉	緻密	良好	釉:緑灰/胎:灰	－	3.6	－	残存高3.6cm、龍泉窯系
613	608	不明	不明	－	埴輪	円筒埴輪	胴部	ナデ／タテハケ→ナデ	雲母、1～3mm程度の砂粒	良好	灰黄褐/にぶい橙	－	－	－	残存高11.1cm、川西Ⅴ期

第８章　動物遺存体

第１節　出土した動物遺存体の概要

本貝塚の調査では、堆積土各層で貝類遺体や脊椎動物遺体が出土した。特にＥトレンチの混土貝層や純貝層では数多くの脊椎動物遺体が出土している。また、ＡトレンチからＤトレンチにかけての貝層下の褐色土層や黒色土層でも比較的多くの動物遺体が確認された。

本調査では貝層のブロックサンプリングや水洗選別は行われておらず、発掘時に取り上げられた現地採集資料である。以下では貝類遺体と脊椎動物遺体に分けてその同定結果を中心に報告する。なお、前者については菊池泰二氏にご協力いただき、所見をまとめていただいた。

第２節　貝類遺体

出土した貝類遺体は二枚貝網、腹足網（巻貝）に大きく分類される。貝種については後述の菊池氏報告を参照されたい。

第３節　脊椎動物遺体

（１）出土した脊椎動物遺体の概要

出土した脊椎遺体種は魚骨、獣骨、哺乳類である。分析資料100点のうち２点にヒトの遊離歯及び下顎骨が含まれている。本来は別項を設けて報告すべきであろうが、分析の結果判明したものであり、第19表ではそのまま掲載した。また、Ａ～Ｄトレンチにおいて轟式土器が数多く出土した褐色土層やその上層の阿高式土器を包含する縄文中期に形成されたとみられる純貝層、Ｅトレンチの純貝層など層位的にみて重要な土層から出土した脊椎動物遺体について優先的に同定を行った。また、純貝層の上層である混土貝層から出土したものも残存度合が高いものを中心に同定作業を実施した。

（２）脊椎動物遺体の種類と特徴について

①魚類　a　軟骨魚綱

サメ類（*Lamina* sp）

アカエイ科/トビエイ科（*Dasystididae/Myliobatididae*）

b　硬骨魚綱

フグ科（*Tereaodontidae*）

ハタ科（*Serranidae*）

マダイ（*Pagrus major*）

クロダイ属（*Acanthopagrus*）

スズキ（*Lateolabrax japonicus*）

②鳥　類　タカ科（*Falconiformes*）

③哺乳類　イルカ類（*Delphinidae*）

クジラ類（*Cetacea*）

イヌ（*Canis familiaris*）

ニホンジカ（*Cervus nippon*）

イノシシ（*Sus scrofa*）

クロダイ属、スズキは汽水域にも進入することから、内湾を代表する魚種である。フグ科も内湾でよく見られる。一方、ハタ科やマダイは沿岸の中層から低層、岩礁域に生息している。アカエイ科あるいはトビエイ科の尾棘は毒を分泌する。

イノシシとニホンジカでは遊離歯および鹿角を除いて、破片数、最少個体数ともにイノシシの方が多く出土している。イノシシ、ニホンジカの両方とも頭部、中軸骨、四肢骨が出土していることから、解体は遺跡周辺において行われたと考えられる。

鹿角は骨角器に利用したと考えられる。その内のNo. 27は素材を得るために鋭い刃物、石器でも刃部を薄く加工したものを使用して、第一分枝部を幾度も回転しながら利器を叩きつけて、芯部が残ったまま折り取ったと考えられる。

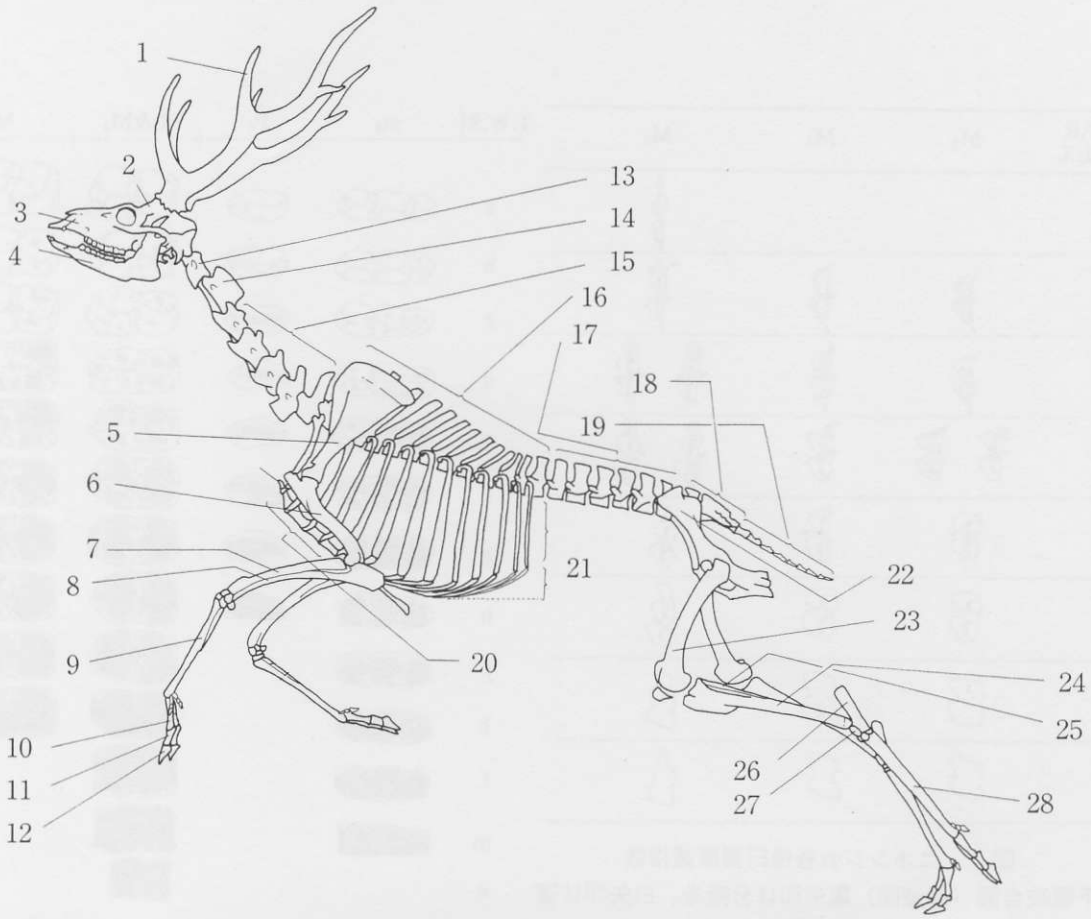


図１　主要な骨格の名称（図はニホンジカ）（八谷・大泰司1994）

動物種別計測値一覧　　単位：mm

名称	計測部位	ニホンジカ	イノシシ	ツキノワグマ	カモシカ
頭蓋骨	頭蓋全長（GL）	290.3	294.9	257.1	209.7
	頭蓋最大幅（ZB）	132.7	136.2	170.8	91.3
下顎骨	下顎骨全長（Id-Goc）	186.0	241.7	179.2	166.3
	下顎枝高（Cr-Gov）	101.0	106.7	86.9	86.1
肩甲骨	最大長（HS）	161.5	191.5	132.7	160.8
	遠位端最大幅（GLP）	39.5	33.9	39.1	35.1
上腕骨	最大長（GL）	180.6	196.0	204.5	196.4
	近位端最大幅（Bp）	46.3	50.0	40.0	43.2
	遠位端最大幅（Bd）	38.5	41.7	55.6	39.4
	滑車幅（BT）	37.4	29.9	37.1	37.0
橈　骨	最大長（GL）	187.0	142.3	179.3	182.2
	近位端最大幅（Bp）	35.7	27.6	23.7	37.1
	遠位端最大幅（Bd）	32.4	32.0	32.0	33.6
尺　骨	最大長（GL）	229.6	198.1	209.4	226.4
	幅（DPA）	32.6	36.1	26.9	27.5
中手骨	最大長（GL）	186.8	64.1（63.3）	―	136.6
	近位端最大幅（Bp）	25.1	20.2（15.0）	―	30.6
	遠位端最大幅（Bd）	27.4	16.4（15.3）	―	35.2
寛　骨	寛骨長（GL）	217.8	221.7	182.1	216.4
	寛骨臼最大幅（LA）	32.4	31.8	31.4	31.6
大腿骨	最大長（GL）	223.6	209.9	215.1	219.1
	近位端最大幅（Bp）	55.0	52.7	53.4	47.3
	遠位端最大幅（Bd）	49.9	45.5	44.9	45.1
脛　骨	最大長（GL）	265.3	188.7	178.4	254.8
	近位端最大幅（Bp）	50.4	48.3	46.4	49.1
	遠位端最大幅（Bd）	33.7	27.6	34.4	34.1
腓　骨	最大長（GL）	-	174.7	158.7	―
中足骨	最大長（GL）	214.8	69.6（76.3）	―	146.8
	近位端最大幅（Bp）	24.2	14.8（13.5）	―	25.5
	遠位端最大幅（Bd）	26.7	15.3（15.9）	―	32.9
距　骨	外側最大幅（GLl）	35.8	40.2	26.3	36.6
	内側最大幅（GLm）	34.4	35.3	―	34.7
	遠位端最大幅（Bd）	23.4	23.8	―	19.4
踵　骨	最大長（GL）	80.8	75.4	45.9	65.6
	最大幅（GB）	25.4	22.6	31.3	24.1

1（枝）角
2　頭蓋骨
3　上顎骨
4　下顎骨
5　肩甲骨
6　上腕骨
7　橈　骨
8　尺　骨
9　中手骨
10　基節骨
11　中節骨
12　末節骨
13　環　椎
14　軸　椎
15　頸　椎
16　胸　椎
17　腰　椎
18　仙　椎
19　尾　椎
20　胸　骨
21　肋　骨
22　寛　骨
23　大腿骨
24　脛　骨
25　腓　骨
26　踵　骨
27　距　骨

第88図　骨格の名称（奈良文化財研究所埋蔵文化財センター2003より転載）

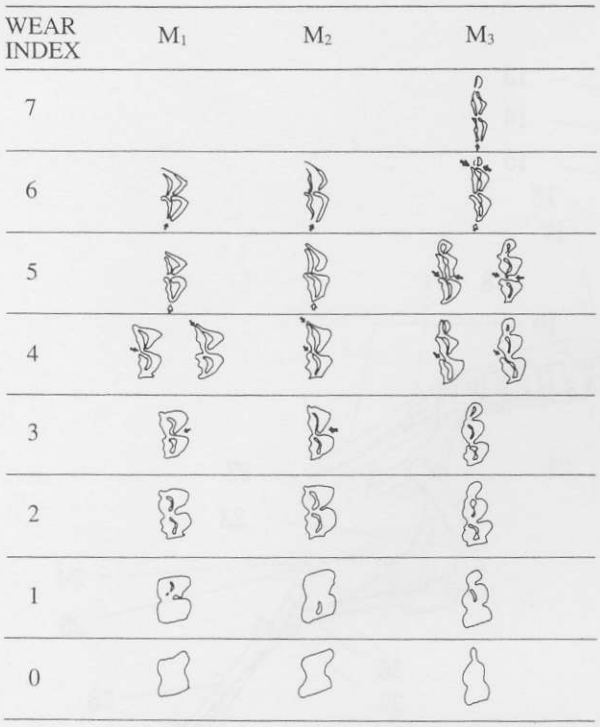


図２　ニホンジカ各後臼歯摩滅指数
右下顎咬合面（摩滅面）黒矢印は分断を、白矢印は連続していることを示す。（大泰司1980）

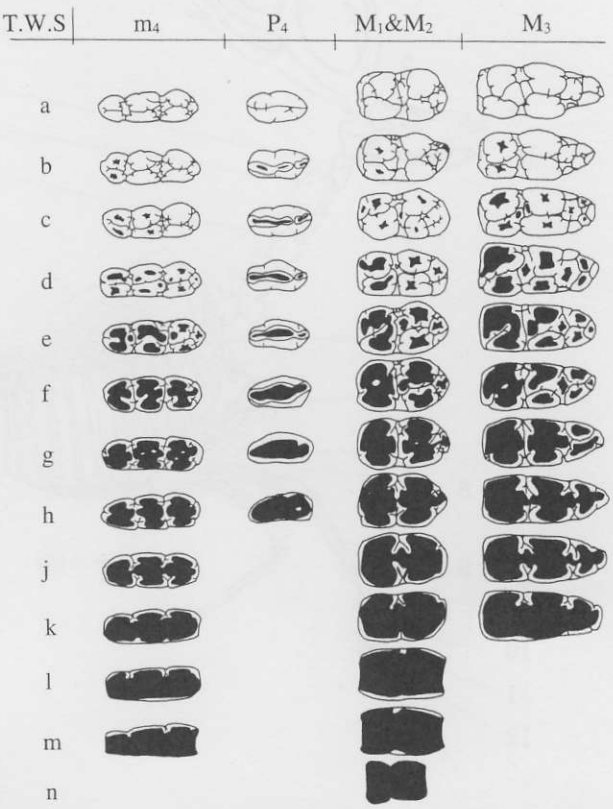


図３　イノシシ下顎歯摩滅指数（Bull and Payne 1982）

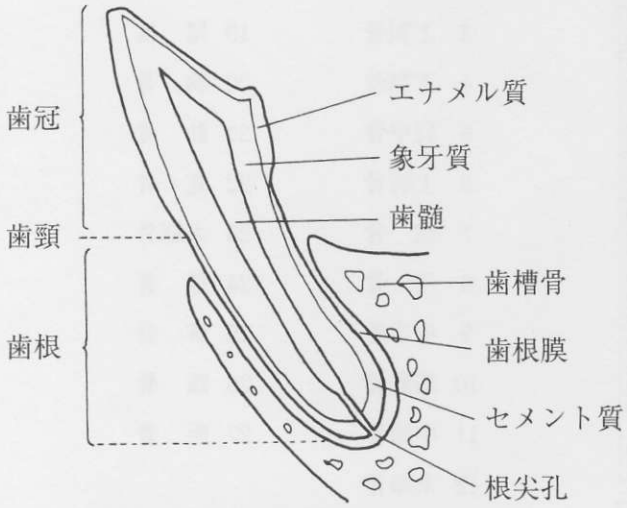


図４　歯の部分名称（図はニホンジカ）
（八谷・大泰司1994）

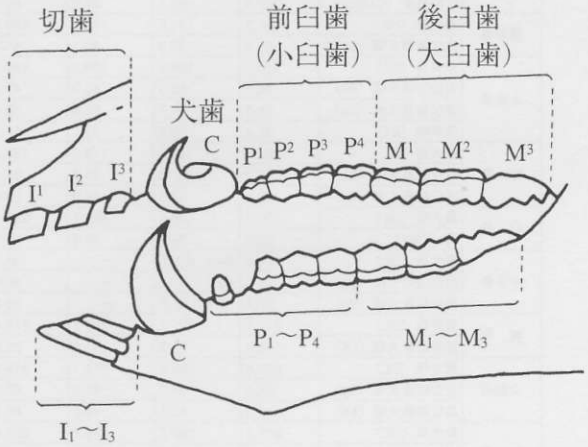


図５　歯の名称と略号（図はイノシシ）
（原図　八谷・大泰司1994）

第89図　ニホンジカ及びイノシシの歯に関する資料（奈良文化財研究所埋蔵文化財センター2003より転載）

第19表　轟貝塚出土動物遺存体一覧表１

No.	遺物No.	調査区	遺構	層　位	大分類	小分類	部位	部　分	左右	備　考
1	12	DT－18		純貝層	軟骨魚綱	サメ類	椎骨		中	椎体横径20.47
2	98	AT－2		純貝層	軟骨魚綱	サメ類	椎骨		中	椎体横径31.83
3	71	ET－1		混土貝層	軟骨魚綱	アカエイ科/トビエイ科	尾棘		中	
4	95	ET－1		混貝土層	軟骨魚綱	アカエイ科/トビエイ科	尾棘		中	
5	15	DT－20		純貝層	硬骨魚綱	フグ科	歯骨	ほぼ完形	左	体長40cm以上
6	20	DT－1		純貝層	硬骨魚綱	ハタ科	主上顎骨		右	体長30～40cm
7	75	AT－19		黒褐色層	硬骨魚綱	マダイ	歯骨	ほぼ完形	右	歯骨高17.05長54.81・体長60cm以上
8	100	AT－13		混土貝層	硬骨魚綱	マダイ	前上顎骨		左	大きな個体
9	76	AT－12		混土貝層	硬骨魚綱	クロダイ属	前上顎骨	ほぼ完形	左	上部切断?・歯骨長25.61・体長20cm～30cm
10	81	ET－3		混土貝層	硬骨魚綱	クロダイ属	前上顎骨	ほぼ完形	右	骨長33.30
11	82	ET－3		混土貝層	硬骨魚綱	クロダイ属	前上顎骨	ほぼ完形	右	骨長30.95参考値
12	93	AT－13		混土貝層	硬骨魚綱	クロダイ属	鰭棘	第１背鰭棘	中	
13	77	AT－10		混土貝層	硬骨魚綱	スズキ	歯骨	前位部	左	歯骨高10.58
14	78	ET－3		混土貝層	硬骨魚綱	不明	鰭棘	棘条部	－	
15	79	ET－3		混土貝層	硬骨魚綱	不明	鰭棘	棘条部	－	鰭棘？
16	29	DT－22		褐色土層上層	鳥綱	タカ科	烏口骨		左	タカ類？
17	27	DT－23		褐色土上層	哺乳綱	イヌ	椎骨	軸椎	中	やや小さい？
18	94	AT－13		混土貝層	哺乳綱	イヌ	中手骨	第３中手骨	左	計測(Bd7.34)
19	32	DT－24		褐色土層上部	哺乳綱	ヒト	遊離歯	上顎I2	左	
20	83	AT－3		混土貝層	哺乳綱	ヒト	下顎骨		中	
21	88	BT－2		混貝土層	哺乳綱	イルカ類	椎骨	腰椎	中	unfused(椎体)
22	1	AT－1		混土貝層	哺乳綱	クジラ類	椎骨	椎体	中	割っている？
23	8	AT－1		混土貝層	哺乳綱	クジラ類	椎骨	椎体	中	割っている？
24	9	CT－15		撹乱層	哺乳綱	クジラ類	椎骨	椎体	中	割っている？
25	21	DT－13		純貝層	哺乳綱	クジラ類	不明	破片	－	
26	22	DT－13		純貝層	哺乳綱	クジラ類	不明	破片	－	
27	74	ET－1		混土貝層	哺乳綱	ニホンジカ	枝角	角座－第１分枝部	右	小さい・落角・鋭い刃物で何度も叩いて回転切断
28	19	DT－22		貝層	哺乳綱	ニホンジカ	枝角	角座付近	－	
29	85	AT－3		混土貝層	哺乳綱	ニホンジカ	頭蓋骨	前頭骨	左	枝角切断
30	56	ET－2		純貝層	哺乳綱	ニホンジカ	頭蓋骨	前頭骨	右	眼窩付近
31	51	ET－3	土壙墓	埋土？	哺乳綱	ニホンジカ	下顎骨	P4-M2歯槽付近	右	計測M2(L16.61B10.94)・咬耗(4)
32	44	ET－3	土壙墓	埋土？	哺乳綱	ニホンジカ	下顎骨	P3-M3下顎体付近	右	計測M3(L25.56B11.81)・咬耗(4)舌側のみ著しい咬耗
33	87	ET－1		混土貝層	哺乳綱	ニホンジカ	椎骨	環椎	中	左側chopmark?計測GB86.72参考値GL68.45)
34	45	ET－3	土壙墓	埋土？	哺乳綱	ニホンジカ	椎骨	頸椎	中	unfused(椎体)・後部破損
35	89	AT－13		混土貝層	哺乳綱	ニホンジカ	椎骨	腰椎	中	unfused(椎体)
36	92	AT－13		混土貝層	哺乳綱	ニホンジカ	椎骨	腰椎	中	unfused(椎体後方)・fusing(椎体前方)
37	54	ET－3	土壙墓	埋土？	哺乳綱	ニホンジカ	椎骨	腰椎	中	左半分欠損
38	70	ET－1		混土貝層	哺乳綱	ニホンジカ	肩甲骨	近位部－遠位端	右	計測(GLP41.57SLC24.69)
39	61	ET－2		純貝層	哺乳綱	ニホンジカ	肩甲骨	骨幹部－遠位端	右	計測(GLP41.17SLC22.95)
40	90	AT－13		混土貝層	哺乳綱	ニホンジカ	上腕骨	近位部－遠位端	左	計測(Bd40.89)
41	41	DT－22		褐色土層上層	哺乳綱	ニホンジカ	上腕骨	遠位端内側	左	破損
42	60	ET－2		純貝層	哺乳綱	ニホンジカ	尺骨	近位部－骨幹部	左	計測(DPA31.64)
43	84	AT－3		混土貝層	哺乳綱	ニホンジカ	中手骨	骨幹部－遠位端	左	計測(Bd28.58)
44	49	ET－3	土壙墓	埋土？	哺乳綱	ニホンジカ	寛骨	寛骨臼－座骨	左	恥骨、腸骨破損
45	23	DT－18		混貝褐色土	哺乳綱	ニホンジカ	大腿骨	骨幹部－遠位部	左	
46	50	ET－3	土壙墓	埋土？	哺乳綱	ニホンジカ	大腿骨	遠位端	右	unfused
47	47	ET－3	土壙墓	埋土	哺乳綱	ニホンジカ	大腿骨	近位部－遠位部	右	イヌ咬痕
48	73	ET－3		混土貝層(Ⅱ)	哺乳綱	ニホンジカ	踵骨	ほぼ完形	左	計測(GL99.85GB31.28)
49	72	ET－1		混土貝層	哺乳綱	ニホンジカ	距骨	ほぼ完形	右	cutmark(med)4・計測(GL140.05GLm37.06Bd24.42)
50	42	DT－18		褐色土層上部ⅩⅢ	哺乳綱	ニホンジカ	距骨	ほぼ完形	左	計測(GL142.12GLm38.76Bd25.30)
51	91	AT－13		混土貝層	哺乳綱	ニホンジカ	中足骨	骨幹部－遠位端	右	計測(Bd30.60)
52	55	ET－2		純貝層	哺乳綱	イノシシ	上顎骨	M2M3上顎体付近	右	計測M3(L31.66B18.47)・咬耗(d)
53	46	ET－3	土壙墓	埋土？	哺乳綱	イノシシ	上顎骨	M3上顎体付近	右	計測(L30.90B18.66)・咬耗(d～e)・歯石あり？
54	18	DT－22		貝層	哺乳綱	イノシシ	上顎骨	M2M3上顎体付近	右	計測M3(L30.26B18.43)・咬耗(d～e)
55	57	ET－2		純貝層	哺乳綱	イノシシ	上顎骨	M1-M3上顎体付近	左	計測M3(L28.8318.68B)・咬耗 (d)
56	53	ET－3	土壙墓	埋土？	哺乳綱	イノシシ	上顎骨	M3上顎体付近	左	計測(L32.75B19.05参考値)・咬耗(d)・歯石あり？
57	11	DT－18		Ⅸ層(カキ純貝層)	哺乳綱	イノシシ	下顎骨	結合部	中	♂ (犬歯大)
58	34	DT－20		褐色土層下部	哺乳綱	イノシシ	下顎骨	C～M3歯槽付近	右	♀ (犬歯小)
59	36	DT－20		褐色土層下部	哺乳綱	イノシシ	下顎骨	M3歯槽付近	右	計測M3(L32.91B14.67)・咬耗(d～e)
60	68	ET－2		混土貝層Ⅱ	哺乳綱	イノシシ	下顎骨	結合部-M1下顎体付近	右	dP3dP4M1・dP4計測(L17.11B8.55)咬耗(c～d)・♀？

第20表　轟貝塚出土動物遺存体一覧表２

No.	遺物No.	調査区	遺構	層　位	大分類	小分類	部位	部　分	左右	備　考
61	39	DT－20		褐色土層下部	哺乳綱	イノシシ	上顎骨	M1M2歯槽付近	左	計測M2(L20.35B15.89)・咬耗(c)
62	69	ET－２		混土貝層Ⅱ	哺乳綱	イノシシ	下顎骨	C-M1下顎体付近	左	68と同一？dP3dP4M1・dP4計測(L17.73B8.49)咬耗(c～d)
63	86	AT－３		混土貝層	哺乳綱	イノシシ	遊離歯	上顎I1	右	咬耗あり
64	24	DT－18		混貝褐色土	哺乳綱	イノシシ	遊離歯	上顎I1	右	
65	7	AT－８	ピット	埋土	哺乳綱	イノシシ	遊離歯	上顎I1	左	咬耗あり
66	3	AT－22		褐色土層	哺乳綱	イノシシ	遊離歯	上顎I2	左	咬耗あり
67	80	ET－３		混土貝層（Ⅱ）	哺乳綱	イノシシ	遊離歯	下顎I3	右	咬耗あり
68	35	DT－20		褐色土層下部	哺乳綱	イノシシ	遊離歯	下顎I1	右	咬耗あり
69	33	DT－９		褐色土層下部	哺乳綱	イノシシ	遊離歯	下顎I2/3	－	破損
70	37	DT－20		褐色土層下部	哺乳綱	イノシシ	遊離歯	下顎I1	右	先端部破損
71	38	DT－20		褐色土層下部	哺乳綱	イノシシ	遊離歯	下顎I2	左	咬耗少
72	62	ET－２		純貝層	哺乳綱	イノシシ	遊離歯	下顎C	左	♀
73	6	AT－22		褐色土層	哺乳綱	イノシシ	遊離歯	上顎M2	左	計測不可・咬耗(b)
74	2	AT－22		褐色土層	哺乳綱	イノシシ	遊離歯	上顎M3	左	計測M3(L32.28B18.83)・咬耗(c)
75	25	DT－24		褐色土層下部	哺乳綱	イノシシ	遊離歯	下顎M1	左	計測(L16.09B10.35)・咬耗(f)
76	13	DT－18		純貝層	哺乳綱	イノシシ	遊離歯	下顎M3	左	計測(L35.54B16.08)
77	16	DT－20		貝層	哺乳綱	イノシシ	遊離歯	下顎M3	右	計測(L32.30B16.36)
78	40	DT－20		褐色土層上部	哺乳綱	イノシシ	遊離歯	下顎M1	右	計測(L35.54B14.35)・咬耗(c)
79	43	DT－20		黒色土層	哺乳綱	イノシシ	遊離歯	下顎M3	右	未萌出・計測(L34.10B16.24)
80	31	DT－22		褐色土層上層	哺乳綱	イノシシ	椎骨	軸椎	中	
81	30	DT－22		褐色土層上層	哺乳綱	イノシシ？	椎骨		中	unfused(椎体)
82	97	DT－１		混土貝層	哺乳綱	イノシシ	仙骨		中	unfused(椎体)
83	96	DT－１		混土貝層	哺乳綱	イノシシ	仙骨		中	unfused(椎体)
84	66	BT－２		混土貝層	哺乳綱	イノシシ	肩甲骨	骨幹部－遠位端	右	計測(GLP36.46参考値SLC27.44)
85	64	ET－２		純貝層	哺乳綱	イノシシ	肩甲骨	骨幹部－遠位端	右	計測(GLP36.82SLC25.75)
86	10	DT－18		純貝層	哺乳綱	イノシシ	肩甲骨	遠位部	右	やや小さい？
87	63	ET－２		純貝層	哺乳綱	イノシシ	肩甲骨	骨幹部－遠位端	右	計測(GLP38.51SLC28.30)
88	52	ET－３	土壙墓	埋土？	哺乳綱	イノシシ	尺骨	近位部－骨幹部	右	計測(DPA39.80SD030.55)
89	28	DT－22		褐色土層上層	哺乳綱	イノシシ	上腕骨	遠位部	右	
90	67	ET－１		混土貝層	哺乳綱	イノシシ	上腕骨	遠位	右	fusing(dis)・spiral・計測(Bd44.67)
91	65	ET－２		純貝層	哺乳綱	イノシシ	橈骨	近位部－遠位部	左	咬痕？・計測(Bd28.87)
92	59	ET－２		純貝層	哺乳綱	イノシシ	中手骨	第２中手骨	右	計測(GL60.37Bp7.27Bd12.39)
93	48	ET－３	土壙墓	埋土？	哺乳綱	イノシシ	中手骨	第４中手骨	右	計測(GL83.55Bp19.71Bd18.81)
94	14	DT－20		純貝層	哺乳綱	イノシシ	大腿骨	近位端－骨幹部	左	イヌ咬痕
95	5	AT－22		褐色土層	哺乳綱	イノシシ	脛骨	骨幹部－遠位端	左	計測不可
96	99	AT－14		貝層	哺乳綱	イノシシ	脛骨	骨幹部－遠位端	右	計測(Bd33.98)
97	4	AT－22		褐色土層	哺乳綱	イノシシ？	脛骨	骨幹部	左	後位面に穿孔あるが、新しい傷？
98	26	DT－23		褐色土上層	哺乳綱	イノシシ	距骨	ほぼ完形	右	計測(GL141.22GLm38.93)
99	58	DT－20		貝層	哺乳綱	イノシシ	中足骨	第５中足骨	右	計測(GL60.08)
100	17	ET－２		純貝層	哺乳綱	イノシシ	指骨	中節骨	－	計測(GL23.90Bp16.36Bd14.99)

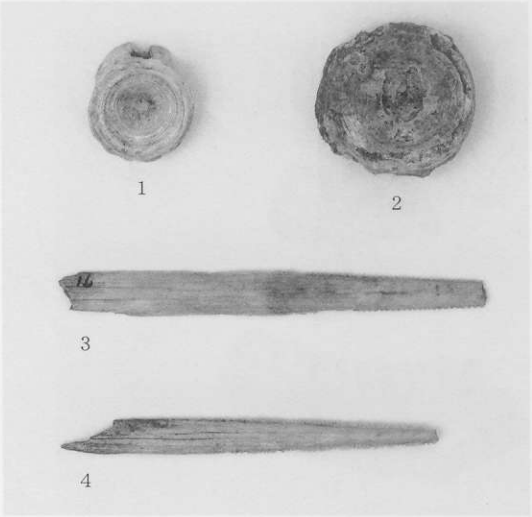
計測はDreisch(1976)に準ずる

用語解説
ＳＤＯ：尺骨の滑車（上腕骨の遠位端と関節する部分）より近位側で最もくびれて細くなっている部分の最大値を示す。
ＳＬＣ：甲骨の遠位端（上腕骨の近位端と関節する部分）の最大幅を示す。
unfused：骨端部の癒合（成長）状況を表しており癒合中、つまり幼獣を示す。
fusing：骨端部の癒合（成長）状況を表しており癒合中、幼獣から成獣の段階を示す。
spiral：螺旋状に割れており、人為的な骨の打ち割りの可能性を示す。
cutmark(med)：いわゆるカットマーク（骨の内側に）で解体の可能性を示す。
chopmark：カットマークよりも深く、叩き割ったような傷。
dP3やdP4のdは、乳歯を表わす。

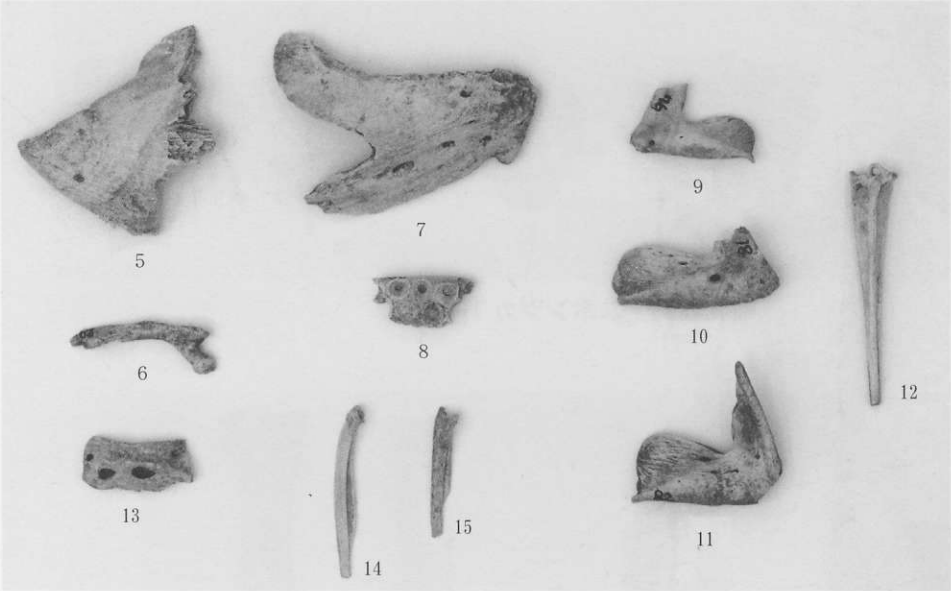
※骨の計測部位については第88図の「主要な骨格の名称」と「動物種別計測値一覧」を参照。また、歯については第89図の「歯の部分名称」や「摩滅指数」の図を参照。

引用・参考文献

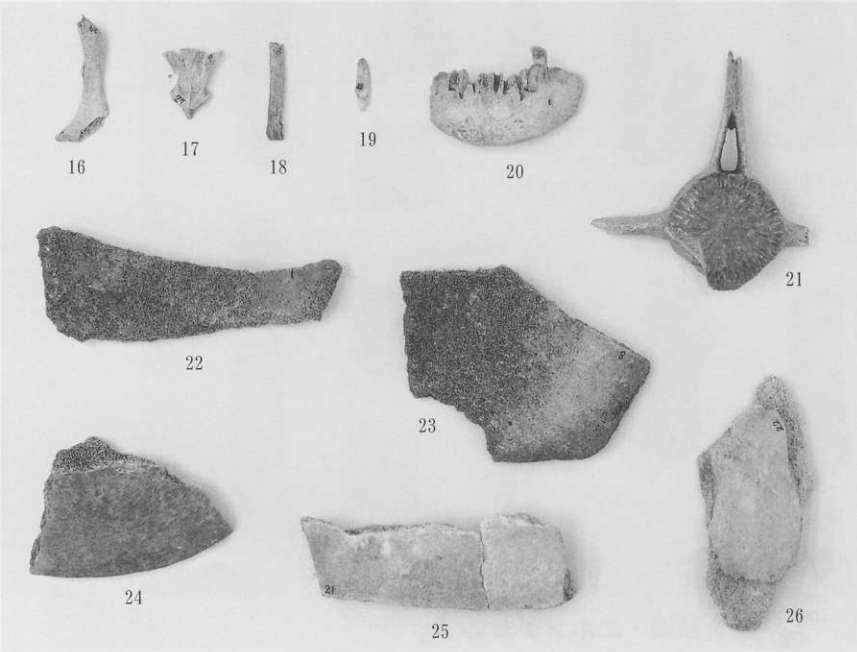
奈良文化財研究所埋蔵文化財センター2003　『埋蔵文化財ニュース』113　奈良文化財研究所



軟骨魚類網



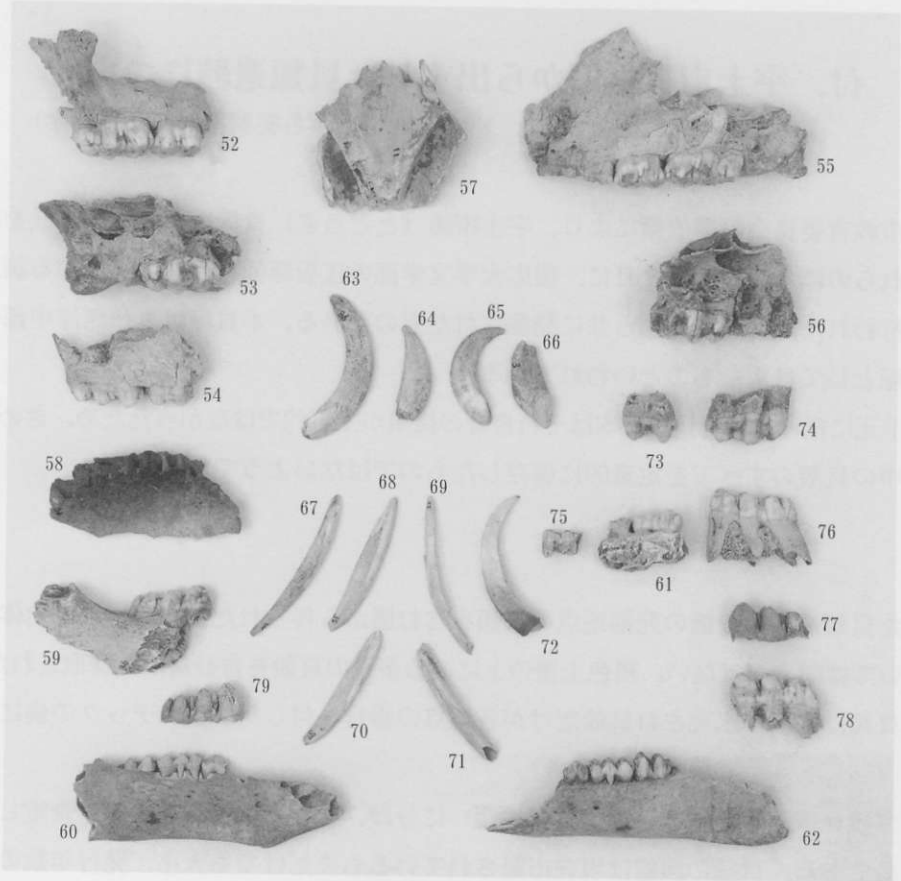
硬骨魚類網



鳥網・哺乳類網

哺乳類綱・ニホンジカ１

哺乳類綱・ニホンジカ２



哺乳類綱・イノシシ１

哺乳類綱・イノシシ２

付．宇土市轟貝塚から出土した貝類遺骸について

九州大学名誉教授（海洋生物学）　菊池　泰二

この度宇土市教育委員会の御依頼により、宇土市轟（とどろき）貝塚出土の貝類遺骸を調査することになった。これらの標本は1966年３月に、慶応大学文学部の江坂輝彌教授を主査とする調査団により考古学的調査が行われた際に人工遺物と共に発掘されたものである。本貝塚は九州西岸中部の海に面した縄文時代の貝塚として貴重なものといわれている。

今回筆者の手元に預けられた貝類標本はそれ自身の採集が主目的ではなかったため、きめられたブロック状の堆積物中の貝殻のすべてを定量的に保存したものではないようである。

結　果

今回預かった貝類遺骸は６箇の発掘地点の貝類を含む層から得られたもので、貝塚全体の広がり、年代的厚みについては明らかでない。褐色土層の上にある多くの貝殻を含む層から採取されたものである。お預かりした貝類はすべて水洗され貝殻だけが各地点の番号を付したプラスチックの袋に収められていた。

貝類はまず二枚貝綱と腹足綱（いわゆる巻貝類）に分け、各地点試料ごとに種を査定した。結果は一枚の表にまとめてある。貝類の図鑑は現在市販されているものだけでも大小、発行年数の異なるものが幾通りもあるが、目、科といった中間段階の分け方や呼称に色々な食いちがいがみられる。今回は最新最大の原色大図鑑、奥谷喬司編著「日本近海産貝類図鑑、1174頁、東海大学出版会刊」にしたがった。

腹足綱（巻貝）の表の上部にあげられるイシダタミ、スガイは磯の転石地に現在でもごく普通にすむ巻貝、それに続くウミニナ、フトヘナタリ、カワアイは泥干潟を細長い殻をひきずって移動する巻貝である。これらは転石表面の小さい藻類や泥干潟の表面にすむ微細な硅藻類を食物としている。量的にはごく普通にいるが、より大きい貝類が容易に採れるなら特に良質な食物とはいえない。

タマガイ科以下の巻貝類はいずれも肉食性で、アッキガイ科のレイシガイは岩礁地にすみ、細長い吻をさしのべて固着性のフジツボ類や固着性の二枚貝、笠貝類を捕食する。それ以外の肉食性の巻貝は大きな吻をのばして砂泥地にすむ二枚貝やその他の小動物を捕食する。アカニシ、テングニシ、バイなどは成貝は大潮低潮線より深い砂底にすむことが多い。今回の標本で人に食べられたアカニシが直径４～５cmの幼貝が多かったのは、幼貝は大型のカニ類やタコなどに食われ易いため、干潟に生息することが多く、古代人に捕られ易かったのではないかと推測される。

一方、二枚貝はほとんどすべての種が海水中の植物プランクトンを水と共に吸い込み、大きな鰓（えら）で水を濾し、鰓上に残る植物プランクトンを鰓上の繊毛運動で順送りして自分の消化管に送り込む摂食様式を持っている。

今回の標本の中で個体数が多かったのはハイガイとマガキである。フネガイ科の貝は殻表面に多く肋（ろく）を持つが、もっとも大型のアカガイは殻の直径が12cm、殻表面の肋数は42本、水深５～50mの内湾砂泥底にすむ。同じく大型のクマサルボウ（今回１箇だけ含まれていた）は殻の直径が８cm前後、水深５～20mの泥底にすむとされる。日本でもっとも多量漁獲されるサルボウガイの場合，殻の直径5.6cm、殻表面の肋数は32本、生息深度は潮下帯上部から水深20mまでの砂泥底、それに対しハイガイは殻

の直径は6.3cm以上、殻表面の肋数は18本、生息深度は潮間帯下部から最深10mまでと書かれている。今回の轟貝塚の出土構成を見ると、フネガイ科の食用貝類では圧倒的にハイガイが多く、クマサルボウが１個あったがサルボウガイは入っていなかった。

もう１種の多数出現した種はイタボガキ科のマガキである。マガキは現代でも有明海、八代海の干潟中部、下部に大小の集合を作りカキ礁を作っているのが見受けられる。古代人にとっても、マガキは収穫し易い海の幸だったのだろう。

もうひとつ現代人にも親しい大型の食用二枚貝にハマグリがある。ハマグリは現在でも有明海の宇土半島側の付け根、緑川、白川の河口干潟で一年物の若い貝がある程度は毎年漁獲されるが、本来は３年、５年以上成長、成熟するまで待って漁獲すべきものである。ハマグリが内湾性であるのに対し、チョウセンハマグリは外海に面した海岸の潮下帯で漁獲されるが、今回の轟貝塚の大型の二枚貝遺骸を見ていると、あきらかにチョウセンハマグリと判断できる大型重厚なハマグリが混じっている。

謎の北方形大型二枚貝

今回調べた轟貝塚出土の貝類遺骸の生物相の95％は現在もこの地方の海辺で発見できるものである。なぜ縄文文化中期には現在の宇土市沿岸でサルボウガイが貝塚中になくハイガイばかりなのか、なぜ限られた出土サンプルの中にハマグリとチョウセンハマグリが共存するのか、なぜアサリの貝殻がほとんど入っていないのか、などの疑問はあるにしてもそれは有明海、八代海が今よりずっと内陸まで侵入していた数千年前との地形変化、海流、潮流の変化を考えると驚くほどのものとは思えない。

それとまったく異なる説明できない大きな二枚貝の標本が２点、AT14区黒褐色土層上層の貝殻含有層（混土貝層）とAT11区混土貝層というサンプルの中に入っていた。２つの標本は明らかに他の有明海産、八代海産の貝類とは異なった北方系の貝の雰囲気を保っていた。筆者が受け取った時このサンプルには、“中世に撹乱の跡あり”というメモが付けてあった。慶応大学の考古学の研究室から発掘された資料が返却された際、このメモが付けられたのだとすれば、上部から調査地点を掘り下げて混土貝層に達した際異質な大きな貝殻を発見し、後世の撹乱によると判断したのだろうか。

二つの大型二枚貝標本の一つは *Patinopecten jessoensis* ホタテガイに酷似しており、もう一つは *Pseudocardium sachaliense* ウバガイ（バカガイ科）のように見えた。ホタテガイは日本の東北地方の日本海からオホーツク海にかけて生息し、現在は東北日本の各地で盛んに養殖されている。養殖に適した水深は10m～30mだという。一方ウバガイは図鑑のカラー写真と比較してみてもウバガイの特色ある厚いからは殻頂近くまで膨らみ、前後の側歯が強大であるとてもよく一致する。現代のウバガイの地理的分布は、太平洋岸では鹿島灘以北、日本海北部、沿海州、サハリン、南千島、オホーツク海、潮間帯下部～水深30mまでの砂底とされている。少なくとも日本海では北陸地方沿岸以南の記録はないようである。

今年３月中旬に会議のため上京の機会があり、「日本近海産貝類図鑑」の編著者であり現在日本貝類学会会長でもある畏友奥谷喬司博士の所へ問題の２箇の大型二枚貝標本を持参して鑑定を依頼した。筆者の査定の根拠としたホタテガイとウバガイではないかという主張については、属レベルではおそらく誤りはないと思うし、縄文期は地球が温暖化した時期で、それ以後北方系の沿岸性の海産動物が南下する機会があったとも思えないという主張も理解できる。しかし、問題はこの標本が縄文時代の物ではないとして、それ以降の時代のものか、それ以前の時代の生物で化石化したものではないと言い切れるだ

ろうか。このホタテガイに酷似した貝は割れかけた状態のままつながっているが、掌上での触感からすると現生のホタテガイより比重が大きいような気がする。いずれにしても考古学者の発掘のポイントはその直前に決められるものであろうし、過去のある時代に北方系の貝を埋めた人物があったとしてもそれ以上の追跡は不可能としておくしかないだろうとの御意見で、筆者も同意した。

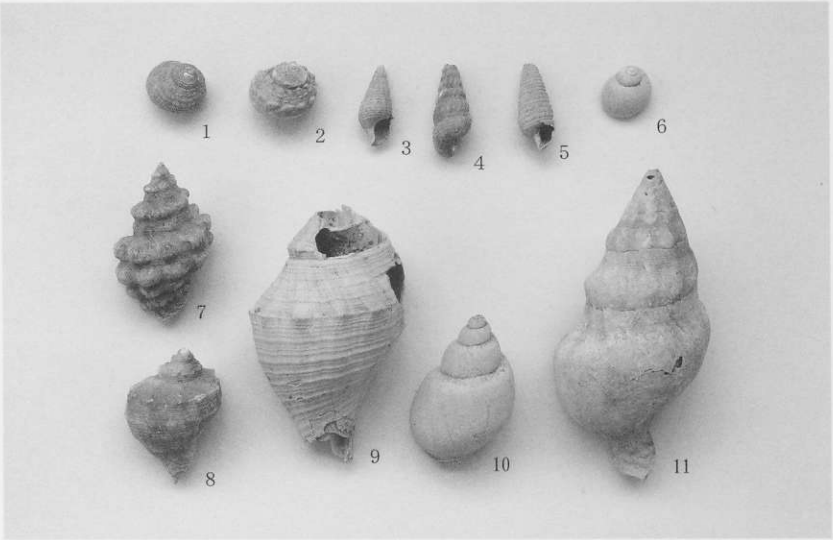
表１　轟貝塚出土貝類

			調査地点	*AT14*	*DT9*	*DT20*	*DT22*	*ET2*	*AT11*
			基本層序※	Ⅱ[1]	Ⅲ[2]	Ⅲ[3]	Ⅳ[4]	Ⅲ[5]	Ⅱ[6]
網（亜網）	目	科	種名（標準和名、学名）	資料No.１	資料No.２	資料No.３	資料No.４	資料No.５	資料No.６
腹足網（前鰓亜網）	古腹足目	ニシキウズガイ科	イシダタミ *Monodonta labio* form *confusa*	3			3		
		サザエ科	スガイ *Turbo*(*Lunella*)*cornatus coreensis*	1			1		
	盤足目	ウミニナ科	ウミニナ *Batillaria multiformis*	3				1	
		フトヘタナリ科	フトヘタナリ *Cerithidea*(*cerithidea*)*rhizophoramum*					2	
			カワアイ *Cerithidea* (*Cerithideopsilla*) *djadjariensis*	3					3
		タマガイ科	ツメタガイ *Glossaulax didyma*			1		1	
			ゴマフダマ *Natica tigrina*	1					
	新腹足目	アツキガイ科	レイシガイ *Thais*(*Reishia*)*bronni*	1					2（成）
			アカニシ *Rapana venosa*		1（幼）	1（中）、1（幼）	1（大）、3（幼）		3（幼）
		テングニシ科	テングニシ *Hemifusus tuba*						1（中）
		エゾバイ科	バイ *Babylonia japonica*				1（成）		
			ミガキボラ *Kelletia lischkei*				1（成）		
二枚貝網									
翼形亜網	フネガイ目	フネガイ科	クマサルボウ *Scapharca globosa ursus*	1（大）					
			ハイガイ *Tegillarca granosa*	2（中）	6（大）、7（中）	右2、左3（大）	1（大）、2（中）	1（大）、2（小）	
	カキ目	イタヤガイ科	アズマニシキ *Chlamys*(*Azumapecten*)*farreri nipponensis* *Patinopecten* sp. ホタテガイ近縁種	1（大）					
		イタボガキ科	マガキ *Crassostrea gigas*	1（大）、2（中）、4（小）	4	1（大）、2（小）、1（破片）	4（小）	6	3（大）、4（小）
異歯亜網	マルスダレガイ目	バカガイ科	ウバガイ（?） *Pseudocardium sachalinense*（?）						1（大）
		シジミ科	ヤマトシジミ（河口汽水種） *Corbicula japonica*				1（双）、1（破片）		
		マルスダレガイ科	アサリ *Ruditapes philippinarum*	1			1		1
			ハマグリ *Meretrix lusoria*	右2（大）、左2（中・大）					
			チョウセンハマグリ *Meretrix lamarckii*	左1（大）					
			オキシジミ *Cyclina sinensis*	1	2（双）、左1		2	2	2
			カガミガイ *Phacosoma japonicum*			3（大）			
	オオノガイ目	オオノガイ科	オオノガイ *Myaarenaria oonogai*			1（大、破損）		1（中、破損）	

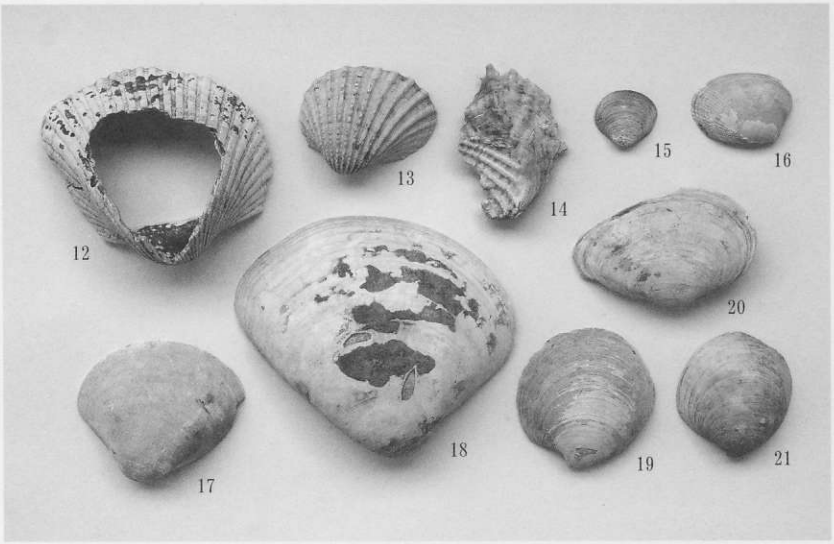
註
1）黒褐色土層上層の貝殻含有層（混土貝層）
2）純貝層
3）純貝層
4）褐色土層上層
5）純貝層
6）混土貝層（中世の撹乱あり）

※基本層序
AT～DT
Ⅰ　表土・撹乱層
Ⅱ　黒・褐色混土貝層・混貝土層
Ⅲ　純貝層
Ⅳ　褐色土層
Ⅴ　黒色土層

ET
Ⅰ　表土・撹乱層
Ⅱ　黒褐色混土貝層
Ⅲ　純貝層
Ⅳ　暗褐色混土貝層
Ⅴ　暗褐色混貝土層



腹足網（前鰓亜網）



二枚貝網１

二枚貝網２

1　イシダタミ　2　スガイ　3　ウミニナ　4　フトヘタナリ　5　カワアイ　6　ゴマフダマ　7　レイシガイ　8　アカニシ　9テングニシ
10　バイ　11　ミガキボラ　12　クマサルボウ　13　ハイガイ　14　マガキ　15　ヤマトシジミ　16　アサリ　17　ハマグリ　18　チョウセンハマグリ
19　オキシジミ　20　オオノガイ　21　カガミガイ　22　ウバガイ　23　アズマニシキ

第9章　総　　括

第1節　轟貝塚出土の縄文土器について

本調査出土の縄文土器は早期から後期にまでおよぶ。本節ではこれらの縄文土器について概観したい。

早期の土器は押型文系土器群（Ⅰ類）や塞ノ神式の貝殻文系土器群（Ⅱ類）であり、本貝塚において最も古く位置づけられ、早期にはすでに周辺に縄文時代人が生活していたことがわかる。ただし、当該時期の土器の出土数は比較的少ない。

続く前期の土器として、轟式系土器群（Ⅲ類）が数多く出土した。本土器群に属する土器はかなりのバリエーションがあり、轟A式（Ⅲａ類）、同B式（Ⅲｂ類）、同C式（Ⅲｃ類）、同D式（Ⅲｄ類）、野口式（Ⅲｅ類）、曽畑式（Ⅲｆ類）、尾田式（Ⅲｇ類）などで、各形式のほとんどで細分できる。

特に轟B式土器についてはⅢｂ１～Ⅲｂ６類に分類され、隆起文が高く突出するもの（Ⅲｂ２類）や細く低いもの（Ⅲｂ１・Ⅲｂ４類）、粘土紐を貼り付けずに器表面の摘み上げで微隆起文を施すもの（Ⅲｂ６類）、隆起文上に刺突文や刻み目を施すもの（Ⅲｂ５類）など、隆起帯文のみに着目しても様々な施文パターンが存在する。また、Ⅲｂ２類土器のなかには、内外の器壁に強い貝殻条痕を施す轟A式のうち、曲線状の文様や一定方向の規則的な条痕を施すⅢａ２類と器面調整法が酷似するものがある。

また、野口式に相当するⅢｅ類のうちⅢｅ１類は、隆起帯文と波状文などを細い沈線で施文する野口・阿多タイプの土器で、轟B式や曽畑式との関連が指摘できる。なお、曽畑式は出土数が極端に少なく、1958年の第５次調査報告でも「純粋な曽畑式は出ず、表面採集の中にもなかった」と記しており（松本・富樫1961）、その要因については今後の検討課題である。

Ⅳ類の阿高式系土器群については、並木式（Ⅳａ類）、阿高式（Ⅳｂ類）、南福寺式（Ⅳｃ類）、出水式（Ⅳｄ類）などが出土しており、底面に鯨脊椎骨痕や木葉痕が残る土器は本類に相当する。なかでも阿高式がⅣ類の主体を占めるが、阿高式でも新しい段階の特徴とされる、文様帯が口縁部に限られ、口縁部が胴部にくらべて肥厚するⅣｂ２類が割合的には多く出土している。

阿高式系土器群に後出する市来式系（貝殻条痕文系）土器群（Ⅴ類）、磨消縄文系土器群（Ⅵ類）、黒色磨研土器群（Ⅶ類）などの後期の土器は、Ｅトレンチで主体的に出土している。このうち磨消縄文系土器群の鐘崎式（Ⅵａ類）や北久根山式（Ⅵｂ類）では赤色顔料が付着しているものが多いが、これはＥトレンチで検出された後期前半とされる埋葬人骨との関連が想定される。

第2節　轟貝塚の形成過程について

Ａ～Ｄトレンチとｅトレンチの層序は、道路を挟んで比較的近接しているにもかかわらず、層序が異なっており、いずれも純貝層が検出されている。

Ａ～Ｄトレンチ周辺のプライマリーな堆積状況を示すとみられる地点の層序は、基盤層直上に黒色土層が形成され、その上位に褐色土層が堆積しており、両層からは轟式系土器群が数多く出土している。その上層である純貝層では阿高式系土器群が出土し、下層の黒色土層や褐色土層では皆無といってよい状況から、出土資料をみる限り阿高式系土器群の段階に純貝層が形成されたと想定される[1)]。５次調査でも松本雅明氏は「阿高式土器と轟式土器との間には明確に層位的区分がみとめられる」としている（松本・富樫1961）。純貝層上層の混土貝層及び混貝土層では、弥生から中世までの幅広い時期の遺物が

出土している。埴輪の出土から古墳が築かれていたことや、中世居館に伴うとみられる横堀跡の存在などから、後世の改変がかなりの範囲におよんでいたとみられる。また、Ｅトレンチ検出の純貝層は、市来式などの貝殻条痕文系土器群や北久根山式、鐘崎式などの磨消縄文系土器群が出土する後期の貝層と考えられ、Ａ～Ｄトレンチ検出の貝層と形成時期が異なる。

これらを総合すると、縄文時代早・前期段階では集落は既に存在していたといえるが、中期の阿高系土器群の段階に貝塚が形成され、続く磨消縄文系土器群の時期である後期にも貝塚西側に貝層が形成された可能性を指摘できよう。ただし、第５次調査では轟式土器を単純に包含する貝層が報告されており[2)]、前期の貝層が存在する可能性も考慮すべきであろう。

また、Ａトレンチでは人骨が近接して検出されているが、本地点周辺の第１～３次調査で人骨が多数確認された（鈴木1917・1918、濱田・榊原1920、清野1920）。これらの調査成果より、轟貝塚が位置する低台地東側は前・中期にかけての墓域とみられる。なお、縄文時代の居住域は未確認であるが、現在住宅が密集している貝塚西側の標高がやや高い地点（標高８ｍ前後）がその候補地にあげられる。

轟貝塚に隣接する西岡台貝塚では、貝層が２つに大別され、下層が轟・曽畑式などの前期の土器を主体とするが、阿高式や船元式など中期の土器もこの層に含まれる。また、上層は出水式や北久根山式、御手洗式などの後期前半の土器を主体とする（木下・髙木ほか1985）。下層の貝塚が轟貝塚の阿高系土器群が出土する貝塚、上層が貝殻条痕文系土器群や磨消縄文系土器群が出土した後期の貝塚におおむね対応するかのような状況を呈するのは興味深い。しかし、両貝塚とも調査面積が限られていることや、西岡台貝塚で行われた貝種の分析は轟貝塚では行われていなことから、両者の関係については、出土した土器や貝塚の形成過程を含めた詳細な検討が必要であり、今後の課題としておきたい。

註

１）慶応大学資料を実見した池田朋生氏も轟貝塚が中期に形成された可能性を指摘している（池田2002）。

２）第５次調査で最も原初の状態をとどめるとされるＩｔの一部（Ｄトレンチに近接）で、第１層は耕作土、第２層は阿高式のみが出土するカキを主体とする純貝層、第３層は混土貝層、第４層はハイガイを主体とする貝層、第５層は純黒土層の計５層に分層され、第３層以下では阿高式は出土していないとされている（松本・富樫1961）。６次調査との対応でみれば、５次第２層が６次純貝層、５次第５層が６次黒色土層にそれぞれ対応するとみられるが、表土層を除いてそれ以外で対応する土層は明確ではない。また、６次調査において江坂氏も阿高式の時期の純貝層下の一部に轟式後半のハイガイの多い薄い貝層があるとしている（江坂1971）。

引用・参考文献

池田朋生　2002「轟貝塚」『新宇土市史』資料編第２巻　宇土市

江坂輝彌　1971「熊本県宇土市轟貝塚」『日本考古学年報』第19号　日本考古学協会

木下洋介・髙木恭二ほか　1985『西岡台貝塚』宇土市埋蔵文化財調査報告書第12集　宇土市教育委員会

清野謙次　1920「肥後国宇土郡轟村宮荘貝塚人骨報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第５冊

鈴木文太郎　1917「河内国府人骨・肥後轟貝塚にて発掘せる人骨について報じ併せて石器時代の住民に及ぶ」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第２冊

鈴木文太郎　1918「肥後轟貝塚河内道明寺等にて発掘せる人骨に就いて」『人類学雑誌』第33巻第３号

濱田耕作・榊原政職　1920「肥後国宇土郡轟村宮荘貝塚発掘報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第５冊

松本雅明・富樫卯三郎　1961「轟式土器の編年－熊本県宇土市轟貝塚調査報告－」『考古学雑誌』第47巻第３号　日本考古学会

付 編 1

1　松本雅明・富樫卯三郎　1961　「轟式土器の編年－熊本県宇土市轟貝塚調査報告」『考古学雑誌』第47巻第３号　日本考古学会

2　江坂輝彌　1968　「熊本県轟貝塚出土の打製靴型石器について」『日本民族と南方文化』金関丈夫博士古稀記念論文集　平凡社

3　小片丘彦　1972　「古病理学的にみた日本古人骨の研究」『新潟医学雑誌』第86巻第11号　新潟医学会

4　江坂輝彌　1991　「先史時代における朝鮮半島南部と西九州地方との初期経済交流について」『松阪政経研究』第９巻第１号　松阪大学（現三重中京大学）

1 轟式土器の編年

－熊本県宇土市轟貝塚調査報告－

松本雅明・富樫卯三郎

序　説

轟式土器は九州の早朝・前期の縄文を考える上に、重要な基準となっている。その報告は京都大学の「肥後宇土郡轟貝塚発掘報告」(1920年[1])、また小林久雄氏「肥後縄文土器編年の概要」(1935年)、「九州の縄文土器」(1939年[2])、さらに京大の遺物について三森定男氏「肥後轟貝塚土器について」(1935年[3])にみえている。しかし轟式と云われるものは多くの要素を含んでいて、一括して扱いがたいように思われる。諸研究は遺物についてなされているけれども、その層位的分析、またその近くから出土する曽畑式土器との関係については、まだ充分には考えられていない。九州縄文土器のうち、ここに未解決な大きな問題があると思われる。

そこで1958年７月30日から８月３日まで、宇土市・宇土高校が主体となり、遺跡の基礎的な発掘調査をこころみた。調査は小林久雄（調査隊長）・松本雅明・富樫卯三郎・原口長之・内野仁之助・三島格・田添夏喜・花岡興輝・東光彦・隈昭志らがあたり、宇土高校・熊本大学の生徒・学生らが協力した。

調査は６つのトレンチ（Ⅰ～Ⅵ）においてなされた。京大で発掘した東北のＡ地区を避けて行ったが、ほとんど全面に荒らされていて、原初の状態はⅠtの一部分のほか、Ⅱbtの南半の混土貝層の下部以下、Ⅴbtの南半の最下層、Ⅵbtの黒土層以下に、原初の状態がみられた。Ⅱa・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴaはすべて攪乱のあとである。それはその後、大正９年７月以降、長谷部言人博士らによる数次の人骨の採取、近年の石灰を焼くための貝の採掘によるものである。また台地の北の点線の外は、近代の埋立地であることがわかった（第１図）。

そこでⅠt等の原初の層によって、層位関係の見とおしをたて、つぎに、その知見によって分けられた各群の土器について、それぞれの出土位層をたしかめて、その編年を試みるという方法をとった。そのさいⅡbtにおいては、東北側は混土貝層下の黒土層が深いけれども、その南および西側は浅く傾斜しているので、その扱いには細心の注意を要し、近接する土器との関係が考慮されなければならなかった。Ⅴbtは赤土層に接して混土貝層がみられ、その中に縄文後期の御領式の小児甕棺が、半ば赤土層に掘りこまれて埋められていたが、下層はすべて条痕文土器であった。Ⅵbtにおいては黒土層がふかく、そこから出る土器は数も少なくかつ単一で、黒土層の上部のほかは、層の深さにかかわりないことがわかった。このように、トレンチはそれぞれ特殊の様相を示したが、全体として一つの層位関係をとらえることは可能であった。

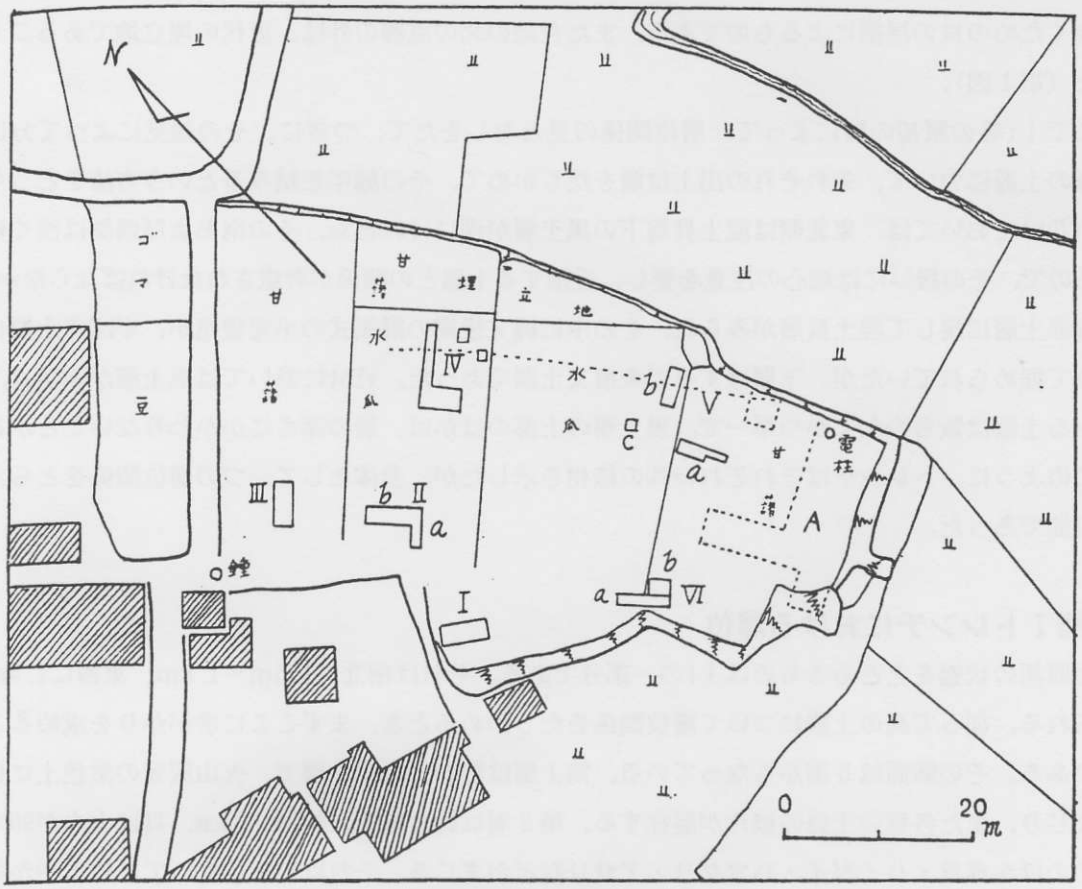
1　第Ⅰトレンチにおける層位

最も原初の状態をとどめるものはⅠtの一部分である。それは南北に1.5m～1.8m、東西に2.5mあまりみられる。従って轟の土器について層位関係をたしかめるとき、まずここに手がかりを求めることが必要である。その断面は５層からなっている。第１層は約20cmの耕土層で、火山灰質の黒色土に貝の砕片がまじり、また各種の土器の破片が混在する。第２層は純貝層で、約20～25cm、貝はカキが90％を占め、そのほか赤貝・ハイガイ・ハマグリ・アサリなどがまじる。それは地形に従って、ゆるやかに西南から東北に向って傾斜する。第３層は約23～15cmの混土貝層、貝にはカキ・赤貝が多くみられる。第４

層は約10cmの厚さをもつ貝層で、大部分はハイガイで、それにカキ・赤貝・ハマグリその他を含んでいる。この第４層の上にのって、厚約15cm、広さ約１m平方の焼土層が発見された。住居址であることは確認されなかったが、ある時期にこの層が生活面となっていたことはたしかである。第５層は表土から70cmの深さで、貝片や礫をまじえない純黒土層で、地形に従って西南から東北に向ってゆるやかに傾斜する。深さ約１m余でやや褐色をおびる。

第１層は混乱層であるから除外した。第２層はすべて縄文中期の阿高式であって他を含まない。この第２層の貝層がすべて阿高式のみであることは、この第１トレンチにかぎられ、台地の北部においては縄文後期や弥生・土師器などもあって、表土に近い貝層の形成の時期を異にする。この阿高式土器は第３層以下に出ていないので、そこに明確に層位関係が確認された。

第３層（以下第２図の拓影参照）。１より９までは、外面だけ文様があって内面にはないものである。１は、外面には条痕を消した跡があり、その上にヘラによる曲線、上部に刺突による横の列点がほどこされている。２は、条痕の地文はみえないが、おなじ曲線文をほどこしている。３は、浅い平行直線文が５本みえる小片である。４は、ヘラによる横直線文の上に、たてにも短直線文をいれている。５は、消したあらい平行の条痕の地文の上に、２本のヘラによる二重の波状曲線文があり、その上部にヘラによる深い刺突の列点文がみえる。条痕はハイガイで意識的に平行に構成されている。６は、二重の横直線文の上部に、短直線文がめぐらされている。７は、表面にだけ浅い、消し跡のある条痕がみえて、裏面にはないもの。８は、前者と同じであるが、条痕が文様化されていて、その上にヘラによる横直線文がほどこされている。９は、消した平行の条痕の上にヘラによる深い刺突の列点文がみえる。10より13



第１図　遺跡全図

までは、いずれも表裏とも文様があるものである。10は、表裏とも半截竹管またはヘラによる浅いややひろい平行の直線文があるもので、口縁はやや外にひらき、上部に楕円形の刺突の刻目がめぐらされている。11は、ヘラによるさらにひろく浅い平行線があり、その間に斜めの短直線文が並列されている。内面は浅い刺突をつなぐ直線文となる。口縁上部に斜めの刻目がある。12、上より狭く深い直線文であるが、必ずしも平行をなしていない。13、外面は斜めの条痕の上にヘラによる直線文がほどこされ、内面には条痕はなく別に刺突文が加わる。条痕は意識的に一部分にのみ施されている。口縁部には刺突列点文をめぐらす。14、外面はヘラによる刺突の点をつないだ直線文、内面は直線文である。

以上はすべて破片で、口縁部は4片にすぎないが、ここからも次の特徴が知られるであろう。(1)外面に条痕のあるものが少なく、あっても消したあとか、意識的に文様化されているものかである。(2)内面に条痕あるものは全く存在しない。(3)施文貝には条痕のほかはすべてヘラか半截竹管が用いられている。(4)表裏に文様があるものが少なくなっている。(5)直線文がほどこされていても浅いか、もしくは狭く深く、また他の要素(刺突文・曲線文)が組合わされていて、いわゆる曽畑式から離れている。(6)土器の厚さは7㎜前後で、下層より出るものに比して、粒子がつまり、焼成も固くしまっている。(7)口縁部はややひらき、多く上部に刺突または刻目がめぐらされている。

第2図 第Ⅰトレンチ3～5層土器

第4層。1～4は外面に文様があって内面にないもの。1は消した浅い条痕の上に、竹管による短い平行線が、上部では横に、下部では斜めに施されている。2は、ヘラによる短直線が横に4本みえる破片であるが、左から右にいれた線の先端はとがる。3は、前者の線が短くまるくなるものである。4、5はいずれも列点の刻文をハイガイの口唇部で縦にいれたもので、一方が大きく他方が細く狭くなっている。これは次の第5層上部からも小片が1片出ている。それは後述のように、塞ノ神(せのかん)(鹿児島県大口市塞ノ神)、羽島下層Ⅱ式(岡山県倉敷市羽島貝塚)、ことに後者と施文法が似ている。6、7は表裏ともに直線文があるもので、7の口縁上部には円形にちかい刺突の刻目がある。8、9は、表裏ともに横の直線文があり、その施文はいわゆる曽畑式にもっとも近い。8は口縁は波状をなし、ともに上部には刻目はみえない。10は、右の要素をもつが、条痕を消した地文があり、直線文も浅く、口縁上部はまた波状をなし、円形の刻目をめぐらす。11、12は、条痕を消した上に横真線文をえがき、内面に刺突の列点文がみえている。13は、刺突の列点文と直角に直線ないし曲線が表裏にあって、口縁はやや波状をなし、高い部分は厚くなっている。

以上のように、第4層はほぼ第3層とかわらない。しかし次の点では、いくらか異なることが指摘できる

であろう。（1）内面に施文のあるものが多くなる。（2）直線文においては、曽畑式により近ずいている。（3）列点文と直角に直線文をもつものがある。（4）口縁部が波状をなすものがみられる、などである。しかし、（4）についてはⅡｔよりすると、轟式の最上層に多いことが認められた（後節Ｄ式参照）。ここでも前層とおなじく、施文はすべてヘラもしくは竹管でなされている。

第５層。ここでは黒土層のために層位関係がはっきりしないので、ほぼ10cmずつの深さで、上下の二層にわけて整理した。その結果、次のことが明らかになった。上層。貝層下10cmまで。１、２はそれぞれ、表裏に二条の束の平行直線文をほどこし、いわゆる曽畑式にちかいものである。３は、外面は横の直線文と縦の短直線を組合わせたもので、表裏ともに２本のヘラの束で施文している。４は、曲線・直線、刺突の列点文を組合わせたものであるが、内面にはない。５、６は山形の曲線文の上下に、刺突の横直線文がある。５は右に幾条かの直線文の末端がみえる。内面は整えたあとはあるが、やや粗く、文様はない。６もそれに似ているが、二重の曲線文と、横・縦の直線文とが組合わされており、直線にも抑揚がある。内面は斜直線文のみである。５、６ともに、はじめ貝殻でととのえ、その条痕を消してヘラで施文したさまがみられる。７は、横線は３本の束、縦線は３本ないし５本の束からなる。それはハイガイの背ではなく、細い竹か小枝の束で引いたものである。内面にはみえない。それに対して８では、条痕がのこり、施文もハイガイの口唇部によると思われる。９、横の直線文は７とかわらないが、外面がなめらかな反面、内面にはあらい条痕がみえている。10はあらい強い条痕を表裏にほどこしたもので、胎土も砂交じりで粗い。この層にはこれだけが異質的で、下層から豊富に出るものである。

このように、上層には、（1）いわゆる曽畑式にちかいものがある。その点では前の層とつながるが、それはごく少なくこの数片にすぎない。むしろここで有力なのは、１・２・３のように、地文の条痕を消して施文し、直線と曲線とを組合わせているものである。それは第３層（5）に、退化形式としてわずかに残っている。またいわゆる列点文はここにはほとんど見られず、刺突の連続文にかわる。（4）大きい深い文様はヘラでつけるが、貝殻で施文したものも多く見えている。（5）しかしここで注目されるのは、表裏に深い条痕文をもつものが現れたことで、その数は少ないが、その下層にいたってもっとも有力になるものである。黒土層では層位が厳密にはわからないので、これは次の層の混入とみられないこともない。

下層。貝層下10～25cm。これはもっとも注目される層で、１、２の小片のほかは悉く表裏に条痕をもつもののみである。１は、口縁部の外側に一条の凸帯をめぐらし、同時にその上下に刺突の横線をつけるもので、表裏ともに浅い条痕がある。口縁上部にはハイガイの口唇部による円形の刻目がある。口縁はやや外反する。２は、疑問の土器で、他の混入ではないかと思われるが、ここにあげた。外面にやや条痕があり、縦・横に狭い直線文がある。この層から出る土器は、ほかはすべて表裏に深い条痕をもつものである。３は、胎土粗く、砂をまじえるが、薄く、焼成は堅い。口縁部はうすくやや外反し、上部にハイガイの口唇部による刻目がある。土質は４・５・６ともにおなじ。５の口縁部も３に近い。６は底部に近いと思われる。またこの層よりさらに10cm余下から小さい山形の押型文土器の小片１箇（7）が出たことを附記しよう。胎土・焼成きわめて粗で[4]ある。

以下Ｉｔの原初の層はいずれも小破片で、変化に乏しく、これだけの資料から編年をこころみることは困難である。しかしここから、次のことを明かにしえたと思う。

１、阿高式土器と轟式土器との間には明確に層位的区別がみとめられる。

２、轟式土器のうち表裏に条痕をもつものと、そうでないものとは明かに区別でき、前者は最下層にの

み存在する。

3、曽畑式に近いものは、この条痕土器よりも上の層に見えるので、第５層の上層以上の直線文土器は、曽畑式の影響であると思われる。

4、塞ノ神、羽島下層Ⅱ式にちかいものの影響と思われるものは、第４層にあらわれる。

5、施文のうち第５の上層は直線・曲線文のみみえるが、第４層になって列点文を交えるものがあらわれる。

6、一小片であるが、小山形押型文は、この条痕文土器より下層にみられた。

Ｉtにおいては、轟式のうち条痕を消した土器がもっとも厚く、第３～５層上部にわたるが、その間には変化は少ないように思われる。しかしこれはもちろん貝塚の堆積の速度に関係するであろう。従ってつぎにこれを基準とし、層位の確実なⅡb・Ｖb・Ⅵbtの下層の土器についてそれを考え、さらにひろく混乱層出土の類似の土器を検し、轟式土器の編年をこころみたいと思う。

2 轟Ａ式

Ｉt第５層の下層は、すべて表裏にハイガイによるつよい条痕を施した土器であった。それはまたⅡbtの黒土層下層、Ｖbt下層の混貝土層、Ⅵbt黒土層下層から出土するものと同種の土器であった。いまこの条痕文のいちじるしい下層の土器を３類にわけ、それぞれ轟Ａ・Ｂ・Ｃ式とする。そのうち最下層から出るものを轟Ａ式と名づけた。この土器は台地の東南部から多く出土し、西北部からはほとんど出ない。すなわちＶ・Ⅵtを主とし、Ｉ・Ⅱtの最下層より破片が出るにすぎない。Ⅲ・Ⅳtからは縄文後期以後のものが出土した。

第Ｖatは、幅１m、長５m。30cmの黒色表土（混貝）の下に、40cmの貝層があり、その下が黄褐色土層となる。貝層はアサリを主とし、ハイガイ・カキ・ハマグリなどをまじえるが汚染され、縄文のほか弥生・須恵・土師片などが混合していて、近代の発掘の跡であることがわかる。Ｖbtは幅２m、長4.5m。西南のはしは15cmの黒色表土（混貝）、その下20～25cmの混土貝層（第１）があり、その下約10cmに、完形貝が多く土の少ない混土貝層（第２）があり、その下が黄褐色土層である。この土層は東北に向って傾斜し、１m80cmのところでは混土貝層は45cmの深さとなり、さらにその東北はいちじるしい段落ちをなしている。１m10cmの深さで灰色粘土層となり、水が湧出しているのは、ここがもと水田ないし湿地であり、その上に遺物を含む土を落として埋立をしたためであると思われる。従ってbでは、西南部の第２混土貝層面が最も注目される。出土の土器はすべてＡ式である。Ｖctは１m平方の小ピット。20cmの黒色表土（混貝）の下に、30cmのアサリを主とする純貝層がみられた。この中からＡ式土器が発見された。このようにＶt地区では、bの西南部の第２混貝層、Ｃの純貝層のみが使用できる。

Ⅵt。はじめ幅１m、長５mのトレンチaを開けたが、混乱層であるから、比較的良好と思われる東北側に幅２m、長2.5mのトレンチｂをひろげる。約15cmの黒色表土（混貝）、その下に15～20cmの混土貝層、東南隅には純貝層（主としてハイガイ・カキ）があり、その下65cmの黒色土（貝を含まず）、その下黄褐色土層である。混土貝層は阿高・轟式を混合し、弥生片も少しまじるので、或る時代の混乱層と考えられる。地表下40～50cmのところに厚さ４cm、長径37cmの、上面をすりへらされた平石があり、その周囲に多数の石群をみとめた。平石より15cm東北に径10cmの、すれて円みをもつ丸石が発見された。石器片、猪の牙・骨にまじり、大形の土器片が発見されたが、それは悉く条痕をもち、ことにミミズバレの凸帯をもつ土器（Ｂ式）が多い。剥片石器は明らかにそれに伴う。この65cmに及ぶ黒色土層におい

ても土器の変化は少なく、その数も多くないが、最下層（深84cm）からは条痕のみをもつ土器（A式）の破片が出た。

次にⅡtについて見ると、西南－東北のトレンチa（幅1m、長4m）においては、西南側は20cmの表土（混貝）、その下40cmの混土焼貝層、その下最深1mの貝層があるが、土師器をまじえているのは、貝殻を採取して石灰を焼き、残った貝を埋めたあとである。東北側にはそれがないので、ついでb（幅2m、長6m）をあけた。そこでは20cmの表土、その下20～30cmの貝層、その下30～40cmの黒色土層がある。貝はハイガイ・赤貝・カキ・ハマグリ・アサリ・ニシ・ニナなど。混土貝層は撹乱され、阿高・轟式のほか土師・瓦片出土。しかしその下層は比較的純粋で轟式を出す。その下の黒土層は轟D・C・B・A式のみを含み、丸底・平底底部・剥片石器・石匙を伴う。ことに黒土層下部・黄褐色土層の直上はA式のみを出土し、資料価値が高いと思われる。このⅡtにおいて細心の注意が必要なのは、このトレンチの黒土層が東北に向って傾斜していることで、深さのみによって層位を明らかにすることができない。最下層は東北部では深109cm、2mへだたる東南部では77cm、3mへだたる西南部では44cmである。それは、トレンチ全体ではなく、近接土器のそれぞれの群において層位を考えなければならぬということである。従って以下各土器附記の深さにいては、そのことを念頭におかれたい。

以上のトレンチの最深部において、表裏につよい条痕のある土器を確認し、それを轟A式と名づけた。A式の土質は砂交じりで粗く、色調は灰褐色・灰黒色・黒褐色・褐色などあるが、焼成は軟質でざらざらしたものと、やや堅いものとがある。薄いのに堅質のものが多い。粘土の中には雲母がまじっているが、滑石粉はすべて轟式土器にみとめられなかった。施文はすべてハイガイによるものである。

1（Vb、混乱層）は、斜線条痕を綾杉状に交互にほどこし、その中間にたての線をいれ、内面は横の条痕をもつ。復原するとほぼ径23cmの深鉢で、12・13はそれにちかい。2（Vb、混乱層）は、条痕がつよく深く、斜線のみで文様化はみられない。3（Vb、表土）は、深い斜めの条痕と直角に線をいれている。器形は1・2より大きい。4・5（Vb、混土貝層下面）は、赤土面の直上から出た確実なもので、表裏ともにきわめて粗い条痕からなる。カーヴからみて底部に近いところと思われ、丸底を想定するものである。10はそれにちかい。つぎに6・7・8・9・14・16などは、条痕文のうち曲線がみえるもの、縦・横の線の交錯するものをあげたが、それは表面につくものと内面につくものとがある。6（Ⅱb、深46cm、最下層）は条痕の中に縦の線があるもの。7・9（共にⅡaの混貝層）・8（Ⅳ）はいずれも厚さ5～6mmである。これらによって条痕文の中にもきわめて粗で不規則なものと、ある程度秩序だったものがあることが知られる。前者がもっとも古い層であることは、4・5の出土位層によって知られる。また1・12・13のごときが轟B式とも併存

第3図　轟A式

することは、Ⅵtによって認められた。しかしいちめん土器制作のとき、ハイガイによる調整がきわめて軟いときと、いくらか乾いてからなされたのとの相違にもよるであろう。内面の条痕はほぼ口縁に平行に施されているが、もっとも粗なものではそうでないものがある（10・11）。

次に口縁部について見よう。口縁部の特徴は、ほとんどすべて上部に、ハイガイの口唇部で刻目をつけていることである。11例のうちに、それがみられないのは10の一例のみである。10（Ⅱb、深109cm、黒土最下層）は条痕がきわめてあらく、内面も縦になっている。焼成も粗で、厚さも口縁は3㎜、下部は11㎜となり、口縁が少し内にすぼまる。11（Vb、深90cm、混乱）では表面の条痕は規則的にみえるが、内面は不規則で、器面も焼成もきわめて粗い。10と同じように口縁部がすぼまり、上端はとがり、その外縁に刻目がはいっている。それはハイガイの口唇部を直角にして一つ一つ押したもので、間隔がかなりはなれ、12・13・14のように、ハイガイの口唇部を横にして、一度削られたものではない。12（Vb、深110cm、混乱）は表面は規則正しいが、土も焼成もかなり粗である。13（Vb、深80cm、混乱）はやや堅く、口縁は平たく、やや外にひらき、周縁に刻目があり、それはハイガイの口唇部で削りとったものである。14（Vb、混土貝層下面）は赤土上の確実な破片の一つである。胎土・施文ともに粗いが、薄く、焼成は堅い。口縁はとがり、周縁に刻目があるが、これはハイガイの先で、直角に一つ一つ細く深くつけている。15（Vb、表土）は焼成・色調・厚さともに前者と変らないが、口縁はまるく、刻目は間隔がはなれている。16（Vb、混土貝層下面）は14と同じ位層から出ている。口縁部はとがり、上部の刻目は深くS字状をなし、間隔がはなれている。焼成はかなり固い。17（Vc）は口縁外周がとがり、そこに刻目があるが、それはハイガイの口唇背面を上から下に引きおろしてつけたものである。

このように口縁部には、もっとも粗製の土器に、内側にややすぼまるものが二例あり、他はほとんど垂直で、いくらか開きかげんなものが一例（13）みられるのみである。口縁の刻目は、（1）欠除するもの、（2）ハイガイ口唇部で直角につけるもの、（3）ハイガイ口唇部で平行に上から引きおろすもの、（4）下から上に削ぎとるもの、の4種があり、（2）の場合には間隔がはなれるものがある。もっとも粗なものでは施文がなく、それが漸次（2）（3）と発展して行っている。またややすぼまるものから、開くものに変っている。このことは、最深の出土位層を示す10が、後述のように尖底をとるところから明かである。

A式土器の底部であると明確に決定できるものは、尖底2個、丸底5個であった。18（Vb、深90cm）は埋立の混乱層から出たが、もっとも粗い条痕をもち、その手法は先の10、およびⅥtの最下層の小片と全くおなじである。底部は厚10㎜、残存上部は6～7㎜。胎土は砂まじりであらく、焼成も粗である。外面は灰褐色、内面は黒色を呈する。19（Ⅵ、黒土層下面、深75cm）は条痕土器群の最深部から出たことの確実なものであるが、きわめて小片である。厚さ底部10㎜、残存上部5㎜で、条痕のようすは変らない。外面黒褐色、内面灰色、土質・焼成は前者と変らないが、薄いから器形はもっと小さいであろう。

つぎに20（Ⅱb、混土貝層、混乱）は、底部に移るところがやや外にふくらみ、そこから角（かど）をつけて、ゆるやかな丸底にうつる。底部の径は復原すると7.5cm。深い斜めの条痕があり、土質も焼成もきわめて粗く、かつ厚くなっている。底面も凹凸が甚しい。底部の厚さ15㎜、残存上部9㎜。21（Ⅱb、混土貝層、混乱）も同様であるが、焼成はやや固く、厚さ底部11㎜、残存上部9㎜である。底部の径は復原すると約8cm。表裏ともに灰褐色に黒をまじえる。ほかに小片が3個あるが、1は、Ⅰtの黒土層下面で、条痕文片のみを出土した層である。2は、Ⅳtの混乱層、3は、Vtの混土貝層（混乱層）である。土質・焼成・色調も似ていて、これがA式に伴うことは明かである。

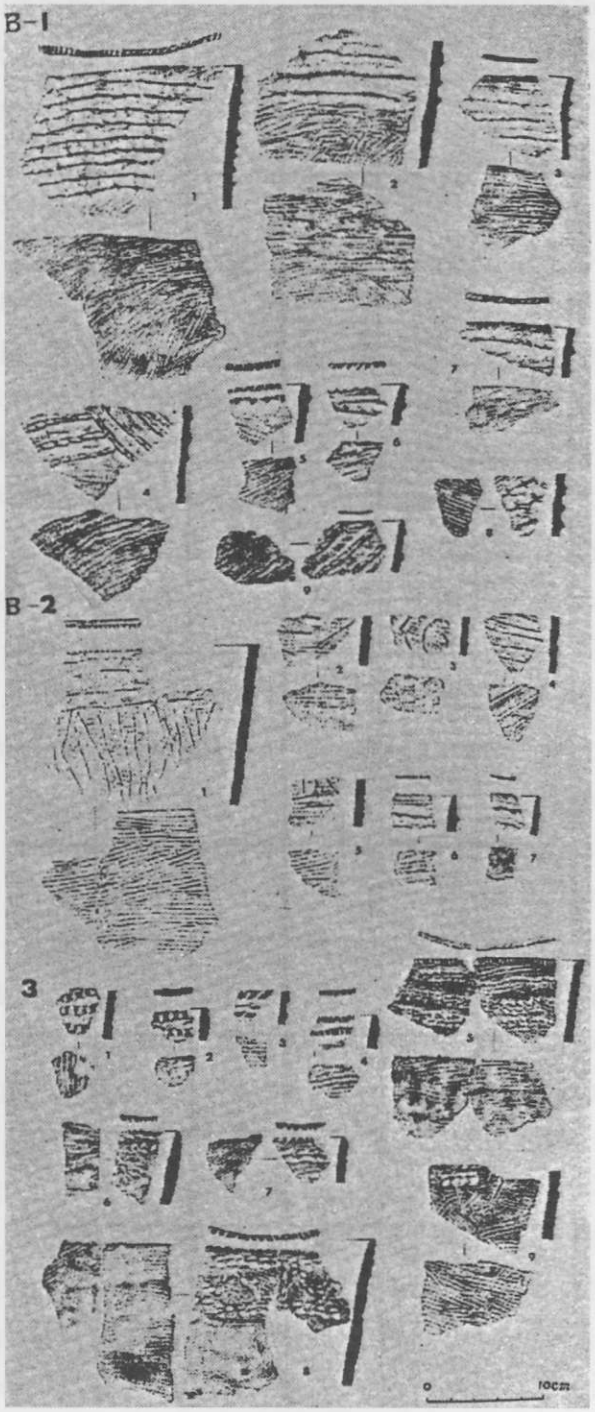
このように見てくると条痕文土器の祖形は尖底の深鉢であり、他の多くは丸底の深鉢であることは確かである。また尖底土器は、18は復原しても口径14.5cm、19はさらに小形の土器である。丸底も同じように小さいが、なかには口径20cmまたはそれ以上になるものもあることが、20・21によって推測される。上の破片についてみると、1・2・3が大きく、径23cm以上に及ぶ。しかし11・13はさらに大きくなると思われる。土質・施文・焼成からみて、尖底は10のごときにつながる。すなわちそれは、口縁がややすぼまり、上部に刻目がないものに伴うようである。A式の中には、つぎのB式に併存するものがあることは、Ⅵt黒土層によって明かにされるところである。

3　轟B式

これは条痕が変化し、さらに様式化することを以て名づけた。これを3類に分けた。第1類は条痕の上に粘土帯をはりつけ、それを指頭でつまんで隆起線文（いわゆるミミズバレ文）をつくるもので、条痕の効果を強調するものである。第2類は、ミミズバレ文が退化し細くなったもので、表裏の条痕を意識的に消した部分があらわれる。第3類は、ミミズバレ文の上に貝殻で刻目をいれ、さらに刺突の沈文に変化するもので、しばしば両者は併用されている。後の2類は時期的に平行する。

第1類、つよい隆起帯文をもつもの。Ⅵtの黒土層中から多く出土し、層位的に轟C・D式の下、粗い条痕文・尖底の上にあることが確認された。Ⅱbtにおいても、黒土層最下層から3片出土し、打製石匙を伴い、A式の上層、C1式の最古式の下にみられた。Ⅴbtの赤土上の貝層からも1片出ている。出土量は多くないが器形が大形になり、ハイガイの背部をさまざまに動かして条痕をつけるが、意識的に浅くして器形を整えようとする形跡があるのは、A式の発展である。

1（Ⅵb、黒土層、深65cm[5]）は胎土は粒子あらく、器面もゆがみをもつが、焼成は堅い。施文は上部だけに限られている。地文の条痕は不規則で、裏面も縦横に浅くはしるのは、ハイガイの先でそれを整えて消そうとする意識が働いているためとみられる。口縁部はややひらき、上部にハイガイの背による浅い刻目がある。2



第4図　轟B式

（Ⅵ、黒土層）も同じ層から出て、胎土・手法もかわらない。3（Ⅴb、表土、混乱層）は外面の条痕はさらに浅く、口縁は外反し、上部に刻目はない。隆起線にはつまみによる抑揚がつけられる。4（Ⅵb、黒土層）は1・2と同じ層で、隆起帯は斜線をもまじえている。5（Ⅴb、混乱層）は隆起帯が口縁近くにのみあるもので、口縁はややひらき、上部にハイガイの口唇部で直角につけた細い深い刻目がある。6（Ⅵ、混土貝層、混乱）は不規則な隆起帯文と、口縁外周にハイガイの背による浅く広い刻目がある。7（Ⅱb、黒土層下面、深85cm）は口縁上部に同じ施文の浅い刻目がある。8（Ⅴb、混土貝層下面）は確実な位層の一つであるが、隆起帯のつまみがよく、点状をなしている。9（Ⅴc）は口縁部がとがり、刻文はないが、隆起帯は口縁部から直ちに斜めにはいる。そのほかⅥ・Ⅱ・Ⅴtから出土する。復原すると、1は口径28cm、2もそれにちかいと思われる。Ⅵ・Ⅱ・Ⅴtにおける出土位層からA式の上、C・D式の下層であることが確認された。厚さは5～7mm、胎土・焼成・施文ともにA式より堅緻である。

このようにB第1類は、口縁はやや外反するものが多く、口縁がとがるものには刻目がなく、広いものは上部に刻目がみられるが、それにはハイガイ背面によるきわめて浅いものと、ハイガイ口唇部による深い規則正しいものとがある。口径は1によって復原すると28cm、2によると30cm以上で、A式より大きくなっている。

第2類、隆起帯が細く退化したもの。これも例は多くなく、主なものはⅡt黒土層2、Ⅳt焼土層（混乱）2、Ⅴbt3、Ⅴct1、Ⅵt3片で、ほかに類似の破片がいくらか出たのみ。そのうちⅡtの2片、Ⅵtの2片は確実に層位関係の明らかなもので、第1類につぐ上の層から出ている。

1（Ⅱb、黒土層）、深42～44cmから出土したが、次の第3類5が深43cmの隣接層から出ていることは、第2・3類がほぼ平行していることを示している。それに対してC式は36cm・30cm・45cm（1m離れる）から出ていて、その上の層であることを示す。表面をやや整え、口縁に平行に4本、その下に直角に、縦のきわめて浅い隆起線を並べたもので、粘土をはりつけてつくる。2（Ⅵb、深50cm）はB式第1類の上層より出土。素地をならして、その上に施文しているから、条痕は薄くなる。平行線のはしが切れ、斜線がみえる。3（Ⅵb、黒土層、深46cm）も第1類の上から出土。条痕をややならして施文し、渦状を画くように思われる。従来、轟式の中心とされたものに近い[6]。4（Ⅱb、黒土層、深40cm）は上の2・3と施文・胎土・焼成ともにおなじく、出土位層の明かなもの。5（Ⅴc、混貝層、混乱）は1と同じモティフ。6・7（Ⅵb、混貝層、混乱）は口縁部がとがって外にはり、刻目はない。

かくして第2類は第1類のあとに現れ、その退化変形されたものであることは明かである。口縁部にやや外反がみられ、条痕の上をならして整えたところがあり、口縁上部の刻目も前者をうけつぐものである。大きさを確かめる破片はないが、1から復原すると、径32cmにちかくなって、第1類より大きいものが現れている。

第3類。第1類の変形で、まず強い隆起帯の上に刻目をいれ、それがさらに陰刻の列点文に変形するものである。これもⅡtにもっとも多く、Ⅴtがそれにつぎ、Ⅵtにも1片出ている。層位はⅡ・Ⅵtによって明かであるが、第1類におくれほぼ前者に平行する。

1より4までは、隆起帯にハイガイ口唇部により深い刻目をつけたもの。1（Ⅱb、黒土層、深63cm）、隆起帯をハイガイの口唇先端でえぐって施文したもの。この類の中では胎土ももっとも粗く、Ⅱtのうち深い層出土の一つで、むしろ第1類に平行すると思われる。2（Ⅴb、混乱）は浅い隆起帯に刻目を器面より深く彫りこんだもので、口縁上部には刻目がない。3（Ⅴc、混乱）は刻目が狭く深く、4

（Vb）は口縁部にちかく隆起帯があるもので、その上及び口縁上部に、ハイガイの先端を直角にしてS字状の刻目をつけているが、前者のようにつよくない。つぎにあげる諸例は、ただ刺突による沈文帯をほどこしたものである。5（Ⅱb、黒土層、深43及び40cm）は第2類の1・2とほぼ同じ層に、近接して出土した。ハイガイの口唇部を横にして施文し、小波状をなすものもある。地文は浅く、外面に消したところもみえる。口縁部は外側にとがり、その外縁にハイガイの先による引っかき文がある。口縁はややひらく。6（Ⅱb、黒土層、深50cm）、近接土器よりすると、第1類の上、C式の下である。前者よりあらく粗であるが、手法はかわらない。口縁は薄くとがり、外縁に刻目がある。7（Ⅱa、貝層、混乱）も前者とかわらないが、内面はほとんど条痕がみえない。8（Ⅵb、黒土層、深50cm）も表裏とも条痕はきわめて浅く、その上に二条ずつ束になった浅い刺突の列点文が3段につけられ、中間の1段は大きな波状をえがく。口縁外周にふかく細い刻目がある。9（Vb、黒土層、混乱）は前者にちかいが、条痕はかなり強い。

この第3類は、隆起帯の上に陰刻するものが古く、器面に刺突の列点文をめぐらすものはそれにおくれ、後者は第2類と平行している。口縁部はややひらくものが多く、文様も器面上部にかぎられている点も、第2類にちかい。口縁上部には刻目があるものとないものとがある。5・6は復原すると口径約26cm、8はそれよりやや大きいと思われる。

従来、轟式の中で最も特徴あるものとされてきた、突帯がほそく、直線と曲線や渦状文を併用し、その上に時に刻目のあるもの（京大資料目録、017-f）は、B式第2類の系統をひき、凸帯と器面の刺突列点とを併用するもの（同、017-g）、器面に刺突列点のみをめぐらすものは、B式第3類の発展であろう。そこでは凸帯もしくは刺突列点のあいだの条痕は、指頭で消されている箇所があるので、年代は次のC式と平行するであろう。また京大報告では、胴部にふくらみをもつものがみえている（第10図）。しかし今次の発掘では、この類はほとんどなく、轟式の変形であっても、その特徴をなすものではないと思われた。

B式の底部は、表裏の条痕、出土の位層、焼成から考えると、第9図のⅢがそれに属すると思われる。そのうち1（Ⅱb、深43cm）は、上の第2・3類と近接し、併存している。底部は厚く18mm、径10cm、胴部は厚さ10mmである。器形は底部はやや立ち、胴部に移行するところから開き、深鉢形となるけれども、A式よりもひらく。土質はあらく、焼成も粗である。底面はざらざらしているが、A式ほど凹凸はない。2（Ⅱb、深40cm）は前者と接続して出土。底部の厚さ10mmで薄くなっているが、径は12cm、底部がやや立つことも前者とかわらない。底の条痕はやや円形を描いて規則的になっている。3（Vb、混土貝層下層）は確実な層で、ほぼA式の上から出土している。ごく小さく、底部の径5.4cm、厚さ6mm、現存上部厚さ5mmの小形の土器であるが、全体の形はかわらない。4（Ⅵb、混貝層、混乱）は復原すると底部の径はほぼ8.2cm、底部の厚さ12mm、上部6mmである。この底部はほかにⅠt・Ⅵtからも各1片出土している。底部においてはおそらく、第1～3類の間には著しい区別はなかったと思われる。

4　轟C式

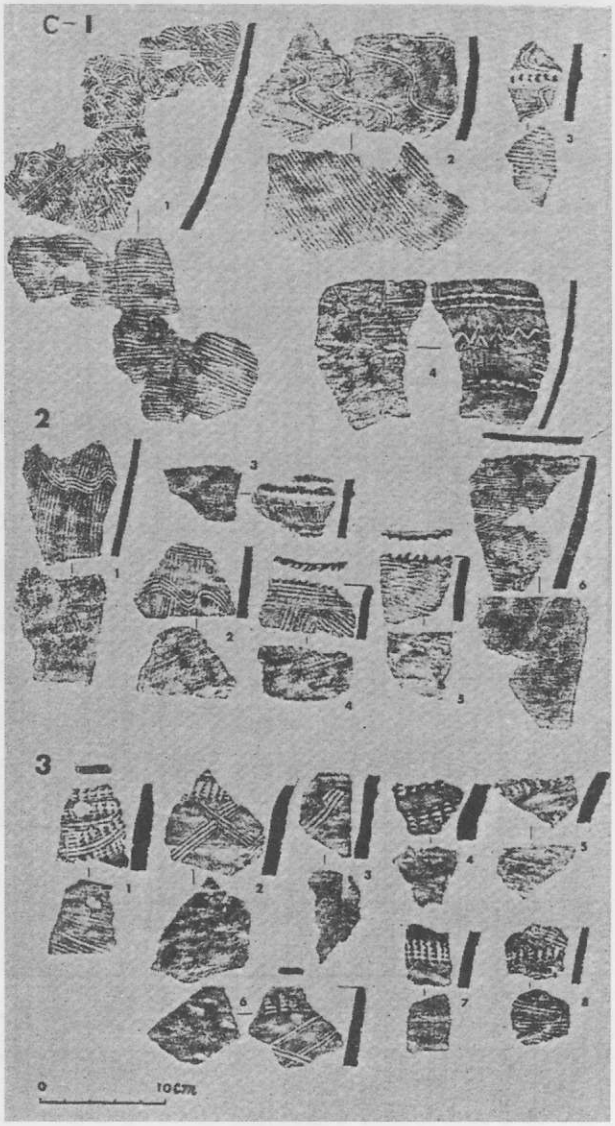
C式は浅い条痕をのこし、波状文を主体とするものである。これも3類にわけた。第1類は、条痕文の上を指頭などで整え、その上に波状文を施したもの、第2類は、前者が変化して裏面の条痕が全くなくなるもの、第3類は、上といくらか異なり、条痕は浅いが、表面にハイガイの口唇部による並列の刺突文と、二、三条の直線または波状の平行沈線とをもつものである。

第１類には、表裏とも条痕がかなりのこるものと、半ば消したものとがある。主としてⅡtより出土し、Ⅰ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵtにも交っている。大きさに比して薄くなっている。

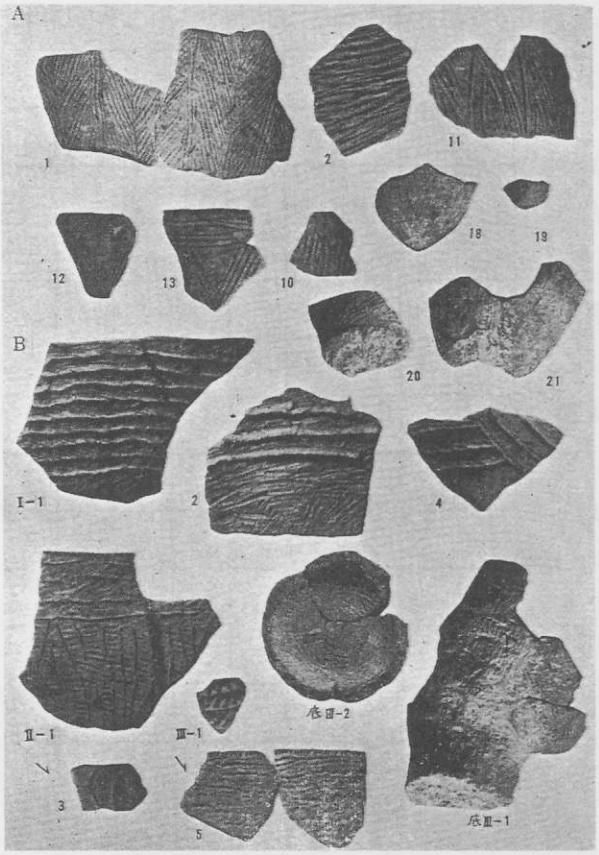
１（Ⅱb、黒土層、深36、38cm）はＢ第３類よりやや浅い。黒土層の上部、混土貝層の下部である。条痕の地文がかなり残っている上に、三条～五条の沈線で施文している。それはハイガイ背面後部の目のつまったところで、深く引かいたものである。内面の条痕は浅く整えられている。胎土は粗いが相当かたく焼かれている。器形は薄く（６mm）、残存胴まわりは19cmである。２（Ⅱb、深66、64cm）は黒土層が深くなっている東南部から出、73、55、46cmの箇所からも同種の土器片を出し、その下85cmのところからB1式、109cmのところからＡ式を、また45cmのところにＤ式の破片がみえるので、その中間の時期と考えられる。条痕を調整した上に、斜めに、２本ずつ束になった波状文をほぼ平行に４本引きおろしている。施文は小さいハイガイの口唇部であろう。残存部分の胴の径は約28cm。内面の条痕は１より深い。３（Ⅱb、深94cm）はⅡtの東南はしの黒土が最も深くなっているところから出、近接して109cmからＡ式が出ている。従ってただちに１・２より古いとは云えないが、打製の石匙が伴出しているので、早期の土器にはかわりないと思う。施文は前者と同じであるが、胴部に刻目をいれた隆起帯がある。４（Ⅰ、黒土層上面）、波状文の上下に刺突の連続文をもつもので、第１節に述べたように（Ⅰt第５層上５）、層位の明かなものである。表裏の条痕は薄くなっている。

第２類には内面の条痕がほとんどなくなり、外面の条痕が文様化され、その上により深い曲線文・直線文が刻まれるものである。中には内面の上部に浅い平行条痕がみえるものがあるが、それは少ない。黒灰色・灰色・灰褐色の土器が多い。厚さは５～７mmであるが、中には10mmに及ぶものがある。また隆起帯があって浅い刻目をほどこすものがある。Ⅱ・Ⅴ・Ⅵtから出土している。Ⅰtでは第５層（黒土）上部から出て、第１類の４に平行する。Ⅱtでは黒土層の上部、混土貝層の下部から出土した。その中で１（Ⅵ、黒土層。混貝層下20cm）は出土層の明かなもので、第１類の１～３におくれ、４と平行するものである。この類は口縁部はややひらき外縁に刺突の列点文があるものが多い。施文はすべてハイガイである。

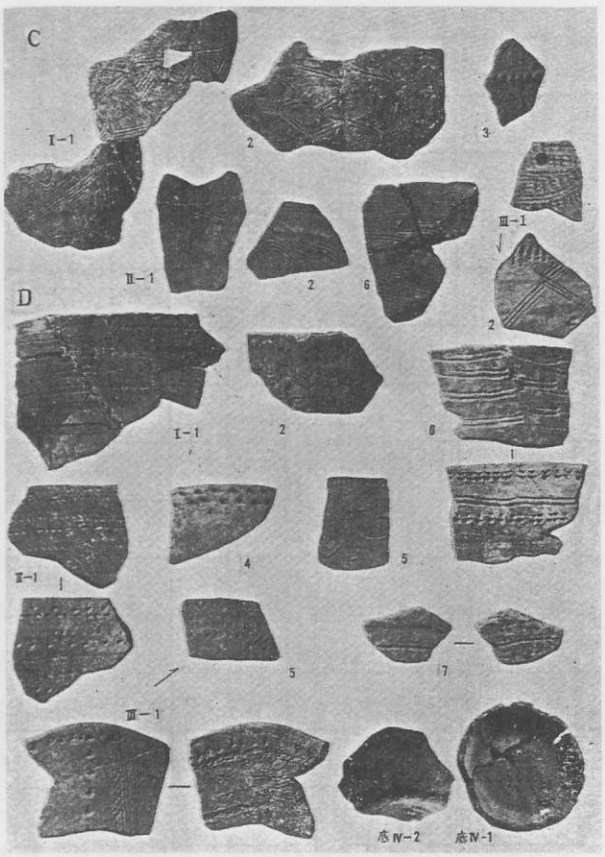
第３類。表面の条痕をならして、その上にハイガイ口唇部で縦もしくは横に連続文をつけたもので、その間に、ハイガイの背で引かいた曲線、もしくは交錯した二～三条の直線文がある。この類の土器は少なく、土質も焼成も粗く、厚く（８～12mm）、灰色もしくは黒灰色を呈している。その点第１類とは



第５図　轟Ｃ式



第６図　轟式土器（Ａ、Ｂ式）数字は拓影の番号



第７図　轟式土器（Ｃ、Ｄ式）数字は拓影の番号

異なり、第２類にやや類似しているのを見る。条痕はほとんどなくなっている。これはＩt第４層（純貝）から２片、その下の黒土層上部から１片（第２図、第４層４・５、第５層上３）出ているので、第１類につぐことは明かである。１～７はすべてⅡtの出土であるが、１は深60cm、５は50cm、７は45cm、２・６は黒土層の上層（但し３・４は近世陶片をまじえる落込中）から出ているので、ここでもほぼ黒土層の上層に含まれ、従って第１類よりやや後れることが知られる。８（Ｖt、黒土層下層、混乱）は第１類にちかい胎土・焼成・条痕の上に施文されている。

上述のように、岡山県の羽島下層Ⅱ式にこれに類似した施文があるのをみると、瀬戸内海を通った交渉が考えられるであろう。また２・４において胴部から口縁部に移るところが、にわかに開くのは、鹿児島の塞ノ神式にちかい趣きがあるが、１の口縁部はややすぼまり、上部に刺突の刻目がないので、すべてがそうとは云えぬ。しかしその下層または上層の轟式に類似したものがなく、異質的なものであることは、やはりひろい交渉を考えねばならぬであろう。

Ｃ式の底部は明かではないが、おそらくＢ式と変らないであろう。

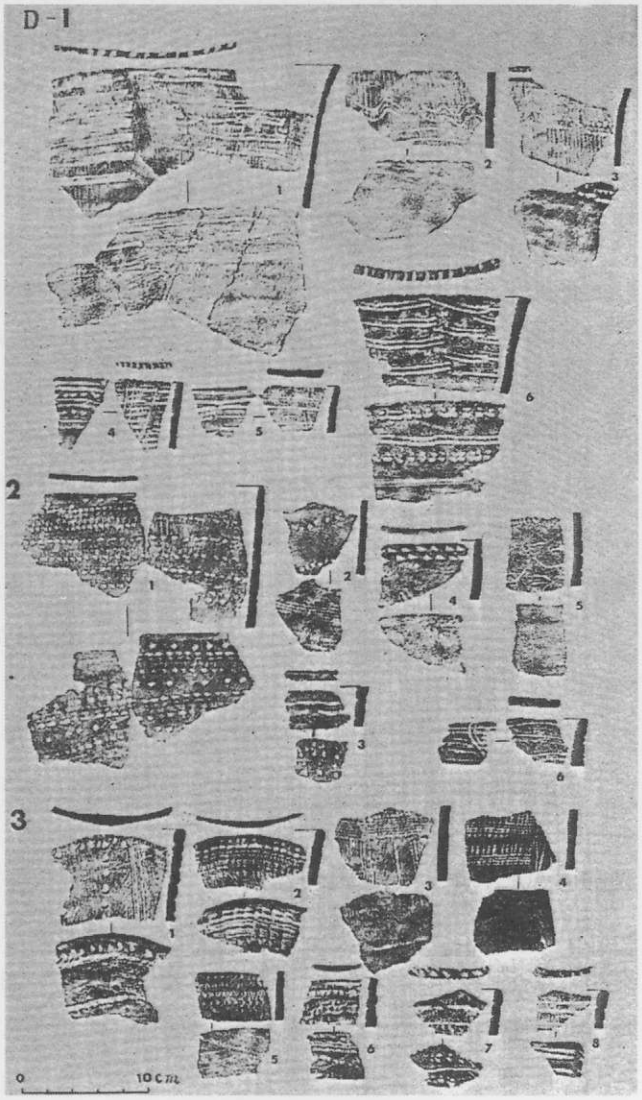
5　轟Ｄ式

この類の特徴は、（1）内面の条痕がほとんどなくなり、（2）施文はハイガイのほかに半截竹管もしくはヘラに類するものを用い、内外面に短直線文・列点文・爪形文をつくること―すなわちＡ・Ｂ・Ｃの３様式がすべてハイガイの施文であるのに対して、別の要素を加えてきていること、（3）表面に条痕があるときも極めて様式化されていること、（4）胎土も焼成もいっそう堅くなること（5）底部にふくらみができ、口縁部が外に張ること、などである。今それを３類にわける。

第1類。短直線文、ときに波状文をとり、多く内面にも文様を施すもの。D式のうちではもっとも下層から出土する。Ⅰtにおいては第5層（黒土）の上面と、その上の第4層（純貝）から出土する。それはC式の第3類と位層を同じくする。またC式第2類とも混同するが、C式第2類は必ず第5層から出るのに、これは第4層からも出るので、それより後の発展をも含む。Ⅱtでも混土貝層の下層、C式の上に出土し、D式中ではもっとも深いところから出ている。1（Ⅰ、第4～5層）は表裏に半截竹管で浅い平行直線文をえがく。直線は切れ、地文にはまばらな文様化した縦の条痕がある。口縁はひらき、上部の刻目も竹管による。2（Ⅰ、焼土面、混乱）は地文に浅い貝殻のたての条痕があり、その上にヘラによる直線と波状文をえがく。3（Ⅳ、純貝層、混乱）も縦の平行条痕の上に、刺突による横の平行列点文が、2本ずつ束になっている。内面上部にもある。口縁はつよくひらき、上部に小枝による刺突の小刻目がある。4（Ⅴ、混貝層、混乱）の表裏の平行直線、口縁上部および内面の刺突列点はヘラによるものである。5（Ⅱ、混貝層下部）もヘラによる沈直線文で、口縁上部には刻目がない。6（Ⅱ、混貝層下部）は2本の竹管もしくはヘラの束で、表裏に沈直線および刺突の列点文をほどこす。口縁上部の刻目も同一の施文具でつける。口縁部はやや厚く、外にひらく。施文は曽畑式にもっとも近い。

第2類。前者より一そう堅く、胎土も緻密である。厚さは5㎜余。文様はほとんど列点文で、時には幅の狭く深い直線文、もしくは短曲線文をまじえる。口縁上部には文様はほとんどなく、第1類ほどひらいていない。条痕文は、たとえ様式化したものも、表裏にほとんどみられない（2は例外）。第1類に曽畑式との交渉がみられたが、ここではそれが著しく減ずる。文様もほとんどすべてヘラがきである。1（Ⅱa、貝層、混乱）は焼成堅く、表裏ともヘラによる刺突の小連続文を器面一ぱいにえがいている。2（Ⅴb）は外面にはヘラ先による、ことに深い刺突列点文があり、表裏に条痕を消したあとがある。3（Ⅱa、貝層、混乱）は外面に二条の引かき文があり、内面に列点文がある。4（Ⅴ、混貝層、混乱）は口縁近くにヘラの刺突文があるのみで、上部および内面にはない。5（Ⅱa、混貝層、混乱）は上部に小列点、下部に短く深い弧線と直線文との交錯がみられる。6（Ⅱ、純貝層、混乱）は内外にヘラによる細く深い直線文を描くもので、内面では曲線が交錯する。

第3類。これは上述の列点文や直線文のほかに、小竹や小枝の束、もしくは半截竹管で、たてに浅い波状文列をつくったものや、竹管の先で爪形文をおしたものである。施文の中にはハイガイの口唇部や背面によると考えられるもの



第8図　轟D式

もあるが、多くは貝殻を用いていない。厚さ５～６㎜、胎土・焼成・色調も前者と同じであるが、中にはやや固いもの、茶褐色をなすもの、がある。また口縁部には刻目のないものが多いが、中には、口縁がゆるやかな波状をなすもの、一部分とがって高くなるもの、その部分が厚くなるもの、がある。１（Ⅱa、貝層、混乱）は外面に縦・横の列点、縦の小波状文、内面に横の列点と小波状文がある。口縁は全体にひらき、上部はゆるやかな波状をなし、高い部分に厚くなっている。２（Ⅱa、純貝層、混乱）は外面に小列点、内面に小波状文があるほか、口縁は前者とおなじ。３（Ⅱb、黒土層、深45cm）は確実な層であるが、この部分は黒土層が深く、60～66cmからＣ式第１類、50cmからＣ式第３類が出ている。横と縦の小列点波状文をえがく。４（Ⅱa、貝層、混乱）は横の波状文列と縦の線文とをまじえる。５（Ⅱa、混貝層、混乱）は爪形文。６（Ⅱb、混貝層）半截竹管による小波状文、内面は列点と波状文である。７（Ⅳ、混貝層、混乱）、８（Ⅴ、混貝層、混乱）は表裏直線文や列点文をもつものであるが口縁上部が山形をなし、その上に刻目がある。

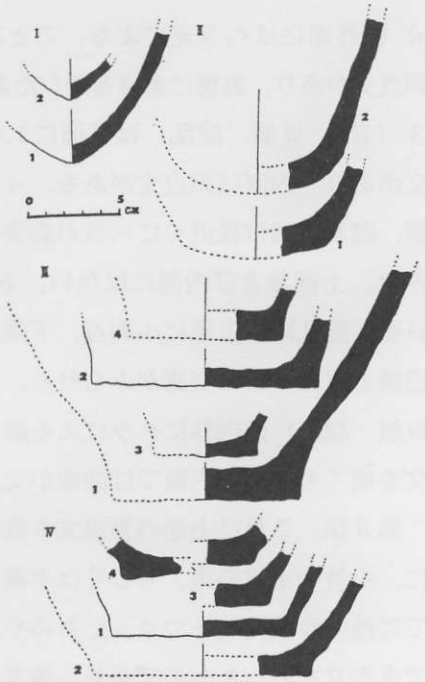
以上Ｄ式を３類にわけたが、そのうち第１類はＩtで黒土層上部から出たものが多く、Ⅱtでも検出されたので、もっとも古いと云える。しかし第２・３類の層位は分別できなかった。それはたんに様式の分類にすぎず、平行してかなり豊富な文様が流行していたことを示すであろう。

Ｄ式の底部はすべてひらき、薄くなり、胴への移行部がはっている。第９図Ⅳがそれで、１（Ⅵ、混貝層、混乱）は底部径9.7cm、厚さ７㎜、上部５㎜、胴部はまるみを帯びて外にはる。２（Ⅰ、焼土中）は底径12cm、厚10㎜、上部５㎜、胴張りはもっとも著しい。いずれも胎土・焼成ともに堅緻で、Ｄ類の土器と全く同じである。Ｉtの焼土中から４箇でて、伴出の土器からみてすべてＤ類である。底部はいずれも同じ形式をとっているが、Ｉt焼土中から出た小片で、底部厚さ12㎜、上部5㎜のもの（図５）もあるから、底部がすべて薄くなったわけではない。また土器の大きさは、最も大きな破片であるＤ第１類１によって復原すると、口径34cmに及ぶ深鉢があったことが知られる。また器形からいうと、Ａ式よりＤ式になるに従って、しだいに浅くひろくなっている。

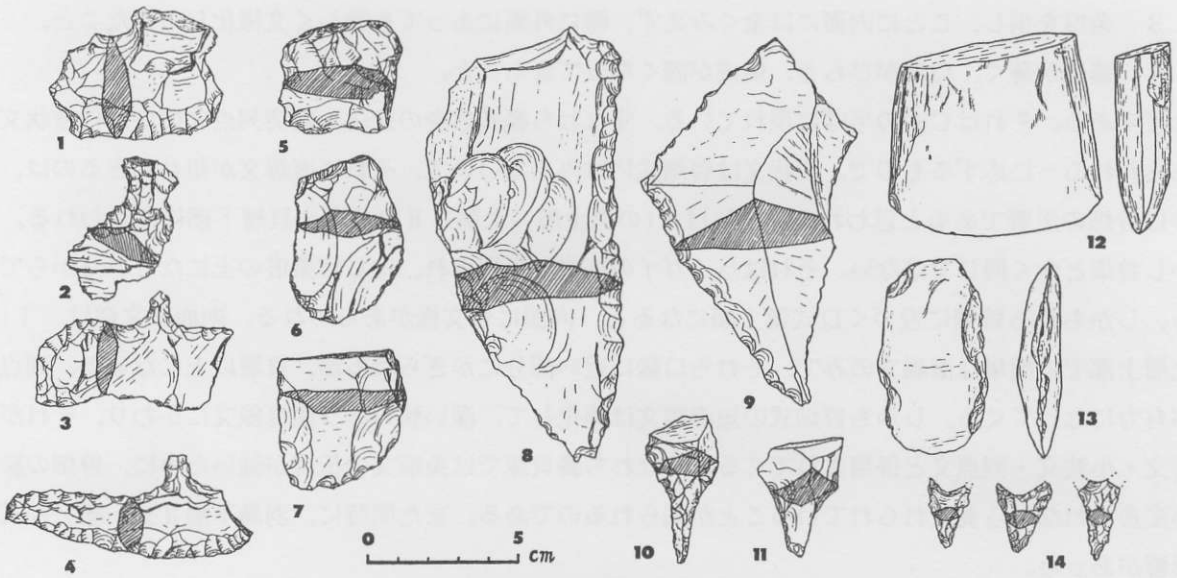
6　石器

轟式に伴う石器は多くはなかった。しかし重要な資料がいくつかえられたので、ここに報告したい。またⅠ・Ⅱ・Ⅵtからは石材の細片、中には打痕をもつものが多く出土したので、ここで石器が作製されていたことは明かである。石器は石匙１個のほかは、すべてサヌカイトである。

石匙１（Ⅱb、黒土層、深93cm）はＡ式に伴うもので、縦型で、刃部の整形のための剥離はもっとも粗雑で、全体がゆがみをもっている。２（Ⅰ、深66cm、混乱）は乳白色をまじえた黒曜石、つまみが斜め上につく縦型で、整形は粗く、右下を欠く。前者にちかい。３（Ⅵ、黒土層、深58cm）はＢ式第１類のうち上層ちかく出土。横型でつまみは小さく、刃部の打面も小さく調整されている。或はＣ式第１類と平行であるかもしれない。４（Ⅴb、混貝層、混乱）も横型であるが、さらに横長く美しく整形されている。これはＣ式以後に伴うであろう。５（Ⅰ、



第９図　轟式土器の底部



第10図 轟式の石器

焼土面)、6 (Ⅵ、黒土層、深50cm余)、7 (Ⅰ、焼土中) はいずれも下部に刃らしい打痕がみえる石器で、石刃もしくは掻器様のものである。いずれもC～D式第1類に伴うものである。

8 (Ⅱ、黒土層、深52cm) は打製の大型石器で、刃は右側にのみある。A～B式に伴う。9 (Ⅱ、黒土層、深47cm) は菱形の石片の三方に簡単な刀をつけた石器で、B式第2類～C式第1類に伴っている。10 (Ⅴb、混乱)、11 (Ⅱ、黒土層) は石錐で、後者は8・9とほとんど同じ層から出土している。

12 (Ⅱ、黒土層、深40cm) は薄く、先がややひらく磨製石斧で、上半が欠失している。刃部は丸みが少ない。D式に伴っている。13 (Ⅵ、純貝層) は両端を磨いた小磨製石斧で、これもD式に伴う。14、石鏃3箇はいずれもⅥtの黒土層上面から出土したが、土器は多くC～D式であるから、それに伴うと思われる。細長で厚く、耳が小さく立っている。

このように、ほぼA～D式の石器の変化がとらえられたと思う。

7 編年と曽畑式土器との関係

轟式土器をA・B・C・Dの4式に分類し、その中をさらに細分したが、それは確実な層位関係によって編年できることが知られた。このうちA・Bが早期縄文であることは、その器形、伴出石器からみて明かである。

またこの編年に1つの示唆を与えるのは、曽畑式土器との関係である。それはすでに発掘当時指摘したところであるが[7]、その後1959年秋に江坂輝彌氏らによって曽畑貝塚が発掘調査された結果、曽畑式の下から条痕文土器が出土することが知られた[8]。轟は曽畑を隔たる4.5kmにすぎず、また轟東南方600mの水田中からも曽畑式が出ており、京大報告や遺物には轟出土の曽畑式土器がみえている[9]。しかし今回の轟の発掘からは純粋な曽畑式は出ず、表面採集の中にもなかった。しかし轟式の中に明らかに曽畑式の影響がみられるものがあることは、上の分類によって知られるのであろう。それはⅠtによると、黒土層上部にはじまり、第4層に及ぶので、その特徴は次のようである。

1 施文具に、今までのハイガイのほかに、ヘラもしくは竹管が用いられてきたこと。

2 従来の条痕文・隆起帯文・刺突帯文のほかに短直線文があらわれたこと。

3　条痕を消し、ことに内面には全くみえず、時に外面にあっても著しく文様化してきたこと。

4　器形が薄く、口縁がひらき、焼成が固くなってきたこと。

などである。それはC式の半ばに現れている。すなわち轟式自身の変化－刺突列点文のほかに波状文があらわれる－に応ずるもので、波状文は曽畑式にはみえないので、それに直線文が組合わさるのは、明かに曽畑の影響であると思われる。それはⅠtの黒土層の上部、Ⅱbtの混土貝層下部にあらわれる。しかし曽畑と全く同じではない。それはハイガイの施文と併用され、はじめ条痕の上になされたからである。しかも最も曽畑に近づくD式第1類になると、内面にも文様があらわれる。内面の文様は、Ⅰt黒土層上部では簡単な直線文のみで、それも口縁に近い部分にかぎられるが、貝層以上になると、列点文が有力になってくる。しかも曽畑式の短直線文は退化して、深い狭いヘラ描直線文にかわり、それが爪形文・小波文・列点文と併用されてくる。すなわち轟貝塚では条痕文の伝統が強いために、曽畑の影響が変形されながら受入れられていることが知られるのである。また同時に、羽島下層Ⅱ式・塞ノ神式の影響があった。

かくして、轟式のうちA式、B式、C式第1類の大部分は縄文早期、C式第1類の一部分、同第2・3類は縄文前期の第1期、D式は前期の第2期とみることができるであろう。それは中期の阿高式にいたって全く転換するが、今のところ轟式から阿高式への移行の過程、阿高の初期の様式はとらえられない。それは轟貝塚の上層がいちじるしく荒らされているためである。しかし口縁部の刻目、ヘラによる施文は、阿高への途をひらくものであろう。かくして九州における縄文早期・前期の一問題が解決にちかづくと思われる。小形山形の押型文の1片がA式の条痕土器の下から発見されていることは、九州の押型文がさらにそれに先んずる起源をもつことを示すものであろう。京大報告等に見える胴部に凸帯をもつ大形の山形押型文土器は、おそらく手向山式であろうが、今回の発掘では出土位層が確認できなかった。

（1961年11月　松本記）

註

（1）「京都帝国大学文学部考古学研究報告」第5冊。

（2）「考古学評論」第1巻第2号および「人類学先史学講座」第11巻。

（3）「考古学」第6巻2・5号

（4）ここから同種の押型文が出ることは、「京都大学文学部博物館考古学資料目録1」（1960年）280頁、017-aの右下参照。

（5）この1類はⅥtでは55～65cmの間から出る。

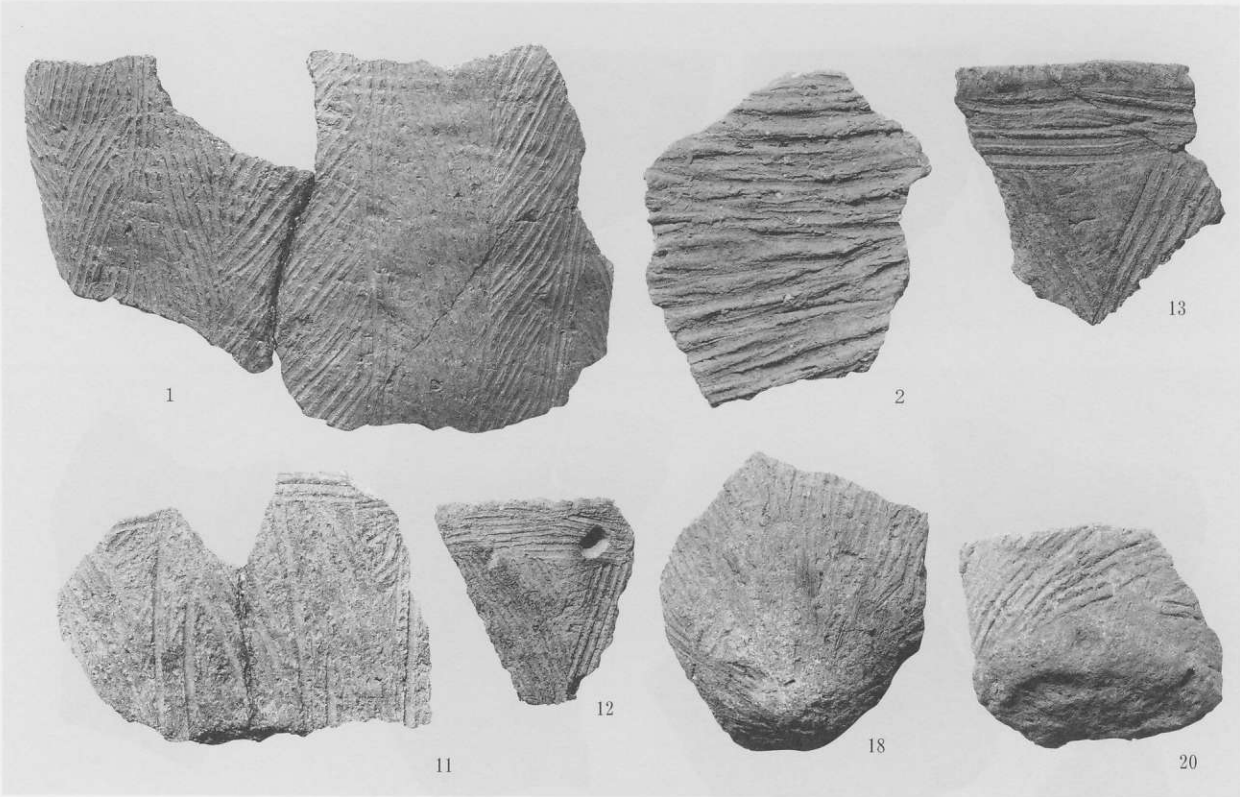
（6）「京大報告」第五冊、「同博物館考古学資料目録1」281頁、017－e－2、017－f。

（7）松本雅明「轟貝塚発掘調査団報告」（熊本日日新聞、1958年9月3・4日）。

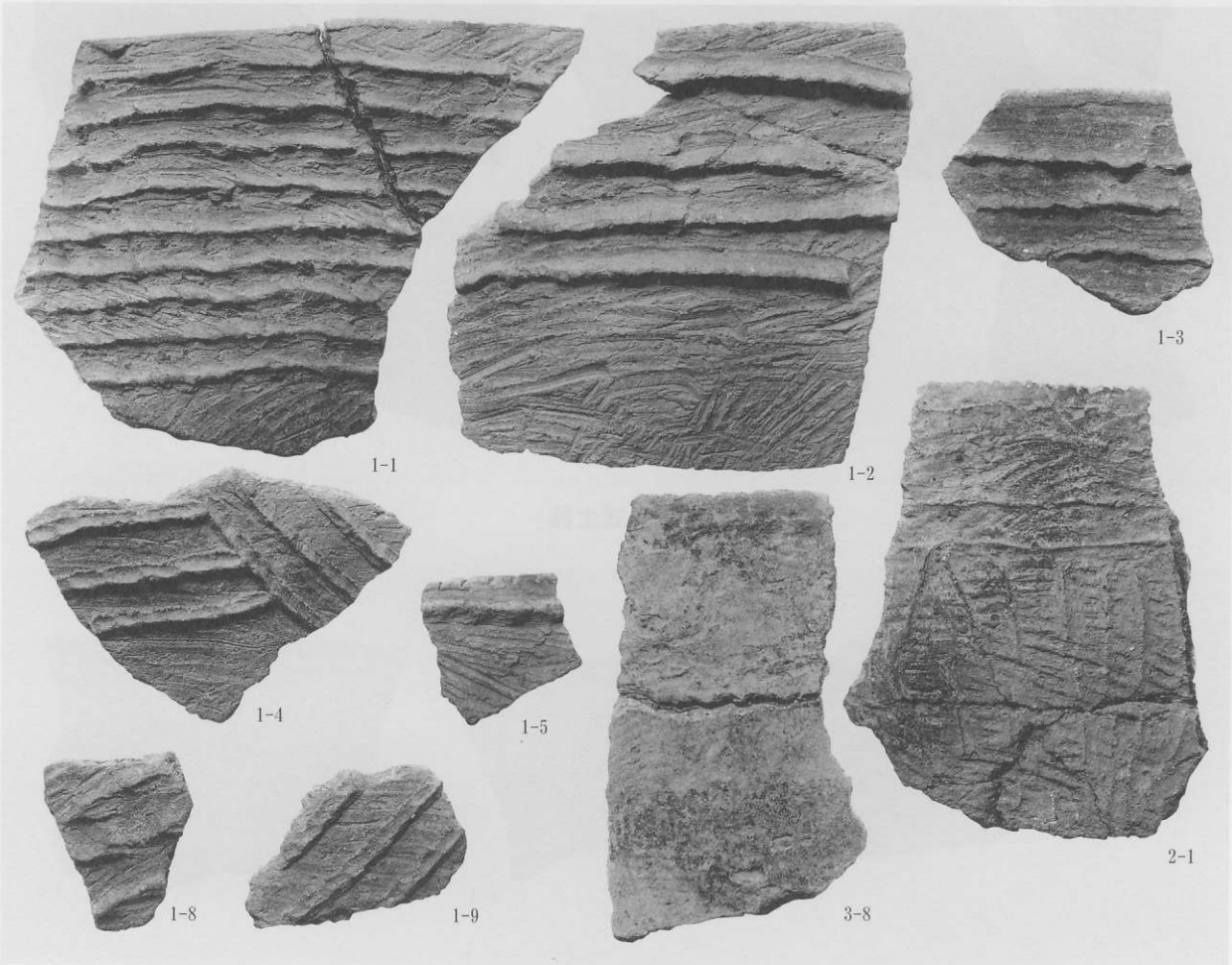
（8）概報は江坂輝彌氏「曽畑貝塚の発掘調査」（熊本日日新聞、1959年11月25～28日）。

（9）「京大博物館考古学資料目録1」280頁、017-b。

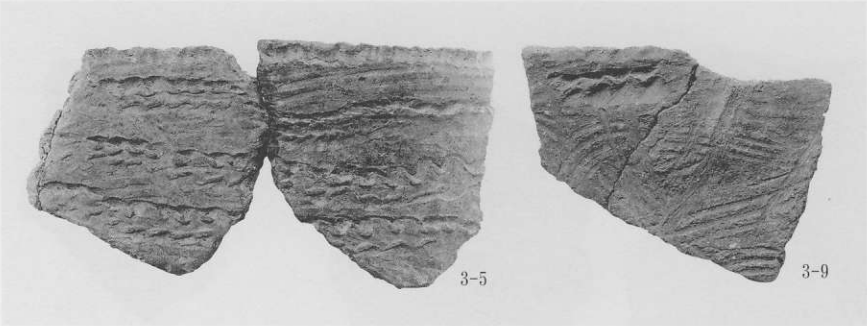
本稿を、本稿の完成をまたず1961年8月26日に逝去された、調査隊長、肥後考古学会長小林久雄先生にささげる。



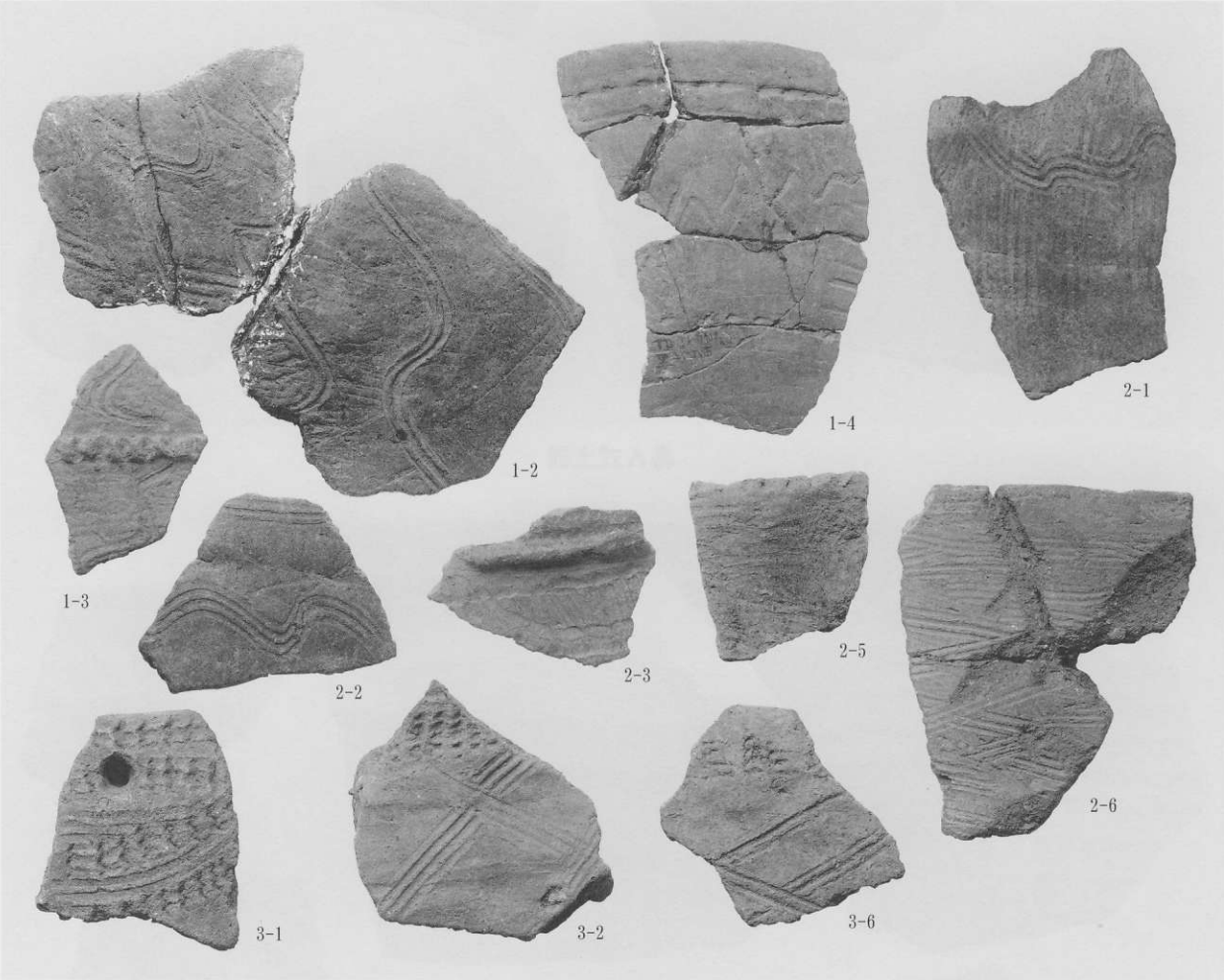
轟A式土器



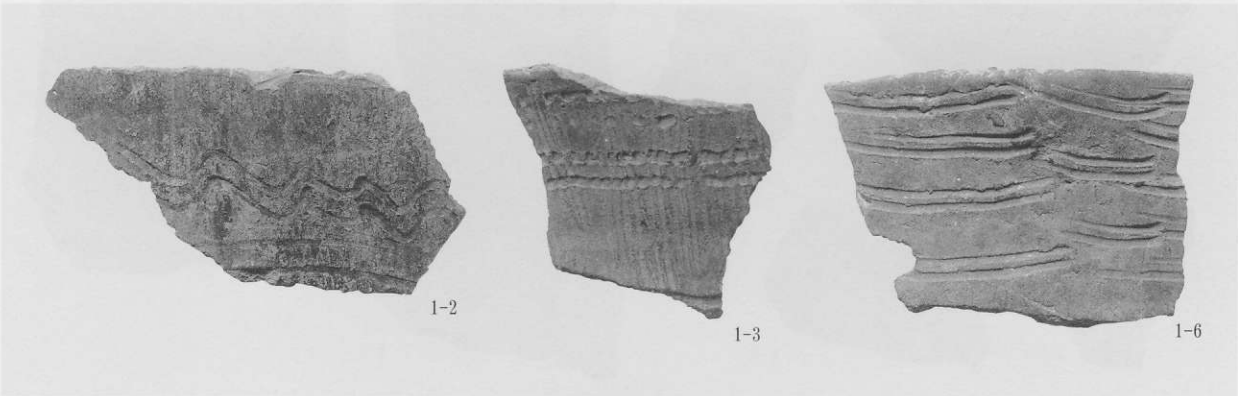
轟B式土器



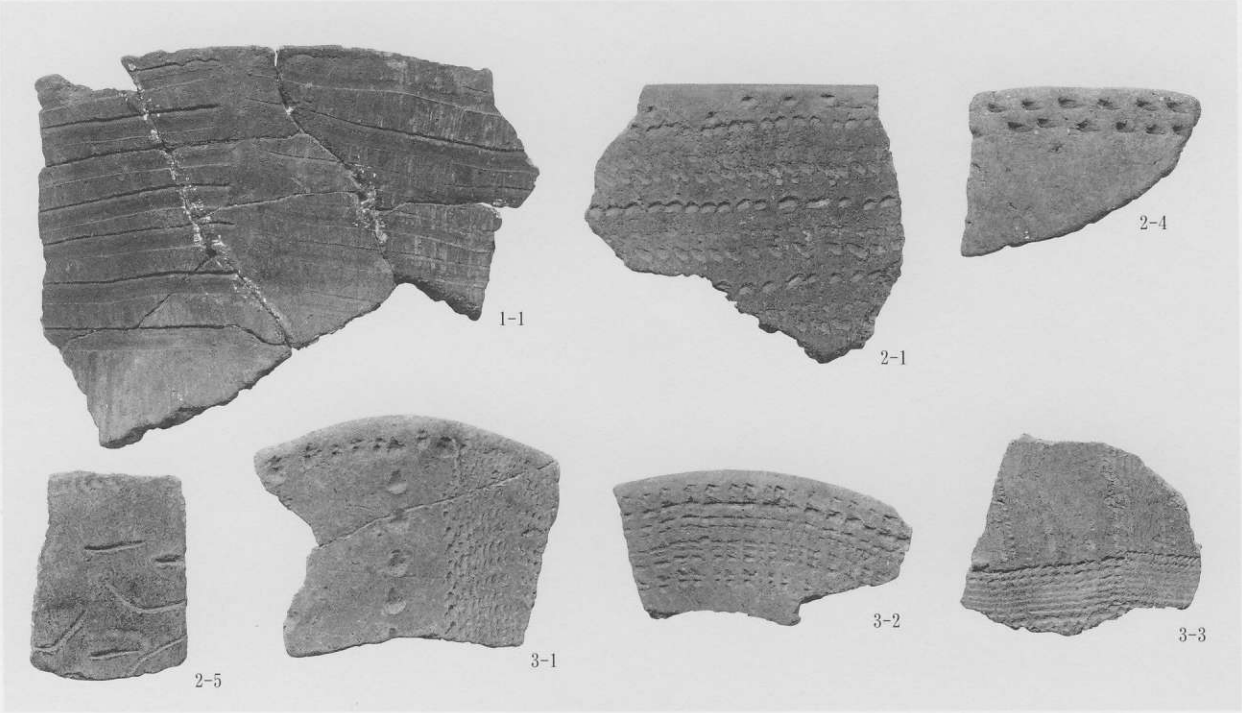
轟Ｂ式土器２



轟Ｃ式土器



轟Ｄ式土器１



轟D式土器 2

2 熊本県轟貝塚出土の打製靴型石器について

江坂 輝彌

1966年３月、筆者が中心となり熊本県宇土市轟（とどろき）に所在の宮ノ荘貝塚を発掘調査した際、筆者らがＤ地区と名付けた地区の、縄文文化中期の阿高（あたか）式土器を出土する貝層中から、図１左下に示したような打製石器が発掘された。

右下のものもＤ地区からの出土品である。なお同様な形のものが、今回の発掘調査で阿高式土器の文化層から、他にも数点出土している。

この種の打製石器の国内における出土例は、小生寡聞のためもあるかと思うが、ほとんど知られていないのではなかろうか。中国浙江省杭州付近の老和山、太湖南岸呉興付近の銭山漾両遺跡からは、図２の１、２に示したような類似した形の打製石器が出土している[1]。

一般に靴型斧というと、東南アジアの東山文化に伴う青銅斧をさしており、この青銅斧とは全く関連性がないものとみてよいのではなかろうか。

図１の左下の石器は高さ15.5センチ、最大幅16.5センチ、厚さ最大部で3.2センチほどあり、石質は安山岩質の岩石である。図１上写真左下の石器の尖った右端（下写真は同一物の背面、従って左端）は打裂面が磨滅している。これは使用痕と考えられる。上部を手のひらで握って、尖端を鶴はしのように土につきさして、土を掘り起こす土掘り具ではなかろうか。

図１右下のものは高さ11センチ、最大幅11.5センチ、厚さ最大部2.2センチほどの大きさのものであり、石質は安山岩質の岩石である。左下のもと同様に尖端部は磨滅し、上部を握って鶴はし状に土掘り具として使用したものと考えられる。

図１上の写真はかつて乙益重隆氏が、十字形石器として発表したものと同型のもので[2]、十字型の一端を欠いている。この打製石器は長径15センチ、厚さ1.6センチほどの大きさで、下段の石器と同質の安山岩質の岩石でつくられている。この石器も十字の残された三つの先端が、使用のため磨滅している。この種石器も、各先端を交互に土掘りに使用したものであろうか、直角の一端を握り、直角一端を土にさしこむと、上段写真の靴型打製石器同様、鶴はしのように使用できるわけである。

今回の発掘調査で、以上に記した二種の打製石器が、西九州地方に広く分布する縄文土器文化中期の、阿高（あたか）式土器に伴うものであることを確認したことは一つの大きな収穫であった。

十字形石器は乙益氏によって、阿高式土器の退化的なものか、後期末の御領式土器に伴うものではないかとされ、熊本県人吉地方に約五例、同県菊池郡泗水村に一例、大分県直入郡入田村（現在竹田市に編入）に一例の出土例が報告されている。

筆者は愛媛県上浮穴（かみうけな）郡美川（みみかわ）村上黒岩（かみくろいわ）岩蔭遺跡の第一次調査の折り、同郡久万町の、当時、愛媛県立久万高等学校に在職された松本重太郎氏蒐集の資料を拝見したのであったが、その中に久万町笛ヶ滝遺跡発見という十字形石器が二点あった。

これも図３右、中央の写真に見るように、先端部は使用のためか、磨滅していた。また一点、図３のように、三頭のものも見られた。笛ヶ滝は縄文土器文化早期の押捺文土器と、後期中葉から晩期の時期の土器を出す遺跡であり、これらの石器は後期か晩期の土器に伴ったものと考えられる。

以上の事実で、十字形石器は縄文土器文化後期に入ると、その分布圏が四国地方にまで拡がることがわかり、恐らく今後、山口・広島県下などの後期の遺跡からも発見されるのではなかろうか。

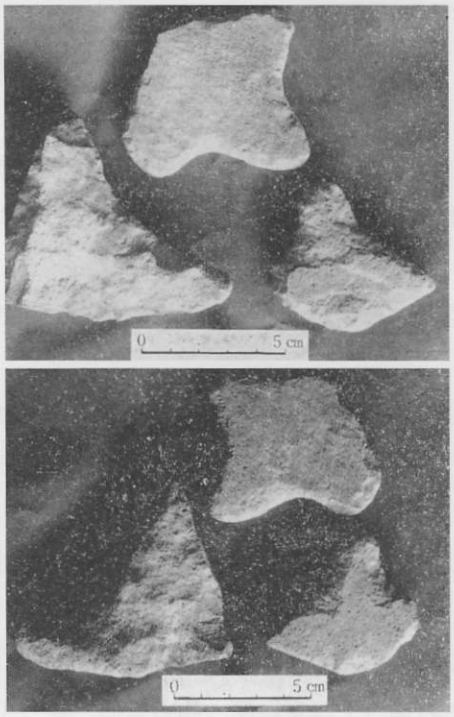


図１　熊本県宇土市轟貝塚出土、打製靴型石器と十字形打製石器

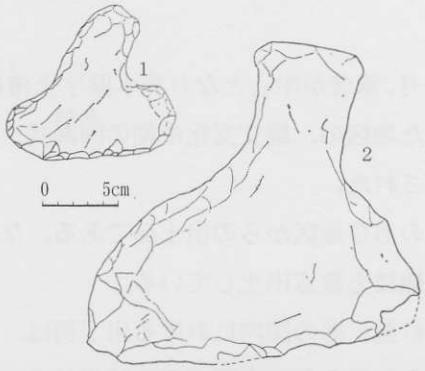


図２　１．浙江省銭山漾遺跡出土、打製石器
２．老和山遺跡出土、打製石器

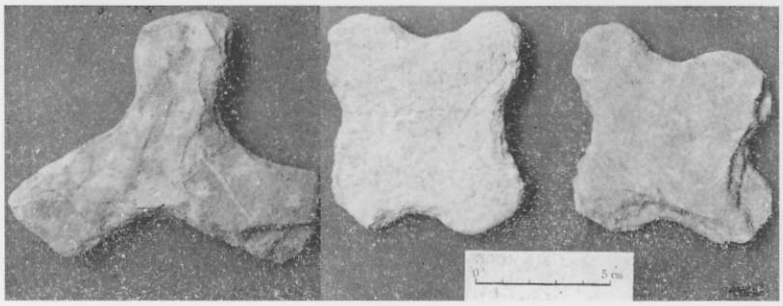


図３　愛媛県上浮穴郡久万町笛ヶ滝遺跡出土、十字形打製石器

縄文土器文化中期に、関東地方西部から中部地方にわたって多くの打製石器が出土し、これが土掘り具であり、食用植物の芋、球根類の採集用具であるとの考えは、ほぼ誤りないものと推察される。そして一歩進めて食用植物の球根類の植付け、植物栽培用の原始的な農耕具ではないかとの推論もされてきている。しかしこのような打製石器類が、関東地方西部から中部山岳地方の限られた地域にのみ多出するもので、他地域にはあまり見られないという事実が、中期に原始的な農耕が始まったのではないかとする仮説に対し、大きな障害となっていたわけである。ところが西九州地方の、縄文土器文化中期の阿高式土器に、土掘り具と考えられる数種の打製石器が存在することが明らかになると、自から考え方も変ってくる。以上の事実だけで入墨、滑車型耳飾などとともに、縄文土器文化中期に、江南地方から山芋・水芋・里芋などの類が渡来したであろうという推定が立証し得たとは思わないが、この発見は将来の研究に重要な示唆を与えたように考えるのである。

浙江省杭州付近発見の、前記した類似の形の打製石器は、中国の学者は石包丁型磨製石器（いわゆる石包丁）と同様に、石刀と称呼しているが[1]、同形の刃部が磨製されているものは、柄の付いた穂づみ具で、石包丁型石器と同一用途のものと推察されるが、図２に示したような打製石器は土掘り具ではな

かろうか。銭山漾遺跡からは、周辺竜山文化より古い時期の遺物が出土しているようであり、注意を要する。浙江南部から福建・広東・広西省方面の古期新石器時代文化の遺物が明らかになると、稲作以前の植物栽培の文化が、西北九州地方に縄文土器文化の時代のいつ頃渡来したかという問題も、比較的容易に解明されるのではなかろうか。

打製靴型石器が西九州地方で縄文土器文化中期の時期にあらわれ、これが鶴はし状に使用する土掘り具であるらしいという事実は、注意すべき新発見であるが、今日判明したのは轟貝塚における数例のみであり、今後西九州地方における他の阿高式土器出土遺跡における出土例、発見状況なども考慮し、また周辺大陸における全く同型の打製石器の出土例の有無などを明らかにしない限り、これ以上の推考も困難であり、今後の調査研究の発展にまちたい。

（1）浙江博物館編『浙江新石器時代文物図録』新華書店　1958年。
（2）乙益重隆「南九州における特殊石器」『上代文化』第15輯、昭和17年。

3 古病理学的にみた日本古人骨の研究

小片 丘彦

疾病は人類がはじまって以来当面してきた大きな問題であった。いつの時代においても人は疾病に強い恐れをいだき、同時にその対策に心をくだいてきたが、近代医学の発展とともに病態が詳しく解明されるようになり、予防や治療の方法が確立されると、かつて蔓延した疾病であってもほとんど絶滅したかにみえるものも出てきた。しかし、一方では新種の職業病や食品の公害、農薬、高分子化合物の中毒など新しく登場したものもあり、この意味では病態はその時代の社会的一面を反映しているということができる。

遺跡から出土する人骨の研究は、単に当時の人の身性を知るためばかりでなく、考古学、民俗学など関連分野の学問と相携えて形質学的見地からその時代の社会的背景を探索することが目的でもあるが、その手段として古病理学的な検討はきわめて有効であると思われる。

著者は、新潟大学医学部第１解剖学教室保管の縄文時代から古墳時代に至る人骨にみられた病変や損傷の中から、いくつかの例を取り上げて考察を加えてみたが、これが、日本人という集団が過去においてどのような疾患を持っていたかという問題とともに、その背景にどのような社会生活があったかという問題を解明するためのひとつの基礎資料となることを望んでいる。

Ⅰ．食人を思わせる縄文前期人骨群

栃木県宇都宮市大谷寺洞穴遺跡は昭和40年３月から４月にかけて辰巳四郎・大和久震平・塙　静夫氏らによって調査されたが、その際縄文時代前期に比定される層から諸磯式土器を伴って散在する人骨の細片が見いだされ、さらに同一層位で約３m離れた位置から少なくとも５体分の人骨片が無秩序に集積された状態で発見された。

これらの人骨は各骨がそれぞれ解剖学的な相互位置関係を保っていないばかりでなく、保存が非常に良いにもかかわらず手骨、足骨の一部を除いて完全なものはなく、すべて破片であり、そのうえ失われた部分が多い。

復原したところ、これらは女性と思われる成人骨３体、ほぼ４才の幼児骨１体、生後数か月の乳児骨１体であることがわかったが、３体分の成人骨は、各骨が解剖学的な相互位置関係を保っていないこと、残されている骨が少ないことなどから、個体の識別については、骨の形態上の特徴によって、上・下肢骨などのように同一個体の左右であるといった推定は部分的には可能であるが、どの頭蓋とどの肢骨が同一個体であるかというような判定は正確にはできない。

残されている部分は主として頭骨と上・下肢骨であり、椎骨、肋骨、寛骨はことのほかわずかである。

この頭骨、上・下肢骨には、利器や鈍器によると思われる損傷が随所に認められるほか、上顎洞炎、変形性関節症、脊髄性小児麻痺かと思われる下肢の病変などの痕跡が見いだされた。

このことは、縄文時代前期に食人が行なわれたことを疑わしめ、同時に、それに関連して食人の対象となった人たちが著しい疾患の罹患者であったことを示している。

１．利器による損傷

１）条痕

利器によると思われる創痕のひとつに骨の表面に刻まれた条痕がある。きわめて細く浅いもので、主

として次の各部位に見られる。

頭蓋冠の外面：大谷寺３号頭蓋（熟年女性）の前頭鱗、頭頂骨、後頭鱗には幅0.1～0.2㎜程度、長さ約５㎜のものから約30㎜にわたる連続する条痕がある（写真１）。条痕は１本のもの10数本が密集したものなどさまざまで、それぞれ直線的であり蛇行しているものはない。走向は頭蓋の矢状方向にほぼ一致しており、互いに平行のものが多いが、なかには平行でなく他の条痕と交叉しているものもある。また、縫合を越えて他の骨にわたっているものもある。条痕の両端は明瞭な断端で終るものは見られず、いずれもしだいに細く浅くなり、やがて消失している。骨の表面にある微細な凹凸を越えて走るものは深さが一定でなく、骨の凸部では深く刻まれ凹部では浅い。また、反応性の変化は認められない。

すでに鈴木[1]は愛知県伊川津貝塚をはじめとする石器時代人の大腿骨、上腕骨、鎖骨、腰椎、肩甲骨、肋骨に同様の直線的創痕を見いだしくわしく論じている。それによると、この直線的創痕は偶発的なものではなく人工的なものであるとし、創痕のある骨がすべて破片だけからなる雑骨中から発見されたこと、また当時食用にされた獣骨にも同様の創痕が見られることなどから、食人の結果生じたものであろうと述べている。

本例の条痕もこの伊川津貝塚などの場合と同様であり、耕作や発掘の際の用具によって作られた傷でないことはもちろん、生理的な血管溝でもなく、条痕がかならずしも平行でないことや２本づつ対になっていないことから、土中にある間に自然に生じた砂礫による擦痕や齧歯類の動物の咬痕も除外できる。したがってこの条痕は人為的な切創であり、位置的にみて帽状腱膜を剝離する際に生じたものと思われる。条痕の幅が0.1～0.2㎜であるところから、用いられた道具はきわめて鋭利な刃をもつ石器であろうが、骨表面の微細な凹凸を越えて走る条痕が凸部で深く凹部では浅いか消失していることからみて、たとえば針先のような先端をもつものではなく、少なくとも刃渡りのある利器であったと考えられる。また、かみそりのような鋭い刃をもつ利器を刃渡りと直角方向に用いて表面をこそぎ取るようにした場合、刃こぼれがあると、表面に平行な浅い溝ができることがある。このような時には多少とも表面がけずり取られ、溝の幅が不同で、溝の縁が鋭く切り込まれることはないから、この条痕の例にはあてはまらない。

左大腿骨頸：女性と思われる成人の左大腿骨頸の前面には、長さ３～９㎜、幅0.2㎜ほどの条痕が数本見られる（写真２）。互いにほぼ平行して走り、頸の長軸に直角の方向、つまり頸をとりまく方向をとっている。反応性の変化は見られない。これも頭蓋冠に見られた条痕と同様の起源のもので切創であろう。条痕のある位置は本来股関節の関節包の中にあり、関節包が腸骨大腿靭帯によって補強されている部位にあたる。さらにその前方には大腿直筋や腸骨筋があるが、この条痕の位置からみて大腿骨を股関節で離断する作業が想像される。

２）切痕

ここに述べる切痕とは骨面に切り込まれた創痕というほどの意味である。すでに述べた条痕も骨面に切り込まれたものではあるが、その性状は長さに比して幅や深さきわめて狭く浅いので便宜上区別した。

大谷寺人骨に見られた切痕は２種類ある。

その１種は、成人女性のものと思われる２個の右肩甲骨の肩甲棘の基部で、肩甲棘の外側の辺縁が肩甲頸に向って湾入する部位に見られる（写真３）。２例とも辺縁に対して直角方向に刻まれた浅いＶ字状の切れ込みで、それぞれ５～６個づつが集団をなしているが、これらは互いに平行なものが多い。長さは約３～７㎜、深さは0.5～１㎜内外で、Ｖ字状の切痕のもっとも深い部分は直線状をなし、側壁は

滑らかではなく破砕された骨質の面をそのまま見せている。この破砕面の広がりは幅５㎜程度で、隣接する切痕の破砕面と重複しているものもある。これはちょうど切れの悪い鋸で挽いたために刃の当った部分の両側の木質が破損した場合に似ている。切痕の付近には同方向に走る先述の条痕が見られる。

この切痕は２本づつ対をなしていないし、もっとも深い部分が直線をなしていて単に不定の凹みでないことから、齧歯類や食肉類の動物による咬痕ではない。また、この切痕に伴って先述の条痕が見られること、２個の右肩甲骨の例がそれぞれほぼ同じ部位に同じような切痕として存在することから、これはある目的をもってつけられた人為的な創痕であると思われ、先述の条痕と同一の手技による動作の程度の強いものか、または鋸に類した道具による切創と考えられる。

この部位は肩甲棘をはさんで上下に棘上筋と棘下筋が横走し、これらの筋の停止腱は肩関節包に癒着するが、この切痕は腕を肩関節から離断するため棘上筋、棘下筋を切断する際に生じたものと思われる。

切痕の他の１種は、大腿骨体前面に見られるもので、骨体に対して斜めに切り込まれた創痕である。

成人女性のものと思われる左大腿骨の上約1/3の部位で骨体の前面に、長さ約14㎜、底辺の幅約10㎜の先端を上に向けた舌状の創面が見られる（写真４）。創面は平坦で滑らかであり、側方より見ると、前上方から骨体に対して約10°の角度で始まり、緻密質を削いで直線的に深さを増し、舌状面の底辺の部分では骨表面から約３㎜の深さをもって終っている。この底辺より下方は骨体が破損しており、破片が失われているので創の終端がどのようになっているのかうかがうことができない。しかし、この舌状の創面の底辺内側に接する破片は、嘴状の先端をそのまま残しているので、この創面の終端はさらに下方に延長していたとは考えられない。

この部位は大腿四頭筋のうちの中間広筋が起始するところであるが、この切痕は中間広筋をはぎ取る目的か大腿骨を打ち割る目的で骨体の上方やや前方から力強く打ちおろされた利器によって生じたものと思われ、用いられた利器はいくぶん刃渡りがあり重量もある石器であったと考えられる。

２．鈍器による損傷

鈍器によると思われる損傷は頭蓋をはじめ肩甲骨、寛骨、上肢・下肢の太い長骨に見られる。

大谷寺３号頭蓋：頭蓋冠の外面にすでに述べた条痕をもつ熟年の女性のものである。保存状態は良好であるがかなりの欠損がある。つまり前頭骨では眉間、鼻部および左眉弓を欠き、前頭鱗は両側の部分をかなり失ってその頭頂縁は中央約1/3が残っているだけである。頭頂骨は左右ともに前頭縁をまったく欠いているので前頭骨とは直接連絡させることはできず、右蝶形骨の側頭面を介してわずかに連絡が保たれている。前顔部で保存されているのは右頬骨、左右上顎骨とそれに続く左頬骨の一部、左右口蓋骨であるが、これらは前頭骨の右頬骨突起によって前頭骨とわずかに連絡している。頭蓋底は後頭骨の左右外側部を欠き、また右錐体は根部から失われている。

このように大谷寺３号頭蓋は頭蓋冠のかなりの部分を失っているが、頭蓋冠の部分の骨の破損端はいずれも鋭利ではなく、ビスケットを折ったような断面を見せている。

特異なのは頭蓋底を環状にとりまく破損線である（写真５）。この破損線は右大翼の側頭下稜に始まり、右側頭骨下顎窩の内側から右錐体の基部を通って右乳様突起を破壊し、後頭骨の項平面の下項線付近を横走したのち、右側と同様に左側の側頭骨乳突部から左外耳孔の上を通って鱗部の基部、左大翼の側頭下稜付近に至るもので、その破損端は外板より内板方向に向って広がり、鱗状をなしている。

この鱗状に剝離したような破損は、後頭骨項平面中央の部位でことに著しく、これによって内後頭隆起は削ぎ取られたような状態となっている。また、側頭骨の錐体は右側は失われているが、両側とも基

部から完全に折り取られている。乳様突起も両側とも根部まで破壊されて乳突蜂巣を露出している。

元来、後頭鱗の中央部は外面には外後頭隆起、内面には内後頭隆起を中心とする十字隆起があるために骨質が厚く、自然状態では破損しにくい部分である。この部分が外面から内面に向って剝離されたように鱗状に破損しているのは、骨質がまだ新鮮で有機質が十分に存在していた時期にこの部位に外方から強い鈍力が局所的に働いたことを示している。

このような外面から内面に向かう鱗状の剝離が、頭蓋底を環状にとりまく破損線の全周にわたって見られたことは、両側の錘体が根部から離断されていることや、乳様突起の破壊とあいまって、頭蓋が新鮮な時期に頭蓋底に対して外部から内腔に向かう強い鈍力が局所的に作用したことを物語っている。

埋葬後の土圧や落盤などによる破損も考慮せねばならぬが、この場合、各骨の保存が良いにもかかわらず右錐体をはじめとして失われた部分が多いことや、すでに述べた頭蓋冠外面の人為的な条痕を考え合わせると、この頭蓋底を環状にとりまく破損線にはある意図が感じられる。つまり脳を取り出す目的で、頭蓋を底を上にして据え、鈍器を用いて頭蓋底を外縁に沿って破壊したと考えることはできないであろうか。

大谷寺５号頭蓋：成人の女性と考えられる頭蓋の一部である。

乳様突起を欠く不完全な左側頭骨と後頭乳様縫合で連絡する後頭鱗の中央部で、左頭頂骨乳突角の一部も付属している部分であるが、骨の保存がきわめて良いにもかかわらず頭蓋全体から見ると欠損した部分があまりにも多い。上記のように左側頭部から後頭鱗にかけて帯状に連なった部分が残されているが、これを構成するほとんどの破片の破損端は魚鱗状に剝離された状態を見せている（写真６）。帯状に残された骨の下縁は、左側頭骨の外耳孔付近から、根部で破壊された乳様突起を越えて後頭鱗の項平面中央付近を横走する線上にあるが、これは前述した大谷寺３号頭蓋の頭蓋底をとりまく環状破損の線とほとんど一致する。また、この破損端も３号頭蓋と同様に外板から内板に向って魚鱗状に剝離しているほか、錐体が基部から鋭く折れていることや乳様突起が根部から破壊されていることは、３号頭蓋の場合とまったく同じである。

帯状に残された骨の上縁は、左側頭骨鱗部から後方に頭頂骨の一部を経て後頭骨外後頭隆起の約25㎜上方に至るやや不規則な線であるが、この破損端も魚鱗状に剝離している。ただし、この縁の剝離は下縁とは逆で、内板から外板に向って広がっている。

３号頭蓋で述べた推測が当っているとすれば、この５号頭蓋の場合は頭蓋底を上にして頭蓋を据え、まず頭蓋底の周辺を鈍器で破壊し、次いでこの帯状の部分に上外方から打撃を与えた結果と考えられる。この場合、頭蓋底は水平位をとるから魚鱗状の破損端は外板より内板に向って広がり、頭蓋側面は垂直位をとるから、次ぎの上外方からの打撃によって内側に折れ込む際には内板から外板に向って広がる魚鱗状の破損面が作られたものと思われる。

肩甲骨および寛骨：肩甲骨や寛骨の破損に見られる特徴は、大きな破片がないこと、破損端が複雑で鋭利なこと、寛骨の破片はことのほか遺存が少ないことがあげられる。

これを土中にある間の自然の力による破損であるとするならば、破片の保存が非常に良く破損端が鋭いまま温存されているにもかかわらず、残された部分があまりにも少ないことは不可解である。

肩甲骨と寛骨は上肢帯・下肢帯に属す骨で、それぞれ胴骨と自由上肢骨・自由下肢骨とを連結しているから、強く大きな筋が停止したり起こったりしているが、骨皮質が薄いので鈍力によって複雑かつ細片に破壊されるものと考えられ、残された破片がわずかなのは、骨の広い面から筋性に起こる大きな筋

を分離する際に、破壊された骨片が筋に付随して四散してしまったためと思われる。

上肢・下肢の太い長骨：自由上肢骨・自由下肢骨は手骨、足骨の一部を除いて多かれ少なかれ破損しているが、このうち特に上腕骨、大腿骨、脛骨には特異な破損が見られる（写真７）。破損線は主として骨幹の長軸に沿って走るが、複雑で、破損片は紡錘状、長刀状、嘴状であり、破損縁は鋭く、破損面は平滑でラセン状を示すものが多い。

鈴木[2]がすでに指摘しているように、骨が死後相当時間を経過して有機質が多少消失した後、土中で自然力により破損した場合は、長骨についていえば、破損線は骨幹の長軸に対して直角方向か直角に近い斜方向をとることが多く、破損面は粗雑でいかにももろい感じを受ける。

大谷寺人骨の上腕骨、大腿骨、脛骨の例は、破損線の方向、破片の形、破損縁および面の性状から、骨が新鮮で有機質に富み弾力をそなえていた時期に、その弾力性を上回る外力が作用したために生じた破損であると思われる。

鈴木はさらに貝塚から出土した獣骨片についてくわしく検討し、その破損の状態から、骨髄食を目的とした人為的な破損であることを結論づけると同時に、人の新鮮な長骨の骨幹に鈍器で打撃を加え、実験的に獣骨の破損と同一の破損が起こることを実証した。

大谷寺人骨の上肢骨と下肢骨には、上腕骨、大腿骨、脛骨に限って上記の特異な破損が見られ、橈骨、尺骨、手根骨、中手骨、指骨、腓骨、足根骨、中足骨、足の指骨には同様の破損は見られなかった。

自然の力が上腕骨、大腿骨、脛骨だけに選択的に働くことはないから、この特異な破損は、破片のかなりの部分が失われている事実とあいまっていっそう人為的である可能性を強める。また、上腕骨、大腿骨、脛骨は上・下肢骨のうちでことに太い長骨であるが、この３種の長骨に限って特異な破損が見られ、ほかの細い長骨には認められなかったことは、細い長骨が特異な破損の対象とならなかったことを示すもので、骨髄食を考えることによってはじめて納得することができる。

さきに述べた３号頭蓋の頭蓋底をとりまく破損は、脳を取り出す意図を疑わせたが、骨髄食とともに脳も食用としたのであろう。

このほか、頭頂部だけが残されている大谷寺４号頭蓋（成人女性）の右頭頂骨に火によって焼かれた痕跡があり、骨体の上半分だけが残されている右大腿骨も黒かっ色に変色して焼かれた痕跡を残している。

以上の所見を総合すると、この大谷寺洞穴から無秩序に集められた状態で出土した５体の人骨が食人の対象者であったことはほとんど確実である。

３．上顎洞炎

大谷寺３号頭蓋の利器および鈍器による損傷についてはすでに述べたが、この頭蓋の右上顎洞に病的な所見がある。

上顎洞を上顎骨の頬骨突起の方向に先端を向けた三角錐に見立てると、右上顎洞は、底にあたる内側壁が破損して失われているほかは完全に保存されている。

この右上顎洞の内面には、粗雑で多数の小孔をもつ凹凸不平の骨増殖が全域にわたって見られる（写真８）。そのため壁の厚さは２～４㎜ほどである。後壁中央から前壁下部に向って斜めに走る幅約1.5㎜、深さ１㎜足らずの溝が見られるが、これは上顎骨体側頭下面の歯槽孔と連絡しているから、上顎神経の後上歯槽枝と後上歯槽動脈を通す歯槽管である。上顎洞の後壁下部には、粗雑な洞内面から石筍のように突出した数個の骨増殖があり、その直前の凹みの底にある小孔は歯槽弓の最後部と連絡している。ま

た、粗雑な上顎洞内面にある多数の小孔は、上顎骨体の外面にある多数の小孔と連絡がある。

右上顎骨体の外面は本来の骨表面に見られるような光沢を失い、ことに前面と側頭下面は骨が萎縮してちりめん状である（写真９）。この骨萎縮のため、前面は眼窩下孔より下部が母指頭大の凹みとなり、側頭下面も上顎結節の部分が凹んでいる。また、この上顎骨の前頭突起の基部、つまり上顎骨体から前頭突起に移行する部位に分離が見られ、骨縫合のような状態になっている。

これに対し、左側の上顎洞は一部破損しているが、洞壁の厚さは１㎜以内、内面、外面ともに平滑で上顎骨体の前面にも側頭下面にも骨萎縮はなく、したがって右側に見られたような陥凹も見られない。また、保存されている前頭洞と蝶形骨洞には特に変化は認められない。

以上の所見は、右上顎洞に化膿性炎症のあったことを示すもので、洞の粘膜の炎症が上顎体の骨炎をひき起こし、骨壁を萎縮させると同時に洞の骨膜下に骨を新生したものと思われる。上顎洞の内外を連絡する小孔は瘻孔であろう。骨萎縮が前面の顔窩下孔の下や側頭下面の上顎結節付近に強いことは、その部の生理的な孔を通路として炎症がいち早く外面にまで及んだためかもしれない。また前頭突起の基部に見られる分離は、病変部と健康部の境界に生じた分離であろう。

石川ら[3]によれば、上顎洞炎の原因には鼻腔の炎症から波及するもの、他の感染巣から血行性に起こるもの、歯の病巣から波及するものがある。

この歯に由来する上顎洞炎は歯性上顎洞炎とよばれるが、ことに大臼歯の根は上顎洞底に近接しているため、その根尖性歯周炎や進行した辺縁性歯周炎の深い歯周嚢から感染が上顎洞粘膜に波及しやすいという。

この頭蓋の上顎右側の歯は、切歯から第２大臼歯に至るまでの全歯が歯槽に植立しているが、第３大臼歯は存在せず、その部の歯槽は萎縮して閉鎖している。著者[4]の観察では、縄文時代人における上顎の第３大臼歯の先天性欠如は、男女計85例のうち７例（8.24％）で、この時代には第３大臼歯が萌出しているものが普通であることや、この頭蓋の上顎右第２大臼歯の遠位には十分なゆとりがあること、左第３大臼歯は存在していること、さらに右第３大臼歯の歯槽に相当する部位に閉鎖した歯槽のなごりとみられる凹みがあることから、かつてこの部位に第３大臼歯が存在していたことは確実であるといえる。

隣接する第２大臼歯は咬耗がBrocaの３度で、咬合面は遠位に向って斜めに咬耗しており、同時に歯軸は近位に傾いて第１大臼歯との隣接面はかなり摩耗しているが、これは対応する下顎の第３大臼歯によって起こされた変化で、上顎の第３大臼歯がかなり以前に脱落したことを示している。この部位にある歯槽のなごりとみられる凹みには底に小孔があり、この小孔はすでに述べた上顎洞の後壁下部にある小孔に通じている。

以上のことから、この上顎洞炎は、右第３大臼歯に歯周炎があり、根尖から炎症が上顎洞の粘膜に波及した歯性上顎洞炎であったと推定される。

４．変形性関節症

利器や鈍器による損傷のある大谷寺人骨の上・下肢骨のなかに変形性関節症と思われる所見をもつ肘関節と膝関節があった。

１）変形性肘関節症（写真10）

女性と思われる成人の左肘関節で、関節を構成する部分は上腕骨下端の滑車の大部分を破損によって失っているほかは、橈骨、尺骨ともに上端が保存されている。

上腕骨は滑車の大部分を失っているが、一部残された滑車のうち小頭に近い部分に表面の滑沢な摩耗

部分がある。また小頭の外側縁には不規則な骨縁堤があり、このほか肘頭窩は表面粗雑な骨増殖によって浅くなっている。

橈骨頭には次のような所見がある。つまり、上関節面の前内側縁に骨質が摩耗して滑沢となり内部の海綿質をのぞかせている三日月形の部分があるほか、関節環状面の下縁から下方に延長したろうそくの燃え溶けたような状態の骨増殖が全周にわたって見られる。この骨増殖は全周に均一ではなく、前内側に大きく下垂し（約９㎜）、後外側では小さい（約３㎜）。しかし、これらの関節面には癒着や強直の痕跡はない。

尺骨の上端にもいちぢるしい所見がある。滑車切痕および橈骨切痕の外縁をとりまいて嘴状に突出した粗雑で不規則な強い骨増殖がある。骨縁堤である。また、滑車切痕の前内1/4の関節面は、骨質が摩耗して滑沢な凹面となり、海綿質を見せているが、詳細に観察すると10本をこえる矢状位の溝が平行に走っているのがわかる。これは上腕骨滑車との強い圧迫摩擦によって生じた関節面の摩耗で、この部分の軟骨はすでに摩滅して消失してしまったことを示している。滑車切痕の残りの部分にはこのような摩耗はないが表面は粗雑である。

２）変形性膝関節症

下肢骨の遺存は非常に少ないが、ことに膝関節を構成する部分はほとんど保存されていない。その中に完全な左膝蓋骨１個と約20㎜四方の大腿骨顆関節面の破片があり、変形性膝関節症を疑わせる所見があった。

この左膝蓋骨の関節面の周囲には、関節面の延長方向に棚状に張り出した骨増殖が見られる。これは骨縁堤で全周にわたるが、膝蓋骨底にやや強く、膝蓋骨尖を含む下縁にいちぢるしく強い。上内側縁と、上外側のいわゆる膝蓋骨切痕の部位には骨増殖は軽度である。関節面は粗雑で滑沢さを失っているが、ことに外側の半面は凹凸不平である（写真11）。

大腿骨の顆関節面の破片は、小さいためどの部分の破片であるのか判別できないが、この関節面も粗雑である。

以上の肘関節、膝関節の所見は変形性関節症の証拠であると思われるが、この２か所の関節が同一人物のものであるかどうかについては不明である。

わが国古人骨の変形性関節症については、すでに今道[5]が広島県太田貝塚から出土した人骨の肘関節に見られた５例を報告し、清野[6]はこれについて５例とも太田貝塚出土であることに注目して、日本石器時代に地理的環境によって或種の疾病が地方的に好発していた一証であると記載している。また鈴木[7]は、縄文時代前期の平坂人の第１中足骨頭に変形性関節症の像を見、平坂人の狩猟・採集生活から推して、下肢を強度に使い天候の変異にさらされることがこの疾患をひき起こす原因となったであろうと述べている。

神中ら[8]によれば、変形性関節症は一次性と二次性に分けられ、前者は特別の原因なく、ある素質を基礎として、関節の老衰現象に機械的影響が加わって発生するもの、後者は先天的または後天的に関節の異常形態、外傷、疾患、新陳代謝異常など明白な原因を素地として発生するものをいう。このうち肘関節症は一次性のものはまれで、多くは肘関節の外傷または炎症後に続発する二次性のものだといわれ、膝関節症は、多くは老人性変化として起こり、その発生には体質や生活状態が関係するらしいが、また二次性のものもまれではないという。

いずれにせよ、変形性関節症の発症には関節の過度の使用、全身的な栄養不安定、老化、きびしい環

境などの因子が関与してくるものであろう。

小片[9]によれば、縄文時代はおおむね後氷期にあたり、地質学的にも気候学的にも変動のあつた時代であり、全般的にみると早・前期は不安定な、中・後・晩期は安定した期間で、つまり早・前期は生活に不適な、中・後・晩期は生活に適した時期であったと考えられている。そこで早・前期人と中・後・晩期人とを分けて検討した結果、種々の形質のうえで両者に差がみられたという。

縄文時代前期に属する大谷寺人骨も地質学的、気候学的なきびしい環境と不安定な生活を背景にして、激しく身体を使うことが要求されたにちがいない。肘や膝の変形性関節症の強い所見がこのことを物語っていると思われる。

5．特異な形をした大腿骨、膝蓋骨、脛骨

いずれも女性と思われる成人のもので、はなはだしく前後に圧平された細い右大腿骨、小さな右膝蓋骨、細くて正常な形をしていない右脛骨がそれぞれ１個ある。同一個体のものと思われる。

1）右大腿骨

すでに述べた鈍器による損傷があり、両骨端が失われている。残された骨幹から全長を推定すると、共に出土した女性と思われる成人の左大腿骨よりいくぶん短かかったのではないかと思われる。太さはきわめて細いが、緻密質の厚さは骨体中央部で3.5～５㎜で特に薄いということはない。殿筋粗面は粗であり第３転子の形成がある。殿節粗面の外側に沿って隆起が縦走している。この部位の骨体は前後に強く圧平されている(骨体上横径31.5㎜、骨体上矢状径15㎜、上骨体断面指数47.6)。これは特異な形態で超広（hyperplatymer）である(図１)。ほぼ骨体中央も細く前後に扁平で、骨体中央矢状径17㎜、骨体中央横径23㎜、骨体中央断面指数74.0、骨体中央周65㎜である。粗線の発達はほとんど見られず、単に粗雑な帯状をなし、下端近くに至るとむしろ陥没してくる。骨体の前方への湾曲はごく軽度に見られる。

大腿骨の遺存は４本で、内訳は右側２本、左側２本である。このうち形のうえの特徴から同一個体の左右と思われる２本を除外すると、残るのはこの特異な形をした右側と、柱状大腿骨の形をとる左側である。この２本は形はまったく異なっているが、骨質、その他に類似点がないこともない。上肢骨は３個体分あるので、この２本の大腿骨が同一個体のものなのか、異個体のものなのか断定することができない。

しかし、もし異個体のものとすると、この前後に扁平で細い大腿骨の持ち主は両下肢が異常に細いことになり、体重を支えることができたとは常識的に考えることができない。また、もし同一個体の左右だとすると、体重はおもに左側で支えられていたことが想像され、強い跛行をきたしていたと考えられる。

2）右膝蓋骨

小さくもろい右膝蓋骨である。骨皮質は薄く、海綿質も粗い。膝蓋骨尖も小さく全体として横楕円形に近い。前面は粗雑である。関節面には凹凸があり、関節面の外側中央に長さ10㎜、幅７㎜、高さ３㎜の楕円形の骨増殖がある。

膝蓋骨は本来大腿四頭筋腱の種子骨であるから、この膝蓋骨の属する大腿四頭筋は発達がきわめて悪かったとみるべきであろう。また、関節面が粗雑で、大豆大の増殖骨が見られることは、この膝蓋骨が膝関節において働いていなかった証拠であると思われる。

3）右脛骨

上下両骨端を欠く骨幹部である。長軸に沿って前縁と骨間縁を含む部分を失っているので形は正確に

はわからないが骨体は非常に細い。長さは特に短いとは思われず、緻密質の厚さは骨体中央部で約3.5㎜であり薄くはない。ヒラメ筋線は最下部を残しているが発達は弱くはなく、その外側に鉛直位の凹んだ部分がある。

以上に述べた特異な形の右大腿骨、右膝蓋骨とこの右脛骨は同一個体のものと考えるべきであろう。

大腿骨、脛骨の緻密質は薄くはなく、骨の長さもさほど短いとは思われぬが、異常に細いこと、大腿骨の粗線の発達が痕跡的であること、膝蓋骨が小さく脆弱で正常な働きをしていたとは思われぬことから、この女性の右下肢は、骨のカルシウム代謝障害や栄養障害はなかったが、筋の発達が悪くことに大腿四頭筋の機能がほとんどなかったことが想像される。しかしながら、大腿骨第３転子の形成があり、脛骨ヒラメ筋線の発達も弱くはないところから、大殿筋、ヒラメ筋の発達は良かったものと思われる。

神中ら[10]によれば、大腿四頭筋の麻痺があっても大殿筋、ヒラメ筋が健存する場合は、歩行に際して、患側の骨盤を持ち上げ足を地につけた後、大殿筋収縮により大腿を後に伸展し、ヒラメ筋収縮により下腿を後方に引いて膝を伸展して体重を負担するとともに、膝が屈曲しないよう体を股関節で前方に屈曲し重心を前方に移動して歩行すると記載されている。

この場合、漸次反張膝が起こるといわれるが、この女性の大腿骨の前方湾曲がきわめて軽度であったことは、上記の歩行形式を裏づけているように思われる。片側の大腿四頭筋だけが萎縮して機能を果たさなくなる疾患としては、第１に脊髄性小児麻痺が考えられる。しかし、脳性小児麻痺や進行性筋萎縮症など鑑別すべき疾患があり、この例が脊髄性小児麻痺であったと結論する決め手はない。

下肢骨に同様な所見をもつ出土人骨や、現代人の病状と比較検討して結論を今後に持ち越したいと思う。

小　括

わが国における食人の習俗はE.S.Morse（1879）によって大森貝塚人骨からその存在が示唆されて以来、文献や記録にもとづいた研究のほか、鈴木ら[1)11)12)]によって愛知県伊川津貝塚人骨、中沢浜人骨、元輪西貝塚人骨、青森県岩屋岩陰遺跡発掘人骨、神奈川県大浦山洞窟人骨の例が報告されており、また同氏[13)14)]によって、洪積世後期の三ヶ日人骨や富山県白山社洞窟人骨、愛知県稲荷山貝塚人骨からも食人習俗の存在が指摘されている。

ここに述べた栃木県宇都宮市大谷寺洞穴出土の人骨は縄文時代前期に属し、成人女性３体、幼児１体、乳児１体計５体分であり、詳細は重複をさけるが、食人の対象者であったことはほぼ確実である。

食人の行なわれる動機については、嗜食、医療の目的、呪的ないし宗教的原因、憎悪もしくは復讐のため、政治的または社会的目的などがあげられているが、この大谷寺人骨の場合は動機がそのどれに類するものであったのかにわかには決定できない。

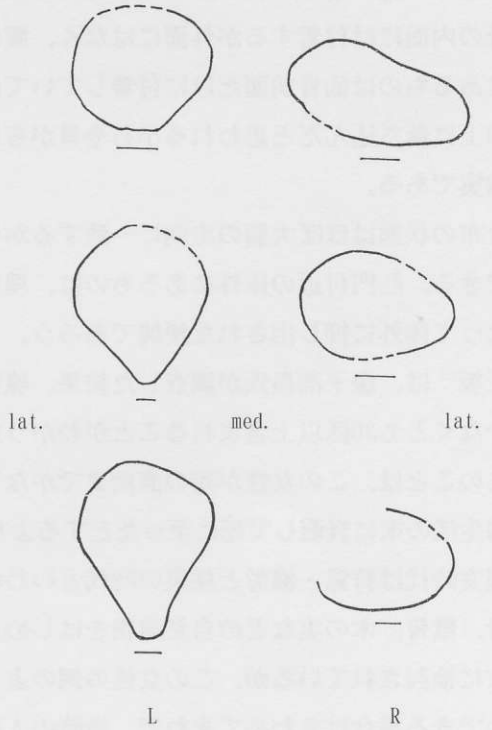


図１　大谷寺人骨の大腿骨体横断形
右列が超広の例、横線は粗線の範囲を示す
上段：上１／３点、中段：中央、下段：下１／３点

食人の対象となった５体のうち３体の成人骨はすべて女性と考えられ、この中には重症な上顎洞炎、肘関節や膝関節の高度な変形性関節症、脊髄性小児麻痺かと思われる下肢の病変など慢性疾患を持った者がおり、他の２体は乳幼児であったことは、食人の動機について考える際ある暗示をもたらすが、一方、縄文時代前期というきびしい自然環境と不安定な生活を背景にして、このような重篤な慢性疾患を持った人たちが生活しえたことは、この人たちをとりまく周囲の人びとの多大な協力や援助があってはじめて可能であり、この意味で、食人習俗を単に殺伐な事件として理解することは危険であると思われる。

Ⅱ．腹腔から食物残渣の発見された縄文前期人骨

熊本県宇土市宮ノ庄字轟にある轟貝塚は昭和41年３月に江坂輝彌氏を主査とする調査班によって発掘調査が行なわれ、その際８体の人骨が出土した。

このうち轟１号人骨は縄文時代前期に属し、保存が良く、スズキの主鰓蓋骨で作られたペンダント１個、左上腕にテングニシ製の管玉１個、左右の前腕にサルボウ製の貝輪を１個づつ装着し、頭部を南東に向けたあおむけの屈葬で発見された（写真12）。

この人骨は熟年の女性と思われ、各骨は解剖学的な相互位置関係を保っていたが、この女性の腹腔、小骨盤腔の数か所と、肛門付近の体外と思われる部位から、黄かっ色のもろい塊状のものが見いだされた（図２）。

塊状物は図２に示したように左右の下肋部、第12胸椎体の左わき、腰椎の両側、小骨盤腔内で仙骨の前面および肛門付近の体外に分布し、第１～第３腰椎の右側にあるものと、小骨盤腔にあるものはことに多量で、塊の厚さは約５㎜であった。また、塊状物が体内のものであることは、下肋部にあるものは肋骨の内面には付着するが外面にはなく、腰椎付近にあるものは一部が腰椎体の前面をおおい、小骨盤腔にあるものは仙骨前面だけに付着していて仙骨の後面には付着していないことや、埋葬後に体外から塊の上に落ち込んだと思われる小石や貝がらには、下面にだけ付着していて上面には見られないことから確実である。

分布の状態はほぼ大腸の走向に一致するから、この塊状物は大腸内に残された食物残渣と考えることができる。肛門付近の体外にあるものは、埋葬後の腐敗に伴う腹腔内圧の昂進と死体をおおった土圧とによって体外に押し出された便塊であろう。

江坂[15]は、金子浩昌氏が調査した結果、塊状物にはマイワシ、カタクチイワシ、ハゼなどの小魚の骨が少なくとも30匹以上含まれることがわかったと述べている。

このことは、この女性が死の直前までかなり食欲のあったことを示し、死因についても長期にわたる闘病生活の末に衰弱して死に至ったとするよりは、むしろ突然死に襲われたと考えるほうが無理がない。

縄文時代は狩猟・漁労と採集の時代といわれ、当時の人びとの食生活は貝塚などから発見される貝、魚骨、獣骨、木の実などの自然遺物をはじめとして、土器や石器の使用法を推定することによってさまざまに検討されているが、この女性の例のように腹腔内の食物残渣から直接食生活の一端をうかがうことのできる場合はきわめてまれで、当時の人びとが何をどのくらい食べていたかといった問題については依然想像の域を出なかった。

林[16]によれば、漁労や狩猟の民族といわれたアイヌの食生活の中心をなしたものはオハウとよばれる汁で、獣肉もしくは魚類を大量に入れ、それに山菜もしくは野菜を若干添加したものであったという。

それがいわば彼らの主食であり、これを椀に盛って満腹するまで食べ、栗や稗で作った薄い粥はいわば副食で、獣肉、魚類の汁を十分食べたあとで口直しのためにわずか一杯だけすすられたものにすぎなかったという。

1例だけで縄文前期人の食生活を断定することは危険ではあるが、轟1号の女性の腹腔から検出された30匹分以上の魚骨は小魚とはいえかなりの量であるところから、このアイヌの場合と考え合せて当時の食生活もこれと似たものではなかったかという推定も成り立つ。いずれにせよ当時の食生活の一端を知る興味ある資料である。

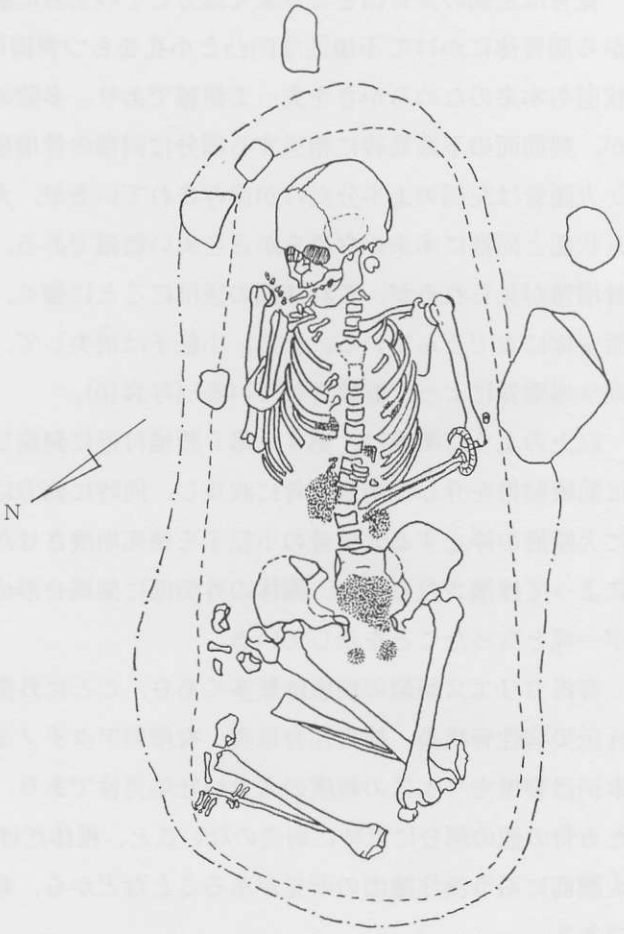


図2　轟1号人骨　黄かっ色塊状物の分布

Ⅲ. 脊椎カリエスをもつ古墳時代人骨

千葉県小見川町で発見され、丸子　亘氏によって調査された古墳時代後期に属する城山古墳3号墳には、壮年男性、老年男性、壮年女性、老年女性の4体が同一石棺内に合葬されていたが、このうちの1体壮年男性に脊椎カリエスとみられる所見があった。

この男性の椎骨は第1・第2胸椎と尾骨が失われているほかは保存されており、頸椎、胸椎および第1・第2腰椎には特に病変は見られないが、第4・第5腰椎は椎体が壊死によって挫潰され、ほとんど境界の判別が不可能な状態で第3腰椎および仙骨と骨性に癒合している（写真13）。

第4・第5腰椎の肋骨突起、棘突起は死後の破損によって失われているが、これら第3・第4・第5腰椎の椎弓と各突起は挫潰されてはおらず、それぞれ上下に癒合して、その間に両側3個づつの椎間孔を残している。

腰椎に続く仙骨は第5腰椎体と仙骨底との境界が判別できぬばかりでなく、第1仙椎体のほとんど全部と第2以下の仙椎体の前半が壊死よって消失しているので、岬角も見られず、仙骨前面が大きく欠損して大きな洞口が前面に開いている。残された第2以下の仙椎体の後半は海綿質を露出して表面が粗雑であり、これによって脊柱管は本来の仙骨管と仙骨前面への二次的な洞口との両方に連絡している。

第3・第4・第5腰椎と仙骨が以上のような状態であるため、脊柱の腰部は生理的な前湾と腰仙角とをまったく失って胸部からなだらかに続く後方に凸の弓状湾曲を示している（写真14）。

死後の破損を免れた仙骨左外側部耳状面上半の長軸と、仙骨に癒合している第3腰椎体の上面とのなす角は前方に小さく約80°である。一般に正常体において、直立の際この耳状面の長軸と第3腰椎体上面とのなす角は前方に大きく、おおよそ150°前後であるとすれば、この80°という角度は正常体が上半身を最大限に前屈した場合に相当することになる（図3）。

寛骨は左側の寛骨臼をとりまく部分とその上方に続く腸骨翼の一部が残されているが、寛骨臼の周辺から腸骨体にかけて不規則な凹凸と小孔をもつ表面の粗雑な骨増殖が見られる（写真15）。寛骨臼の月状面も本来のなめらかさを失って粗雑であり、多数の小孔がある。腸骨翼は腸骨窩には特に所見はないが、殿筋面の下殿筋線に相当する部分に同様の骨増殖が見られる。

大腿骨は左側の上半分だけが保存されているが、大転子の部分は破損している。骨頭の表面は寛骨臼月状面と同様に本来のなめらかさを失い粗雑である。大腿骨頸部にも不規則な凹凸と小孔をもつ粗雑な骨増殖が見られるが、これは頸の後部にことに強く、後部ではさらに下方に延長して小転子から殿筋粗面全体にまで及んでいる。また、小転子は消失して、内側方に向って発達した縦長雪庇状の辺縁の不規則な増殖骨によって置換されている（写真16）。

以上のような所見は、第４・第５腰椎付近に発症した脊椎カリエスが椎体を壊死におとしいれ、膿瘍は前縦靭帯を介して漸次仙骨に波及し、同時に側方に出て大腰筋筋鞘中を下降して股関節を侵すとともに大腰筋の停止する大腿骨の小転子を壊死崩潰させたものであり、また、壊死におちいった椎体は荷重によって挫潰される一方、椎体の外側部に架橋を形成し、椎弓は上下に癒合して第３腰椎以下仙骨までが一塊となったことを示している。

脊椎カリエス類似の疾患は数多くあり、ことに外傷性脊椎炎、悪性腫瘍の脊椎転移、急性または亜急性伝染病性脊椎炎、梅毒性脊椎炎、脊椎のアクチノミコーゼ、変形性脊椎症との鑑別が必要であるが、本例は脊椎カリエスの頻度の大きい壮年男性であり、発症部位も第４・第５腰椎であること、全身にわたる骨の他の部分には特に病変のないこと、椎体だけが壊死崩潰し椎弓は壊死におちいっていないこと、大腰筋に沿う流注腫瘍の所見があることなどから、脊椎カリエスによるものであることはほとんど確実である。

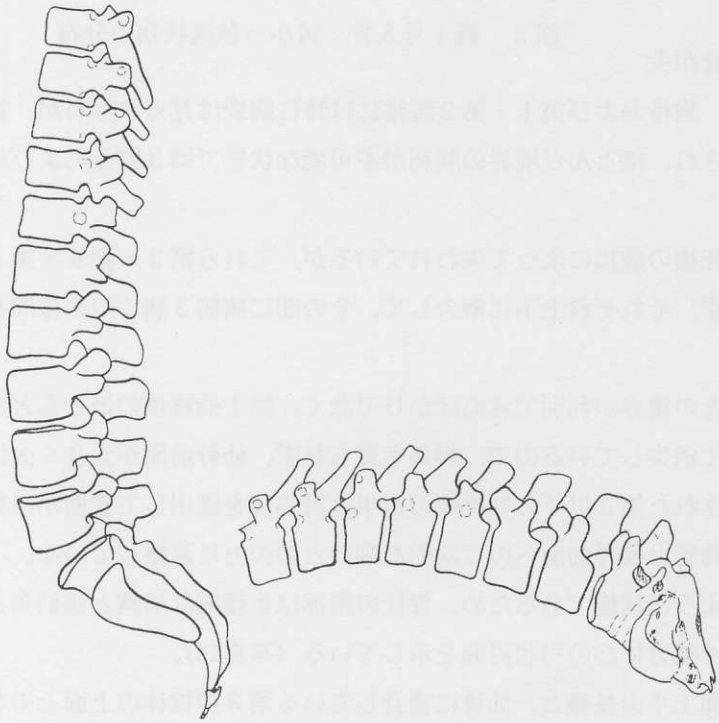


図３　直立位における下部脊柱の比較
便宜上両者の耳状面長軸を平行させた
左：正常人、右：小見川３号墳人

わが国において結核が初めて記載されたのは10世紀のことで、丹波康頼（912～995）が隋、唐の諸医書にもとづいて永観２年（984）に著わした医心方が最初といわれている。

神中ら[17]によれば、脊椎カリエスは肺まれには腸にある結核病巣から二次的にひき起こされるものであり、前田の調査では結核性疾患のうちで肺結核、胸膜炎、結核性腹膜炎、腺結核について第５位を占め、昭和６年（1931）整形外科外来では8.6％（九大・奥本）、6.9％（慶大・島田）であったという。

遺跡から発掘された人骨からは当然のことながら肺や腸の結核の直接の証拠を望むことはできないが、脊椎カリエスが認められれば、おのずとその地区その時代に肺や腸の結核がかなりの

頻度で存在していたことが証明されることになろう。

脊椎カリエスの経過は慢性で数年から10数年にわたり、合併した肺結核、腸結核、結核性髄膜炎、腎結核によって死に至るか、瘻孔から混合感染を起こし、ついに衰弱して死亡する者が多いという。

この例もおそらくこのような転帰をとったものと思われるが、治療法の確立していなかった古墳時代のことであるから、病勢が徐々に進行して治癒することなく、このような転帰をとることは容易にうなづけるとしても、経過が慢性で、その間労働はもちろんのこと日常の生活にもほとんど耐えることができなかったであろう患者が、少なくとも数年間にわたって生存しえたことは、周囲の人びとのなみなみならぬ援助によるものと考えねばならず、その意味で、看護もしくは間接的、消極的な治療が行なわれていたといえるかもしれない。

また、この男性の椎骨には変形性脊椎症の所見である椎体縁の骨増殖がみられない。一般に出土人骨の椎骨には壮年期を過ぎると椎体縁に骨増殖が見られるが、これは現代人にくらべて若い年令で出現し、程度も強いことが知られている。このことは現代人にくらべて当時の人がより激しい労働を強いられていたことが要因のひとつと考えられている。これに従えば、この男性は生前激しい労働に従事していなかったものと思われるが、同じ３号墳に合葬されていた他の３体はいずれもかなりの程度の変形性脊椎症を持つていたところから、この男性が労働に従事しなかったのは、階級的な意味合いよりもむしろ結核に罹患していたためであったと考えることができよう。

國分[18]は、種子島の南種子町広田の埋葬遺跡（弥生時代中期～後期）において、男性人骨が、この遺跡一般の習俗である第二次葬をともなわぬ例をあげている。珊瑚礁塊によって厚く厳重におおわれた埋葬であるにもかかわらず彼らは装身具らしいものをほとんど帯びず、葬位は脚を立てるかわずかに曲げる程度であり、このうちもっとも厚く厳重な珊瑚礁塊におおわれた成人骨はすべての関節が関節炎を起こしていたといわれる。

水死、屋外での死、手脚の硬直する病気による死、身体の腐ることによる死、婚前の若者の死などは、しばしば凶死とされて特別な取り扱いを受ける場合があり、このような例は南島をはじめとして国内ばかりでなく中国、台湾、南鮮にも認められるという。

小見川３号墳に埋葬された脊椎カリエスの男性は、遺骨の所見からみて、生前から外見上特異な病態を現わしていたことが明らかであるにもかかわらず、他の３体と同一の箱式石棺の中に合葬されており、この点に関するかぎり特別な扱いを受けているとは思われない。

この男性が凶死としての扱いを受けていないようにみえるのは時代の相違によるものか、地域の差によるものか、または階級的な意味合いのものなのかその理由は不詳ではあるが、これはわが国の葬制の移り変わりを考えるうえで興味深い事例であろう。

要　約

わが国の出土人骨にみられた病変や損傷について、主なものとしては、すでに清野、今道、大倉[19]、鈴木、熊谷[20]ら先学によって骨折、変形性関節症、腫瘍、利器による損傷、齲歯などの報告がある。

著者は新潟大学医学部第１解剖学教室保管の縄文時代から古墳時代に至る人骨について古病理学的検討を行ない、次の病変や損傷を見いだした。

１．歯性上顎洞炎、肘関節・膝関節の変形性関節症、脊髄性小児麻痺疑いの下肢骨のみられた食人を思わせる縄文前期人骨群

これらの病変は栃木県大谷寺洞穴出土の縄文前期人骨に見られたが、どの病変も著しい所見を持つことが特徴的である。また大谷寺人骨は保存が良いにもかかわらず、ほとんどすべてが細片で、そのうえ失われた部分が多く、利器や鈍器によると思われる損傷の痕跡や焼かれた骨もあるところから、食人が行なわれた可能性がきわめて強い。

2．腹腔から食物残渣の発見された縄文前期人骨

熊本県轟貝塚から出土した熟年女性人骨の腹腔、小骨盤腔および肛門付近から、黄かっ色のもろい塊状のものが発見された。これは分布状態から大腸内の食物残渣であると思われ、その中にはマイワシ、カタクチイワシ、ハゼなどの小魚少なくとも30匹以上が含まれることがわかったが、これは当時の食生活の一端をうかがう好資料であろう。

3．脊椎カリエスをもつ古墳時代人骨

千葉県小見川の城山３号墳には男女計４体が合葬されていたが、このうち壮年男性に脊椎カリエスと思われる所見があった。この病変は腰椎・仙骨ばかりでなく股関節付近にまで及び、流注腫瘍のあったことを示している。脊椎カリエスは主として肺などに発症した結核病巣から二次的にひき起こされるものであるから、古墳時代の脊椎カリエスの存在は、さらに頻度の大きい肺や腸の結核も当時存在したことを暗示している。

以上の結果から考察すると、わが国の出土人骨にみられる疾患は、急性で早急に死に至るものは骨に病変を残しにくい事情があるにしても、重症でしかも慢性のものが多い。その理由としては栄養のかたよりや生活条件の悪さとともに、有効な治療法のなかったことがあげられよう。しかし、その反面日常の生活にも適応できぬほどの患者がともかくも生存しえたことは、背景にそれをささえる当時なりの看護法や治療に類する方法があったことを物語っているように思われ、疾病に対するこの姿勢は時代をこえて共通であると考えられる。

参考文献

1）鈴木　尚：日本石器時代人骨の利器による損傷に就て、人類誌、53（7）：312～347、1938。
2）鈴木　尚：石器時代貝塚出土の獣骨片について、人類誌、50（3）：118～125、1935。
3）石川梧朗、秋吉正豊：口腔病理学Ⅱ、813～816、永末書店、京都、1969。
4）小片丘彦：日本古代人にみられた歯の異常について、歯界展望、35（6）：1041～1046、1970。
5）今道四方爾：日本石器時代人人骨に於ける畸形性肘関節炎に就て、人類誌、49：第５附録、1934。
6）清野謙次：古代人骨の研究に基づく日本人種論、256～258、岩波書店、東京、1949。
7）鈴木　尚：日本人の骨、145～146、岩波書店、東京、1963。
8）神中正一、天児民和、河野左宙：神中整形外科学、15：264～268、622～623、957～958、南山堂、東京、1965。
9）小片　保：日本の縄文人形質の推移、解剖誌、43（1）：７～８、1968。
10）神中正一、天児民和、河野左宙：神中整形外科学、15：297～312、南山堂、東京、1965。
11）鈴木　尚、酒詰仲男、埴原和郎：下北半島岩屋の近世アイヌ洞窟について、人類誌、62（4）：161～178、1952。
12）鈴木　尚：弥生時代の食人について、日本人類学会日本民族学会連合大会第20回紀事：135～137、1965。
13）鈴木　尚：三ヶ日人と三ヶ日只木石灰岩採石場の含化石層、１．三ヶ日人骨、人類誌、70（1）：１～20、1962。
14）鈴木　尚：加工せる二個の石器時代人大腿骨に就て、人類誌、59（1）：25～28、1944。
15）江坂輝彌：轟貝塚の調査、日本人類学会日本民族学会連合大会第21回紀事：51～53、1966。
16）林　善茂：第26回日本人類学会日本民族学会連合大会シンポジウム、北方圏の人類学と民族学、第Ⅱ部、アイヌの経済生活、1972。

17) 神中正一、天児民和、河野左宙：神中整形外科学、15：203～207、414～443、南山堂、東京、1965。
18) 國分直一：日本およびわが南島における葬制上の諸問題、民族学研究、27（2）：441～452、1963。
19) 大倉辰雄：日本石器時代ニ於ケル備中国津雲貝塚人ノ大腿骨々折例ニ就テ、京都医学雑誌、36（4）：11～13、1939。
20) 熊谷正哉：山口県土井ヶ浜遺跡発掘弥生前期人骨の骨病変について、人類学研究、5（1～4）：78～86、1958。

※縄文時代人のものであることが確実な糞石の出土例はきわめて少なく、轟貝塚1号人骨のものが最初の発見例である（編者註）

小片論文付図（I）

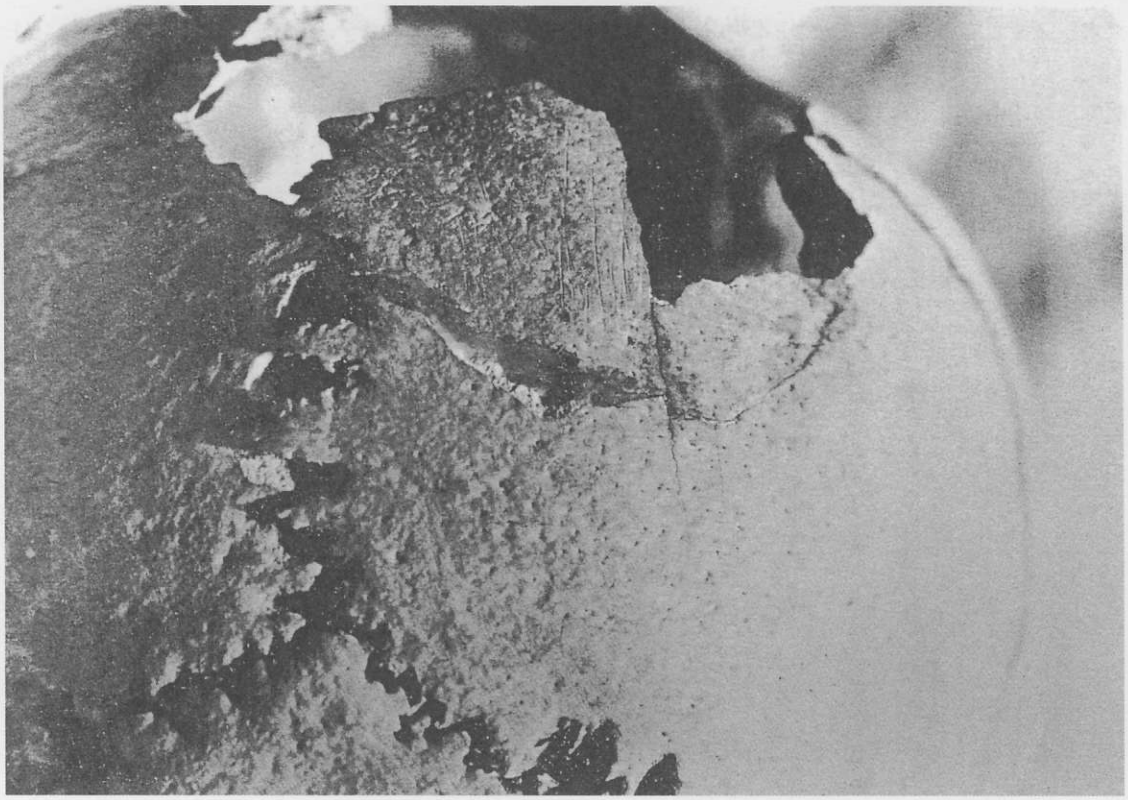


写真１　大谷寺３号頭蓋の右頭頂骨に見られた条痕

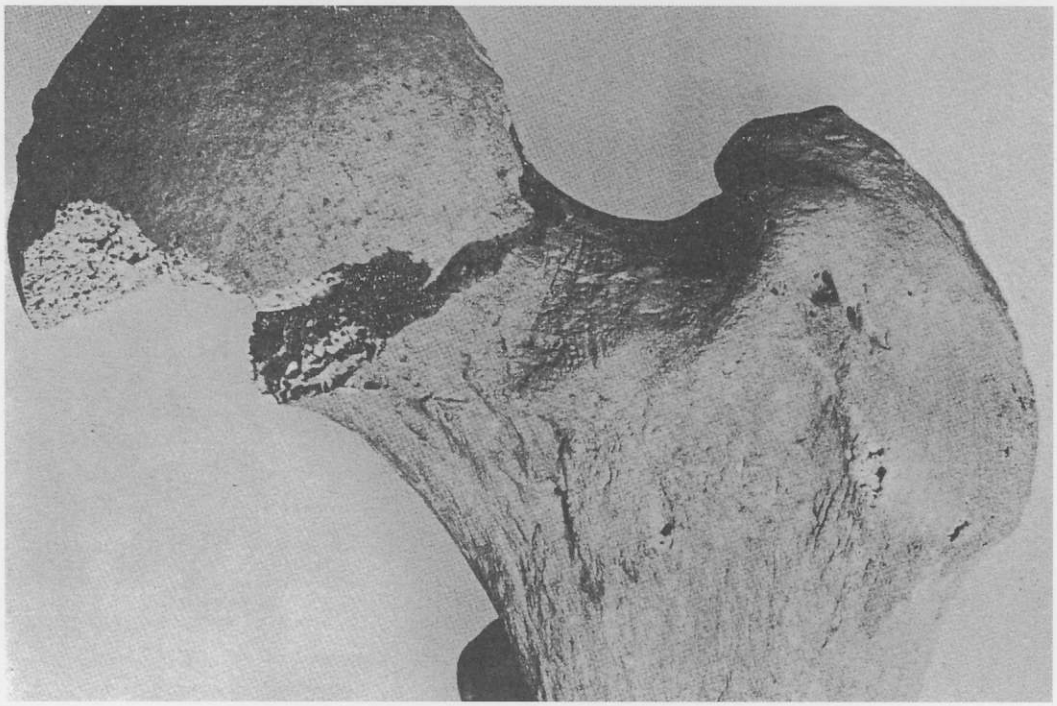


写真２　大谷寺人骨の左大腿骨頸前面に見られた条痕

小 片 論 文 付 図（Ⅱ）

写真３　大谷寺人骨の右肩甲骨に見られた切痕（創痕）

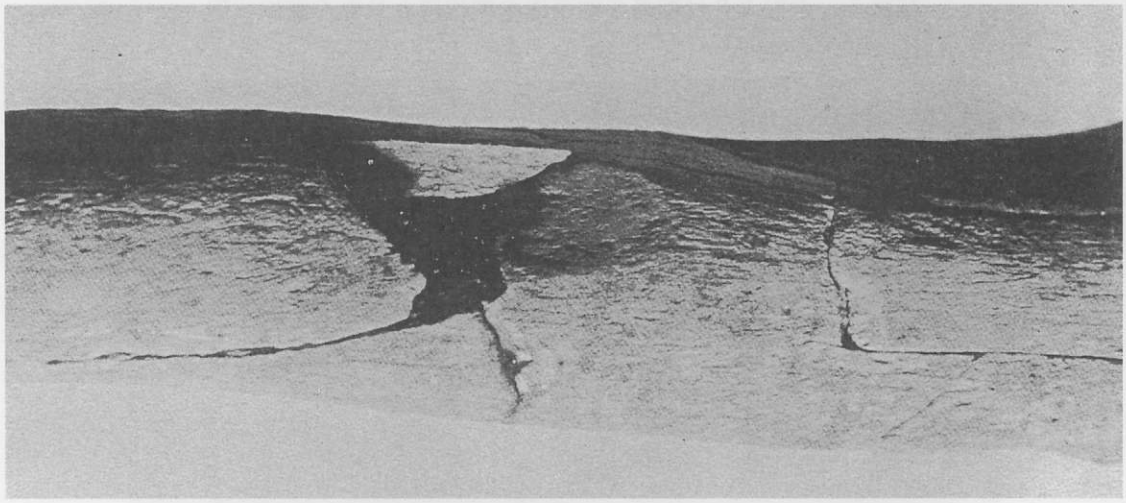


写真４　大谷寺人骨の左大腿骨骨体全面に見られた切痕（創痕）
向かって右が近位

小片論文付図（Ⅲ）

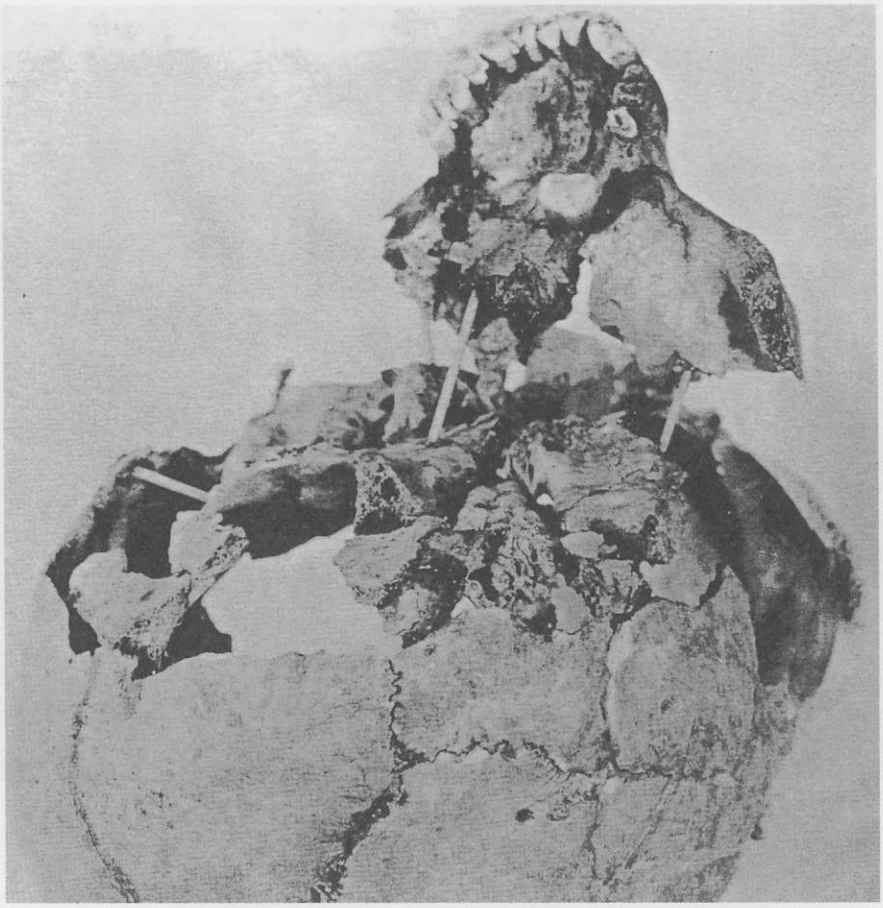


写真５　大谷寺３号頭蓋の頭蓋底を環状にとりまく破損状態

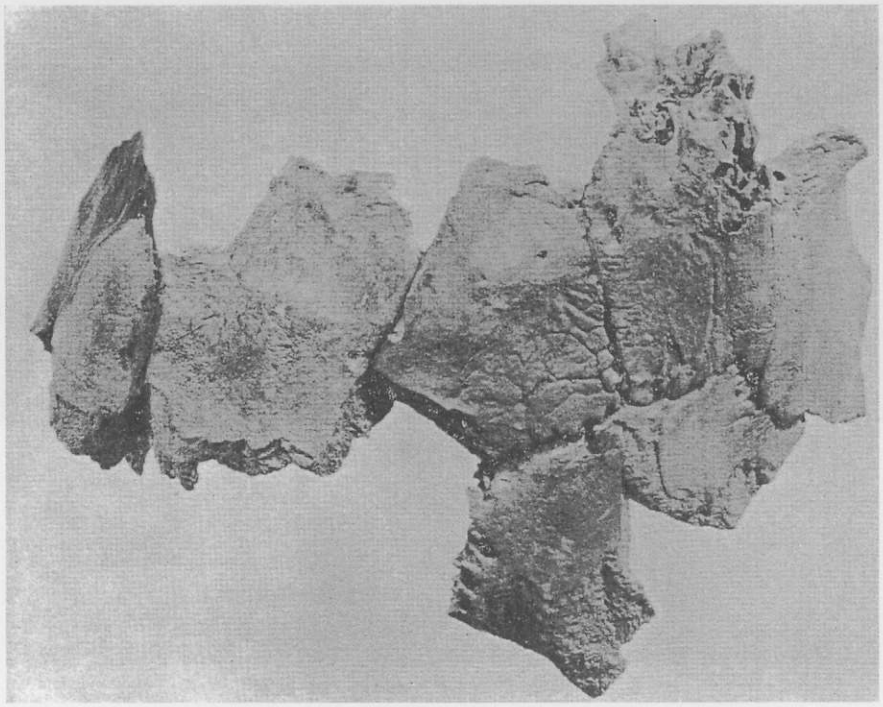


写真６　大谷寺５号頭蓋の頭蓋底および頭蓋冠の破損状態
対比のために３号頭蓋とほぼ同じ方向から撮影

小 片 論 文 付 図 (Ⅳ)

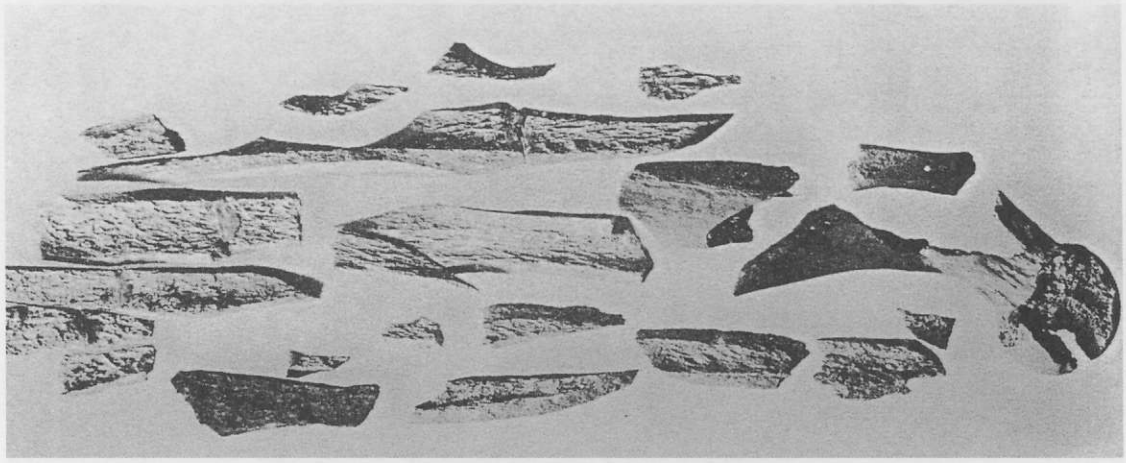


写真７　大谷寺人骨左大腿骨の破損状態（復原前）

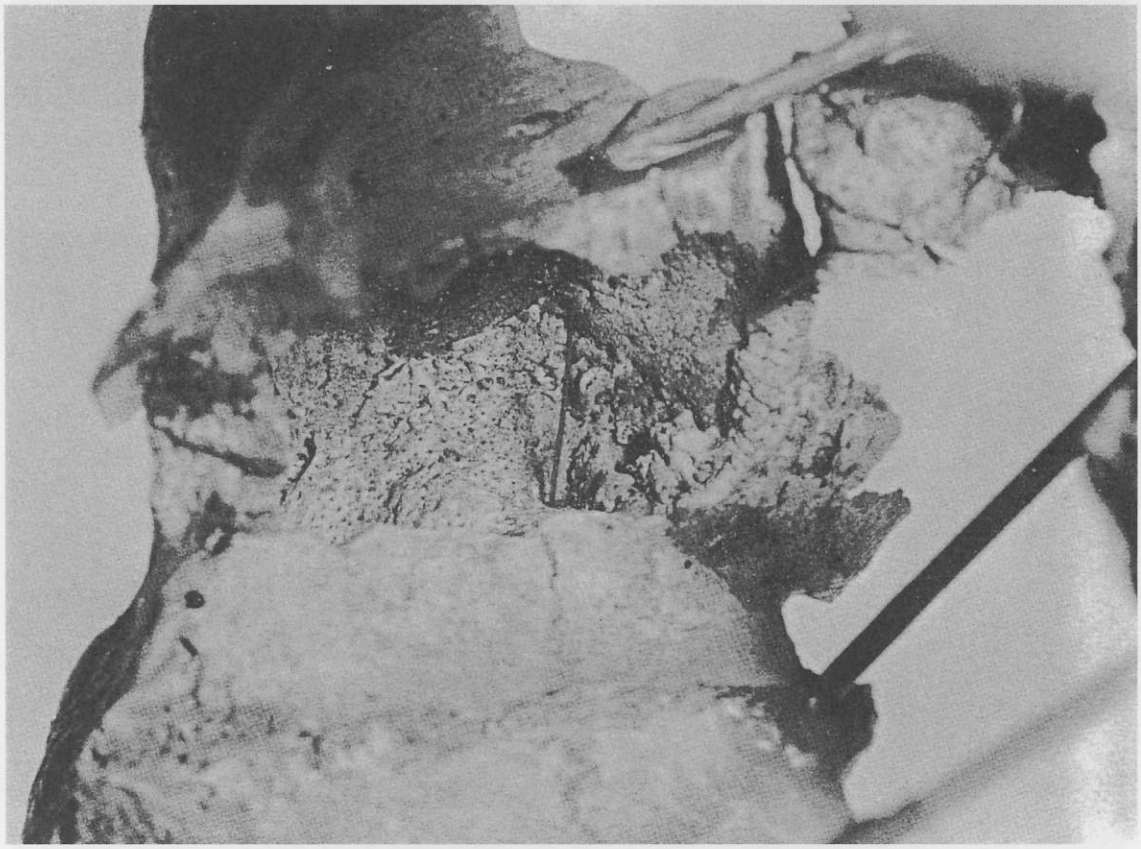


写真８　大谷寺３号頭蓋の粗雑な右上顎洞内面
歯槽弓の最後部と連絡する小孔にはナイロン糸が通してある

小片論文付図（V）

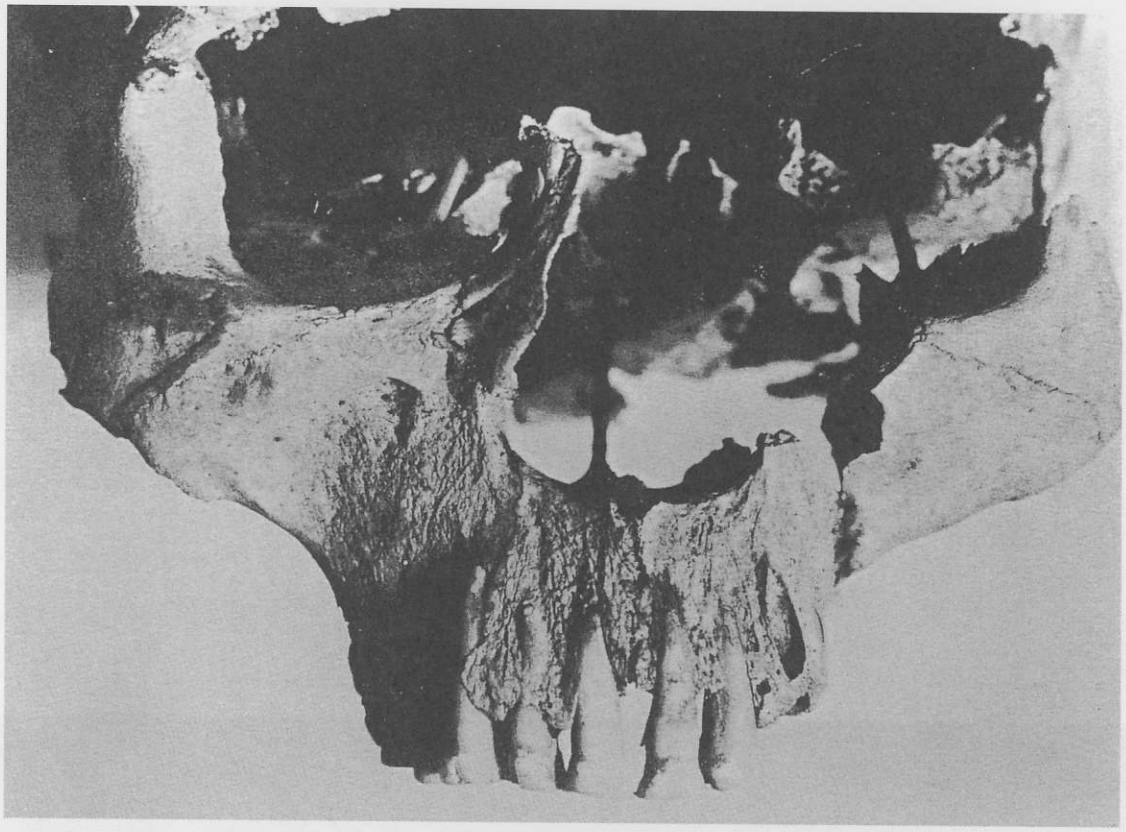


写真９　大谷寺３号頭蓋右上顎骨体の骨萎縮

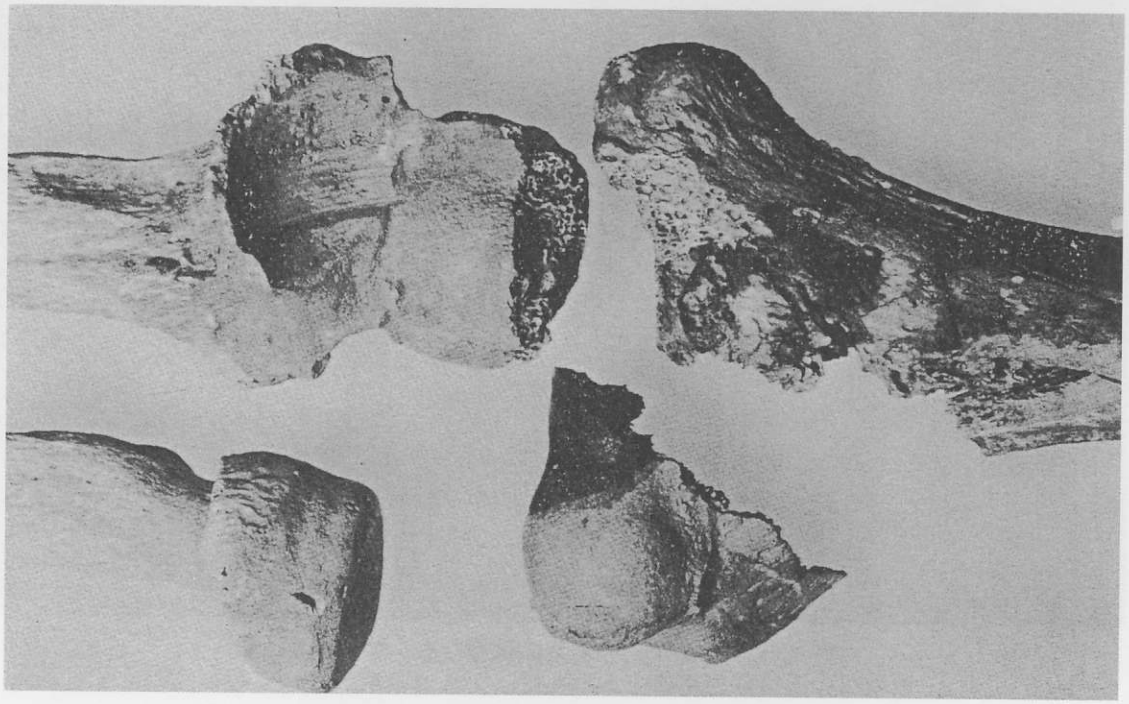


写真10　大谷寺人骨左肘関節部の前面観

小 片 論 文 付 図 (VI)

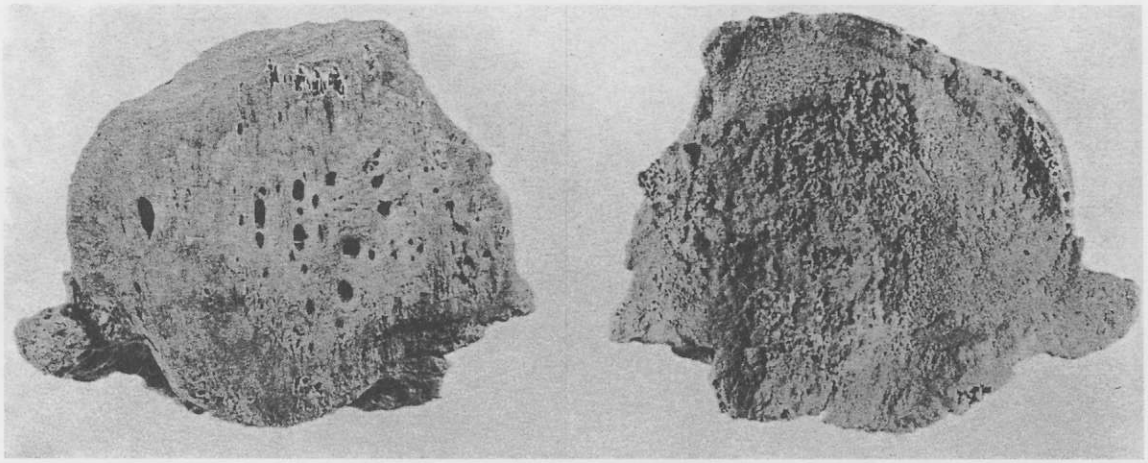


写真11　大谷寺人骨の左膝蓋骨
左：前面　右：関節面

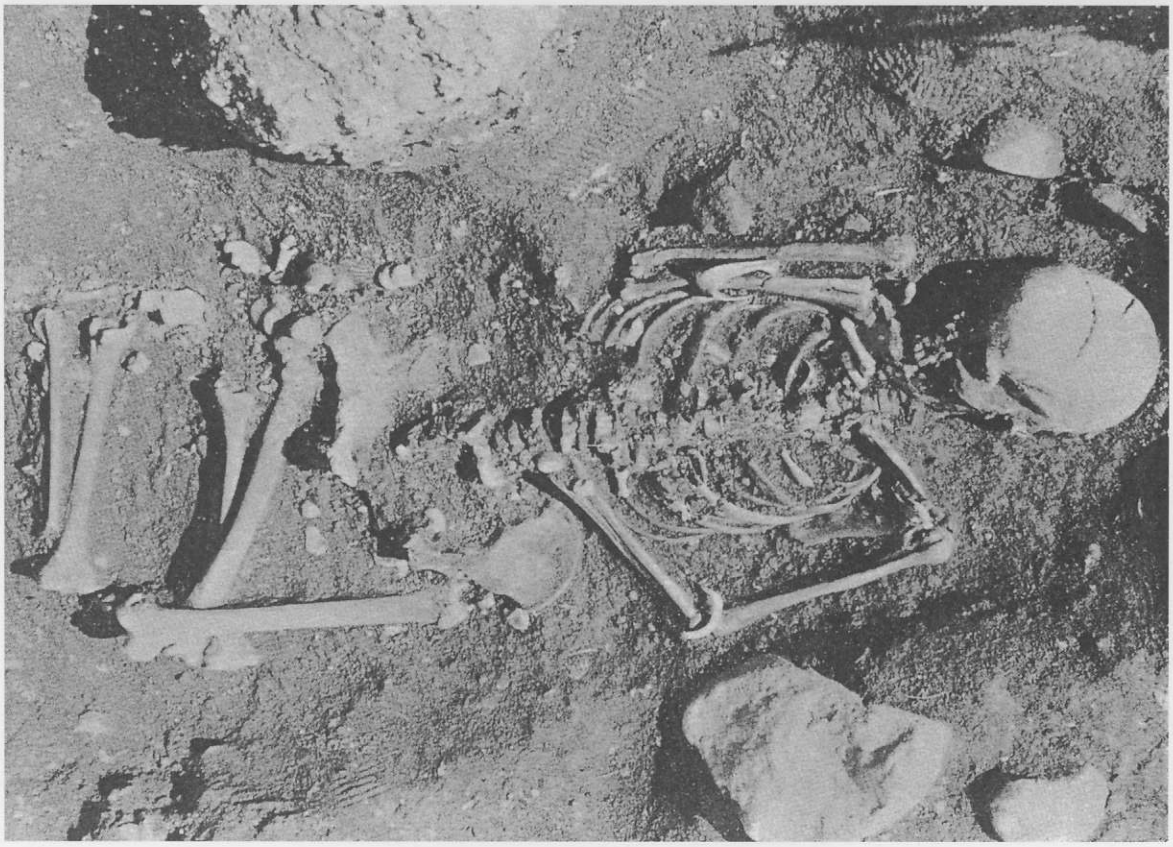


写真12　轟１号人骨の出土状態

小片論文付図（Ⅶ）

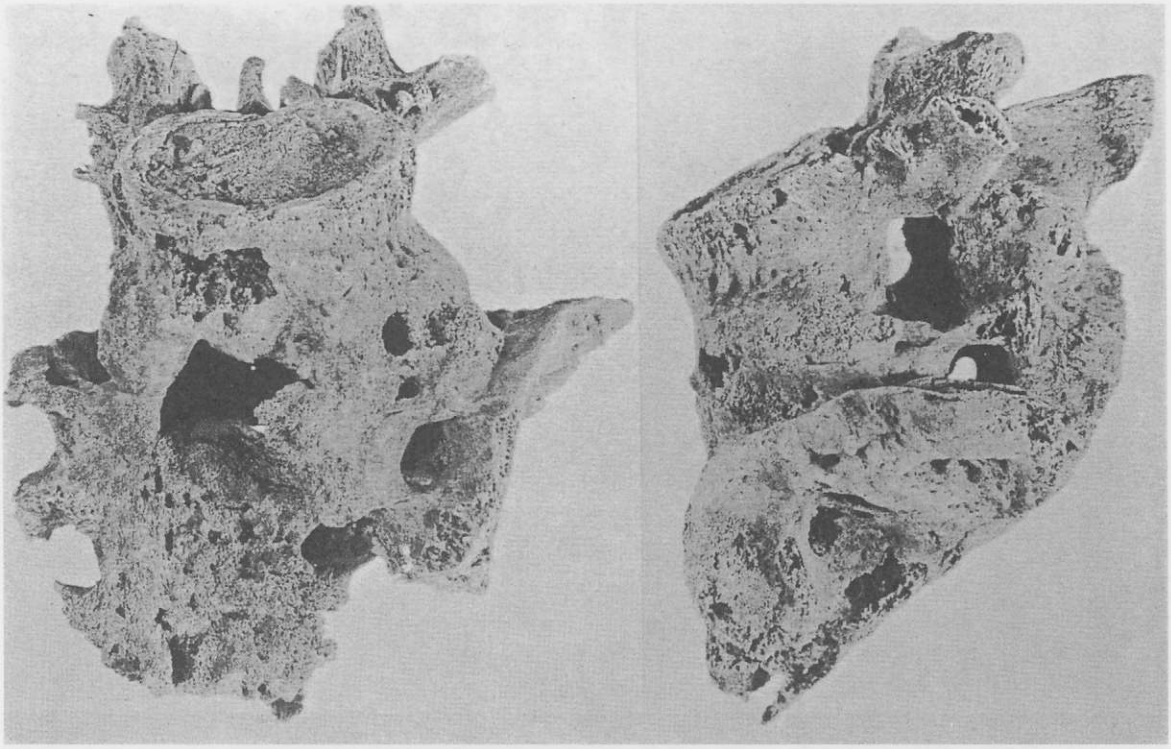


写真13　小見川３号墳人骨の第３・４・５腰椎と仙骨の癒着
左：前面観　右：左側面観

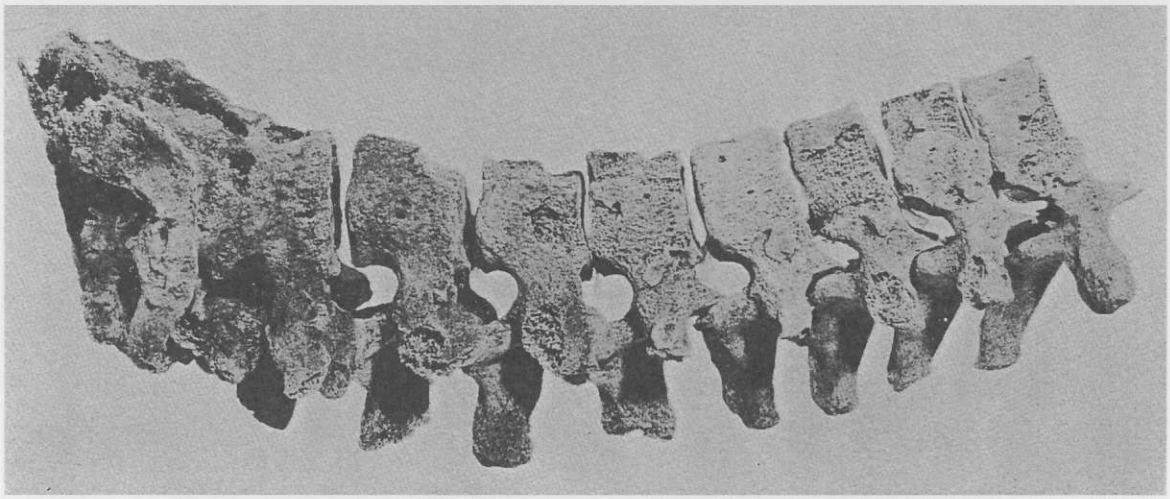


写真14　小見川３号墳人骨の脊柱下部（第８胸椎～仙骨）側面観

小 片 論 文 付 図 (Ⅷ)

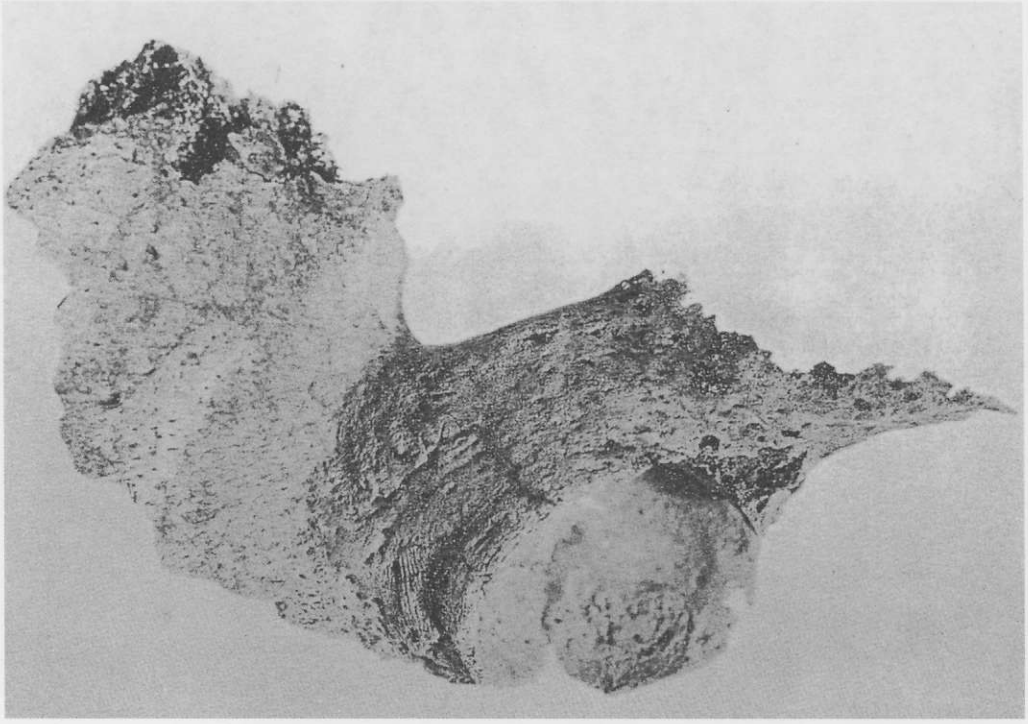


写真15　小見川３号墳人骨の左寛骨外側面観

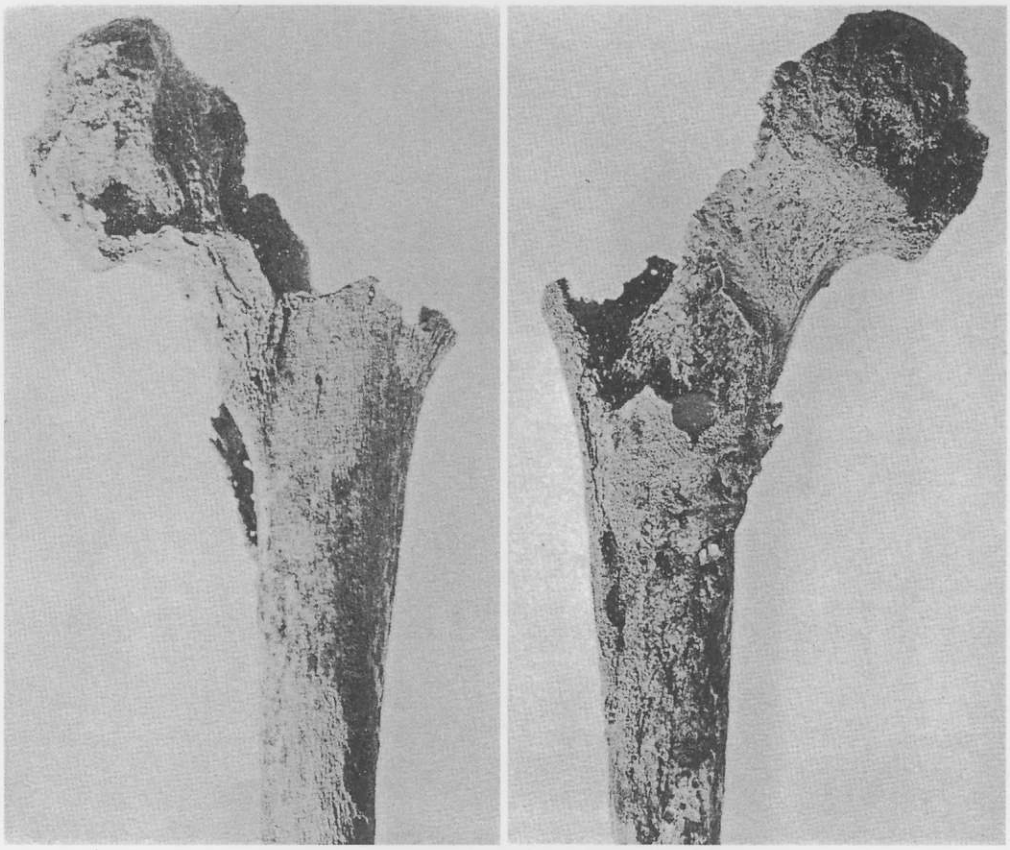


写真16　小見川３号墳人骨の左大腿骨
左：前面観　右：後面観

4 先史時代における朝鮮半島南部と西九州地方との初期経済交流について

江坂 輝彌

先に本学紀要第４号に[注1]この両地域の文化交流と交易がおこなわれていた事実を指摘したのであったが、ここ数年の資料の増加に相俟って、初期の経済交流が発生していたと見做すことも可能と思われるに至ったので、その新しい事実をとり上げてここに再論してみたいと思う次第である。

魚介類の交易

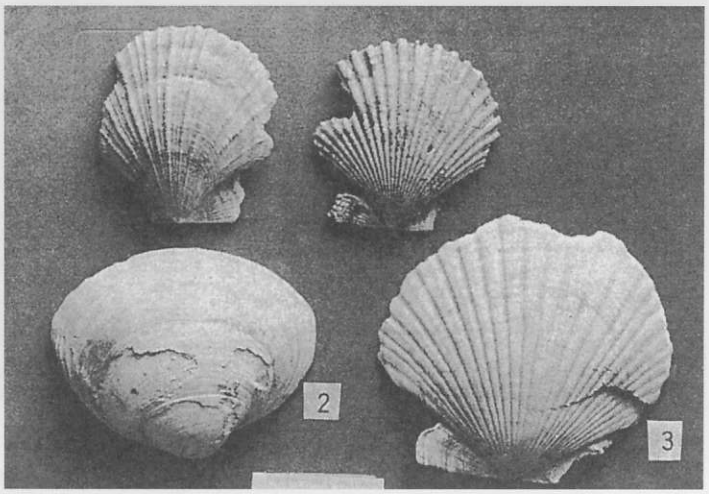
前記した第４号誌上で、リマン海流（親潮）の流れる釜山付近の海域で捕獲可能なホタテガイが、海峡を越えて対馬海流が沿岸を流れ親潮系の魚介類の棲息しない西九州地方の縄文文化人に親潮系の美味な魚介類を交易物資として送り出していないだろうかと注意を呼びかけたのであった。

筆者が1966年３月発掘調査した熊本県宇土市轟貝塚の縄文時代前期の貝殻条痕文の上に細隆起線文を施文した轟Ａ式、Ｂ式土器片を出土の貝層中の貝類に数は多くないが、ホタテガイ、アズマニシキガイ、エゾキンチャクガイ、ウバガイ（ホッキガイ）（第１図写真参照）などの親潮系の海岸に棲息する大型の斧足類貝殻が検出されている。限られた発掘区域で数個の出土は、かなりの数、食していたと考えられる。これらの貝類が当時は九州西海岸で捕獲されたとは考えられない。轟貝塚で大量に捕獲され、貝塚に堆積している貝殻は暖系の黒潮系の干潟に棲息するものが多いので、西海岸の天草島近海に当時は親潮が流れていたという証左は見当たらない。

従って上記した親潮系の貝類は朝鮮半島東南の釜山付近の海岸で捕獲されたものが海峡を渡って将来された可能性が強いように思われる。恐らく生貝を貝殻に入ったまま、篭などに入れて、舟で運ばれてきたものと思われる。

この事実は同時代、前記の貝塚を発掘調査し、長崎、佐賀県下などでも同様な貝殻の発見があれば、さらに強固な裏付けとなるであろう。

このような貝類の食品を西九州地方に運ぶことによって見返り物資としては、どのようなものがあったろうか、釜山市影島区東三洞貝塚をはじめ朝鮮半島東南部の貝塚遺跡からは轟Ａ式、Ｂ式土器を模倣して制作したと思われる貝殻条痕文の上に細隆起線文を施文した土器片がかなり出土しているが、中にはこの土器を容器として、中に何等かの食料などを入れて、西九州地方から将来された土器もあると思われる。しかしその内容がどのようなものであったかは把握するまでに至っていない。轟貝塚で貝層中から多数検出された体長10cm前後のマイワシ、カタクチイワシ、のような小型魚類の塩漬、或いは身を砕いて塩からのようなものを製造して送りこんだことも考えられる。



第１図 宇土市轟貝塚出土１.アズマニシキ、２.ウバガイ、３.ホタテガイ

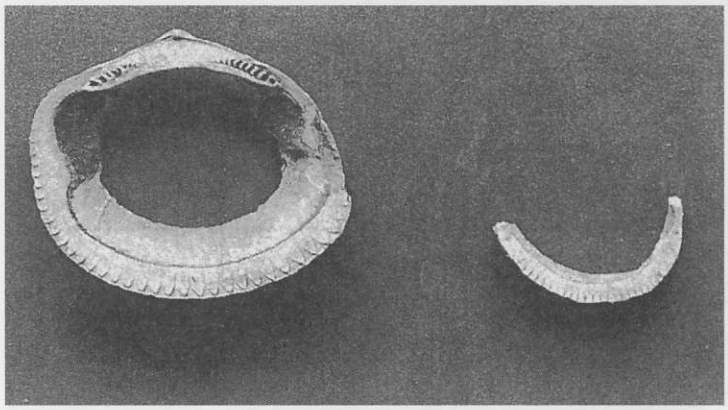
また朝鮮半島南部の多島海域に棲息しない、外洋性の砂浜に棲息するベンケイガイは東三洞貝塚をはじめ、南岸の櫛文土器出土の貝塚からは貝製腕輪の破損品、完形の腕釧、同未製品がかなりの量発見され、稀に加工していないベンケイガイの貝殻も発見されることがある。しかしベンケイガイの貝殻は貝層中に他の貝のごとく、数十個密集して層をなして出土することはなく、また左右の貝殻が同一の場所になく、片側が１点のみ出土することが通例で、この地方の人々がベンケイガイをまとめて捕獲し食用にした痕跡は全く認められない。この貝殻は本州の太平洋岸、東九州の宮崎県方面の外洋に面した海岸で捕獲されたものの貝殻を、貝製腕輪の原料として、遙々と遠隔の地から運ばれてきたものであろうか。（第２図写真参照）

また櫛文土器、無文土器の貝塚からの発見例は知られないが、三国時代、新羅の古墳からは種子、屋久島付近の南海で捕獲した大型イモガイの殻頂部をボタン状に加工し、朱を塗った装身具が出土しており、九州方面出の貝類を装身具として利用の風習は非常に長期にわたって継続したものと思われる。

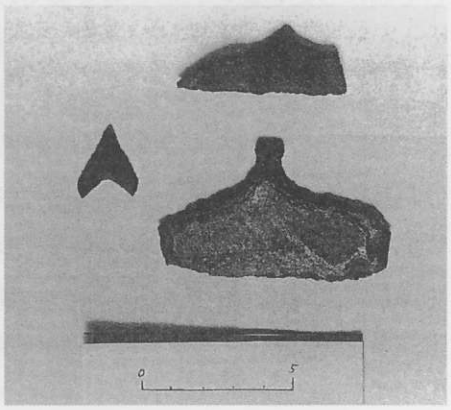
石器・石器の原石の交易

今日朝鮮半島東南部地域の同時代の貝塚遺跡などからの出土品で、これは明らかに西九州地方からの将来品であると立証し得るものにはFlake-tool（剝片石器）とその原石がある。朝鮮半島南部では剝片石器製作に好適なガラス質の岩石は、露頭や河川の河原石の中には全く認められず、従って朝鮮半島南部でナイフ、槍のような大型の剝片石器の発達は全く見られなかった。東南部海岸地帯で僅かに石鏃と漁具の一部品として利用された長さ３cm前後の鋸歯状の剝片石器などが知られる程度である。これらの石器の原石は黒曜石で佐賀県佐賀市西方の腰岳産出の黒曜石で、西北九州地方の縄文時代前期、中期、後期前半の遺跡でも石鏃など製作によく利用しているものであり、これが海峡を渡り、朝鮮半島東南部の同時代の櫛文土器を製作していた人々に利用されることは当然のことと思われる。

また1989年、国立晋州博物館で発掘調査を行った慶尚南道西南部、忠武市沖にある統営郡山陽面の烟台島の貝塚で、轟Ａ、Ｂ式の類似土器片とともに、黒曜石製石鏃、黒曜石の小破片などとともに、佐賀県腰岳に近い、多久市付近原産の安山岩で製作したと思われる無茎石鏃１点と横型石匕１点が発掘された。（第３図写真参照）



第２図　ベンケイガイとベンケイガイ貝輪未製品釜山市東三洞塚出土



第３図　烟台島貝塚出土の安山岩製石鏃（左）と安山岩製横型石匕（右上段）

安山岩製の柄部を中心に左右に長くのびた横に下部に細長く刃のついた横型石匕（ナイフ）は轟貝塚でも全く同型のものが、轟A式土器に伴って２点出土しており、鹿児島県北西部の大口盆地で前期末の日勝山式土器に伴って日勝山遺跡からも同形のものが出土している。西九州地方では今から約6000年前から5000年前の間の縄文時代前期に同形の横型石匕がかなり製作されたものと考えられ、熊本県下にまで拡がった安山岩製の横型石匕は佐賀県多久産の安山岩を使用して製作したものと思われる。従って西北九州地方で製作の横刃のナイフの何点かが朝鮮半島東南部地方にも将来され、その１点が烟台島貝塚から発掘されたとしても当然のことではなかろうか。

黒豚伝播の問題

韓国では猪をデェジと呼び、これは黒豚のことであり、野生の日本の山野にも棲息するイノシシは山猪と記し、サンデェジと呼ぶ、従って十二支の亥は猪であり、韓国人は亥歳は豚の歳ということになる。

朝鮮半島でも南部の櫛文土器の時代の貝塚、これに続く無文土器の貝塚からは鹿の骨格とともに猪の骨格も多量に出土し、日本の縄文土器貝塚の狩猟対象獣類とよく似ている。

しかし朝鮮半島に於いてはある時代から中国方面から伝播した黒豚が多くなり、山猪と呼んでいる猪は減少しているのではなかろうか。

済州島の郭支貝塚[注2]は初期鉄器時代一世紀初頭頃の無文土器の貝塚であり、夥しい量のシカとイノシシの骨格が発見されているが、これらは漢拏山の山麓地帯に棲息した野生のもののみか、また中国から入った家畜としての黒豚の遺骨が入っているのか、今後専門研究者に鑑別を依頼する必要があると思っている。

わが日本でも最近の調査で、西日本の弥生時代の貝塚から発見される猪と考えられていた頭蓋骨や下顎骨が黒豚であることが明らかにされ、北海道地方の縄文文化に続く時代の遺跡出土のものにも豚と思われる遺骨の含まれていることが指摘されている。

かつて1940年代に直良信夫が長崎県壱岐島のカラカミヤマ貝塚出土の猪の骨は歯牙から見て、猪ではなく豚であるとされたのは、化石獣類の研究を専門とする博士の炯眼であったからこそ見抜けたものと、今になって敬服するものである。

この事実は中国の黒毛の豚が中国から朝鮮半島に到達したのは櫛文土器の後半、わが日本の縄文時代中期の後半から後期初頭ではないかと思われる。従って西北九州地方に朝鮮半島東南部から対馬　壱岐などの島嶼を経由して、家畜としての黒毛の豚が伝播したのも縄文時代後期まで遡るのではないかと思われる。この黒毛の豚が縄文時代の後期頃に朝鮮半島東南部から西北九州地方へ舟で何回にも移出されたものであることが判明すれば大変興味深い、長崎県下の縄文時代後・晩期の貝塚出土のイノシシと思われてきた上顎、下顎の骨格なども今一度再検討してみると意外な結果がでそうに思われる。

熊本県山鹿市の辨慶穴横穴石室墳にゴンドラ形の舟に馬を一頭ないし二頭積載し、数人が櫓を漕ぐ姿が赤色の絵具で壁面に描かれたものが見られるが、恐らく黒毛の豚もこのように小舟で将来されたものと考えられる。

1989年、国立晋州博物館で発掘調査した忠武市沖の統営郡欲知面の欲知島の東港里貝塚で出土した長さ４cm前後の二頭の猪形土製品は[注3]朝鮮半島南岸から約20km離れた小島であり、猪の乳幼児を本土から舟で運び一代限りの飼育を行った伊豆大島竜ノ口遺跡の例のようなものであったか、既にこの頃から黒毛の豚の飼育が始まっていたものか、この地方島嶼の櫛文土器貝塚出土のイノシシの骨格の再検討調査

すべきであると思った。

煮沸用土器の胎土に滑石粉末を混入する技術

朝鮮半島中部、平壌付近からソウル付近発見の櫛文土器の一部に石綿の粉末を胎土中に含むものがある。ソウル東郊の岩寺洞・渼沙里遺跡などで発見の櫛文土器片のうち、胎土中に石綿を含有するものは一割にも満たぬ少数のものであるが、製作粘土の中に多量の石綿の粉末を混じて成形した高さ40cm、直径30cm前後の丸底深鉢土器は、石綿の粉末を混じないで成形した同じ丸底深鉢土器とでは、毎日の煮焚でひび割れして破損するまでの日数が、１ヶ月前後異なるのではなかろうか。熱の不良導体である石綿の粉末を煮沸用土器の粘土内に混入して成形する技術は朝鮮半島の北半分のいずれかの地方で発明されたものと思われる。

これが半島を南下するに従って石綿の産地とは遠隔の地となり、石綿の粉末入りの土器は手に入りにくくなったものと思われる。しかしその技術を知るものが西北九州に渡り、長崎県長崎市北部の西彼杵半島に滑石の大露頭を発見、この滑石の粉末を胎土に混入すると石綿の粉末を胎土に混入するのと、同一効果のあることを発見したものではなかろうか。

朝鮮半島東南部で櫛文土器を作っていた人々が対馬壱岐島を経て、佐賀県東松浦半島付近に渡米して、釜山付近で作られた櫛文土器と近似の平行沈線による幾何学文様を施文した丸底深鉢の曽畑式土器の製法を、この地に住む土着の人々に教えたことはほぼ疑いないところであろう。そしてこの渡米した人々が西彼杵半島にも居住しこの産地の滑石を粉末にして粘土に混じって土器製法すると、石綿の粉末を混じた土器と同じ効果のあることを発見したものと思われる。従って佐賀県西半部から長崎県下発見の前期後半の曽畑式土器、中期の阿高式土器、後期初頭の北久根山式土器などは製作された土器のほとんどのものに滑石の粉末が胎土中に多量に含有している。ところがこの産地と遠隔な宇土市曽畑貝塚出土の曽畑式土器では煮沸用の丸底深鉢でも滑石の粉末を胎土に混入しているものは１割に満たない数である。同じことが朝鮮半島東南部の櫛文土器出土遺跡についてもいえるのである。釜山市東三洞貝塚、金海郡長有面水佳里貝塚など出土土器の胎土に滑石の粉末を含有しているものは１割に満たない数である。

この場合、滑石の粉末を混入した土器は長崎或いは佐賀県西部の滑石の産地近くで作られ、煮沸用の深鉢土器のみが遠隔地の要望に答えて送り出されたものであろうか、東三洞貝塚など釜山付近の遺跡で滑石の原石の発見はないようであり、朝鮮半島東南部へ滑石粉末混入の煮沸用の土器が輸出されたと見るべきであろうか。東三洞貝塚で阿高式土器や北久根山式土器の破片の存在も、西北九州地方で製作された土器が将来されたと考えて、始めて合点のゆくものである。空の土器のみが来たか、中に食品などが入れられて輸出されたかは今後の研究課題である。

結　語

以上いくつかの問題を提起して朝鮮半島東南部と西北九州地方の間に物資の交流のあることを指摘したが、この事実がはたして両地の初期の経済交流と見做すことができるかに問題点がある。

最初に記した親潮（寒流）系の海岸に棲息するホタテガイ、ウバガイ、アズマニシキ、エゾキンチャク、などの斧足類が熊本県宇土市の轟貝塚あたりまで、釜山付近産のものが食料として運ばれている事実は、西北九州地方の海岸地帯にかなり広範に送りこまれていたのではないかと思考されるところであり、この当時の西九州地方の前期縄文文化人の嗜好にあった親潮系貝類の見返り物資として朝鮮半島東

南部へ送り出されたものには暖海の外洋に面した海岸に棲息するベンケイガイの貝殻を腕輪の原料として、また剝片石器を製作の原料である黒曜石、安山岩などとこれらの石で製作した石鏃、鋸歯状剝片石器、横型石匕などの製品としての剝片石器類であったと思われる。他に黒潮系の魚介類も考えられるが、今日までの釜山市東三洞貝塚の発掘調査ではそれらしきものをまだ見出していない。

黒豚の将来、滑石の粉末を胎土に混入した煮沸用土器の輸出の問題も縄文時代前期以降の交流、交易問題として提起はできるが、未だその詳細は把握されていない。

韓国東南部と西北九州地方の初期経済交流の問題はようやくその萠芽を見出したと申しても過言ではないと考える。この小論がこのような問題に対する研究の端緒ともなればと考え、以上のような愚考を草した次第である。

注

1 江坂輝彌 朝鮮半島南部と西九州地方の先史・原史時代における交易と文化交流 7頁～12頁 松阪大学紀要第4号 1986年9月

2 李 白圭・李 清圭 郭支貝塚発掘調査報告 済州大学校博物館遺蹟調査報告第1輯 1985年2月

3 江坂輝彌 韓国東南部の櫛文土器貝塚で猪を模した土製品発見 4頁～5頁 郵政考古紀要25冊 1990年11月

付 編 2

轟貝塚及び轟式土器に関する主な調査報告・論文一覧表

轟貝塚及び轟式土器に関する主な調査報告・論文一覧表１

No.	著者名	発行年	表題	収録誌巻号	発行所
1	鈴木文太郎	1917	河内国府人骨・肥後轟貝塚にて発掘せる人骨について報じ併せて石器時代の住民に及ぶ	京都帝国大学文学部考古学研究報告第２冊	
2	鈴木文太郎	1918	肥後轟貝塚河内道明寺等にて発掘せる人骨に就いて	人類学雑誌第33巻第３号	
3	濱田耕作・榊原政職	1920	肥後国宇土郡轟村宮荘貝塚発掘報告	京都帝国大学文学部考古学研究報告第５冊	
4	清野謙次	1920	肥後国宇土郡轟村宮荘貝塚人骨報告	京都帝国大学文学部考古学研究報告第５冊	
5	小林久雄	1930	益宇三郡の貝塚に就いて	九州日日新聞（昭和５年12月７・９・11日） ※小林1967に再録	
6	三森定男	1935	肥後轟貝塚の土器について－覚書－	考古学第６巻第２・５号	
7	小林久雄	1935	肥後縄文土器編年の概要	考古学評論第１巻第２号	
8	小林久雄	1939	九州の縄文土器	人類学考古学講座11	
9	江坂輝彌	1959	縄文文化の発見　押捺文土器に遅れて貝殻条痕文土器は、早期末に近い頃山陰方面から九州西部へ広がる		
10	京都大学文学部博物館	1960	宇土市宇土轟貝塚	京都大学文学部博物館考古学資料目録第１部	
11	松本雅明・富樫卯三郎	1961	轟式土器の編年－熊本県宇土市轟貝塚調査報告－	考古学雑誌第47巻第３号	日本考古学会
12	杉村彰一	1962	曽畑式土器文化に関する一考察	熊本史学第23号	熊本史学会
13	松本雅明	1962	熊本県宇土市轟貝塚	日本考古学年報第11号	日本考古学協会
14	江坂輝彌	1966	縄文土器－九州篇〔１〕－	考古学ジャーナル１	
15	江坂輝彌	1967	縄文土器－九州篇〔５〕－	考古学ジャーナル12	
16	小林久雄	1967	九州縄文土器の研究		小林久雄先生遺稿刊行会
17	河口貞徳	1967	片野洞穴	日本の洞穴遺跡	平凡社
18	河口貞徳	1967	黒川洞穴	日本の洞穴遺跡	平凡社
19	松本雅明	1967	肥後考古学会の成立前後	九州縄文土器の研究	
20	大場磐雄ほか監修	1969	新版考古学講座３　先史文化－無土器・縄文文化－		雄山閣
21	清野謙次	1969	肥後国宇土郡轟村字宮の荘貝塚	日本貝塚の研究	
22	江坂輝彌	1971	熊本県宇土市轟貝塚	日本考古学年報第19号	日本考古学協会
23	小片丘彦	1972	古病理学的にみた日本人骨の研究	新潟医学会雑誌86-11	新潟医学会
24	山崎純男	1972	天草地方の始原文化の一側面	熊本史学第40号	熊本史学会
25	渡辺　誠	1973	縄文人の習俗－装身具をつけた人骨－	古代史発掘第２巻	講談社
26	緒方　勉	1974	轟貝塚（西岡台）の調査　国指定を待つ貴重な縄文の素顔	ふるさとの自然と歴史	歴史と自然を守る会
27	坂田邦洋	1974	曽畑式土器に関する研究　尾田貝塚		
28	高宮廣衛ほか	1975	沖縄県読谷村字渡具知東原発見の土器－沖縄諸島における曽畑・轟系の土器資料－	考古学ジャーナル115	
29	山崎純男	1975	九州地方における貝塚研究の諸問題	九州考古学の諸問題	福岡考古学研究会
30	平山修一・髙木恭二	1977	轟貝塚（西岡台地区）の調査	宇土城跡（西岡台）本文編　宇土市埋蔵文化財調査報告書第１集	宇土市教育委員会
31	青崎和憲ほか	1978	阿多貝塚	金峰町埋蔵文化財調査報告書１	金峰町教育委員会
32	酒匂義明	1979	野久尾遺跡		志布志町教育委員会

轟貝塚及び轟式土器に関する主な調査報告・論文一覧表２

No.	著者名	発行年	表題	収録誌巻号	発行所
33	林田憲義	1979	宮島貝塚	松橋町史	松橋町
34	江坂輝彌	1980	熊本県轟貝塚出土の打製靴型石器について	日本民族と南方文化	平凡社
35	江坂輝彌	1980	西北九州地方の縄文文化と朝鮮半島南部の先史時代	考古学ジャーナル№183	ニューサイエンス社
36	坂田邦洋	1980	九州の縄文早・前期土器の編年	史学論叢11号	別府大学
37	坂田邦洋	1980	石器時代の対馬	考古学ジャーナル№183	ニューサイエンス社
38	新東晃一	1980	火山からみた南九州縄文早期・前期土器の様相	鏡山猛先生古希記念古文化論攷	
39	田辺哲夫・坂田邦洋	1981	尾田貝塚		広雅堂
40	富永直樹	1981	野口遺跡	久留米市文化財調査報告書第28集	久留米市教育委員会
41	岡本勇編	1982	縄文土器大成１　早・前期		講談社
42	田島龍太ほか	1982	菜畑	唐津市文化財調査報告書第５集	唐津市教育委員会
43	田中良之	1982	曽畑式土器の展開	末盧国	六興出版
44	江坂輝彌	1983	化石の知識　貝塚の貝	考古学シリーズ９	東京美術
45	中村愿	1983	曽畑式土器	縄文文化の研究３	雄山閣出版
46	坂本経堯	1983	轟貝塚	肥後上代文化資料集成	肥後上代文化研究会
47	出口浩ほか	1983	上焼田遺跡	鹿児島県埋蔵文化財調査報告書25	鹿児島教育委員会
48	長野真一ほか	1983	大隈地区埋蔵文化財分布調査概報	鹿児島県埋蔵文化財調査報告書25	鹿児島教育委員会
49	加納　梓	1984	轟Ｃ・Ｄ式土器と第Ⅷ群土器について	長崎市立深堀小学校校舎増築に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書	長崎市教育委員会
50	中村耕治ほか	1984	大隈地区埋蔵文化財分布調査概報	鹿児島県埋蔵文化財調査報告書29	鹿児島教育委員会
51	河口貞徳	1985	塞ノ神式土器と轟式土器	鹿児島考古第19号	鹿児島考古学会
52	木下洋介・髙木恭二ほか	1985	西岡台貝塚	宇土市埋蔵文化財調査報告書第12集	宇土市教育委員会
53	松藤和人ほか	1986	伊木力		同志社大学考古学研究室
54	新東晃一・山崎純男	1986	縄文時代	図説発掘が語る日本史６　九州・沖縄編	新人物往来社
55	髙橋信武	1986	右京西遺跡		萩町教育委員会
56	鄭澄正（訳：宮本一夫）	1986	韓国南海岸地方における隆起文土器の研究	考古学雑誌第72巻第２号	日本考古学会
57	山口信義	1987	隆帯文（轟Ｂ式）土器研究ノート	研究紀要　創刊号	北九州市教育文化事業団
58	江本直ほか	1988	曽畑	熊本県文化財調査報告書第100集	熊本県教育委員会
59	浦田信智	1988	縄文時代前期「轟式土器」について	曽畑　熊本県文化財調査報告書第100集	熊本県教育委員会
60	西住欣一郎編	1988	鼓ヶ峰遺跡	熊本県文化財調査報告書第96集	熊本県教育委員会
61	水ノ江和同	1988	曽畑式土器の出現－東アジアにおける先史時代の交流－	古代学研究117号	古代学研究会
62	髙橋信武	1989	轟式土器再考	考古学雑誌第75巻第１号	日本考古学会
63	宮本一夫	1989	轟式土器様式	縄文土器大観１	小学館
64	宮本一夫	1990	轟Ｂ式土器の再検討－京都大学文学部博物館収蔵資料を中心に	肥後考古７号	肥後考古学会
65	江坂輝彌	1991	先史時代における朝鮮半島南部と西九州地方との初期経済交流について	松阪政経研究第9巻	松阪大学（現三重中京大学）
66	原口長之	1991	河内町周辺の縄文遺跡	河内町史通史編　上	河内町
67	水ノ江和同	1992	書評『轟Ｂ式土器』に関する三篇の論文	考古学研究第38巻第４号	考古学研究会

轟貝塚及び轟式土器に関する主な調査報告・論文一覧表３

No.	著者名	発行年	表題	収録誌巻号	発行所
68	小田富士雄ほか編	1994	九州の貝塚 - 貝塚が語る縄文人の生活 -	北九州市立考古博物館第12回特別展展示図録	北九州市立考古博物館
69	小林達雄	1994	縄文土器の研究		小学館
70	杉村彰一	1994	轟貝塚	縄文時代研究辞典	東京堂出版
71	李相均	1994	縄文前期前半期における轟Ｂ式土器群の様相	東京大学文学部考古学研究室紀要第12号	
72	桑畑光博	1995	宮崎県内出土の轟Ｂ式土器	宮崎考古第14号	宮崎考古学会
73	島津義昭	1996	轟式土器	日本土器辞典	雄山閣
74	桑畑光博	1997	文化交流の進展（前期～中期）	宮崎県史　原始・古代Ｉ	宮崎県
75	池田朋生	1998	縄文時代前期末～中期初頭における土器の展開－中九州を中心に－	肥後考古第11号	肥後考古学会
76	髙木正文	1999	九州出土先史時代動物遺存体集成	環東中国海沿岸地域の先史文化第２編（追補）	
77	池田朋生	2001	熊本県の貝塚の様相	九州の貝塚	九州縄文研究会・肥後考古学会
78	池田朋生編	2001	石の本遺跡Ⅲ	熊本県文化財調査報告書第194集	熊本県教育委員会
79	九州縄文研究会 熊本大会事務局編	2001	九州の貝塚　第11回九州縄文研究会熊本大会		九州縄文研究会・肥後考古学会
80	鄭澄元・河仁秀 （訳：水ノ江和同）	2001	南海岸地方と九州地方の新石器時代文化交流研究	古文化談叢第47号	九州古文化研究会
81	中川毅人	2001	轟貝塚出土の動物遺存体および貝製品	考古学研究室報告第36集	熊本大学文学部考古学研究室
82	村上浩明編	2001	柳貝塚採集資料	考古学研究室報告第36集	熊本大学文学部考古学研究室
83	池田朋生	2002	轟貝塚	新宇土市史資料編第２巻	宇土市
84	古森政次・金田一精	2003	縄文時代	新宇土市史通史編第１巻	宇土市
85	山崎純男	2004	九州縄文土器の編年	先史・古代東アジア出土の植物遺存体（２）	熊本大学文学部
86	角田賢治	2004	宇城語展～貝塚からのメッセージ～	平成16年度後期企画展示肥後の至宝展Ⅲ	熊本県立装飾古墳館
87	藤本貴仁	2005	轟貝塚・馬門石石切場跡－宇土市内遺跡範囲確認調査概報－	宇土市埋蔵文化財調査報告書第27集	宇土市教育委員会
88	藤本貴仁・髙木恭二	2006	轟貝塚 馬門石石切場跡－宇土市内遺跡範囲確認調査報告書－	宇土市埋蔵文化財調査報告書第28集	宇土市教育委員会

図　版

PLATES

轟貝塚遠景（東より）

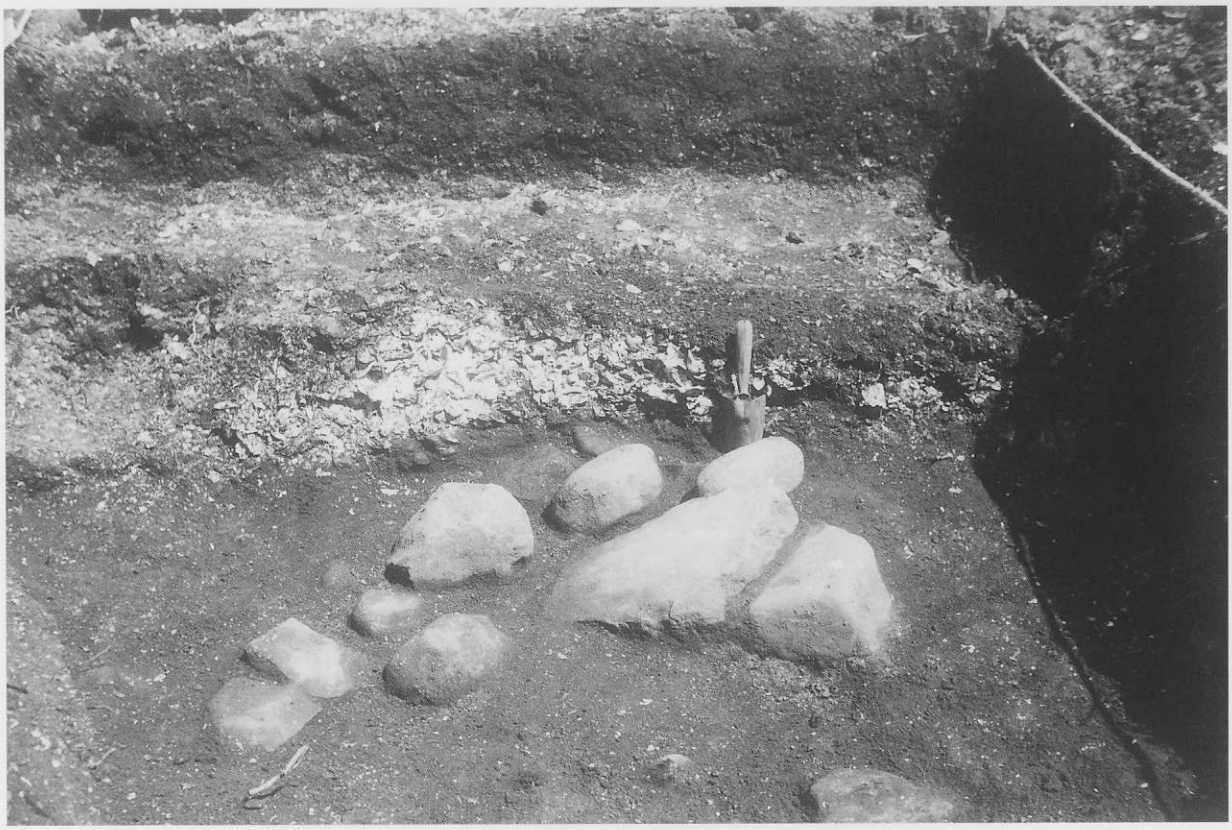
轟貝塚近景（北東より）

図版 2

A・C・Dトレンチ付近調査状況（東より）

C・Dトレンチ調査状況（西より）

マガキを主体とする貝層（Dトレンチ）



配石遺構（Bトレンチ2グリッド、南西より）

図版 4

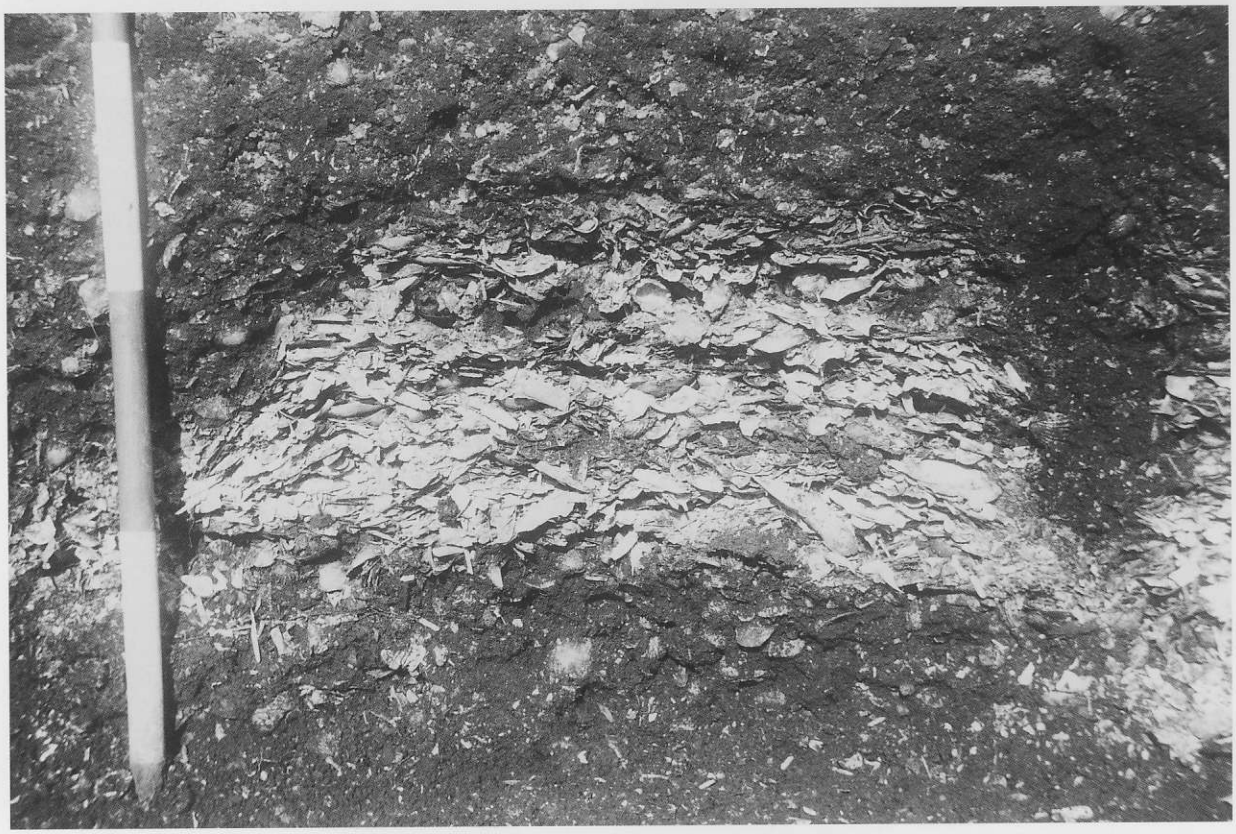
褐色土層出土轟式土器（Dトレンチ20グリッド）

褐色土層出土轟式土器

1号人骨検出状況（左上：調査状況〔南東より〕、右上：検出状況〔北西より〕、左下：上半身部分、右下：食物残渣検出状況〔三角矢印部分〕）

図版 6

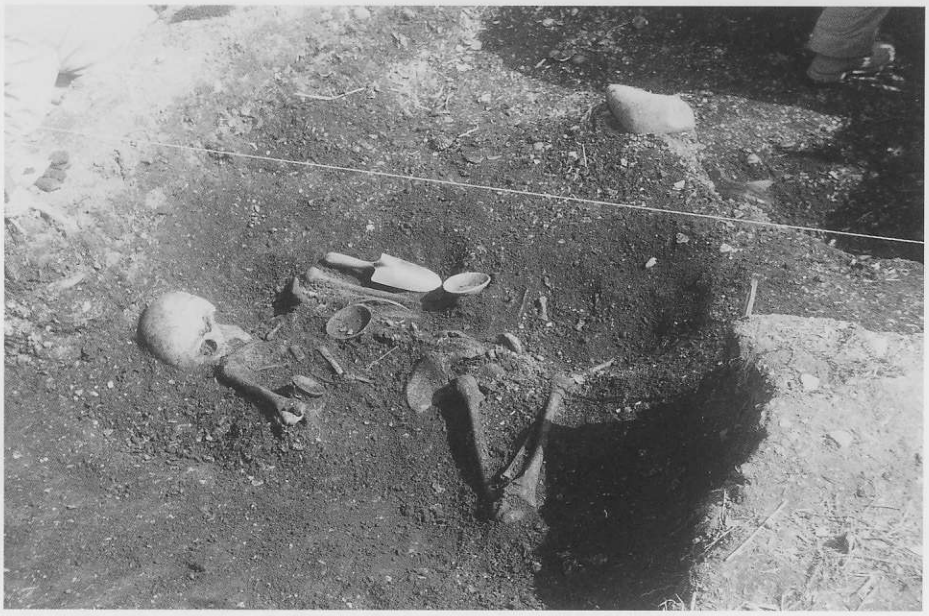
2号人骨検出状況（東より）



アゲマキを主体とする貝層（Eトレンチ）

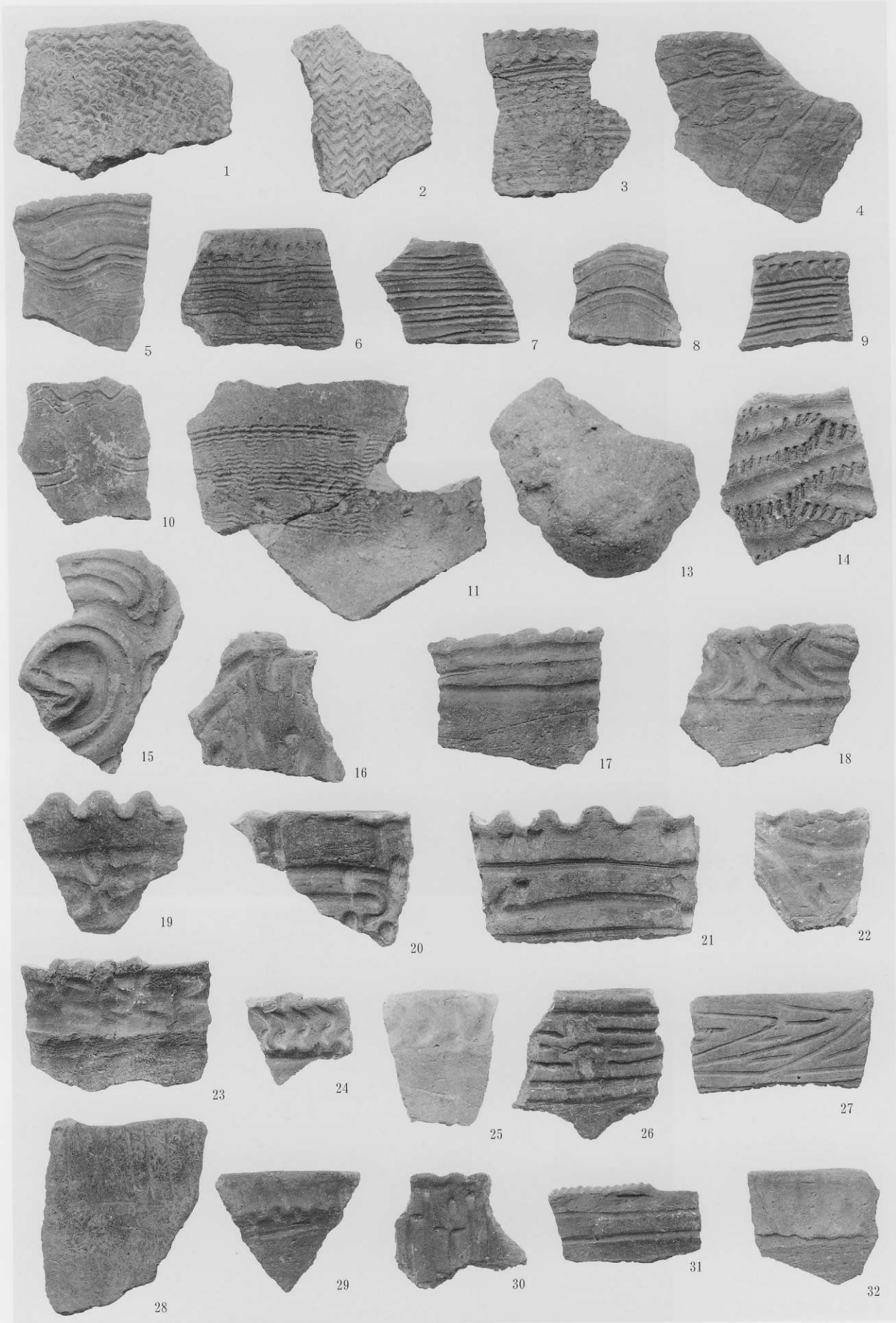
5・8号人骨検出状況
（東より）

同上埋土出土縄文土器
（挿図番号446、西より）

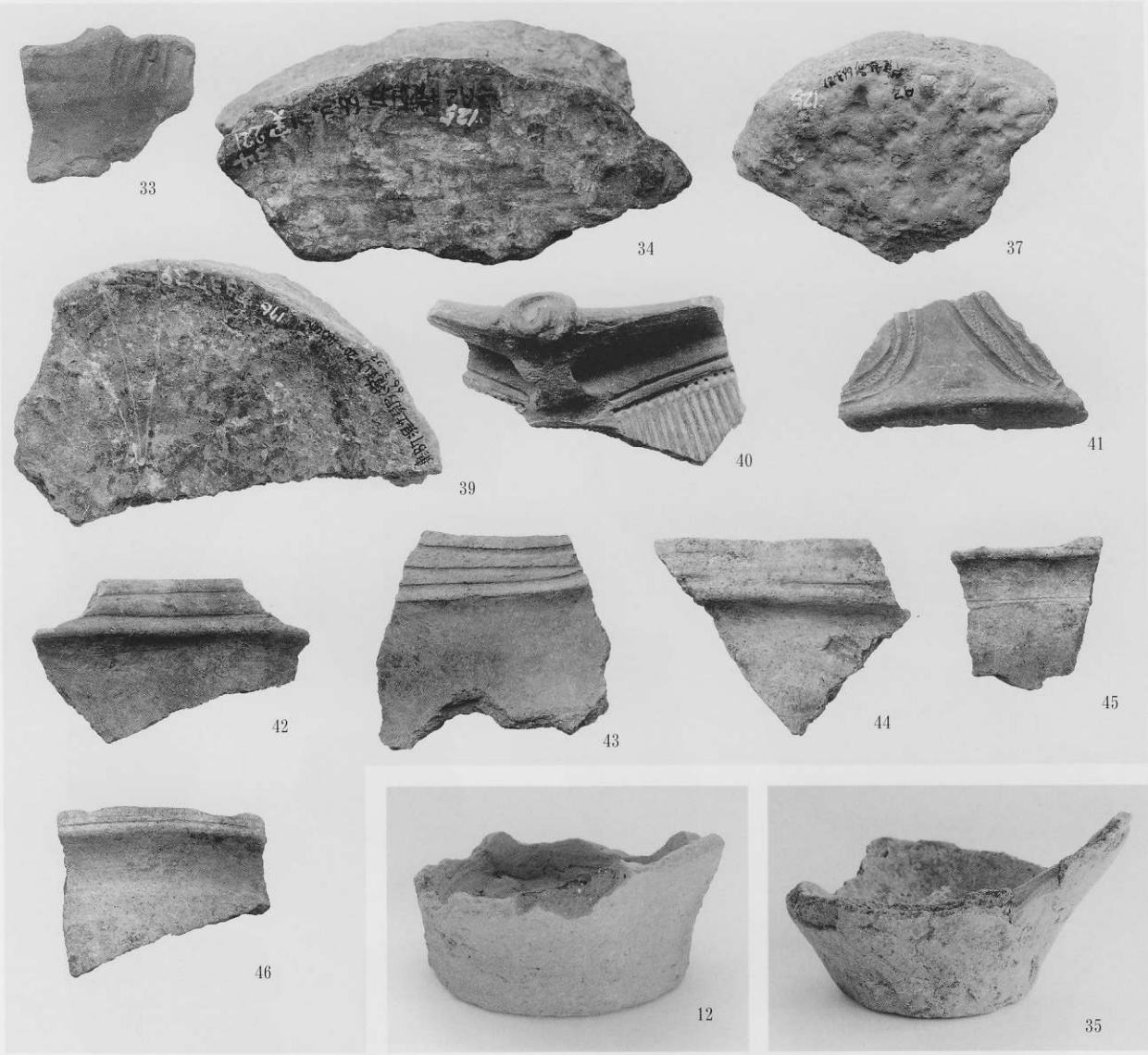


4号人骨検出状況
（南より）

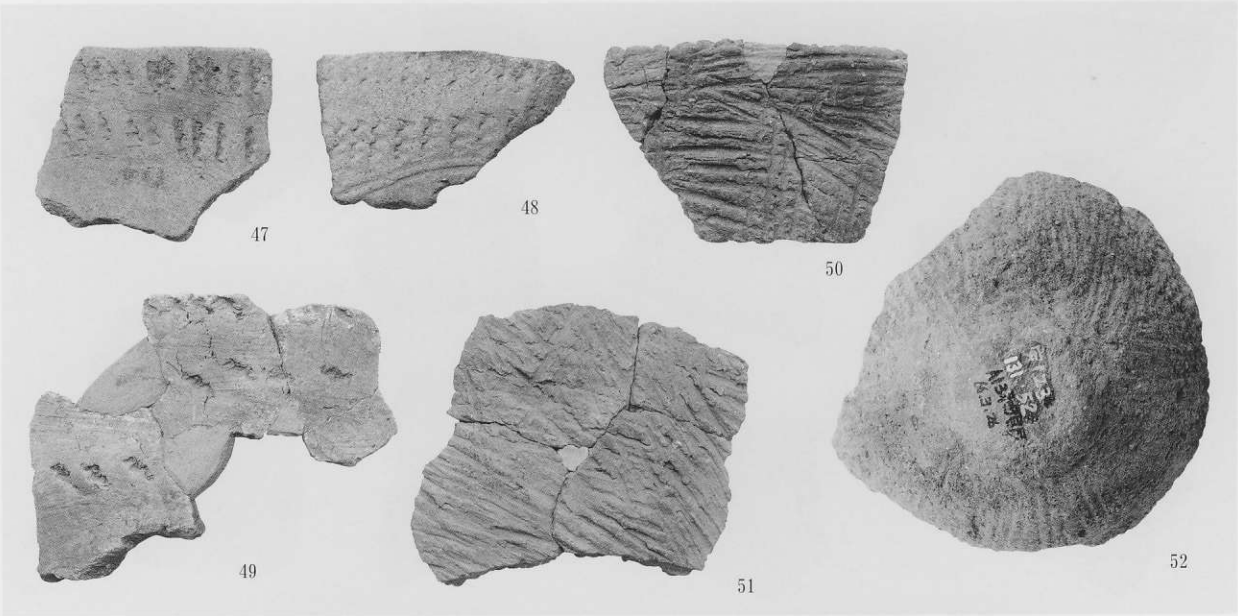
図版 8



表土層及び撹乱層（A～Dトレンチ基本層序Ⅰ層）出土縄文土器 1

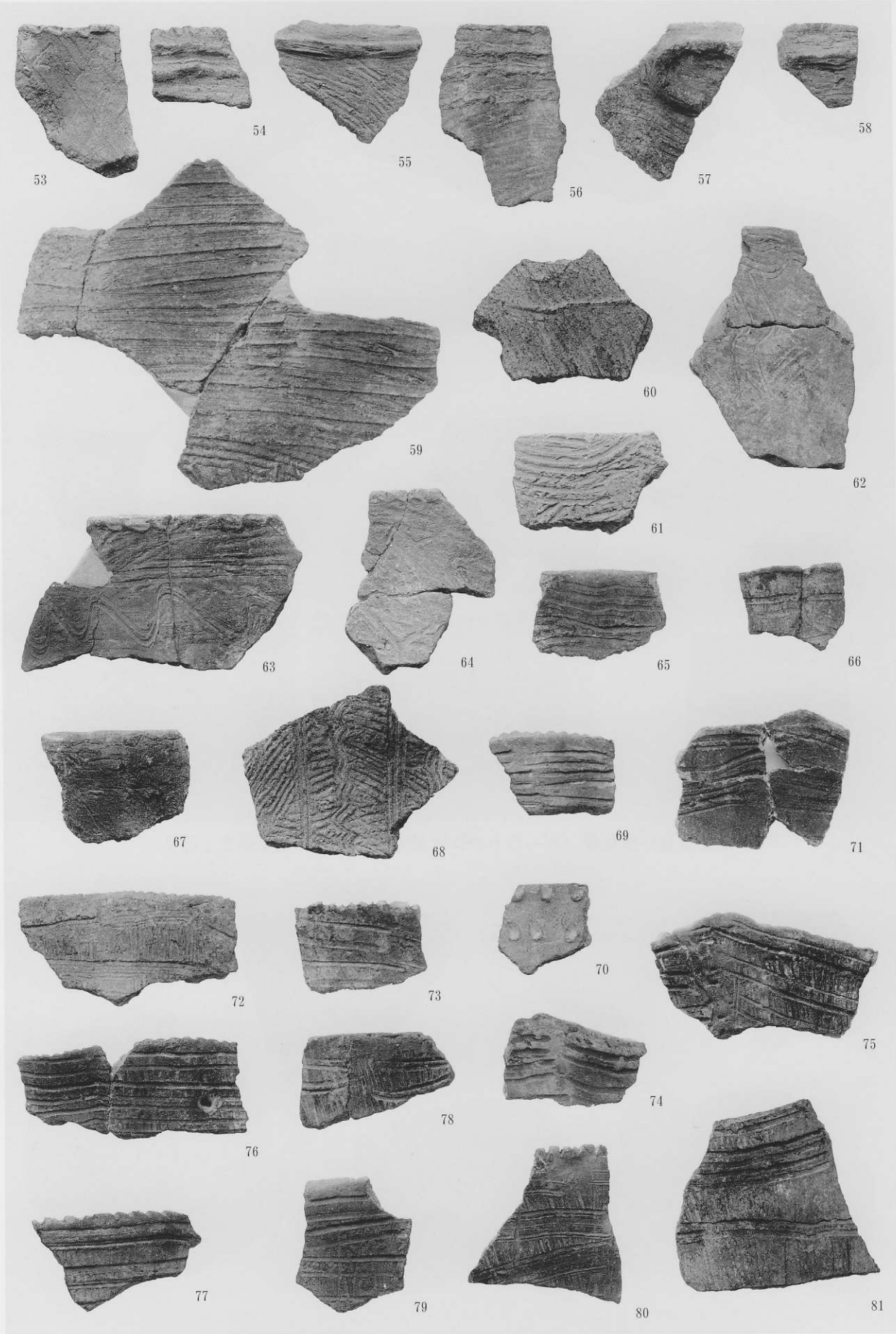


表土層及び撹乱層（A～Dトレンチ基本層序Ⅰ層）出土縄文土器 2

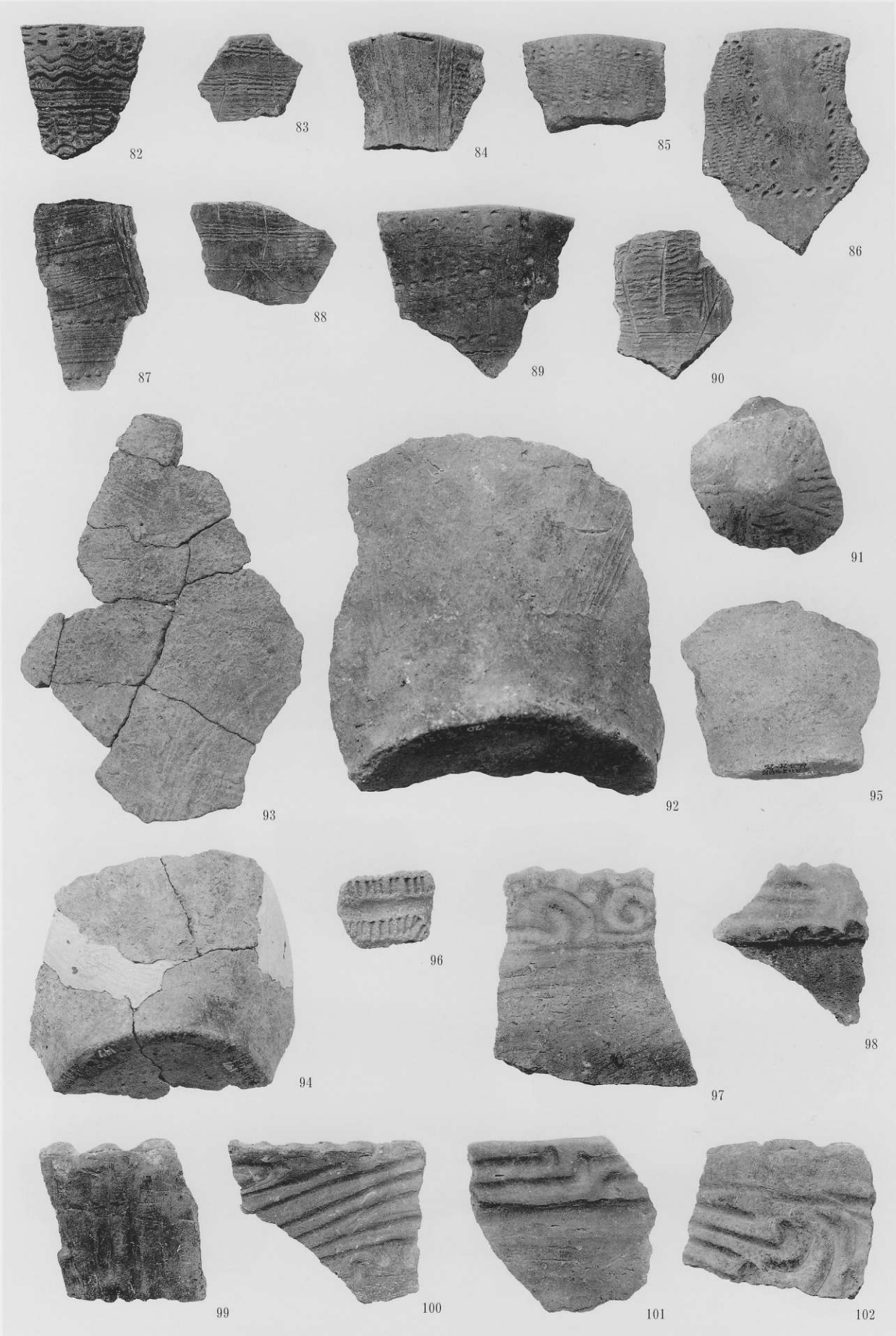


黒・褐色混土貝層及び混貝土層（A～Dトレンチ基本層序Ⅱ層）出土縄文土器 1

図 版 10

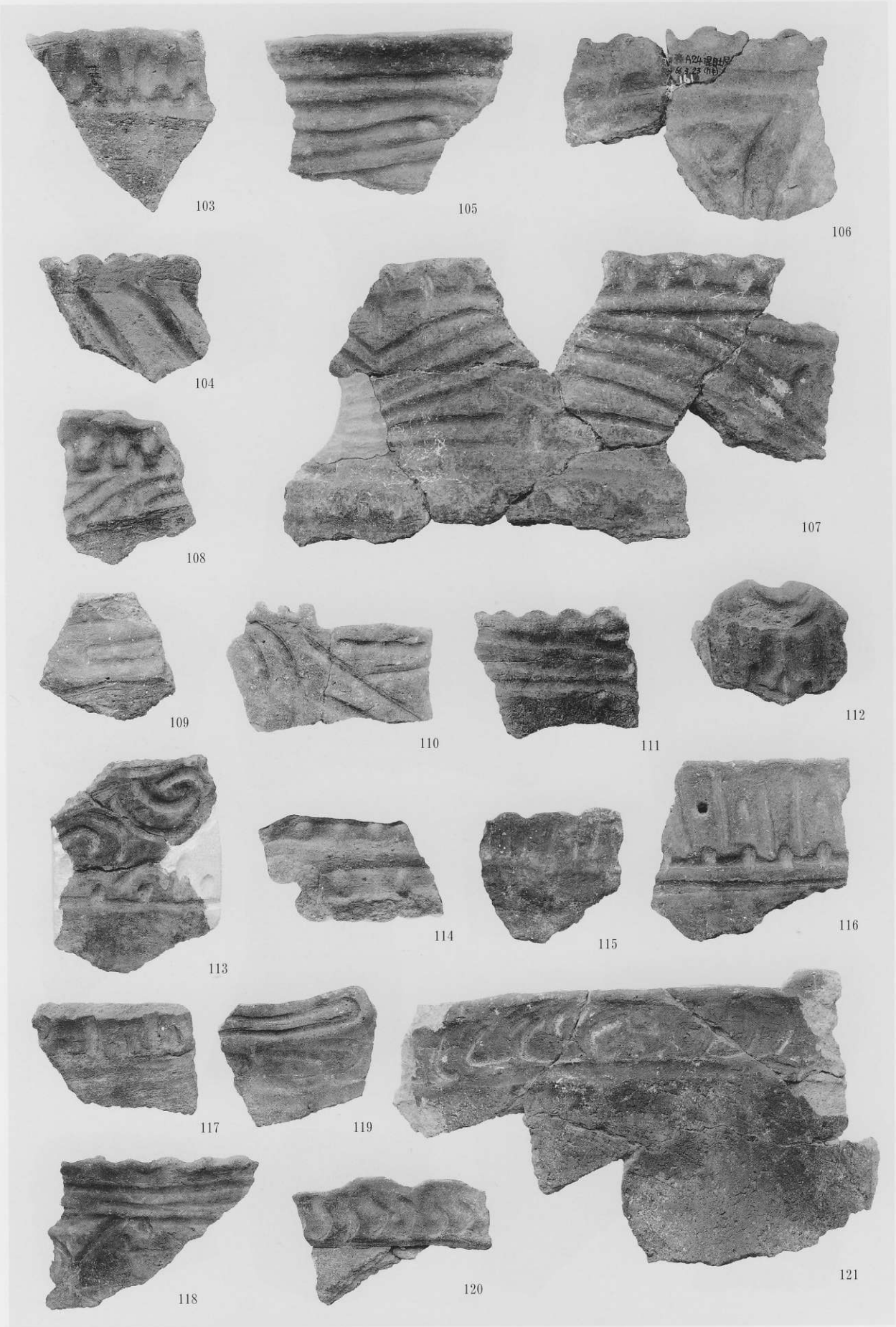


黒・褐色混土貝層及び混貝土層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅱ層）出土縄文土器２

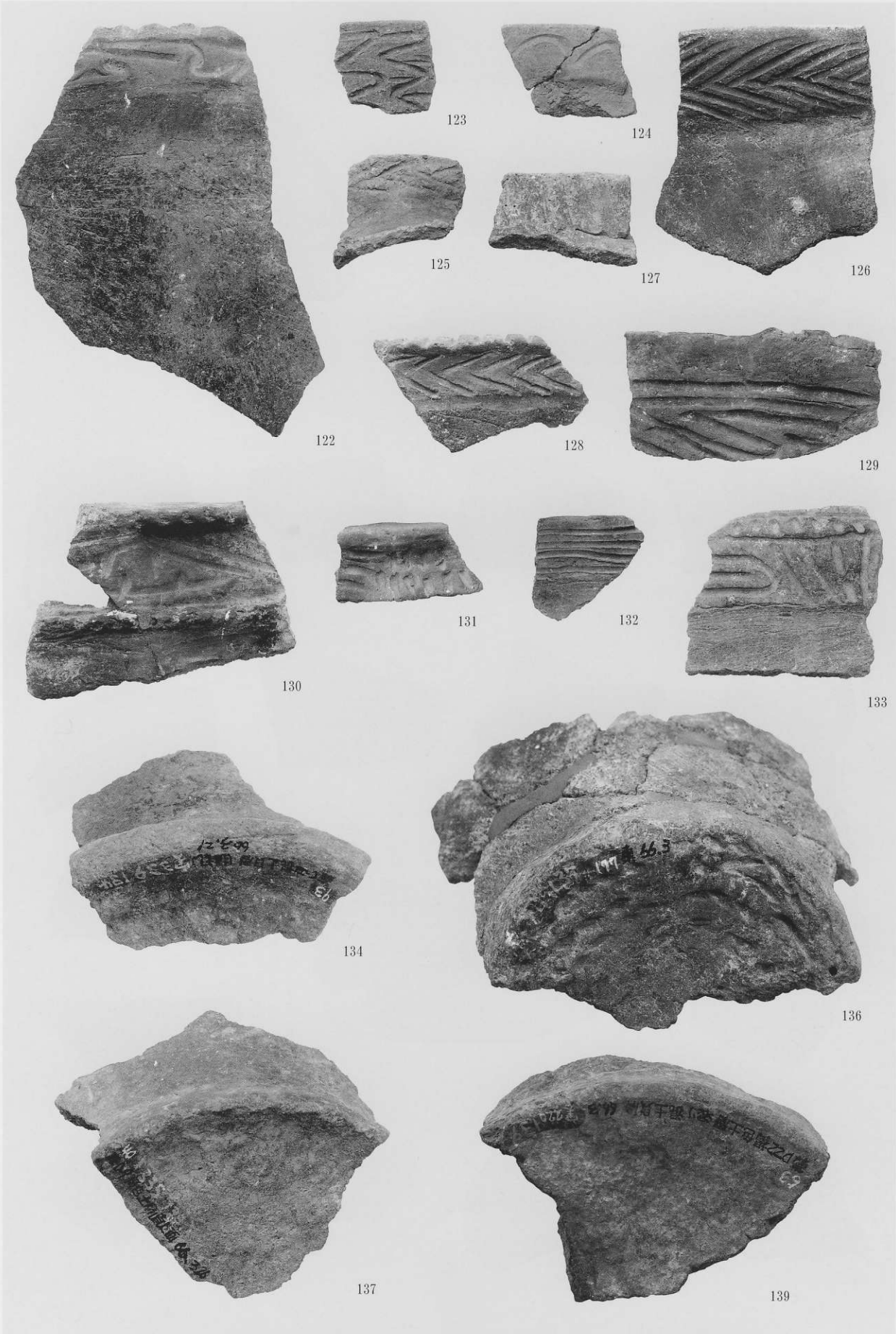


黒・褐色混土貝層及び混貝土層（A～Dトレンチ基本層序Ⅱ層）出土縄文土器３

図版 12

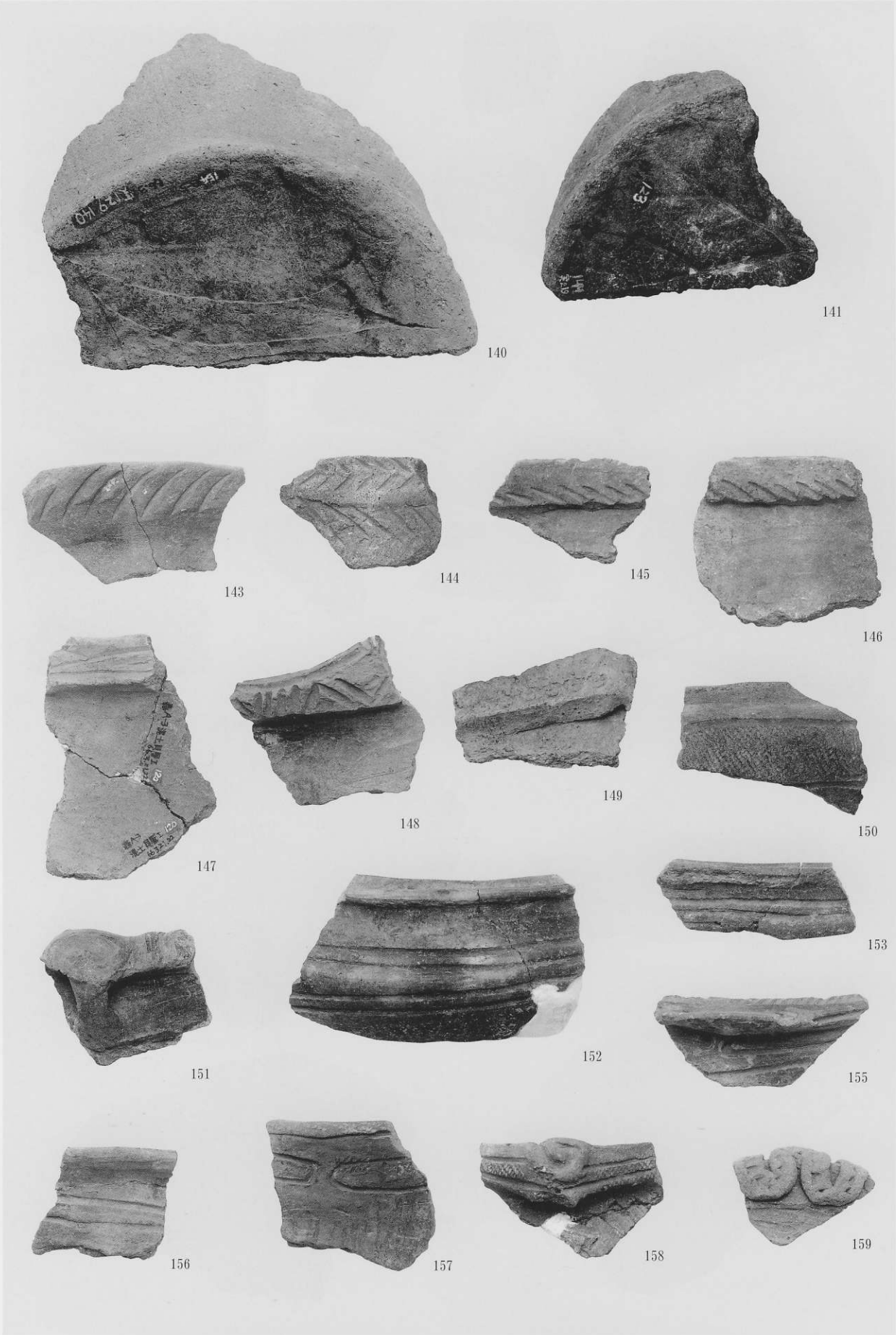


黒・褐色混土貝層及び混貝土層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅱ層）出土縄文土器４



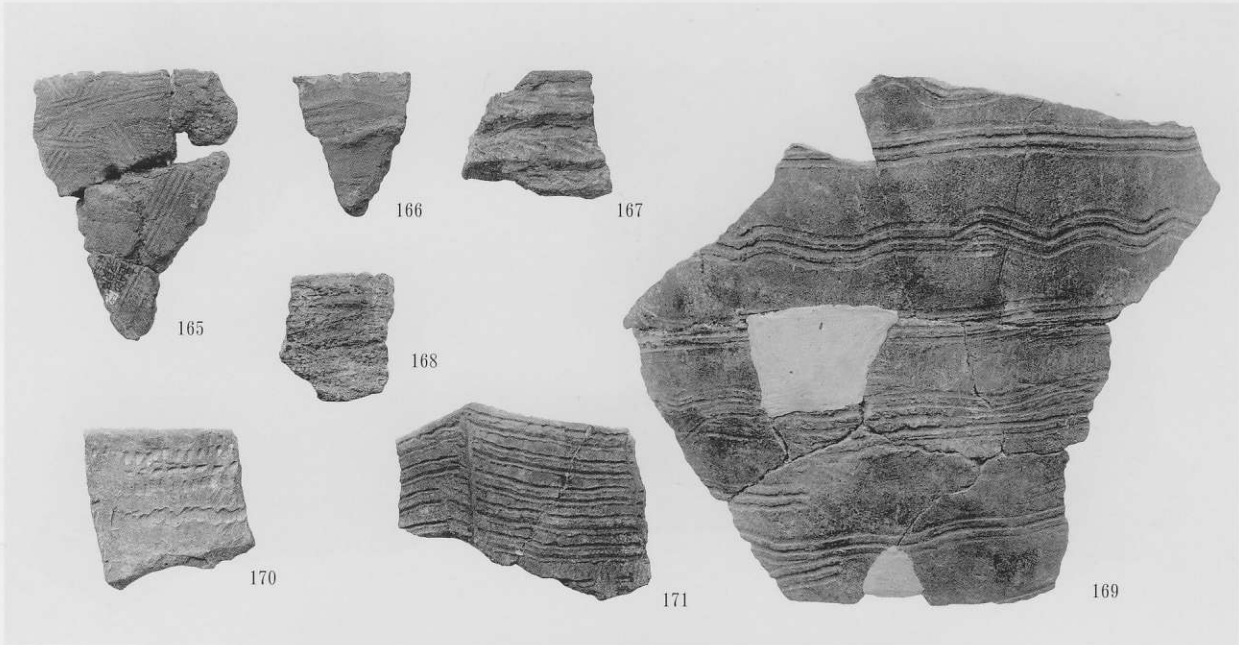
黒・褐色混土貝層及び混貝土層（A～Dトレンチ基本層序Ⅱ層）出土縄文土器５

図 版 14



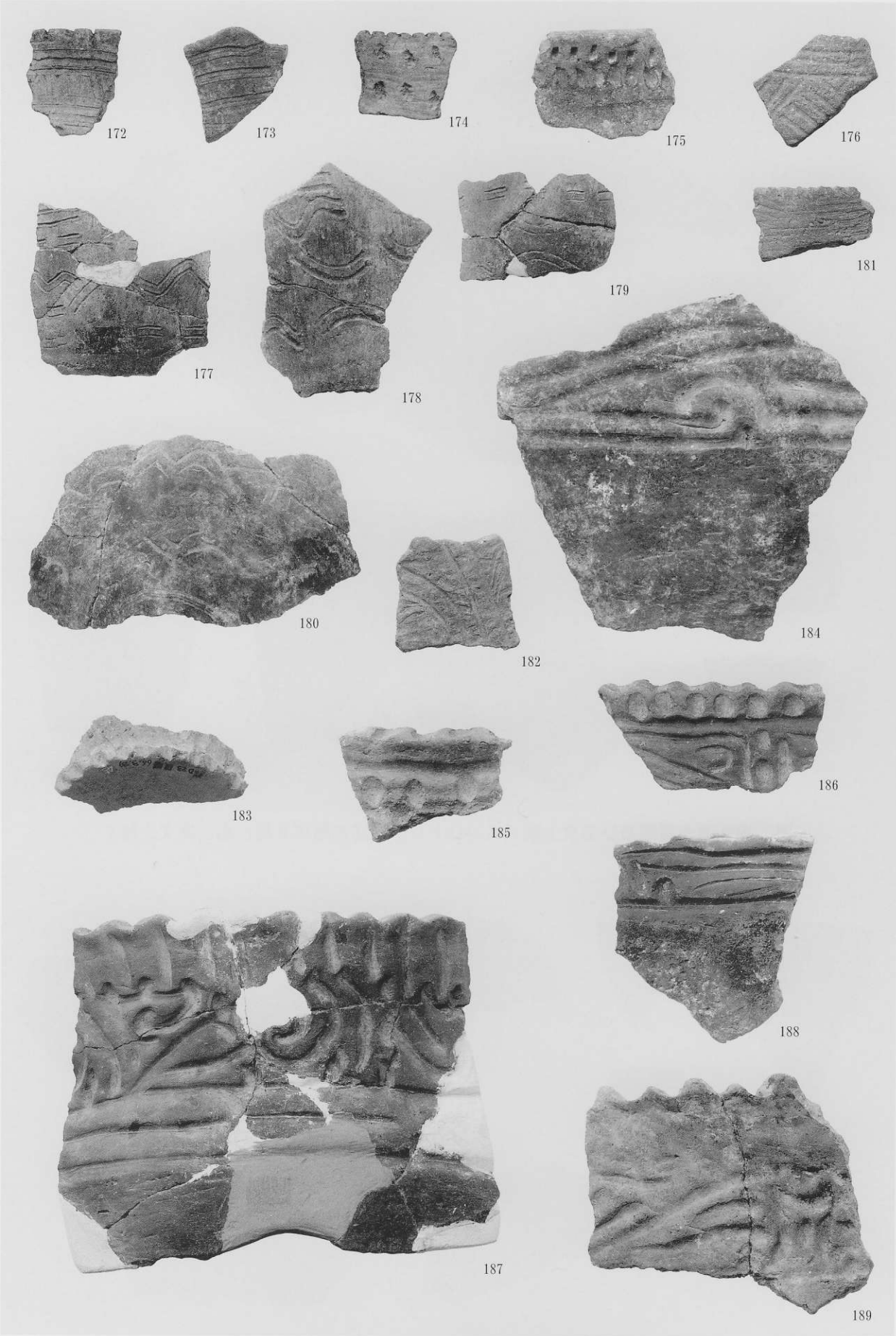
黒・褐色混土貝層及び混貝土層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅱ層）出土縄文土器６

黒・褐色混土貝層及び混貝土層（A～Dトレンチ基本層序Ⅱ層）出土縄文土器 7

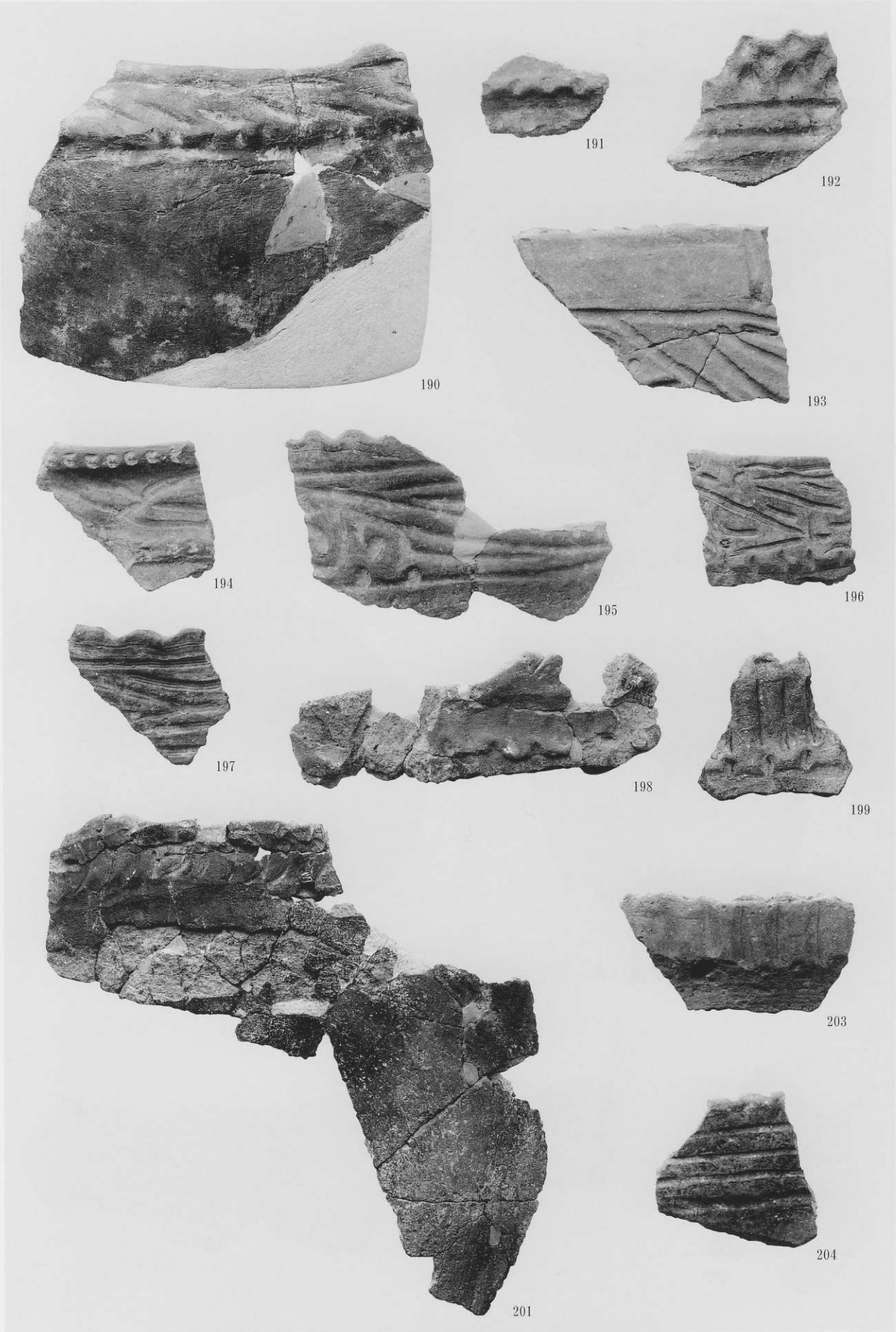


純貝層（A～Dトレンチ基本層序Ⅲ層）出土縄文土器 1

図版 16



純貝層（A～Dトレンチ基本層序Ⅲ層）出土縄文土器２

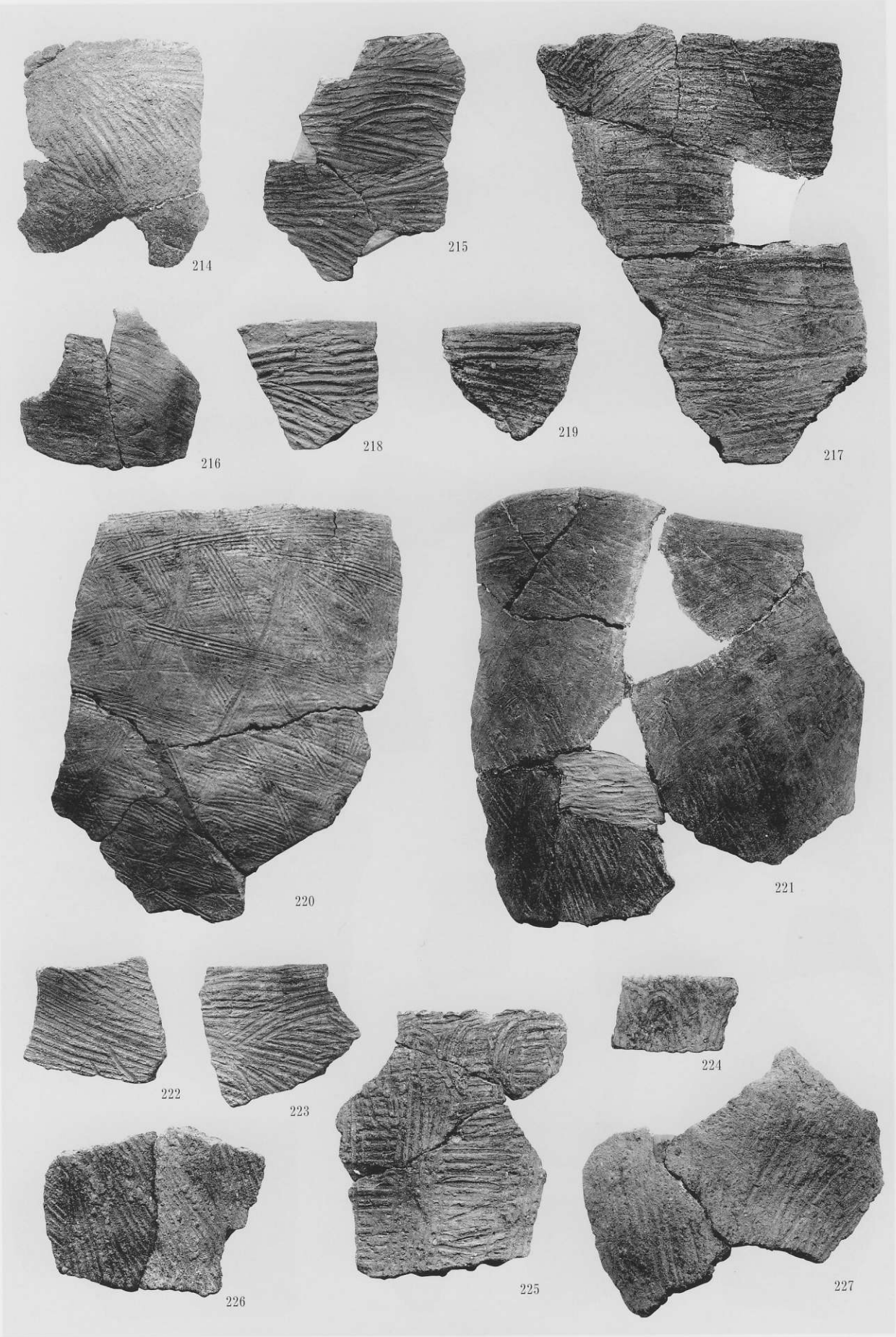


純貝層（A～Dトレンチ基本層序Ⅲ層）出土縄文土器３

図版 18

純貝層（A～Dトレンチ基本層序Ⅲ層）出土縄文土器 4

褐色土層（A～Dトレンチ基本層序Ⅳ層）出土縄文土器 1



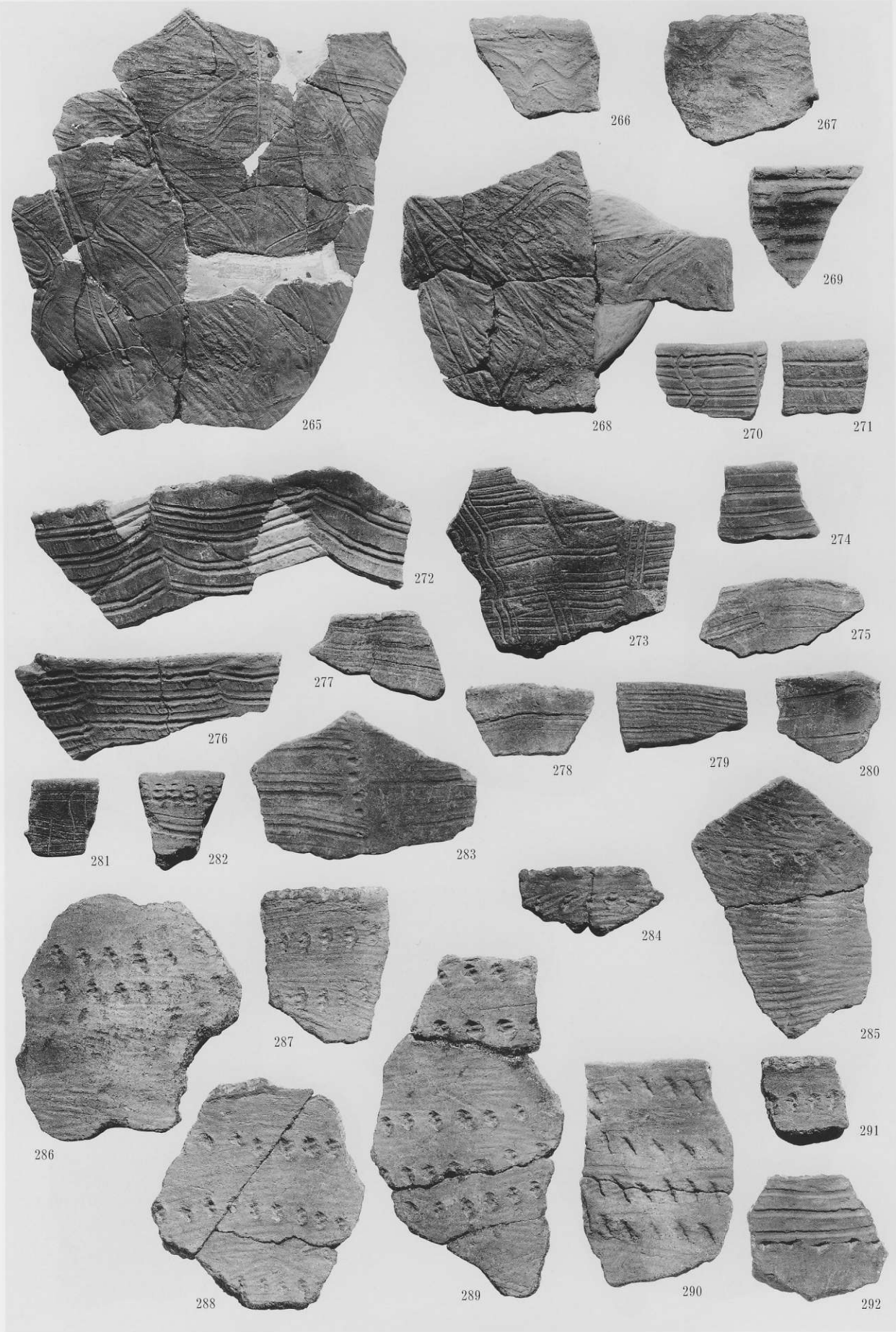
褐色土層（A～Dトレンチ基本層序Ⅳ層）出土縄文土器 2

図版 20

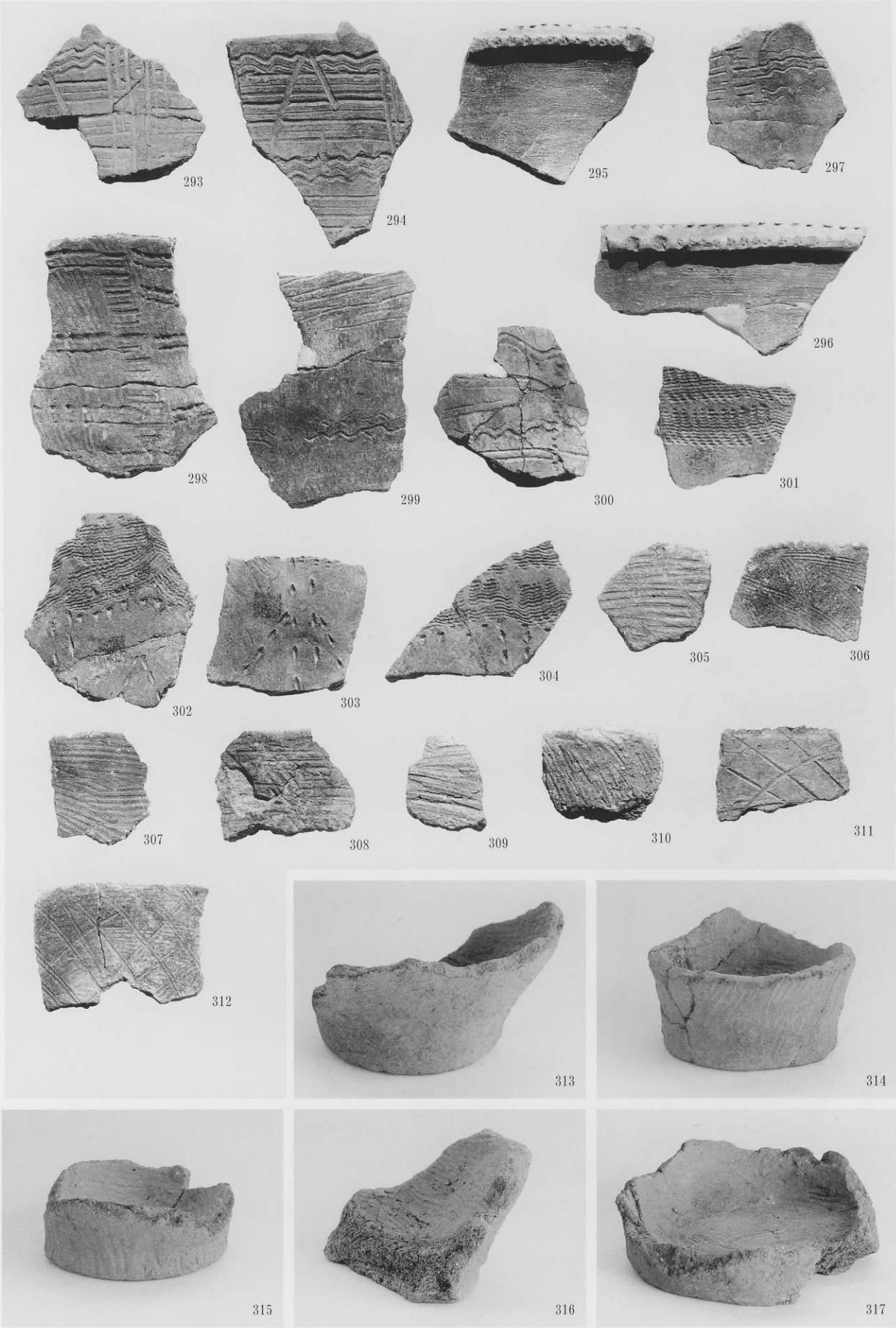
褐色土層（A～Dトレンチ基本層序Ⅳ層）出土縄文土器３

褐色土層（A～Dトレンチ基本層序Ⅳ層）出土縄文土器４

図版 22

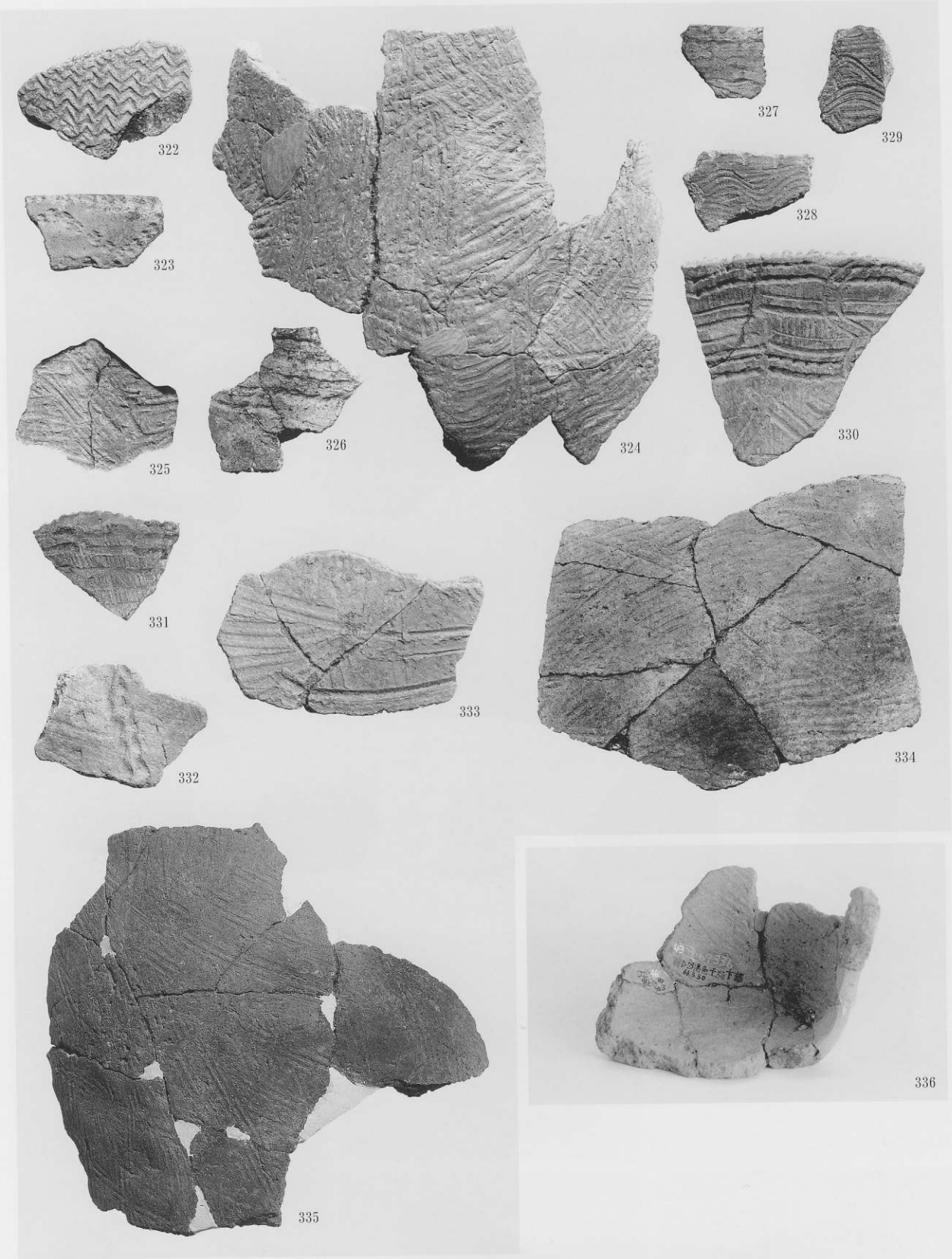


褐色土層（A～Dトレンチ基本層序Ⅳ層）出土縄文土器５

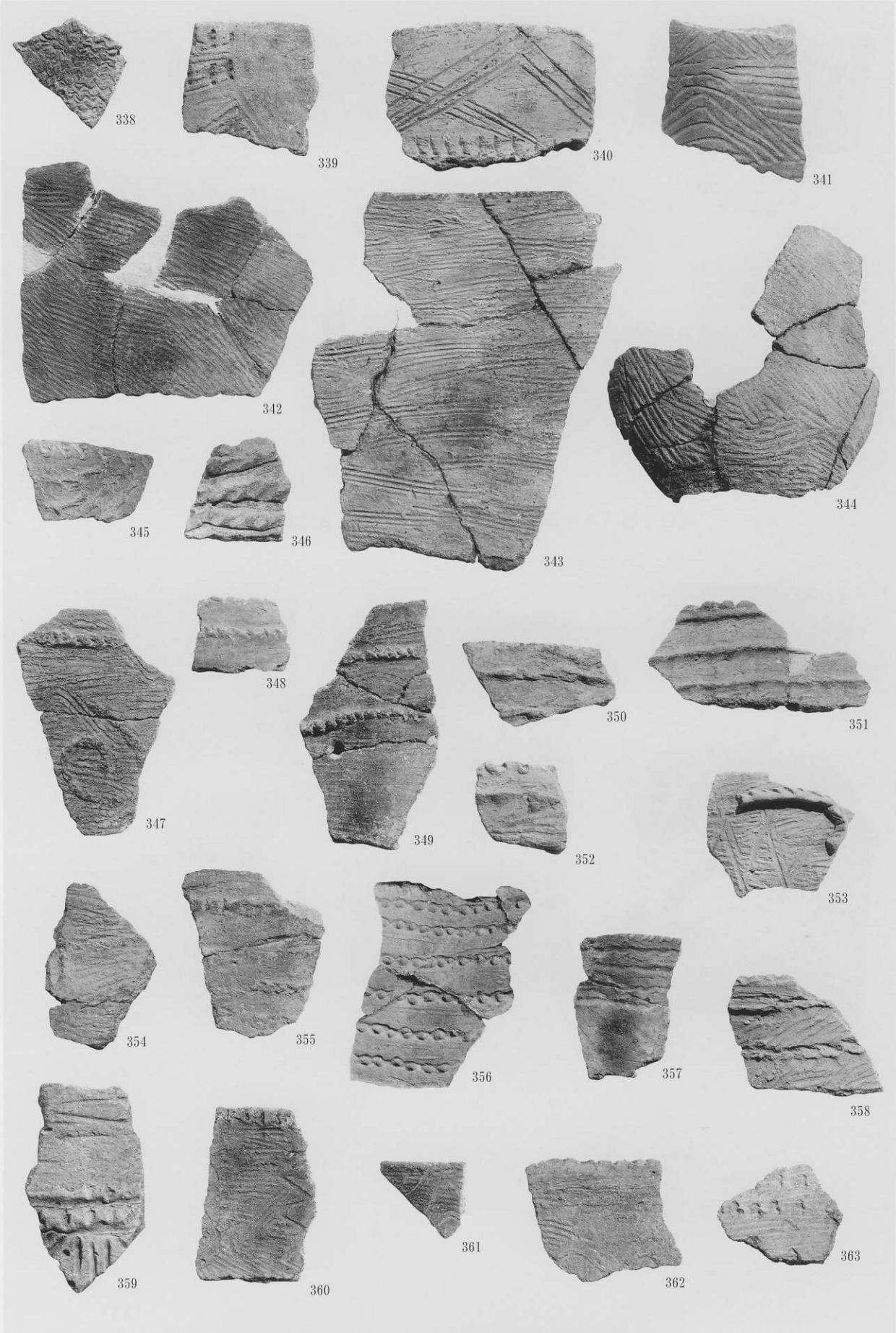


褐色土層（A～Dトレンチ基本層序Ⅳ層）出土縄文土器６

図版 24



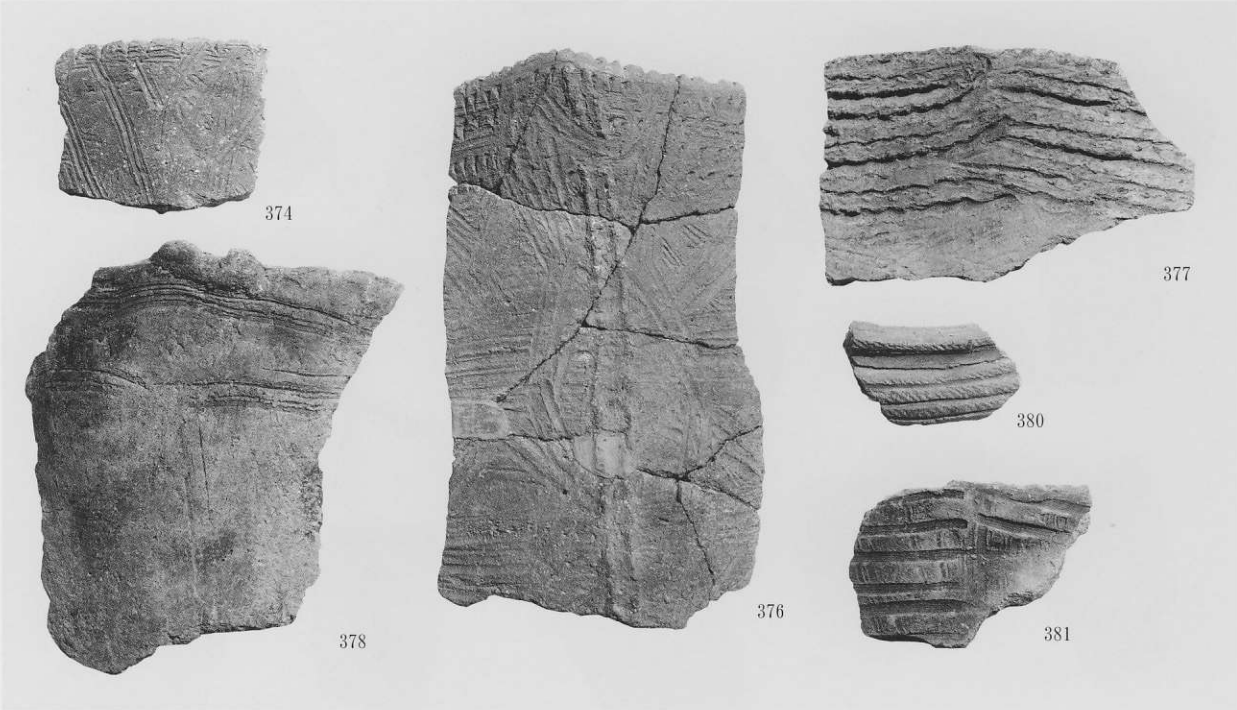
黒褐色土層（A～Dトレンチ基本層序Ⅳ・Ⅴ層）出土縄文土器



黒色土層（A～Dトレンチ基本層序Ⅴ層）出土縄文土器 1

図版 26

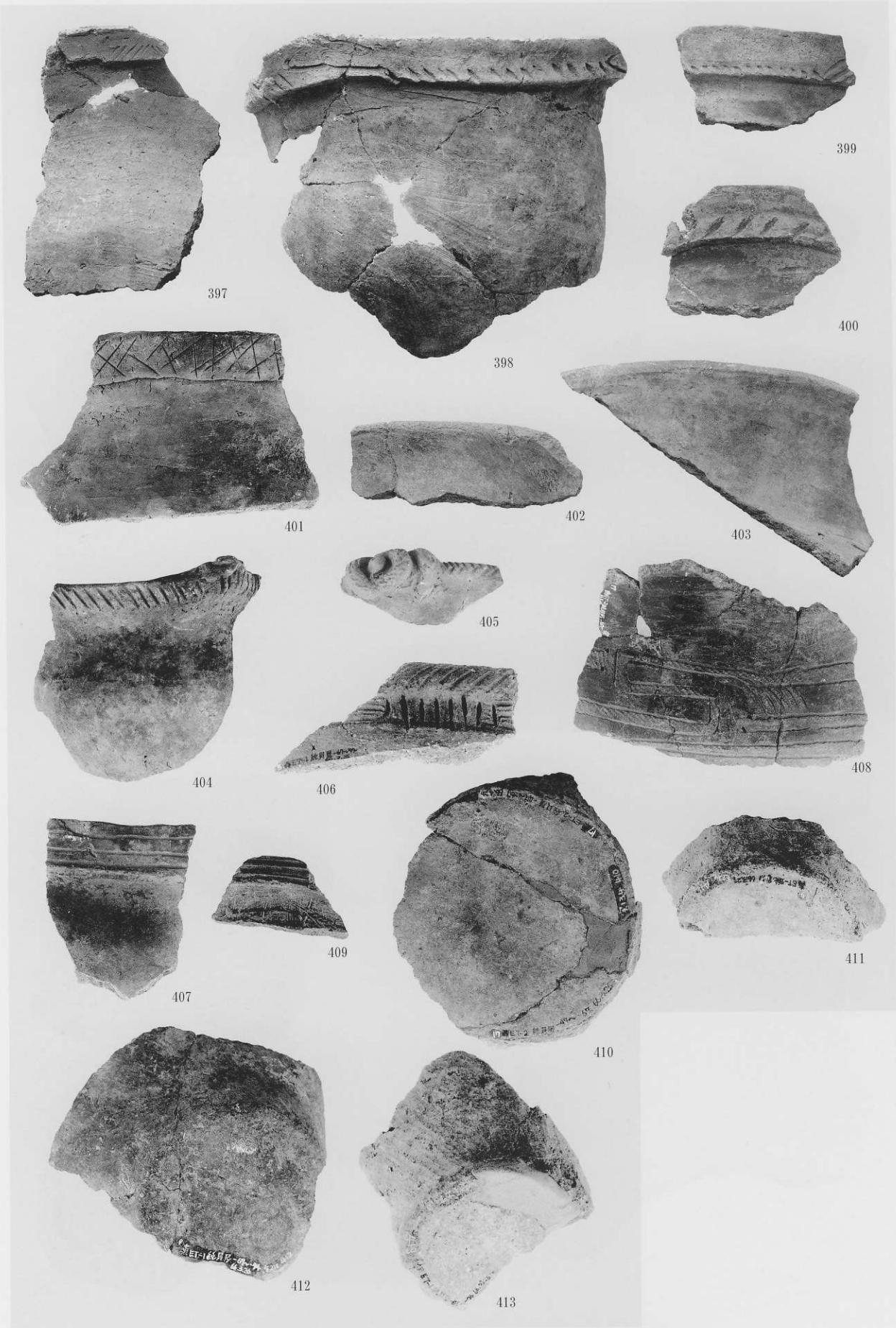
黒色土層（A～Dトレンチ基本層序Ⅴ層）出土縄文土器２



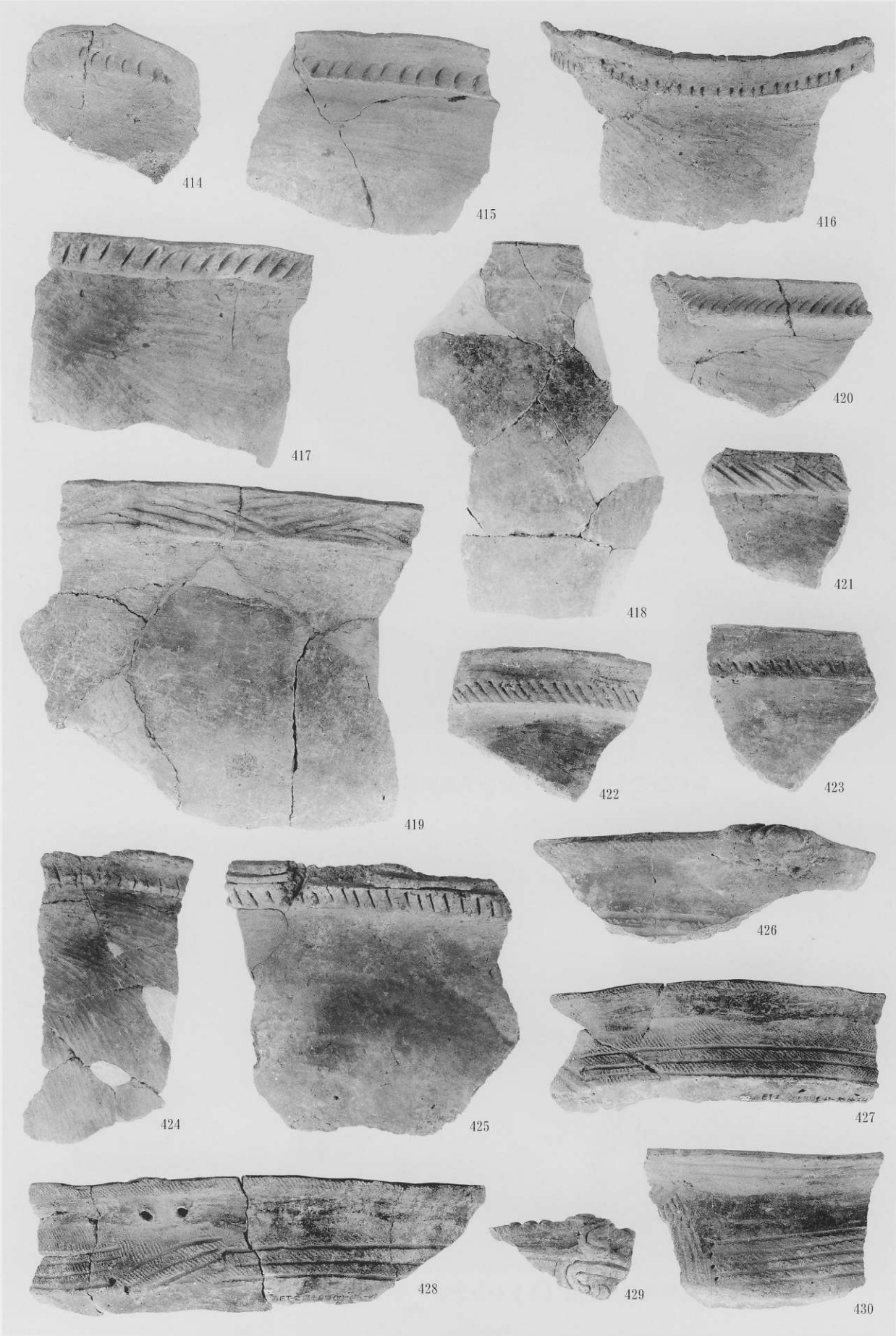
A～Dトレンチ出土層位不明及び遺構埋土出土縄文土器

黒褐色混土貝層（Ｅトレンチ基本層序Ⅱ層）出土縄文土器

図版 28

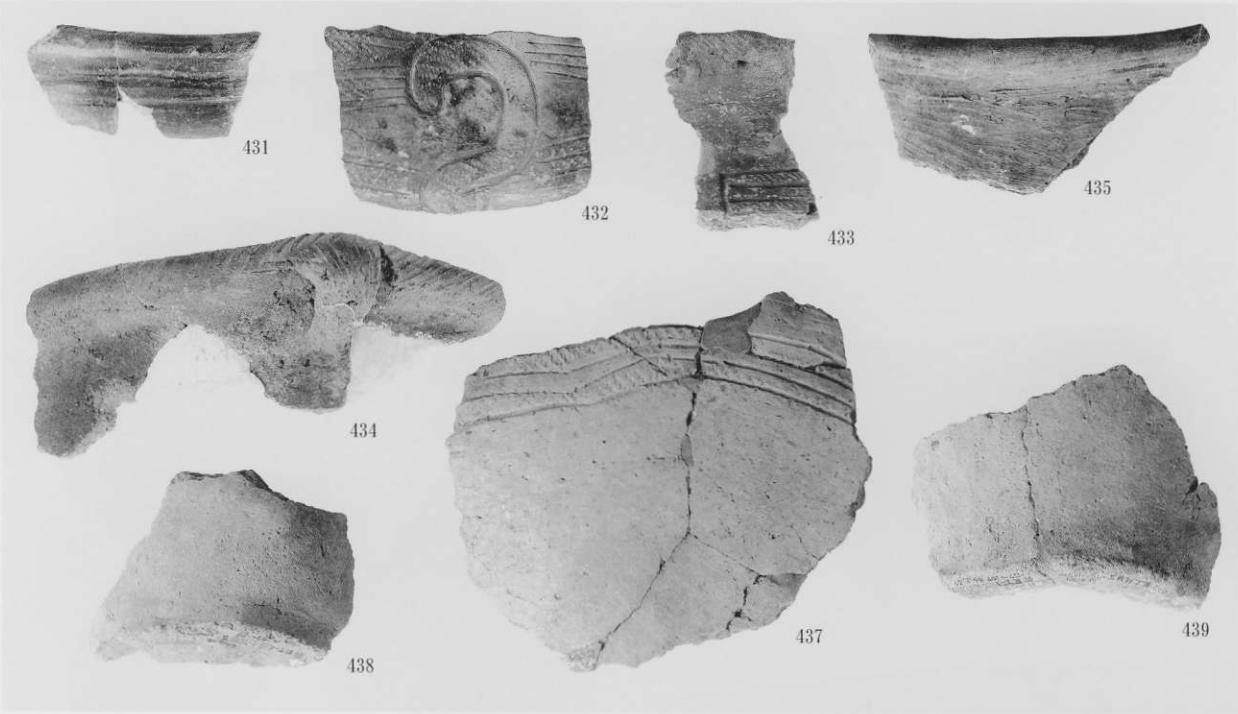


純貝層（Eトレンチ基本層序Ⅲ層）出土縄文土器



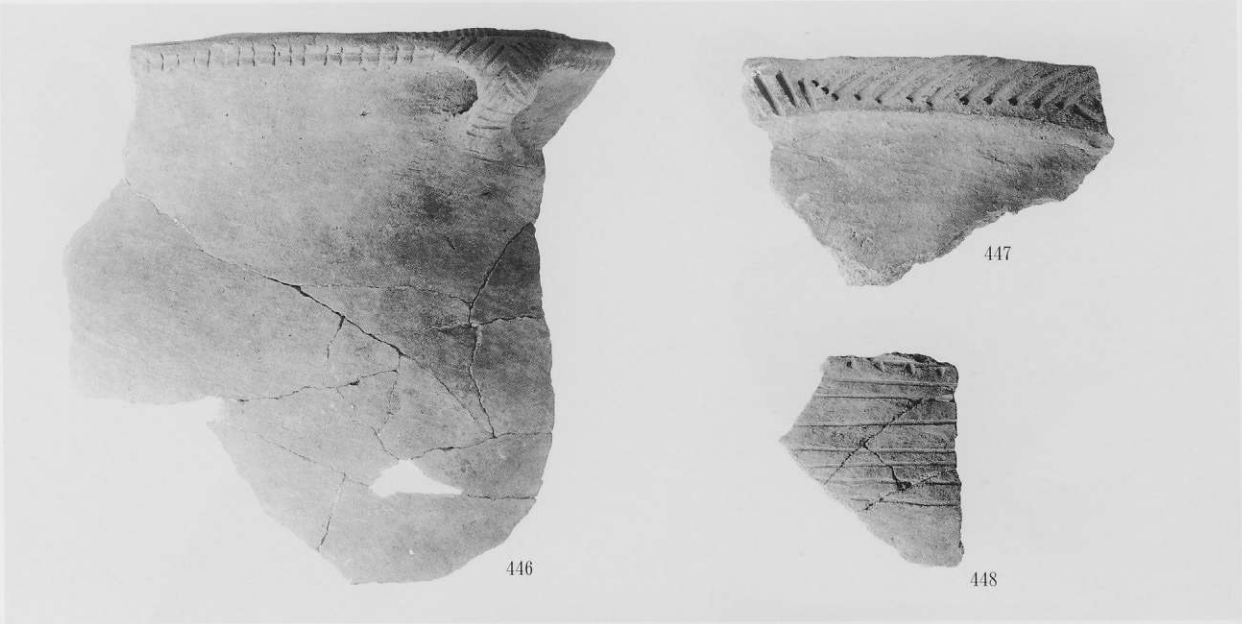
暗褐色混土貝層（Eトレンチ基本層序Ⅳ層）出土縄文土器 1

図版 30

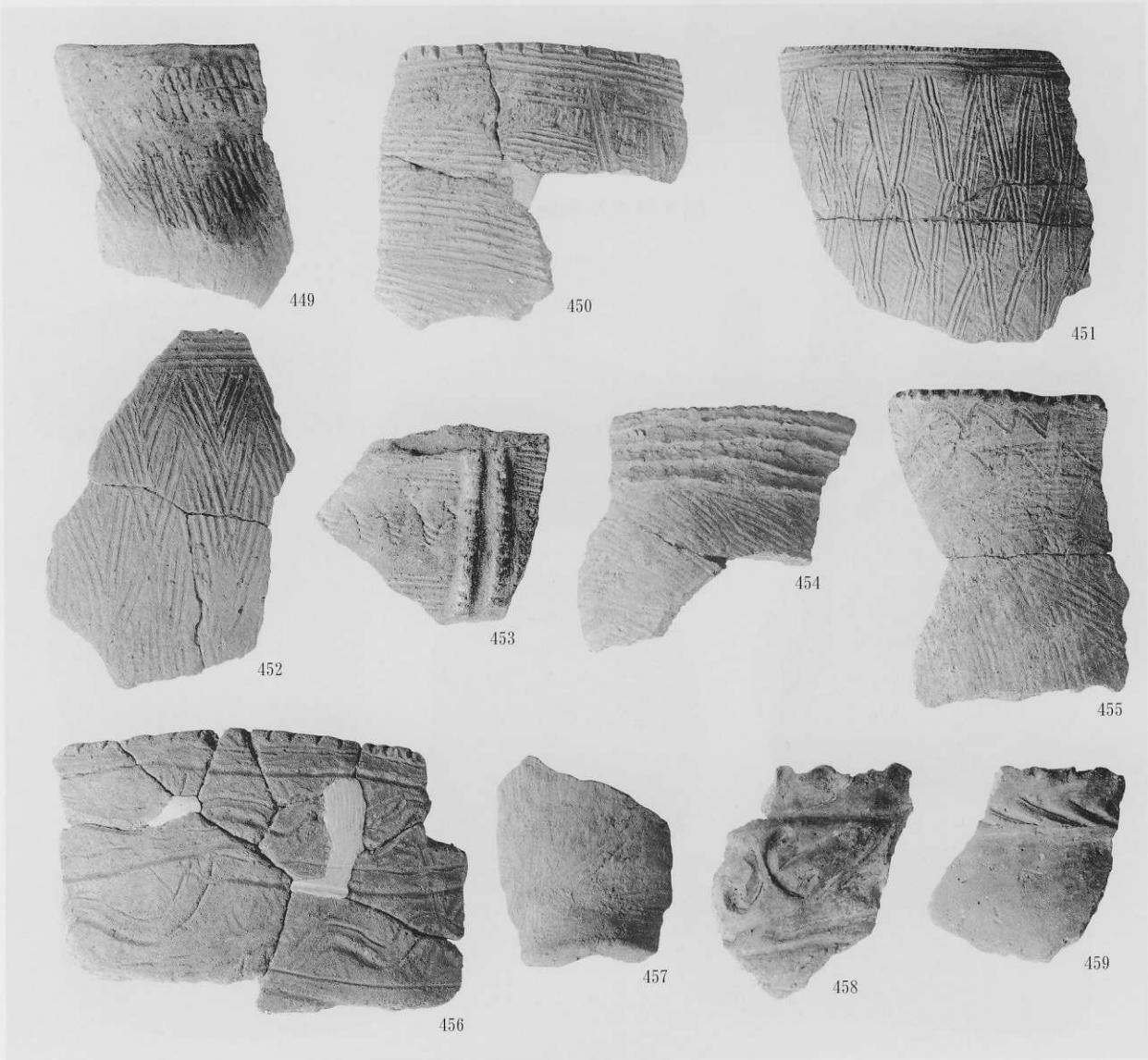


暗褐色混土貝層（Ｅトレンチ基本層序Ⅳ層）出土縄文土器２

暗褐色混貝土層（Ｅトレンチ基本層序Ⅴ層）出土縄文土器



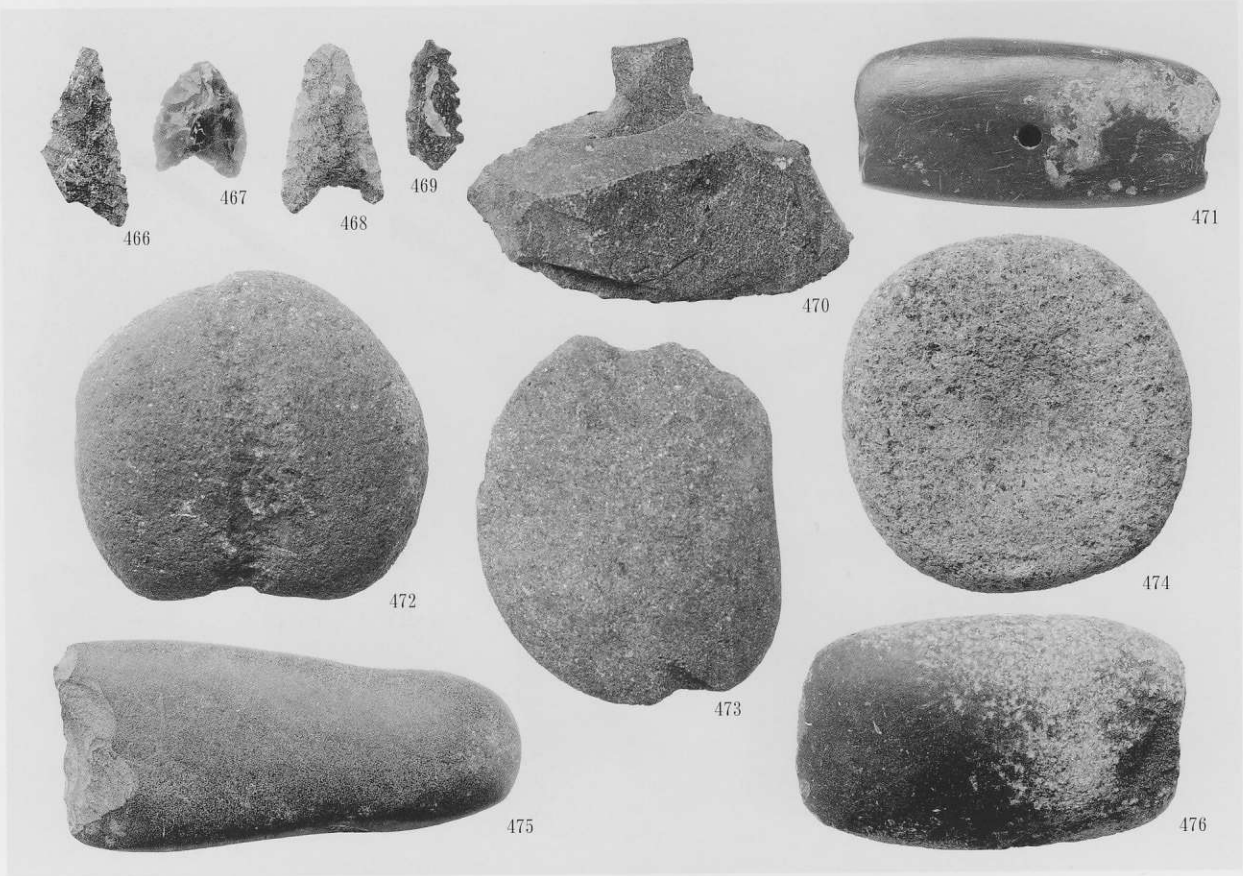
Ｅトレンチ土擴墓埋土及び出土層位不明縄文土器



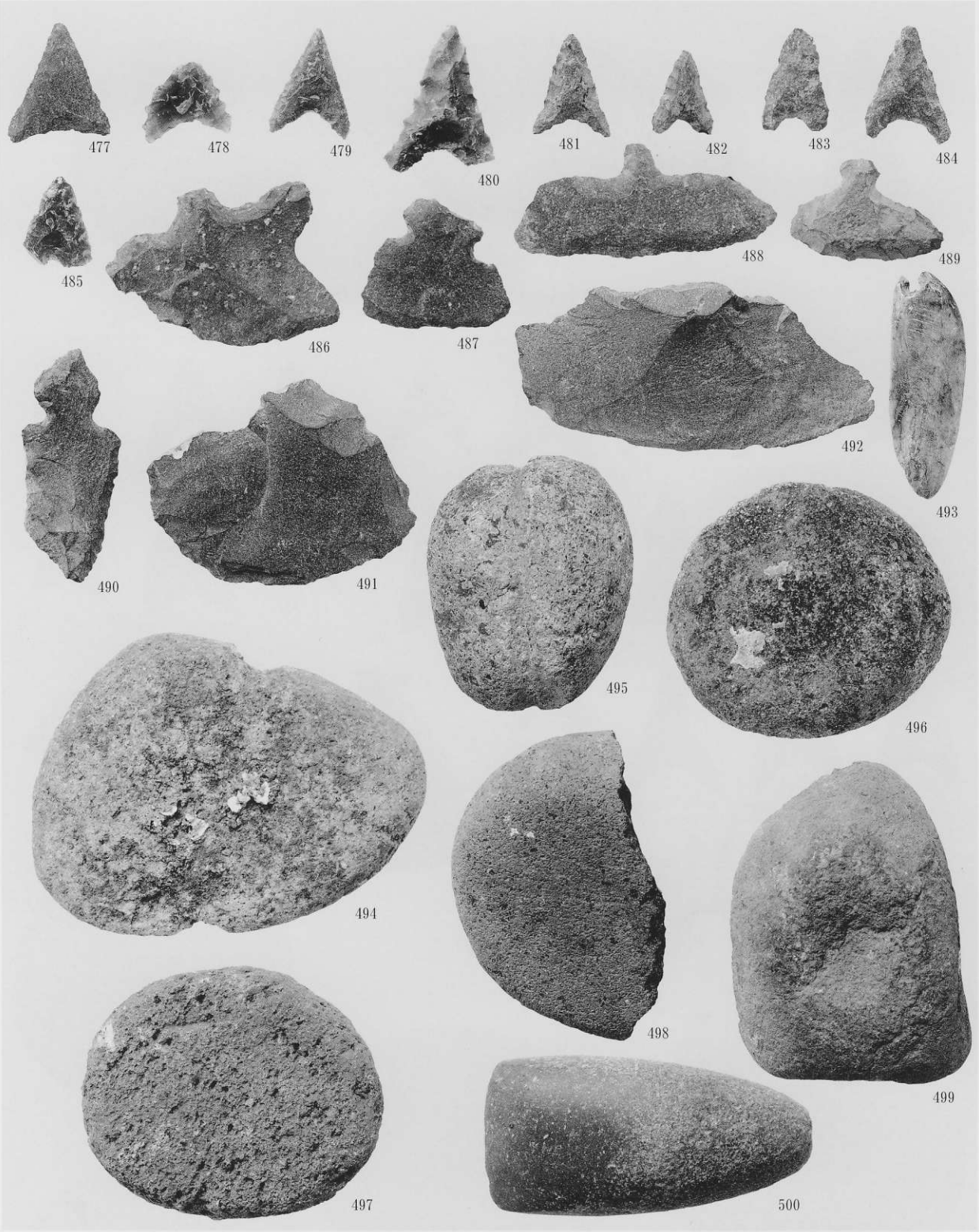
出土地点不明縄文土器 1

図版 32

出土地点不明縄文土器 2



表土層及び撹乱層（A～Dトレンチ基本層序Ⅰ層）出土石器・石製品



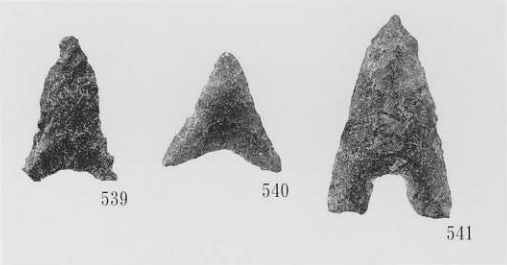
黒・褐色混土貝層及び混貝土層（A～Dトレンチ基本層序Ⅱ層）出土石器・石製品

純貝層（A～Dトレンチ基本層序Ⅲ層）出土石器 1

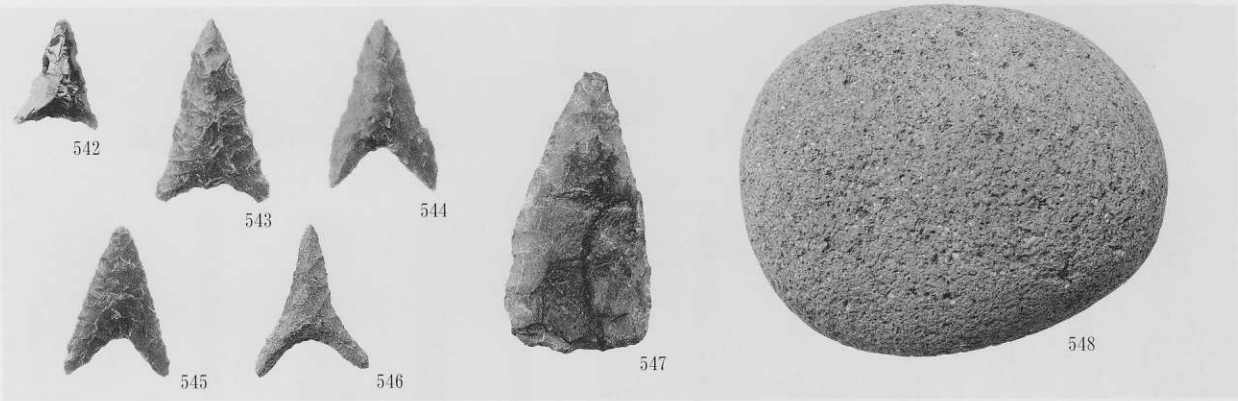
図 版 34

純貝層（A～Dトレンチ基本層序Ⅲ層）出土石器２

褐色土層（A～Dトレンチ基本層序Ⅳ層）出土石器



黒褐色土層（A～Dトレンチ基本層序Ⅳ・Ⅴ層）出土石器



黒色土層（A～Dトレンチ基本層序Ⅴ層）出土石器

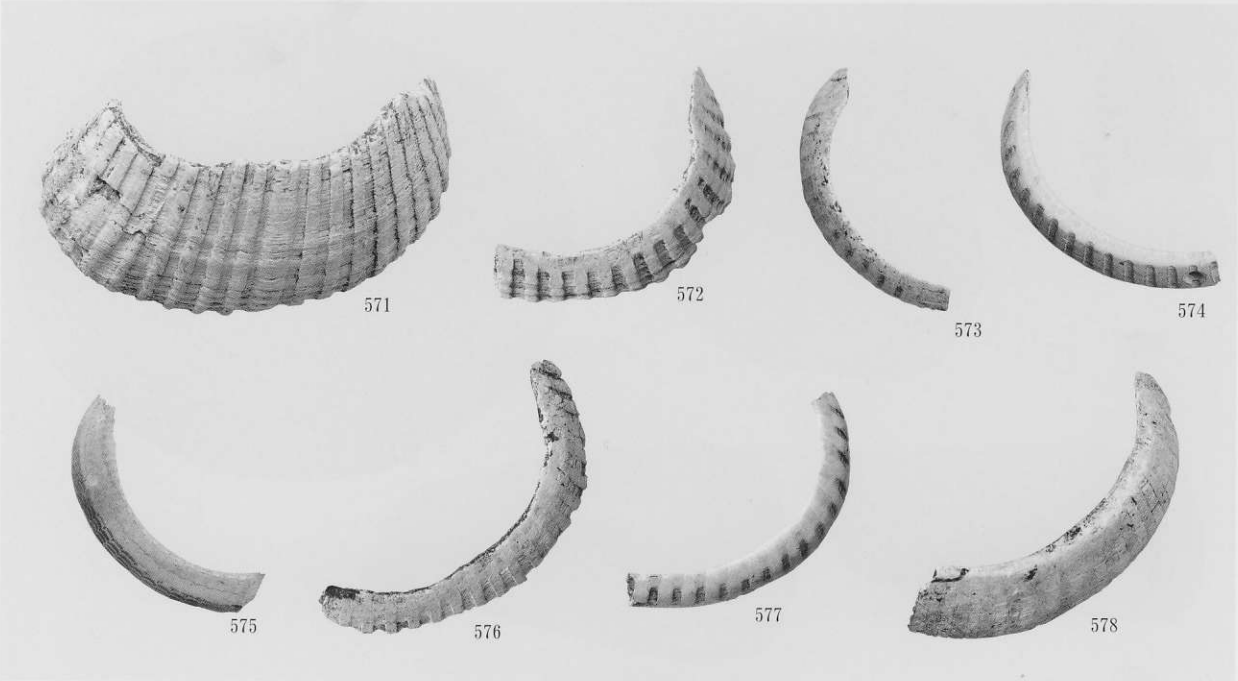
A～Dトレンチ
出土層位不明石器

Eトレンチ出土石器

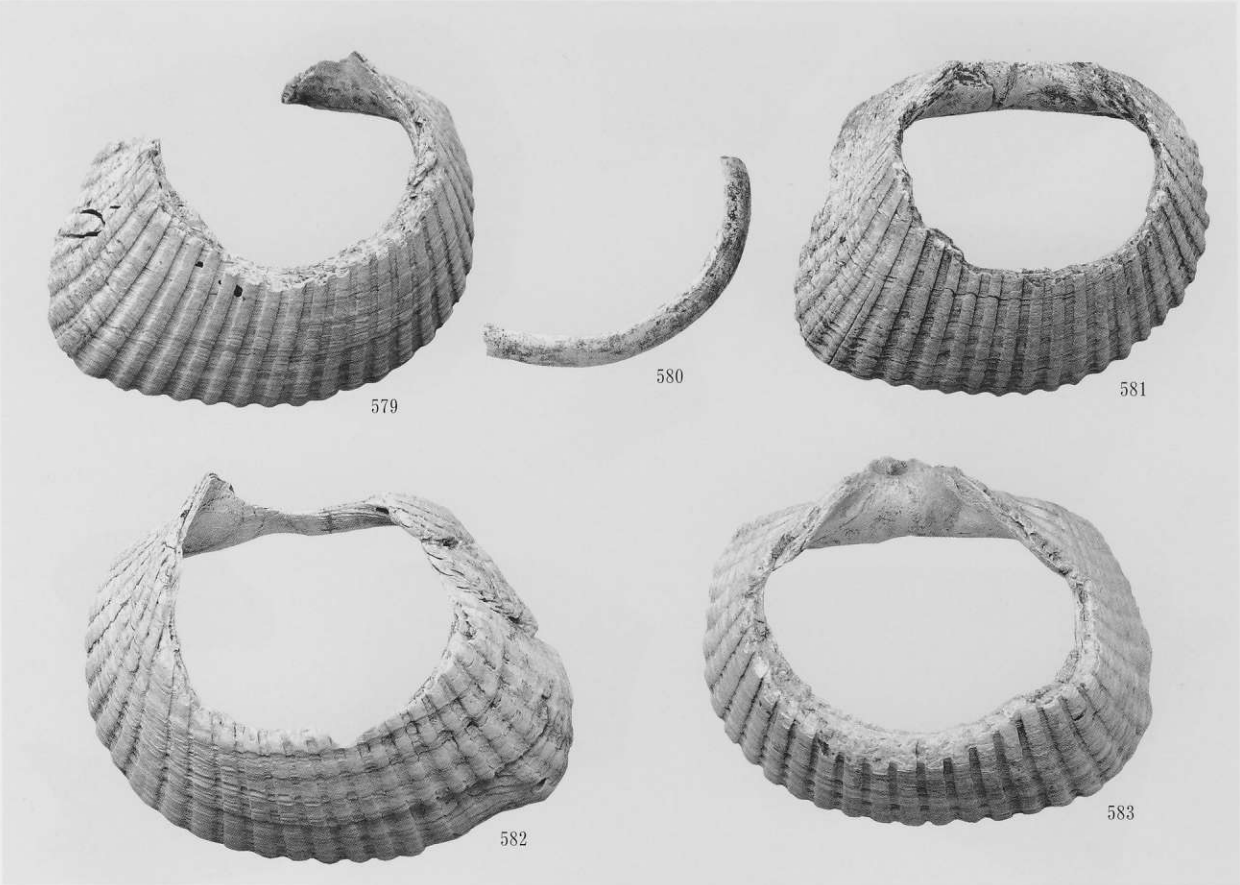
図版 36

出土地点不明石器・石製品

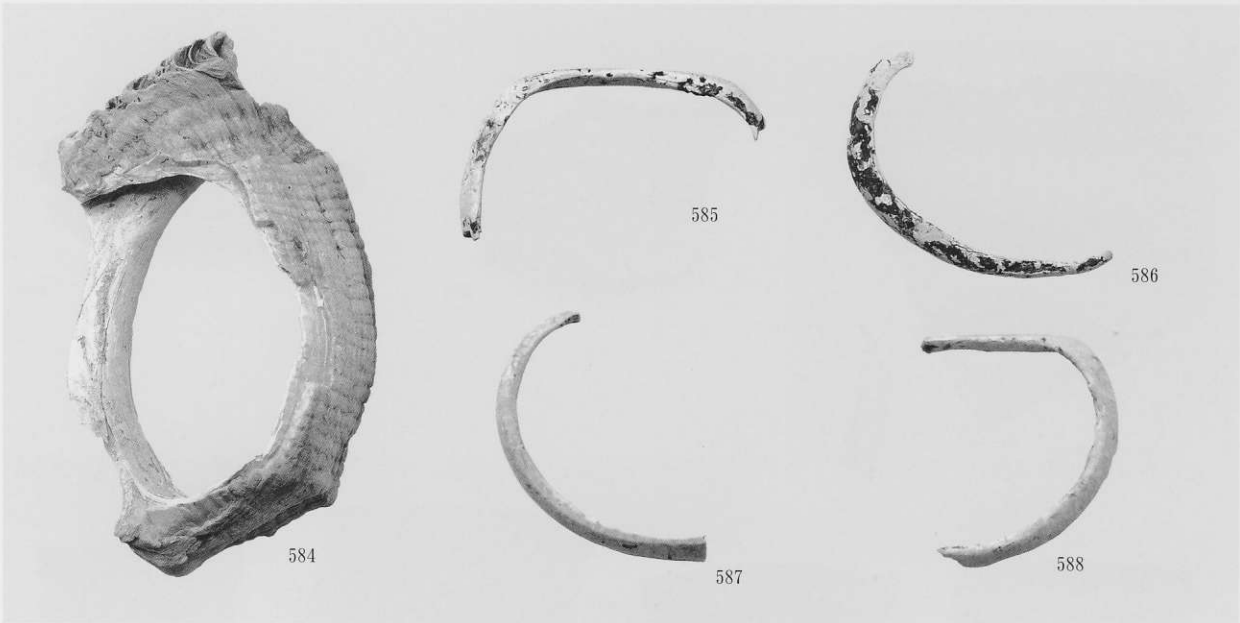
出土骨角器



A～Dトレンチ出土貝製品 1

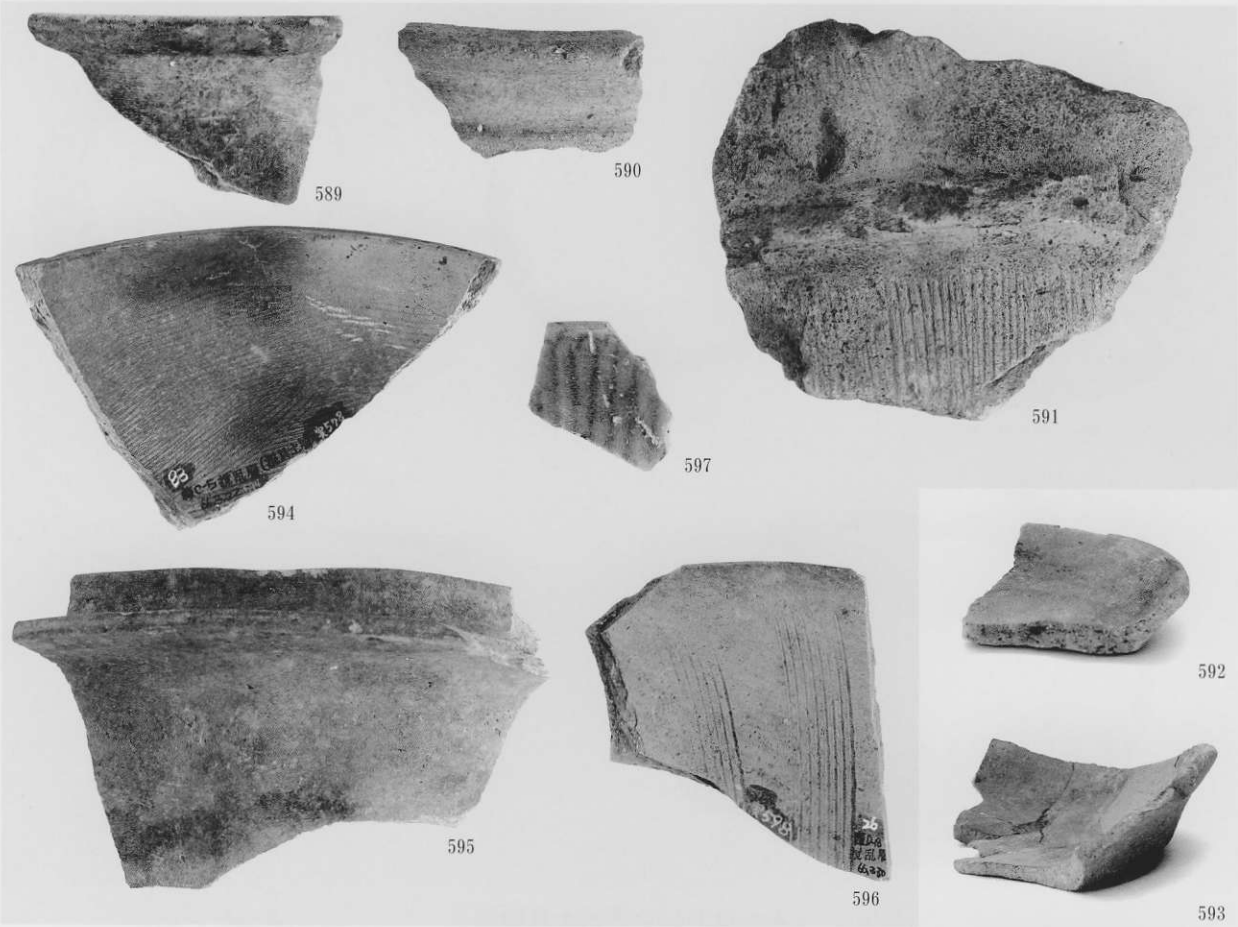


A～Dトレンチ出土貝製品 2



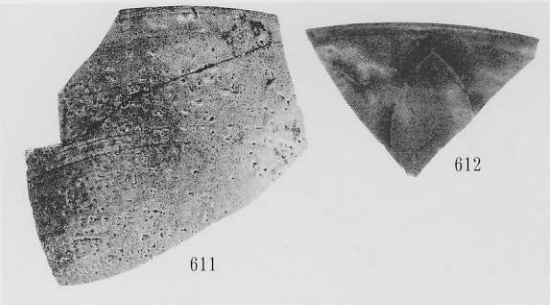
Eトレンチ出土及び出土層位不明貝製品

図版 38



表土層及び撹乱層（A～Dトレンチ基本層序Ⅰ層）出土弥生土器、埴輪、中世土器・陶磁器

黒・褐色混土貝層及び混貝土層（A～Dトレンチ基本層序Ⅱ層）出土弥生土器、埴輪、中世土器・陶磁器 1



黒・褐色混土貝層及び混貝土層（Ａ～Ｄトレンチ基本層序Ⅱ層）
出土弥生土器、埴輪、中世土器・陶磁器２

出土地点不明埴輪

報告書抄録

ふりがな	とどろきかいづか
書名	轟貝塚
副書名	慶應義塾大学資料再整理報告
シリーズ名	宇土市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ号	第30集
編著者名	藤本貴仁
編集機関	宇土市教育委員会
所在地	〒869-0433　熊本県宇土市新小路町95
発行年月日	2008年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯※ °′″	東経※ °′″	調査 次数	調査 面積	調査 原因
		市町村	遺跡番号					
轟貝塚（とどろきかいづか）	熊本県宇土市宮庄町（くまもとけんうとしみやのしょうまち） 字須崎ほか（あざすざき）	43211		32° 40′ 45″	130° 38′ 27″	６次	213㎡	学術調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
轟貝塚	貝塚	縄文時代 中世	縄文時代：土壙墓、住居跡、配石遺構 中世：土壙墓、横堀跡	縄文土器（押型文、塞ノ神式、轟式、曽畑式、野口式、尾田式、阿高式、南福寺式、市来式、鐘崎式、北久根山式、御領式など）、石器（石鏃、磨製石斧、磨石・叩石など）、石笛、骨角器（魚骨製及び骨製刺突具、簪など）、貝輪、動物遺存体、弥生土器、円筒埴輪、土師質土器、青磁

特記事項

縄文時代早期から後期にわたる土器、石鏃や磨製石斧、磨石・叩石などの石器、石笛、魚骨製及び骨製刺突具や簪などの骨角器、アカガイ製やサルボウ製の貝輪、イノシシやシカなどの動物遺存体などが豊富に出土した。

本調査で設定したＡ～Ｅトレンチのうち、Ａ～ＤトレンチとＥトレンチでは、道路を挟んで比較的近接しているにもかかわらず層序が異なる。Ａ～Ｄトレンチ周辺では阿高式系土器群の時期である中期に純貝層が形成されたと想定され、下層の褐色土層や黒色土層で轟式系土器群が数多く出土した。一方、Ｅトレンチ検出の純貝層は、市来式などの貝殻条痕文系土器群や北久根山式、鐘崎式などの磨消縄文系土器群が出土する後期の貝層と考えられる。

検出遺構で最も特筆されるのが縄文及び中世の土壙墓である。縄文時代７体、中世１体の計８体の埋葬人骨が出土。Ａトレンチでは両腕に貝輪を装着した縄文前期とみられる埋葬人骨を検出し、腹部付近でマイワシやカタクチイワシなどの食物残渣を確認した。また、Ｅトレンチでも縄文後期とみられる埋葬人骨が３体出土し、土師質土器が副葬された中世の埋葬人骨も１体出土した。

弥生時代から中世までの遺物も出土しており、円筒埴輪の出土から古墳時代中期末頃から後期初頭（５世紀後半から末頃）に当地に古墳が存在したことが判明。また、中世居館に伴うとみられる横堀跡を検出した。

※北緯及び東経の数値は世界測地系を使用。

轟　貝　塚

－慶應義塾大学資料再整理報告－
宇土市埋蔵文化財調査報告書　第30集

発行年月日　2008年３月31日

編集・発行　熊本県宇土市教育委員会
〒869-0433　宇土市新小路町95
TEL 0964-22-6500㈹　FAX 0964-58-1005

印　　刷　コロニー印刷
〒860-0051　熊本市二本木３丁目12-37
TEL 096-353-1291㈹　FAX 096-353-1294